THE CENTRAL REVIEW

中央公論

春季特別號

第四十二年 第四號 第四百七[illegible]

腦溢血の突發！

危險信號（高血壓）を無視する勿れ

壯年者及び初老期にある壯脈者の生命を青天の霹靂の如く突如として奪取しその死亡率に於て結核に亞ぐものありと稱えられ、人類恐怖の中心となれる腦溢血は、何等の豫告なく襲來するにあらずして、高血壓てふ危險信號（病的苦痛を伴はざることあり）の持續するにかゝわらず、これを無視せる必然的結果に外ならず。

腦溢血に對しては、百の治療も一の早期豫防に及ばざることは既に知らるゝところ、而してこの目的に最も汎用さるゝものはアニマザなり。

動脈硬化症 腦溢血 治療及豫防劑

アニマザ

高血壓症の治療并びに豫防にアニマザの內服が現時における最良の療法なることは既に多數の臨床實驗并びに批判の結果確定さるゝところにして、本劑は血管硬化に對し原因的に奏効し、長期に亘り連用するも全く無害なるため高血壓者の常用藥劑としてその聲價を專らにするに至れり。



「高血壓の治療及豫防に就て」と題する小冊子御一報次第進呈す

二〇錠……二圓四十錢
一〇〇錠……六圓八十錢
粉末…二五瓦入 注射液…六管入
各名藥店にあり

獨逸オスナブルク臓器治療藥會社

總代理店 株式會社 田邊元三郎商店
東京日本橋區本町

A95



夕月

平福百穂筆

肺病、心臟病、腎臟病、糖尿病、脚氣等で病弱な婦人には姙娠出產が大禁物なので其時は大概まづ流產させる併し其如き正當な理由が有つても專門醫に掛れば入院手術其他で通常凡そ二百圓位を要し大變に金を使ひ健康をも害します。故に、最初から、姙娠するとよくない事が分つてをれば早く避姙する方が得策です。元來病弱な婦人の姙娠は母體を益々惡くし大低は難產で、其爲に我國では毎年數千人も婦人が死にます。又幸ひ運よく出產しても出來た子供は概して弱く母體もなか〱丈夫にならず皆共に苦い目を見ねばなりません

古來、婦人として頻繁な姙娠を望む者はない。何とかして二年や三年ぐらゐ間をおきたいと思ひ、其方法を考へた者が昔から何億万人有つたか知れない。實際多產する婦人は、朝から晩まで夜中も休めず全く苦勞する爲め此世に在るやうなもので全々生きてゐる甲斐がない。私共は時々子澤山な貧い陰氣な家に行き色青ざめた女が又もや大きい腹を抱へて心配顏をしてをるのを見て、本當に同情の心を起さずには居られません貧乏な親達は、二人か三人ぐらゐの子供ならば、產む親も產れる子も幸福に生活出來る事を知つて居乍ら、只避姙法を知らぬ爲め徒らに多產し親子諸共だき合つてヅル〱と苦の世界に落ちてゆき一生涯難儀ばかりをする。そうして窃盜や詐欺、或は墮胎棄兒等が彼等の境遇上まことに止むを得ない「必要なる罪惡」として行はるゝのは、實に人生悲慘の極であります。私達は、之を見之を思ふと、自然に熱い〱涙が流れ出ます。

鳩山春子女史曰く「斯る結果になるよりも或程度まで調節した方がよい……二人以上子供ある者や又多產で困る人々や病氣故に避姙の必要ある人の爲め無害な方法を正しく敎へる事は決して差支へないと思ふ」

近衞醫學博士曰く「理屈を離れて現代社會を視ると產兒制限は必要であり……思想的に現代を遠ざかつてゐる人の反對說は價値なきものである。其實行法を內密で知ろうとする遠慮はいらない」(通俗醫學。十五、七)

然るに金儲けのため墮胎する者は澤山有つて檢擧されるが、人助けの爲に堂々と姙娠調節所を開いた者は全國卅万の醫師產婆中他に一人もない其爲め何も知らない素人が、或は醫師產婆の名を借りて誇大宣傳をなし巧言を以て不良無價値なものを賣り世人を騙するので、當所へ救ひを求めて來る婦人が多い

英國特許
第一二二五〇號を更に改良した
新型金製

避姙ピン

相談案內實品說明
目錄は別名で送呈

東京姙娠調節相談所・主任產婆
(自宅)東京巢鴨四丁目三番地
振替東京七五一三八番 竹田津あさ
御來訪は市內電車巢鴨終点か
又は王子電車の巢鴨庚申塚より

苟も新時代の思想に目ざめた者、又弱い婦人や貧者の苦難に對し眞に同情心を有する者ならば私達の主張に贊成しないと云ふ法はありません

竹田津所長曰く「私共が普及する姙娠調節は世人の幸福と國家社會の平和と子孫の繁榮を希ふ溫かい愛の勸告です。之を善くないと思ふのは、其人の頭が古いからだ。姙娠調節の實行を恥かしがるのは誤つてゐる。僅か二三人の子供しか養育する力のない者が七人も八人も產み散らし、親としての義務も盡さずに酷使し、親類や近所の邪魔になるよりも、我力に相當した二三人を產むだけに止めて、其代りそれを十分よく教育し國家社會に盡させる方が何ぼう道德的だか知れない。私は天下の何人にも、姙娠調節を惡いとは言はせぬ」

性病と姙娠の豫防用 **フイッシュスキン** 男子用として現今最良のもの恐らく他に無し。十回以上使用出來る品、送料共で九十錢

洗滌の用なき婦人用の秘藥 **膣殺菌劑** 內証に使用出來、重寶で感じもよい。十二箇入送料共で二円。膣球月やく藥其他類似の廣告を信じ、無効なもので金を取らるゝ勿れ

最新式優良ペッサリー **サポーター** 夫婦合意で用ゆるもの、サンガー女史も大いに之を推賞されました。一個で何百回も使へる德用品。送料共で三円廿錢

姙娠調節は法律上少しも惡い事ではなく、之を正しく實行するのは大いに善い事です。只近來此事で高い入會金を取り、使へもせぬ器具や藥を賣る所、迷へる婦人をだまし無効な月經藥などで暴利を貪る不正な者が多いので困ります。姙娠調節の必要ある人は、彼等營利業者に欺されず早く手紙で當所に御問合せあれ。近處の人は髮結にでも行くやうな氣持で平氣でおいで下さい。誰も憚る者は居らず、少しも御遠慮いりません他所で詐された人や生活困難な御方には特に同情を以て御相談に應じ、又辯護士も居り義俠的に婦人問題を引受け、有利に御解決を圖ります。元來、斯る相談事には、とかく相手の弱味や秘密に付込んで無理非道な事が行はれ易く且つ廣告には詐欺的なのが多い。併し當所は誠實を以て永久に信用を保ちます。私達は多くの人々に喜ばるゝ事が何より樂しみです。誤つた事はお斷りしますが、決して他言は致しません。秘密確守。

(親として眞に責任を知らば)…子供は少く產んで其代り皆良く育てなさい…(東京姙娠調節相談所標語)

姙娠調節の道德的意義を知り且つ正確に實行或は普及したい人は此書を御覽あれ從來僞書を讀んで失望した人も本書では合理合法確實に必ず御希望を達し得ます

東京姙娠調節相談所長 竹田津六二著
ドクトル・メヂチーネ 朝岡稻太郎序

安全確實 **姙娠調節の實際** 全一冊

洋裝四六版三百頁 特價本定價一円 送料十錢

通俗的な本書の內容概略

●總說◎姙娠調節とは何か◎多產する母親の苦難◎婦人の解放と姙娠調節◎禁慾の弊害◎無責任な多產は罪惡◎姙娠調節の道德的主張●姙娠篇◎男女の生殖生理◎受胎の期◎生殖不能の原因と其療法◎不姙症の療法◎人工姙娠●避姙篇◎姙娠(產兒)制限史◎生活難の防止と姙娠調節◎罪惡防止の爲の避姙◎避姙法を秘するから起る此罪惡◎古來どこにも在つた墮胎◎子供は少く產んで其代り皆よく敎育せよ●避姙實行法◎特に戒むべき避姙法◎任意避姙法五種◎永久絕對避姙法三種◎人工流產◎產婦の美容法▲不明の處は

無料 **質問券** 有り質問自由又避姙實行に必要な器具や藥の供給

避姙ピンの挿入實施の御依頼に應じ猶ほX光線に依る無痛避姙法、若返り法、其他手術治療の御申込にも應じ最後迄同情と責任を以て親切合法的に御盡力致します

●子供が出來ても滿足に育て得ぬ貧い人は生活の安定する迄◎早婚者は十分成熟し性的生活に慣るゝ迄◎又餘り度々姙娠する婦人や病弱者も◎惡性ツハリや難產する癖ある者も◎遺傳性の惡疾ある人等も避姙すべきであり其方が本人の爲にも子孫の爲にも亦社會の爲にも道德的です

通信、註文、面會相談の事

通信文は最も簡單明瞭を要す。お世辭は御無用
當所から出す郵便には全々別名を表記し
來た書狀は用事がすめば總て燒棄します
切手代用での御註文は一割増。代金引替は
代引送料切手廿三錢を封入御申込下さい
當所發賣の本、藥、器具は直接註文に限る
有害危險な僞物を賣る者多し御注意あれ
御來訪は朝晩いつでもよいが月曜は休み
傳授相談料は通信面會各廿錢。貧者無料。
當所の支部開設希望者は醫師產婆に限ります

文學博士 幸田成行
文學博士 和田萬吉
責任監修

全二十卷
一万五千頁

豫約募集

日本隨筆全集

略規

▲申込金五圓▲毎月拂込金五圓▲一時拂込金百圓▲外に送料を要す▲送本昭和二年六月より毎月一冊宛刊行二十ケ月完了。

體裁

▲菊判天金總布製極美本▲全部九ポイント組▲紙數七百餘頁

我國知名の學者文人等で、隨筆と稱する一種の雜書を以て各自の識見、學殖、抱負、好尙等の自由發表をして居らぬ者は至つて少い。即ち隨筆は雜書とは謂ひながら各家の研鑽博洽の結晶と視られる。されば達觀の士は隨筆を讀んで自家の知見を擴むるの捷徑とする。本全集は此等の隨筆中所收の最も豐且美、誨ふる所も娛しませる所も多いものを網羅し、加之精到なる索引を後附して、全部二百十餘種の書の內容を自在に撿索するに便じた。即ち鍵鑰附きの寶庫である。

(1)
寸錦雜綴　著者不詳
南留別志　荻生徂徠
秇苑日涉　村瀨栲亭
文會雜記　湯淺元禎
東牖子　田宮仲宣
善庵隨筆　朝川鼎

(2)
思齋漫錄　中村弘毅
睡餘小錄　藤原吉廸
河やしろ　釋契沖
梧窓漫筆　大田錦城
蓑笠雨談　曲亭馬琴
筆のすさび　菅茶山

(3)
松屋叢話　高田與清
三養雜記　山崎美成
駿臺雜記　室鳩巢
烹雜の記　曲亭馬琴
昆陽漫錄　青木敦書
孝經樓漫筆　山本北山

(4)
年々隨筆　石原正明
花街漫錄　西村藐庵
湖亭涉筆　安積澹泊
北窓瑣談　橘南谿
擁書漫筆　高田與清
南屏燕語　釋南山

雲々筆語　野之口隆正

(5)
燕石雜志　曲亭馬琴
蒹葭堂雜錄　木村蒹葭堂
たはれぐさ　雨森芳洲
常山樓筆餘　湯淺元禎
漫畫隨筆　鈴木煥卿
蜘蛛の糸卷　岩瀬京山

(6)
提醒紀談　山崎美成
年山紀聞　安藤爲章
秉燭譚　伊藤東涯
南嶺子　多田義俊
好古小錄　藤井貞幹
閑田耕筆　伴蒿蹊
柳葊隨筆　栗原信充
好古日錄　藤井貞幹

(7)
閑田次筆　伴蒿蹊
近世奇跡考　山東京傳
茅窓漫錄　茅原定
比古婆衣　伴信友
坤齋日抄　西島長孫

(8)
玄同放言　曲亭馬琴
雅遊漫錄　大枝流芳
南嶺遺稿　多田義俊
柳葊雜筆　栗原信充

松亭漫筆　中村經年
聖學隨筆　石川香山

(9)
還魂紙料　柳亭種彥
花月草紙　松平定信
秋齋隨筆　多田義俊
北邊隨筆　富士谷御杖
關秘錄　著者不詳
閑窓瑣談　佐々木高貞
消閑雜記　岡西惟中

(10)
宮川舍漫筆　宮川政運
用捨箱　柳亭種彥
圓珠庵雜記　釋契沖
閑際筆記　藤井懶齋
橘窓茶話　雨森芳洲
梅園日記　北靜廬
赤穗義士隨筆　山崎美成

(11)
桂林漫錄　桂川中良
雲錦隨筆　曉晴翁
南畝莠言　大田南畝
蘐園談餘　荻生徂徠
難波江　岡本保孝
在津紀事　賴春水

(12)
鄰女晤言　釋慈延
東涯譚叢　伊藤長胤

翁草　神澤其蜩
柳亭記　柳亭種彥
柳葊隨筆　栗原信充
理齋隨筆　志賀忍

(13)
骨董集　山東京傳
雲萍雜志　柳澤淇園
假名世說　大田南畝
夏山雜談　平直方
思出草紙　栗原東隨舍
愚雜俎　田宮仲宣
柳亭筆記　柳亭種彥

(14)
餘毛能硯　畑維龍
瓦礫雜考　喜多村節信
輶軒小錄　伊藤東涯
秋齋閒語　多田義俊
退閑雜記　松平定信
松の落葉　藤井高尚
積翠閑話　中村經年

(15)
笈埃隨筆　百井塘雨
紫芝園漫筆　太宰春臺
うき草のあと　釋立綱
三餘叢談　長谷川宜昭
あふひづくり　伊勢貞丈
雨窓閑話　著者不詳

續著聞集　八島定岡

(16)
玲瓏隨筆　釋澤庵
遠碧軒記　黑川道祐
一宵話　牧墨僊
信友隨筆　伴信友
良齋閑話　安積信
酣中清話　小島成齋
蒼梧隨筆　大塚嘉樹

(17)
兎園小說　曲亭馬琴等
足薪翁記　柳亭種彥
織錦舍隨筆　村田春海
鋸屑譚　谷川士清
閑窓自語　柳原紀光
溫故隨筆　小野高尚
梅窓筆記　橋本經亮

(18)
古事談　著者不詳
塵塚物語　著者不詳
長頭丸隨筆　松永貞德
醍醐隨筆　中山忠義
にぎはひ草　佐野紹益
玉勝間　本居宣長

(19)
索引

(20)
索引

◇東京美術學校教授　白濱徵氏校閲・宮本幸惠新著◇

彩色の研究と其取扱法

大好評　三版

美麗なる石版廿五度色圖十六葉
調和表實驗圖解は如何なる素人と
雖も一見して理解し得る他に比類
なき我出版界唯一の最新研究書！！

從來彩色に關する著書が乏しいのは實に遺憾である本書は多年の研究と實驗から最も實際的に色の教育色の心理學は勿論色の科學及哲學を綜合した名著である之れに依つて藝術家も教育者も商工業者其他何人も自分の職業教育或は商賣に自由に應用する事が出來る殊に挿入してある多數の色圖調和表實驗圖解は如何なる素人と雖も一見して彩色のグランマーを會得し衣食住或は眞善美の各方面に容易に結着する事が出來る。

菊判最上裝美本　全壹册四百餘頁

正價金參圓八拾錢　送料十八錢

笠井義夫氏著　●理論鑑賞揮毫 習學法精義　習字研究者の求めて得ざりし事を盡く說明講述せる參考書（三版）　金參圓五拾錢　送料十八錢

三村信男氏著　●地理學通論 地文學の部 人文學の部　全二册で各册同一の定價二百有餘圖を以て詳細に叙述せり（各册）　金六圓八拾錢　送料廿七錢

佐藤種治氏著　●參考日本歷史精說　史實を探究考證說明し其上諸種の史籍を參酌した嶄新史書（新刊）　金六圓八拾錢　送料廿七錢

大久保龍著　●少年源賴光と四天王（大江山鬼退治）　土蜘の怪鬼同丸の事を初め勇ましい物語（新刊）　金貳圓五拾錢　送料十八錢

宮崎久松氏著　●少年古事記物語　少ない勞力であの難解なる古事記の全般を容易に理解し得（好評）　金壹圓八拾錢　送料十二錢

守屋貫秀氏・新井賢一郎氏著　●少年九郎判官義經　牛若丸の誕生より最後まで詳細に叙述したる理想的の良書（再版）　金貳圓五拾錢　送料十八錢

森山右一氏著　●神皇正統記新釋　本書出でて神皇正統記の眞髓は究明し盡されて餘さず。（新刊）　金貳圓五拾錢　送料十二錢

石川誠氏著　●參考古今和歌集新釋　古今和歌集諸抄大成ともいふべきもの安價で比類なき良書（新刊）　金參圓八拾錢　送料十八錢

吉村重德氏著　●落窪物語新釋　純潔白百合の如き高貴な姫君を中心とせる王朝時代の小說（新刊）　金貳圓八拾錢　送料十八錢

東京市神田區神保町七番地　大同館發行　振替貯金口座東京八七貳番

昭和二年

中央公論

四月一日發行

春季特別號

第四十二年第四號

第四百七十一號

無産政黨に代りて 支那南方政府代表者に告ぐ

今支那から戴天仇君が來て居る。正式には國民黨を代表するに止まるといふも、事實上何等かの意味に於て所謂南方政府をも代表するものと觀て差支はあるまい。少くとも私共は、同君を通じて南方政府の意圖を與り聞き、又君に由て吾人の思ふ所を彼方に傳ふるを得べきを期待して居る。

戴君渡來の目的は何であるか、詳しいことは分らぬが、ひそかに同君の爲にはかるに、その當面の目的の如何に依ては餘程注意して相談の相手を撰むことが必要であらうと思ふ。今我國には君の渡來を專ら自派の宣傳に利用せんと待ち構へて居るものがある。そればかりではない、君にして若し餘りに現實の結果を生むに急がば、或は我が軍閥財閥の要求にも相當の顧慮を拂はざるべからずして、爲めに君を派遣した民國南方諸有志の意思に反することにもならう。君の眼中におく所たゞ單に「今日の日本」にとゞまるのなら問題はない、「明日以後の日本」と眞に永き親睦の關係を訂せんとする以上、君は何を措いても先づ我々の言に耳傾くる必要があらう。

傳ふる所に依れば、戴君は日本國民に對つて或る種の提案を持て居ると云ふ。その詳細を伺つた上でないと我々の之に對する意見を述べ難いが、所謂支那問題は我々に取て極めて緊要なものだけ、我々にはまた先方から云ひ掛けられるまでもなく、之に關しては我々だけの見解を持合せても居る。恰度戴君の如き南方派の有力者の渡來を幸ひ、玆に少しくその一端を披瀝して見ようと思ふ。

第一に、日本の民衆は南方諸君の改革的精神に同情し偏にその成功を禱つて居る。否我々は諸君の至誠に多大の敬意を拂ひ、且つ我が事の樣な滿悅の感を覺へつゝ終局の目的達成を確信するものである。尤も我國に内心ひそかに諸君の成功をよろこばぬものゝあるは事實だ。が、そは國民中の極めて少數なる一部に過ぎない。外にまたロシアとの關係に於てボルセヴイズムの跳梁を懸念するものあるも、諸君の教養と練達とはやがて必ずや其間に正しき方途を見出すべきを疑はない。

第二に、承認問題に就ては吾人の立場は或は少しく諸君の要求と違ふかも知れない。諸君は主張する、中華民國の正統なる中央政府として直に自分達を承認せよと。國内に對する意氣込みとしてはそれでいゝ。それに基く一切の活動に對しては私共は遲疑する所なく同情する。併し國際儀禮の問題となると、如何に多大の道德的共鳴を諸君の仕事に感ずるからとて直に北方政府と國交を絕つわけには行かない。換言すれば、今や我々は南北對立

の事實を有の儘に認め、各々その實力の現に及ぶ範圍を限つてそれ〴〵の支配權を認むるの外ないのである。而してこれ以上を望むのは取りも直さず我々に國際信義を破ることを要求するにひとしいものとなる。

第二に、限られた範圍に於ける支配權確立の承認を問題とする場合に於ても、自主權尊重の名の下に之と作つて第三國の一切の自由行動を封ぜんと欲せば、支那側に於て先づその管轄內に於ける出來事に付ては完全にその責任を負ふの覺悟あることを必要とする。加之此際據る所の規準が在來の國際法規慣例なるはまた申すまでもない。從來の法規慣例の時勢に應しくないことは私共も認める、從てその改訂の要求に對しては決して耳をかさざらんとはせないのだが、兎に角原則として差當り在來の法規慣例の尊重を約せざる以上、我々は少くとも理論上或る程度の自由行動の留保を主張せざるを得ないことにならう。

第三に、我々は適當の方法を以てする法規慣例其他條約等の改訂には喜んで應ずるものである。之等のものに由て定まつた支那對各國の從來の關係の中には、言ふまでもなく著しく支那の自主權を傷くるものがある。之に依て各國の占め得た地位は、概して云ふに、其國有產階級の利害の繋る所にして、恐らく民衆一般とは何の交渉もないものであらう。故に民衆の立場から云へば、之等の特殊地位に戀々たる理由は毫末もない。否、之が若し些でも兩國親善の障碍を爲すことあらん乎、彼等は速に之を拋棄したいとさへ冀ふだらう。斯くして我々無產階級は、單純な理論としては、滿蒙に於てすらも決して引續き特殊地位を主張せんとする考はない。

但し之等特殊地位の原因を一概に諸外國の侵略主義に歸する說には、無條件に與みし難い。之もある。併しその外に、支那が一獨立國としての形式を完備しなかつたと云ふ事情もあることを忘れてはなるまい。併し今となつては斯んなことは最早云ふ必要はなくなつた。支那は諸君の力に依て既に立派な形を整へ始めて居り、我々はまた斷然侵略主義を棄つるに決意したからである。たゞ侵略方策の原則的放棄に關連して諸君に一つ折入つて頼みたいことがある。そは外でもない、支那に於ける我々既占の特殊地位の中、一部階級の私慾を充たすに過ぎざるものはどうでもいゝが、我國民衆一般の生活に直接の關係を有するものに付ては、その發生原因の如何に拘らず、之を合理的に整正するに際し特に穩當な顧慮を加へられんことである。之に由て永く侵略主義の殘缺を留めんとする意圖は毛頭ない。支那の好意に縋つて民生の生活に急變なからしめんとするに外ならない。而して原則として一切の侵略方策を棄て完全に隣邦の自主權を尊重すべきは勿論である。

知らず、戴君は以上の根本原則の下に我々無產大衆と眞の共存共榮を策するの意はないか。

中央公論



第四十二年第四號
四月號
第四百七十一號

財政の推移と經濟組織の變革

經濟學博士　土方成美

一

自由と服從、統制と放任、此一見矛盾した二つの要求を如何に調和して、更に高い見地に止揚するか。人類全體に課せられた大きな課題たるを失はない。經濟上に於ては此の問題が經濟と財政との交錯として動いて行く。私はこう見る

ことに大きな誤りはなからうと思つてゐる。

まことに現代の經濟社會は全部的とは云れはないが自由主義に立脚してゐる。如何なる職業に從事するか、即ち如何なる勞働力財貨を社會に提供すべきか、乃至何を社會から得る（買ふ）かは原則として各人の自由選擇にゆだねられてゐる。人々の自由な活動によつて經濟社會が相當に調和を保つて行くためには、之に必要な前提條件がなければならない。第一に必要なのは人々の經濟上の自覺である。自覺と云ふ言葉も漠然としてゐるが、畢竟社會に於ける自分の地位を反省する、經濟上では自分は何を社會に提供するのが適してゐるか、社會から自分が得る分け前は當を得てゐるか否か等を反省する能力を得ることが自覺であらう。又第二に各人の能力があまりに著しく懸絶してゐないことが必要である。力の甚しい懸隔は遂に弱者の自由選擇の餘地を奪つてしまふことになる。第三に自由に選擇させて活動させるからには各人の經濟生活は各自が責任を負ふのを原則としなければならない。從つて人々の努力怠惰が相當に其結果をあらはすやうな經濟上の條件が備はつてゐなければならない。天災が頻々として起るやうでは、粒々辛苦の結果も一夜に布衣になる、結局各自の怠惰に原因しない損失、即ち經濟上の危險が大であれば、各自に經濟生活の責任をとらせる自由主義經濟はうまく動かない。震災の時、米の無償配給が行はれ、世界的不景氣で蠶絲業者が破産しそうな場合に救濟が行はれたなどは此爲めである。救濟とは要するに社會が或程度迄全體として責任を負ふことである。

以上のやうな、自由主義經濟が適當に行はれるやうな前提條件が現在充分に備はつてゐるかと云へば、もとより否と答へなければならない。又絶えず此條件は動いてゐる。資本が集中して富の平等が除々に破壞せられつゝある。此ことを斷言するには委しい統計の立證が必要であるが、大體に於ては云へることであらう。

將來の問題は暫く後に讓るとして、過去に於ても此條件は常に如何なる時代にも充されてゐたのではない。往時は多數の人々は自覺せず否自覺を妨げられてゐたとも云へやう。此の如き状態では、專制權力者の專制によつて經濟が行はれ、

か、乃至は專制權力者の干渉なくしても、多數は唯傳統を負ふ經濟生活を営むの外はない。

我國の資本主義は何時から始まつたか、はつきり何時からと云ふことは困難なことである。(因に私は自由主義經濟にて、相當に財貨の蓄積が進み、之を元本即ち資本として増殖せんとすることが經濟の目標になつた時代を資本主義經濟と呼ぶ。)徳川時代否それよりも前にも資本主義は全然なかつたとは云へない。資本主義は除々に進展したものであるが、私は明治十年代の終から二十年代の始めに我國の資本主義は其基礎をかためたものと云つて差支がないと思ふ。何故にかく云ふかは後に讓るとして、其以前徳川時代乃至明治の初年はどうであつたかと云へば、特權企業時代とも名付くべきものであつた。徳川時代には士農工商の區別が嚴然として、百姓から年貢を徴收して武士を養ふ制度であつた。此點から見れば當時の經濟は專制的である、もとより、自由主義經濟ではないが、自由主義も亦全然なかつたわけではない。たゞ比較的國民の少數のものが自覺してゐる狀態では、比較的少數のものが企業を營み、一般多數の人は强い制限干渉の下に傳統を負つて生活するか、乃至は法律命令に服從する外はなかつた。もとより徳川時代にも商人があり、商人が漸次勃興しつゝあつたが、株仲間の制限があり、物を購買して消費するに就ても身分や格式で嚴しい制限があつた。通貨の鑄造によつて利益を計るやうな事業は政府の獨占する所であり、弘化二年の幕府の收入の四割七分二厘は改鑄益金で、鑛山收入、金銀座、貸金利子等が二割一分九厘、御用金上金が一割四厘、米年貢は一割七厘ばかりである。もとより此年を以て全體を推すことは出來ないが、之から見ても徳川時代は財政上は寧ろ特權收入時代と見られるのではなからうか。殊に各藩に於ては徳川末期に於て盛に專賣が行はれたやうである。當時の最も重要な商品たる米に就ても、もとより嚴格な意味では專賣ではなかつたが專賣に近い制度が行はれてゐたと云へるだらう。諸大名は年貢として取り立てた米を大阪乃至江戸表に廻送して賣り出した。百姓に殘された米の分量は幾何であつたか正確なことは知らないが、「百姓は生かすな殺すな」の政策が行はれたと云へ傳へられるから恐らく大きな部分ではなかつたらう。大阪市史によると、藏米は一ケ年平均三百萬俵乃至

三百五十萬俵入津し、納屋米は約其四分の一內外であつた如くである。幕府の直轄領も相當に多く天保十三寅年の調に依ると、全國石高の一割三分七厘ばかりになつてゐる。

此のやうな專制的な經濟は除々に起つて來る多數人の自覺によつて調和を失ふやうになつた。權力者、之を圍繞する人人の欲望の增進、殊に幕末外國の脅威に對する國防等は幕府を財政困難に陷れ　一方輕輩の武士、町人等も充分に其驥足を伸ぶべき所が與へられなかつた。之等の人々の能力を用ひず　百姓から年貢を取立てて、不勞の武士を養ふ制度は萬人に安住の地を與へる所以ではなかつた。年貢の取立に對しても百姓一揆が頻々として起るやうになつた。德川時代に於ける百姓一揆は承應二年（一六五四）の頃から慶應年間に至るまで、全國に亘つて主なるもの五十餘を數へるが知られてゐるものは例示的なものにすぎない。

其原因は大體に於て田租たる年貢米の增徵に對する農民の不服である。租稅の減額を要求する一揆は凶年饑饉に際して、特に減免を願ふのが普通のやうである。例へば文政六年、伊勢、備中、紀州、伊豫、大和、丹後等に起つた一揆の如きは、明に旱魃の爲め年貢免除を願つてゐる。凶作が一揆を誘發してゐることは、寶曆五、六、七、に亘る凶作は、寶曆八年の美濃の一揆　九年の日向湯郡の一揆、天保四、五、七年の饑饉は、天保七年より同十年代に至る連年の百姓一揆の誘發にあらはれてゐる。天保八年の大鹽の亂は大阪市中の暴動で農民一揆ではないが、其原因たる貧富懸隔に對する下層民の反省を促さんとした點は農村にも反響を與へないではゐなかつた。

天下萬民の呪の的となる制度、人々をして其志を遂げしめない經濟制度は　何等かの形を崩壞せざるを得ない。社會組織の變革は政治上の維新となり、やがて新しい經濟組織が大部分明治政府によつて作られる基となつた。

二

幕末より明治にかけての經濟的變革は、經濟上の自由主義の擴張、即ち一方に於て價格經濟の擴張であると同時に他面、通貨經濟の導入を意味する。一言にして自由なる價格主義經濟、之を他面より見れば資本主義經濟の擴張と稱することが出來る。

價格主義經濟の擴張なる方面から見て顯著な事實は、(一)外國との價格交通の開始(二)土地永代賣買の解禁(三)社寺領の沒收拂下(四)模範官等の創設(五)祿制の廢止(六)財貨通貨の貸下げ、下附による價格經濟の奬勵等である。外國と價格取引を開始したことに就ては、特に說明を要しない。土地永代賣買は德川時代に於て事實上行はれてゐたのであるが、明治初年に於て之が自由を公然認めたのは、土地が最も重要な財貨の一である點から見ても、價格經濟の擴張上重要なる意義を持つものである。

社寺領の沒收は從來無償主義經濟の中に衣食してゐた僧侶神官を養ふ土地を取上げたが、之當然價格主義の擴張を意味する。

明治政府が自ら經營した企業は造船、製糸、製鐵、鑛山、鐵道、電信、製藥、セメント煉瓦製造等廣汎なる範圍に亘る。殊に北海道開拓使の營む事業には精糖、木工、ビール、罐詰製造等から、味噌、醬油の製造にも及ぶ。之等の官業は一面から見れば技術の輸入であるが、他の方面から見ると價格主義企業經營の模範を示したものと見ることが出來る。一般民衆は未だ之等の事業をなす能力資力を缺いてゐた。以て明治十年代の終頃迄の我國は、特權經濟企業時代であり、財政上より見れば不換紙幣の收入等が重をなし特權收入時代であると云ふ所以である。

祿制の廢止が價格經濟の擴張を意味することは說明を要しない。封建制度の下に於ける武士に金祿公債、秩祿公債を下附して封祿の支給を停止したのは、封建武士を資本主義經濟の下に於ける資本家化したものと觀察することが出來る。

明治政府による資金財貨の貸下も實に漠大なる額に上り、明治十三年大隈重信氏の提出したる八期間歲入歲出決算報告

書によると此期間の賃金は合計三千五百餘萬圓に上る。

轉じて明治政府による經濟の證券化乃至通貨化の施設を見るに、德川時代に於ても通貨が流通したことは云ふまでもない。併し今日に比較して當時の經濟は尙遍に實物經濟の色彩を持つてゐた。明治十五年に於ける我國の農産物は二千七百餘萬石の由であるが、明治初年中央政府は一千萬石に近き米穀を收納したと云ふ。

經濟の通貨化の施設の主なるものは(一)太政官札民部省札等の發行、(二)地劵の發行、(三)地租金納の實施、(四)秩祿公債、金祿公債の發行、(五)爲替會社の設立、國立銀行條例の制定等である。

明治政府は討幕の費用各種の經營施設の費用を支辨する資金に窮迫し、不換紙幣を發行したが、明治二年中に發行を了した太政官札は四千八百萬兩に上る。其後西南戰爭のために又々紙幣を增發し、明治十四年松方正義氏が大藏卿に任ぜられた當時流通した政府紙幣は一億圓以上に上つた由である。此紙幣は政府が、勞力物資を支配する必要に應ぜんがために發行せられたものに相異ない。しかし一面から見れば我國の財貨を通貨化乃至金融化した施設として見ることが出來る。此紙幣は後に明治十四年以後漸次整理せられて、兌換銀行劵に代つたものであるが、夫れ以前は物品の輸出入、金銀の流出入等と直接に關係を持たず、政府財政上の都合を以て伸縮する紙幣が行はれ、物價は政府の政策によつて或は暴騰し、或は暴落した。明治十四年末以來不換紙幣の整理による物價の崩落、不景氣の深酷であつたことは人口に膾炙してゐる。かくの如き時代未だ充分なる自由主義、資本主義經濟の時代であると云へないことは明であらう。

單に田畑永代賣買の自由を地主に與へたのみでなく、之に地劵を交付したのは、私有財産の確認土地の證劵資本化を意味し、資本主義の發達上重大なる意義を有する。德川時代に於ても事實上土地は賣買せられ、所有の事實があつたが、表面上は私有が確立せず、當時は幕府大名の土地を百姓に耕作せしめて、其代り彼等の生活を或程度迄保證してゐたと見ることも絕對的に不可能ではなからう。即ち百姓は生すな、殺すなの政策を反對の側から解釋すると今述べた如きことにも

なる。

租税の物納を金納に改めたことが、通貨經濟の誘導であることは論ずるまでもない。勿論租税を金納にしたのは、一般經濟が通貨化したのに促されたとも見ることが出來るが、太政官札を發行する政府の立場から見れば、益々通貨の流通を促進せんとしたものと見られる。即ち七年の地租改正條例によつて地租は金納にせられた。

秩祿公債、金祿公債の發行は之亦明治政府による財貨の證券資本化であり、封建武士の資本家化である。徳川時代に於ける藩債を承繼した新舊兩公債も亦同樣であるが、唯前者の如く封建武士を資本家化したものでない點が違つてゐる。

以上各種の公債證書が貸付金の擔保として當時に於て最好適のものであつたことは容易に想像出來る。而已ならず政府は更に進んで此證券の通貨化を促進すべき施設をした。其施設は云ふ迄もなく明治九年の國立銀行條例である。明治五年の國立銀行條例は銀行に取つて不利であつたから、此條例によつて設立せられる銀行は極めて少數であつた。明治九年に至つて華士族の家祿處分の結果として金祿公債を發行したが、其額は一億七千餘萬圓に達する見込であつたから政府は此公債證書の價格下落を防止する處置を國立銀行條例の改正に於て採用した。即ち舊條例に於ては、銀行紙幣の下附額は銀行資本金の十分の六であつたのを新條例に於ては資本金の十分の八とし、其抵當として納める公債證書は舊條例に於ては、金札引換公債證書の一種に限定したが、新條例に於ては如何なる公債證書であつても四朱利付以上のものならば差支なき事にし、且つ價格は時價を以て算出することを許した。

以上の重要なる變革を見た明治十年代の我國は未だ自由主義經濟が充分に行はれたと稱し難いことは繰返し述べたところである。

三

新しき制度の下に財政は如何に推移したか。先づ財政上の經費に就て之を見ると、明治初年の總經費三千萬圓から昭和二年度一般會計豫算の經費十七億三千萬圓余に到るまで著しい增加の趨勢を辿つてゐる。併し唯經費の數字が大きくなつたと云ふことだけでは殆ど何の意味もない。政府が收納し支出する經費の增大が果して、財政によつて動く財貨勞力の分量の增大を意味するか、殊に財政が民間の價格經濟に比して膨脹したかは唯經費の數字の膨脹だけを見てゐるのではわからない。經費の膨脹は通貨が膨脹して物價が騰貴したこととの單純なるあらはれであるかも知れない。そこで日銀の卸賣物價指數と之を比較して見ると、明治三十三年の百に對して物價指數は二倍半乃至三倍位の所にあるに拘はらず、經費の方は、三十三年に比して昭和二年には、殆ど六倍してゐる。もつて財政が價格經濟に比して遙に其範圍を擴大しつゝあることがわかる。此事が國民の負擔上から見て如何云ふ結果を來しつゝあるかは、租稅一人當負擔額と所得一人當負擔額とを比較する、又經費支出がどんな効果を齎しつゝあるかを判じた上でなければ云へない。今は此問題に觸れやうとはしない。唯財政が膨脹するのがわるいことであり、緊縮がよいことと一概に斷ずるのは誤つてゐる。そこで次は財政の內容的變遷を見やう。

財政の內容的變遷を見る上に於て先づ重要なるは經費使途の變遷である。我國の財政は人も知る如く、日清日露の兩戰役を中心として國防を樞軸として廻轉したと稱することが出來る。國防費が我國の財政上の總經費に對して如何なる割合を占めるかを知るのは極めて困難なことである。陸海軍省の經費だけを合計して之を以て國防費とすれば、其計算は比較的に簡單であるが、本當の國防費は之だけには止まらない。軍人に支拂ふ恩給、徵兵費の如きも陸海軍省の經費ではないが、明に國防費と見なければならない。又總經費を幾何と見るかも單に一般豫算の支出だけをとつて之を總經費と見れば事は極めて簡單であるが、一般豫算の外に特別豫算がある。そこで國防費については陸海軍省の經費以外のもので實質上國防費と目せられるものを數へ上げると其額は陸海軍省の經費よりも遙に巨額に上る。一方特別會計豫算の經費も一般

會計豫算の費額と合計するのが至當であるが、一般會計豫算特別會計豫算とには重複がある。之を差引した純計は最近二年ばかり發表せられてゐるが、累計を見ることは困難である。そこで經費の方は一般會計の經費だけをとることにして、私の計算した數字によると（日清、日露、日獨等戰爭の直接費用を除く）明治元年國防費の總經費に對する割合一五・五八%から大正九年度の五三・八七に到るまで、時に消長はあるけれども大體に於て增加の趨勢を辿つて來てゐる。

日清日露戰爭前の軍備擴張は特に盛であつて其間國防費が總經費に對して占める割合は著しく增加してゐる。然るに陸軍は明治四十年歩兵の二年在營制を實施して事實上豫後備兵員を增加し、又大正七年以來の所謂編成替によつて約一萬五千の增員をなし、海軍の八々艦隊案の完成と相俟つて、我國防計畫は大正九年最高調に達した。經濟界亦大正四年以來歐洲戰爭の影響を受けて、貿易の出超、企業の勃興があり、未曾有の活況を呈するに到つた。かくして公債の償還停止、增稅等によつて之等の軍備充實計畫の財源を捻出したのであるが、大正九年の反動以來、我國民經濟も再び入超、正貨の流出等戰前の悲況を再現するに到つた。茲に於てか、軍縮の聲が起り遂に第四十五議會に於ける衆議院の在營年限一年四ケ月、經費四千萬圓の節約の建議案となつた。陸軍は大正十一年七月整理案を發表し一、下士以下約五萬六千人、二、馬匹約一萬頭を減ずることとなつた。他方海軍も亦華府會議の結果、海軍休日を決議し大正十年度に於て多くの既定計畫を廢止することになつた。大正十四年度更に陸軍は四個師團を減じた。以上の如き軍縮の趨勢の結果として國防費の總經費に對する割合も亦十一年度四七・八〇%十二年度三九・九三%十三年度三七・三九%と漸次減少する形勢にある。但し以上の數字には軍事公債の利子を包含してゐないことを記憶しなければならない。軍事公債の利子も亦之を明瞭に知ることは私には不可能であるが、年々七八千萬圓の間を往來してゐると見て大過なからう。

國防費の減退に對して增加して行く趨勢の著しいものは、文部省の經費である。明治十九年度に於て一般豫算の經費に對し、千分比一三・三%であつたのが大正十五年度には七七・六に對してゐる。之普通教育費殊に義務教育費國庫分擔金

の附加に基くものたることは云ふを俟たない。遞信省費の增加亦著しく、明治十九年度に於て同上千分比五二・〇％であつたものが大正十五年度に於て二二九・六％に達してゐる。之遞信費電信電話事業費の增加に基くにもよるが、俸給費の增加が與つて最も力がある。內務省費が最近に至て急に經費總額中に占める割合を增加したのは、復興事業費による、

四

更に事業の方から財政の變遷を見ると、先づ明治初年には政府は各種の事業を營んだことは上述したところであるが、從つて當時は官業が極めて頭をなした、鐵道、鑛山、紡績、硝子セメント製造、造船、鐵詩製造等其營んだ事實は極めて廣汎に亘る。鐵道、郵便電信等を除いて之等の官業は概ね失敗續きであつたが、遂に明治十三年十一月紙幣整理に附帶して工場拂下概則を制定し、明治二十三年國會開設に到るまでの時期に重要なる官業を拂下げてしまつた。其間の事情は極めて複雜であるが、比較的多數の自覺は自由民權の叫となつて現れ、政治上では國會開設を要求し、經濟上では産業自由主義の主張になつた。要するに當時擡頭しつゝあつた産業の將帥たる大倉古河三井等に政府自ら經營に成功せざる事業の經營を委託したと見ることが出來る。明治十五年には日本銀行が設立せられ、十九年一月からは銀兌換が開始せられた。交通機關の方面を見れば明治二十二年には東海道線が全通し、海運業に於ても共同運輸會社と三菱會社とが合併して、十八年日本郵船會社が設立せられた。明治十九年二十年二十一年の頃に於ける我國民間企業熱の旺盛であつたことは、一般に知られてゐるところであるが、企業熱の中心は紡績と鐵道とに集中し、鐘淵等の紡績會社も此間に設立せられた。鐵道に就て見れば明治十六年日本鐵道の開業を魁として、以後國有鐵道に追隨して急激なる發達を見せた私設鐵道が、廿二年以後其開業線路哩數に於て國有鐵道を遙に凌駕してゐる。即ち二十二年には國有鐵道五四一哩餘に對して私設鐵道は六七一哩餘になつたが、翌二十三年には國有鐵道五五一哩餘に對し私設鐵道一、一四七哩餘に延長せられて、二倍餘の開業線路を有

することになつた。以後年々に激增して卅年には國有鐵道六六一哩餘に對し二、二八八哩餘、全國鐵道總開業哩數の約七十八パーセントを占めるに到つた。之等より見ても我國資本主義は明治十年代の終より明治二十年代の始にかけて其根柢を据えたと見ることは大過なしと云へるであらう。

之より後の我日本の國民經濟は明治の終に到るまで自由主義の全盛時代、價格經濟が比較的統制を加へられることなく活躍した時代であると稱することが出來る。其反面に於て此時期に於ては、當時勃興しつゝあつた機械工業、之に伴ふ勞働者數の增加にも拘はらず未だ資本主義經濟の矛盾を著しく表はすことがなかつたと云へやう。蓋し、多數の勞働者農民も未だ自覺が充分でなく、其欲望充足狀態に於て不滿を感ずることが少くなかつたと見られる。日清戰役の企業熱は工場數、工場勞働者數を激增せしめた。即ち明治十九年には僅に二千人に足らない綿糸紡績職工は十年後の二十八年には四萬人を超えるに至つた。又二十六年工場總數四〇、錘數三八一、七八一であつたが、二十九年には工場總數六一、錘數六九二、三八四に達した。日清戰役の經濟社會の異常なる好況は恐慌を惹起し、勞働者の失業を招いた。明治三十年下半期の罷業數は三二、同三十一年の罷業數は四二と云ふ如く當時未曾有の數に上つた。勞働問題が社會問題として識者の論議に上るに到つたのは此頃からであると云ふことが出來やう。三十一年には農商務省最初の工場法案が公表せられたが、議決に到らず、三十三年三月治安警察法が制定せられた。其後も勞働組合運動は屢々試みられたが、大正時代に到るまで十餘年間中絕したと稱することが出來やう。

蓋し當時勞働者の自覺、欲望の增進等が未だ著しくなかつたため、資本主義經濟の矛盾をあらはさずに推移したと見られるであらうが、漸次勞働者の自覺が進むと共に我國に於ても漸次勞働問題が擡頭するに到つた。これに就ては、學制の發達とも至大の關係があらう。明治の前半に於ける學制は屢々動搖し、例へば明治五年の學制では學校の經費は民費によるを原則とし必要なる場合にのみ官から支給することにした。其後屢々變更せられ遂に三十三年に小學校令を改正して市

町村立小學校の設置に關する費用は、市町村、町村學校組合又は其の區の負擔とした。義務教育の制度が確立して知識が普及すると共に勞働問題も漸次旺盛を極めるに至つた。

不就學兒童が明治三十一年に於て學齡兒童の三一％を占めたものが、三十二年には二七％三十三年には一八％三十四年には一一％と激減して行つてゐる。勞働問題が大正の始から漸次喧しくなつたことと此事との間には相當に關係があると考へるのは、あながち無理な想像でもあるまい。

一方企業の勃興は、株式會社を增加せしめ、更に合同の趨勢を著しくし、殊に明治四十年代から此勢が盛になつた。勞働階級が自覺し經濟力の不平等が著しく感知せられるやうになつた大正以後は最早價格經濟は舊の如く矛盾を著しく露出することなく動かなくなつた。

一方日清戰後八幡製鐵所が作られ、三十七八年戰役を機會として鹽、煙草の專賣が實施せられ、三十九年には幹線鐵道が國有になつた。官業は再び增加の趨勢をとるに到つた。製鐵所については國防上の考慮が重要に働き、鹽煙草專賣は之によつて政府の收入を增さんとするにあつた。從つて近代の一般下層階級の配分上の地位を向上せしめるとか、勞資間の衝突を避ける等の意味の國有でない。唯鐵道については國防上の考慮の外に鐵道網の完成と云ふことがあるから、幾分一般階級の利益を考へた點がないとは云へない。大正五年以後の物價騰貴に際しては、米其他の生活必需品の運賃を特に割引し、又米騷動が起つた翌年の如きは無賃運送までした。

漸次勞働問題物價問題の擡頭するに連れて、工場法が實施せられ、二十二年以來放擲せられた米價調節も大正以來再び開始せられるに到つた。元年二月の米價騰貴に際しては、台灣米、朝鮮米を内地市場に持出し、内地米代用に受渡しが出來るやうにし、内地米を牽制する一方、百斤一圓の米穀關稅を四十錢に引下げた。細民救濟用の外米を輸送するときは鐵道賃を半額にする、等の調節策を行つた、三年には米價の引上げのための調節が講ぜられ、其後六七年と引下の爲めの調

節が行はれるやうになつた。十年には米穀法が出來て、政府が米商賣をして米價を調節することが愈々制度として確立して來た。地方團體は公設市場を設けて物價の統制を始めるやうになつた。

勞働問題の擡頭に對しては大正五年から簡易保險法が實施せられ、漸次住宅資金、小學校建築資金、自作農創設維持資金等に其積立金を運用しつゝある。大正十五年七月からは健康保險が實施せられ國庫は保險金の一割を負擔することになつた。職業紹介は明治四十四年東京で始められたのを手始めに大阪市は大正七年に之を開始したが十年七月からは職業紹介所法が制定せられ、內務大臣は市町村を指定して職業紹介所設置を命じ、國費市町村費、各々半額づつ其費用を負擔することになつた。又歐洲大戰に際しては爲替調節の爲めに臨時國庫證券を發行した。

轉じて地方團體を見ても、其電氣瓦斯事業の發達は殊に市に於て著しい。我國民經濟は大正以後、價格經濟が財政を以て著しく統制せられる時代に入つたと稱することが出來る。

事業方面から見た財政の變遷に伴つて其歲入も亦變遷の跡を見ることが出來る。明治初年臨時歲出が巨額に上つたことは既に之を述べたが、明治二十一年から二十六年頃までは租稅が經常收入の八割以上までも占めてゐた。蓋し此時期の如きは我國に於て自由民權の氣風が天下に充滿したのであるから、自由主義が比較的支障なく行はれたのも怪しむに足りない。大正三四年から官業及官有財產收入の割合が漸次增加して、大正五年には三割三分以上にも達した。一時此割合は減少したが、大正十一年以來又々增加の趨勢を辿り大正十五年には三割二分七厘に達してゐる。此關係は民間企業會社の資本額と、官業資本額との增加の趨勢を比較するによつても知ることが出來る。自由價格經濟時代は財政より見れば租稅時代であり、特權企業時代は、財政上より見れば租稅時代であり、價格經濟に對して統制が加へられる時代に於ては財政に於て官業收入が又重きをなすと見ることが出來るであらう。

地方團體の土地所有も最近又々增加しつゝある。住宅の供給等に土地を所有することが增加するのであらう。

租稅收入を見ても、國稅では地租が漸次其重要を失ひ所得稅が重要を増加して來た。之我國が漸次農業國から商工業國に推移するためにもよるのであらうが、又一方農民の自覺にも基くものと見られやう。大正に到るまでは、勞資間の問題はまだ議會で多く論議の對象になることなく、地價修正、地租の輕減、増徵、營業稅の廢止問題農産物の保護關稅等が多く問題になつた。當時は勞資の對立と云ふよりも、寧ろ農業者と商工業者とが對立した(勿論現在でも此對立は消滅しないが)時代と見ることが出來やう。其他收入種類の變遷の跡を辿ることは興味あることであるが、之等は玆に省略する。

最後に公債を見ると増加の趨勢は著しいものである。殊に地方債に於て著しい。此増加も單に通貨の購買力の下落、物價騰貴のあらはれに過ぎないものでなく、國債未償還額は遙に物價騰貴率よりも多く増加してゐる。此事は何を物語るか。我國民經濟内の勞力物資の割合上多くの部分が政府地方團體の手に移りつゝあることを意味する。勿論個々の公債は償還せられるが、全體として償還よりも募集の多い結果は、勞力物資の支配が國民の手から政府地方團體の管理に移る部分を多くしつゝある。又物價騰貴のあるだけ公債所有者は事實上勞力物資の支配を政府の手によつて奪はれることになる。漸次資本の集中が著しく、資本家の手から租稅をとることが、一定の限度以上は困難になると、政府は公債手段に訴へるか、乃至は專賣の増加等に訴へるの外はない。專賣を實行するに就ても必要な資金を租稅によつて調達するのは困難であるから、公債證書の交付の手段をとる。企業の社會には又公債増加の趨勢としてあらはれて來るであらう。資本家から見れば、實質上物價騰貴の趨勢が著しい場合には、企業の利潤が多く、自ら資本を運用することを利益とするから、公債募集に反對するが、企業の沈滯期には之を他に運用して貰はうとして、公債の募集を歡迎する。現代經濟社會に於て利潤率が漸次低下する趨勢が著しくなつて來れば、公債の募集は益々歡迎せられ、此點からも公債累積は益々進むであらう。遂に公債を破棄することなくして、年々の利子を支拂へない狀態に到達するか、今から之を豫言することは困難である。

何れにしても價格經濟に於て起りつゝある變革は一々財政の推移に又反映しつゝあることを述べんとしたのが拙き本稿である。

類型の文學について

片上伸

文藝は不朽だといふ。時處を超越してその影響を及ぼし、讀む人を感動せしめるといはれる。さればこそ「創世紀の古代人の物語は、さながら現代人の生活を映してゐるやうに」思はれ、「ダンテを拾ひ讀みしても、現實の世相、現實の人生の描寫が、至るところにきらめいてゐる」（正宗白鳥氏「ダンテについて」）と思はれるのである。

文學の社會（讀者）への影響は、その原作者の生きてゐた時代や、その屬してゐた社會的集團や、階級や、さういふものの制限によつて必ずしも束縛せられてはゐない。われわれ自身思ひもよらぬほどに、深く細やかに、その影響が心の底まで沁みこんでゐるらしく思はれる。少なくとも、日本の歌や俳句のあるものは、われわれを容易に感動せしめる。聖書とかダンテとか、シェークスピヤ、ゲーテ、トルストイなどを引きあひに出すまでもないのである。

「困難は、ギリシャ藝術及び史詩が、社會の或る發達形態と結びついてゐるのを理解することにあるのではない。困難は、それ等が今も尙引き續きわれ等に藝術的享樂を與へ、且つ或る意味では規範としてまた及び難い模範としての意義を失はずにゐる事實を理解することの上に在る」とマルクスは言つてゐる（「經濟學批判の序論」）。マルクスのこの點に關する考察は、不幸にして中斷せられたまゝになつてゐるのであるが、彼はギリシャ藝術の時處を超越したこの魅力を、人類の少年時代のうるはしさであると解した。即ち再びくりかへすことの出來ないほどの永久の魅力がギリシャ藝術の中に表現せられてゐて、子供の無

邪氣さが大人をよろこばせるやうに、今も尙引き續きわれわれをよろこばせてゐるのであると言ひ、「大人自から、一層高い階程に於いて自己の眞實の本性を再生せしめることをつとむべきではないか。また、少年性のうちにこそ、いつの時代に在つても、大人は、かざりなき眞實の姿に於ける自己の固有の特性をよみがへらせるのではないか」と言つてゐる。而して、今も尙引き續きわれ等に藝術的享樂を與へ、且つ或る意味では規範としてきた及び難い模範としての意味を失はずにゐるのは、もとよりひとりギリシャの藝術には限らない。昔から天才といはれるほどの人々のすぐれた藝術上の作品については、多かれ少なかれ同じことが言へるのである。文學藝術に超時處的の生命が現存してゐるといふ事實は、文學藝術の發達を考察するものに取つて、重要な意味をもつてゐる。

實際藝術に對する共鳴同感は、隨分ひろい範圍に亙つて行はれ得るのである。人間にかゝはるところのものは、すべて無興味であり得ないといふかのやうに、聯想の力によつて、古來のさまざまの異國の藝術にも、それぞれ深く感興を懷くことが出來るのである。この事實は、讀者鑑賞者としての一般人について、多かれ少なかれ同じやうに言へる。國土も時代も階級も全く異なつたところに生れた文學藝術にも、何等かの感興を見出し、從つてそれから多かれ少なかれ動かされるといふことは、決して珍らしいことではない。文學の讀者の問題については、丁度一年ほど前にほかのところで書いたことがあるが、その中で、一國の文學が他の國で讀者を見出だし、その讀者を強く惹きつけるといふ場合には、その二つの國に於ける社會的關係の間に、何等かの類似が存在してゐなければならない、この類似の程度と、文學の影響の程度とは正比例する、この類似が全く見出だされない場合には、文學の影響といふ結果に到達するほどの意味での讀者はあり得ない。――といふやうな意味を述べて置いた。

この考へは今も別に變つてゐない。その場合に念頭に置いてゐたのは、主として一つ文學上の傾向が他國の文學上の傾向に影響を及ぼすといふ點であつたので、一般の讀者の共鳴同感といふ今の場合の問題よりは、もつと狹い特殊の場合を指してゐたのである。一般の讀者の共鳴同感といふ場合にも、もとよりその屬するところの社會的關係の異同といふ點が、その同感共鳴の程度と無關係ではあり得ない。しかし、文學から文學への影響と云ふほどの場合から見ると、よほどその關係がゆるやか

になつて來るのは爭はれない。つまり社會的關係の異同といふ理由のほかに、もつと別の理由が働いて來るのである。ギリシャ時代の藝術を産み出したところの、その當時に於けるギリシャの「未發達な社會的條件」は、今日の鑑賞者の社會にはもうそのまゝでは存在してゐないし、從つてそれとは大分違つた社會になつてゐるのだが、その未發達の形態に於けるギリシャの社會で生れた藝術が、今も尙人に藝術的享樂を與へるのは、社會的條件の異同以外の理由が働いてゐるのである。マルクスが說明を困難であると言つたのはその理由についてゞある。

それだから、文學の階級性に就いても、實はこれをあまり狹く、左翼小兒病的に考へることは正しくない。即ちある文學の作者と讀者との關係を、非常に窮屈に狹く考へ、どちらも必ず同一の階級に屬してゐて、違つた階級の讀者は作者の方でも相手にしようとせず、違つた階級の作者の作品は讀者の方でも全く見向かないといふやうなことは、言ふまでもなく正しくない。文學の作者と讀者との場合でも、そのほかの關係も同じことであるが、一旦階級的の區別が立てられたかぎりは、一歩も動かないで睨みあひのまゝになつてゐなくてはならぬと思つたりしてはならない。殊にプロレタリヤ文學が、何を舊文化舊文學から承け繼ぐべきかの問題については、さういふ狹い考へかたは、眞にプロレタリヤ文學を發達成長せしめる所以の道でない。文學の階級性は、違つた階級の間に生れた文學の悉くに、興味を感ぜしめなくするやうなものでは勿論ないのである。ロシャ十九世紀の文學は、大抵貴族の手によつて作られたものであるから、それ等の作品が表現するところの心理傾向は、莊園貴族の特質を示してゐるものが少なくないのであるが、しかし決してそればかりではない。階級の如何を問はず、讀む人の心を牽くに足る人間の姿が少なからず描かれてゐる。ゴーゴリの時代などは、階級的分解がまだ十分に行はれない頃であつたので、殊にその作中の人物には、類型的な特兆が多く、かなり永續的な一般共通的な心理的特兆が鮮やかに描かれてゐる。さういふ點から言へば、ボクダノフの『藝術上の遺産論』でハムレットについての解剖說明を聽くまでもなく、ツルゲーネフの『ドン・キホーテとハムレット』との性格の對照論や、同じ人の『シュチグロフスキ郡のハムレット』や『ひろ野のリヤ』などを讀むまでもなく、リヤもハムレットもドン・キホーテも、やはり鮮やかに描かれた著しい類型として、作者や作中の人物としての階級などに拘らず、人の心を牽くのである。

マルクスの愛讀した文學は、エスキユラス、シェークスピヤ、ゲーテなどであつたといふ。プレハーノフは、ロシヤ文學の

中からはプーシュキン、ゴーゴリ、トルストイ、ウスペンスキー、ネクラツフ、チェホフ、コロレンコを、外國文學の中からはゲーテ、ハイネ、シェークスピヤ、バイロン、シェリ、ディッケンスを愛讀し、レーニンは、ゲーテの『ファウスト』や、ネクラソフを好み、プーシュキンを愛讀し、殊に十九世紀のロシヤの小説家中のでも著しく貴族的なツルゲーネフとか、純抒情詩人として目立つてゐるチュッチェフの如きを、繰りかへし讀んだ。またゾラも好きであつたし、チエホフにも「多くのよきものを見出だした」といふことである。これ等の例によつて、マルクスやプレハーノフやレーニンが、文學からどれだけの感化を受けたかといふ點を問題にしようといふのではない。文學の力が、時代や階級意識や國土の制限を越えて、尙且つ人を惹きつけるところをもつてゐるといふことは、これ等の事例からも知られるといふのである。

　勿論、文學の力が、時代や階級や國土の制限を越えて、尙且つ人を動かす力をもつてゐると言つても、その感動させる程度なりまた性質なりは、その讀者によつて決して一樣でないのは斷るまでもあるまい。それ等の場合に、階級心理がおのづから働くであらうことも、同一の作品に對して時代によつて評價の上に相異の生ずるであらうことも、もとより特に言ふまでもな

い。

　ギリシャの藝術が今も尙われ等に藝術的享樂を與へるのは、人類の少年時代のうるはしさが、再びくりかへすことの出來ないほどの魅力を以て表現せられてゐて、子供の無邪氣さが大人をよろこばせるやうに、今も引きつゞきわれ等をよろこばせるからであるといふ。この解釋は、ギリシャ藝術の表現する生活と、これを享樂するものの生活との間に、一定の共通の心理的特兆が成り立ち得ることを意味する。子供の無邪氣さをよろこぶといふ心持ちがなくては、この解釋に從へば、ギリシャ藝術によつてよろこびを感ずることは困難である。

　これを文學の方面へ持つて來て、文學に對する讀者の立ち場から云へば、社會(讀者)の共通特兆を表現することが、文學を文學とする基礎的の條件になる。作者の側から言へば、作者の印象經驗を歸納統一して、共通の特兆を表現するときに、現實がはじめて文學となる。この經過を、ツルゲーネフやベリンスキーなどは、印象や經驗を歸納統一して、「一般共通のタイプにする」と言つてゐる。而してその共通の特兆は豐富にあつめられ、タイプの內容として、鮮明な個の形に盛り上げられなくて

はたらたい。個の形が鮮明で、タイプの內容である共通の特兆が豐富であればあるほど、その作品はすぐれたものになる。個の形は時代や國土や階級の相異によつて違ふであらう。しかしその一定の個の形に盛られたところの、共通の特兆を內容とするタイプの心理形態は、それが共通の特兆を豐富に持つてゐればゐるほど、適應性に富んでゐて、これを表現した文學の讀者で、自分と引きくらべて、おもひ當るやうな人々が一層多くなる。そこで、その適應性の範圍に從つて、タイプにいろいろの段階が生ずる。一地方的のタイプ、國民的のタイプ、世界的のタイプといふやうに。またそのタイプは、これを別の時代や別の社會集團にも適應させて受け入れられる。前にゴーゴリの作中の人物には、類型的た特兆が多く、可なり永續的な一般共通的な心理的特兆が鮮やかに描かれてゐると言つたが、その類型的といふのは勿論このタイプのことにほかならない。而して鮮やかな個の形を取つて描かれた著しい類型即ちタイプとして、時處の差別や階級別に拘らず人の心を牽く力を持つてゐるのは、ドン・キホーテ、ハムレット、リヤ王などのほかに、ドン・ジュアン、ファウスト、オブロモフなど、更に夥しくかぞへられるであらう。前にも言つたやうに、ツルゲーネフは『ドン・キホーテとハムレット論』を書き、小說としては『シュチグロフスキ郡のハムレット』を書き『ひろ野のリヤ』を書いたりして、この類型といふものに特に關心興味をもつてゐたことを示してゐる。その興味の表現が作品として悉く効果をあげ得たか否かは自のづから別であるが、『父と子』のバザロフなどは彼の作中の著しい一つの類型と見るに足る。

　類型は必ずしも一個の性格にまとめ上げられたものに限らない。類型的な—即ち作者の印象經驗を歸納的に統一して得たところの共通の心理的特兆も、それぞれで類型的心理と言へるであらうし、それの表現は類型的心理の表現として、一つの藝術となるのである。一般の藝術を通じて小兒の如き無邪氣さの表現があれば、とりも直さずそれは類型的な共通特兆表現の藝術と見るべきである。

　文學の力が、時處や階級の差別に拘らず働きかけるといふ場合に、これを說明するものは、この類型の表現といふことではないであらうか。勿論、實際の場合に於いては、時代や國土や階級の異同といふことが、文學の評價の過程の中へ影をささないではゐないのであるが、「純粹の文學の力」などといはれるべきものが、實際にそのまゝの形で存在したりはしてゐないのであるが、しかし、時代も國土も階級も違つてゐる文學なり藝術なりが、尙且強く人を動かす力を持つてゐるとすれば、それ

は、その作品の中に、時代や國土や階級などと全く無關係な或る他の力が含まれてゐるからといふわけではなく、いろいろの違つた時代や國土や階級などの間を通じて、尙且つ見出だすことの出來る共通の生活特長が表現せられてゐるがためではないか。それは、だから超時代的ではなくして通時代的なもの、超國土的ではなくして通國土的なもの、また超階級的ではなくして通階級的なものだといふ特色を、多かれ少なかれ持つてゐるところのものである。しかしながら、さういふ類型表現の文學藝術も、前にもちよつと言つたやうに、いくら時代や階級や國土の制限を越えて人を動かす力を持つてゐると言つても、その感動させる程度なりまた性質なりは、その讀者鑑賞者によつて決して一様でないことは勿論である。類型の文學が表現する共通の生活特長に對しても、興味の持ち方は變つて行く。通國土的、通時代的、乃至通階級的類型の表現とはいふものゝ、それに對する評價が一定不動のものだといふのではない。時代や國土や階級が同じでなくても興味があるのは、その場合、その作品に類型的要素を見出だし得るからだといふのだが、一旦何等かの類型的要素を含んでゐた作品は、いつまでも折紙つきで値打ちが變らぬといふのではない。人間の生活に於ける類型的要素、共通の生活特長といはれるべきものは、決していつまでも同一内容に止まつてはゐない。一定の作品に盛られた類型的要素はそのまゝに固定して散逸はしないが、實人生の類型的要素は不斷に變遷して、次から次へ新らしい共通の生活特長を加へて行く。それだから類型表現の作品に對する評價は動いて行く。類型表現の作品に、共通の生活特長が豐富に盛られてゐるほど、その作品は高く評價せられるといふわけである。

類型文學の第一段階では、一つの概念的な理想を立てゝ、それに適はしめるために、歸納的にでなく演繹的に、人間生活の皮相面の共通の特長を、極めて貧弱にあつめて來て、その貧弱な共通の特長を誇張して、統一した一つのタイプを作り上げる。そのタイプが、不自然で、無内容で、無生命で、概念のお化けのやうなものであるのは言ふまでもない。文字通りの意味で沒個性的である。その最も甚しい例は、中世封建期の教會劇や物語に出て來るタイプ、善玉惡玉式の人物がこの段階に於ける類型である。徳目の表象に過ぎない、抽象的なタイプである。ダンテのビアトリーチェや、『ファウスト』の第二部の「永遠の女性」などは、善玉惡玉ほどではないにしても、いはゆるシムボルの程度を出でない。類型として内容（共通の生活特兆）が貧

弱だから、生きた個の姿にまで盛り上つて來なかつたものと言はなければなるまい。近代以後に至つても、教訓的な家庭小說などに出て來る人物は、たとへば十八世紀のイギリスの小說の男女の主人公たちにしても、勸善懲惡的な日本近世の小說の人物にしても、やはりこの段階に於けるタイプの域を脫しないものである。明治の文學に就いて見ても、佳人才子小說のたぐひは勿論、紅葉の『金色夜叉』に於ける貫一、お宮、乃至荒尾など、或ひは蘆花の『不如歸』に於ける武雄、浪子などにしても、今日から見れば、型の如きものに過ぎず、いづれも無內容無生命な、いはゆる類型描寫の小說たるを免がれない。普通に類型といへば、一も二もなくこの段階に於ける類型を意味するものと考へるから、類型描寫の文學などと言つても、何のとだか分らないと言つたりするのである。この段階に於ける類型の文學は、社會道德がほゞ固定してゐて、分裂や動搖をあまり感じてゐないところに發生する。ある場合には寧ろ既存の社會道德を保守擁護しようといふ傾向に伴つて發生する。一種の卑近な功利的な傾向に伴ふ。この程度の類型の表現が、到底久しく高い評價に堪へ切らないものであるのは言ふまでもない。

この段階の類型表現に對する反抗が、いはゆる個性表現の文學の主張である。演繹に對して歸納を、既定の概念的理想に對して個々の現實の實相を、不自然な共通特兆の統括に對して自然なありのまゝの特殊相の展開を主張する。理想主義に對する現實主義である。固定道德に對する科學である。あらゆる固定し承認せられたものに對する明確な觀察と分析と、要するに忌憚なき現實の暴露である。差別相、特殊相をどこまでも認め且つ重んずる。文學の形の上でも、人生の斷片を描いたやうな短篇が多くなる。事實を重んずるから表現の素材としてのモデルが重要視せられ、結局作者自身とその身邊の狹い範圍の生活の事實をありのまゝに一々書くやうになる。モデル問題が起こつたりするのもこの時期の文學の特兆である。私小說や心境小說が多く出るのも自然の結果である。個性描寫といふことがしきりに唱へられたのも、日本では自然主義文學勃興に伴つてのことであつた。一切の考へかたが、個々別々の個を基本として出發するやうになつたのもこの時期に入つて後のことである。個人主義的傾向の時代である。自我的、獨善的、高踏的、唯美主義的傾向が自のづからそれに伴ふ。社會意識を重視する要求は、これに對する不滿と反抗との聲である。この第三段の過程に到達して、第一の段階に於ける歸納的に現實の實相を觀る點と、第二の段階に於ける共通の生活特兆を重んずる點と、この二つの特色が一つに新らしく統一せられようとするのである。

不自然な演繹的な統一と、分裂孤立的な現實觀とを超克して、社會的集團としての現實に、新らしく歸納的に共通の生活特兆を發見しようとするのが、本當の意味での類型の文學である。而してこの第三段階の文學は、社會集團の意識が、何等かの統一の中心を認めて、これに向つて集まり趨からうとするやうな時期、即ち時代の重大な轉回期の初めか、もしくはその社會集團の意識が、志すところの中心に統一せられて安定に到達したやうな、いづれにしても社會心理の統一的傾向の旺盛で充實した時期に發生すべき性質のものである。現代の文學の支配的勢力を否定して新たに興るところの文學は、上に言ふやうに、新らしい組織を求める社會集團に共通の意識の表現としての、類型の文學であるべきである。人間の文化が根本的に新らしい組織を求めようとするやうな傾向を取るときに、文學は必ず類型表現を目ざすべきである。この問題については說き足りぬ點が甚だ多いが、すべての不備は健康の回復を待つて補足したいと思ふ。

今日までの投稿について

先月も掲示しておきました通り、今日までの投稿で、投稿者の宿所不明のために返送することの出來ないものや、返送しても不明のために舞戻つて來るやうな原稿が可なり澤山溜つてゐます。中には三四年前のものもあるやうですが、整理に困りますので此際何とか處分したいと思ひます。

お心當りの方は至急お申越下さいませんか。題と名前と種類とをお知らせ下さらば取調べた上御返送します。

若し今後二ヶ月間に何の消息にも接しない時は、御不用のものと見做して處分します。

それも散逸を虞れて燒却します。

右御了承のほど御願ひします。

三月十五日

我が無產階級運動に於ける農民の役割

高橋龜吉

一　我國無產政黨と農民問題

我が無產政黨運動に於て、いま、最も徹底的な研究を必要とし、從つて又、現にいま我が各派の無產政黨に於て「理論爭鬪」の焦點となれる問題は、思ふに「農民と勞働者との提携」を如何にして如實に實現せしむべきかと云ふことに就てゞあらう。然り大正十四年六月、日本農民組合が「單一無產政黨」を提唱して以來今日に至る間に於ける無產政黨陣營內の紛糾分裂の根因は、結局に於て、この「農民と勞働者との提携」といふ問題に還元し得ると申しても大した過言ではない。

最近に於ては又、日本勞農黨を支持せられる河野密氏一派の「社會思想」の諸君と、勞働農民黨を支持せられる「マルクス主義」の諸君との間に、この問題が改めて檢討せられ、世人の興味を新にしてゐる。この重大な問題を斯く、新に「世の問題」にまで持ち出された兩誌同人諸君の勞を先づ多とする。しかし乍ら、私を以て見るに、從來我國に現はれた此種の「農民と勞働者との提携」に關する見解には、多くの承服し難い根本點がある。而して、若しも、私の見解にして正しいとせんか、今日の我が無產政黨各派の行き方は、何れも、多かれ少かれ、訂正せられねばならない。これ、私が、この機會に於て、大膽に此の問題に關する卑見を述べ、この問題に關心事を有せられる諸君の高教を仰がんとするわけである。

* * * * *

農民と勞働者とが協力一致するにあらざれば無產階級の解放は期し得ない、と云ふことは、就中我國の如き國柄に於ては、全く議論の餘地のない問題である。しかし乍ら、問題は第一に

如何にせば兩者は反資本主義戰に於て協力一致し得るかである。同じく都市プロレタリヤーの間に於てすら、その陣營は周知の如く四分五裂してゐる。何れも、理論としては共同戰線の必要を百も承知でありながら、扨て實際に提携して行かうとなると、諸凡の障碍が(單なる感情のみの問題でなくて)頻出して之を阻止してゐるのである。然るに、都市プロレタリヤートと我が農民との間は、後述する如く、其の階級的性質を少からず異にしてゐる。勢ひ其所に、兩者の解放運動の戰術に於て、利害に於て、異るものが少くない。さうした二つのものを――農民と勞働階級を提携せしめやうとするには、自ら、その方法が究められなくてはならぬ。

なる程、プロレタリヤーの立場から云へば、若しも出來ることならば、色々の注文があり、理想案があるであらう。而して又、勞働者と農民との關係が、各國ともに同じ型に嵌つたものであるならば、露國製の出來合プログラムの雛形通りに進み得るであらう。しかし乍ら、農民には農民の立場がある。必しも、プロレタリヤーの指導通りに云ふことを聞いて與れない。又、勞働者と農民との關係は、各國それ〲に事情を異にし、必しも出來合プログラムの型に嵌つて與れるものではない。であるから、眞に農民と勞働者とを提携せしめようとするには、その國々の農民と勞働者との關係に即し、且つ、その國々の農民の立場に立つて、別仕立のプログラムを作らねば、勞農提携に着せる衣裳には決してならない。この點について、十分科學的な研究を遂げない「勞農提携」論は、宛かも直譯左翼が「單一無産政黨」を叫んで、反對に之を四分五裂せしめたと同巧異曲の逆結果を齎らすであらう。

問題の第二は、云ふ所の「農民と勞働者との提携」と云ふ言葉に盛られた中味である。等しく勞農の提携と云つても、その形式、その內容は色々である。例へば、勞働組合の幹部と農民組合の幹部とが握手したことも一の勞農提携であり、一の政黨の下に農民と勞働者とを包合してゐること乃至は包合せんとしてゐることも一の勞農提携である。しかし乍ら、若しも、斯様な「形式上」の提携が、單に農民と勞働者との集合に過ぎずして、機能的な眞の提携の內容を具備してゐないものであるならば、斯様な單なる提携は必しも望ましき提携ではない。反對に、若しも、農民と勞働者との機能的な眞の提携を完成さすための發展の階段として、勞農互にその機能に從ひ銘々受持ちの階級戰を分擔して、之に專念するを以て戰術上より良しとするとするならば、形式上に於てはいま勞農は假令併立してゐるとも、之を機能的に見れば、實は、却つて「勞農提携」の本旨に

より良く合してゐると云へる。斯様にして、勞農提携の問題はその形式に於てゞなく、その機能的な中味に於てゞある。

所で、問題は、云ふ所の勞農提携の機能的中味の眞僞、即ち、如何なる中味の勞農提携が無產階級の解放に最善に資する所以であるか。之を見定める鍵はそも〳〵如何なるものであるかと云ふことだ。私の信ずる所に由れば、その鍵は、後に詳述するであらう如く、要するに、「我が無產階級運動に於ける農民の役割」をどう見るかと云ふ一點に懸るものである。この點に於て、私の管見は、從來有力なる方面に於て主張せられ來つたものと少からず趣を異にし、從つて、その政策に於て多かれ少かれ見解を異にするわけであるが、それはこの小論の進むにつれて、段々と展開せられるであらう。而して、我が無產階級運動に於ける農民の役割を知ると云ふことは、轉じて又、農民と勞働者との提携は如何にせば實現し得るかと云ふ第一の問題をも解決するわけである。何となれば、その役割に即して、勞農提携の途は自から拓き得られる筈であるからである。繰り返して云へば、我が無產階級運動に於ける農民の役割をハッキリと掴むことに由つて、如何にして勞農の提携を實現すべきかと云ふ問題も、如何なる機能的中味の勞農提携が最善の提携であるかと云ふ問題も、一時に解決し得られるのである。

二　農民の役割を規定する客觀條件

無產階級運動に於ける農民の役割は、時と場所とに由つて、即ち客觀條件の異るに從つて、一樣ではあり得ない。大農制度の行はれ乃至は可能にして、しかも農民の大多數が無教育な露國の如きと、大農制度の不可能にして農民の教育の遙かに進んでゐる日本の如きとの間には、就中、その農民の受持つべき無產階級運動の役割は異らざるを得ぬ。

いま、我が無產階級運動に於ける農民の役割を檢討するに當つて、その役割を規定する客觀條件として吟味するに値する主なるものは、思ふに左の諸點であらう。

一、資本主義の行詰乃至安定の如何
二、農民の階級的地位如何
三、改造後の日本經濟の建て前に對するプログラム如何、
四、農民の經濟的、政治的結成の情勢如何

（一）の資本主義の行詰乃至安定の如何に由つては、無產階級運動は、或は乾坤一擲の戰術を採り、或は持久戰法を撰ばねばならない。然るに、この點に於ては、日本の資本主義の實狀は、いま如何なる意味に於ても乾坤一擲の戰術を許す時期に熟してゐない。社會科學四月號拙著「末期に於ける帝國主義の變質」參

國）果して然らば、云ふ迄もなく、持久戰の立場に於て、農民の役割を檢討せねばならないわけだ。

（二）の我國農民の階級的地位から云へば、我が農民は、云ふ所のプロレタリヤーでは決してない。プロレタリヤーの特色は、生產に於て、如何なるものを、幾ら、何時、いかにして生產すべきかの生產權の自由を全然有せない所に在る。然るに我が農民は、假令彼れが如何に貧弱な小作人であつても、これ等の自由を全部完全に保持してゐる。この點に於て、彼れ農民は寧ろ一個の企業者としての範疇に這入るものである。唯だ、プロレタリヤーと一致する所は、資本の搾取に苦しんでゐると云ふ點だ。資本主義の踏台になつてゐると云ふ點だ。

されば、我が農民も優に反資本主義戰爭に於て、プロレタリヤーと共同戰線を布き得る層の上にある。しかし、プロレタリヤーの反資本主義戰のやり方と、農民の反資本主義戰のやり方とは、その經濟生活の仕組の性質の異る如く異らざるを得ないのである。が、この點は、私のこの小論の最重要部をなす所であるから、後に改めて評論するつもりである。

（三）無產階級の建設せんとする社會が、社會主義の社會であることは云ふ迄もない。しかし乍ら、等しく社會主義の社會と云ふも、その國々それ〴〵の客觀的條件に由つて、その內容は著しく異る外はない。現に、等しく資本主義國と云ふも、英、獨、佛、米、伊、日本、瑞西、白耳義、和蘭等、各國それ〴〵その經濟の立て前は著しく違つてゐる。日本は、その與へられたる客觀條件の下に於て、如何なる改造社會を打ち建てんとするか。その社會に於ける農民の役割如何。これ等は、云ふ迄もなく、今日に於て之を硏究し、その方向に農民運動（及びプロレタリヤー運動）を進めねばならない。然るに、今日までに於ける我が無產階級運動の「所謂」左翼理論家からは、その方向の大骨組みすらも示されてゐない。少くとも私の管見の限りに於てさうである。さればこそ彼等の我が農民運動に對する見解は空疎な革命手淫であり、理論の遊戲である。この點に關する私の見解は後に述べるであらう。

（四）我が無產階級運動に於ける農民の役割は又、農民の經濟的、政治的結成の情勢如何に由つて規定せられる。蓋し、農民をして、無產階級運動の一環たらしむるためには、前提として、彼等を經濟的にも、政治的にも結成せしめねばならない。從つて、如何にせば、彼等の結成を益々鞏固に且つ一般的ならしめ得るかと云ふことは、無產階級運動に於ける農民の役割を規定する第一の考慮でなくてはならないからだ。

そこで問題となることは、以上四大要部條件の規定に從へ

ば、我が無産階級運動に於ける我が農民の役割は、どう云ふことになるかと云ふことだ、以下、これに就いての私の研究を進めるであらう。

三　プロレタリヤ基本の農民の役割觀

『勞農の協同戰線によつて小農民を戰鬪的プロリタリアート黨の指導下におくと同時に、小農民の諸々の反抗を、全無產階級的政治行動主義の立場から利用し、指導し、促進し、これを轉化せしめなければならぬ』濱田徹三氏「マルクス主義」二月號

これが、我が無產階級に於ける農民の役割についての、所謂左翼の考へ方である。彼等の農民に對する唯一の關心事は、その諸々の反抗である。されば彼等は、その反抗の根源たる矛盾を除去するとに極力反對する。蓋しさうしては反抗が消えて了ふからである。さり乍ら、農民の諸々の反抗を利用する爲には、その反抗の根源を除去する目標を揭げて眞先に進まなくては農民はついて來ない。その根源除の去に全力を盡すでなくては農民は彼等の指導下には參ぜない、忘れてはいけない。農民は自ら額に汗して妻子や老父母を養はねばならない人間なのだ、親の脛をカヂツて、然りブルジョアーの親の脛をカヂツテ人間とかけ離れた生活をしてゐる學生とは全く違ふ。學生ならば宛かもベースボールの競技に蝟集するやうに、革命の理論的遊戲の實習に自腹を切つて、(切つて痛くない人の腹だから)集り來るかも知れないが、農民は「反抗」のための單なる「反抗」には決してついて來るものではない。否、例令行きたくても行けないのだ。

斯くて、農民の「反抗」を利用するためには、否でも應でも、農民の要求に聽いて、その解決に努力せねばならない。然るに、農民のその「要求」を解決して了つては、「反抗」の源泉を涸らすと云ふヂレンマに陷る。こゝに、所謂「左翼」の農民運動觀の陷る拔き差し出來ない泥沼が横つてゐる。されば、彼等は農民の要求を出來るだけ速かに、出來るだけ十分に、しかも出來るだけ少き犧牲を以て滿足さすこと(その方法は後述の如く無論反動的であつてはならないが)に熱心であるよりも、寧ろ、其「反抗」を如何にして煽り如何にして引延ばすかにより夢中である。尠くとも理論上さうならざるを得ない。斯くて、大なる農民の犧牲が要求せられ乍ら、農民に報ひられるものはパンの代りに石が與へられる。日本農民組合內の現實派乃至は健實派が、遂に日本農民組合を離れるに至つた根因はこゝに在る。

さり乍ら、所謂左翼の農民戰術の目差す所は云ふ迄もなく別に在る。而して、私とても、或る條件の下に於ては、之に必しも反對するものではない。即ち、左翼の農民戰術は、次の如き

條件の下に於てのみ始めて有意義である。即ち、農民の反抗（主として地主に向けられる）を煽られるだけ煽つて、その白熱の未だ冷めざる間に即ちその解決の未だ出來ない間に、「戰鬪的プロレタリヤー」が、その歴史的大事業を敢行し得、以て、農民を之に參加せしめ得る見込がある、と云ふ場合にのみ、所謂左翼の現に主張する農民戰術は許さるべきである。

然るに、先にも言及したやうに、日本の資本主義は未だ斯樣な時期に到達してゐない。我が無產階級運動は、いま「突貫」すべき時期ではなくて「持久戰」を戰ふべき時だ。如何なる勇猛な「戰鬪的プロレタリヤー」と雖も、いま××戰を戰ひ得る事情におかれてゐない。にも拘らず「所謂」左翼は農民戰術に以上の如き方法を採り來つた。かくて、有名な伏石や木崎村の失敗がある。農民の反抗は無限に續け得られるものではない。反抗のための反抗は、却つて、敵に乘ずる機會を與へて、味方の農民運動を破壞するに至る危險の方が大である。尠くとも、伏石や木崎村の實例は之をさう語つてゐる。しかし乍ら農民運動が、單に反抗のための反抗でなくて、若しも、適切な戰術を以て進むならば、地主の城寨は案外に脆く、之を崩すに必しも非常手段を要せない。現に、我が農民運動の成功（經濟的にも政治的にも）せる地方に於ては、農民は已に地主の搾取の殆んど全部を取り戻してゐる。少くとも、地主に對する反抗に於て、農民を煽り得る餘地のない程度にまで、地主の搾取の再奪還をやつてゐる。その實例として、私は、次に、山梨縣中巨摩郡常永村に於ける地主の收入が、農民組合の小作料輕減運動と、日本農民黨の政治的進出（それもその村のみに限るに過ぎない）の挾擊に由つて、如何に激減したかを表示するであらう。

農民運動に由る地主所得の變遷表

年度	一反歩當り地主小作料收入	一反歩當り公租公課	差引殘高	公租公課の內譯
大正九年	圓 三八・五〇	圓 九・〇〇	圓 二九・五〇	地租二・二五、縣稅二・一五、村稅一・四〇、農會費〇・七〇所得稅一・五〇縣村戶數割一・〇〇
大正十三年	二四・六〇	一一・〇〇	一三・六〇	縣稅三・五〇所得稅其他二・五〇縣村戶數割二・〇〇其他右同
大正十四年	二三・一〇	一一・〇〇	一二・一〇	同上
大正十五年	一五・四〇	一二・四〇	三・〇〇	農會費一・一二

（備考）（一）本調査は山梨縣中巨摩郡にて、約定小作料千俵を取る地主の所有土地一反歩について見るものにして、日本農民黨の調査になる。
（二）大正九年までは小作爭議なし。
（三）本表の計算は一俵の籾代金を拾一圓平均とす。籾一俵は六斗六升、目方は平均十七貫目とす。

（四）一反當りの約定小作料は籾三俵半にして、表中の小作料收入は何れも實納小作料を前記の如き計算にて換算せるものである。從つて、大正九年以前に於ては、米價高く地主の實收入は表示の二割以上多し。

（五）本調査に於ける地租其他は、一反歩の地價五十圓の場合にして、公租公課は村地主を基準とせるものである。不在地主の場合は本表よりも幾分輕い。

之に由ると、地主の一反當りの純收入は大正九年には貳拾九圓五拾錢のものが、大正十五年には約十分の一の參圓に激減してゐる。それだけ、小作人が地主の搾取を奪還したのであつて、この上、この殘つた僅かの參圓を更に取戻すために、農民の反抗的運動を捲き起さうとすることは常識では考へ得られない。果して然らば、農民運動がこの階段に達すると、左翼の農民戰術の基調である、地主に對する農民の反抗と云ふ手品の種が殆んど盡きるわけである。これは「左翼」にとつてはどれ程か意外に違ひない。思ふに、この「意外」の根因は、我國の地主の勢力を餘りに過信した所にあらう。尠くとも之を商工資本家並みに見た所に錯誤の根因があらう。

然るに實際に於ては、地主の資本家的地位は、商工資本家以上遙かに、しかも極度に腐朽してゐる。それは、地主には産業の經營權が全くない、その實權は小作人にあるの故である。從つて、例へば、等しく爭議が勃發しても、プロレタリヤ本家の場合には、生産の阻止者として社會に映ずる所は主としてプロレタリヤーである。ストライキ、怠業、何れもさうである。從つて又、無自覺の民衆が、或は社會の名に於て、或は國家の名に於て、ストライキ破りをやり、資本家に直接間接味方する。然るに、小作人對地主の場合には、生産の阻止者として社會に映ずるものは常に地主である。地主の最有力の武器たる、耕地立入禁止、耕地返還要求等がそれである。從つて社會の同情は小作人に集り易く地主に背き易い。之れ、小作人の地主に對する反抗が、比較的容易に小作人の勝利となる所以である。

こゝに於て、小作人の地主に對する反抗は、「左翼」の注文通りに、「戰鬪的プロレタリヤー指導の下に　之を××に轉化せしめ」得る前に於て、否「左翼」が餘りグズ〳〵してゐるが故に、御先に行く所まで行つて、左翼の所期した方向とは、全く別な方向に解決せられて了ふことになる。前記山梨縣の實例は之を實證して餘りある。果して然らば　これは農民運動が行き過ぎてしまつたのだ。然り、最も急進してゐる筈の「左翼」指導下のプロレタリヤーよりも餘りに早く進み過ぎたのだ。何と云ふ皮肉だ。

云ふことであつて、事實、農民運動が行き過ぎたのでは決してないことは云ふ迄もない。私を以て見れば、それは要するに、左翼の農民戰術の錯誤乃至は我が無產階級運動に於ける農民の役割に關する認識の不足等を實證するための「左翼」理論の破綻を暴露するものに過ぎないものである。

　こゝまで、乃至はこの近所まで農民運動が進展すると、農民はその貧困を克服する途は、地主に對する反抗のみでは駄目であることを自覺する。何となれば、地主の搾取を前例の如く奪還しても、尙ほ彼等の生活は云ふに足る「解放」に惠まれてゐないことを認めざるを得ないからだ。こゝに於て、農民運動は一階段を進める。それは、農民の貧困を眞に克服するためには、更に進んで、商人及び工業資本家の間接の搾取を奪還せねばならないと云ふ自覺の下に、その陣容を立直すことである。これ云ふ所の、農民の建設運動への轉換である。然るに、我が無產階級運動に於ける農民の役割をその發展の相に於て認識し得ざる直譯者流は、この農民運動の建設的努力を以て、「反動化」だと誣ひ、「小ブルジョア化」と叫ぶ。しかし乍ら、斯樣な直譯者流の怒號は、要するに、彼等の認識の不足、戰術の錯誤のために、彼等が農民大衆から捨てられつゝある事實に呻吟

　しかし乍ら、農民運動が行き過ぎたとは左翼戰術の觀點からする意味の外に過ぎないのである。私は、これを更に項を改めて論ずるであらう。

四　農民基本の農民運動觀

「日本が農業國であると云ふ認識から出發する、これに異存はない。日本の農民が農業勞働者でないと云ふ立場に立脚する、これにも異存はない。だから日本農民黨はこの現實に即して立黨する。――こゝに至つて吾人の見解は全く異る。吾人はかく主張する。だから我々は農民の小ブルジョア的意識を打破して、勞働者と農民との現實の提携を築しなければならない」

（河野密氏「社會思想」一月號）

　若しも河野氏のこの最後の言葉が、我が農民に對し、プロレタリヤーとしての立場に於て、我が無產階級運動に參加せよと云はれる意味であるならば、――而して前後の意味からさう解せられる――、この點に於て、私の見解は河野氏とも異る。私はかく主張する。『……日本農民黨はこの現實に即して立黨する。――それでよろしい。しかし乍ら、この「現實」を解決する方法は二途ある。若しも右に行けば資本主義の反動殿に達するであらう。若しも左に行けば社會主義の建設殿に至るであらう。問題は、あるがまゝの日本農民の現實に即して、すなはち

プロレタリヤーとは異つた性質を有する我國現在の農民そのものを出發點として、――それ以外に實行方法はない――之を左に發展せしむべきか、右に反動せしむべきか、その舵のとり方一つに在る』と。

顧るに、我が國無産階級運動の有力なる方面に於ては、從來、次の如き考へ方が支配してゐるかのやうである。曰く、我が農民を反資本主義的に結成せしめるためには、農民を是非ともプロレタリヤーの意識にまで轉化せしめなくてはならない。而して非プロレタリヤーである農民を、プロレタリヤー化すべしと云ふ此種の主張者の理論的根據は、「それが（農民が）有する階級的發展性にあるのであつて、即ち「日本農村が過剩なる人口に押されて、必然的にプロレタリヤー化して行く過程を見誤」つてはならないと云ふにある。（河野密氏「社會思想」一月號）

しかし乍ら、私は、第一に、我が農民が結局プロリタリア化すと云ふ公式に反對するものであつて、資本主義末期に於てはその公式は已に時代錯誤であると信ずるものである。が、その詳細は、近刊の拙著「資本主義末期の研究」（改造社發行）に掲げておいたから、紙數の制限上いま之を繰返さない。第二に、私の反對する點は、我が農民を反資本主義的に結成せしむるためには、必ずや之をプロレタリヤ意識にまで引上げなくてはならない――それは第一に私の論じた所に由つて實際不可能な願望と云ふことになるが――と云ふ考方である。私の信じる所に由れば、我が農民は現にあるがまゝの「農民意識」に於て、之を、反資本主義的に優に結成せしめ得る素質を具備してゐる。而して、その農民意識に於て之を反資本主義的に結成せしめてこそ、農民はこゝに始めてプロレタリヤーと協同戰線を布き得ることが出來るのであつて、若しも勞農提携の名に於て農民をプロレタリヤ意識化せしめんとするならば、勞農共同戰線は遂に一個の畫かれた餅に終る危險が甚大であらう。こゝに私の見解の他と異る根本點がある。而してこの點を愼重に研究することが、此際、我が無産階級運動にとり最も重要であると考へるが故に、私はいま私の考へてゐることを、極めて大膽に、卒直に述べて、世の高教を仰がんとするものである。

我が農民は、その農民意識のまゝから出發して、優に反資本主義的に結成し得られるものだと云ふ私の第一の理由は、我が農民そのものゝ解放は、社會主義經濟原則に由るにあらざれば所期し得ないと云ふ點である。例へば、我が農民現在の貧困を克服するには、單に地主の搾取を排遏したばかりでは駄目であつて、それ以上、更に商工資本家に搾取せられてゐるものを恢復せねばならない。所が、その方法は、要するに、現在商工資

本家が司つてゐる所の、商品の流通及び工業生産を農民自らの支配下に取戻す外ない。が、その實行方法としては、社會主義原則の下に、經濟組織を改革して了ふと云ふことの外農民にはその實現法が許されてゐないのである。（この點の詳しい説明は、拙著近刊「資本主義末期の研究」を參照せられたい）

私が、我が農民はその現にあるがまゝの意義に於て、優に之を反資本主義的に結成せしめ得ると信ずる第二の理由はかうである。我が農民の實行し得る資本主義倒壞の唯一な、且つ最有効な方法は、農村に社會主義經濟原則に即した新經濟を建設することである。而して云ふ所の農村新經濟とは、

一、電力と組織の力に由つて機械工業を農村に奪還し、之を農耕と組合すこと。

二、産業組合、及び國營運動に由つて商人階級を廢除すると。

の二點を含意してゐるが故に、この建設運動の成功は、高工資本家存立の土台を根柢から潰滅せしむるものである。之れ宛かも、支那に於ける反帝國主義運動の成功——その成功を云ふには、支那は新しき獨立國家を建設せねばならない——は、延いて、英國資本主義を倒壞せしむる最有力な一方法であると云ふのとその理論を同うするものである。しかも、我が無産階級運動が成功したる後ち、即ち無産階級が政權を握れる後に於ける、吾日本經濟建設の方向も、要するに、以上のごとき方向に進む外、今の所行き方は考へ得られないのであつて、大工場と大農制度を採用せんとするが如きことは、考へ得られる將來に於ける日本經濟の客觀條件に於ては全く不可能に屬する。（以上に關する更に詳細な研究は之を拙著近刊「資本主義末期の研究」改造社發行に就いて參照）

而して、右の如き新農村經濟の建設は、いま現にあるがまゝの農民意識から、優に之を發展せしめ得るものであつて、殆んど全くプロレタリヤ意識を必要としないものである。否、プロレタリヤは、その本質上、直接間接政權を握るにあらざれば、建設的プログラムを實現さすことは出來ないのであつて、斯樣な役割を今日の政治的戰術に於て直ちに實行し得る資格を有するものは、獨り、我が農民のみである。尤も、農民が斯樣な建設運動に着手し、乃至は之を着々實現するに於ては、一見、農民と勞働者とが相反する利害の上に立てるが如く、皮相の人には映るかも知れない。しかし、この關係は、宛かも、反帝國主義の下に支那を建設しつゝある民衆と、帝國主義英國の勞働階級との關係であつて、我が無産階級運動に於ける農民の役割の意味が、よく、我がプロレタリヤに理解されさへすれば、農民のこの建設運動は、即ち勞農互に協同戰線に立つて、反資

本主義戰を戰ひつゝあるものであることが釋然と分つて來る筈である。斯樣に申すことに於て、私は、從來我國無產階級運動の有力なる方面に於て支配力を持つてゐた見解と全く逆のことを云つてゐるわけだ。即ち、從來の通說は、我が農民に對してプロレタリヤの使命を理解せよと呼びかけてばかり來たのである。然るに、いま私は反對に、我がプロレタリヤに對して我が農民の使命を理解せよと呼びかけつゝあるのだ！ 然り、私はいま特にこの點を意識的に强調する必要を感ずるものである。蓋し、所謂プロレタリヤ意識を持つと云ふ少からぬ人々は、農民のこの無產階級的使命を覺り得ずして、然り、封建的遺制から社會主義制への農民の此の飛躍的發展性を覺り得ずして、徒らに之を、或は「反動」と誣ひ、或は小ブル化と侮蔑し、遂に、農民をして「農民は農民黨へ」を叫ぶを餘儀なくせしめつつあるからである。

最後に、又、之を農民運動それ自身の發展政策として考へるも、農民運動は以上の如き建設運動に進出せざるを得ない。何となれば、地主に對する反抗運動に終始する農民運動は、それが經濟運動に於てであらうが、政治行動の分野であらうが、その活動舞台は已に著しく局限せられて來てゐる。尠くともさう云ふことが目の前に見え出して來た。（前記山梨縣常永村の實例を見よ）農民運動の更に大なる、而して恆久的結成を期するためには、對地主反抗運動以上に出でねばならない。而して、その方向は、已述の如き建設運動の外にないのである。

以上之を要するに、我が無產階級運動に於ける農民の役割は、農民自らの立場に即して、社會主義經濟原則に即した農新經濟を新に建設することであると云ふことが分るであらう。斯樣な方法に於てのみ、農民はいま、資本主義倒壞の運動を實現し得るのだ。而して、この方法は、或る點から云へばプロレタリヤーの資本主義倒壞運動よりも更に一步を進めたものである。何となれば、產業の經濟權から全然遮斷せられてゐるプロレタリヤーには、そこ迄進んだ運動は全然封ぜられてゐると云つてよいからである。（精々の所、消費組合運動位ゐのものである。）果して然らば、我國無產階級運動の有力なる方面に於て、從來通說なるかの如く遵奉せられてゐた我が無產階級運動に於ける農民の役割に對する考方、即ち「農民はプロレタリヤに追從して行くことだ」乃至は「プロレタリアが主導になるのだ」と云ふが如き考方は、根本から訂正せられなくてはならなくなるわけだ。勢ひ又、農民と勞働者と云ふ意味は其の內容を異にするに至るわけである。以下、私はこの點について考察を進める順序であるが私に與へられた紙面は、大方、已に使ひ

果して、あと極めて僅かしか殘つてゐない。以下、私は、その大骨組みについて概述する外に仕方がないわけである。

五　農民と勞働者との提携實現の樣式

以上第五項に於て詳述したやうに、我が無産階級運動に於ける農民の役割は、プロレタリアに追從し、それの指導に由つて始めて動き得ると云ふ點にあるのではなくて、農民はその現在の立場から、直ちに、社會主義經濟原則に即した農村新經濟を建設することである。こゝに於て、云ふ所の農民と勞働者との提携は、之を農民側から云へば、農民の右の役割を實現するために、必要な援助をプロレタリヤーの協力に依賴し、その代り、プロレタリヤの役割を果すに必要な援助を農民より協力すると云ふことであるべきだ。別の言葉で之を繰返すと、現在の我が資本主義の情勢の下に於て、即ち、無産階級運動が持久戰的進擊を戰はねばならない情勢の下に於て、我が農民とプロレタリヤーとが相提携すると云ふことは、兩者が一團となつて或る一點のみを突くと云ふことではない。兩者はそれ〴〵、資本主義の倒壞を戰ふに最も優れた分野を持つてゐる。その分野に從つて、分業的に相協力して、敵陣に迫ると云ふことである。

蓋し、農民がその役割として荷へる、社會主義經濟原則に即した農村新經濟を建設するには、農民の力だけでは円滑に行かない部が多大である。例へば、産業組合的經濟の建設によつて、商工資本家の搾取を奪還するためには、或は重要農産品の國營、或は肥料その他の國營、金融問題等多くの政治的施設を必要とするが、それの實現はプロレタリヤと協力するにあらざれば之を期待し得ない。又、農村に工業を奪還するためには、電氣の公營、設備其他に要する資金に對する金融施設等を必要とするが、それの實現はプロレタリヤと協力した政治行動に依賴する外に途はない。更に、農民がこれ等の建設運動に進出する序幕としての、對地主戰に於ける耕作權の獲得と云ふが如きことも、云ふ迄もなく、プロレタリヤとの協力戰線による政治戰に賴らねばならぬ。更に又、之をプロレタリヤの役割遂行の點から云ふも、卑近なストライキ戰に於ても、及びより進んだ政治行動戰に於ても、農民大衆の兵力を大に必要とする。プロレタリヤーが乾坤一擲の戰ひをなす場合に於ては、就中さうである。

斯樣なわけで、私がこゝに、農民と勞働者とは、分業的にその得意とする點に於て反資本主義戰を戰ふべしだと云ふわけは、要するに、兩者はその鬪爭の主點を何處に集中さすことが、兩者それ〳〵の利害を最もよく擁護しつゝ、しかも最も緊

密な關係に於て反資本主義戰に對し勞農を相提携せしめ得るか、と云ふことに答へてゐるに過ぎない。しかるに、この點、（就中プロレタリヤーが我が農民の役割を理解しそれの遂行に協力すると云ふ點）は從來殆んど無視せられてゐたかの觀あるが故に、勞農提携を如實に實現せしむるためには、特に强調せねばならない所であると思ふ。

若しも、以上の如き理解と內容とに達することなくして、乃至は之に達する努力を試みることなくして、徒らに、農勞提携の大義名分論を振りかざし、その名に於て、形式的な提携に猪突せんか、或は二兎を追つて一兎をも得ざる失敗を繰返し、或は異論百出し二進も三進も出來ず、遂に又分裂を來たす外ないであらう。

一寸お斷りまで

小生儀目下非常に多忙を極めてをりまして、ゆつくり私宅におちついてゐる暇とてもないほどでありますから、編輯に關する御用件はなるべく社の方へお願ひいたします。殊に投稿原稿については夫々係りもありますから、投稿規定により中央公論社宛御送附を願ひます。小生の私宅へ宛てて御送附下さつたものでも、一度は必ず係りの手へ渡すのですから、二重手間で、その間に紛失の虞もできる譯ですから、今後は私宅へ宛てゝ御郵送下さる事や、原稿の用件で私宅を御訪問下さる事はお斷りいたします。

その代り正午前後は大抵なるべく在社してゐることにしたいと思つてをります。なほ念の爲めに電話でお問合せの上御訪問下さらば幸甚に存じます。

島中雄作

中國革命運動の歷史的考察

戴天仇

革命といふ文字の意味を考へると、どうしてもその民族、その國、若しくは社會それ自身の歷史的事實を知らなければ、それの革命運動に關しての批評が出來ない。革命は西洋の言葉で言ふ Evolution 或は Revolution と全然同じ言葉で、つまり人間の力で自然の進化を促進するといふ意味にすぎないのである。そして革命は決して空想の打算ではなく、必然的進化の道程に依らねばならないことは自明の理である。支那の「革命」といふ語は Revolution といふ語と殆と同じ內容を持つてゐる。命といふ字は天命の意味で、天命は自然進化の程序であつて、革とは人間の力でその自然進化の程序を革めるのであるから、つまり人間の力で自然進化を促進すると云ふ意味になるのである。又昔の解釋には革命は必ず天に應じて人に隨はなければならないとされてゐる。この意味は即ち自然進化の必然的歸趨に順應し、そして社會民衆の希望目的に副ふといふことであるから、どうしても必然といふのが革命の本當の目的又は手段を示してゐるのである。故にその必要のない所には決して革命は起らない。又社會民衆の目的希望以外には革命の主義主張はないのである。故に革命家個人の主義主張政策を研究し批判する前に、その革命の行はれる國、若しくは民族、社會それ自身の歷史的因果を研究し批判するのが必要である。私が支那の革命を說明するのに二つの關係から觀る。その一つは支那民族自身の歷史的關係、即ち昔から今迄の歷史的關係、もう一つは現在世界全體の民族的、政治的、社會的關係を觀る。前者は支那革命の立體的說明であり、後者は平面的說明である。又三民主義の意義も、中國々民の責任も、要するに古代から現代迄の歷史的關係と、支那自身から全世界に及ぶところの世界的關係と

いふ二つの時間的空間的統一の上に立つて居る。故に支那の革命は單に支那一國の思想に依つて動き、支那一國の歴史的使命を帶びてゐると稱するのは決して當らないが、又支那の革命は單に現代歐米の刺戟又は影響に依つて動かされると觀るのも當らない。極く單純にこの意味に於ての私の説を試みよう。

漢民族の衰弱は大分古いことであつた。殆ど宋の南渡以後今日迄約千年の間の歴史は凡て漢民族頽廢の歴史であつた。近代支那の革命運動は民族の意味から言へば、この約千年位の頽廢的歴史の打破に在ると言ふことが出來る。支那の文明を地理的見地から言へば黄河流域を中心としての文明、揚子江流域を中心としての文明と言ふ二つに分けることが出來る。支那の漢民族は西北の高原から水草を逐ふて黄河流域に來た。そして豐富な耕作地の上に農業的文化を創り上げたのである。この文明の全盛時代は周の末代即ち戰國時代であると言へる。秦が封建制度を廢し統一した國家を建設したのは、要するに黄河流域の文明の成熟を語るものである。思想史から見てもその時代は支那の一番進歩し發達した時代であつた。この黄河流域の文明を私は「生産的文明」と稱して居る。その時代の凡ゆる文學藝術又は政治思想を見ると、悉く人類の實質的文明――經濟的文明――の建設にあるのであつて、凡ての道德標準は悉く生産的努力を中心にして在る。故にその時代の國民の氣風は進取的であり、努力的であつた。それから段々西北の野蠻民族が漢民族の黄河流域に進出して來た道に隨つて壓迫して來た。彼等は極く文明程度の低い、經濟的生活の簡單にして粗末な遊牧民族であつたけれども、戰爭には非常に强かつたのである。この民族の鬪爭は、一方は進取的で、漢民族は保守的であつたことを免れない。萬里の長城を見ても漢民族が單に固有の地位を守るだけで、進んで西北の民族を征服し、それらの地方を占領する意志の無かつたことを知ると同時に、西北諸民族が物資豐富な黄河流域に向つて、必死の力で攻擊して來たことを明白に認識し得るのである。段々西北民族の勢力が强大になり、漢民族が愈々黄河流域の政治的地位を保つことが出來なくなつて、政治上の中心が揚子江の流域に移つて來たのである。晋の東遷と宋の南渡並にその間の六朝五代の歴史は、悉く漢民族が西北の民族に戰敗した歴史を語つて居る。揚子江を政治的中心にしたのは進んで來たのではなく、退いて來たのであるからして、黄河流域時代の文化と全然意味が違つて、衰沈頽廢の氣風が全部の歴史に滿ちて居る。戰に敗れて揚子江に來た文化の中心といふのは、どんな人々に依つて建設されたかと言へば、無力な君主、腐敗した貴族官僚、並にそれらに寄生する輕佻浮薄の文

士、これらを容として迎へる娼妓、戰に敗けた勇氣の無い軍人、これらは即ち南朝文明の中心であり、建設者であり、又享受者であつたのである。故にこの南朝文明を昔から「金粉文明」と稱して居る。即ち男は金、女は白粉、晝は金、夜は白粉、黄河流域の生産的文明に對して、消費的文明であり、進取的文明に對して、頽廢的文明であつた。凡ての文學藝術の上にも、悉くこの關係が明白に現はれて居る。後に蒙古民族に百年間征服され、滿洲民族に二百七十年間支配された原因は、悉く文明の頽廢に在つたのである。蓋し周末から以後歐洲文明の入る迄の二千年間と言ふものは、凡て文明の實質の上に何等の變化もなく、工業の上にも、農業の上にも、實際の生産機關、生産技能にも更に變化が無かつた。歴代の變亂といふのは、人口の增加と土地の兼倂に依る社會的不安に原因するか、さもなければ、野蠻民族の攻擊に依るかであつて、凡ての歴史は單にそれを繰返してゐるにすぎなかつたのである。

けれども近代のヨーロッパの勢力が侵入して以來、凡ての經濟的生活、政治的生活の上に、またこれらの生活を説明し指導する思想の上に非常なる變化を及ぼした。單に古代の農業生産、手工業生産の知識と技能と社會組織しか無かつた支那が、近代の科學的工業生産品の壓迫を受けて、社會の根柢が全部動搖して來たのである。そして政治上に於ては、弓矢、刀劍のみに依つて組織せられた軍隊の力に依つて建てられた國家の力と、更に近代の科學的製造と、科學的組織とに依つて出來上つた歐米の國家の力に對抗することが出來なかつた。阿片戰爭以來今日迄の凡ての歴史は悉く支那の文明が、歐米文明に戰敗した事實を語るものである。

從來支那の漢民族が前に述べた晉の東遷以後の衰沈頽廢は、西北の民族に戰敗したためであるけれども、文明の上に於ては決して戰敗しなかつた。人口の數も文明の內容も悉く優秀であつたゝめに、西北の民族に政治上では敗れたけれども、社會文明の力に依つて、却つて彼等を征服したのである。侵入して來た移民族は悉く支那に同化され、益々支那の大をなしたゞけである。けれどもヨーロッパ勢力の侵入は、これと違つて、單に民族の力として侵入して來たのではなく、その優秀なる科學的文明は、文明の實質に於て支那の民族が到底彼等に抗することが出來なかつた。故に現代の革命といふのは歴史的に考へると、支那民族が一方に於て衰沈した近代約千年間の歴史を打破して、昔の黄河流域時代の進取的、生産的民族の精神を恢復するにあり、一方に於ては、現代の科學的文明を採用して、支那國民の現代の世界的生活を建設するに在るのである。若し單に科學的文明のみを採用すれば足ると考へるならば、それは近代約千年間の支那民族の衰沈した歴史を忘れた話であり、單に支那民族が自分の獨立さへ出來れば外に問題が無いと考へるのは、全世界の凡ての國民生活が段々世界經濟の組織に進んで行

く事實を無視した考へである。

孫中山（孫文）先生の三民主義は、即ち一方に於て支那民族の歴史的復興を謀り、一方に於ては世界的生存發展をはかる。それと同時に世界全人類の生活を、一つの共通原則に依つてしなければ、一個國の問題を解決することが出來ないと主張するのである。この二三十年間の支那の國民運動の實質を觀、又その精神を觀れば、實際宋の南渡以後今は一番力のある意識的な國民の努力が現はれつゝある時と言はなければならない。この意味に於て中山先生の努力は單に一個の政治家であるばかりでなく、又單に一個の思想家であるばかりでなく、支那民族復興の上に於ては、恐らく空前の偉大なる人物であると私は信じて居る。從來支那の人物は、或は事業を遺し、或は教を遺したゞけであるが、先生は事業と教の二つを遺した人である。事實支那民族の現在の境遇はどうしても、進取的、生産的覺悟を必要とする必然の運命の然らしめたものと私は確信する。

現代の支那民族の國民運動は單に支那一國の復興を意味するのみではなく、世界人類の四分の一を占めて居り、そして一番古い文明的訓練を經た東方の民族が、一番新しい西方の文明を引き入れて、それに依つて世界の統一的文明を創り上げるのは、即ち支那國民運動の根本義でなければならない。故に私が常に支那國民は今日意識的には國を救ふために努力してゐるけれども、全世界の凡ての事實が支那國民に無意識的に世界全人類を救ふためにその任務を與へつゝあるのである。故に現在の四億萬の民族が無意識的に世界を救ふために努力してゐると信じてゐる。よく西洋の人は支那は世界平和を攪亂する國であると言ふけれども、事實列强が支那の利權を態鬪するために、凡ゆる鬪爭をなしつゝあるのである。若し支那自身が完全に獨立し、而して完全に統一した現代の世界的文明を建設し得なければ世界の鬪爭は熄まないであらう。故に支那の民族的文化的復興は世界平和の基調であり、又東西文化調和の基調である。この意味に於てでなければ、支那の革命の眞義を了解し、又その歴史的使命を了解することが出來ない。日支兩國民の凡ての親交は、この了解の上に立てられなければならないと思ふ。一切の具體的問題の解決は了解の出來た後でなければならない。了解すれば凡て容易に行はれるのである。中山先生の言ふ「行ふことは難しとせず、これを知ることを難しとす」で、了解は即ち知ることである。今日私が日本國民に一番切望するところは、支那を知ると云ふ一事である。支那を知れば世界を知り、世界を知れば支那を知る。事實今日の支那問題は、既に一個の世界問題の全部を意味して居る。この解決は支那民族自身の努力に依らなければならないと同時に、最も利害關係の深い日本國民の了解が、非常なる力を致すものなることを信ずるものである。

三木君の失敗

石井滿

東京市は、いろ〳〵の意味で不思議な都會である。

衆議院の選擧には、憲政會系がいつも多數をかち得ても、東京市會にはどちらかと云へば非憲政の色彩が濃く、憲政會はこゝでも亦「苦節十年」を經驗するの餘儀なき立場にあつた。

苦しむだゝけに憲政會系の色彩はまた一種特別なものがあつた。地道な仕事の上でも、かけ引の上でも、市會に於ける憲政會系は小さくまとまつて、皮肉なことをやつて來た。いはゆる後藤系三代の市長を經てゐる間に市會においては、鳩山、三木の二人がいつの間にか頭角を現はして來た。

若い政治家達が、中央政界の派手な空氣にひつぱられ勝ちなのに、この二人が着々と東京市會を通じて、東京市政に勢力を植えつけて行つたことは、ともあれ注目すべきことであつた。

しかも十年間ここでのびやうとして苦しむで來た憲政會系が、中央政界の勢力を利用して、東京市政を乘り取る時期は遂に到來した。そして、どちらかと云へばお坊つちやん的な鳩山君より、親分肌の三木君の方が時めくやうになつた。元來「市政」といふものに自覺の足りたい東京市民は、たうとう三木武吉君をさへも遂には「東京市政の大御所」と呼ばしめるやうにした。しかしながら、急造の金ピカに、市政壟斷のドテラを羽織り、神樂坂の×××に大あぐらをかいて、「革新會」の一派の牛耳を執つた、三木君の榮華の時代のしかも、いかに短かかりしことよ！

×

思へば、三木君は、東京市會議員として、東京市政については、滿更らの素人ではない。しかも、その三木君が、東京市民をよく理解してゐたかと云へば直ちに「然り」と云ふことは出來ないやうだ。

昨年五月の、市會議員の改選をあてこんで「東京市政刷新」の聲は、春ごろからかなりやかましくなつてゐた。僕達も實はその一人で、澤田謙、清澤洌と云つた、文筆言論の仲間で「東京市政革新同盟」を作つて、演説會をやつたり、「犬と運動員入るべからず」と云ふビラを撒いたりして選擧界革正の運動をつづけてゐた。しかも、それが花々しいものであつたとは、どうひゐき目に見たからとて、云へないものであつた。そのころ、選擧期日の押し迫つた四月の初めになつて、憲政會の色彩のあ

る市議の候補六十數名の名前を八百屋の品名のやうに並べて、三木君自ら總帥となつて堂々と市會壟斷の擧に出ると云ふ新聞記事を見て、市政のために働いてゐるものは勿論、左樣でないものでも、靑天に霹靂を聞いた位に「アッ！」と云つた。

「さすがは天が下しろ憲政會だ。さすがは野次からたたき上げた三木だ」

かう云つて人々はその大規模な計劃に吃驚した。東京市政のために戰つて來た人に、鳩山一郎君のほか、理想候補の宮島淸次郎君や山崎龜吉君もゐた。しかもひとり三木君の仕事だけがずばぬけて大仕掛であつた。

その前に立つては、僕達の運動の如きは、實に恥かしい位細々としたものであつた。

おなじ方面の仕事に手をつけてゐるものとして、自然と一種の敵愾心とも云ふべき感じが僕達の同志の胸から胸を流れた。また、お互文筆言論に依つて立つものの「社會的勢力」の貧弱さを自嘲したいやうな氣分さへわれわれの心奥をかすめて通つたことは爭はれなかつた。

しかしながら、そのときから僕には大きな疑問があつたのだ。

憲政會系の、この革新會と呼ぶ三木一派の運動には、三十萬圓の軍備金があるといふことが、どこからとなく云ひ傳へられた。この金は、市に買上げて貰ひたいといふ希望のある乘合自動車が出したといふ評判もあつた。いや臺灣總督の方から大部分出てゐたので、伊澤氏が後にすぐに市長になつたのだと云ふ人もあつた。いや市と水力電氣供給契約の關係のある會社だらうとか、權利問題でやかましい地下鐵道の諸會社も變だとか、市と共に、おなじ仕事をやつてゐる電燈會社もあるぢやないかとか、更にまた、或るものは「もう相當に歲月も經てゐる。どこかガスの洩れる臭ひがするではないか」と皮肉を云つてゐたものもあつた。

そんなことの詮議沙汰はもし必要でもあれば、警視廳や檢事局の役人の仕事かも知れない。少く共僕達浪人共のさして關知すべき事柄ではなさ相である。唯、その當時からして、僕の氣かつてゐたことは「どこからか莫大な金をもつて來て仕事をするときに、無考へな人がついて來ても、いよ〳〵そのひき出した金の決算をするときに、さきについて來た人が、またついて來るかどうかが問題である」といふ點であつた。

「東京市會乘取料三十萬圓也。」この金の出所が、水の音がしてゐるか、ガソリンの臭がしてゐるか瓦斯臭いところがあるか、

それはかならず早晩判明することである。その早晩判明すべき謎を懷にして、大膽にも、自治體に中央政黨の魔力をのばしたところに、三木君の計劃の粗大さがあつた。

しかも、見物席にひかへてゐる東京市民は、「市政」そのものには無關心であつても、電車が一錢値上したことに憤慨して、「電車燒打」を敢行する程愛市心？に富むだ市民である。數多い電車の停留場の、一つや二つを整理しても、陳情書がうるさい程來る市民である。

利害の打算にはかなり敏捷な人達の多いことを忘れてはならない。それだのに革新會なるものに、果して何の確信があつて、市民生活に密接な關係のある諸事件を、しかも自會に有利に解決し得る見込を立てたらうか。

×

建設は比較的容易いが、一度かち得た絶對多數の位地をよく持ちこたへてゆくことは、かなり困難である。しかも、その建設の地盤に、不安定なあるものがあるにおいては、その地位の安固を希ふとは全然不可能と云はねばなるまい。僕はこの際、東京市長に、警視總監の古手をつれて來たり、東京市會議長の椅子に、體格の巨大よりほかに取柄のない人間を坐らせたりした柄の悪さを以て三木君一派にいやがらせを云はうとは思はない。

また、今度のガス問題しきのもので、こんな破滅を見やうとは、さすがの三木君も思はなかつたことであらう。そこに三木君の市政に通じてゐない弱點があつたのだ。

しかも、ガス問題一度紛糾して、非憲政とも云ふべき市議の團體が先づ以て否決と腹をきめ、輿論も亦非常に險惡になるにつれて、さすがの革新會も「即決可決」の決心を放擲するのやむなきに至つた。横車の軸はわけもなくへシ折られた。

昨の傲慢にして、今の何ぞ貧劣なるやと云ひたい。しかもまた、革新會の否決の理由なるものがます／＼以て××たけだけしいではないか。

革新會の申し分に依れば、瓦斯增配案が「政爭の具」に供されるやうになつたから之を否決し去るのだ相だ。チャンチャラおかしいではないか。誰が東京市會に中央政黨の勢力をかくも露骨に持ち來たしたか。また革新會なるものが中央政黨の延長でないとすれば、何を苦しむで、市議を辭した三木君をいはゆる「御大」とし、あれほど烏合の衆を市議の團體として集める必要と理由が果してどこにあるだらうか。

×

最近になつて、都新聞のT君、時事新報のF君、萬朝報のT

君と云つた市政記者諸君の活動から、瓦斯會社の功勞株五萬餘株の行衛が問題になり出した。それが某々銀行に擔保に入つてゐるとか、某株式仲買店に出てゐるとか、かなり複雑な問題がおこつてゐる。

殊に、增配案がいよ〳〵市會に上程されんとした夕、市會の空氣が險惡になつて、敢えなくも流會となつた時に、市長は市會議場から出で、瓦斯會社の社長と會見してゐたとか、ぬきさしならぬやうな噂が丸ノ内附近にある。それは、しかしながら僕の知つたことぢやない。

そのころお氣の毒なことには、三木君は一身の不幸のため鄕里にあつた相だ。まことにお氣の毒千萬なことである。口さがなき京童は「三木君も落ち目だよ」などと無禮なことを云つてゐる。怪からんことだ。私事は公事と混じては斷じていけない。

唯、氣のせいか、參與官はやめる。革新會は三木君が表に出てゐては事ごとに面倒がおこるといけないから、これからは影武者にさせると云ふ。どうも三木にも冬枯れが來たやうに感ぜられるではないか。

からなつて見ると、さきに文筆言論の徒の仕事が小仕掛であるやうにさへ感じられたことが、そも〳〵とんでもない大間違ひなことであつたと思はれて來る。

元來市會のやうな、市民の日常生活のための仕事を議してゆく場所に、無暗に多數の人間が頭數を揃へて、横車を押さうと云ふ考が許すべからざることだ。

一人の市政に通曉し、正論を主張する人があれば、市會の委員會、市參事會などでうんと頑張ることが出來る。三人か四人でも、東京市會を本當に動かしてゆくことが出來ると云ふのが市會と議會との運用の異る所だ。中央政黨の力で自治體をかきまわしてはならぬ所以も亦たそこにある。

その位のことの道理のわからぬ三木君でもなかつたらうが、これも「苦節十年」の反動かも知れない。それと同時に、東京市民自身も、時の勢につられて、みす〳〵今日あることのわかり切つた革新會の市議をメチャ〳〵に當選させておいて、やがてまた筋書通りに失敗させて、罪をひとり三木君や革新會にばかり着せてすましておくことも出來まい。

×

要するに、三木君の失敗は、ガス問題などがどんなに進展してゆくかといふ點でなくて、不必要な黨人を、自治體のなかに澤山こしらへたと云ふ根本の點にある。市政は「大御所」氣取りでやつてゆくべきものでなくて、「忠僕」として働いてゆくべき所なのだ。

既成政黨と既成敎團

高島米峰

『父の棺前で、兄弟喧嘩でもあるまい』などゝ、ソラツトボケたことを言つて、三黨首妥協の、不純の動機を、胡麻化さうとする陋劣な心事は、もとより笑ふべきであるが、一體、三黨の黨人ばらは、お互に、兄弟だと思つて居たのかどうかゞ問題ではないか。不信任案を提出するといふまでには、ヤレ亂臣賊子だの、ヤレ不倶戴天の敵だのと、目くじらたてゝ罵り合つて居たのぢやないか。それも、畏れ多いことだが、先帝御崩御と同時に、さうした妥協が出來たといふならばだが、昭和の新政が始まつて、幾日かを經たる後に於ての釋明とあつては、その言譯くらい〳〵』

離合集散勝手次第とあつて、出處進退に毫末の節度のないのを、黨人の常態とするとは言へ、三黨首妥協の覺書の、墨痕未だ乾かざるに、早くも既に、憲本提携とある。政界の內情に暗い吾々には、全く以て、見當がつかない。しかし、朝に源氏を送り、夕に平氏を迎へると言ふなる、遊女生活の內情なんか、全く知らない方が名譽ぢやないか。畢竟、既成政黨の政策とやらいふもの、遊女の手管と、果して孰れぞだ。

言ふまでもなく、政治の要諦は、國利民福の外にはない。國利民福さへ可能ならば、獨裁政治だつて差支はない。國利民福が不可能だといふのなら、政黨政治なんか、河童の屁だ。イヤ、政黨政治が、必ずしも惡いといふのぢやない、日本の政黨政治なんか、やつとこの頃、實現したゞけで、今尙試驗中なのだ。その試驗がまだ了らないのに、もう呪咀の聲が聞えるといふのは、それは一體、政黨政治の罪なのか、それとも亦、既成政黨の罪なのか。イヤ、政黨政治の情弊だと言はれて居るところのものは、實は、政黨政治そのものゝ情弊ではなくて、政黨自身の情弊が、政治の上に現はれて來たのに外ならない。情弊の多い政黨に依つて行はれる政治、それを國民が呪咀するといふのは、寧ろ當然なことではないか。即ちそれは、政黨政治の本質を呪咀するのではなくて、その情弊が、やりきれないといふのである。マア、坊主憎けりや、袈裟までもといふ格なのだ。

政黨政治を肯定する以上、政權を掌握したいと思ふ政黨はどうしても、議會に於ける多數黨でなくてはならない。議會に多數の議員を送らうとするには、一にも二にも三にも、まづ先

きに立つのが金である。曾て、政友會が政權を握つたのは、その背後に財閥があつたゝめであり、近く、憲政會が政權を握つたのも、亦、その背後に財閥の力があつたゝめである。若し、財閥の後援が無いとなると、あれ程の歴史ある犬養木堂翁の國民黨でさへ、革新俱樂部となつたり、政友會に併呑せられたり、しなければならないやうな、憂目を見せられる。不信任案をつきつけられながら、解散も得しないといふのは、選擧運動費の調達に、成案が無いからであり、不信任案をつきつけながら、解散廻避の妥協の申込みに、待つて居ましたとばかりに應ずるといふのも、矢張り選擧費拈出の見當がつかないからである。今の政友會が、新總裁を迎へた當時、三百萬圓事件といふものが持上つて、大に新聞紙上を賑はしたのも、つまり、金これ權といふ、古い思想が新しく働いて居て、金力と權力とは、不可分なものだといふことを、證據立てゝ居るのぢやないか。即ち、政黨の盛衰だの、政治の消長だのと言つたところで、煎じ詰めれば、金力の多少とか、增減とかいふことになつてしまふ。だから、謂はゆる政黨屋なるものは、政權の爭奪に血眼となり、その政戰の軍資金を得やうがためには、手段を選ばない。黨利のためには、國利を犧牲にもする、黨員の幸福のためには、國民の幸福をさへ無視して憚らない。イヤ、それどころではない、詐欺でも横領でも、背任でも瀆職でも、金にさへなるなら、ドシドシ持つて來いといふのだ。憲本提携なんか、朝飯前のチョイチョイだ。

國利を犧牲にし、民福を無視し、自己を詐り、社會を欺き、私利を謀り、我慾を充たす。かうした連中に、我等の政治を委ねるのは、頗る危險だといふよりは、寧ろ、無謀だと言はなければならない。かうなつて來ると、僕でも、政黨政治に愛相が盡きて、寧ろ、獨裁政治を謳歌したいやうな氣にもなる。それは勿論、僕が惡い譯でもなく、政黨政治が惡い譯でもなく、全く、政黨者流が惡いのだ。彼等政黨者流の如何に我利我慾にして、如何に無恥、厚顏であるかといふことは、汽車無賃乘車券に對する彼等の行動が、最も適確にこれを裏書きして居る。仙石前鐵道大臣が、無賃乘車券の整理は、頗る機宜の處置だとして、世の好評嘖々たるものがあつたのに、獨り、議員だけが、新に法律を制定してまで、無賃乘車券を強要して、毫もこれを恥とも思はず、却つて揚々得意の色があるといふに至つては、その心事の陋劣さ。如何にも、政黨屋らしいものだと、心あるものは、顏をそむけて唾を吐かざるを得なかつた。世に若し、無賃乘車を許すべきものがありとするならば、宗教家、學者、美術家、若くは、常に、社會敎化のために、東奔西走して

居る若干の人々の如き者こそ、見逃すべきではない。然るに彼等議員輩、議會召集に際しては、往復の旅費は言ふまでもなく、多額の歳費まで支給せられて居るその上に、何のために、無賃乘車劵などを交附する必要があるか。しかも彼等議員輩、貪慾にして飽くことを知らず、この法則の殊遇をさへ不足だといふので、更に、歳費の增額を强要しやうといふ意向があるらしいが、苟も、國民の選良として、國利民福を念とするものに、どうして、そんな不埒なことが考へ出されやうか。

しかし、事實は何ものより雄辯であつて、全く辯護の餘地がない。世には、かうした時弊を洞見した達識の人があつて、政治の倫理化を說いて居る。それは勿論結構には相違ない、しかし、僕は、それより前に、まづ政黨の倫理化、政黨屋の倫理化を說くことの、更に一層急務であることを痛感して居る。それは、政治は元來、倫理的であるといふことを根本義として居るのであつて、これを非倫理的なものにしてしまつたのは、恰も、佛教は本來、純一無雜のものであるのを、末法の愚僧輩が、勝手に汚辱して、迷信をさへ伴ふに至つたといふのと、同じことである。

來年の總選擧、それは普選と呼ばれては居るが、實は、眞の普選ではない。しかし、それでも、選擧權擴張の結果は、有權者が何倍かになる。何倍かにはなるが、徹底的理想的普選が、大選擧區制と共に、實施せられるやうにならない限り、既成政黨の惡勢力を、どうすることも出來ない。たゞ賴みは、激增した新有權者に依つて、選び出される純情の新人が、その數を加へて、既成政黨の本質を變革するか、同時に又、他方に於て、無產政黨の黨員の多くが、議席を占めるやうにでもなれば、政黨政治に、一縷の望を屬することが、出來ない譯ではない。しかし、それは、勿論既成政黨の土崩瓦解を、豫想しての上のことであること言ふまでもない。

既成政黨と、殆ど同じやうに運命づけられて居るものに、既成教團がある。しかし、賣淫男の亡びざる限り、賣淫婦は亡びないし、利權漁りの出來る間は、既成政黨が亡びないのと同じやうに、お賽錢が上る間は、既成教團は亡びない。

新しい敎育を受けた坊さんの卵達が、心から、坊さんになつて、現在のやうな教團の中で、生きてゆかうなどゝ、眞面目に考へて居るものは、恐らくはあるまい。たゞ、教員にもなれず、巡査にもなれず、電車の車掌も勤まらないし、商店の番頭には尙更向かない、仕方がない、マア、坊さんにでもなつて居る方が、兎も角も、腹だけは減らないといふ、でもつきの考へから、猫を被つて、心にもないお念佛やお題目を唱へながら、

あはよくば、小金でも持つて居る後家さんでも發見しやうなどゝいふ、轉んでも只は起きないといふ聰明な連中が、少くとも九十パーセント以上もあらうといふ。かくて、既成教團は、當分安泰である。それは、既成政黨が、兎も角も、當分安泰である位の程度に於て。

强ひて、既成政黨を叩き壞はさなくとも、時の推移が、立派に片をつけて呉れる。從つて、既成教團も、亦强ひてこれを押し潰して仕舞ふにも及ぶまい。曾ては、僕等も、急いで押し潰した方がよいと考へて、隨分その方に努力したものだが、それは畢竟、時間の問題であつて、放つて置いても、早晩潰れるものだと見當のついた今日、なにも、餘計な力を費して、壞してまでやる必要はない。どうせ來年は、當然、總選擧なのだから、今年、解散するにも及ぶまいと、たゞ一日でも、議員たる壽命を延ばしたいと考へて居る、既成政黨の黨人根性を、そのまゝこゝに移してやるのも、お慈悲の一つだ。がしかし、現に、既成教團の中に生きて居る人達は、可なり氣持の惡いことであらう。イヤ、せめて、氣持でも惡がつて呉れるやうだと、まだ始末がよいのだが、いつも椽の下には餡が居るものだと、世相の推移なんか、全然眼中に置かないで、金が無くなつたら、御法事といふ奴を、興業しさへすればと、高をくゝつて居る闇々しさには、こちらの方が、氣持を惡くする位のものである。鐵道布設でもうけやうか、山林拂下でもうけやうか、といつたやうなことばかり考へて居る黨人ばらより、この方が、役者が一枚上かも知れない。

一口に、十萬の僧侶といふのであるが、一人一ケ年の生活費を、假りに六百圓とする。一ケ年に六千萬圓といふ巨額が、不生産的に消費せられて居るのであることを思ふ時、教團の經濟組織の改造なんかを考へるより前に、まづ、國家經濟の上から、坊さんの存在を、何とかしたいといふやうな考の方が、頗る力强く、頭の中を驅けめぐると共に、政黨内閣で、政務次官とか、參與官とかいふ、全く無用の不生産官を設けて、黨人の獵官熱を緩和するために、多額の冗費の支出を、平氣で居ることなども思ひ合される。

寺院もいらない、坊さんもいらない。と言へば、畢竟、既成教團はいらないといふことになるのであるが、そんなものが無くなつても、決して佛教は亡びない。政黨もいらない、黨人もいらない、と言へば、畢竟、既成政黨存在の意義が無くなる譯だが、そんなものが無くなつても、政治は亡びない。伊太利を見よ、彼にムツソリーニが居て、議員の半數を罷免してまで、獨裁政治のために、大に氣を吐いて居るではないか。寧ろ、既

成教團なんか、早く押し潰した方が、新に眞の佛教が興隆して來るのを早めるにきまつて居る。さういふ點から考へると、矢ツ張り、一日も早く、既成教團を押潰した方が、よいといふことになつて來て、結局、僕等が、昔からの宿論に立戻ることになる。既成政黨も同樣に。

世の、猫を被つて居る坊さん逹、及び、坊さんの卵達、虚僞の生活をして、佛を賣り、法を鬻ぎ、人を欺き、自ら詐り、良心の苛責にさいなまれて居やうより、男らしく、素つ裸になつて、眞人間の社會へ、飛び出して來る勇氣はないか。

と云つたからとて、僕のところへやつて來ては困る。この頃は、人が多くて、仕事が少なく、でも人足なんか、全く以て使ひ場がない。苟も飛び出した以上、自分の運命は、自分で拓くの覺悟が第一だ。それなら、矢つ張り『チーン、南無阿彌陀佛』の方が安全だといふのか。そこに、既成教團の危い壽命が繋つて居るのだ。『世間不景氣なるが故に、既成教團は生き延びる。』心細いと言つても、ここらが行き止りだらう。そうして、それは、勿論、既成政黨も同じことである。そこには、宗教の本質は動いて居ない。そこには、政治の要諦が眠つて居る。

中等學校の入學難問題

倉橋惣三

一

中等學校入學に關する現狀は、最も憂慮に堪えない問題である。第一、入學試驗に對する過度の準備的勉强が、兒童の心身に及ぼす恐るべき弊害、第二、此のために影響せられて、小學校教育そのものが被るところの遺憾なる弊害、共に、國民教育上見逃すべからざる重大問題である。此の中、第一の弊害に就いては、その如何に深刻にして戰慄すべきものあるか、更めて説明を要しない。入學問題に關する世論も亦、主として此の點を中心にして、喚起せられ、また痛論せられてゐるのである。而して此の弊害は、單に當面の悲慘事を發生するのみならず、その結果は、將來の國民生活の健全な充實の上に、どの位恐るべきむしばみとなつてゐることか測り難い。中等學校に入るべき年齡は、聊かも無理のない、生々潑剌たる成育を遂げさせらる

べき、貴重なる少年後期であつて、此の際に蒙る不自然にして意義なき心身の困憊は、蓋し、生涯の一大被害たらざるを得ないのである。愛すべき兒童等のために、情に於て忍び難きと共に、次代國民の强健なる生長のために、理に於て深憂たらざるを得ないのである。

しかも、此の第一の弊害と共に、決して輕視することの出來ないことは、第二の弊害である。すなはち、中等學校入學準備といふ、特殊なる狹き目的のために、小學校の全般的な廣い教育が、時に偏倚せられ、時に變則化せられ、少くとも、兒童教育の本義的完さに向つて、平然として悠々たり得ざることなきやの危惧である。いふまでもなく、國民普通教育としての小學校は、人として、國民として、一般生活者として、眞實なる人格的基礎教養を第一義とするものであつて、教科教材の知能的程度こそ低けれ、教育の全的均齊と生命發展性に於ては、嚴乎として破るべからざる任務を有するものである。之れがために、今日の教育研究が、小學校の課程として按排するところのものは、小學教育そのもの以外の便宜などを以て、一つとして濫に放棄閑却していゝものはないのである。殊に、今日に於ては、所謂教科課程の外に、日常の學校生活そのものに、多大の教育的重要さを認めて、之れを、つとめて豐富潤澤ならしむることを要求してゐるのである。すなはち之れを要するに、なる小學教育の効果は、六年の終りに於て、單に或る特殊なる、何かの準備に間にあふといふ樣な、屑々たることを期してゐるものではないのである。しかも、中等學校入學準備を對象として、之れがために、絶えず神經を過敏ならしめざるを得ざる如き現狀は、此の、洋々たり、堂々たる小學校教育の完成に對して、妨害とならざるも、餘計な苦勞たらざるを得なかつたりする危險がある。國民教育上、痛恨斯くの如きはない。實に、中等學校入學の現狀は、國民生活そのものゝために、深憂たらざるを得ないのである。

二

さて、然らば、此の問題に對して、如何にして解決を與ふべきか。要約すれば、如何にして、中等學校入學難を緩和すべきか。此の答へとして、正面の論は極めて簡明である。すなはち、入學志望者の數に應じて、充分の學校が施設出來ればいゝ。蓋し、我國現代の文化の發達に於て、中等學校の入學は、男女とも當然なる向學心の要求であつて、學校の施設が之れに應じ能はずとすれば、社會の恥辱である。萬障を排して、速かに增設の途を講じなければならない。しかしながら、現在の實

狀に於て、入學志望者にとつての學校の問題は、量の事實であるよりも質の事實であると稱せられてゐる。學校數の不足よりも、學校選擇の要求が、事を困難ならしめる主因であると見られてゐる。而して、入學すべき學校の選擇そのことは、兒童としても、家庭としても、極めて當然の心理であつて、理論としては、どこまでも愼重に、嚴選せらるべきものである。しかし、實際としては、玆に幾多の問題が考へ得らるるのであり、又、考へられなければならないのである。中等學校入學難に關する當面の一問題は、係つて此點に存すると言はれ得るかも知れたい。

ところで、此の問題は、おのづから二つの方面に分かれて來る。第一として、（イ）現在に於て、同種中等學校の間に、しかも嚴重に選擇せられなければならない優劣があるかといふこと、（ロ）若しあるとすれば、之れを如何にして解決すべきか（入學のためよりも、寧ろ學校教育そのもののために）といふこと等、學校の側に屬する方面。次に第二としては、（ハ）學校選擇が果して、どこまで確實なる根據を以て行はれてゐるかといふこと、（ニ）殊に、どこまで純教育的見地から行はれてゐるかといふこと、（ホ）假りに多少の優劣を考へた（父母として）としても、始めの學校と我子との關係に於て、どこまで周到細密に考慮せられてゐるかといふこと、（ヘ）殊に、入學難そのことゝ、どこまで實際的に考へあはされてゐるかといふこと等、兒童及び家庭の側に屬する方面。——之れ等は皆、現に行はれてゐるそれぞれの論議に於て、屢々考察せられてゐる諸點である。

學校の優劣の有無に就ては、公論すべき性質の問題ではない。人々見る處に任す外はない。又、我子に適する學校の選擇といふことに就ては、具體的に研究するの外はない。しかし、今日の實際に於て、入學率の困難な學校程、却つて多數の志望の的となるといふ風は、その選擇態度の反省としても、入學問題の事實上の解決のためにも、もつと靜思せらるべき必要がある様に思はれる。また、官公立偏重の風も、當面の入學緩和策としてのみならず、我國學校教育の社會的發展の爲にも、考へ直さるべき必要がある様に思はれる。一體、入學難の眞の解決は、應急的性質のことに止まらず、教育そのものゝ社會的に正しい充實と理解とを俟つて、始めて出來るもので、今日に於て、その意味での缺陷が、先づ多いのではないかと思はれる。歐米に於て、中等學校入學難の、こんな困つた問題の少ないのは、學校の數の多きにもよることであるが、此邊の、落ちついた理解が、社學的に進歩してゐる爲ではあるまいか。

三

次に、現狀に對して執るべき方法に就ては、それ〲の當事者の最も苦慮する處である。問題としては社會と共に考へる。しかし、實行は自己の所信以外の事は行へない。已むなく自己の所信に基いて行ふと雖も、社會的に、全體を見通した解決は、未解決のまゝに殘る。今日の中等學校當事者が、此の問題に對する苦惱は、實に甚しいものである。

現狀——敢て謂ふべくんば、此の變則なる現狀に對して、當然考慮せらるべき要件は二つある。第一は、入學難による兒童への痛々しい弊害を除去しなければならぬことである。之れに對して、入學試驗撤廢が叫ばれる。實に無理からぬ切實な叫びである。しかしながら、入學試驗を撤廢して、之れに代ゆるべき方法に就ては、未だ解決せられてゐない。その一案として、小學校の成績によるべしとする論がある。しかも、其の實行法は極めて複雜なる考究を要する。各小學校に於ける成績の評記は正確である。小學校長の報告は素より確實である。しかし、それを以て、對社會性をもつ入學選定の、普遍的準據とすることは、少くも其のまゝでは合理的でない。そこに實行上の難點が横はるのである。しかも、小學校の成績を主とすることは、實行上の困難の外に、小學教育そのものゝ獨自性から見て、重に考へられなければならぬことである。前にも述べた如く、中等學校入學問題の一つの重要なる要點は、之れがために、少しでも小學教育の獨自性を侵してはならないことである。今日の入學試驗準備は、確に此の點の危險を伴ひ易いとして憂へたのであつたが、小學校の成績——殊に採點的に表記せられた成績——に、小學校教育それ自體以外の通用價値を重からしめることは、小學教育のために、可なりの弊害の因となるべきものではあるまいか。兒童教育上の一見解に於ては、今日のまゝでさへも、成績主義が小學教育の邪魔になることがあると考へられてゐる。小學校は、兒童の心身の眞價的發達を完からしめると共に、各々の個性に即した教育効果を期すべきである。そこに、個人を個人としての評價が行はれるので、他との、殊に社會的に廣義な、他との比較材料となるには、餘程性質を異にしたものである筈である。此の事實を明かにせずして、萬一にも、小學校教育そのものゝ間に於て、中等學校入學競爭の關係を生ぜしめる樣な傾向の伴ひ易い方法は、餘程愼重に考へられなければならぬことである。

選定の第二の要件は、公平といふことである。彼の多數の入學志望者の可憐なる熱心に對して故意の不公平が出來るもので

ないのみならず方法上の不合理から生ずる、無意の不公平も決して許容さるべからざることである。如何に兒童目前の弊害を除き得るとしても、均等の公平を缺き易い方法は、到底用ゐられないのである。而して、かういふ場合に於ける公平とは、單なる機械的、乃至運命的公平でなくして、實價的公平でなければならない。彼の入學試驗に代ゆるに抽籤を以てする案は、現在の諸弊害を避け得て、しかも機械的に公平的なる點に於て、窮餘の一斷案たるに相違ないが、未だ斷行に躊躇せざるを得ない所以がこゝにあるのである。既に自己の力を以て立つべきことを學んでゐる少年少女として、斯くの如き大志望の成否が、偶然的に定めらるゝことは、恐らく滿足し得ないことであらう。

四

以上、説いて何の結論に到らず、徒らに此の問題の客觀批判を試みてゐるようであるが、論者の切實なる希望が、解決にあるは言を俟たない。玆に、此の錯綜的に考へ惱まされてゐる問題に、多少の順序を立てゝ見たのも識者の一層の考究と教示とを促したい爲である。餘りに痛々しい目前如實の弊害に對しては、多少合理的でなくとも、兒童さへ救へればといふやうな氣にもならふとする。しかし、實行としては、矢張り、方法の合理性を棄てることは出來ない。そこに惱みがつゞくのである。而して、今日では、入學試驗は行ふが、其の方法——主として問題の定め方と試驗の仕方——の工夫によつて、出來得るだけの緩和を計らうとする處に止まつてゐる。しかも尙現狀斯くの如し、一層深い考究の急務があるのである。附け加へて置きたいことは、此の大問題に對する從來の討究が、時には偏面的であり、放論的であつたりして、社會的に充分組織立てられた研究を經てゐないかの觀あることとである。之れ實に遺憾の至りであつて、その論決は必ず實際上に力を有する如き機關によつて、一日も早く、統一的解決法が立てられなければならないのである。

これが復興の東京か

鈴木文史朗

○

復興後足かけ四年を經過した今日になつて、「帝都の復興

きは何を意味するかゞ略ぼわれわれ素人にも見當がついて來たやうだ。それは震災前よりも更に遙かに無雜、不調和、沒個性的な都となりつゝあることだ。東京を愛し、東京に帝都としての面目に應はしい外觀內容を少しでも多く持たせたいと希つた者には、せめてあの大震災といふ大禍の中に、東京を近代日本の帝都の名に恥ぢない。少くともそれに遠くない帝都に改造する千載一遇の機會を見つけたといふのが唯一の喜であつたらう。實際、あの大震災を轉禍爲福となすべき唯一の事業はこれ以外にはないと、心ある者は皆感じた事に相違ない。復興院や復興審議會が燒け跡の內閣に後藤子の例の大鳴物入りで作られた時は、國民は兎に角それに期待した。事實當の後藤子は、ビアード博士を招來するやら、復興院を一省並みの大規模のものにするやらして、可成り徹底した都市計畫を遂行しやうとしたらしい事は分る。市の中央外廓を從橫に貫通する幹線道路、十字路、放射線、無數の大小公園等が三十億案で發表されたが、それも紙上の一夢で內閣の倒れると同時に復興院は內務省內の復興局となり、三十億案は四億案かになつて、おまけに復興局は疑獄の本山の異名となり、市民はも早や復興計畫とは橋を架ける事と道路をひろげてアスファルト敷きにするだけのことだとしか思はないやうになつて了つてゐる。

○

後藤子の三十億圓復興計畫は、當時の復興審議會の固陋な年寄り議員や、都市計畫といふものに何等の理解のない一般の人々から「又例の大風呂敷」といふ冷笑の下に葬り去られて了つたが、少くともこの尨大な豫算の裏には帝都百年の大計を樹てるといふ意氣の盛られてゐた事だけは見てやらねばならない。復興院が復興局となつて、帝都復興の事業が內務省や東京市の區々たる屬僚の手で遂行されるに至つた結果は、單に燒け跡の町內的の問題たる區劃整理と道普請と橋の架け替え以上に何人にもない事になつて了つた。帝都の面目の改造とか百年の計とかいふことは、かういふ一部局の屬僚に期待する事は寧ろ間違ひで、實は時の政府の第一の事業である可き筈である。然るに歷代の內閣諸公の頭には、そんな事はてんで問題になつてゐない。彼等は普選や、社會政策や、軍備や、三頭首の申合せや、憲本聯盟やに沒頭してゐるが、日本民族の中心都市が焦土に化した後にどういふ形を再生して來るかといふ事などは、彼等のやつてゐる政治とは全く無關係なものである事だけは確かである。其の結果はどうだらう。震災後四年を經過した今日を以て、以後を判斷するとすれば、東京は交通の上からは依然として全

く中心のない、外觀の上からはアメリカの殖民地タウンの場末が無限にひろがつたやうなものとなりつゝあるのである。

○

復興局や東京市のお役人がこの四年來造營して來た公園、橋、建物などを見ると、丸善へ新荷着の建築雜誌の中の、ハシりの考案設計がいかに自由奔放に採用されてゐるかゞ分るだらう。復興の東京は根本的の復興計畫を中止挫折したといふ大失敗をなしたに止らず、之等の永久的な造營物の改築に於ても、餘りに不注意な滑稽を目下演じつゝあるのである。それは都市美、都市の傳統、環境、調和等に對して全く無關心と思はるゝ幼稚な技術家等が、自分等の實驗臺に東京の造營物を使用しつつあるとしか思はれない。比較的愼重なる可き官廳に於てもこの通りであるから、一般民間の建築に至つては全く百鬼夜行である。これに加へて、街路に面する家屋の大部分を塞いで居るペンキ塗りの廣告板、市內だけで合計十萬本と算せられる電柱（秋田の國有林なみに一町歩六百本の割で植ゑれば約百五十町歩の大森林となる）、白晝汚穢車の行列を必要とする下水問題等も今以て、震災前と何等の變はりはない。バラック建物に至つては、腐るまで放任の他なく、又本建築には耐震耐火を必要條件とすると言つても、實際には大部分は不可能であることは、警視廳の當局者が最もよく知つてゐる。交通運般機關の、電車、自動車、馬車、自轉車等の混雜、亂脈は數の增すに連れて益々甚しくなつて行く實情にある。

○

これが「復興の東京」の姿である。これに就いて最も怖る可きは、市民の大部分が、その醜怪さに全く慣れて、それを自覺しない事である。あらゆる不調和、蕪雜、非衞生が組織的に官營されて居る結果、批評力なき市民の大部分はこれを通常當然のことゝ見て了つてゐる。立派な都市計畫の下に成された『美しく調和ある都市の外觀に對するといふものは、市民の趣味を高め、愛都心、惹いては愛國心を助成せしむる許りでなく、お互ひのもつ善惡の目安といつたものに迄影響を及ぼすに至るものである』（フランク、ケスター氏の都市計畫に關する說）とするならば、東京市は正に其の逆を行ひつゝあるものである。

言論や出版等に對しては不必要な取締りを勵行する政府が、帝都の復興事業を事實上少數の若い技術者等の氣まぐれに放任してゐるといふのは、今の政治家とか大臣とかいはれる人々の頭が、都市計畫の重要性を理解する想像力の皆無な結果で、

現在日本の由々しい問題であるといはねばならぬ。なぜなら、惡法は議會で又正す機會があるが、帝都を形成する永久的の造營物は一度建築されゝば、事實上改築は不可能であるからである。

○

私は無論建築家でもなければ、都市計畫の專門家でもない。そういふ問題に對して全くの門外漢である。併し、素人であるだけに却つて、東京市内を歩き廻つて見て、その全體としての不統整、亂雜、不調和が眼について耐らない。時々の思想問題とか政治問題にはいつも熱狂的な興味を示す識者や一般市民が、この我々の子孫の日常生活に永久的な關渉を持つ問題に對して案外無關心なのはどうしたワケだらう。識者はもうサジを投げて了つてゐるせいであらうか。普選問題で國民的運動が起きたり、三黨首の申合せに對し輿論が叱責の聲を放したりするなら、この醜惡な帝都復興の實現に對して、國民――尠くとも東京市民の抗議が市民大會の名により提出されてもいゝ時であらうと思ふ。燒失前の議會の建物が出來て間もなく、内部を參觀してイギリスの或る批評家は「こんな威嚴のない安つぽい建物・の中で國政を議する日本の議員達は墮落するだらう」と言つたといふ事だ。その言葉はそのまゝ東京市民、或はどういふ人達をいたゞく日本國民の上にも適用出來るだらう。

出版資本主義と著述家

新　居　格

昨年の出版界には講座物、叢書、全集の類の出版が相亞いで行はれた。その傾向は本年になつて更に廓大され助長されて一層大規模に計畫され出した。結論的に云へば出版業者がその出版對象を所謂讀者階級より擴衍して全社會的にと云ふ所まで持つて行かうとしたのである。そしてその覘らい所は差當り相當に當つたらしいやうである。需用が供給を吸收する餘地があつたからでもある。低廉價が購買心を唆つたからでもある。その二つの理由が出版物そのものを必要とする要求よりも正直に云ふと強かつたのではないかとも思はれる。

しかし私の云はうとする點はそんなことではない。私の指摘せんとすることはこの國の出版界にもいよ〳〵資本主義らしい資本主義が確立しかけたのであると云ふことである。

何故そう云ふのか、昨今の出版形態はなるたけ低廉に品物を供給する。從つて大量生産の形態を取る。販路の擴張を要する。そのために曾つて見ない宣傳を要すると云つた風の意味で。

出版は他の經濟現象に比して最も遲れて不況も好況をも生起する性質のものである。だとすれば出版界そのものは最も遲れて資本主義が完熟する所であるとも云へなからうか。最も遲れて資本主義らしい資本主義の來べき所に遂にそれが來たと思はせられることはこの國の資本主義が全般的に成熟したことを豫想させるよすがにもなる。だが、それは茲では別論としたい。

出版界が大量生産時代に這入りかけた。而してその結果は二方面にあらわれるであらう。

その一つは資本主義經濟の通則に從ひ大規模生産が小規模生産を壓倒することとである。

小資本で發行部數の局限された小出版をしても生産費の關係でそう低廉價にもならず、廣告力も足らない以上購買力を喚ることは出來ないのは當然である。だから大規模生産には到底對抗が出來ない。たゞ特殊的な讀書階級の需用に應ずる出版例へば、專門の學術書、無産階級意識の强烈な人々にたいする主義の書物、或は定價は低廉でない計りでなく却つて極めて高價でも美裝で快適で著者も高踏的で高雅なと云つた風の綺麗な本等がそれらである。右の三つのうち第一は學徒の立場からの必需から第二のものは主義的熱情から、而して第三のものは藝術至上主義的耽美とかブルジョア好みとかからそれ〴〵に或る範圍内の讀者は持てるのである。

小規模の出版はそれを覗ふより外はない。そして一旦大規模の生産を指目して前進し出したものはいくら確實であり得ても些少でしかあり得ない利潤のために、小規模な單行本の出版に手數をかけることが段々物足らなくなり、次ぎから次ぎへと大規模な出版計畫を追つて行くことになるであらう。

出版が大量生産の形態で行はれ出す第二の結果は著述家にたいする影響に就いて考へられる。私の本稿は主としてその方にたいする考察である。

全集もので出版業者が素晴らしい利潤を得たとする。その間接的な影響が著述家の方へめぐつて來て舊作や舊譯を提供した丈で何萬圓と云ふやうな巨額の金が這入るとする。するとそうした著述家はまるで大會社の重役が葉卷を燻らしながら、巨額の配當を受取るのと略似て來る。それはそれでいゝとして、次ぎにそうした大規模生産の出版と關係のある著作家は景氣がよくなつて來るが、そうした出版關係から除外されて立つ著述家はいろんな點でより悪るい狀態に置かれる。その間には必然的

に差異が生じて來る。これまでの差はそんなでもなかつたものがかなりひどく距離を生ずる。少くとも前者はプチブル的位にはなる。と共に著述家がほんとうの意味での文筆勞働者になつて來る。言葉を換へて云へば、出版資本主義に受け入れられ、幸され好遇される著述家とそうでないものとの間には生活意識の上に自らなる階級の異差が生じて來るであらう。

　そうなつて來ると出版資本主義に反位的な文筆勞働者は實際生活の上に考慮をし初めねばならなくなる。

　勞農ロシアに於ける消費組合が書物を出版する場合にはその利益を均等に分配するかのやうに聞いてゐる。その組織のやうに文筆勞働者が相倚り相集まつて各自のものを出版し、どの本が多く賣れ、どの本が少なく賣れても均等に利潤を分配して各自が各自の生活を顧慮し合ひ、生活の相互扶助を計る方法が執られるやうになるかも知れない。尤も今の所そうした組織は資力の殆どない文筆勞働者には不可能でないまでも頗る困難であり、よし幾人かゞ相集まつた所で若しもその人達のものが賣れる可能性が乏しければ均等の利益の分配にはならないで共同の不利益の分配に終るより仕方がない。で、そこには自覺したそしてその人の作品ならば相當に賣れると云ふ認定のついた著述家の自己犧牲がなければならぬ。それは丁度勞働組合の闘士が犧牲に排ふやうに、文筆勞働者の共同出版組合[illegible]る。共同出版組合はその形態上勞働組合乃至消費組合（その生産組織的方面のだが）的形態に發展しなければならぬ。

　著述家の間にいろいろの意味での協會なり組織なりがあるのにはある。がそれは何れも同業組合的のもので會員間に不幸があつた場合に弔意を表すとか、著述家に共通の利害を主張したり擁護したりする以上であるとは思はれない。共同出版組合による出版利益均分の制度の如きはまだないのではないかと想像される。が、そうした組織が漸次考案され計畫される時代も著述家の間には來るのではないかと私には思はれる。

　約言すれば、出版資本主義の確立にたいして小出版業者の特殊出版傾向と、著述家自身の組織に成る共同出版組合とが結果して行くのではないだらうか。これが大量生産的出版時代の到來にたいする私の見解である。

　それから、出版資本主義とプロレ論客との關係である。プロレ文筆勞働者は文筆によることを唯一の生活手段にしてゐるが故に、筋肉勞働者がその勞働力を資本家に賣つて生活してゐる如く、原稿を出版資本主義者に賣つて生活してゐるのである。だから出版資本主義は最も苦手であるとしなければならぬ。無産派文藝家がブルジョア文藝を攻撃することは思ひ切つて痛快

にも適れ、また廣く資本主義の不合理な機構を摘發するときには勇敢にもなれるが、出版資本主義は直接に自己の生活と關涉をもつものであるからそれにたいする反抗は生活手段の抛棄を覺悟しなければならぬ。文筆を投じてまで出版資本主義に當りうるプロレタリア論客は他に生活手段がない限りかなり閉口することである。その點で若干の遠慮と妥協とが生じがちである。

これまで（今だつて無論）ブルジョア作家が居た。そしてブルジョア生活形態に暗默のうちに肯定して、ブルジョア雰圍氣に温日の如く馴れて作をなしてゐた。それをプロレ派は攻撃してゐた。しかし、出版資本主義に幸されたブルジョア作家は彼等のもつ世界觀、社會觀、文藝觀がブルジョア的である以上に、實際生活の上にも即ち物質的にも惠まれて來た。少くとも惠まれようとしてゐる。そこから發生する二つはこれまで觀念的認識的の範圍（それ以上に生活意識的でもあつたにはあつたが）をあまり多くを出でなかつたが、出版資本主義の出現と共に、生活意識的に深かく懸隔するであらう。從來のプロ・ブル論は議論は兎に角、二箇の生活内容はさまで違はなかつた。違つた點があつても、違はない點がより多かつた。即ち文士は文士であり、著述家が著述家であると云ふ意味での出血が多過ぎた。原稿收入の多寡が生活により多く自由さとより多くの不自由さを結果した位に過ぎないのではなかつたか。

だが將來は明らかに出版資本主義（それも程度問題だが）に歸屬する存在と歸屬しない存在とが著述家間に（さう明かにはないまでも）生ずるであらう。そこへなつて來てプロレ文士の議論も生活的になるのではないかと私には想像される。そこになつて來て初めてプロレ文士に文士的浮遊要素が薄れて生活に根ざした眞劍の議論が發生すると共に、そこで初めて文士がほんとうの意味での文筆勞働者になるのではないか。

資本主義らしい出版資本主義は登場した計りである。これからそれらはその完熟に向つて前進して行くであらう。餘地がある限りに於てその分野を爭ふて開拓して行くであらう。かくて印刷文化は洪水の如く擴がるであらう。

だがそれだつて限界がある。書冊の生產過剩期も來やう。はけない書冊が山の如く堆く積れたり、いくら努力しても豫約募集が豫定の半にも達しない時代もあらう。多くの出版資本主義による競爭はどれかの一つが傷くことで需要の飽和狀態に達したとを知り、それをきつかけに出版界の混亂もあるかも知れない。

書物は人生に有用ではある。しかし、購買者の財力は無限でない。

は文化事業で文化を普及すると云ふ理屈にもなる。だが、曾て見ない多數の購買者を得たことは直ちに文化が普及することにはならない。それは購買と讀書とは同義語ではないからである。

尤も出版業者は購買力の多寡が問題になつてもそれを讀む讀まないと云ふ購買後の結果に就てまで考慮を拂ふ必要はないかも知れない。またさうした考慮は不可能であるかも知れない。しかし、それだからと云つて賣らんがための宣傳だけに意を注ぐだけでいゝとは云へない。低廉だけがいゝのではない。質的にいゝ出版の撰擇が望まれもしやう。そして第二期の競爭期は專らその質的な轉歩をも執らなければならなくなるであらう。

われらとしては漸く大量生産的になつて來た出版資本主義と社會情勢とを考察することに興味を持ちたいのである。

政局のハンドルを握つたつもりの 床次君

澤田謙

昭和になつて、政局は、三段返しの人形芝居をみせてくれた。政本提携、不信任案提出、停會三日間。——その緊
クライマックスで、舞臺がドタンと引つくりかへつた。——三黨首の密會、妥協の密約。「公明なる政治」が引拔きになつて、舞臺が廻ると、憲本聯盟といふ大芝居だ。

ちよつと連鎖劇じみるけれども、めまぐるしく舞臺の趣向をかへて、國民の嘲笑を買つてるところは、なみ〳〵ならぬ手際だが、その作者は誰であるにもせよ、舞臺廻しのハンドルを握つてゐるのが、わが政友本黨總裁床次竹二郎君であらうことは、近ごろ喧しい噂である。

× × ×

「あれは君、觀兵式の指揮官だよ」と、人の惡い微笑を洩らしたのは、麻布の大御所後藤新平君だつた。なるほど、總選擧などといふ正劇ものでは、から意氣地がないけれど、喜劇になると、ちよつと味なところを見せる。三黨首が密會場から立ちあらはれて、密約狀を示す。何ごとならんと片唾をのんでゐると、物々しく密封を切つて讀み上げたのが『これから公明なる政治をしませう』には、見物がドツときた。「公明政治の密約」などは、ちと悪落ちではあつたけれど、こんどの憲本聯盟は、たしかに傑作である。この邊で、國民が、既成政黨に愛想をつかさなくては、まつたく國民の方がわるい。既成政黨の方で

は、床次君をはじめとして、大童になつて、自分たちのはいる共同墓地を堀つたのだから。

が、いゝ氣持なのは、床次君だらう。計略圖にあたつて、いよ〳〵、總理大臣の夢がみられる身分になつたのだ。夢だつて、まんざら、捨てたものではない。

× × ×

こんどの憲本聯盟で、一ばん痛快だつたのは、しばらく行衛不明になつてゐた「政策」が、忽然として再び姿を現したことだ。

たしか、その昔、政本が提携して、不信任案を提出したとき、それは「政策本位」の提携だつた筈だ。ところが、四十分間、三人の男が密會した刹那から、この「政策」が雲隱れしてしまつた。豫算は鵜呑みだといふ、政策論議無用だといふ。議會に沈滯の氣が支配した。「まだ議會はあるのかね」といふ奇問が發せられたのは、このときであつた。しばらくは、政治が、「政策」ぬきで、進行したのだつた。

その迷兒の「政策」が、歸つてきたのだから、嬉しいではないか。三週間前に、政友會と政友本黨とを結びつけた「政策」、その同じ「政策」が、こんどは憲政會と政友本黨とを結びつけたのだ。世に「政策」ほど、變通自在なものはない。

× × ×

憲本聯盟は、「政策聯盟」だと、床次君も若槻君も、公言された。その綱目をあげてみやう。（一）對支外交上の根本政策、（二）教育制度の根本的改善策、（三）義務教育費の根本方針、（四）金解禁問題、（五）電力國有問題、（六）人口食糧問題、（七）一般經濟政策。――なんと堂々たるものではないか。何がでてくるか、樂しみにして待つてゐる。

尤も、總選擧までには、一年以上まがある。「政策」とは、元來が總選擧專用のものだ。それまでは用のない金看板だ。それがすめば用のない金看板だ。急ぐことはない。ゆる〳〵やらうといふので、憲本聯盟は、「政策」の共同調査をはじめることにした。春の日永に、充分研究することになつた。

まちがへてはいけない。政策が一致したから憲本が聯盟したのではない。憲本が聯盟したから政策を合同するのだ。これを憲政の常道といふ。

× × ×

が、それにしても、あまり悠つくりもしてゐられぬことがある。それは、九月には、府縣會議員の改選があることだ

わが床次君は、どう思つておられるか知らぬが、憲政會だつて、まんざら素人ばかりではない。九月に府縣會改選があるくらゐのことは、承知してるだらう。そのとき、政友會に攪き倒

されでもしては一大事だ。すくなくとも、九月までは壽命をのばしておかねばならぬといふので、床次君の本黨と、政策聯盟をつくつたといふ噂だ。

目標は九月、九月がすむと、政局はどんな變異をみせることか、私には解らない。なにしろ、日本の芝居には、廻り舞臺といふものがある。油斷はならない。

政局のハンドルを握つたつもりの床次君。忘れても、手を離してはいけない。泣いても笑つても、來年の五月には總選擧がある。心細くつても、手を離してはいけない。

× × ×

政治は戰だ。選擧戰だけではない。政治そのものが、一つの戰だ。

そして、わが床次君は、偉大なる平和主義者だ。床次君だけではないが、その雄なるものが床次君だ。解散はいやだ、選擧は性分に合はない。議院のなかで、國民の前で、公然とする政治戰なんか、まつぴら御免だ。平和のうちに、談笑のうちに、政局のハンドルを廻してゆくのが、平和主義者の眞諦だ。

だつて、いざ總選擧となると、本黨なんか三十名くらゐになつてしまふからなあ！などと言ふ人もある。だから床次君が平和主義者になつたといふのか。われらは理由を言つてるのではない。こんどの總選擧は、普通選擧だ。何となく氣味がわるい。一たいどうなるのか、見當がつかぬ。――それは本黨だけではない。各政黨ともさうだ。何故、床次君のことだけいふのか。

いまの政黨は、擧つて平和主義者である！

× × ×

が、どんなに偉大なる平和主義者といへども、總選擧となれば、戰はぬわけにはゆくまい。それが「政治家の實に苦しいところ」ださうだ。

それまでには、實に立派なる「政策」が、行列することだらう。床次君發明の、共同調査政策はいはずもがな、政策の金看板が、美々しく飾り付けをすることだけは疑ない。昨年の冬、解散風の吹き荒れたときぐらゐ「政策」の流行したことはなかつた。田舍廻りの代議士候補までが、大いに「政策」を吹きたてたものだ。こんどだつて、これに劣らぬ盛況をみせるであらう。

しかし、どんな「政策」がとびだしたつて、國民はちつとも驚かない。その「政策」は、四十分の密會で、雲遠霧消するほど、しかく便宜な「政策」だといふことを知つてゐるから、決して驚ろかない。次第によれば、宙返りして憲本聯盟になる

「政策」だといふことを知つてるから、決して驚ろかない。驚ろくべきことは、ほかにある。

× × ×

まことに驚ろくべきは、若し一年の後にいたつて、既成政黨がまだ、政局を支配してゐたときである。そしたら、ほんとに驚ろいてもいゝ。既成政黨の厚顔さにではない。國民の健忘性にだ。だまされても、だまされても、平氣の平左でいゝ氣になつてる、その國民の無恥についてだ。

實のところをいふと、いまの政局が、どう動かうと、われらの關するところではない。床次君が、どうハンドルを動かさうと、そんなことは驚かない。もはや喜劇では驚ろかない。欲するのは悲劇である。偉大なる悲劇である。

いまさら、政治學の講釋なんか、いさゝか手後れだらう。ほんとの政治教育は、實際政治による實物教育だ。それから始めに直してかゝらねば、口や筆でいくら説教したつて無駄だ。「思想善導」の一番いゝ方法は、實踐窮行にある

× × ×

わるくすると、床次内閣ができるかもしれない。さういふ噂だ。これを「たらひまはし」といふ。しかし、いつまでも、政局のハンドルを握つてゐたのでは、舞臺だけは廻つても、自分は依然、椽の下にゴミをかむつてるだけではなからうか。

政局の表舞臺に躍りだすには、一つの「勇氣」が必要だ。「決斷」が必要だ。總理大臣になれるんだから、そんな甘い話に、決斷もくそもあるものかといふのは、素人のいふことである。いざといふ場合に、乾坤一擲の大ばくちをうつ度胸でなくては、天下の主にはなれない。いまの内閣が、ずる〳〵に續いてゐるのも、この「決斷」が、この「度胸」が、いはゆる政治家にないからだ。床次君だけではない。黨内黨外の政治家に、それが欠けてるからだ。豫言はいやだが、床次君が、いつまでも、ハンドルに噛りついてる間は、床次内閣も、前途遼遠だらう。

× × ×

議會もまもなくすむ。政治季節も、三月一杯だ。政治季節がおはれば、スポーツ・シーズンだ。壯快で男らしいスポーツの時季を、われらはまち望む。

暗くて女性的な政治は、國民をいぢけさせ、狡猾にし、退嬰的にし、憶劫にする。政治に、スポーツマンシップが入つてくるときが、日本人の大國民になるときだ。それまでは、岡田文相には叱られるかもしれないが、スポーツでも觀てゐた方が、よほど國のためになる。

しからば、政局のハンドルは、しばらく床次君にまかせてお

いて、われらは、野球と庭球と競走と水泳に熱中しやうではないか。いま一年すれば、いやでも、總選擧があるんだから。（一九二七・三・二）

禁壓か良導か

千葉龜雄

「一利を起すは、一害を除くに若かず」といふ支那の諺があるさうな。が、「一利を起す」よりも、「一害を除く」のが有効なのであるか。それとも、「一利を起し」ながら、「一害を除」いて行く方が有効なのであるかは、こゝ「深甚なる考慮」を煩はすべきもので、そう手取り早く、解決がつけられるべき議題ではない。また、あつてはならない。

昭和七年ぎりで公娼を廢止する。いや、廢止したい。廿五歳以下の靑少年の禁酒令を出す。十五歳以下の少年少女が、活動寫眞を觀ることを禁止して了ひたい。男女學生が、スポオツばかりに熱狂するのは怪しからぬ。ことに女子の「あられもない」競技すがたは、「醇良なる風俗」を侵害するものだ。いや、たんだ、かんだ。「一害を除く」ことに熱心である點では、わが國の今日の如きは、おそらく歴史に記録されても大したヒケを取らない時代であるかも知れない。東洋傳統の Don't の儒教精神が、爭へぬもので、いつまでも時代の底を潜流して居る。そして、間歇的に、時々、噴泉のやうに姿を現はして來る。

が、かりにもそれが「害惡」であると見做されるものである限り、その「害」を防止することに、正面から誰一人異議を唱へる人間がある筈がない。だから、性生活を、信仰生活によつて補償し得るやうな、篤信な老孃達が、公娼廢止を力調しやうとも。もしくは、四六時中酒樽のやうになつて、好い年をして、醉ぱらひのゴシツプばかりを、新聞に放散して居る議場から、靑少年禁酒取締り法案が出やうとも。また、醉つ拂ひの末がつかみ合ひの大喧嘩をして、それが有名になつて居る人達が、少年少女活動寫眞觀覽禁止を申し出さうとも。乃至は、現代における競技の實際などには、出來るだけ接觸する事を避けて居ながら、むやみと競技の禁止ばかりを雨下しやうとも、それが假りにも、「害」であるとして符牒を貼られて居る限りでは、「害」を除くのに苦情を申し立つべき筋はない。尤ともその「害」と認めるものが、作りやう、「害」ばかりであるか否かの議論立ては抜きにしてだ。

困つたことはかうした人達が、若干の「誠實」と「熱心」さへあれば、どんな社會的「害悪」でも、即座に絕滅し得るといふ觀念である。こんな見當違ひな話はない。かりに彼等のいはゆる「害悪」を「害悪」として見て、その害悪を除き得る唯一の適藥が、「誠實」でも、「熱心」でもなくて、實は「實感」であるのを知らないのは大きな損害だ。話は下賤に落ちるが、道樂息子の道樂を止めさせるものが、粋な叔父さんの捌であつて、頑固な金柑おやぢの勘當でない譯がそこにある。

元來、これこれの事項が宜しくないから、これを禁止するなどいふことは、大した智慧人や、大器量人を必要としない。その邊の、木偶の坊でもそれ位ゐのことは云へるのである。大切なのは、それがどれほどの効果を與へるかでなければならぬ。一體「害悪」が大きな「害悪」となり、社會公益を傷けるものとして、法律で禁止せねばならぬやうになるには「害悪」は、そこには必ず、それを「害悪」までに至らしめるほどの、人間慾望の、何か知ら大きな要求があるからであらう。性慾がどうの、飲酒がどうのと議論したところで、それが人類必然の慾望でない限りは、大それた「害悪」などに間違つてもなる筈はない。ところが、慾望はもちろん彈壓しても彈壓し切れるものでないし、第一、慾望はもろ刃の劍である。この慾望が正しく培かはれて行くところに、また人類の進歩と飛躍もあるのだから、それを殺して了つたら、人類が人類で無くなる。で、もし、慾望の歪んだ迸出が、「害悪」までに墮落して行つたにしても、その「害悪」を止めることは、慾望そのものを滅ぼすことではなくて、必らず慾望を正しい途に導くことでなければならない。粋な叔父さんが成功する奥の手がそこにある。金柑あたまの頑固おやぢが、むやみと息子の慾望を彈壓しやうとして、かへつて極度の反抗をまねぎ、はては途法もない兇事を仕でかす。しかし、事情が一切わからぬから、どうする譯にも行かなくなるといふ理窟がまたこゝから來る。今日の「一切爲す勿れ主義」の信徒にも、どうかするとそうした實感を伴はないやうな、空虛な改良意見が無いと言へるであらうか。彼等が、道德や、人道主義やをいくら叫んでも、人類の生活には、道德や人道主義の要素ばかりでおつかぶせられぬところの、生理的、心理的な超意識的なものがある。そこまで親切に見てやつて、代價の方法を考へぬ分には、たとへ、目指す一つの害悪は、われらの視識の上からは消えたやうに見えても、必らず變つた形で、芽生えて來ることをいかんともし得ないであらう。

いくたの改良主義の傾向の他の一つには、またかうした類も認められる。時代の行き方が、かうした傾向を、もしくは、一時

惡」と認められるものを、當然に作り出したといふ意義を彼等が先づ胸に入れることをしない。たゞ今までに無かつたものが、にはかに素晴しい社會的勢力となつた。そこからいろ〱な害毒が生れる。すると、「今まで無かつた」ものが、今「存在」することを直ぐ不合理だとして、今まで無かつた通りに、全く「無くして了ふ」のを、至極當然だとするやうな考へ方である。これも、誠意には敬服するが、殘念ながら、その目的は達せないであらう。そして、どうかすると時代盲の酷口を受けるかも知れない。百人の力を以てしても、呑まうとしてない馬に水を呑ませ得ぬ。が、呑まうとする馬は、一人の力で呑ませることが出來るのだ。自然な必然性に逆らうものは、機械力を空手で止めやうとするものと同様に、成功しないばかりか、自分自身が破滅するであらう。で、成功の秘訣は、たゞ盲目な時代の進まうとする力を、合理づけ、正しい途へ導いて行く一法のみにある。孔孟の教へた教義がかうであつたからとて、シネマとラジオの享樂時代に、秦漢の音樂を強いたところで、何の足しになるものか。爲す勿れ主義の根本の多くの中には、時々かうした時代錯誤がちらちらと見える。と云つて、われ等は時代の力に盲從するものではない。たゞ時代の力は、決して盲目なものではなくて、實は、時代人類が意識せずに作つて行くところの、共同要求の一部の表現であるといふことに、多分の眞理を或る點まで認めやうとするだけの話なのである。

そこで、實感とは何であるか。言ひ古された言葉で云へば、「人情味に通ずる」ことである。人の痛さも、痒さも分つて居ることである。どこの國でも、政治家の成功のコツは、人情味に通ずることであつた。いや、政治家ばかりではない。すぐれた思想家とは、みな、かうした共通感情を、最大限に擴大し、最大民衆の感情を滿足ならしめ、幸福ならしめんとした人達であつた。ニイツウエの云ふ處によれば、ギリシヤ人は、人類における、あらゆる自然的な衝動を認め、或は、一見しては、大した價値を持ちさうに見えてない衝動すらも認め、たゞそれが過誤までに陷ゐらぬやうに、安全瓣たるべき捌け口をつけてやることを忘れなかつた。たとへば、或る特殊な儀式や、特殊な日程によつて、その「兇猛な精力」が、「無害」に濾過されるやうに苦心したといふのである。またプルタアクは、弓や、立琴さへも、その活力を新たにするためには必ず一度、絃をゆるめる必要があるとして、ギリシヤの祭事について辯護したのである。或ひは、原始クリスト教さへも、人類の自然衝動を、四六時中、緊張の姿におくことの不自然であり、有害であることを認めたためにこそ、「○○○」なる一定期日をつくつて、祭事的の歡

樂を行はしたのである。それはウヰルヘルム・フンボルトのいはゆる、人類は强くなるために苦惱を受けねばならぬと共に、善くなるために、慰藉を受けねばならぬのでもある。

「が、それは精々第廿世紀以前の話である。廿世紀は文化の世の中だ。文明とは、人爲をもつて自然を征伏することだ。意識をもつて、自然の衝動を絶滅する事業だ。われ等の强調するのはその點なのだ」と、新らしい改良主義者が矛を逆にして向つて來るかも知れない。その立て前はわかる。しかし、多くの改良主義者は、かういふことを御存じか。文明人は、なるほど或る點まで、人爲をもつて、自然を征伏し、意識をもつて、衝動を征伏し得るにしても、一方、現代文明は、その衝動を、他動的に誘惑する情態が、昔の時代にはとても想像されぬやうな、强烈な力と多角相を持つて居るといふことを。そして、容易な束縛ではその慾望を拘制し得られぬものであることを。たとへば、われ等の目前にある前に擧げたやうな諸議案はどれもみな、人類慾望の頂點であるところの、歡樂と猥褻心理に關係するものばかりである。外にはよい方法もないからこそ、最後の賴みたる法權によつて、禁止をしやうとするのであらう。行きさつは、我等にもなるほどと合點が行くが、さて一面に、それほど强烈な引力を持つものだけに、眞向から禁止されただけで、果して効果が有効であるかどうかを疑ふわけでもある。

それと共に、表面で禁止さへすれば、どうにでもなると片付けて了ひ、それが弊害の補償を、どうしたらよいかについては、一向豫備をしてくれない不親切さにも不平が云ひたいのである。いや、それの前に、不用意な禁壓は、時に不用意に反抗と好奇心をひきおこすと共に、たゞやたらな禁止禁止によつて、その「害惡」の中に潜む必然性さへも、玉石ともに葬むつて了はうとする非實感をも困ると思ふのである。たとへば、現代はギリシャの昔と違ふと云つても、現代の人類が、精神と肉體に荷ひつゝある日々の過勞は、ギリシャ時代などとは比べにならぬほど過重だ。だから、その過勞をときほぐして、明日の勞働活力を養ふためにも、享樂と慰藉の機關は、ギリシャ時代などよりも、百倍も千倍も必要でなければならない。

劇場、音樂、よみ物、飮食物、衣服その他、生活が向上するに從つて、歡樂に多大の慾望が向ふのはきまりきつた話だ。が、もつと必要なのは、さうした欲求の對象物を、いかに合理的に整理し、そして出來るだけそれを澤山に施設して行くかにあるのであるが、それには何よりも「實感」がそれを裏付けねばならぬ。性觀念に淸潔な人達が、公娼廢止を力調するのは分徹する。また、それにも充分共鳴する。が、同じ資本主義の

奴隷たる白奴隷を解放したゞけで、實感がないために、同じ資本主義のために起つた、無産階級の性の飢渇を、どう處分するかを考へて居ぬならば、それは片手落ちの見本でもある。

詮ずる所、「爲す勿れ」の叫びはどこでも景氣がよい。さて、「爲す勿れ」として禁壓された慾望――それは同じ人類生存の必然の資料であるもの――を、いかに正しく培かうべきかの實感からの正しい施設や、思ひ付きが、一向景氣が好くなく、政治にも、社會にも、あまり好評を受けないのを自分は氣に病むのである。事實最も大切なのは、むしろ此の方で、或はこの「一利を起す」ことによつて、自然と「千百の害」が滅ぼされずとも、除かれるものであるかも知れないのに。

『軍。縮』。問。題。八。面。觀

高畠素之

(一) 軍縮會議側面觀

一

米國大統クーリッヂの提案した補助艦制限に關する五國會議の開催は、第一次ワシントン會議當時の行き掛りから、フランスとイタリーが反對意志を表明したので、今のところ成立の希望は全く失はれるに至つた。そこで手を代へ、日、英、米の三國會議を開いたらといふ事になつてゐるが、果して三國だけの協定で爾餘の製艦競爭まで牽制し得るかどうか、成果の程は甚だ疑はしく、現にクーリッヂ自身さへ當初の意氣込みはどこへやら、最近では悲觀的な弱音を吐き出したやうである。加ふるに今度の提議は、各國の貿易政策と直接に關聯する補助艦を對象とする限り、比率の適用に關しては前回より以上の技術的困難を伴ふべく、随つて三國が互ひに自國の利益を主張して降らないといふことになれば、折角の會議も立ち消えにならぬとも限らないであらう。

それを見越したものか、米國は單に口火を切つただけで敢て主催國たらうとせず、國際聯盟の機關に委托して萬一の場合の面目を警戒し、贊成國の日英兩國も亦、口前だけは軍縮大い

結構、主義に於いて少しも異存はないと綺麗に出てゐるが、主義ならぬ實際の問題となれば、二の足が三の足でも踏みさうな逃げ腰である。肝心の三國がこんな調子であつては、曲りなりに會議を成立させて見たところで、仰せの如き世界平和を確保し得るやうな效果が收められるとは考へられない。

元々、將來の戰爭を現在の協定で豫防できると考へることが、そもそもの噴飯沙汰といはねばならぬ。喧嘩は相談づくでケリを附けかねる時に起るもので、話し合ひで落着する問題に好んで腕立てしたがる醉狂者は居るまい。國際間の戰爭だつてその通り、當對國の利害關係が外交折衝で片附けられなくなつたとき、始めて惹き起こされるのが戰爭である。換言すれば、平素の協定が破壞されればこそ、個人の喧嘩も國家の戰爭も生ずるのである。クーリツチ流の論理に從へば、軍備競爭は『國際的猜疑と不平を醸す原因で、結局は戰爭を誘發する最大原因となる』さうだが、これは猫いらずがあるから自殺者を出すといふ論理と同斷である。喧嘩をやらうといふ程の場合なら、傍らに棒きれがなければ石ころを拾ふであらう如く、戰爭に必要とする器具は決して軍艦や大砲に限定されてゐるものではない。現に軍艦や大砲が發明されぬ以前から戰爭が行はれてゐたこと、尙ほ猫いらずの賣り出しを見ない以前に自殺者があつたのと同じである。故に戰爭によつて武器の發明が刺戟されたと言ひ得ても、武器の發明によつて特に戰爭の數が多くなつたとは言ひ得ないであらう。

勿論、猫いらずの存在が自殺の示唆に多少貢献する意味で、精鋭な武器や强大な軍隊の存在が、戰爭誘導の多少なる危險を藏してゐることも否定は出來ない。その限りに於いて、クーリツヂが『この事實を認識し、出來るだけこの危險を除かんため』に軍縮を提議することも、必ずや無駄骨とばかり言へない節もある。しかし、繰りかへして言ふごとく、軍備そのものは、戰爭誘發の最大直接なる原因でなくして、枝葉末節の原因たるに過ぎないのである。即ち戰爭誘發の最大にして根本的の原因は、資源及び販路の爭奪といふ純經濟的理由に存するのである。随つて、事實に對する認識の必要は、クーリツヂのそれとは全く別個の方面に存するのであつて、出來るだけ戰爭の危險を防止しようといふ老婆心があるなら、おのづから別個な方面に努力を集中すべきである。

二

唯物史觀の解説を待つまでもなく、古來の戰爭といふ戰爭は、多かれ少なかれ經濟的利害を含まないものはなかつた。中

にはナポレオンや大閤秀吉の如く、領土擴大による自己の優勝慾の滿足を無上の悅樂とした童話的英雄もあるが、それにしたところで、戰勝に依つて増大する物質的利益の享樂に對しては、彼等とて人並以上に貪婪だつたのである。そこに彼等の『趣味と實益』を兼ねた打算を發見されるが、最近世に於ける植民地の征服乃至爭奪の戰爭となると、地圖上の優勝慾滿足を離れ、露骨なる經濟的利害を中心として展開されてゐる。即ち機械器具の發見發明によつて夥しく增大せる生產品の販路擴張と、それに伴つて生ずる原料品の補給方法を中心として、武力を單なる手段とする戰爭となつたのである。その第一頁は、亞細亞、阿弗利加、濠洲等の未開國征服に始つた。イギリス、フランス、ロシヤ、オランダ、スペイン、ポルトガル等の諸國は當時の勇者である。かくして未開國の全部が、何づれかの國の色彩で塗りつぶされ了るや、新領土に對する各國間の新なる爭還戰が開始され、新興强國が老朽弱國の所有地を强奪するといふ時代が出現した。これがその第二頁であつて、ドイツやイタリアの勃興はこの時代に屬する。兩度の戰爭により、朝鮮に於ける支那の勢力を驅逐し、滿洲に於けるロシヤの勢力を驅逐し、以つて自己の勢力範圍とした日本も當時の產物である。

この時代を經過すると共に、世界は全く少數の强國によつて支配圈が區劃され、尙ほ進んで領土上の野心を充たさんとすれば、强國同士の決死的戰爭を賭けなければならぬ狀態となつた。玆において武裝的平和なる術語に相應はしき列國の睨み合ひが始まり、蛇と蛙と蛞蝓の三すくみから、博徒の繩張り同樣の勢力範圍を協定して、自分の惡を是認させる代價に他人の惡を許容するといふ時代を現出した。これが第三頁である。

しかし根が、國際勢力の物理學的理由によつて生じた均衡である。或る一個の勢力が著しく增大すれば、そこに破綻が起こるのはやむを得ない。歐洲大戰はその最後の破局であつた。即ち建國のスタートに於いて立ち遲れたばかりに、十分なる領土乃至植民地を持てなかつたドイツは、內部に增大する生活力の捌け口を求むるため『日沒なき帝國』を當面の敵として、乾坤一擲の壯圖を達成せんとしたのである。幸か不幸か、結果は徒らに敗慘の醜骸を晒すことになつたが、而もこの大戰の結果は、啻にドイツの再起を不可能ならしめたのみでなく、戰勝のフランスやイタリーにも同樣な運命を齎らした。かくて世界の强國としては、老大帝國イギリスと、戰禍を遠ざかつた米國と日本のみが殘された譯である。換言すれば、日、英、米三國がその何づれかを對手とするのでない限り、太刀打ち榮えのする戰爭は見られなくなつたのである。

世界の形勢が斯くなると共に、いはゆる武裝的平和の看板はいつの間にか無裝的平和に塗り代へられ、必要以上の軍備は縮少して、お互ひに肩の凝りを直さうぢやないかといふ相談となつて現はれた。一九二一年のワシントン會議は取りも直さずそれである。最初の目論見では、單に主力艦及び航空母艦の制限のみでなく、一切の補助艦と共に陸軍の制限をも議題に供するつもりらしかつたが、後者に對してはフランスの頑强な反對があつた爲お流れとなり、形をかへジエネヴァの軍縮委員會を通しての今度の提議となつたのである。而して該會議の結果、主力艦に於ける比率が英米の五に對し、日本が三を適用されることになつたのは、更めて書く必要もないであらう。

三

そこで問題となるのは、如何なる理由で米國が（同時に英國が）、かくも軍縮に熱心だかといふ詮索である。クーリツヂに從へば『米國政府及人民』は、軍備競爭が戰爭を誘發する最大の原因となることを『信ずる』ためだといふが、果してそれだけの純粹な動機から出發してゐるかどうか、遽かに『信ずる』わけには行かない。

軍備の戰爭誘發に對する危險性は、前述の如く自殺者に對する猫いらずの誘惑力と五十歩百歩だが、さういふ簡單な理屈は先刻御承知のうへ、白々しくも戰爭防止の口實とするに就いては、何らか裏面の打算がなければならぬ。一つの觀方としては、自國の軍備を縮少すると同時に他國の軍備を必要以上に削減するカラクリだとも考へられる。けれども、世界平和の御託宣が萬更ら鬼の念佛とばかりは受取れない限り、『米國政府及び人民』が平和を必要とする理由は尙ほ別途にあるべきはづである。

然らば、その理由は何であるか？手ツ取り早くいへば、純粹な利害損得の算盤玉に基く經濟的理由である。元來人間は、慾と相談づくなら斬つた張つたの喧嘩沙汰を敢てやりかねない動物だが、國際間の戰爭にしたところで、直接最大の原因となるものは常に經濟的利害の衝突である。しかし、その經濟的利益の維持發展が、血塗らずして達成の可能が見えるなら、何もすき好んで刀を拔く必要はないのである。

米國は獨立戰爭によつて英國の羈絆を脫して以來、天與の沃野と資源を開發して驚ろくべき國富を增進せる一方、海洋を隔てたる地理的優勝地帶を利して南北米を縱貫する政治的權力を掌握し、いはゆるモンロー主義を楯に獨裁權を執行してゐるのである。その米國に取つては、今更ら戰爭による冒險を敢てし

てまで、キューバを奪ひ、ハワイを併せ、フイリツピンを奪ふ必要は少しも發見されない。寧ろ新領土を得て統治と開發に無駄な費用を棄てる暇に、現に有する寶庫を切り拓く方がどれだけ引き合ふか知れない。英國とても同樣である。本國に百四十倍する領土を有し、資源の需要と製品の供給に些かも不自由を感じない身分で、何を苦しんで新領土を擴張する必要があらう。彼等としては、先祖傳來の身代を後生大事に守り、外敵の侮りを受けぬ工夫をするのが何よりの上分別である。そこに現狀維持を得策とする英米共通の利害があると共に、世界の平和を希望する共通の打算が作用してゐる。彼等としては、世界地圖の色彩分布が現狀であつてくれる事が最大の念願であつて、勝敗の如何に拘らず戰爭を避けたいのが本心である。そこに武裝的平和狀態より一歩進出し、無裝的平和狀態に入る前提的意味で、軍備縮少を提唱せる心理的理由が存する。

かくして彼等は、軍國主義を惡魔の化身の如く吹聽し、嘗て彼等のなした領土併合が恰も武力に依らなかつた如き顏をし、宣教師の音頭で四海同胞の宗教とやらを弘めてゐるのである。誠に有りがたい思召しではあるが、現狀維持も被征服的狀態に置かれたものこそいい面の皮である。それを知るや知らずや、盲目千人の娑婆とあれば、アングロ・サキソンが先天的に平和を愛好する人種であるかに思ひ込み、日本は軍國主義でキヤンの弟子位に心得てゐる者も少なくないらしい。

日本が軍國主義であるかどうか、それは追つての詮索に讓りたいが、帝國統計に於ける人口密度一方里二千四十三人を算へる日本の身になれば、同じく百九十二人の英國や二百九人の米國に比較して十倍以上の人間を擁し、そのうへ年々八十萬からの口數は殖える、おまけに四方八方移民の閉出を喰はされる、それで英米同樣に現狀で我慢しろと言はれても、どうにも我慢しかねる場合が無いとはいへない。そこで脊に腹を代へる算段でもしやうものなら、頭ごなしに第二のドイツ呼ばはりされるのである。英國や米國にさういはれたとて、こつちに正當な理屈がある以上、何も良心を咎めるにも當らない道理だが、そこは凡夫の淺間しさでツイ肩身を狹まがる結果ともなる。嘘氣か本氣か知らぬが、若槻首相までそのインターヴイウに於いて、造らうと思へば現在の何十百倍の軍艦も造り得る金持の米國が、卒先して制限運動を提唱した『純粹なる動機』にお世辭の百萬陀羅を並べてゐる。だが、純粹にも不粹にも、米國は餘計な軍艦を製造して列國の神經を刺激するより、對手國を安心させて悠悠と資本的侵略を試みる方が遙かに算盤玉に合へばこそ、平和を愛好するのである。我が敬愛する日東君子國の名宰相、[illegible]

しいかな『金持ち喧嘩せず』の心理を解してゐないらしい。

四

平和も軍縮も彼等の素町人的打算に出發してゐる證據は　制限標準を『當該國家の海上の利益を擁護するを以つて限度とす』なる原則に於いて明瞭である。而も軍費を節約して得た金を産業發展の費用に充當し、壯丁を生産事業に從事せしめよと主張するに至り　本來の素町人的馬脚は遺憾なく暴露されてゐる。相互に侵し侵されざる程度に軍備を制限するなら、國によつて比率の適用を二三にするのは矛盾である。一方に五の勢力を設定し、他方に三の勢力を設定することは、三の國に對して新なる脅威を賦課する所以にほかならぬ。これは協定に非ずして強制であり、和中協同に非ずして征服支配である。それもこれも長い物には卷かれなければなるまいから、今更ら野暮を言つても始まらぬが、現狀の交通貿易を保護し得る程度に於いて補助艦を制限することになれば、世界の貿易總額に對し本國だけで英國が十八パーセント、米國が十六パーセントを領有してゐるから、これに領土乃至植民地のそれを計上する時は、日本のごとき哀れ果敢なき比率で泣寢入りするのほかないであらう。

尤もクーリッヂの希望によれば、大體主力艦の五・五・三を適用するつもりらしいが、抑もその標準からして非科學的である。戰鬪艦は土佐犬同樣に喧嘩專用であるから、十把一束の制限も可能であつたらう。けれども補助艦は、その國特有の事情によつて發達の程度を異にし、例へば英國は巡洋艦、米國は驅逐艦、日本は潜水艦といふやうに、各國それぞれの事情を反映してゐるのである。然るに英國の如き、潜水艦の與へる害惡を非人道的だといふ妙な理屈をつけ、嘗て各國の協定で潜水艦を廢棄せんとする提案をなしたことがある。餘り馬鹿々々しくて具體的な問題にはならなかつたが、この提議は明白に日本を對象としたものであつた。戰爭による被害の非人道的なことは、何も潜水艦に限つたものではない。水雷を發射する驅逐艦の存在に至つては、更らに非人道的であらねばならぬ。而もこの解り切つた子供だましの理屈を、如何にも正義人道と關係あるかの吹聽するところが、彼等一流の狡猾さである。日本はそんなことに驚ろく必要はない。南は台灣より北は千島、樺太に至る細長き海岸線を防禦するためには、快速力を有する巡洋艦と耐航力に於て秀れたる潜水艦の充實が絶對に必要である。同時に工業その他の原料品を海外に仰いでゐる關係上、萬一の場合は大陸の外側に連亘する島嶼を優秀なる補助艦を以つて連結し、太

洋からの外敵に對して原料供給の通路を保護すべき必要が痛切に訴へられてゐる。これ主力艦同様の比率を承諾し得ざる日本の特殊事情である。而もこの特殊事情を蹂躙し、補助艦に於て割合に優秀な日本の海軍力を削減せんとするのが、第二次軍縮會議に對する英米的打算である。現に排日記者として知られるバイウオターの如き、露骨にこの事を主張してゐるのである。その限りに於いて、今度の會議が日本に取つて有利に展開されやうとは考へられない。

　その場合に際して日本は、如何に處置することが肝要であるか。――寧ろ居直つて彼等の貪慾を指摘し、戰爭が決して軍備競爭から誘導されず、却つて彼等の土地獨占によつて發生することを力説すべきである。その限りに於いて、彼等が眞に平和を欲するといふなら、製艦協定といふやうな末節に囚はれず戰爭の根本原因たる彼等の土地獨占を廢棄し、彼等の植民地解放を要求すべきである。勿論、さうした要求を彼等が素直に受け容れる筈はないが、それを受け容れざる限り、不自然なる軍備の削減要求を聽取する義務も、同時に消滅する道理である。

(二)軍備と軍縮の矛盾性

川島清治郎

一

軍縮は望ましきものであるか何うかと言へば、いかなるショウヴイニストもジンゴーも、一應は望ましきものであるといふに違ひない。しかし、これは僞りである。軍備は一國の生存活動使命を擁護するものであるから、擴張充實こそすれ、これを制限し縮少し撤廢すべき筈のものではないからである。軍備の觀念と軍縮とは全く矛盾してゐるものである。

　されど軍備の負擔は各國民のこれを苦痛とする所である。從つて軍縮は何人もこれを希望する所であるけれども、しかも各

國民が互にこれに回避的態度を取るは何故であるかといふに、それはその結果の不安を虞るゝからである。いづれの軍縮會議でも各國は欣然としてこれに應ずると一應は呼稱するけれども、實際は種々なる口實を設けて、これを回避せんとするの傾あるのは全くこれが爲である。軍縮と軍備とはこゝに矛盾性を發揮してゐるものである。

二

或は軍備を全く無用の長物と見または全く不生産的事業と見るの一派は遮二無二軍備の縮少撤廢を快事とし善事とするであらうけれども、一般はさほどには思つてゐないのである。こゝには軍備の根本論を闘はすことを容されないが、とにかく大國强國といはるゝものは常に比較的軍備が整つて居り軍備が比較的整つて居る國は常に大國强國であるの事實を見るのである。偶然であるか何うかは知らないが、軍國主義者等はこの間に重大の理論の存するものと思つてゐる。また不生産事業といつても、不生産事業は軍備ばかりに限らない。一部の官業の外殆ど凡べての政府事業は不生産的であり、農工および附隨の事業の外殆ど凡ての社會事業は不生産的である。これを人についていへば、政治家も法律家も教育家も宗教家も學者も言論家も事務家も商業家も文藝家も、悉くこれ不生産人である。不生産的業であるからといつても、必ずしもこれを排すべきを意味しない。また生産的であるからとて必ずしもこれを賛すべきを意味しない。特權階級の一夜の歡樂虛榮の資にのみ供せられ自分等の體や口にはつひに一片だも觸るゝこと能はざる品物……貨物……富なるものを生産して産業は生産的なりと信じてゐる經濟學者や勞働者などは、自ら顧みてその奴隷産業に屈從してゐるの陋を恥ぢなければならない。奢侈品――同じ奢侈品を製出する位なら偉大なる國家的民族的の大奢侈品たる軍隊軍艦を製出すべきである。

しかも軍備には尙間接生産もしくは副生産とも見るべき重大の生産作用がある。製艦事業が一般造船事業を生育すべき關係を有することや軍艦が科學的最新知識の結晶であることは今暫くいはぬとして、人間が空中を翔けりまたは水中を潛ぐることを知るに至るのは主として軍備のお蔭である。毒ガスは全くイヤな感じがするけれども、これとても農業に利用しまたは蕪地の開拓に利用すれば、人類社會に何れほどの貢獻があるかも知れぬのである。

單純なる感情を以て軍備に反對しまたはその縮少撤廢を主張するの議論は、軍國主義者の間にも餘り重きを置かれぬのであ

る。

三

軍備と軍縮とは前述の如く矛盾性を有する。しかし、この矛盾性を解くの途があるか何うかといへば、必ずしもないとはいへない。軍備は相對的であるから相對的に公平の決定が與へられさへすれば、自ら不安の原因が除かれ、軍備の縮少制限が行はれ得るのである。

公平の決定が求めらるべき途に二つある。一は理論的のものであつて國際聯盟がこれに當り一は實際的のものであつて、米國がこれに當りまたは當らんとしてゐる。國際聯盟はその成立以來規約第八條に依り專ら世界の上に軍縮の理想を行はんとし營々として努力してゐる。殊に平和議定書やロカルノ條約の關係を動機として、軍縮本會議を開催するの目的を以て、昨年五月より特に軍縮準備委員會を設け、聯盟外の米國をも參加せしめて、ひたすら軍縮の基礎條件たる公正の原則や標準を理論的に發見せんとしてゐる。しかし、その參加國は大小二十ケ國であつて、さらに、その論題が『軍備とは何ぞや』といふに始まるといふ調子で、徒に紛々擾々たる學究的の理論を闘はし、また殆ど海軍を有せずまたは極めて微力の海軍を有する國が喋喋として海軍問題に論議を挾むといふ狀態で、英米殊に米國は非常にこれを迷惑がつてゐる。しかも事毎に英米側と見解を異にし、やゝ曖昧なる日本の中立的態度とチリーとアルゼンチンとを除くの外殆ど悉くがフランスを主盟としてその主張に傾倒せんとしてゐる。就中その最も大なる差別は(一)陸海空三軍を合同して軍縮を議するといふことゝ(二)軍備の縮少制限は平戰兩時の戰鬪力を綜合してこれを行ふことゝ(三)海軍々備の縮少標準は全艦艇の合計總トン數を基礎とし各艦種別の比較を排すること等につき、フランス派の主張が全勝を博してゐるに對し、英米側の主張が寂然として殆ど振はぬのに存してゐるのである。これ米國の今回の提議のあつた所以である。實際的の軍備縮少主義はかゝる學究的の空論如何に拘泥せず逸早く列國の軍備を縮少制限しその競爭の跡を絶たうといふのであつていかなる方法でも手ツ取り早く協定が行はるればよいといふのである。米國の主催に係る第一のワシントン軍縮會議はこれであつたが、五、五、三、一・六七といふ比率とその壓迫的態度とが祟つて頗る不評判不人氣となつた。實際的の軍縮手ツ取り早き軍縮至極結構ではあるが、その間に不正陷穽悖理があつては到底軍縮の理想には適合せぬのである。第一次ワシントン會議は、第一に比率主義を取り第二に五、五、三、一・六七とい

無理の比率を取つたがため失敗（不信を買つた）したのである

實際的軍縮、……といつても實際何等かの標準がなければ行はれない。そこで國際聯盟の學究的論究といふほどではなくとも實際各國の間に相當の原則標準なるものが考慮せらるゝ。しかし、これには各國の政策に基く秘密の胸算用が伴ふ弊があるから、實際協定の場合には、たとへ紛々擾々たる饒舌は交換されぬものとするも、默々たる間に意見の相違が行はれて、結局協定不能といふことになる。そこで何か手ツ取り早い標準はないかと詮索せらるゝのが自然に（一）大國であるとか（二）豫算に依るとか（三）地理的事情が何うであるとかといふことになる。しかし、大國であるとか小國であるとか國格に比率を加ふることは不都合であり、豫算は貨幣價値の相違、事情の動變とにより標準となり難く、地理的事情なども到底論究し盡せるものではないといふので、結局はいづれも駄目とならざるを得ない。そこでマルでチョボ（バクチのサイコロを茶碗で伏せること）を張る如くに『現有勢力を標準とする』云々と出て來たのが第一次ワシントン會議の海軍々縮協定標準である。しかし、何が故に一九二一年十一月十一日の現有勢力を各國が標準としなければならぬかは少しも判らない、何うも一國の運命安危をチョボに托することは出來ない。フランスやイタリーは戰役中軍艦などを造つてゐる暇はなかつたといつて徹頭徹尾現有勢力主義には反對して來た。日本は若干釣込まれて、現有勢力主義とは何を標準とするか、既成艦のみをいふか、建造中のものをも含むか、豫算協贊濟のものは何うか、計畫中のものは何うするかといふことを論爭し、いはゆる專門委員なるものが日米入り亂れて晝夜兼行で算盤を彈き、陸奥を壞はすの壞はさぬとまでの騷動を演じて、結局はムニャ／＼と終つたのである。今度は我が當局はそのシッペ返しか何うか知らぬが自ら現有勢力主義なるものを標榜しこれに關する參考表などを發表してゐるやうであるが、クダラぬ眞似といはなければならぬ。

比率主義も根本の理由さへ立てば必ずしも不可はない。國際聯盟の研究的態度で結局各國の軍備額を割當つることゝなるも、その間自ら差等の生ずるは勿論である。たゞその差等が公正であり得るといふまでゝある。比率も差等たるにおいて變りはない。たゞその差等の基く所如何といふことが問題となるのであるが、それが合理的でありさへすればよい。現有勢力主義が假りに一個の標準となり得るものとすれば、これを一層合理的ならしむべく前後各十年づつ二十年位の實際勢力を計較して比率を算出すべきである。これを自分は推定比率主義と名づけ

てゐる。しかし、これもなか〳〵實際の計算には議論がある。そこで、本當の大ザッパで比率を割當つるの法がある。各國の事情および地位を大ザッパに案定して英十米九日八佛伊七七といふ風に定むるのである。これを自分は案定比率主義と名けてゐる。

四

軍縮否軍備の制限には質と量との差別がある。質の制限は、例へば主力艦の廢止とか潜水艦および潜水艦戰の廢止制限とか排水量備砲速力等の制限とか毒ガス戰の禁止とか根據地設定の制限とか等であるが、これは各國が諾否をさへ決すればそれでよいのであるが、量の問題はいはゆる比率の問題で、たか〳〵その諾否の論爭が難かしい。比率の問題は何うにかこれを解決しなければならないのである。

五

そこで手ッ取り早い實際的の問題で、こゝに一つの方法がある。それは全く比率を廢することである。比率を廢して各國ともに最高限度を協定し、しかも成るべくこれを低度に協定して、その以下で各國とも任意の程度を定めしむることにするのである。此の方法は第一ワシントン會議の頃我國の一部において强烈に主張され、またワシントン會議以後我が海軍々人の多數が唱ふる所となつてゐるのであるが、恐くは英米が承知すまい。五五五といふのである。承知すまいけれど、しかし合理的である。かういふあんばいに天井をさへ拵へて置けば、大國は大國小國は小國だけに自然にその國力や豫算に應じて落付く所に落付くのである。たゞ小國が大國に肉薄し得る機會があるといふのが大國の危虞であるけれども、大國はその偉大なる工業力に依賴して戰時には如何やうにもこれに對應し得る餘裕があるのである。

六

比率主義は危險だといふ虞がある。殊に米國の比率主義、五、五、三、一・六七の比率主義は軍備の觀念に反し且つその安全を害するものとして日佛伊の三國には絕對危險とせられてゐる。それで第二の會議にはこの三國は斷じて再び足をワシントンに踏入れぬと決心してゐたのであるが、英國と雖も、その國情の全然異なるに拘らず米國が巡洋艦で英國と對立を主張するは僭越なりとし、次ぎの軍縮會議地はワシントンではなくロンドンであり東京でありまたはゼネヴアであるなどと唱へて

たのである。これは冒頭に論じた如く、軍縮會議における結果の不安といふことに基いてゐるのである。しかるに今度のクーリッヂ氏の提唱會議は、その場所がゼネヴアであり、またクーリッヂ氏多年の平和的態度および軍縮に對する切なる情意（既定計畫巡洋艦三隻起工制止態度の如き最近の最も顯著なる一例）に徴すれば、最早不當の壓迫的態度もなかるべく、たゞ五五三の比率を擬することは依然たる所であるけれども、必ずしもこれを強要するの態度もなく、一派の軍國主義者等が右巡洋艦三隻の即時起工は勿論さらに新巡洋艦十隻の計畫を提起し、『十隻は愚か十隻の十倍でも構はぬ』などといふ横暴なる威嚇の言を弄してゐるのは、やはり一抹の暗影を會議に投ずるが如くであるけれども、これ等を一蹴して臨むの覺悟さへあれば、列國は快然として寧ろ應招すべき筈のものである。日英は欣然としてこれに參加の回答を與へたが、フランス、イタリーはこれを拒絶した。軍縮が望ましきものでありとすれば、これは遺憾のことであるから、日英兩國は須く佛伊兩國を勸誘してこれに參加せしむべきものである。

七

しかし、フランスの拒絶せるは依然としてその會議に不安懐疑の念を有するからである。それは英米日の三國が海軍々備制限標準に各艦種別主義を取つてゐるからである。日本は巡洋艦と驅逐艦とを合一するの外英米と全く同じ主義を取りフランスの總トン數主義は反對してゐるから、フランスはこの會議に自國の安全を保障し得る期待がないから、斷然としてその參加を回避したものである。フランスの拒絶の理由には國際聯盟權威とか三軍の不分離とかを説いてゐるやうであるが、これは實は口實で、本當の理由はその總トン數主義を擁護せんとするに在る筈である。一體小國の海軍が主力艦、航空母艦、巡洋艦、驅逐艦、潜水艦と別々に制限束縛されたのでは、とても戰は出來ない。必敗の虞はあつても勝味などはありやうがない。しかも總トン主義で一定の範圍内で自由の艦艇と自由の作戰とを擇び得れば、小國たりとも必ずしも必敗の虞はないのである。日本なども當然これに贊同すべき筈であるけれども、何かちよつとヘンな考へ違ひをしてゐるものと見えて、英米側の主義に贊成してゐるのである。ひとり總トン數主義の難點とする所は、これに依ればフランスが無制限に潜水艦を建造するに至る——その英國の危険の點にあるのであるが、これは特に英國のため潜水艦だけを別の協定にすることも出來るのである。米國も元來どちらでもよいといつてゐる筈であるから、この總

トン數主義に讓つて、佛伊とともに折角の五國軍縮の協定をしたらよからうと思ふ。この總トン主義に若干の比率を配すれば、こゝに面白き軍縮事業が完成せらるゝに違ひない。

八

フランスが脫退すればイタリーも脫退するのは勿論である。最近日英米三國だけでの開催說が行はるゝやうであるけれども日本はともかく英國は佛國を離るゝことは出來ない。何か伸縮自在の附屬協定をすれば不可能でもあるまいとの說もあるけれども、フランスの出處如何によつては結局は大動搖を免れない。また日米二國だけとの說も米國あたりに行はるゝやうであるが、これは頗る危險であると同時に、米國と雖も全く英國を離れ、また日本もシンガポールに軍港計畫を忘れて全く英國と離るゝことも出來ないのである。（三月五日稿）

（三）軍備縮少を生活の立場から

細貝正邦

一

米國の新軍縮會議開催の提議を機會として、軍備縮少の問題を考察せんが爲めに、私は先づ近代國家が戰爭に對して採り得る、又は採りつゝある主義——と云ふよりは寧ろ——態度に就いて極めて一般的な大まかな考察をして見たいと思ふ。

國家が戰爭なるものに對して採る所の態度として考へ得べきものの第一は、戰爭は決してせぬ、如何なる場合にも干戈に訴へぬと云ふ主義であらう。即ちそれは如何なる場合にも自國から他國へ戰爭はしかけぬのみならず、他國から攻擊されても干戈に訴へて防衛さへもせぬ行き方で、純乎たる平和主義、無抵抗主義と稱すべく、近代國家中恐らくは一國も此の主義を奉ずるものはあるまいが、然かし自國が此の主義を奉ずる以上は、他國も亦此の主義を奉ずるやう、種々の平和的手段が講ぜらる

べきで、國際聯盟の眞の基礎は、こゝに措かるべきであらうと思ふ。

第二は平和主義の他の反對の一局に立つもので、一國の當然の欲求の滿足、野心の追求に、常に而して飽くまで武力を用ゐて他國を征伏し、他國を侵略する行き方で、それが公然自國の奉ずる主義として高唱されぬまでも、或國の事實上の態度なりとして一般に是認されたとき、人は帝國主義又は軍國主義と稱へる。此の主義に於いては武力による侵略は始めから正當なりとされてゐる以上は、攻防は單に戰術の問題であつて、侵略と防衛の正不正は問題とはならぬ。

第三の戰爭に對する態度は、攻擊的侵略的戰爭を惡とし、防衛的自衛的戰爭を善とする態度で、現代に於いて凡ての國家は此の主義を奉ずると稱し、あわよくば第二の態度に、時により處により巧に豹變せんことを內心希つてゐるやうに、私には見える。

戰爭に對する國家の態度を極めて大まかに以上の三つに分ち、偖て何れを善とし、何れを惡とするかさうした正不正の問題として、此の問題を取扱はずに、國家は何れの態度を採る事に於いて、其の國家に屬する國民は、其の生活上有利なりやとして、云はゞ極めて下品に、それだけ實用的に私は此の問題を取扱つて見たい。

然かしながら或國家が如何なる態度を採るべきやと云ふことを、抽象的に考へそれについて論議することは、假にできたとしても殆んど實用の問題とは相容れない空疎なことであるから、從つて實用的にして一般的なる結論は殆んど得るに難いやうに、私には見える。所詮此の問題は、具體的なる個々の國家の事情、言ひ換へれば極めて廣汎なる意味に於ける或る定まつたる一國の經濟事情によつて、それ〲解答が異ならねばならぬと思ふ。

二

思ふに北歐中歐の諸小國就中、スヰス、ノルウヰー、スキデン等の如く、領土は狹いが人口も自ら又は人爲的に之れに適應するやうに調節され、產業も念入に細かに發達して、然かしながら他國を侵略する見込もなく、勢力權衡上他國から侵略されさうもなく、そして通商上世界が平和であることが、大體上利益なる國に於いては、平和論を高唱することは國民の生活上利益であることは云ふまでもない。孟子の非戰論平和主義は桀に出でなかつたやうなものであらう。

之れに反して英國の如く、自分では昔さん〲武力で弱い國

を侵略し盡くして、それによつて世界の優越權を得て了つた國は、自己の過去の業績を露骨に理論的に是認すれば、今度は逆に他國から侵略される順序になるのであるから、侵略の戰爭は惡、防衛の戰爭は善を主張する事が、最も儲かる立場にある。

英國は海軍で自國の領土を廣めた癖して、海軍は防衛的であつて侵略的でない。海軍で城下の盟はさせられぬ。軍艦は伯林へ持つて行けぬではないかと云つた論法で、いつも二國標準主義の大海軍を維持して來たやうであるから、つまり英國は第三の態度を理論的に正當とする事が利益なるが故に、此の態度が正當なのであらう。

他國を武力を以て侵略すべしと云ふ、古代的な勇敢な態度は、近代に於いては私どもは大戰前の獨逸に見ることができる。人口は增加するし、富源は乏し、植民地はなしとすれば、而して英國の十七八世紀以降の侵略の結果が、世界に異議なく承認されつゝあつた以上は、當人の獨逸が世界を征服するか世界に袋叩きにされるか、二つに一つを覺悟の前とすれば、獨逸の軍國主義が一概に惡いとも云へぬと思ふ。一敗地に塗れたる今日の獨逸にとつては、戰前の如き態度に出づることが出來ないから、そうした態度を採らぬ迄の事で、國民の欲求が戰前のそれと變化がないとすれば軍國主義に歸りたいと今尙ほ主張する一派があるは、怪しむに足らぬ。

然らば米國はどうか、人口と土地――食糧の關係から見ても、其他工業用品の原料たる天然資源などについて、單に經濟上の立場から考察すれば、米國ほど他國を侵略する必要も利益もない國はないであらう。米國は、若し欲するならば、我が德川時代に行はれた程な鎖國主義さへ殆んど完全に近く行ひ得る國のやうに見える。だから米國にとりては、他の小國のやうに戰爭で、大戰後のやうにぼろい金儲けができると豫想される場合の外は、他の小國と同じやうに、絕對平和論を主張した方が利益である。たゞ一部の大資本家が其の限なき野心を滿さんとすることを退治し得れば足るであらう。

露國にとつても、革命後資本の不足はあらうけれども、食糧其他の天然資源の關係から見て、他國と戰爭せぬ事が利益なるは云ふまでもない。ボリシビズムの世界的宣傳と云ふ野心さへ捨てれば平和論非戰論が此國の大多數の國民の生活にとつて幸福であり、有利なるは明だと思ふ。

然らば日本は此の三つの態度の中、何れを選ぶべきか、何れを選ぶ事に於いて國民は最も有利なりや、即ち幸福なる經濟生活を營み得るやが私の問題である。

思ふに現在諸國家の領土の配分なるものが、必要なる者に必

要なる物を必要だけ與ふると云ふ立場から見て、公平でもなく、其の取得の原因が正當でもなく、又餘り先占の權利を强度に不當に認めてる點に於いて、而して又居住移轉の自由が先進國に於いて、殊に日本人に對してのみ拒まれてゐる限り。更に又日本の人口調節が假令人爲的に行はれたにしても、實際的に道徳的に弊害なく早急に效果を奏し得さうもないとすれば、日本ほど他國の領土を占領しても良い國はないやうに思ふ。若し必要の前には正不正がないものとすれば、日本ほど軍國主義が是認せらるべき國は世界中無いだらうと思ふ。

かくの如く人口と食糧の關係、生活必需品と之れを製造する原料との關係、それ等に就いて最も窘窮してる日本は武力によつて、他國の領土を侵略することが、必要であるとして、然らば必要なるが故に、軍國主義を奉ずることが國民生活上利益であるかと云ふと、それは自ら別問題である。

三

帝國主義軍國主義を日本が選ぶ爲には、日本は當然常に戰爭に勝たねばならぬ。而して戰爭に勝つ爲めには軍備を擴張せねばならぬ。然るに日本が軍備――殊に目下問題になつてゐる海軍だけに就いて見るも――を擴張すれば、英國殊に米國は攻擊を受ける立場となる――少くもさう解釋するから自衞的にも日本と競爭して來ることは明である。然るに現代の軍備ほど巨費を要するものはないのに、其の經費を出す力たる日英米の經濟力を比較すれば、とても五五三などの比率どころでなく日本は遙に劣つてゐることは、計數を上げるがものはないと思ふ。であるから華府會議の制限條約を正直に實行しても、これに基く軍備の負擔が英米人の生活に影響する程度は、それが日本人の生活に影響する程度より遙に輕いことは云ふまでもない。從つて米國の海軍制限の提議ほど日本國民にとつて有難いものはなく、もつと日本の比率を低めるとが差當り利益なのである。何となれば製艦競爭をつゞけたとすれば、英國はとにかく、米國と競爭するとはとても不可能であるとは解り切つた話で、――米國は日本の三倍も四倍もの軍艦を造ても、米國人はまだ今の日本人以上の裕福の生活ができる筈であるが、假に此の競爭に日本が加はつたなら、日本は國民所得をあげて軍備に費し、國民は疲弊し切つて、てうど甲蟲の屍體のやうに我等の悉くは鎧を着たみいらになつて了はねばならぬ。

私は戰術について知らう筈はない、けれども最初の一戰に勝を制して、足かけ二年も戰つて、其の間天祐々々で調子よく勝通して、直ぐ講和と云つた風な、日淸、日露戰役の如き戰爭

を豫知することは、軍器の發達から見ても、相手方たる國柄に見ても、それはあまり大膽すぎる冒險ではないであらうか。世界大戰に獨逸が負けた根本的な、そして最も有力な原因は、素人から見て、最も常識的に云へば獨逸の軍閥が、勝敗を一氣に決し得ると考へたからだと云へると私は思ふ。所が日本にとつて今日假想敵國と考ふべきは米國であらうが、米國は決して一年や二年で死命を制し得べき國でもなし、長く戰へば、獨逸に對して聯合軍が有利である以上に米國は日本に對して有利であらうと思ふ。それを軍事專門家が、色々と細かく考へ過ぎて否認したとして、不幸にして其の專門家の意見に從つて、戰爭が始められたなら、つまり獨逸の軍閥が獨逸國民を善意で欺いて、獨逸を亡國同樣にして國民を辛い目に會はしたやうな事になるだらうと私には思はれてならない。然るに日本が假に米國と戰爭したとして、ヒリツピン、シンガポール以北、支那全部の物資を自由に支配し得たとしても、支那の經濟狀態が今日の儘であつたとすれば、物資に於いて三年以上はもつまいと或る軍事專門家が言つた事を聞いた。もし此の說を眞とし、戰爭すれば四五年はかゝるものとすれば、日本が押し詰められていつて採りたくはなくとも、止むを得ず採らねばならぬ態度は、武力に訴へて他國の領土は採りたくとも、結局それは不可能だと云ふことになる。つまり米國と戰つても勝てないと云ふ事は、彼が無理を云つて日本を攻擊する態度に出て來ても勝てないと云ふ事にもなるのであるし、米國に對して防衞が不可能ならば、日本は少くも近き半世紀乃至一世紀の將來、何國に向つて防衞する必要があるのであらうか。更に侵略と云ふ方面から考へても、米國の怒を挑發することなくして日本は亞細亞大陸又は南洋方面を侵略し得るであらうか。私はラッセルが世界は歐洲聯邦、亞米利加、露西亞を盟主とする亞細亞諸國の四大國となつて戰爭は出來なくなつてそれから止む、そして日本は日露の間に狹まれて獨逸のやうになるであらうと云ふ豫言じみた記述を讀み、翻つて日本の軍閥の考へ方、多數政治家の考へ方、國民の考へ方を見て此の豫言が當るのではないかと深憂に耐えない。

戰爭それ自身が、國民の生活を悲慘に陷れることは、戰勝國にとつても、戰敗國にとつても殆んど同樣であることは、世界大戰後今尙ほ痛切に體驗せられつゝある。然かるに歷代の日本政府は戰爭の準備をすることに於いて、恰も戰爭して敗けた後の如き生活苦を多數の國民に與へつゝあると私は思ふ。

軍備の爲めに、每年豫算の四分の一以上の金を使ひ、貧乏の國民をいじめてる事は今更言ふを要せぬことであるが、戰爭を恐れる爲めに、不合理なる經濟上の自給自足主義を遂行せん、

して、歷代の政府は如何に國民を苦しめつゝあるかを、私共はよく考へねばならぬ。

いつあるか解らぬ、勝てさうもない戰爭の際の食糧不足を恐れて、政府は農業を保護し、外米に關稅をかけ、米穀を買上げて高い米を國民に食はせ、一方に到底成功しさうもなき工業を保護して高い惡い自國品を强ひて國民に消費させる。つまり農民に高く米を食はされるから工業家は高い肥料や木綿やなどを農民に賣りつけるやうに農商工お互に喰ひ合ひして、結局お互に所得を少くして資本の蓄積力を減じ、一方に米やその他の生活必需品を高くすることによつて、工業勞働者の生活の向上を妨げるのみならず、進んでは、地價を高くし地價を高くすることによつて、工業の土地資本の負擔を大ならしめる。かくして工業品は高くなり從つて世界的競爭力を弱めつゝあるから、やむを得ず狹い內地市場に於いての惡辣なる喰合が始まる事となる。詮ずる所日本は戰ふ能はざる戰におびえて、其の準備の爲めに國民が共存共貧をモットーとして、死の環狀を疾驅しつゝあるが如く、私には見える。

私は如何なる場合にも戰爭はしてはならぬ、右の頰を打たれたら左の頰を出せと云ふやうな平和論者になるには、あまりに頭が地上的で實利的ではあるが、日本の現在のやうに戰ふ能はざる戰を豫期して、其の準備の爲めに敗戰の獨逸國民ほどの苦惱を甞めつゝあるのは、餘りにも不合理であると思ふ。それよりか始めから戰爭は出來ぬものとあきらめて、寧ろ警察力の補助程度まで陸海軍を率先して縮少し、農業工業等に對する、國家の干涉保護は一切廢止し、國家は治安の維持と社會政策的にのみ費用を使ふことにすれば、國民の負擔は減じ、彼等の生活はより幸福になり、資本は蓄積されて工業は起り、過剩人口は工業によつて吸收され資本の餘力は支那大陸に自然的に平和的に流れ出でて、日本商品の一大市場を作り、日本人の勞働はゐながらにして世界に賣られ、國は富み、家は榮えるだらうと思ふ。

もし思切つて此政策を實行すれば、日本は世界一の好戰國民たる名擧を失ふは明ではあるが、我等が愛する、此の二千五百年の歷史を有する美しい國は、獨逸のやうに亡國同樣な日にも會はず順當な平和な發達を遂げて、世界文化により輝いた貢獻をなし得るであらう（一九二七、一二、二七）

(四)軍縮會議の茶番劇

山川均

クーリッヂ大統領に、第二次軍縮會議を召集する下心のあることは、早くから傳へられてゐたところであるが、ヨーロッパの形勢が、この試みに取つて必ずしも有望でない今日、突如としてこの提唱をしたことは、國際裁判所加入問題の不首尾のうめ合はせ、クリーッヂの聲明を無視して上下兩院に勢力を增しつつある軍艦建造熱の牽制、明年に向つてゐる大統領選擧戰に臨む共和黨の立場——なかんづく火の手のあがりかけてゐるクリーッヂ三選反對に對するクーリッヂ自身の立場——を有利に展開することと等々の如き對內政策上の動機に出でたものだと云ふのが、世間一般の噂である。ブルジョア政治家が、軍縮會議を對內政策に利用するといふことは、必ずしもあり得ぬことでもないし、またありそうなことである

しかし問題は、クーリッヂが軍縮會議を對內政策に利用するつもりであるかどうかと云ふことではなくて、むしろ何故に、軍縮會議が對內政策上の利用價値を持つかといふことにある。

○

この提議に對して、フランス二月十五日、まつ先きに反對不參加の返事をした。もちろんこの回答文の中には、飛んでもないことだ、こんどといふ今度こそ、一度はヨーロッパを支配する帝國主義的勢力になつて見ようとして、丁度いま面白い夢をみてゐる最中だ、いやドイツからふんだくつた鐵と石灰、その上に鎭座ましまます資本の神樣がかく宣ふのだから仕方がない、等々とは書いてなかつたにちがひない。新聞電報には、フランスの海軍省見解では、今日は制限どころか、佛國海軍建設のまつさい中だといふことである。

しかし早や呑込みしてはならぬ。フランスは海軍を縮少することに反對したのではなくて、國際聯盟軍縮準備委員會の事業

が、何十年後かの平和の世界を目指して、ゆるゆる進捗してゐる今日、五ケ國だけの軍縮會議を開くことに反對しただけである。

英國に對してはフランスの相棒をつとめて居り、これから殖民地政策に乘り出そうといふムソリニのイタリーも、五ケ國だけの部分的な軍縮の効果のないことゝ、イタリー現在の海軍力は、すでに國防上不充分であるといふ理由で、眞つ平お斷りの回答をした。

さすが吾が日本の政府は、これらの國々とは少しく選を異にする。

十九日の回答に先だつて、財部海相は『帝國々防の安全を期し得る程度の案を得ばこれが協定に躊躇するものにあらず、ここに一言すべきは、帝國海軍の現有實力は、目下の情勢において國防上最小限度のものにして、何等他國を脅威するものに非ざるは、あたかも米國大統領が、その陸軍および空軍が他國を脅威するものに非ずといふと同然なりと信ずることこれなり』と聲明し、さらに若槻首相は十五日の上院において、海軍補助艦艇建造費の協贊を求め、『現在の海軍勢力は、現在の狀態においては、どうしても維持しなければならぬ、アメリカの第二の提議がありましても、その決定を延ばすといふことは、國防の上において私は斷じて首肯することは出來ません』といふ、きつぱりとした言葉で、日本の現在の海軍力が國防上のぎり〳〵決着の最小限度にあるといふ、海相の聲明を裏書きしてゐるのである。

それにも拘らず、政府は平和を愛好するのあまり、如何なる意味に於ける軍備縮少にも贊成し、從つて補助艦制限の會議にも欣然贊成の意を表し（東京朝日）『米國政府がその覺書に於て開陳したるところと全然その所見を同うし』『米國政府の發議を衷心歡迎し』『欣然その商議に參加する』旨を回答したのである。

殖民地の意向を口實に、最後まで日和を見てゐた英國も、いよ〳〵二十八日になつて、『米國政府の提議に對し、滿腔の贊意を表し』てきた。

○

これで世界のうちには、平和を愛好し、軍備縮少に滿腔の贊意を表し、欣然としてこれに協力しようとする國が、少なくとも三ケ國だけあることが明らかになつた。

巡洋艦三隻の建造費を一度びは下院で可決し、さらにこれを削除して上院で復活するといふ、すつたもんだの最中にあるアメリカ合衆國――新たに勃興した帝國主義の一大新勢力――これが海軍縮少の發起人であることが、先づ人意を强よからしめ

る—

『英帝國の特殊な地理的事情、並びに帝國内における交通線のすこぶる長きこと、及び帝國内の食糧供給を保護する必要』にかんがみ、入超つゞきの景氣にも拘らず、次年度の豫算に新艦建造費一億圓を計上することをよぎなくされてゐる英國！

それから現有海軍勢力が國防上の最少限度であつて、これから一厘一毛かけても忽ち國防が危うくなるところの日本！

クーリッヂの五國軍縮會議の提案が形をかへ、日英兩國政府が三國だけの會議に滿腔の贊意を表し、欣然として參加を承諾するかどうかは明らかでない。或る國は、佛伊の反對により、五國會議の不成立を見定めた上——ないしは見透かした上——で滿腔の贊意を表したのだとさへも云はれてゐる今日、ことさらこれは疑問であるが、かりに三國の軍縮會議が開かれたとすれば、かような事情の下にある國々の會議である。即ちそろひも揃ふて現在の海軍力が國防上の最小限度にある國々——といふよりも、新艦の補充建造によつて、僅かにこの最小限度を維持しようとしてゐる國々——海軍縮少の餘地の少しもない國々——が集まつて、海軍の縮少を評議するのが、その軍縮會議なるものである。

○

これは如何にも奇妙な會議の如くに思はれる。しかし勘定頭割りの約束で料理屋に上がつた三人のお客が、生憎三人共に蟇口を忘れてゐたといふことも、有り得ぬことではない。いな意識的に蟇口を忘れることさへも、有り得ることなのである。して見れば、一分一厘も軍備を縮少する餘地のない——從つて意志のない——國だけが、たゞ『これを考慮するの覺悟』だけ——中身のない蟇口だけ——を懷に入れて『欣然として』商議に列し、『その成功を促進するために全力を盡す』といふことは、少しも不思議なことではない。

クーリッヂの提議が發表せられた當初から、フランスとイタリーとは參加を拒絶するであらうといふのが、多くの觀測者の一致した意見であつた。そこでかような形勢のもとに米國がこの提議をしたのは、そも〳〵その目指すところは五國會議ではなくて、三國會議であつたと臆測する人がある。いな米國の目指してゐるのは三國會議ですらもなくて、二國會議だといふ、穿つた批評をする人さへもある。私はもとより、どうだか知らぬ。けれどもこの軍縮會議から先づフランスとイタリーとがさび落とされ、そのあとに日英米の三ケ國が殘つたことには、

おのづから意味深長なものがある。なぜならばいま世界を威嚇してゐる第二の世界戰爭の大渦卷の中心には、何人もこの三國の姿を想像せざるを得ぬからである。戰爭の責任者となる機會を最も多く持つものが、いつでも最も熱心な平和の愛好者なのである。

○

軍備の縮少どころか擴張の必要を感じてゐる國が、軍縮會議を提唱し、軍備縮少の餘地のないことを聲明する國々が、欣然としてこの商議に參加せざるを得ぬこの痛ましい矛盾は、一面においては、第二の世界戰爭の危險が、ます〳〵近づき來つてゐることを物語る。歐洲戰爭に先だつ世界的不安の時代にも、幾度びか平和の維持を目的とする國際的會合が開かれた。（そして最も熱心なその提議者は、ツアーのロシアであつたことを記憶せよ！）。當時國際政治の舞台に主要な役割を演じてゐた各國の大政治家のうちの一人といへども、歐洲戰爭を豫期したものはない。彼等は知らず識らずこの戰爭の準備をし、知らず識らずこの戰爭の機運を促進し、そして自ら造り出してゐるこの危險に對して、半ばは眠り半ばは醒めた夢心地の恐怖をもつて、これを回避する努力をした。この努力は、戰爭の近づくにつれてます〳〵緊張した。たゞこの間に、迫り來る世界戰爭の危險を明白に意識したのは、國際無產階級の運動であつた。第二インタナショナルの歷史を讀むものは、一八八九年の創立大會から一九一二年の最後の大會にいたるまで、これを一貫した著るしい特質が、來るべき世界戰爭に對する警戒と抗爭にあつたことを見落さぬにちがひない。そして資本主義の世界に對する無階級の見解は、現にこの世界の運命を指揮してゐる世界の主人、世界の支配者にくらべて、嶄然として一頭地を拔いてゐることを看過せぬにちがひない。

國際無產者運動の先見した世界戰爭は、遂に事實となつた。この戰爭は、それに先だつた軍備競爭をきれいに清算する『最後の戰爭』のつもりで戰はれた。しかし事實はそうではなくて、ヴエルサイユ條約のうちには、第二の世界戰爭の卵がちやんと產みつけられてゐた。平和條約は平和の始まりではなくて、新しい世界戰爭への第一步であり、それは平和の決勝點ではなくて、新しい軍備競爭の出發點となつた。これは一九一九年以後の、列國の軍備競爭を見ればすぐ分かる。ヴエルサイユ條約のうちに產みつけられた戰爭の卵は漸やく孵化して、資本主義の頸筋や脊中を這ひまはる。ロカルノ條約のブラシで刷き落とすと、今度は太平洋のあたりがむづむづする。

資本主義は一つのプロセスであつて、それは固定し靜止した狀態で存在するものではなく、常に動いてゐる。それは發展してゐなければ必ず凋落してゐる。いな發展そのものが、即ちその凋落である。各國の資本主義は存在するためには、必ず發展しなければならぬ。發展するためには、原料と市場と投資の機會と安い勞働力とを、獨占しなければならぬ。資本主義の存在は帝國主義を必要とする。帝國主義は大砲と軍艦とを必要とする。

避くべからざる軍備競爭と、避くべからざる國民の負擔の增大と、避くべからざる大破綻の豫覺とは、一方には軍艦の建造を急がしめ、他方には軍備競爭を制限しようとするあらゆる努力となつて現はれる。この二つの相反した努力は、帝國主義的發展の進行に伴ふて、いよ〳〵その緊張度を加へてくる。これは帝國主義的發展といふメダルの裏と表であるから、相反してゐる。けれども裏と表だから、帝國主義的發展のメダルから、どうしてもその一方を取り去ることはできぬ。第二の世界戰爭の危險の切迫が、ヴエルサイユ條約から發足した資本主義的發展の進行を測るバロメータアであるように、軍備縮少と戰爭回避の努力が緊張することは、世界戰爭の切迫を測るバロメーターなのである。

○

かうして第一次の軍縮會議が開かれた。かうして國際聯盟には、軍備縮少準備委員會の仕事が始まつた。(この委員會は、問題を解決はしないで、軍備とは何ぞやといふ問題に初まる有らゆる問題を提起する貴重な仕事をやつてゐる。それは資本主義と資本主義の下においては、各國の國防に差支へを起こさぬやうにして、なほかつ軍備を縮少することが、如何に絕望的に困難な事業であるかといふことを徹底的に證明する貴重な材料を蒐めてゐる)。かうして今はまた、第二次の軍縮會議が開かれようとする。

軍備の縮少と負擔の輕減は、もとより必要である。しかしながら軍備の競爭的擴張にいたつては、もとより一そう必要である。そこで競爭國の軍備を縮少することが、最もよいこの問題の解決方法なのである。

そこで比率の問題が、軍縮會議の中心的の問題——といふよりも、寧ろ軍縮會議の全問題だといふことになる。若し自國に都合のよい比率が採用せられる保障さへ與へられるなら、すべての國は立ち所に、如何なる國の提唱する軍縮會議にも、欣然として參加するにちがひない。

然しながらこの比率は、決して『公平』なものであつてはならぬ。一方のグループの國々が、他のグループの國々に對して決定的に優越した軍備を持つてゐる時にのみ、一方が他方に屈從する。そして資本主義世界の平和が保たれる！ これに反して『公平』な比率に各國の軍備が縮少せられるなら、言葉をかへて云へば、各國がおの〳〵その國防の上から必要なだけの軍備を持つてゐるならば、帝國主義的戰爭の可能は少しも減じない。

であるから軍縮會議の眞實の意義と目的とは、公平な比率の發見にあるのではなくて、利害を均くする一團の國々が、利害を異にする他の一團の國々に對して不公平な比率を押しつけることにある（フランスとイタリーとは、これを押し付ける自信がないから參加しなかつた。）そこで問題は、何人が押し付ける光榮を持つかといふことにある。軍縮會議とは、畢竟この押付ける權利の爭奪戰であつて、それは帝國主義的鬪爭を阻止するものではなく、帝國主義的鬪爭そのものゝ一部であり、その延長なのである。

○

世界戰爭のためにその根柢を震撼せられた資本主義は、もはやヨーロッパの境界内だけでは、その基礎を修繕することができぬ。そこで資本主義列國の帝國主義的勢力は、支那に殺到した。支那は忽ちにして、全世界の帝國主義的勢力の交叉點となつた。そしてこれがやがて支那の反帝國主義的民衆運動に點火したのである。

地球の表には、いたるところに火山があり、いたるところに火山脈が走つてゐる。その通りに、資本主義の世界には、いたるところに帝國主義的戰爭――第二の世界戰爭――の火山脈が走つてゐる。そして現在の瞬間において、最も活動してゐるものが、太平洋の火山脈なのである。佛伊日英米の五ケ國のうちで、太平洋における利害關係の最も密接な最後の三國が、特に熱心な平和の愛好者であつたことは、もとより偶然でない。

（五）軍事上の純理と政治上の實際

水野廣德

○撤廢か縮少か

歐洲戰爭の苦き經驗を嘗めたる現代人は、最早軍備は平和の保障などと言ふ者はあつても信じるものはあるまい。然る時軍備の目的は何である？ 國內の治安維持に要する少數の警察的兵力を除くの外は、外國との戰爭に備ふる爲めである。

低級ながらも國際道德が現代程度に進み、曲りなりにも國際秩序が現代程度に整ひ、殊に人間の思想が進步して民族自決、民族解放の叫び高き現代に於ては、武力に依つて他民族を征服し、兵力を以て他國家を侵略する如きは、縱令成吉思汗や那翁の如き好戰狂が再生するとも、到底行はるべき事ではない。之を以て現代の戰爭なるものは過去に於けるが如く、國家の安危とか、民族の存亡とか云ふ問題の爲めでなく、專ら經濟上に於ける利權爭奪の爲めである。然かも是等の利權たるや、興廢存亡の國運民命を賭してまでも爭ふ程に重大なるものではなく、且つ又現代戰爭は巨額の戰費を要するが爲め、縱令戰爭に勝つも其の得るところは其の費す所を償ふに足らざるが常である。之を以て紛爭の兩國ともに問題の解決を戰爭に訴ふる程の決心もなく、然ればと云つて國家の面目上空しく手を引くことも出來ず、騎虎の勢に引摺られて心ならずも遂に戰を開くに至るのである。故に若し信頼すべき仲裁者若くは權威ある仲裁機關あらば、双方共に調停を委任することを拒まぬであらう。既に侵略戰なく、利權戰亦仲裁に依つて解決し得るとせば、戰爭を目的とせる軍備の必要と價値とは著しく減じたるものと云ふべきである。過去の軍備は國家の生存を擁護する爲めに必要であつたが、今日の軍備は國家の利權を保護する爲めに必要なのである。明日の軍備は果して何の爲めに必要となるであらう。斯くの如く軍備の必要と價値との減少は、やがて不要と撤廢とに達

する道程である。

現代世界に於ける軍備費の總額は、少くも毎年七八十億圓に達して居る。何れの國も國費の二割乃至四割を軍備費に投じ、我國の如きも先年の華府協定以來海陸の軍備を相當縮少したるに拘はらず、尙ほ歲出の三割に近き約五億の軍備費を年々豫算に計上し國家の諸施設中最多額を占めて居る。而かも自然のままに放置すれば、兵器の改良進步等に伴ひ、軍備費は今後增すことあるも減ずることはあるまい。今や人文の發達に依り、一方に於ては文化的諸施設に多くの經費を要すると同時に、他方に於ては國防の名の下に巨額の軍備費を支出することは、何れの國に於ても大なる苦痛とするところである。左れば國家の安全が確保せらるゝ以上、此の不生產にして國民の生活を脅威する軍備を減廢することは、今尙ほ侵略の可能を夢みる時世盲と、軍備の大なるを以て國家の名譽と思惟する封建思想家と、軍備に衣食し軍備に寄生する或一部の者とを除くの外、世界識者の等しく希ふところである。

今や國際聯盟を始め幾多の平和團體に依りて、軍備の縮少撤廢が企てられ唱へられて居る。是等の運動に從事せる人々の中には、眞に世界の平和、人類の福祉と云ふ崇高なる思想の上に立てる人も素より澤山あるであらうが、一面には又國家經濟と云ふ功利的實利主義より發足せる者も尠くないであらうと思はれる。現に世界平和を目的として生れたる國際聯盟の如きも、其實權を握れる常任理事國なるものは、何れも世界の强大國として多數の屬領國を有して居る。而して是等の强國は口に聯盟の主旨に贊して、世界の平和や國際の正義や或は人種の平等さへも唱へながら、自國の占有せる被壓迫民族を解放しようとはしない。既に被壓迫民族や被搾取民族が存する限り到底世界の平和は求めらるべきものではない。故に國際聯盟が世界平和の爲めに軍備を減廢せんとする主旨は、誠に尊き人道的であるけれども、聯盟各國の爲せる處は軍備の減縮に依つて成るべく經濟的に、自國既得の利益を保持しようといふ功利的目的に外ならない。

元來現代の軍備なるものは侵略的帝國主義の產物である。侵略には常に必ず武力を必要とすると同時に、之を防ぐにも亦武力を要する。是に於て軍備なるものゝ必要が生じたのである。然るに第十九世紀の後半に於て阿弗利加の分割が終り、亞細亞の侵略が片付きたる後は、最早や世界に侵略の目的物が無くなつた。斯くて侵略的帝國主義は防禦的帝國主義に方向を轉換し、軍備は平和の保障などと稱へて、既得獲物の保持の爲めに必要となるに至つた。恰かも治安警察法のストライキ禁止に依つて

搾れるだけ搾つた資本家が、最早や搾ることが困難となると、治安維持法に依つて既得の富を擁護せんとすると同様である。

軍備が帝國主義の產物である以上、其侵略的たると防禦的たるとを問はず、帝國主義の存する限り之が撤廢は望まれない。併しながら軍備の縮少は可能である。殊に防禦的軍備は經濟的理由の下に於て、年と共に其の縮少の可能性を大たらしめる。何故となれば、侵略的軍備は其の投じたる資本に對し、時としては之に數倍するの利益を收むることあるも、防禦的軍備は何等の利益を生ぜざるが故、各國ともに損をせぬ限り資本の引揚を望むからである。

其の人道的なると、巧利的なるとを問はず、軍備の縮少は事實に於て、人類の最大不幸事、最大悲慘事たる戰爭の勃發を緩和し、國民の經濟生活を豐かならしむる點に於て歡迎すべきである。唯今日の軍備縮少運動なるものは、世界平和と云ふ人道問題として思想的に考究するよりも、不生產國費の節約と云ふ經濟問題として實務的に取扱ふことが適當であることを考へねばならぬのである。

○競爭か制限か

世界を通して年額百億圓に近き經費を使ひ、五百萬に近き壯丁が夏も、冬も、降つても、照つても、朝から晩まで、國防と云ふ美名の下に戰爭の稽古をして居る。之で軍事が發達せぬならば、軍人は大金を使つて眠つて居るか遊んで居るかである。併し軍人は決して眠つても遊んでも居ない。戰術戰技はいざ知らず、武器兵器は年から年中舊きものが改良せられ、新らしきものが發明せられて居る。

一國に於ける新兵器の發明や或は兵力の變化は忽ち全世界の軍事界に衝動と影響とを與へずには措かない。人間本位で嚴秘主義の陸軍に在つては兵器の競爭は比較的甚だしからず、且其兵力變動の影響するところも接壤國位に過ぎない。之に反し軍艦本位で開放主義の海軍に在つては一隻の小驅逐艦とても外國に秘して製造することは不可能であるのみならず、其兵力の增加は忽ち全世界の海軍國に影響するのである。例へば佛國が五萬の陸軍を備ふとも我國とは殆ど沒交渉であるが、一隻の戰艦を造ることは我海軍兵力に影響するところ尠くない。況して軍事上の想定敵國と見做せる國に於ける驅逐艦一隻の建造と雖も、軍事眼を以てせば雲煙過眼視することを許されない。兵力の均衡を維持する爲めには我も亦一隻を造るの必要を生ずる。

最初彼が一隻を造りたるは、彼我兵力の關係上、彼として必要を認めたるが故である。然るに我亦一隻を造れば、彼として

は更に一隻を造らざるを得ない。斯くして自ら軍艦製造の競爭が始まるのである。其の種類の何たるを問はず、凡そ物質の競爭には必ず經濟力の後援を必要とする。戰艦一隻八千萬圓を要する如き海軍の競爭が激烈となれば、經濟力豐かならざる國は財政に窮迫を告ぐるに至るは明らかである。そこで大藏大臣が金庫の扉を締める。海軍大臣が國防の責に任ぜずと威嚇する。軍國主義者が內閣打破を叫ぶ。政府が已む得ず無い袖を振つて、軍艦製造の爲めに增稅する。他の文化的施設に要する國費を節約する。當然の結果として物價が騰貴し、產業が衰へ、文化が退步して國民の生活を脅やかすに至る。斯くて何れか一方が經濟的に屈伏するか、或は突發的に戰爭を開始するまでは軍艦製造の競爭は底止しない。陸軍の競爭とても似た樣なものである。之が軍備競爭の當然踏むべき運命である。

軍備競爭の弊は獨り是のみでない。凡そ競爭なるものは如何なる性質種類のものと雖も、人間をして敵愾心を發せしむるものである。或は反對に敵愾心が有るが故に競爭が起るのかも知れない。野球の競技ですら、熱急的な日本人などは敵愾心の激するところ、遂に暴力沙汰に及ぶことが珍らしくない。決して國民の神經を最も刺戟する外國との軍備競爭に至つては、其の敵愾心の及ぶところ圖り知られない。殊に此間に乘じて屢不純なる煽動的排外宣傳が行はれる。其の國交の和親を傷つくるとは勿論、一本のマッチから如何なる猛火が燃え上がるか判らない。歐洲大戰はサラゼウォに於ける一發のピストルから打ち出されたのである。之が軍備競爭に當然作ふべき危險である。

利害相反せるか、感情衝突せるか、或は歷史的怨恨あるかの兩國間に於ける軍備は、之を自由に放任すれば競爭は到底避け難き自然の運命である。競爭を防がんと欲せば何等かの手段方法に依つて、相互に軍備を制限するの外はない。元來總ての生物は自由を愛する天性を有して居る。人間に於て此の性は最も發達して居る。而して制限は自由の反對である。故に制限は人間性に反し、人間の好まざるところである。從ふて制限には相當の苦痛を忍ばねばならぬ、相當の犧牲を拂はねばならぬ。同時に制限には或は精神的に、或は物質的に、或は對內的に、或は對外的に、何等かの壓迫が必要である。否な寧ろ壓迫あるが故に制限の必要が生ずるのである。酒煙草を制限するは健康上の壓迫に由るのである。臺所の入用を制限するは家計上の壓迫に由るのである。軍備と雖も此原則を破ることは出來ない。

抑も軍備は現代國家の重要なる施設である。少くも重要なる施設と認められて居る。故に之を制限する爲めには、相當大なる苦痛と犧牲とを忍ぶと共に、相當大なる壓迫がなければなら

ぬ。今日軍備制限の必要を感ぜしむるものは、一は戰爭の危險と云ふ精神上の壓迫である、二は軍備費に對する經濟上の壓迫である。併し日本に在つては國民の多くは、或は精神上の壓迫を感ずるどころか寧ろ戰爭を望んで居るかも知れない。是れ日本に於て軍備縮少の聲が歡迎せられざるのみか、動もすれば非國民などと惡まるゝ理由の一つであらう。既に精神上の壓迫を感ぜすとすれば、日本に於ける軍備制限の必要は單に經濟上の壓迫のみである。故に若し日本にして直接にも、間接にも、積極的にも、消極的にも、軍備の爲めに經濟上の壓迫を感ぜずとせば、軍備制限の必要を認めぬであらう。併し事實に於て日本は軍備の爲めに相當大なる經濟上の壓迫を被りつゝある。そこで愈軍備を制限すべきや否やは、制限に依つて受くる經濟上の利益と、制限に依つて蒙むる種々の苦痛と犧牲と、何れか大なるやに依つて決せられるであらう。

先年の華府會議に於ては日英米三國の主力艦の比率が三―五―五に協定せられた。此協定は三國何れの國に於ても、一部の國民には極めて不評判である。日本に於ても之を以て米國のペテンとか、壓迫とか稱へて頗る憤慨して居る者もある。會議に於て果して米國が如何なるペテンを弄したか又は如何なる壓迫を加へたかは知らぬが、日本が此の協定に調印したる眞の理由は米國のペテンや壓迫にあらずして、自國に於ける經濟上の壓迫であつたのである。當時日本にして經濟上の壓迫さへ無くば、軍事上より見て當然不利益なる協定に應ぜねばならぬと云ふ理由は毫も無かつたのである。華府協定に依つて日本は現在每年二億圓乃至二億五千萬圓位の軍艦製造費を節約し得て居る。若し同協定に依る海軍制限が無つたなら、今日日本は海軍費のみにても約五億圓を要して居るであらう。我等は華府協定に向つて感謝せねばならぬのである。

國際聯盟の軍備準備委員會が軍備學の討論に雄辯を練りつゝある間に、巡洋艦の競爭は漸く高まらんとしつゝある。此時に當り米國大統領が第二海軍縮少會議の開催を提議したるは蓋し時宜を得たるものであらう。之に對し帝國政府が何の躊躇するところもなく、他の諸國に先じ欣然として應諾の回答を發したるは、是れ亦宜しきに適するものである。然るに財務當局の言として新聞に現はれたるところに依れば、

今回の軍縮會に於て縱令補助艦の協定が成立するとするも、之に依つて我財政上に利するところは恐らく四千萬圓位に過ぎないであらう。我國今日の財政に對して四千萬圓は左程大なる額ではない。

とて、暗に協定に應ずる必要が無い、或は協定に依つて左程

利するところが無いことを諷して居る。併し斯くの如きは極めて皮想の觀察であつて、枝のみ見て幹を見ざるの論である。補助艦協定の成立せざる場合は必然的に激烈なる競爭の起ることを豫期せねばならぬ。米國に於ては巡洋艦建造熱が既に强烈なる勢を以て地下に燃えつゝある。競爭一たび起る時、我製艦費の增加は一億となるか、一億五千となるか豫測が出來ない。協定が成立すれば減じ、成立せざれば增す、其差は恐らく四千萬圓に數倍するであらう。併し又米國其他の國が如何に補助艦を擴張するとも、日本は現在勢力を以て滿足すると云ふなら別問題である。

○比率か對等か

軍備は相對的である。即ち相手が大なれば我も亦大を要し、相手が小なれば我も亦小にて足ると云ふのが、今日の一般に認められたる軍備に對する定說である。併しながら之は國家の經濟等を加味したる政治的見解であつて、戰爭本位の軍事的見地より言へば、軍備は絕對的にして多々益可とするのである。敵の一隻の軍艦に對して我も亦一隻を以て戰へば、勝利の公算は二に一である。然るに敵の一隻に對して我れ二隻を以てすれば、勝利は殆んど確實となる。更に三隻四隻となるに從ひて益有利となることは疑ふの餘地がない。獅子は兎を搏つにも全力を用ゐると云ふが、小敵と雖も侮らざることが戰の要訣である。敵と戰ふに我力が强過ぎて困まると云ふことは絕對にあり得ない。故に戰爭の見地に於ては軍備は大なれば大なる程有利である。從うて戰爭の十露盤より割出されたる軍人の軍備計畫が、自ら大となるのは理の當然である。

とは云へ、國家は戰爭のみに依つて生きるものではない。故に軍人が軍事眼を以て見たるところをば、國家は更に經濟、財政、外交等の眼鏡に依つて政治的に調節することが必要である。元來政治の妙と要とは、科學的に研究せられたる純理を、國民の實生活に適合する如く實際化することである。法律の純理より言へば殺意を以て人を殺したる者は極刑に處せらるべきである。然るにそこに政治の力が働くことに依つて、是非と當否は別とするも山崎米伯氏の言ふが如く「甘粕は三人殺して三年半、久さん未遂で無期懲役」と云ふ樣なことになるのである。左れば軍備の純理より論ずれば軍備縮少制限の如きは到底行はるべきものではないのである。

前に述べた如く、國際間の軍備は競爭か將た制限かである。軍備競爭の苦痛と弊害とは各國ともに既に充分體驗濟みである。然らば之を制限するとせば、何を標準として如何なる程度

に如何なる方法を以て實行するかゞ問題である。國家は對等なりとの純理より論ずれば、國防權の對等、從ふて軍備の對等と云ふことに一點の疑ふべき餘地はない。併しながら種々の事由に依り對等の軍備を以て滿足し得ざる國がある故に競爭の生ずることも、是れ亦動かすべからざる事實である。既に事實の現存する以上、今更競爭の是非を論難する場合でなく、現存の事實を如何に解決處理すべきかを研究することが必要である。先きの華府會議に於ては主力艦及航空母艦の建造競爭を避くる爲め、日三、英五、米五の比率を以て協定した。國防對策の純理より見て、日本國民が不滿を抱くのは當然である。併し又政治の實際より見れば不平等協定に應ずることが必要であつたのである。

華府協定の比率に不滿或は不安を感じたる我海軍は、主力艦の缺を巡洋艦に依つて補はんと策したるものゝ如く、巡洋艦の相當大なる擴張を行ひ、米國亦之に應じて玆に漸く巡洋艦の競爭を催成せんとしつゝあるのが現時の狀態である。之が爲め兩國民間の感情は漸次阻隔し、人形交換に依つて得られたる好感の如きは、軍艦一隻の建造に依つて破壞されて仕舞ふであらう。華府會議に於て補助艦艇制限の不能なりし事は、米國としては恐らく佛作つて眼を入れぬ憾があるであらう。殊に米國に於ける巡洋艦擴張熱漸く高くして、最早や大統領の努力を以てするも制し切れさらんとせる今日、米國大統領が海軍縮少に焦慮するのも無理はない。

今回開かれんとする會議の眼目は言ふ迄もなく、補助艦艇就中巡洋艦の制限協定である。米國の意向としては、補助艦艇に對しても、主力軍艦同様三—五—五の比率を適用せんとするにあるらしい。之に對して我海軍當局者は「日本の海軍力は最少限度」とか「三五五の比率には斷じて應ずることが出來ぬ」とか言つて居る。併し之は軍事當局者の軍事的意見であつて、國家としての政治的所見は別に存することゝ信ずる。元來比率の六割とか七割とか云ふ議論は海軍大學校學生の戰術問題であつて、國家としては今一層高所大所から達觀せねばならぬのである。國家が政治的に許すならば、何ぞ必ずしも七割と言はん、軍備の本質に照らして八割九割十割は愚か尚ほ以上をも主張すべきである。若し又國家が政治的に許さぬならば、徒に戰術問題の七割に拘泥する必要は無い。五割六割でも忍ばねばならぬであらう。此點に於て華府會議に於ける我全權たりし加藤友三郎氏は、慥に政治的識見を有てる軍人であつた。

今回米國大統領の提議に對し、華府協定調印五個國中、佛伊兩國は會議に參加することを拒絕した。其の理由の何たるを明

はず、誠に遺憾の至りである。是に於て殘るところは日英米の三國である。此等の三國に依つて果して會議が開かるべきや、又從令開かるゝも有効なる協定を遂げ得るやは頗る大なる疑問である。此際我國民は事實を事實として卒直に認め、冷靜に考へねばならぬ。華府協定成立以來、米國は大統領の大なる努力と苦心とに依り、補助艦建造を大に制限して居るのである。大戰中急造したる三百隻の驅逐艦は別とし、巡洋艦に至りては艦齡滿期の廢艦同樣なる舊式艦を除き、今日の實戰に耐へ得るものは建造中のものを加へて、日本の二十九隻（排水量十七萬五千噸）に對し、米は僅に十五隻（排水量十二萬五千噸）を有するに過ぎないのである。故に今回の會議にして不成立に終はるか、或は協定不調に歸せんか、米國は補助艦就中巡洋艦の大々的擴張に着手すべきは豫想の中に置かねばならぬ。而して夫が日本の反對に依りて不調に歸したる場合に於ては、感情の走するところ其の競爭的態度は一層激烈となることも覺悟して居らねばならぬのである。國家の經濟力に於て到底競爭に耐へ得ざること明かなる我國としては大なる苦境に立たねばならぬであらう。

之と關聯して我國民の留意すべき尚ほ一層重大なる問題は、今回の會議こそは五年後に滿期となるべき現存華府協定繼續の試金石たることである。若し不幸にして今回の會議が不成功に終り、補助艦建造競爭にして開始せられんか、滿期と共に華府協定の自然消滅は之を想像するに難くない。佛伊兩國の如きは華府協定の滿期消滅を待つて居るのではないかとさへ疑はれる。然る時我國は八八艦隊の昔に返へりて、一隻八千萬圓の主力軍艦建造の競爭を再開せねばならぬのである。第二海軍軍縮會議に幸福あれ！

（六）飛行機を通して觀たる補助艦問題

長　岡　外　史

人間界の科學が進歩するに從ひ、戰爭の形式に革命を與ふる事は當然の事である。今日より原始時代の戰爭を顧れば兒戲に・

等しきものがあると同樣に、數年後に於いて今日吾々が懸命に最善最良の戰爭方式なりと考へるその事が一つの兒戯にも劣る事に成るであらう。而して科學進步の極致には戰爭絕滅と云ふ極樂境に達する事もさう遠くはあるまいが、取敢えず現下の狀況に於いては飛行機が驚くべく恐るべき發達を爲した。飛行機の評判が良く成るに隨ひ、本家爭ひが國際的に起つて居るが、それは閑人の閑日月の研究に讓り、兎も角亞米利加のライト兄弟が佛蘭西に行つて飛んだのが明治の三十九年である。然れば彼飛行機は今年取つて二十二歲、漸く徵兵適齡に入つた青年であるに係らず、彼の生長發育は驚嘆すべきものがある。

彼の九歲の時世界戰爭が始まつた。彼は幼年乍ら戰場に於ける功名手柄實に拔群であつた。彼の善惡良否は直ちに、戰爭の勝敗に關係する直覺上から、交戰諸國は金力智力の有らむ限りを盡してその改良進步を競つた結果、戰爭の末葉に於いては彼は戰場の主要武器と成つた。即ち戰爭を始むるにも飛行機、戰爭を經續するにも飛行機、戰爭をへ終しむるにも飛行機、是無くては戰爭の夜は明けないと云ふまでに立ち至つた。彼の戰場に於ける働き振りを叙述する事は頗る興味ある事であるが之も亦姑く省略する事とする。

戰爭偃武の後さしもの歐羅巴諸國もいさゝか戰爭に疲れ經濟が苦しくなつて一般武器の進步は少しく停屯の姿であるが、飛行機は各國とも白熱的の競爭を續くる事此所に九年、今日では怖るべき進境に達し、休戰當時の飛行界の進步程度を顧れば全く隔世の感がある。其の歷年的進步の狀況を述ぶる事は之も亦姑く御遠慮申し上げ、左に昨年末に至る迄の大進步大發展の模樣のほんの一部を紹介せんに、飛行機は驚くべく大きく成つた。

米國政府が建造中の遠距離用爆擊飛行機は速力二百二十粁でニョーヨーク、ロンドン間を無着陸で飛ぶ設計である。獨逸のルムプラー飛行會社の發表せる大西洋橫斷水上飛行機は速力二百七十五粁で、航續五千五百粁、馬力六千、旅客百三十人の他六噸の荷物が積み得らるゝと云ふ。飛行船も亦昨年に至り著しく大きく成つた。米國オハイオ州アクロン工場で製作計畫中のJ・Z・Y飛行船は容積七百萬立方、四千八百馬力、時速百哩航續六千哩、乘客百人、貨物十二噸を積み得らるる。因に云ふが右の飛行機、飛行船には客室、大廣間、寢室、食堂、ダンスホールまで備へられて完美を盡した空中の大ホテルである。

次に無着陸航續距離の點から觀れば、昨年六月、佛蘭西のド・デリー中尉は、パリー、オムスク間四千七百粁を二十九時間で一氣に飛んだ。パリー——オムスク、オムスク——東京、略々同一距離であるから、佛蘭西より日本まで二た飛びで來ら

れる計算であると吾々同人は大いに驚いたが、その翌々八月、東京訪問で有名なるドアヂー大尉は歐羅巴ラテン諸國の一周飛行に於いて距離六千粁を四十時間四十分で一氣に翔破した。

右の如く飛行機（船）が次第に大きくなり、無着陸距離が著しく延びたと云ふ事は、平和的から考ふれば極めて結構な事であるが、戰爭的に着眼すれば甚だ怖る可きものである。而して斯くの如くに大進歩を爲したる飛行機が戰時に到り何を持ち來るかと云へば無論燒彈であり、爆彈であり、毒瓦斯である。近頃の燒彈は怖るべき進歩で直徑一寸、長さ三寸の圓筒に容れられたるテルミツトは攝氏三千度の熱度を出し、鋼でも鐵でも飴の如くに鎔解する。此のテルミツトをウラヂオストツク、上海等日本を包むところの大陸の海岸から容易に一千個を積んで日本の至る所の都市に殺到し、四五分間の間に雨霰の如くに投げつけ、再び容易に元の出發點に歸る事が出來る。次は爆彈であるが亞米利加のバーリングと名附くる三葉飛行機は爆彈二噸（三百瓩）を積み、前云うたウラヂオからでも上海からでも容易に日本內地の到る所に往復し得られる。次は毒瓦斯であるが、之には窒息性、催涙性、糜爛性、噴嚔性、中毒性等種々あるが、一噸の毒瓦斯は五丁四方の人畜蟲類までを完全に毒殺する力を有する。而して亞米利加の毒瓦斯全體の所在地エッヂ・ウードに於いては毎日二百三十噸を製出する準備がある。右に列擧したる數字に依り最近の飛行機が地上に及ぼす慘酷至極の模樣は、讀者諸君に於いて略々御了解が付くであらう。

扨之から本論に入り、此の飛行機が海上に浮ぶ所の軍艦に對し如何の大威力を與ふるかと云ふ問題を研究せんに、大正十年米國海軍豫算會議に於いて并つて世界戰爭中米國航空軍の總司令官として雷名を轟かせしミッチエル將軍が「ナアニさう澤山軍艦を造つても駄目だ。飛行機よりする爆彈に對しては艦隊は顏色がない！」と喝破した爲に海軍側の激怒を買ひ、然らば目にもの見せんとして行はれたる軍艦爆沈試驗は驅逐艦、水雷艇等に對し戰慄すべき效果を擧げたのであるが、就中五千三百噸の巡洋戰艦フランクフールト號に對し二十五發打ちつけたる爆彈の內三個命中し二十八分間に海中の藻屑と成つた。次は二萬三千噸の最強の戰艦オスト・フロイスライン號に對し十一發の內三個命中して十八分間に土左衛門と成つた。此の壯烈なる有樣を見て臨場の陸海軍武官、上下兩院議員、外國武官等は帽を打ち振つてミッチエル將軍の萬歲を祝した事は、世間周知の事である。之に類似する試驗は諸方にあるが、外國の例を取るまでもなく去る大正十三年六月九日我海軍省が相模沖に於て行ひたる軍艦爆破試驗に於て、一萬噸級の石見艦が麥田大尉の投

げつけた最後の一發に於いてグズ〳〵と成つた。昨年小島砲臺破壞演習に於いて海軍飛行機よりする爆彈の命中率は八〇%であつた。小島砲臺の面積は大軍艦のそれよりも遙かに小さいのに對し、百發の爆彈中八〇發の命中を得た事は驚くべき次第ではないか。又昨年八月七日、豐後の佐伯灣に於いて我海軍の行ふた試驗に於いて廢艦彌生、初春の兩艦に對し帝國第一等の戰艦長門山城より十四サンチ砲彈八十發を打ちつけたが當らなかつた。その翌日由良、河内の兩巡洋艦から百二十發の砲彈を送つたが是も駄目であつた。尤も距離も遠く吊光彈を用ひたのであるから當らないのも無理はないが、然しその翌日十一日飛行機から爆彈を投げつけたら兩艦とも譯なく打ち沈められたと云ふ實驗を我海軍では確かに握つて居る。

右の試驗結果は何を物語るものであらうか？　無論艦隊に死の宣告をしたとも、軍艦無用とも云はないが、今日の進歩した空中威力に對しては艦隊が終始脅威せらるゝものと覺悟せねばならぬ。更に又注意すべきは軍艦より打ち出す所の大砲は中々當らない、よし當つても今日の進歩したる軍艦を打沈める事は難しい。世界戰爭の際チュットランドの海戰に於いて英國の艦隊が獨逸の旗艦サイドリット艦に射擊を集めた大口徑砲彈二十四發、中口徑彈三發合計二十七發の命中を受け、艦内の將卒に二百餘人の死傷者を見たが軍艦はビクともしなかつた、のみかその速力にさへも少しの變りがなかつた。右の實戰の教訓は補助艦問題に對し如何の事を教ふるものであらうかは讀者諸君の御判斷に一任する。

恰も米國大統領クーリッヂ氏が補助艦制限の提議を爲したと云ふ此の際、國民は空中威力が軍艦に對して非常なる危險性を持つと云ふことは深甚に研究しなければならぬ。更に又注意すべきは帝國海防の主意目的は日本の領土領海並に内外に於ける既得の權利を保全すると云ふ消極の防禦にあると云ふことである。即ち專守防禦を帝國不易の國策としなければならぬ。海軍軍人が口癖の樣に云ふ攻勢防禦などは夢に見るべきものでない。是が大和民族が傳統的に平和文明を愛好する至誠の發露である。然らば則ち、無線電信電話、水雷、潛航艇、並びに飛行機、飛行船等空中並に水中の文明を良く利用すれば、日本海支那海を不可侵の池となすことはさう難かしくはない。日本を形作る所の總ての島々並びに支那、朝鮮に向つてする大陸との交通連絡を確保する事、必ずしも優勢なる軍艦に俟たなくとも出來得べき相談である。果して然らば補助艦問題の運命はその影甚だ薄きものと云ひ得べきではないか。私は斯く云へばとて海軍にケチをつけ、殊更に飛行機に花を持たせる積りはないが、

學が發達すればする程、水上に浮べてある鋼鐵製の大砲搭の運命は刻々に危險に迫る事を良く了解したならば吾々國民が現下の問題たる軍縮に對して如何の態度決心をなすべきかは自ら明瞭であらう。その判決は私の申すまでもなく國民諸君の自省に俟たねばならぬ

(七) 軍備縮小問題と華府會議

小林順一郎

軍備縮小問題は之を判然と二樣に區分して、考へなければならぬ。

一は國際上の考慮を基礎とするものである。即ち一國が其生存繁榮の爲に、世界的經濟戰場に於て、競爭諸國の横暴を斥け、威壓を受けざるが爲に、貯ふべき軍備は、其必要の最小限度にとゞめなければならぬ。其必要の最小限度は競爭諸國の軍備如何に依つて高低あるべきは勿論のことである。

一國が此の如くして定めた最小限度の軍備を、國際的地位に影響なく更に低下せしめやうとしたならば、是非國際間の協定に待たなければならぬ。

× × ×

「軍備の競爭は戰爭を誘致する」と米國はいふがその競爭の動機は果して何處にあるかを先づ考へて見なければならぬ。一は武力的に優越なる地位を占むることに依り自國を國際經濟戰上有利に展開せんとする積極的野心からであり、他はその威壓に對し自家の利益を保護せんとする止むを得ざる消極的必要からである。斯く考へるならば寧ろ武力に依て他を威壓せんとする野心こそ軍備競爭の源因となり、將來の戰爭を誘致するものではあるまいか。

米國は軍縮提唱の趣旨を世界平和人類共榮に藉口する、併し現在米國の偉大なる軍備は何のために存するのか。何れの國が彼に脅威を感ぜしむるのか、彼の偉大なる軍備こそ却て各國が

其威壓を免れんが爲にする軍備競爭の的になつてゐるのではあるまいか。例へば日本にしても然うである。寧ろ彼の威壓に備へんとして軍備してゐるので積極的に彼を威嚇し得る力は何の方面から見てもあり得ない。彼の軍備が増せばこそそれに備へる必要上苦しみ乍らも増して行くのである。泥棒があればこその戸締で、日本の軍備が戰爭を誘致する爲めでないことは恰も戸締の嚴重が泥棒を殖した例は曾てないと同樣である。かう考へれば彼こそ軍備の競爭を助長し將來の戰爭の萠芽を培ふものではあるまいか。

故に米國にして眞に世界平和人類共榮を目的とするものならば、彼の軍縮制限、或は軍備縮小の提言は次の如き意味のものでなければならぬ。

米國は軍備上他を威壓する如き優勢なる地位を得んとする野心を放棄し、現在の軍備は之を某々程度に制限或は縮小す。故に米國が其程度の軍備を以て他國の侵略的脅威を感ぜざる程度に、他國も其軍備を制限又は縮小されたし。

然るに之に反して、國際間に於ける軍備制限又は縮小會議に於て、自國自から、他に脅威を感ぜしむる如き、優勢なる武力的地位を確立しやうとするが如きは、根本に於て會議の目的と矛盾したものではあるまいか。

× × ×

次に一國が國際的地位確保の爲めに要する軍備の最小限度を定めた場合に、此最小限度の軍備を如何にしたならば最も經濟的に充實し得るやといふ第二の問題を生ずる。

現今の軍備は從來とは異り常備陸海軍の武備のみに依て優劣あるものではない、軍備的着眼よりする國家全般の施設、能力といふもので判斷される。此見地よりしたならば、陸海軍に與ふる年々の豫算などは國家として軍備に用ふる力の一端にしか過ぎぬ。從て其豫算の大は必ずしも軍備の充實ではない。寧ろ此の如き平時直接不生產的の豫算は極度に之を減少し而かも國家全般としては、國際的地位擁護上必要なる軍備を充實し得る方法を採用することが、眞に經濟的の軍備である。將來の軍備は此考で研究し、充實しなければならぬ。其研究の進步する程同一の軍備充實程度に對し平時陸海軍に用ふる豫算は益々減少し得る。

斯くの如く一國として充實すべき軍備の程度を一定し、然る後、陸海軍に用ふべき平時豫算を極力減少せしめんとすることを、世間では軍備縮小といふものもあるが、之は決して軍備縮小ではない、軍備の經濟的施設である。

自分が最初、軍縮問題は二樣に區分して考へなければならぬ

といふたが、その第二の考察は實は此經濟的軍備施設を目的として平時陸海軍に用ふる豫算を成し得る限り縮減せしめんとすることを指したもので、世間では誤解して、之をも一般に軍縮問題の內に包含して論じて居るから、假に此の如くいふたのである。

× × ×

然らば現在の帝國の軍備施設は最も經濟的に出來て居るかといふたならば、予はそうは思はぬ。

予の確信する處では我國に於ては之れに關する硏究は各方面を通じて一般に尙ほ幼稚で、依然として舊套に捉はれあること多く、頗る不經濟的の軍備をなして居る。假りに現在の軍備程度のまゝで行くとしたなら恐らく半分位の豫算にて足るべきは近世軍備を了解し少しく國內經濟に心を潜むるものゝ等しく首肯し得る所と思ふ。其他最近國防設備の發達につれ幾多改善すべきもの在るを思ふが、要するに之等の事は所謂軍事專門家のみの手に委すべきものでなく、國政としての重大部分として廣く國民一般の攻究すべき問題である。

× × ×

第二回華府會議に對する予の所見といふのが、それに就て思出さるゝは第一回の華府會議である。

第一回華府會議に於ける我外交の失敗は萬人の認むる所で今更その細目を列擧しようとは思はぬが、その根本的な失敗の原因を考ふることは今日最も必要なことでなければならぬ。

然らばその失敗の原因が何んであつたか。それは出發點に於ける着眼を誤つたことである。

抑々此の如き軍備制限若くは縮小問題を國際的に論じようとする場合には先づ第一に其目的から明かにしてかゝらなければならぬ。例へば此會議の目的が平和維持即ち戰爭を避くるといふが目的か。或は米國が武力上優勢なる位置を一の外交的手段に依て確立しようとするのが目的か。之等目的の如何に依て參列諸國の態度も變らなければならぬ。若し眞に戰爭の機會を減じ世界の平和維持に獻じようとするならば先づ戰爭の根本的源因といふものを究めてかゝらなければ眞の解決を得らるべきものでない。

最初に述べた如く米國人は軍備の競爭そのものが戰爭を誘致する如くいふがそれは前に言ふた通り、私よりすれば一の詭辯に過ぎない。寧ろ國際間に於ける軍備の不平均こそ將來の戰爭を誘發するものでなければならぬ。

若し此見地を以て華府會議に臨んだならば日本委員の態度は全く變つて來なければならぬ。それが又日本の外交的地位を高

める所以でもあつたと思ふ。

然るに日本委員は事その擧に出でずして、何等その根本趣旨を反駁する所もなく直に六とか七とかいふ數の討議に入ることを承知したことは外交上實に拙劣極つた話である。

私は當時佛國にゐたが海外に於てもこの日本の態度に對し當路の心ある者は皆眉をひそめ輕侮の眼を放つたものである。六といひ七といふ徒らな數の懸引の問題ではない。事世界平和のためであり人類共榮のためである。戰爭の禍根たる國防上の不均衡をなくし相互間に感ずる脅威を減少することこそ此會議の目的である。然るに米國は何故その國家間に於ける武力上の差を維持せんとするのであるか。現狀を基礎として比率を決定せんとするのであるか。彼の矛盾に對し飽迄論爭し彼の我儘を何處までも膺懲することこそ日本のとるべき途であつた。然るに最初からその威壓に屈してその提唱の趣旨の矛盾も指摘し得なかつたのみならず、却て之れに贊同したことは誠に遺憾に堪えない。

事實當時の日本としては此矛盾に對し最も抗議していゝ立場にあつたのである。當時の現狀から推して、我は彼の威壓を感ずるとも我から脅威することは事實上あり得ないことであつた。而も現狀を基礎としてといふに於ては我に步のあることは明かである。一方英佛伊等各國は大戰の創痍未だ癒えずその經濟的復興のために、米國の援助を受けなければならぬ立場にあつたのである。英國が日英同盟を擲つたのも結局米國の歡心を買はんがための一策に過ぎない。根本に遡つて物を云ふといふとは彼等のなし得ぬ所で、若し日本が此點に對し徹底的に抗議したなら佛國は手をうつて贊成したといふことは明かである。彼は大戰に於て海軍力を放棄し而もその放棄したまゝで協定に入るの最も不利な立場にあつた一事から見るも此事は明かである。

× × ×

而も失敗は之れのみに止まらない。鋭意討議を盡した比率の問題も單に現狀の誤算だけでなく之を專門家にいはしむれば防者の位地として他の脅威を感ずるか感じないかの大きな問題である。海軍一部の人の言に依れば十に對する七といふ數字は國防の最小限度であるといふ。即ち攻擊力の七割以下では絕えず脅威を感ずるものだといふ。而も某海軍有力者は之を過去の統計より學術的にも證明出來るといふ。然らば第一回華府會議の結果は、結局に於て、米國をして我が國を實力的に威壓し得る力を確立せしむることに同意したことになるのである。恰も豐臣家が第一回大阪陣の後に於て、德川家の爲に大阪城の外濠を埋立てさせられたと同樣の結果である。

× × ×

併し翻つて裏面より米人の心情を立入て忖度するならば彼としては次の如く思ふてゐるかも知れぬ、米國は他に侵略の意志は毫頭ない、歐洲大陸に出兵したも決して野心からでなく人道正義のためだ、然るに日本人は高尙な理想を有たぬ、日本人の有つ武器は侵略的の武器である。結局文明人の有つ武器は危險を伴はぬが半開人の持つ武器は危險である。此見地より米國と日本との軍備には當然差等を持つべきである。それが米國の使命であり國際間に於ける混雜を避ける途であるといふやうな思想が根本にあつてあの提案になつたのではないかとも思はれる。又米人としてあり得べきことにも考へられる。

玆に於て日本は仰せ御尤主義で行くべきか、根本的にその誤解を解いて進むべきか、とるべき態度は自ら明かである。

× × ×

軍備の經濟的施設、玆に軍縮問題は既に理論を離れ實際問題として我等の眼前に在る。之を内に見ては國家財政經濟上の緊急事であり、之を外に見ては國家發展上の重大問題である。正に第二回華府會議の開催を見んとする時再び前回の轍を踏まぬやう國家のために熱望して止まぬ。

（八）軍縮問題の狙ひどころ

法學博士　吉野作造

亞米利加の大統領から第二回軍縮會議開催の案内が來る。我が日本は逸早く之に贊同の旨を傳へやがて英國亦參加の意を表したけれども、佛伊兩國は早く既に拒絕の態度を決めて動かない。爲に人をして前途の成功に頗る危惧の念を抱かしめて居る。之に關しては我國の論壇にも兎角の議論がある樣だが、大體の空氣がこの會議に大した熱意を示さず、寧ろ軍事施設に又しても外部からの制限を受くるを好ましからずとするの風あるは、吾人の立場から觀て決して輕々に看過すべきことではな

い。

軍事に關しては我國の朝野に無條件にその縮少をよろこぶものと盲滅法に之に反對するものと二様の見解があるといへる。詳しいことは今述べぬが、只併し乍ら大體に於て我國一般の風潮が、已むを得ず亞米利加の誘引にひき摺られて會議には臨むものの、心から之に贊成するに非るは勿論、陰に陽にその成功をたすくべく特別の努力をしそうにないことは間違ないらしい。果して然らば、軍備縮少を要求する方の見解は現下の我國に於て仍ほ未だその勢ひ甚だ微弱なりと謂はさるを得ぬ。但し流石に時勢の影響は爭はれず、軍縮の必要を認むる見解は近來段々殖えて來た。元來優勢を誇りし軍國主義者も此頃は正面から露骨に擴張論を主張せない様になつて來た。否そればかりではない、外部の制限に束縛せらるるを欲せずとの口實の下に、せめては以上の縮少要求を喰ひ留めんとさへ考へて居るらしい。つまり幼稚な民衆の對外昂奮を巧に利用して自家の立場を擁護せんとするのであらう。併し濫りに外部からの制限に束縛せらるべからずといふまではいゝが、之に拘はりて軍縮會議に善處し誠意を以てその成功に助援するを怠るは、思ふに日本國民大多數の眞の要求ではあるまいと考へる。國民多數の意思なり要求なりに付ては、今までの所之を明確に且つ有效に表示するの組織と機關とが缺けて居る。若し他日之が十分に備へらるるなら、軍縮問題の如きその方針を定むるに決して困難はないと思ふ。而して心あるものは、その明白有效なる表示の機關がないからとて、決して之をいゝ加減に取扱つていゝとは認めぬであらう。

* * * *

どんな軍縮論者でも、兵備が全く要らないとか又は警察をモ少し擴張した位でいゝとかと、今日眞面目に主張する者はあるまい。最近の險惡なる國際關係を顧慮するまでもなく、假令文明諸國間の空氣が大に穩靜に歸したとしても、多少の兵備は必ずやつねに必要とさるるだらう。そこで先づ兵備は必要なものと前提してかゝる。問題は只どの程度にして置くかの點である。之がなか〳〵六かしい。餘りに低ければイザと云ふ時に國の存立が危く、又餘りに高ければ國家を不斷の疲弊に陷れる。而も國際關係の變移技術の進歩等に依て時々刻々その標準が異動する。之等のことは詳細に專門家の研究に待つて決めねばならぬが、我々一般國民の立場としては差當り先づ次の三點に注意しておくの必要がある。(一)軍備は動もすると擴張され勝のものであること、從つてこの點に關しては國民の常に鋭意之を監視するの必要あること。(二)一旦備へられた軍備は必要が起つて

も容易に減少され得ないものなること、從つて國際會議に於て軍縮問題の取扱はるることは、縮少を餘儀なからしむる一好機會として一應之を利用するの得策なること。(三)軍縮會議に於ける討議は概して現在の軍備を眼中におき、之れ以上の擴張競爭を制止しようと云ふに主點をおくものなるべく、而して我々國民としては之に拘らず獨自の着眼點から愼重に縮少の程度を講究するを妨げぬこと。換言すれば、所謂軍縮問題には國際的討議の題目たるべき相對的標準と國內の必要より算出せらるべき絕對的標準と二種類あり得ること。

斯く考へてさて今度の軍縮會議の討議を想像するに、その主たる題目をなす所の補助艦比率の如きは右の所謂相對的標準をきめんとするものたるや疑ない。而して我々は如何樣な主張をするにしても、又政府の提案を國民として支持するにしてもしないにしても、そは要するに相對的標準の決定に過ぎぬことを注意しなくてはならない。

第一回軍縮會議以來の狀勢を思ひ廻らすに、軍縮に關する輿論の趣向は、要するに大樣次の數項に歸着するものの如くである。

一、軍備擴張の此上の競爭はせぬこと。もつと減縮の出來るものなら減縮したいのだが、事實それが不可能だとすれば、差當り現在の勢力以上に擴張せぬといふことで滿足する。但し今のところ問題を海軍に限り、陸軍には及ぼさぬことにする

二、現在の勢力を基本とし、各國の間に比率を定め、その權衡を破らせぬと云ふが理論上の解決案であるが、之には二つの困難がある。第一は比率を定めるにつき所謂各國の實勢力といふものを如何の因子に依つてきめるかの問題に關し、第二は各國の勢力とは文字通りの「現在」の兵備を土台とするのか或は又戰爭直前の狀態に遡るのかの問題に關する。

三、比率をきめる根據となる各國の實勢力といふものを如何の因子できめらるるか。決め方の如何に依ては甚しき不公平の結果を來すものである丈け、之が實に容易ならざる難問だ。加之これの決定には動もすると各國の利己心が働き勝ちなので、問題の一層紛糾する恐れがないではない。現に今度の軍縮會議に關しても、我國ではこの點を專ら問題にして居るやうだ。

四、「現在の勢力」以上に擴張しないと云ふは、一見公平の如くであつて必ずしもさうではない。そは歐洲大戰の結果一方には過分に軍備を擴張したものがあり、他方には疲弊未

だ適へずして不當に軍備の過小なるがあるからである。理論上から云へば國力相應の軍備――さう云ふものが決められるなら――を銘々に有たしたが一番公平なわけだ。戰前は概してさうであつたと云へるが、戰爭に依つて國力の强弱に可なりの變動を見たのだから、戰前の形勢に依るは最早必ずしも正當でなく、さりとて現に軍備の恢復に努力しつゝあるものを無視して「現在」を標準とするのでは、一歩先きに整頓を完成した者には都合がいゝが、否らざる者には大なる不平の種となるも已むを得まい。是れ今度の軍縮提唱に佛伊兩國の頭として參加を拒める主因であらう。

五、斯う云ふ狀況の下に開かるるものとすれば、軍縮會議の成績は豫め大體分つて居る。即ち軍備の既に相當整つた日英米三國間に現實の勢力を標準として比率をきめることの外には出で得まい。從つて日本として今次の會議に最も利害を感ずるも亦主としてこの比率の問題であると謂はねばならぬ。

一體此種の問題は、いざ會議で決めるとなると、議論紛々として容易にまとまらぬものであるけれども、國民の常識としては、多く概して大體の見當のついて居るを常とする。例へば勞働時間の問題にした所が、國際會議の席上では甲論乙駁議容易にまとまらぬ樣でも、併し世間には自ら定論の歸着するものあり、理論上結局何處にそれが落ち付くかは決して六かしい問題ではない。是れ學者實際家の多年の研究が自ら歸趨を示して與れるからである。所が軍縮問題になると之れがない。少くとも比率のきめ方や「現在勢力」の算定方法等に付て、所謂專門家の定論なるものが丸で我々に示されてゐないのである。それで事が實に容易ならぬ難問として現れるわけなのだ。されば或る意味に於て之は目下研究中に屬する問題だともいへるし、斯うした問題の容易に解決を見べき機運はまだ熟して居ないのだといへる。それにも拘らず今日まで軍縮會議の頻繁に提唱されたのは、一つには軍備擴張の競爭が戰爭誘發の大原因たることの苦き經驗に世界の人一般が大に反省して來たのと、又一つには民衆の自覺に伴ひ國民の經濟生活に對する軍備の異常なる壓迫を此上忍び難しと感ずるものが、段々多くなつたからである。

* * * * *

以上論ずる所で明なるが如く、今度の軍縮會議で一擧に合理的解決案の求め難きは固よりいふまでもない。佛伊の不參加が會議の目的を半ば以上殺ぐのは勿論だが、日英米が腹を合せた所で、一方に好しとする所は他方の不滿の種となり、普遍的に歡迎さるる樣な結着は到底見られないと考へる。只間違のない

のは、之に由て無暴な擴張だけは十分に之を阻止することが出來るだらうと云ふことである。即ち不滿不平を云ひ乍らも、露骨な軍備擴張は今後ます／＼各國の遠慮する所となるだらうと思ふ。之れだけでも我々民衆は大に助かる。我々は一方に於て我々の對外的昂奮性に乘ずる軍國主義者の巧妙なる宣傳に警戒するを要すると同時に、他方に於ては縮少の實現を見得べき唯一の機會として軍縮會議を大に利用することを忘れてはならない。

但し茲に注意せねばならぬことは、斯種の軍縮會議の決定は、假令頗る合理的の標準を見出した場合と雖も、そは畢竟「現在の勢力」を基本とするものに過ぎざることと是れである。嚴格に云へば多少の出入はあらうが、要するに「現勢の維持」から遠く離るるものではない。換言すれば、現に有する所の勢力を一定の標準に依て計算し、その間の比率をきめ、それ以上擴張せぬと云ふ丈けの話に過ぎぬ。之に依て固より無暴の擴張を避け又之に基く過當の負擔から免るるはことは出來るも、それが果して我々の有つべき當然の程度の軍備なりや否やはまた自ら別問題である。軍縮會議の決定が我々の有つべき當然の軍備の最少限度だなどと速斷してはいけない。是れ私が之に相對的標準の名を附し、この外に別に所謂絶對的標準なるものをたてし所以である。

＊　＊　＊　＊　＊

理窟を云へば、私の所謂絶對的標準は、軍縮會議できめられた相對的標準に比較し、高いこともあり得れば又低いこともあり得る。前者の場合には、軍縮會議が我々の軍備を不當に低く削減したといふことになるから、他日の機會に改訂を要求するの準備をすると同時に、その限度内に於ける十分の整備に努め此上の削減を見る勿らんとに苦心せなければならぬ必要が起る。而して我國一部の軍國主義者は目今の形勢を斯くの如きものと考へて居ることは疑のない事實だ。今理窟を捏ねて之を爭ふ場合ではないが、斯の如きは決して國民多數の見解でないことは改めて説明するまでもないだらう。

然らば國民の多數はどう考へてゐるか。私の觀る所では、我我の有たねばならぬ軍備の程度は事に依つたらもつと／＼低いのではないかと考へて居る樣に思はれる。思ふに我國の軍備は、歐洲戰爭に依て可なり大なる擴張を見た。而して不時の急に應ずる擴張を今日に於ても仍ほ維持するの必要があるのだらうか。戰前に於ては隣境の不安といふことが尨大なる軍備を存置するの主なる理由とされて居つた。而してこの理由は今日でも引續き存在して居ると觀ねばならぬのだらうか。詳しいこと

は專門家の說明を待たねば斷定は出來ぬが、併し之れだけの擴張は必要だとて曾て提示された諸事由の殆んど消滅した今日、新に之に代る相當理由の發生したことの證明せられざる限り、現在の軍備に縮少の可能を信ずるは蓋し國民的常識の當然の權利であらう。而して今日國民の多數は熱心に軍備のもつと進んだ縮少を希望して居る樣だが、之を要求するの理由が實に單に右の點のみにとゞまるに非ることはまた言ふまでもない。

＊　＊　＊　＊

國民多數の常識が今日の軍備を過大に失すると認めて居るとして、さて之をどの程度に縮少すべきかは、一つは技術上の問題に關し、又一つは思想上の問題に關すると思ふ。

何を技術上の問題に關すると云ふか。之は二つの觀點から論ぜられ得る。

一、國防の標準（この事は後段に說く）が大體きまつたとして、さて之に應ずるに今日の設備が果して適當なりや否や、又兵の配置部隊の編成等にも果して改良の餘地なきや否や。ありとすれば之を實行することに依てそれ丈け能率が高まると云へる。從てまた人と金との上に多少節約の加へられ得る餘地も出來るわけである。

二、歐洲大戰の結果は兵器その他に異常の進步を來したと云ふ。私の聞く所に依れば、その進步發達の跡を追ふことに依て亦著しく人と金とを節約し得べしとやら。この點に付ては專門家の飾る所なき說明に接したいものである。

三、兵器その他の進步發達の一面は、自ら人をして軍事施設の今後ますます他の一般工藝設備との連繫協働を必要とすべきを思はしめる。軍事關係者が獨り超然として一般文化の活動と離れて居ては、到底時勢と伴つて行くことは出來ぬからである。斯う云ふ所からして、從來軍事獨占の施設とされたものの中、新に他の既設事業の圈內に讓られて然るべきものが澤山出來ぬだらうか。

由來改革と云ふものは言ふに易くして實行はなかなか六かしい。急迫の必要に推さるるまで因循姑息に其日を過ごすのが多い。知らず、我國の軍事當局亦果してこの誤りなきを得るや否や。此事につき私にいさゝか與り聞いて居ることもある。專門外の事とて之を玆に明言するを憚るが、兎に角斯の方面に於ても大に改良の餘地あるべきは私の疑はぬ所である。

次に思想上の問題に關するといふのは何か。之は外でもない、所謂國防施設を何の程度にとゞめるかの標準をきめるにつき思想上の見解が實に大に重きを爲すことを意味するのである。之に付ても先づ次の二點を念頭に入れておかれたい。

一、國内の警備としてどの位の勢力を要するかを判斷するに當り、例へば最近の青年の思想傾向などを馬鹿に危險と視る人と我々とは、根本的に頭が違ふのである。所謂疑心暗鬼におびえる輩に取つては、今の警察を何倍にふやしても猶ほ足らざるを憂うるだらう。

二、國際關係に付ても同樣だ。ロシアの赤化運動を怖れたり猶太人の世界顚覆を妄想したりしては、國防施設擴張の必要は際限ない。紛爭の解決を動もすれば干戈に訴ふると云ふ風の著しく減じた今日の時勢に滿足する人達と右の妄想家との頭の距離も大變なものである。

右の樣な次第で、國防論は或る意味に於ては實に思想問題なのである。軍備を適當の程度にとゞめ、國民の經濟生活を過當なる財政的壓迫から免れしめんとせば、我々は先づ思想問題から先きに始末して掛らなければならぬ。その反面に於てまた私共は、今日の軍備縮少反對論者に對つては、その見解の基礎たる實に國際關係に付ての謬見に根ざすのではないかを警告するの必要を思ふものである。

私の議論はあまりに抽象的に過ぎたやうだ。併しこの事に專門的智識なき吾々に對しこれ以上のことを確信を以て云へと注文するのは無理だ。たゞ國民普通の常識として以上述ぶる所。恐らく多數國民の聲を代表するものたるべきは私の疑はぬ所である。

社會時評

憲本提携の批判

吉野作造

所謂三黨首の妥協がどう兎の付くかと待ち構へて居ると、意外にも憲本提携といふ落ちつきを見せて一寸世間を聳かした。併し之を意外といふは世間一般の通說であつて、少しく政界の內情に通ずる者に取つては格別意外のことではない樣でもある。而して之に付ての毀譽褒貶もさま〴〵あるが、世間の評判には、大體見當を誤らざるが如くにして而も細かい點では可なり間違も多いやうだ。次に少しく之に關する私の見解を述べて見ようと思ふ。

× × × × ×

憲本提携は決して意外の出來事ではない。三黨首の妥協の跡始末として、之が唯一の豫則された結果ではないとしても、少くとも豫期された結果の一つであることは疑ない。

三黨首の妥協なるものは何に促されて起つたものか、その際言明された若槻首相の所謂「深甚の考慮」なるものは一體何を意味するものか。之に付ては本誌前號の拙論にも一度一顧を與へられんことを希望する。當時「深甚の考慮」に付ては、若槻內閣の投げ出しを意味し從て近き將來に於ける政權を意味すると說くものもあつたが、さうした確たる約束でなかつたことは、今となつては最早明白だ。尤も內容の判然とした言明でなかつたことは、同じ文字に對して三黨首の與ふる解釋がみなそれ〴〵違つてゐたことでも分る。そこで內容は初めから判然しないものであつたとする。そんなら若槻首相は只深甚の考慮を拂ひさへすればいゝので爾後の行動に何の拘束を受くる必要もないのかと云ふに、さうは行かぬ。少くとも德義上彼れは、

あした事態の當然の結果として、次の二點に一種の拘束を受けねばならぬものと私は考へる。(一)は解散は絶對に避けることである。これは說明するまでもない。(二)は憲政會が少數を以て政權を壟斷すると云ふ變態をば出來るだけ早き機會に於て始末することである。最近政界の一切の紛糾が其の源をこゝに發するを考へれば是亦怪むを須ゐぬであらう。

そこで三黨首の妥協なるものは、若槻首相に一種の道德的義務を課したことになる。自ら巧にこの變態的窮狀を打開するか又は之に成功せずして辭職するか、いづれにしても此儘では濟まされぬことと之れである。さてうまく局面の打開に成功すればよし、萬一成功を見ずして投げ出すとせば、理の當然として政權は遂に政友會に行く。政友會に行つたとて政局の安定を見るのではないが、憲政會の成功せざりし所をモ一度政友會をして試みしめようと云ふわけである。そこで三黨首妥協後に於ける政友會の策戰としては、ひたすら憲政會の政友本黨と相提携することを妨げさへすればいゝと云ふことになる。尤も政本兩黨の提携が出來れば問題はない。併し之は後藤子爵の斡旋ばかりでなく最近まで再三幾多策士の奔走を見たのだがどうしても旨く行かぬ。もうあゝなつては何としても元の枝には收らぬものらしい。さればと云つて本黨と憲政會の仲も、去年の秋以來著しく險惡になつた。マサカ今更もとの馴染に復へることも出來ないといふので、政友會は內心ひそかに近き將來に於ける政權の掌握を夢みて居つたと云はれて居る。そこでどうしても憲本提携の起らざるを得ざる所由がある。

政友本黨はどッちになつても旨い汁は吸へぬ。自ら天下の主人公となれぬ以上、寧ろ憲政會との交情を復した方が都合がいいとも云へる。憲政會としては、一旦握つた權力ををめ〳〵政に渡したくはない。この儘では併し乍ら引退も已むを得ずとすれば、是亦忍び難きを忍んでモ一度政友本黨を誘つて見ようとの氣にもならうではないか。それにまた政界の玄人筋の間には、政本提携でも出來て政局の安定する見込の立つのなら格別、さうでもない以上、憲政會に代つて政友會を起さしむるは無意味だといふ考もある。この考はまた周圍から無理にも憲本提携の實現を促す勢力として働いたに相違ない。斯う考へて來れば、三黨首妥協の跡始末として憲本提携の出現するは、實は豫期し得べき事柄だともいへるのである。

之を要するに、若槻首相は憲本提携の實現に依て所謂深甚の考慮なる言葉を以て約した政局打開の目的を兎も角一應は達した形になる。憲本提携が陰秘の間に行はれたるの故を以て之を三黨首の申合の裏切りなるかの如く說くのは當らない。三黨首

の一時的妥協は寧ろ之に續いて政本提携か憲本提携かの暗鬪を誘致すべき序開きと觀るべきものであつたのだ。

× × × × ×

憲本提携が斯く豫期し得べき事柄だとすれば、世人がひとしく之を意外の出來事と目してその醜怪を非難するのはどう云ふわけか。之は世人の政治思想が最近一般に長足の進歩をなした結果だと私は考へる。所謂職業的政治家輩は、一にも二にも議會の多數少數の關係を機械的に作出して政局の打開をはからうとする。さうした關係を作ることに依つて如何なる政治的罪惡が犯され如何に國民の利福の踏みにじられるかは必ずしも深く問はない。而して從來の大衆は政治家の巧言令色に釣られてその內面を見透す能がなかつたのだ。然るに昨今の世論は最早斯かる政客通有の慣用手段には迷はされなくなつた。今や彼等は直接に國利民福を考へる、又最も銳敏に理路の徹底を念とする。故に例へば當今の政局に對しても、速に解散を斷行して民意の歸趨を問はんとを要求する。少くとも正々堂々の論爭を以てして仍ほ議會多數の容るる所とならざらん乎決して解散を避くべきに非ることを要求する。蓋し是れが立憲の常道であるばかりでなく又眞に政局の根本的安定を見る所以なることを信じて居るからである。斯の方法の外に於て打開の途を求むるは、必ずや何等か隱れたる弊害を伴ふ恐れあるのみならず、又斷じて恆久的安定をもち來すものではない。斯くして天下の民衆は、實は若槻內閣成立の當初から、この事を說いて絕えず當局の反省を求め來つたのである。

加藤內閣の繼續としての若槻內閣には、その初め僅に政友本黨と斷ち難き情誼もあつたらう。併し去年の秋以來政友本黨の方が痺を切らして彼れに背いたのではないか。情實を去り理論に據つて正々堂々の快戰を試みる爲には是れ實に絕好の機會であつたのである。而して多數國民は實に之をわが若槻首相に期待した。直接首相に之を期待したといふに多少の語弊ありと云ふなら、國民はとにかく斯う云ふ要求に燃えてその實現を熱望して居たと謂つてもいゝ。換言すれば、國民は近年に於ける理論的覺醒の機運に促され又實際政界に於ける情實の跋扈の過ぎに愛想をつかし、公明正大の政治の本當に行はれんことに非常の熱意を有つ樣になつたのである。この時に方つて又しても情實一點張りの憲本提携が突如として出現した。是れ國民一般がその事のもと怪しむ可きに非るを顧慮するの遑なく、直に之に憤慨の情を寄せて已まざる所以である。

× × × × ×

國民多數の期待に反し職業的政治家の頻りに解散を回避す

は素より怪しむに足らぬ。我々國民は之を以て當代政客の利己心の現はれと認むるに躊躇せないが、併し他方に於て、政界一部の人が出來得る丈け解散を避けんと欲するのにも一應の理由あることを認めぬわけに行かぬ。蓋し立憲制の眼目は政權の歸着を民意に依て決せんとするに在る。而して民意を知るの最も明確なる機會が總選擧の過程に於て存するは言を待たぬ。故に立憲制に於ては本來總選擧は最も頻繁に行はるゝを必要とするものである。併し事實上さう頻繁に行ふわけにも行くまいが、之れだけは間違ひなく云へる、總選擧はその現實の必要のある限り決して之を避けてはならないと。之を私共は立憲政治の最も根本的な原則と認めて居る。我々國民が今度の憲本提携に不滿を感ずるのも、一にこの根本原則に據つての話なのである。

併しこの根本原則は無條件にその遂行を許さるゝのではない。之が許さるゝ爲には、(一)選擧は民意の本當の所在を知る爲のものだと云ふ主意が實際に枉げられずに貫徹さるゝとを要し又、(二)選擧は國民各自その良心の命ずるが儘に極めて平穩の間に行はれ之に依て社會生活の常規が毫も紛亂されざるとを必要する。多くの國に於て選擧は不幸にして斯の本來の注意通りに行はれない。不當に國民を昂奮せしめ、業を怠り產を治めざる位は無論のこと、果ては有形無形の悪徳の流行に依て社會の秩序を傷ふこと實に夥しきものがあるではないか。從て國民の本當の意思は毫も現はれず、折角の選擧は遂に國民を踏み台とせる政治家團の醜惡なる爭覇戰となり了るのである。之では選擧は憲政の進步の上に何の意味も爲さぬ。解散避くべきに非ず總選擧亦拒まずといふをば、無條件で我國でも主張することが出來るものか、流石の私も大に之を疑問として居る。普選の實施に伴つて選擧界の樣子は大に變るだらうとは思ふものゝ、總選擧を過當に怖るゝ我國政界一部の思想に對しても、私は全く同情がないと云ひ切ることを躊躇する。

そこで私は、出來る丈け解散なしに政局の打開をはからうと云ふ考方に對しても、大に之を諒として居るのである。純理論上の問題としては固より憲本提携に全然之を是認すべき根據はない。この點に於て私は世上の通說に全然同感である。併し今日の政治的常識から論ずると、解散なしの政局打開策にも一應の理由ありとせねばならず、而してこの見地からすれば、憲本提携の是否得失如何は亦別に之を論ずるの餘地がある樣にも思ふのである。

× × × × ×

解散回避を前提として政局打開の方途を案ずるに、考へ得べ

き方法は次の三つしかない。

一、憲本提携して政權の衝に當ること。

二、政本提携して今の内閣に代ること。

三、來年の總選擧まで暫く中間内閣を起たしむること。

この三つの方法しか考へられないとすれば、ここに問題は一轉して、その執れを實現せしむることが最も國民の幸福とする所なりやと云ふに歸する。さう問題を明にして掛ると、我々の立場も可なりはつきりして來る。第一に今更中間内閣を起らしむべきでないことは云ふまでもない。貴族院の一部にさうした策動があつたといふも一片の噂であらう。此間右の樣な目的を標榜し乍ら僅かばかりの金を振りまいて頻りに運動して居る者を捉へて誰に頼まれてやつてゐるのだかと聞いたら、永田秀次郎氏にと答へて居たが、之も無論出鱈目の放言に過ぎまい。下らぬことに名前の惡用された嫌な經驗は私にもある。兎に角國民の多數が今どき中間内閣などいふを問題にして居ないことはたしかだ。第二に憲本提携と政本提携との利害得失に至つては、容易に云ひ難いものであるが、政友會の過去に於ける幾多の罪惡と田中總裁の不評判とは、憲政會内閣の最早可なり飽きられて居るに拘らず、未だ十分に政本提携の人氣を湧き立たせ得ないものの如く見える。私自身には別に獨自の考はあるが、國民の輿論としては、恐らく政本提携よりもまだ憲本提携の方がましだ位に考へて居るのではあるまいか。少くともこれだけは云へる、我々國民の立場としては、自然にさうなるのは拒まないとして、今人爲的に強て憲本提携を排し政本提携をして之に代らしめる必要を感じて居ないと。

要するに政治的狀勢の避け難き推移の現象として、憲本提携は滿足すべきものではないが、又どうしても排斥せねばならぬものでもないと考へる

× × × × ×

昨日まで憲政會内閣を不倶戴天の敵の樣に罵つた政友本黨が一轉して之と提携したと云ふ點に專ら非難を向ける議論がある。私の考では、既成政黨の斯種の離合集散は、要するに甲男に馴染を重ねた女郎が利益に誘はれて急に乙男に走つたやうなものだと考へる。彼等の生活全體に道德的非難を向けるのはいい。乙男に走つたことだけを以て女郎の節操を責めるは當らない。況んやその乙男が亦もと利を以て彼女を誘惑せしものなるに於てをや。政友本黨が朴烈問題で若槻内閣を攻擊したことが眞に正しいものであつたのなら、今更憲政會と結ぶのを怪しからぬと難ずるは正しい。朴烈問題で起つたのが元々をかしいと難ぜられたのだから、今新に憲政會と結んだのを、過を悛めて

正に反つたものとも强辯し得よう。彼も一時此も一時、政權と云ふ餌を廻つてその時々に都合のいゝ立場をきめるのが今日の政黨だと諦めれば、憲本提携を純理を以て批判するは野暮の骨頂と謂はねばなるまい。少くとも振られて男振りを下げた政友會に今更政界の德操を論ずるの資格なきは言を待たぬ。

純理の論として、既成政黨の如きは今までの樣な政權爭奪の機關としては皆亡んで了つた方がいゝ。恰かも女郎屋などは皆なくなつた方がいゝといふに同じい。併し暫く之を許されて居る事實として、さてその限界内に於て彼等が一體どう行動するのが宜しきに適するや、我々國民の立場から云つてどう行動して貰ひたいかを攻究するは、必ずしも無用の業ではない。斯うした第二義的の見地から、我々は亦當然の權利として既成政黨に對し何等かの注文をつけても一向差支はないと思ふ。前にも述べた樣に私が憲本提携を是認したのも畢竟斯うした立場からである。要はこの外に滿足すべき解決がなかつたのである。故に私は、純理の論としては別だが、暫くの所憲本兩黨の妥協その事には世上の通說の樣に神經過敏に非難はしない。妥協その事が政治上の一大罪惡なるかの如く說くのを寧ろ少しく失當の言であらうとさへ考へて居る。

私の觀る所では、憲本提携に大に非難の向けらるべき所がありとすれば、そは提携その事ではなくして、提携後の行動であると思ふ。或は提携の形式に在るのではなくしてその動機に存すると謂つた方がいゝかも知れぬ。と云ふ意味は、あゝした場合、兩黨提携して議會に多數を作り以て政局の安定をはかるといふは、それ自身咎むべきことではないのである、併し乍らそれは單に政權獲得の爲めの盲目的な機械的な苟合であつてはならぬ。乃ちはじめてその動機が問題とせらるゝ所以である。而して動機の如何は必ずやその後の行動に現はるゝ。行動に依て動機の純不純が定まり、動機と併せて行動が論議の標的となるのである。さて斯う云ふ見地から昨今の憲本兩黨の行動をみるに、既に新聞の報道に依て讀者の耳目にも明なるが如く、徹頭徹尾醜惡を極めて居るを默視することは出來ぬ。一言にして云へば、兩黨の勢力を合して議會に多數を作り一緒になつて橫暴の限りをつくすといふ有樣である。一體理想的な注文をいへば、兩黨提携の宣明と共に彼等は直に白紙にかへり、政策共同調査を作つて更始一新の新行動に出づべきであつた。爲に從來の方策を改めねばならぬものもあらう。兎に角兩黨の誠意に基いて新規の共同的立場が見出されてこそ、玆に提携が更に國民の信認を得るよすがともなれ。政府の立案が是も非もなく提携の勢力に依て支持さるゝ丈けとあつては、誰れか共處に公明正

大の連繋を信ずるものがあらう。一例を云はん乎、震災手形處理法案は片岡藏相の提唱として憲政會の支持する所であつた。鈴木商店の興廢は成る程日本の財界に多大の波紋をえがくものであらう。併し濱口内相の藏相たりしとき、彼は同じ様な問題に直面して未練氣なく高田商會を見殺しにした。而して世上一人の此點を以て濱口氏を難ずるものあるを聞かぬではなかつたか。憲政會が今度片岡藏相の下に、先年濱口氏に依りて得た折角の名聲に我から好んで傷をつけるに至つた理由は解らないが、思ふに内心ひそかに之を苦とするものも尠くはあるまい。併し一旦黨議として之を支持するにきまつた以上、今更急に之を引き戻すわけにも行くまいが、憲本提携は實に之等の點を顧慮し政策の轉回を試むべき絶好の機會であつたのだ。加之憲政會も單獨の力を以て政界の濁浪を乘り切るには成る程骨も折れるだらう。從て不義の富も時として必要と感ずるだらう。震災手形處理法案が不義の富を作る手段となるか否かは私の與り知らざる所だけれども、政界に於ける政府側の優勢が確立して居つたら、あんな愚案は出さなかつたかも知れぬ。而して今や新に本黨との提携に成功した。何を苦んでかの暴案に引き續き未練を殘したのであらう。之等の打算は姑くおき、とにかく憲本提携を機とし、永く議會に多數を制し得ざりしの窮境を脱し得たるを幸ひ、大に面目を新にして國民に見ゆべきであつたのに、事茲に出でず、徒らに多數を擁して初一念の暴惡を遂行せんとするのは、何としても許し難き失態であつた。この點に於て憲政會は、這次の新提携に依て、折角これまで築き上げた名聲を一擧に失墜するの危機に瀕して居るといへる。

× × × × ×

以上述ぶる所を要約すれば、私の見解はつまり次の三點に歸する。(一)既成政黨を根本的に否認する立場を離れ、姑く今日の實際政界に即して論ずるに、政黨が彼此妥協提携して機械的に多數の勢力をつくるはその事自身咎むべきことではない。(二)若しそこに非議すべき點がありとすれば、それは提携の動機と其後の行動とでなくてはならぬ。而してこの點から今度の憲本提携は大に吾人の非難に値するものである。(三)只之から推論して、漫然とあゝした形式の妥協提携がつねに無條件に排斥さるべきものと考へるは誤りである。

軍縮會議の提唱に關連して

軍縮會議の提唱に關しては別項の小篇に於て多少詳しく私の所見を書いて見た。之を書き了つてから後に新聞で軍縮提唱の米國の眞意に警戒せよと云ふ樣な說を讀んだ。之についてまた斯んなことを考へる。

世の中の事は、之を發議した人の魂膽通りになることもあれば丸でその思惑の外れることもある。世上の大勢と個人の私意との交渉にはなかなか面白いものがある。

軍備縮少の要求が世界の大勢だとすれば、發議者たる米國大統領の隱し有てる魂膽の如き深く顧慮する必要はあるまい。我我はこの大勢に巧に乘ることに出て、米國を引き摺り隱れたる魂膽を働かす餘地なからしむることも出來よう。但し軍縮の要求が世界の大勢であるとしても、それに付ての研究が十分ならず從つて具體的には未だ何の定る所なしとすれば、當事者の個人的私意が强く働いて大勢の歸着の不當に枉げらるる恐れなしとせぬ。この限りに於て、噂がもし少しでも據り所のあるものなら、所謂米國の底意なるものに多少警戒するの必要はあらう。

併しそれとても、斯の噂におぢて我から折角の催しに尻ごみする必要は毛頭ない。

所謂「大勢」なるものの社會的威壓は概して相當に强いと觀てい丶。故に我々に一番大切なのは、一つには「大勢」の何であるかの洞察をあやまらざることであり、次にはその「大勢」を更に助長することを怠らざることである。軍縮提唱の參加は、會議そのものが假令失敗に終るとしても、之を必要とする大勢を助長促進する上に多大の貢献なしとせぬ。國際的にも國內的にも平和の風潮を興隆する絕好の機會として、色々の意味に之を利用したいものだと思ふ。

正誤

前號本欄の「公人の進退」と題する一小篇に對し、或る讀者から東京電燈會社が直接地下鐵道を計劃して居るが如く書いてある誤りを指摘して來た。地下鐵道の方の社長根津嘉一郎氏が東京電燈の大株主であり且つ先頃までその重役であつた關係から、其間に何等かの聯絡ありと觀るは妨げなきも、直接の關係あるが如く說くはあやまりであらうと云ふのである。右讀者の好意を謝し併せて私の誤謬を訂しておく。

大津淳一郎著

大日本憲政史

豫約募集規定

全七卷内索引一卷・菊判布裝天金・中澤弘光裝幀・一冊平均八〇〇頁
入會金四圓（最終會費に充當）會費毎月拂一ケ月六圓最終月に限り四圓
一時拂・全額三十七圓（入會金不要）・昭和二年五月下旬より毎月一冊宛刊行

普選の時代に於て政治に理解なきは國民として恥辱也!!!

内容見本無代進呈

内容の梗概

第一卷
第一篇 憲政濫觴時代（上）
第二篇 憲政濫觴時代（中）
第三篇 憲政濫觴時代（下）
第二卷
第一篇 政黨勃興時代
第二篇 憲政準備時代（上）
第三篇 憲政準備時代（下）
第三卷
第一篇 明治憲政時代（一）
第二篇 明治憲政時代（二）
第四卷 明治憲政時代（三）
第五卷 明治憲政時代（四）
第六卷
第一篇 大正憲政時代（上）
第二篇 大正憲政時代（中）
第三篇 大正憲政時代（下）
第七卷 索引

五月一日締切

吾人自ら揣らず、黨人の立場を離れて、史家の天職に立脚し、私に大日本史編纂の例に倣ひ、大日本憲政史を編纂するの志あり。政海に奔走するの傍ら、史局を設けて專ら憲政に關する公私文書を蒐集し、朝野の遺老を訪問して其の直話に徴し、内外の秘錄を考證して其の異同を辨じ、更に稿本を編して先輩の檢閲を乞ひ、明治維新時代より大正時代に亘る憲政の活歷史を叙し、筆を大正天皇の崩御に留む。六十年間、國運の盛衰、外交の消長、經濟の伸縮、政局の變遷、政治家の進退、皆收りて此の中に存す。歲月を費すもの殆んど二十年。稿本五千頁に達せり。偏せず、黨せず、事實を直書して、憲政の得失を論斷す。皆一家言に過ぎずと云ふと雖も、權勢や、黨派の爲に、寸毫も其の筆を枉げざるは、吾人が責任を以て斷言するに憚らざる所なり。

―發行趣旨の一節―

政治を語らむとするものは先づ本書を通讀せざるべからず!!!

東京市日本橋區本銀町
寶文館
振替東京二八〇番

旅に寄せて

楚人冠



この一篇は紀行文といふやうなものでもなければ、案內記でもない。論文では尚さらない。强いて名づけるなら、印象派のジヤナリズムである。

文中六號活字一字さげに組んだ所は旅の道筋を示したまでゝ、五號のところだけが本文と御承知を願ひます。

一　退屈志願

何も讀まず、何も書かず、何もせず、何も考へずに、たゞぼんやりと暫く暮して見たい。出來るものなら、退屈といふことを一度して見たい。

世の中がだん〳〵せち辛くなつて、なか〳〵退屈などしては居られない。自分にしても讀むか書くか、考へるか必ず何かしてゐなければ立つて行けない。何もせずに暮さうとすれば、さし當り電話のかゝらぬ國、新聞のない國、人の尋ねて來ぬ國、手紙の屆かぬ國を求めなければならぬが、そんな國はさう手近にない。これを求めて山の中の一軒家に引き籠つて見たこともあるが、さて一軒家となると、水を汲んだり、飯をたいたり、床を取つたり、相應に忙しい用事がそれからそれへと起つて、なか〳〵以て樂は出來ない。

山の中の一軒家の宿屋を求めて引き籠つたこともある。飯の用意や寢床の心配はいらぬかはりに、宿の主人が來る、番頭が來

る、女中が來る。折角いゝ鹽梅に退屈しようと思つてゐるところへ、番頭がのそりとはいつて來て、どうも御退屈さまでせうと言ひながら、一かど人の相手になつて退屈させまい算段でも出來るやうに、愚にもつかぬ話を始めて、人の退屈の邪魔をひろぐ。折よく退屈しかけてゐるところだから歸つて呉れともいはれず。

自分の友人に某といふ本願寺の坊さんがあつた。或る時どえらい片田舍のお寺へ出張を命ぜられて、ぽつねんと客間の上座にたゞひとり坐つてゐると、唐紙一つ隔てた隣の座敷で、村の檀兵衛太郎作が何やらんひそ〳〵と評定してゐる。聞くともなしに聞いて居れば、折角御本山から御出になつた客僧をあゝしてお一人打つちやつておいてはすまない、誰かお相手をする者がないかとの相談であつた。そのうち一同から選ばれたものとおぼしい一人の男がおづ〳〵と出て來て、某の前に坐つた。一應の挨拶がすむが早いか、その男突然『あなたの方には狼が出ますか』とやつた。あまりの突然に某も面喰ひながら、『いや、わしの方には出ないが、この邊には出ますかね』と反問すると、その男さもわが意を得たりといふやうな顏をして、『いや、この邊にも一向出ません』と答へた。それで二人の問答は首尾よく終つて、その男は丁寧にお辭儀をして出て行つた。これがその男の一生の智慧をしぼつて、客僧の退屈を紛らさんとする話相手となつたのであつた。これはわれ〳〵の仲間で、某の狼問答として傳へられた一條の笑話であつた。

山の中の一軒家の宿屋の番頭の話相手といふも、大抵この類だ。狼ありや又否や曰く無しと聞いて、そのまゝ引き下つて行く位ならまだしも、番頭の話に至つては、より愚にして、より長い。助かることとならんや。

それからいろ〳〵考へた揚句、どこまでも人間臭いものゝついてまはる日本の土地では退屈なんど思ひもよらずと悟つて、いつそ海外へ船で行つて見たらばと思ひついた。

二　試驗妨害

船を選ぶには別の理由もある。

今年中學の四年にゐる五男の文が四男の兄をまねて、無上に高等學校に行きたがる。長男二男三男を次ぎ〳〵に失つた自分は、子供のことゝいふと極度に臆病になつて、たゞもう達者でゐて呉れさへすれば學校なんどはどうでもいゝ位に考へて居る。だから平生あんまり丈夫でないこの子を無理に急いで高等學校に入れる氣はしない。前年の地震のどさくさまぎれを幸いに、一年學校を休ませて、遠く兄のゐる紀州の田邊へ遊ばせに

やつたのも、實はさういふ意味からであつた。一體自分は世界中に今の中學ほど無用の教育を施してゐる所はないと心得てゐる。中學を出なければ高等學校へも專門學校へも行かれぬは愚か、氣の利いた給仕の試驗さへ受けられぬから、餘儀なく入れてはおくもの丶、こんな無用の教育を施す所におくよりも生來初めて兩親の膝下を離れて見も知らぬ紀州の田邊あたりで一年遊んで來た方がどれほど子供の教育の爲になるか知れないと思つた。高等學校にしても亦然り。此處を通過しなければ大學へ入れぬから、いづれは高等學校に入れてやらうと思つてゐるもの丶、何もそんなに急ぐ事はない。一年入學は後れても、父と海外へ出かけた方が、い丶教育になる――

こ丶まで書いて來れば、いつそのこと、何もかも言つてしまふが、實は大學だつて強いて入れるには及ばぬと思つてゐる。今の青年子弟の教育方針といふものは、中學に入らんが爲の故にのみ小學に入り、高等學校に入らんが爲の故にのみ中學に入り、大學に入らんが爲の故にのみ高等學校に入る。學齡に達してから大學に入る迄は十四年間一日として準備教育ならざるはない。そんならせめて大學だけは人間を完成するところかと思つたら、これもつまりは世間に出る迄の準備教育たるに過ぎぬ。その證據には、大學を卒業したばかりの者を、どう贔負目に見ても一人前とはいひ兼ねる。一人前になる迄に尚多少の日時と努力が要るといふなら、大學の教育もやはり一種の準備教育たるに過ぎない。

大學令の第一條には、『大學ハ國家ニ須要ナル理論及應用ヲ教授シ竝ニソノ蘊奥ヲ攻究スルヲ目的トシ』云々と書いてある。それ故にこそ、その道の學者ばかりを教授にしてあつて、その學者が專攻した蘊奥を傳へる。それで學者だけを作るなら問てゐるが、これで一般の平民を作らうといふのだから、はき違へが起る。一般の平民に學問の蘊奥なんどいりはしない。言ひかへれば、一人前の男にして貰ふに何も博士を作るやうな教育はいらない。だから大學は學者を作る所だけにしておけばよいものを、誰も大學生といはれたさに、大學の制帽をかぶりたさに、出てから學士といはれたさに我一と大學に走る。走つて何の得る所と問へば、卒業して中途半端の學者となり、一知半解の實務家となり、帯には短く襷には長過ぎる人間ばかりが出來る。

學者を作るべき所で學者にならずに生計の資を作らうといふのだから、卒業後すぐ物の用に立たずに、狼狽するのは理の當然である。高等學校を出さへすれば大學に入られ、大學を出さへすれば飯が食へると思つてゐるから、ひら几帳面に所定の

目を修了したといふだけの卒業生が、活字鑄造機の中から同じ形の活字が出て來るやうに、出て來る。特色も何もない同じやうなどんぐりが背くらべをして職を漁るのだから、職を求むる方でも何大學の卒業生といふ肩書の外に、何等個性の存在を認めしめる材料はなく、人を求むる方でも、同じ顏をして同じ着物を着た若者ばかりだから、いづれをいづれと定め兼ねる。その結果生れてから試驗々々と飽くほど試驗をうけて來た大學卒業生を、又もやその上の試驗にかけて、強ひてどんぐりの背くらべをやらせる。近頃流行する諸會社の入社試驗といふのが、即ちそれだ。

自分は子供を活字のやうに鑄造したくない。高等學校も結構だが、何も急いで健康を損ふには當らぬ。それよりも自分と一緒に海外にでも出かけてゆつくりと退屈させてやりたい。この意味で誘つたら、船好きと物好きと兼ねた子供は喜んで同行に應じた。

人の父なる自分は自ら退屈せんが爲と子供の試驗の邪魔をせんが爲とに、いよ〳〵船に乘ることに定めた。船と定めて後、子供にアメリカの一片を見せておきたい、と思つたので、初はホノルヽに行かうと考へた。ホノルヽに行つて、ワイキヽの海岸で寒中の海水浴をやるのはさぞ面白からうと思つた。次にはマニラに行かうと考へた。椰子や檳榔子の茂つた常夏の國に滅せんとするスペインの面影と來らんとするアメリカの趣とを一擧に見せ得るとも思つた。双方の船の發着を調べて見るにどうにも日取の都合が惡い、兎や角と思ひわづらつてゐるうちに、郵船會社から大洋丸の事を知らせてくれた。

○

一月二日夜行で東京を立つ。
三日朝神戸に着、十一時長崎丸で長崎に向ふ
四日朝長崎着、長崎を見せてまはつて、温泉嶽の麓なる小濱の温泉に行つて泊る、
五日小濱から温泉嶽に登り温泉の周を一巡した後又小濱に下り、長崎に歸つて泊る
六日十二時長崎から太洋丸に乘つて長崎を出る。太洋丸は舊名をキャップ、フイニスタと言つて、吉野丸と同じくドイツから賠償船として取つて來たもので、排水噸數二萬二千、總噸數一萬四千四百五十七、日本で一番大きな客船である。

三　たゞ二人の客

船が長崎の灣内をはなれた頃太洋丸の誇としてゐるA甲板のガーデンと水浴槽と運動室とを見に行つた。ガーデンは船長室の直ぐ後で硝子張の天井の下に大きな樹を何十本か列べて、如何さま庭の趣を成してゐる。この立樹の間に椅子や卓子を列

べて、その脇に圖書室の備がある。運動室にはさま〲の運動機械の備へ附があつてその側に有名な水槽がある。水槽はこの船に限つたことでないが、これが下層の甲板にでもあることか、船の一番上のA甲板にあるのは、類例のないことださうな。これが爲にこれに水をはると船が自然に頭重になつて、兎もすれば搖れ易いといふ。まさかとは思ふが、兎も角さういはるゝほど大きい。

何處を歩いてもがらんとして、船の中に人の氣はひがしない。それもその筈、この船は長崎の船渠で近頃修理を終つて、いよ〱米國航路に就くことゝなつたのだが、命令航路の制限のあることゝて、長崎から直ぐ神戸横濱桑港と行くわけに行かず、何でもかんでも一應は手ぶらで命令航路の起點たる香港まで行かなければならないのである。だから初から貨物も乘客もあてにはせず、長崎から香港に直航して、香港にたゞ二日居て、直ぐ横濱まで引つ返すことになつてゐた。

案內して呉れた加藤事務長の談によると、ケビンの乘客は私等父子二人だけで、外に三等客が二人あるきりださうだ。私等二人きりの爲に船內の電燈といふ電燈が一つ殘らずついて、船內到るところのヒーターが熱を通して、バーも開いて居れば、圖書室も開けてくれる。全く勿體ないやうな氣がした。

午餐の時分となつて食堂へ出て見た。この食堂に於ても覺えぬほどに天井の高い壯麗なもので、桑港碇泊中などはアメリカ人が舞踏會に借りに來るといふ。この大きな食堂は必ずしもわれら二人の爲に開いてゐるのではないが、われら二人の爲に給仕二人がついて、二等廚司が二人ついて、食事の献立は平生と同じくちやんと數々の料理をメニューに書き出してある。事務長と私等とたゞ三人で午餐をしたゝめてゐると、船の樂隊がこれも乘客がゐようがゐまいが、そんな事に頓着せずに、ちやんと奏するだけの曲目の樂を奏してゐる。——全くかういふ旅は恐らく私の一生に二度と出來ないものであつた。

昔は人形を聽衆に見立てゝ法を說いた和尙があつたさうだが、人が居る居ないに拘はらず、するだけの事は委細かまはずして行く所に『人知らずして慍らず』といふやうな趣がある。お客がゐないからとて、バーを閉じ、喫烟室や圖書室を閉じ、食堂の献立を省き、樂隊の奏樂を見合せるなら、その同じ論理を擴充して行くと、船長は浴衣がけで船橋に立ち、事務長は寢衣のまゝで帳簿をひねくり、給仕が日本服の着流しで食事を運び、電話交換手が寢そべつたまゝで電話をつなぎ、甲板の砂洗ひもなければ、客のゐない船室もすてゝおいて差支ないといふ結論になつて來る。浴衣の船長、寢衣のまゝの事務長など

は、考へるだけでも可笑しい。法律は人に知れないなら犯してもいゝといふ譯のものでない事を、適切にこの船はわれらに教へた。

○

空が曇つて寒くなつて來たので、喫煙室に入つた。こゝの喫煙室にはイギリス風の暖爐が片隅にしつらへてある。われら二人の爲にとて、係のボーイは火を焚いてくれた。もえあがる焔を見ながら、話してゐると、何とも知れぬのどかな心持になつた。そのうち話がつきてうと〳〵として來る。

曇つてゐた空はいつしか雨になつて、波が追々に高くなつた。船がゆれるにつれて生欠(なまあくび)が出て來る。醉ひ心地の始まりと知つて、逃げるやうに船室に下りた。五島沖から船の動搖がます〳〵はげしくなつて、舷側に打ちつける波の音がどう〳〵と物すごい。二人とも晩餐をたべずに一風呂あびたまゝでベッドの中へもぐりこんだ。この調子で三日も荒られてはかなふまいと心配しながら。

後(あと)で聞くと、その夜はひどい降(ふり)であつたさうな。

あくる朝おそく目を覺すと、空はからりと霽れて波は全く靜つてゐた。又も元氣が出て湯に入らうといふので、二人は悠々と朝湯に喫つた。食堂へ出る時間に後れてしまつたから、部屋へサンドキッチと番茶を取り寄せて、寢衣(ねまき)のまゝでむしや〳〵とたべた。昨晩(ゆふべ)喫べなかつたのだから、その茶がいはうやうなく旨い。喫べてしまつたところで、さてこれから學校に行くでなし、社に出るでなし、何をしなければならぬといふことが何一つないのが無上に嬉しい。

○

四　ベル

外に乘客がないので、われらは昨日から、立派なスヰートルームに入れられてゐる。疊敷にして十五六疊も敷ける位の大きな室で、奥の隅に船らしくない寢床が二つ列んで、その側に化粧臺や簞笥が立つてゐる。ドアを開けて、入つた取つつきの窓ぎはに、ソーフアとデスクがあつて外に卓子一脚と椅子が四脚ある。寢臺の横から更に奥の方のドアを開けると、其處が浴場になつてゐる。これだけのことならたゞスヰートになつてるといふだけだが、部屋の用材でも調度でも數寄を凝して、天井は一枚板の美しい木を使つてある。この一室の中に電燈が十五個もついてゐるさへあるに、呼鈴(ベル)が寢臺に一づつ、入口のドアの影に一つ、化粧臺の側に一つ、ソーフアの上に一つ、衣裳棚の側に一つ、都合六個あつて、その上浴場に一つ、その又上に、デスクの横に電話機が一つある。

この船が初めてドイツで出來た時、カイゼルは大の得意で、戰爭がすんだらこれに乘つて世界周遊をやらうと言つてゐたさうだ。カイゼルが乘つたとすれば、さし當りこの私らの船室に泊つたことだらうが、いくら人使ひの荒いカイゼルにしたところが、この小い室に六個のベルと一個の電話機は多すぎる。

しかし又考へた。私は前年太平洋航海中急病が起つて、非常に苦しんだことがある。ボーイを呼ばうとして、上の寢床から梯子を下りた迄は無事だつたが、ドアの側にあるベルに手が屆かないので、其處まで這つて行くうちに氣を失つてしまつた。さういふ時此處ほどベルが多かつたら、失心しない前にボーイが呼ばれたらうにと思つた。

しかし又考へた。ロンドンで下宿を探しに行つた時、或る家に氣に入つた部屋があつた。呼鈴がなくては困るといつたら、『宅の雇人はてゐなかつた。毎日しなければならぬだけの事は一々仰せきでもなく、ちやんと自分でしてしまひますから、呼鈴の心要はありません』との事であつた。なるほどその家へ宿を定めて、二月ほど居つた間に一度も呼鈴で人を呼び立てなければならないことはなかつた。さういふ點からいへば、呼鈴の數の多いのは結句サーヸスが惡いか、召使の氣が利かないか、いづれかを示すやうにもなる。

しかしわれらが十餘日の航海の間、ほとんどこの呼鈴の心要はなかつた。われらの部屋についたボーイは鶴見祐輔君のやうな顏をした氣の利いた若い男であつた。

○

甲板に出て見ると、春のやうに暖かい。臺灣海峽に近づいたのだと分つた。

この日の午餐は船員と卓子を同じうした。腹の加減がまだ尋常でないので、お茶づけを二杯ばかりかきこんですませた。船に醉心地の時お茶づけほど有り難いものはない。どんなに食慾のない時でもこればかりは咽喉を通る。前年太西洋で十日荒れ續けられた時、食事の時間が來て食堂に入ると、入つたばかりでむか〳〵として來た。十日位食はずにゐる譯に行かぬから、ドロップスのやうな菓子を斷髮屋から買つて來て、これをしやぶつて居た。醉つた時はイノス・フルート・ソルトがいゝと敎へてくれる人があつたので買つて飮んで見たが、格別の效能はなかつた。こんな時にお茶づけがたべられたらと思つたが、何分アメリカの船でお茶づけを求むるのは木によつて魚を求むるより難い。私は全く文字通りに茶づけに渇した。

食後は子供と甲板でピンポンをやつたが、幾度やつてもまける。いま〳〵しいから輪投げをやつて見たが、これも負けばかり續いた。しみじみとジェネレーションの移り行く樣を見せられた心地がする。子供とこんな事をして遊ぶのも何年ぶりであつたらうか。

あんまり暖かいから、甲板に椅子を出させて、寢そべり返つて書を讀む。讀書に飽いては輪投げをやり、輪投にまけては、甲板を歩きまはる。父子二人で二萬噸の巨船を占領したやうなものだから、傍若無人を通り越して、正に傍無人である。

四時半にお茶が出た。茶を喫して後甲板を歩いてゐるうちに日が暮れた。夕食後は喫煙室で骨牌でも取るところだが、相手がないから、早々船室に降つて湯に入つて八時頃に寢た。波靜かにして船が動いてゐるともわきかぬる位であつた。

八日は朝から雨が降つて波は靜かであつた。

本を讀んで見たり、物を書いて見たり、文と輪なげをして見たり、何一つこれといふこともせずに一日を暮してしまつた。これほど無爲に暮し得たことも珍らしい。初めて永い間の望であつた退屈らしいものをして見た。四宮船長がにこ〳〵しながら『退屈でせう』といふから、『いや退屈が何よりの望なんです』といつて笑つた。

この夜夕飯がすんで後、喫煙室で船長から麻雀を教はる。私と文と船長と森永機關長と四人で、加藤事務長がわれらの後見をして與れる。百聞一見に如かず、いくら獨案内みたいな書物を讀んでも腑に落ちなかつた事が安々と分る。クンカンと花合せとをまぜて、花合せよりももつと出來役を多くしたものと思へば麻雀乃ち卒業す。

○

五　入港

九日の朝甲板に出て見ると、右舷に島が見える。支那の端にあるやうなとげ〳〵した恰好をしてゐる。島の形までが日本とは違つて來たと、子供が喜ぶ。

地洋丸がのし上げて二つに割れたといふ琅玕列島を過ぎて後、間もなく遠く香港の入口の岩へ入港の目標につけた白ペンキが見える。船橋に登つて見る。丁度パイロットの上船した所であつた。このパイロットはデップリと太つた支那服の男で、船長に何やら書面を渡して、船の指揮を引き取つた。船橋の上には入港間際に見せる非常な緊張ぶりで、船長以下運轉士の面々いづれも双眼鏡を眼にあてゝ、傍目もふらず、無駄口も利かない。船長も昨晩麻雀の勝負を爭つてゐた時とは以ての外に違つて、外套に包まれたあの大きな姿が威容堂々として四邊を壓して見えた。

パイロットの何とも解しかぬる號令と、これに答ふる、これも何とも解しかぬる聲が、鳴を靜めた船橋の上に傳はる。「スターボード（とりかぢ）が「スタード」で、ミドシップ（舵中央）が「ミヂツプ」だから分らう筈がない。日本の海軍にはヨーソロといふ號令がある。「宜しく候」の略で「ステヂー・シー・ゴース」の意味といふ。聞いてゐると、パイロットがゆつたりした調子で『ニーゼム』といふことがしば〳〵ある。あんまりよく出て來るので、船長に聞いて見たら、「ニーゼム」ぢやない「イーゼム」だといふ。その「イーゼム」が依然として分らないから聞き質すと、「イーズ・ユア・ヘルム」の轉で、舵を戻せの義とある。

運轉士の方への號令はまだ少し分り易い『ストップ・ポート・エンヂン』と馬鹿に「エンヂン」の尻を上げて發音すると、若い運轉士が歯ぎれよく『ストップ・ポート・エンヂン・サー』とこれも「サー」の尻をあげて答へる。後で聞いたことだが、「ポート」（おもかぢ）といへば、舵機の車を右にまはして、船は左に

向く。スターボード（とりかぢ）といへば、その反對になる。即ち船の方向と舵機のまはし方とは、いつも反對になるのだから、命令と、舵と、船とがヘーゲルの哲學みたいになる。これが爲に兎角間違が起り易いが、何分永い間の習慣で、思ひ切つて何處でも改革を唱ふる者はなかつた。その改革を一番に實行したのは、何事にも人に先つてかはつた事をやつて見たがる米國の海軍で、今から十年ほど前號令を「右舵（ライト・ラダー）」「左舵（レフト・ラダー）」と言ひかへて、右舵といへば、右へ車をまはして船も右の方へ向くことになつた。便利は便利になつたものゝ、これは海軍だけに行はれて商船に通用せぬから、商船と軍艦と協同作業を要する戰時には、ヘーゲルの哲學のシンテシスが抜けたやうなものになりはしないかと心配してゐる者がある。

船長から眼鏡を借りて見ると、船はしづ〳〵香港島と九龍の間に入つて行く。香港の家々は變にがらんとして蜂の巣の列んだやうに見えたが、近づくまゝに能く見ると、暑い土地とてどの家も〳〵各階に廣いベランダを取つてゐる爲と知れた。さういふ蜂の巣のやうな家が海岸から始まつて、二千尺近いビクトーリア・ピークの邊まで、續いて見える。ピークを見て、始めて香港へ來たといふ氣持がする。海外の旅行は自分に取つて今度が九度目で、そのうちヨーロッパへは三度も出かけたが、いつもシベリアかアメリカまはりで、香港は今度が初めてだ、これでもイギリス領だと思ふと、何だか西洋臭い香がぷんと鼻を打つて來るのを覺える。

六　香港の棧道

九日の午前十時二十五分に久しぶりで、海外の土を踏んだ。船まで迎へに來てくれた郵船支店の上村廣治君が兎に角支店長の宅へ行かうといふので、三人チエアに乘つて、えツちらおツちら坂道を登つて行く。日本の寒中ではあるが、此處には落葉した樹が一本もなくて、亞熱帶の緑濃い植物が兩側に蓁々として茂つてゐる。椰子、榕樹、棕梠などの間に、目のさめるやうな芙蓉（ハイビスカス）の赤い花が此處にも其處にも咲き亂れて、丁度日本の五月頃の暖かさ。空はどんよりと曇つてゐるが、それが一向苦にならない。

支店長の宅は山の中腹にあつて香港の港内が一目に見下される。乘つて來た太洋丸が眼下に見える。此處でスリングといふ若い支那人に紹介される。郵船のコムプラドルをしてゐる人で、アメリカに生れて、アメリカで教育をうけたといふ。恐しく達者な英語を話す。われらの島内見物に通譯をして貰ふ爲呼んで來てくれたのである。この人自分を呼びかけるに、一々ミス

タ、ソージンカン」といふ。それで思ひ出したが、前年李烈鈞氏が日本に來た時、友人を介して揮毫を賴んだ。友人がこれに私の名を入れてくれといつたところ、『楚人冠などと、そんな失禮な名は入れられない』と斷つた。なるほどこの名は自ら名乘つて出るには差支ないが、支那人から呼んでは失禮と見えるかも知れないと思つた。

四人づれ自動車で此處を出た。植物園に行つて見る。緣濃い熱帶植物の中に八重の白椿の花が今を盛りと咲いてゐる。如何にも春めかしい。この椿の花を見て、春めかしい心もちになつたゞけでも、わざ〳〵香港まで來た甲斐があつた。

植物園から坂を下り、曲りくねつて長い〳〵クヰンスロードを西の方へ走る。病院やら大學やらの建物を橫に見ながら、ピークの西の麓を通りすぎて、香港島の裏側へ出た。アバーヂーン灣へ波打際に車を驅つて深海灣からリパルス灣へぬける。初夏の暖さの風に吹かれて、心に何のわだかまりもなく、見晴しのいゝ濱邊に車を驅るの快は何ものゝこれに比へつべきものはない。行く〳〵上村君とスリング君とがかにかくと說明して呉れる。

リパルス灣ホテルで少憩して今度は道を東に取つて、くるりと島を一まはりした後又ピークの方に登り、ピークホテルでお茶にした。此處を出て、少し山の方へ登つて見ようとなつた。丁度ピークのすぐ下の町に沿うて棧道が出來てある。香港の町から見上げると、この棧道がうね〳〵と山の腹を縫つたのが白く見える。白いペンキぬりの木柵を山道の端へしつらへたものだらうと思つてゐたが、來て見ると、見る目もくるめくやうな斷崖にコンクリートの脚を何丈かの高さに築いて、棧道はその上につき出してある。一通りの工事ではない。その上、道はアスフワルトで固めて、その道が上から流れ落つる雨水や何かの爲に下の泥を流されぬやうにと、凡そ雨でも降つたら小さな溪流になつて水の流れ落ちさうなと思はるゝ限りの凹地といふ凹地は、こと〴〵くコンクリートで固めてある。棧道の白く見えるのは、如何さま白ペンキを塗つたに相違ないが、塗られた柵は頑丈な鋼鐵で、十人や二十人の人間が押したとて突いたとてびりツともするやうなものでない。よく日本の山道で見るやうな粗末な弱々しい木柵でない。

こゝにイギリスがあると思つた。香港がイギリスの領土となつたのは、阿片戰爭の結果であること、今さら事新しげに書くまでもないが、その阿片戰爭なるものは必ずしもイギリスに取つてクレヂタブルなものではなかつた。兎もすればイギリスが印度の阿片を支那人に飲ませやうとして飲ませ損ねた腹ゐせに起した非人道的な戰爭であるやうに言はれる。これをイギリス

でもさすがに氣にして、機會のある每にそんな意味の戰爭でなかつたことを辯明しようと努める。阿片禁止の命はイギリスでもちやんと承知してゐた。たゞ廣東にゐるイギリスの阿片商人及阿片處分に關して支那の當局の態度がけしからぬものであつた。のみならず支那當局が嘘をついたり、約束に背いたり、一向要領を得ないので、とう〳〵堪忍の緒が切れて最後の手段に訴ふるに至つたのだといふやうに辯明してゐる。

この辯明の當否は今こゝに穿鑿を加ふる必要を認めない。たゞこの戰爭にイギリスが勝つて、その結果講和條件のおもなるものゝ中に、南京漢口その他の開港と香港の讓與とがあつたのだと分ればそれでいゝ。これが千八百四十二年のことで、今から約七十年前に當る。

イギリス人の辯ずる所に依れば、英國は一たびも香港の割讓を强要求したことはない。さういふ意味を諷したことさへない。支那政府の自から進んで贈與して吳れたのだといふ。兎に角この時の講和條件中には、支那が不法に差押へた阿片の賠償及英國軍隊の派遣費用を合せて、償金六百萬ドルを六個年賦に支拂ふことゝ共に、香港島を永久英國の領土たらしむることといふ一個條があつた。この贈與を諾して千八百四十一年一月二十五日の午前八時十五分に英軍は此處を占領して了つた。その時は長さ十一哩、幅二哩から五哩、總面積二十平方哩の小島に十平方哩の港灣をかゝへたものだけであつたが、越えて二十年、對岸の九龍半島の割讓を受け、それから四十年ほどたつて、千八百九十八年半島の後方三百七十六平方哩の新領土を九十九年間租借することゝなつた。

割讓當時の香港は毒蛇の徒らに多い小島であつた。廣東から兵亂を避けて若干のイギリス人が逃げて來てゐただけであつた。昔宋の滅びた時その遺臣が九龍に逃げのび、明末に明の廷臣が香港の林中に隱れたといふから、香港九龍邊は兎角人の逃げこみ易い所と察しられる。さういふ未開無人の地を經營して今日に至らしめたのは、サー・ジョン・デビス以來歷代總督の力にもよるが、やはり其處に底力の强い、目前の計算よりも永遠の計を思ふイギリス人の力があつた。海岸を埋め立て、港をしつらへ、道路を修理し、水道を引き、あの嶮峻な坂を切り開いて住宅地を作り、千七百尺のビクトリア・ピークの直ぐ下まで鋼索鐵道を引いたのが即ちその現はれの一部である。ピークの腹に莫大な金をかけて棧道をめぐらし、その棧道にあの堅固な鐵柵を渡したところに、イギリスの面目が見える。

七　植木鉢

棧道を一めぐりして、又ホテルの前に戻つて、こゝから例のケーブルカーに乘つて山を下つた。丁度この日は日曜なので、子供づれや若い女づれで山登りに行つた者が、大きな花の枝や紅葉した樹の枝を片手にしてカーに入つて來た。十月末頃のスコツトランドに行つた時のやうな心もちがする。此處のカーはゼノアあたりのと違つて乘客を後向きに坐らせて、坂の勾配どほりに車が傾いたまゝ急峻な坂を下るのが以ての外に心持が惡い。

此處を下つて支那人街へ買物にと向ふ。例によつて例の如き雜沓で、やかましいこと一通りでない。ごみだらけの大道で何やらん食物を賣つてゐる露店が多い。同じ大道のわきに花屋があつて、大きな花輪を何十と列べてある。朝の內はもつと多いが、大抵一日の中に賣れてしまふといふ。東京で花輪が入用といふ時は、一々花屋へ注文しなければ、出來合といふのはない。それも花の少い時節には前の日からでも注文しなければ中々手に入らないのが常だ。その邊にも香港と東京の相違があると見えた。

あちこちひやかして歩いたが、さて買はうと思ふものもない。そのうち兎ある汚い植木屋の前に出た。桑のさし芽のやうなものを大きな樽の中へ何百本となく水につけてある。水に入れてをけば根が出るものらしい。葉はクチナシに似て小さく、枝ぶりは山茶花のやうで、もつと曲りくねつてある。これがふと目に止つて何だらうと聞くと、上村君とスリング君とで色々聞き合せて吳れて、やつと白い香のいゝ花が咲く樹だとだけは分つたが、樹の名はスリング君だけに分つて、私どもには分らない。樽の中のは何年さきに花が咲くか分らぬといふので、先づ一月たつたら、必ず花が咲くといふのを一鉢上村君が買つてくれた。根が大丈夫かと念を押すと、植木屋は無造作に植木を土から引き拔いて根を見せた上、格別土もかぶせずに、そのまゝ無造作に藁で鉢をしばつて渡して吳れた。この無造作に根を引き拔いて見せた所に支那人の面目がある。これを上村君とスリング君とが大事さうに片手にもちながら、この大變な人ごみの中をわけてぶら／＼してゐるのは、如何にも支那らしい氣分である。それを又隣町の緣日ででもあることか、遠く香港三界から日本くんだりまで持つて歸らうといふに至つては、いよ／＼以て悠々たる支那の大陸氣分だ。

この花の名はスリング君一人心得てゐた。上村君大に憤慨して或る植物通に就いて聞き合せたところ、その名をガルデニアといふことが知れた。ガルデニアはアメリカの植物學者ガルデンの名から出たもので、茜科に屬するものであることも知れた。これを船に持ちこんで船室にかざつておいたら、又物識が

ゐて、結局タチナシの一種と知れた。たゞ面白いのは、さし芽を水の中につけておきさへすれば根がつくので、水さへやれば土も何もいらないのだといふ。道理で買つた鉢の中には砂利ばかりで土は入つてない。たゞ水をざぶ／＼入れてある。根を引きぬいて見せたいはれも、それで分つた。

この植木一鉢では後でひどい目にあつた、全體香港から植木鉢をかゝへて歸るのも間違だらうが、横濱へ着いた時稅關が一切の荷物の檢査は無事にすんだが、この一鉢だけは特に植物檢査が必要だといふ。生憎その檢査官がゐないので、永い間待つてゐたが、歸つて來ない。とう／＼待ちあぐんで、態々人を賴んで檢査官の宅まで持たせてやつて、やつと檢査をすませた。これほどにして持ち歸つた樹が歸來、日本の稀有の寒氣にちゞかんで一向振はず、今にも枯れさうになつてゐる。

この夜は木下郵船支店長の家に客となり、太洋丸樂洋丸の船員と共に廣東料理の御馳走になつた後、こゝに泊つた。

八　澳門

翌朝は未明に起きた。ベランダに出て見ると、港内の大小船舶にきら／＼と電燈が光つて、どんよりと曇つた空に美しい。寒からず暑からぬ潮風に吹かれながら、子供とこの見飽かぬ景色を眺めてゐるうちに、だん／＼と夜が明けはなれて行く。

今日は澳門へ行く筈なので、郵船から案内役につけて呉れた田瀬得男君が朝早く來て呉れた。七時に此處を出て、例の悠々たるチエアに乘つて山を下つた。澳門行の船の出る波止場に入らうとするところは身動きもならぬ雜沓である。その中で、支那人の乘客と見ると、巡査が一々身體檢査を行ふ。海賊が武器を隱して乘客に化けて來る恐があるからである。幸にわれらは何の檢査もされずに無事に汽船瑞安號の客となつた。小さな船だが、船室も喫烟室も型の如くあつて、心もちのいゝ船である。上甲板の喫烟室から舳にかけて甲板を鐵の扉で仕切つて、勾欄には厳重な鐵網を張つてある。この鐵門の中は乘客を入れずに、五六人の衛兵の姿だけが見える。今にも海賊の襲つて來さうな物々しさである。現につい近頃も海賊に襲はれた英國船があつて、船内で大亂鬪が行はれた。日本でこそ海賊といふと、物の本にでも出て來るものとしか考へられぬが、この邊では海賊が今も現實に現はれる。香港の歷史を見ると、相當殘虐な物語が香港近海を色どつてゐる。

船は八時に纜を解いた。八時を期して同時に廣東その他へ向けて香港を出る船が多いので、それが相次いで出て行く樣如何にも景氣がいゝ。わが乘つた船も負けずに早く出ればいゝとい

ふやうな一種の競爭心が起つて來る。

香港へ入つた時とは反對の方向へ船が、出て行く。西であらう。港を出てから後は、大小の島々の間を且くゞり且くゞりぬけて行くので、刻々に變化する山海の景色が少からず旅人の心を慰める。太つた人のよさゝうな船の事務長が分りにくい英語で、時々話しかけに來る。ポルトガルと印度の合の子のやうな男だ。子供は寫眞を取つたり、田瀬君と甲板を歩いたりしてゐる。少し風が寒い。

そのうち海が次第に濁つて來て、いつしか全くの泥海になつてしまつた。廣東河から流るゝ泥だ。澳門はその河口の東岸に立つてゐる。香港を距ること約四十マイル、船で三時間半かゝる。

澳門はいろ／＼の點から見て興趣を引く。先づ「澳門」と書いて「マカオ」とよむのは、支那音の「アウムン」とは似ても似つかぬ。物識の説明では、土人がこの邊を阿媽港と言つたので、それが「マカオ」に轉じたのだとある。尙もつと物識の説明ではその阿媽港の音が日本の貿易商天川屋の屋號の起源だともある。それはどうでもいゝとして、この澳門は支那中で一番古く外國貿易の爲に開かれた港で、早くからヨーロッパ人に知られた。初はポルトガルの船乘が貨物の濡れたのを干す爲といふ口實で、此處の一角を占領したが、それが公然と支那政府に承認されたのが千五百五十七年で、それから千八百八十七年に清朝政府から改めて葡領と確認された。千五百年代にスペインのフイリツプ第二世がポルトガルを併合した時、一時ヨーロツパからポルトガルなる獨立國が消えてなくなつたが、その間六十年間世界中たゞこの澳門のみにポルトガルの國旗が飜つてゐたとの話がある。

千五百年代といへば、スペインが天下に覇を稱して、ポルトガルの航海業者が到る處にその勇名を走せた時代である。その頃のイギリスはスペインの無敵艦隊を擊摧してやつと世界にイギリスあるを知らしめた位で、今日さしも世界第一の强國づらをしてゐるアメリカは、發見されてからまだ百年もたつて居ない。世は斯くの如くかはり行くと、わが澳門は四百年の歷史を語る。

かくて澳門は一時東西兩洋の貨物の集散地として殷賑を極めたが、香港が英國に割讓されて自由港となるに及んで、澳門の繁榮は次第に香港に持つて行かれた。それでも今人口約二萬、輸出入年額一億圓を出入してゐる。

泥海の中を航すること一時間近くにして、遙か彼方の小高い丘陵に、支那とも見えぬ白堊の家々の立ち列んだのが見えて來た。近づくに隨つて、船はひた／＼とその丘陵を右舷に見て奥に入る。入つて右に一まはりすれば、大小無數のジャンクが海

の面も見えぬまでにぎつしり詰つて、その奥に賑やかな波止場が見える。左舷に島が一つあつて、それで港の形を作つてある。香港とは逆だ。前に通過した丘陵の下が外港で、こゝは内港である。瑞安號は海賊にも襲はれず、海路無事澳門の港に着いた。時に十一時半。

田瀬君から無線電信をかけておいたので、郵船の澳門の世話をしてゐるメローといふ大きなポルトガルの人が迎へに來て、上陸するとそのまゝ三人を自働車に載せて、澳門の國内を案内して異れた。支那町のごた／＼した中をつきぬけて、だらだら坂を登り行く。大學がある。丁度男女のポルトガル學生が勢よく出て來るところであつた。私の子供もこんな氣候のいゝ澳門の大學へ留學させて見たらばと、ふと思つた。

立ち列んだ家々に何處となく中世の南歐の面影があつて道路の敷石までが中世臭い。ドンキホーテのやうな奴がどこからか劍を佩いて出て來さうに思はれてならない。忽ち一望濶と開けた競馬場に出る。如何さま四百年間の經營だけあつて、この邊の街路樹は、何といふ樹か知らぬが、百年二百年を經たらしい幹の太いものばかり、目もはるに列つて立つ。此處からしばらく行くと、前領の國境といふのへ出た。澳門は長崎の島原か紀州の潮の岬のやうに、細い／＼地峽を隔てゝ海の中へつき出てである。バスコダガマの一行中の者が、濡れた貨物を干すにはいゝ所と見定めたのも無理はない。國境はこの地峽の中ほどにあつて一列に街燈が立つてゐた。

風はあるが寒いほどでもなかつた。車を東海岸の方へ廻ると、潮の香めでたい風が車に吹き入る。海が泥色でなくて青すんでゐたらどんなによからうかと思つた。この海岸は目下盛んに埋立築港の大工事を行つてゐる。澳門の港は上流から押し流し來る土砂の爲に年々埋つて仕方がない。港灣修築工事はこれが爲に起つた。これがポルトガルなればこそ、四百年間最初に割讓されたきり尺寸の土地も擴げてはゐないが、他國であつたらさうは行かなかつたらうと、メロー君が愛國者らしく語る。香港が對岸の九龍を併せ、その上更に九龍半島の背面に廣大な新領土を租借したのにあてつけるやうにも聞えた。全くポルトガルなればこそ、その領土擴張は平和な埋立によつて行はれた。この埋立工事はオランダの會社が請け負つてゐるさうだが、オランダは昔ポルトガルがこの澳門を占領したのを羨んでこれを略取しようとて二度まで澳門に攻め入つたことがある。幸にして兩度ともポルトガルの爲に擊退された。

海岸を一まはりして山手の住宅地をまはると、家々の具合が、ます／＼南歐じみる。煉瓦の塀に薔薇を這はせたところ、

門を入つて細いだら〳〵坂を取り入れたところ、靑々した木立の間に少さな城寨のやうな家のほの見ゆるところ、如何にもゼノアの山手に似てゐる。ロメオが潜びこんで露臺のジユリエツトと物語をするには都合のよささうな所が到る處にある。

山手をめぐつて後前に出たと反對の方面から海岸に下ると、魚屋が軒を列べて、そこら中魚だらけ。魚臭いなんどは言ふにや及ぶ。澳門の產物は阿片と爆竹とこの魚類とで聞えた。

今一つ澳門の名物がある。其處へ車をのりつけた。公許賭博場である。モンテカーロのカジノとは比較にもならぬ粗末な家だが、それでも澳門が東洋のモナコと呼ばるゝほど、この賭場は名高い。いふ迄もなくポルトガルの政廳に取つて、この賭博場は莫大な財源となつてゐること疑なし。入ると直ぐ二階に通された。この二階は丁度汽船の食堂の二階の社交室のやうに、中央を切り開いて、下なる賭場が目の下に見えるやうにしてある。下には長い卓子の端に博奕場の親方とも見えぬやさしい若い男が陣取つて、「四い子」の勘定をする。この卓子を取り圍んで金のほしさうな男が幾重にも立つて金を賭ける。われらの坐つた二階からも小さな籠をつるしてかけてゐる者がある。「四い子」のことだから、モナコのルレツトやトラント・エ・カラントの込み入つたのとは違つて、一か二か三か四かにかけるだけだ。親方がぢやら〳〵と穴のあいた丸い金を一つかみ宛卓の上へ持ち出しておく。一同はそれ〳〵に金を賭ける。大した金額を賭ける者もゐない。銅貨が多かつた。一同が賭けてしまふと、親方が細い棒で右の丸い金を四個づつ取つて行く。四個づつ取つて取り切るか、一か二か三かゞ殘る。それで勝負はすんでしまふ。たはいのないものである。勝負が簡單だから、短時間に幾度でもくりかへす。客がさし代り入り代り出入する。賭場ではわれらをいゝ鴨と見たか、西瓜の種やら菓子やら茶を出してもてなす。やゝしばらく見た上で賭けもやらずに此處を出た。

一時間ほどで澳門全國を見て了つて船に歸つたのは一時であつた。後で聞くと、此處にはポルトガル曠世の詩人カモエスが立て籠つてその不朽の大作「ルシヤツド」を書いたといふ洞窟がある。又千五百年代にジエシユイツト派の僧侶が、丁度その頃長崎で迫害をうけて逃げて來た日本の信徒の大工と協力して建てたといふ寺院の廢墟がある。いづれも見落して殘念なことをした。

波止場でメロー氏と別れて、二時に瑞安號出發、香港へ着いたのは六時であつた。香港へ來た上は見ておかねばならぬといふので、又電車に乗つて、ウエスト・ポイントに出かけた。ウエスト・ポイントはその名の如く香港の町の西の端にある歡樂

で、五層六層の大きな青樓が軒を列べて、電燈の光さばゆく、絃歌の聲どこからともなく湧いて、町には粧を凝した歌妓が往來する。廣東の騷で昨今はさびれてゐるが、平生はえらい賑ひだと、田瀬君が說明して吳れた。

この夜ホンコン・ホテルに泊る。

○

十一日はいつになく朝寢をして、食事がすむと、文と二人でぶらぶらと支那店へ買物に出る。香港も今日を限りと思へば、何となく名殘が惜しい。しかし世に香港を知つてゐるといふ人も大抵ヨーロッパ航路の途中で一晩とまる位のもので、われらが兎に角足かけ三日香港に居たのは、まだ長い方だといくらか慰めもつく。

船の出るのは十一時なので、いくらぶら〳〵しても時間が餘る。又バンドへ戾つて、裁判所の側の廣場へ出る。植樹の樣子や英國歷代の王后の像の立つてゐるところは、テムスのエムバンクメントのやうな趣があつてなつかしい。

やつと時間になつたので、郵船のランチで本船の太洋丸に送られる。船長を始め船員給仕までがお歸りなさいと挨拶するので、左ながらわが家へ歸つたやうな氣がする。此處で長く世話になつた郵船の木下支店長上村副長などと盡きやらぬ名殘を惜んで別れた。

十一時に太洋丸は香港の港を離れた。

船室は元の通り給仕も元のまゝだ。兎も角もA甲板に出て見ると、ばつたりとハワイのフヲード翁に出合つた。汎太平洋婦人會議の用件で昨日廣東から着いて、これから上海に行くのだと、相かはらず元氣がいゝ。

午餐の時刻になつて食堂に行く。乘客が彼此三十人ばかり此處から乘りこんでゐた。日本人も二人ある。支那の若い元氣のいゝのが十餘人ある。大分船は賑やかになつて來た。これらの若い支那人が時々ピンポンに子供を誘ひに來るので、いよ〳〵以て船らしくなる。

晝すぎA甲板で豫ての窺どほり退屈してゐるところへ、船長が來合せたので、船長と機關長とに案内されて、船の機關室を見てまはる。石炭が重油になつた爲不用になつた石炭艙の邊からずつと下つて推進機の直ぐ前まで見て行く。如何にもソリッドとはどんなものかと見える。あの大きなシャフトが、これでも折れることがあると聞いて、變な思がする。

見てまはつて、船長室でお茶をよばれる。やゝしばらく世間話に時を移してから、文を促して輪なげをやる。

そのうち暮色蒼茫、いつしか船内は電燈の夜となつた。晩餐かたの如くすませてから、夜ふくるまで喫煙室で麻雀をやる。波が高くなつて船のゆれる每に重ねた牌がずる〳〵と滑りをちる。

十二日は朝湯に入つて朝餐をしたゝめたきり、何もしない。晝餐をすませた後又何もしない。退屈の福音を解せざる文は支那人を相手にピンポンをやつてゐる。お茶の時になつて、船長から使が來て船長室でお汁粉の御馳走になる。そこへ事務長が來り加つて、とりとめもない世間話に時をつぶす。晩餐となる。晩餐がすんで後おきてゐても用のない身と、八時頃臥床に入る。子供は船內で催した活動寫眞を見に行つたきり、いつ歸つて寢たか知らない。

九　デッキ・ゴルフ

十三日は少し寒いが天氣がいゝので甲板が珍しく賑はふ。誘はれてデッキゴルフをやる。秩父宮樣はゴルフを老人のすることだと仰せられたさうだが、如何にもゴルフは老人にふさはしい、それだけこの遊は禮儀作法がやかましくて、如何にものんびりと紳士的なところがある。ゴルフには他人の玉をはねのけやうの、打ち散らさうのといふことは更にない。相手が後れて來ると、後れた方に讓つて、先の者だけが進んで行かうとはしない。ところが、デッキゴルフとなると、名はゴルフだが、殘虐極まるもので、出來るだけ相手の玉を蹴散らしはね飛ばしてホールに近づけまいとする。自分だけホールに入ればよいところを、わざ〳〵遠く出て來て人の玉をへこますことばかり考へる。これほど意地の惡い、人の邪魔ばかりする遊戲はあんまりあるまい。仕舞ひには相手の顏が憎々しく見えて來る。自分は生來戰鬪精神の少い勝負嫌ひであるが、その中でも、このデッキゴルフが一番不快なものとしてある。

このゴルフを午前中にやつて負けて、午後又やつて又負けた。しかも敵方に女が加はつてゐるから倚負ける。年寄じみたことをいふが、敵にわが子がゐると、どうにも子供の玉をはね飛ばす氣になれない。子供が味方の爲にバンカーのやうな所へほうりこまれて出かねてゐると、助けに行つてやりたいものになる。それから見ると、昔の武士は父子敵味方に分れて命のやりとりをしてゐる。よくあんな事がやれたものだと、今のわが身に思ひ比べて感心する。

ゴルフを二度やつたきりで、一日全く何もしない。夜は早く寢床に着いた。

この夜船は潮の都合で上海に入れず、呉淞沖に假泊した。十日の月が雲の中から見えて、泥に濁つた海面を照してゐるのが船室の窓から見える。呉淞の町の火の光がきら〳〵してゐる。

十　海上の泥

上海に着く一日ほど前から、海の色がうす〳〵濁つて來る。進むに隨つて、名にし負ふ黄海の黄色となり、長江の入口に至つて、全くの泥水になつてしまふ。何千年何萬年の間、上流から泥を流して、よくも泥の元がきれないと、來る毎に感心する。併し、この泥が集つて固まつて、呉淞が出來、上海が出來た。長江の口から十三四哩、横の黄浦江へ曲つてから、又十三四哩の上にある上海も、大昔には、その名の示すが如く海のほとりに在つたに相違ない。それから更に溯つては、海のたゞ中にあつたかも知れない。

そんな古い事をいふにも及ばぬ。上海の英國領事館の前にあ

る今の公園も、岸近くに棄てられてゐた二本マストの帆船が永い間此處にかゝつてゐる間に、次第に泥を被つて、いつしか小さな洲になつたのである。これは新に租界の外に出來た洲だから、當然支那帝國の所領に屬すべきものだと、時の道臺が爭つたと傳へられてゐる。それが、結局公園のない上海に公園としておいたらよからうといふ談になつて、これを租界の工部局の手に渡したのは、遠くもあらぬ、長髮賊の亂が平いで後間もない一千八百六十八年の事であつた。

上海が興つたのも泥の爲だが、やがて泥の爲に上海が衰へ行くのではあるまいかと心配してゐる者は杞人ばかりでない。長江の泥を吐く勢は年々二平方哩の泥土をこの邊に押し出して來る。最近十年の間に呉淞口外の沙洲が七尺も高くなり、この五十年間に黃浦江の河幅が原形の三分の一を泥に取られた。若しこの勢で行つたら、今の上海の西の方の丘陵が綠樹の間にほの見ゆるやうに、黑山群島や舟山列島が綠樹欝蒼たる大平原の上にほの見ゆる丘陵となつてしまはうかも知れぬと、モンタルトー・ヅ・ジーサスの「上海史」に書いてある。さうなつたらさしも貿易の繁盛を以て聞えた上海も遠く水から離れて、船から何時間か汽車に乗らなければ行けなくなる。それは大變だといふので、目下折角河川保存工事なるものを急いでゐるが、これが果してどれほどの効果のあるものか分らぬ。租界の人間の力が能く時日に頓着しない大自然の力に抗し得るかどうかは大なる疑問である。今日上海に住んでゐる人々の生きてゐる間に恐らく上海は船から上れなくなるだらうと言つた人さへもある。これから考へると、上海の前途ほど心細いものはない。支那が租界を取り戻すのどうのといふが如きは、餘りとして問題が小さい。上海の要は租界でも工部局でも、會審衙門でもない。上海を威脅するものは日本でもイギリスでもなくて、上流から流れ下る泥である。

若し夫れ上海の前途を悲觀し來れば、問題は泥ばかりでない。何分黃浦江といふ河に面して出來た細長い町のことゝて、港としては何處までも細長く發達するより外に道がない。現に上海の町が次第〳〵に細長く上流に押し出して行つて、城内から南市方面が開けて來た。これが際限なく上流へ〳〵と開けて行くと、船着場が長い〳〵間に亙つて、これを相手に商賣する者は一通りの不便でない。ロンドンのテムズの下流のやうに、兩岸を開いてドックでも澤山に作れば格別、さうでない限り上海の港としての發達はもう程なく行きつまつてしまふ。ニューヨークのスカイスクレーパーが無限に高い家になり得ないのは、餘りに高くなると、一階が全部昇降機ばかりになつてしまふといふので、結句昇降機の問題でスカイスクレーパーの高さは自

然に制限せらるゝことになる。上海の發達も、結局は港の長さで制限せられて、發達は其處に止まるのではないかと察しられる。

（一）

十四日は朝七時に呉淞を出た。黄浦江を泝ること十三四マイルにして、いよ〳〵上海に入港したのは八時半であつた。數知れぬ大小船舶の間をしづ〳〵と太洋丸のやうな大きな船に乘つて來るのは晴れがましい心地がする。港内のあらゆる船舶が目ひき袖引き、見よ〳〵大きな船が來たぞと取沙汰してるやうな心持がする。

上海に着くと、郵船の齋藤支店長が社員の石原濟十君を案内につけてくれた。殷賑なブロードウエーから市中の目貫の場處を見てまはつた後郊外に自動車を走らせて競馬場へ出た。立派な大道が通つてゐるので、これが支那の道路だらうかと聞くと、この邊は道路租界とて、道路だけが租借地になつてゐるのだといふ。兩側に點々として列んだ百姓家も支那らしくて、如何にもピクチユアレスクである。ところ〳〵に村の豪家とおぼしきが、土塀をめぐらした中に幾棟か三國史なんどの畫になるやうにそりを打たせた屋根が列んで見える。

郵船會社へ歸つて齋藤支店長を煩はして、ゴルフのクラブを買ひに行く。それからホテル・マジエスチツクで午餐の御馳走になつて、今度は永安公司へ買物に行く。永安公司は當地切つての大雜貨店で、これに抗するものを先施公司といふ。この兩ストアは南京でも廣東でも何處でも必ず向ひ合せに立つてるさうだが、この上海でもやはり兩店は向ひ合せになつてゐる。此處で車をすてて織物屋の太綸に行つた後、又ブロードウエーの店をぶら〳〵とひやかし歩く。時間が晩くなつては面倒だといふので、齋藤君と別れて城内に向ふ。

フランス租界を過ぎて、城内に入らうとする所に物々しい鐵條網を張つて衞兵が立番をしてゐる。國民軍が何時來襲せぬとも限らぬので、孫傳芳が戒嚴令を布いてゐるのだといふ。城内に入れば、狹苦しい道がわきかへるやうな人ごみで、兩側の店には買手か賣手かいづれも一杯の人だかりである。總じて支那の店には人が多い。一人でもやつて行けさうな小さな店に八人も九人も店の者がゐる。それが時分となると、店の眞ン中に飯を持ち出して、さも旨さうにそれこそ傍若無人に大勢で飯を食ふ。

かういふ人ごみを分けて湖心亭へ出る。湖心亭の名を聞いた時は、もつと閑靜なおちついた所と思つたが、來て見ると、淺草公園の中の池の大きなやうな所で、池の中に高樓があつて茶を出してゐる。この高樓へは八ツ橋のもつと直角的な石橋がかゝつて、その上にぼんやりと立つて、小鳥を指先に留まらせて賣つてゐる男が二人も三人もある。頗る悠々たるものである。

狹い町の中を人力車が無遠慮に通る。子供が大勢人をわけてきやつきやと走せちがふ。乞食が何やらわめいてる、兵隊が心得たやうな顏をして立つてゐる。それらが孰れも甲高い聲で何やら分らぬことを喋りかはす。さう〳〵しいなどの段でない。

此處を出で、兎ある茶館に入る。一階に上るが早いか、忽ち怪しげな女が人の袖を引つぱり、肩につかまり、おつ取り圍んでかへすまいとする。父も子もあつけに取られる。これに避易してはう〳〵の體で逃げ出す。此處から車をフランス租界に驅つて、フランスらしい町の名や店の名を見ながら走つた時は、流石に心のおちつくを覺えた。

この夜太洋丸の船員と共に支店長の家に招かれて、四川料理を饗せられ、麻雀に夜をふかして、船に歸つたのは十二時過であつた。今朝

から變に暖かつた空はいつしか雨となつてゐた。

十一　ホテル

僅かな時間で僅かな距離を旅するだけだが、その間に出來るだけ、子供に外國の趣を知らせたいのが私の望であつた。この望の爲に私は出來るだけいろ〳〵のホテルに泊つた。

長崎では光永寺の和尚が是非に宅へといふのを斷つて、ジヤパンホテルに泊つた。小さなホテルだが何とやらフランスめかしい、心もちのいゝホテルであつた。雲仙から夕風の冷たいところを通つて此處へおちついたら、寢室の暖爐に珍しやあか〳〵石炭の火がもえてゐる。早速手を洗つて食堂へ下りて見ると、此處にも大きな暖爐に石炭がくわつくわつと燃えてゐる。外に客もないと見えて、がらんとした廣い明るい食堂の中で、この火を横にして親子は夕餐を共にした。

香港では島の裏側のリパルス灣の小高い處に灣と同じ名のホテルがあるのに入つて、コクテールをすゝつた。香港の町を出はなれてから、海のほとりの支那人の小さな家より外に人家を見なかつた目に、突然この美しいホテルが左ながら足元から浮き上つたやうに現はれた時は、何だか龍宮へでも連れて來られたやうな氣がした。ホテルは結構の美を極めたといふほどでないが、廣い地所へのび〳〵と立てゝ平屋ではあるが、だらだら上りの坂へ立つて二階樓にも三階樓にも見える。十數武の石段を上つた所に一面藤棚のやうなものをしつらへて、それが一杯に桃色の花とも實ともつかぬ花をつけてある。見るからに境域閑淨、月夜に此處から水を眺めたなら、さぞよからうと思つた。自分には香港島内でこのリパルス灣ホテルが一番氣に入つた。

ピークで、ピーク・ホテルの如何にも古風なイギリス風なところでお茶にした。千八百四十一年に建てたといつても、通りさうな頑丈な薄暗い間取で、此處でも大きなイギリス風の暖爐に石炭の火が陽氣にもえて、その前で、香の高い紅茶をすゝつた。但しこの茶は漢口らしかつた。ホテルを出やうとして廊下の窓に丈夫な鐵の金物がついてゐるのを上村君が指ざして、これこそこの地でなければ見られぬタイフーン・バーをはめる所だと敎へて吳れた。香港は大風の名所で、ひどいのが吹くと今にも家がくづれるかと思ふばかりに震動する。さういふ時はガラス戸をしつかり固める爲にタイフーン・バーと唱へる太い鐵のカンヌキを窓毎にはめる。今見たのはそのカンヌキをはめる金物だ。如何さまそれでこのホテルの建物の一通りならず頑丈に出來たいはれも讀めた。

その夜は郵船の木下支店長の宅で泊めて貰つたが、翌日も

れも強いての勸を辭してホンコン・ホテルに泊つた。一先部屋におちついてから、ルーフでダンスを見ながら、文と久しぶり親子水入らずで食事をした。日本人の一人も見えぬホテルに客となつて、不自由な英語を使ひながら一夜を送るのが、初めてわれらに外國へ來たらしい思をさせた。

上海では潮の加減で泊ることが出來なかつた。一夜吳淞に假泊して翌朝上海に入り、その夜船に歸つて、翌朝早く上海を出た。潮時が悪いと、上海で潮を待ち、上海を出は出ても、又吳淞で潮を待たなければならぬことがある。これを二潮に乘るといふ。われらは幸にして一潮で出られた。この潮時の面倒臭さに大抵の大洋通ひの船は吳淞きりでその奥には入らない。

泊れぬから、せめて面影だけでもと、郵船の齋藤支店長がクラブにしようといふ午餐をホテル・マジエスチツクにして貰つた。何がし富豪の私宅を、その死後ホテルに作り直したものといふが、思ひ切つて大きな家に住んだものだと驚かされる。ここで食事中上海每日の寫眞班の人が來て、わざ／＼齋藤君の紹介を經て、食事がすんだら、寫眞を取らせて呉れといふ。その入念の態度が少からず私の氣に入つた。日本やアメリカであつたら、食事中もかまはず、紹介も待たず、いきなりぱち／＼とやつて行つたことだらうと思ふ。食事がすんで一人で庭へ出ると、根氣よく今まで待つてゐた記者が坊ちやんも御一所に願つてこいといふ編輯の命令でしたといふので、又文を呼びにやる。子供は子供で自分が寫眞を取らうとて其處等をかけまはつてゐたのを、やつと連れて來た。私の寫眞は珍しくないから、私が子供を連れてゐるといふ所に、寫眞のニユース・バリユーを認めたものらしい。私には、ついした試驗妨害のつもりであつたのだが、私の子供づれで行つたことは存外諸方で興味を引かれた。歸つて後もしば／＼いゝ事をしたとほめられた。私の腹の中を知らずに。

長崎から神戸へ着いたのは夜であつたが、荷役の都合で翌晩も碇泊するといふので、今度は一夜の宿を寶塚のタカラヅカ・ホテルに求めた。いつ來て見ても此のホテルは閑靜で家族的でスヰスの山の中のフアミリ・ホテルへでも泊つたやうな氣がする。ホンコン・ホテルのだゞ廣いパーラではおづ／＼してゐた子供も、此處ではいつまでも玉突など見てゐて寢室に歸らうとしなかつた。それほど親みのあつたものと見える。

兎に角この短い旅にホテルを六つまはつた。この六つのそれ／＼に異つた趣に依つて、自ら異つたとつくにぶりを見せ得た。

十二　稅關の檢査

上海を出ると、香港から乘り合せた乘客は大部分下りてしまつた。太洋丸と少し後れて長崎丸が出るのでそれに乘り移つた人もあるらしい。太洋丸の方は船も大きいし設備もいゝが、長崎丸に乘る人が多くて、太洋丸には來る人はなかつた。

長崎丸の速力が早い點も客を引く、長崎に着いて岸壁へ橫づけになる點も客を引く。尙それよりも人を引くのは、稅關の役員が乘りこんでゐて船內で荷物の檢查を行ふことである。そも〳〵稅關の檢查に初めから課稅か無稅かいづれかにはつきり定つてゐるものなら論はないが、解釋の仕方一つでいづれとも定まるものは、たゞ稅關吏の手心によるの外はない。稅關吏がツムジをまげるか、機嫌が惡いか、馬鹿に几帳面な人であるかで、一たび有稅品と決定したら、もうそれきりである。われわれのいつもいま〳〵しく思ふのは、外國人なら、寫眞機械でも、タイプライタでも、ゴルフのクラブでもを旅行用携帶品として無稅で通しておきながら、日本人には兎角さうさせないことがよくあることだ。理窟ではいかないことなのだから一番困る。後で訴願の道はあるかも知れぬが、一々そんな面倒な手續は取つて居られぬから、そのまゝ泣寢入になつてしまふ。だから外國の旅から歸る者の目に、稅關吏はとげ〳〵した角でも生えて居る人のやうに見えて、なつかしい、柔かい、親しげな所が見つからない。袖の下が利かないだけに、日本の稅關吏は世界中で一番始末が惡いとこぼす外人がしば〳〵ある。袖の下の利かないのは結構なことだが、今少し當りさはりの柔かい調子で物が運べないものだらうか、誰彼かまはず脫稅を取り押へるやうな見幕で臨まない譯に行かないものだらうか。と、稅關吏に對する希望は誰しも同じである。稅關に對する感じ一つで初めてその國に對する感じが定まる。稅關吏の振舞が癪にさわつた爲に、その國に入つて後萬事が癪にさわる。玄關番が氣に食はぬと、まだ見もせぬ主人までが氣に食はぬ者のやうに推し量らるるのと同じだ。この點に就ては日本の稅關もよほど心して來た。私が橫濱の稅關で食事に行つた檢查員を待つてゐると、「其處はお寒いから中へはいつてお遊んなさい」と言つてくれた。こんな事は決して今まで見られぬところであつた。

さういふ何となく恐ろしいやうな稅關の役員が自分と同じ船に乘つて、折ふし顏を見合せる仲になつてゐて、船內で荷物の檢查をして吳れるとなれば、初對面のどんな顏つきの人か分らぬ稅關吏に調べられるより心持のいゝことは言ふ迄もない。長崎丸に走る乘客の多いのも自然である。

十三　長江の口

朝飯をたべてゐるうち、もう呉淞沖に來た。急いで、A甲板にかけ上ると、太洋丸はしづ〳〵と泥海を分けて黃浦江から楊子江に入らうとしてゐるところであつた。少し風があつて浪が高い。呉淞を左に見て行手は見る目遙に泥海がつゞいて、全く限が知られぬ。どうしてもこれが河とは思はれぬ。河を下る、隨つてます〳〵河が廣くなつてます〳〵波が高くなる。いよいよ長江を出離れるといふ所に至つては、どちらが海でどちらが河だか分らなくなつてしまふ。たゞ此處でパイロットが下船するので初めてそれと知れた。パイロットがこの荒海にどうして下船するかと、乘客が皆舷側に首をのべて見てゐる。大兵肥滿のパイロットは甲板からつるした繩梯子をする〳〵と傳つて、下なるランチに移る。ランチが波にゆられて木の葉のやうに上下する。幾度か本船と離れたり合したりゆら〳〵とゆらついてゐる間に、時分はよしと乘り移つた。大勢が見てゐると見て、彼は愛想よく手を擧げて一同に挨拶した。ランチが本船を離るゝのを見てゐたアメリカの年配の女が私の顏を見て、『私、世界に代へてもパイロツトなんていやだ』と笑つた。私はパイロットが一回の水先案内料八百餘圓だと說明したら、『八百圓?八百圓?それなら考へ直して見る値打がある』と又笑つた。今のさき「世界に代へても」といつておきながら。

此處まで來るうちに太洋丸はイタリー船ロモロ號を乘り越した。太洋丸より少し前に出帆したアメリカ船プレシデント・グラントもやがて追ひ越しさうになる。其處へ後ればせに上海を出た長崎丸は右舷の方遙に今にも太洋丸を追ひ拔かうとしてゐる。この大きな船が幾隻も拔きつ拔かれつさるゝといふは、流石に長江のエスチユアリーである。

やがて午餐に下る。船長の話る所では靑島方面大風雪、上海は昨日と違つて大變な寒さだといふ。そのうち船がゆれ出したので、夕餐もそこ〳〵にわれらは寢床に入つた。

○

十六日　午後三時半長崎に着し、五時半に長崎を出る。その短い間に友人がわざ〳〵見送りに來て呉れる。この夜響灘のあたりで船大にゆれる。

十七日　來島水道を通ると知らせて呉れたので、船橋に上つて見る。あのせまい瀨戶を通る時、海水が盛り上つたやうになつて、さしも二萬噸の太洋丸さへぐらと横に傾く。事務長の案內で、二三等の客室を見てまはる。子供と二人でゴルフをやる。夕神戶入港。

十八日　太洋丸神戶碇泊中大阪に行き夕寶塚に來て泊る。

十九日　十二時神戶出帆し夜遠洲灘にて船大にゆれる。テーブルの上のコツプひつくりかへつてわれる。

二十日　十一時橫濱に着、六日以來十五日間われらが生を託したる太洋丸と別れる。

松助閑話（一）

尾上松助（談）
邦枝完二（稿）

まへがき

「藝は死ぬまでが修行」の自訓を以て座銘と爲せる劇壇の耆宿尾上松助は、今や八十路(やそぢ)の坂を越ゆること五歳、啻に俳優中の最年長者たるのみならず、現代に於ける江戸藝術表現の代表者として、他に比肩すべき人あるを見ず。しかも研鑚の心聊かも衰ふることなく、一年十二ケ月の悉くを舞臺生活に努力しつつあるの勇氣は、當に之れ古今獨歩の感あり。されば技術に卓越せる翁が、年毎に最高の精彩と極致の圓熟とを加へて、一代の名人を以て目さるるに到れるも決して偶然の出來事にはあらず。不斷の精進克く今日を成せるを想へば藝道の苦行更に粹きものあるを覺ゆ。

明治二十五年の歌舞伎座に初役蝙蝠安を演じて、あらゆる方面よりの讃辭を惜氣もなく投込まれたる松助は、その後四谷怪談の宅悦に扮して滿都の好劇家を唸らせ、近くは直侍の丈賀に八十四歳の氣を吐きて觀客を驚嘆せしめし等、その他髪結新三の家主長兵衛、逆櫓の權四郎、黄門記の玄碩、千本櫻の彌左衛門、牡丹燈籠の志丈、魚屋茶碗の紡久太、佐倉義民傳の渡守甚兵衛等の役に、繰返し無比の手腕を見せたるは、讀者周知の事實なれば、事新らしく說くまでもなかるべし。

八代目團十郎は、近世劇壇に於ける駿足と謳はれし人なりしが、彼に依つて演ぜられし切られ與三は、無頼漢に淪落せし後も猶、曾て瀟洒たりし若旦那伊豆屋與三郎當時の、冒し難き天禀の容姿を存して、到底他人の模倣し得ざるものなりとの評を受けたる程なりき。その成田屋の腕にて知られたる切られ與三も、今や松助あるが爲に、與三郎中心にあらざる蝙蝠安中心劇として、洽く世に知れ亘りたるこそ面白し。試みに羽左衛門の與三郎、梅幸のお富といふ現時唯一の玄冶店に、松助の蝙蝠安の缺けたるを想ひ見よ。刺身のつまに山葵を忘れたるに等しき感なしとせずや。

藝の神に入るは、感激に因りて生命の高潮に達したるの時ならざるべからず。翁の藝が憧憬の精神を支配なすは、即ちその藝術が能く他の天禀と匹敵するが故ならん。五代目菊五郎は眞に稀世の名優にして、巨匠九代目團十郎と共に彼が明治演劇史上に不朽の師表たりし人なるが、しかも予は菊五郎が名聲の背後には、名優松助のありしを忘るる事能はず。松助あつての五代目と世俗に言はれしは、偶偶翁が五代目輔佐の功の偉大なりしを物語ると同時に、その

のよく菊五郎と頡頏しゐたりしを證するに餘りあるべし。

團菊の歿後に於ける我が劇壇は、暫時暗黒沈滯の時代なりき。師を喪ひし松助は、世話狂言に獨特の妙技を演ずるの機會なく、ひそかに時機の來るを待つのみなりしが、しかもかくの如き梨園の凋落期に際して、名優市川團藏のありしことは、正に明治中期の劇壇に於ける一偉彩たり。團藏は極めて自信の强き人にて、己が主張を徹底せしむべく、限りなく自己中心の個性を發揮し、その藝術は幾多感情の本源に觸れて熄まざりしは人の知るところ。且つ彼が持せし最後の主張は、松助の持論と同じく藝の廣さにあらずして、深さにありたるなり。卽ち彼等は自己の藝道を、その大きさの中に求めずして、强さの中に求めたるは快し。眞摯の藝術は他より教へらるべきものにあらず、心ある者の自ら悟るべきものなりとの意見に於て兩優は相通ずる所多く、而してこの主張こそ團藏松助が、偶々時勢の變潮に遭遇せしにも拘らず、他の俳優を超越して確固たる立場を築きし所以なるべし。

松助は役の位置より論ぜんには、脇役なること勿論なれども、しかも脇役の演出者として眞に理解を有する爲、假令如何なる役柄にもせよ、よく自己の限られたる範圍に於て演出しつつ、劇の中心たらしむるの手腕を發揮し得るは、流石に偉とすべく、曾て歌舞伎座に八百藏(中車)猿之助(段四郎)芝翫(歌右衛門)羽左衛門の一日替りの由良之助にて、松助が九太夫を勤めたる折、當時の劇評家三木竹二氏は「これは折紙附の持役なれば、日に依つては竝んでゐる由良之助の影が薄く見え云々」と評した如きは、脇役としての翁が如何に卓越せる技倆にありしかを想像するに難かるまじ。

劇界には、今猶多藝を以てひとつの誇りと爲すが如き惡習慣の存在せるあり。この意味より見るに於ては松助が藝術の範圍は、或は狹小なりと云ひ得べけれど、しかも個性の勝れたる翁の如きが自己の特長より離脱して、交渉なき他の個性と同化せんと爲すは、甚しき矛盾と云はざるべからず。そは徒らに廣からんと望む結果、外的模倣に終ることの多々あればなり。わが松助は藝の廣さよりも深さ鋭さ、强さの上に徹底的解釋を持てるが故に、世話物の狹き圏內に優秀なる位置を築き上げたるに外ならず。眞に生ける藝は、決して他より浸入したる技巧にて可なる筈なく、內より溢れ出づる自然の力ならざるべからざるは論なし。自己本來の生の根本を握らずして、生命の表現は爲し難く、觀客本位にのみ生きんとする俳優には到底欺かざる表現の出來得るものにてはなきなり。

松助の藝を論ずる者は、一言にしてその舞臺を老巧と稱す。素より永き舞臺功績を積める翁の藝を評するに適せり。然れどもその老巧の意義にして、單に型を繰返すといふ一點にのみ存するならんには、そは未だ翁の藝術を解せざる者の言と云はざるべからず。單なる描寫は、假令如何程忠實なるにもせよ、正確なるにもせよ、更に巧妙なるにもせよ、それのみにては、決して大藝術たり得るものにあらず。卽ち眞の偉大なる要素を表現せん事の至難なるが爲なり。十年前市村座に直侍の上場されし時、故饗庭篁村翁は當時の東藏(友右衛門)の丈賀を指して、彼の蕎麥の喰ひやうは遠く松助にそれに及ばず、と評したることありき。些細の技巧なるが如けれど、ここにも亦松助の自然に根を下したる藝道の力强さは現れて、蕎麥を食ひつつ對話する呼吸の六ケ敷さをも、極めて自然に且つ滑らかに、表現し盡したるなり。自然と雖もかの外的描寫とは、根本を同じうせしにあらざるは云ふまでもなし。

音羽屋一門はすべて世話物を得意と爲すの結果、松助の妙技二番目物に於て現るる事多し。しかも翁は五代目の弟子なれど、

の獨特の畑とも云ふべきは、決して五代目の物にあらす、則ち菊五郎は梅幸以下に對して、權傚的に己が藝風を傳へたるにも拘らず、松助に對しては彼自身の畑を思ふが儘に開發せしめしなり。之れ實に五代目が天才を見る明のありし所にて、今日團十郎門下に一人の名人をも生ぜざるに反し、音羽屋一門に松助を育てたるは、菊五郎にして能く藝術の個性を尊重せし結果に外ならず。佐倉義民傳を觀る時、翁に依つて演ぜらるる渡守甚兵衞の入神の技に、腸を千切らる如き情緒を誰か抑制し得る人のあるべき。

「死ぬまでが修行」なる言葉は、凡人にありては言ふべくして行はれ難きものなるが、翁は啻に口先のみならず、敢然として常に實行しつつあるは敬服の外なし。團藏の仁木と並び稱せられし外記役の如きも、松助の研究はその全生活に重きを置きて、外記その人の性格役向等萬端を調査し、留守居の大役として地方居住をしたる點より、個に眞卒素朴の人と爲すに如かずとの見地より、舞臺にありても江戶出府の氣分を失はざらんとする苦心等、一人物に就ても全人格を直感して、部分的に強く役の性根を表現せんとの努力を惜しまざる結果、その藝術は深刻に進展し、人をして感激の極致に誘ふも亦宜なり。

全生活を犧牲せる翁は、今にして猶、生命の大潮流の波動をより高からしめ、その鼓動のうちに人を沒入せしめんと努む。我等は徒らに大藝術の偉大なるのみを見て、その修養の如何に深きかを忘るること能はず。

予、この名人に乞ふて藝談雜話を聽くこと既に久し。秋の旅宿の寝物語に、或は春の夜の樂屋裏に、或は旗亭の一室に、眞率なる翁の口より出づる樣々の思ひ出話は、假令市井一片の茶話に過ぎずとも、言々句々皆珠の如き感あり。筆者玆に手帖の一丁づつを捲りて翁の談をその儘讀者に傳へんとす。但し雜話のことなれば話の順序等全くあるなし。時に安政文久を語り、時に明治大正を語ること、藝談を談じて突如舞婦談となり、風俗の話忽ち旅行の思ひ出となるの類なり。その間おのづから妙味ありと雖も、予の筆到底之れを誌上に躍如たらしむる力なきを如何せん。稿を成すに當り私かに之れを恥づるのみ。

○

冗談にもお前さん、そんたことを云つちやァいけません。名人なんて云はれるお人は、何藝にだつて、さう滅多にあるものぢや御座いませんよ。左樣ですとも。千人の中から一人出るのが本當の名人なんで。……淨瑠璃で攝津大椽さん、落語で圓朝さん、こんなお人はみんな名人でした。左樣さ、そこが藝の尊いところなんで御座いませう。

○

當節のお人は、人樣が何んにも仰しやらないうちに、自分から名人を名乘つておいでなさるんで。……いや、まつたく御時勢が違ひましたよ。

○

名人で思ひ出しましたが、以前、死んだ攝津大掾さんにお目に掛りました時、あのお方はかういふことを云はれました。「藝となれば何藝でも同じでせうが、昔と今とでは、てんから修行の仕方が違ひますな。私の方の藝道でも、いざ修行となると、誰も命懸けの覺悟がなうては叶ひませんでしたが、今時の藝人衆は、己が大切の藝の修行に、命がけはおろか、指一本さへ懸けては居りますまい。それを考へますと藝道の末が想はれて、情けなくなつてまゐります。ですが今時の方の前で、斯樣なことを申しますと、攝津も愚痴をいふやうになつたかと、蔭口を云はれませう。それが殘念だから申しません。申しませんが、考へると心が塞ります」と。

私はこの話を聞いてゐるうちに、何んだか胸が一杯になるやうな氣がしました。噛みしめれば、噛みしめる程、何んと味のある言葉ぢやァ御座いませんか。

○

世の中の人間が增えたせいでせうか、この頃の名題さんの多くなつたのには、びつくりしましたよ。私ァ無精者ですから、梅幸さんのお弟子にさへ、顏を知らないのがあるくらゐで、名題さんでもよそのお弟子だと、名前も何も、ちつとも覺えちやァゐません。何十人ゐるか解らねえのを、すつかり覺えるとなつたら、これァ豪勢ひと月やそこらは掛りませう。

昔は猿若町にしても、芝居の前に出る名題看板は、まづ七人より多いことはなかつたもんでェ、そのくせ名題下にだつて、今の名題さんより腕のある人が、いくらも居りました。稻荷町、中どうり、平の相中、相中上分、それから相部屋でも置けまいといふ上分の者には、別部屋をくれる事もありましたがね。その上が名題の順序です。ですが今と違つて、下の方の者は、死ぬまで名題になれるなんぞたァ、これんばかりも思つちやァゐませんでしたよ。下廻りが名題にならうなんて事は、町人がお武家にならうつてのと、まつたく同じ譯合なんで。……そのくせ相中上分になると、どこの旅へ出ても、座頭を勤めるだけの腕を持つてゐたもんですがね。

○

私が名題になりましたのは、五代目が梅幸さんの三十三回忌の追善に、新富座で初めて「蜘蛛」を出した時でした。（明治十四年六月翁が三十九歳の時。）こんなことを申しますと、自慢話のやうになつていけませんが、まつたく私ァ名題になりたくなかつたんです。さうなんで。……第一お前さん、相中上分でゐる

のさへ、自分の腕ぢやア勿體ねえくらゐに思つてゐたんですからね。勘定してえた譯ぢやありませんが、五代目からは十幾度もすゝめられますし、そのたんびに、氣まづい思ひをして斷るのに弱つたもんですよ、はい。ところが妙なはづみから、遂々名題になるやうな破目になつてしまひましてね。

左様、疾うに亡くなりましたが、私におかめといふ娘が一人あつたんで。……これを大そう可愛がつてくれた小半次のお上さんから「梅五郎さん、（前名）お前さんが名題に昇れば、うそでもおかめちやんは、お孃さんとか何んとか、人樣から呼ばれるやうになるんだから、おかめちやんが可愛いと思つたら、どうか音羽屋の親方のいふことを聞いて、名題になつてお上げなさい」と云はれたのが因でしたよ。どうも面目ねえやうな譯ですが、私もつひ娘の可愛さに引かされて、承知してしまひましたが、愈々名題になつて、自分の桶を持つて湯殿へ行つた時には、いやもう思はず冷汗が出ましたよ。――桶ですかい。左様で。……今ぢやア名題になつたから、桶を拵らへやうなんてお人はたんと見掛けませんが、もとは誰でも名題になれば、男衆を使つて、自分の桶をちやんと拵へたもんです。まア便利な世の中になつたのはよう御座んすが、芝居道の良い掟だけは、亂したくはありませんよ、はい。

○

もとは「親方」と云へば團十郎さんのこと「太夫」と云へば半四郎さんのことに極つてゐました。他のお人は菊五郎の親方とか、田之助の太夫とか、どなたも上へ呼名が付いたもんです。當節はすつかり開化ですから、何々君なぞと云ふやうな譯で、いやもう、素人衆にも通りがよくつて、結構で御座いますよ。

○

私の下廻り時分には、下廻りなんて者は、舞臺で働いて來たからつて、ろくに湯へなんぞ這入れやしませんでした。ですから樂屋中だつて、小さな桶へ水を汲んで來て、そいつで砥の粉を落したりしたもんです。まつたく下廻りなんざ、役者のうちぢやアなかつたんで。……

○

「こいつア芝居道も變つたなア」と熟々思つたのは、初めて歌舞伎座へ出た時でした。風呂場に水道があつて、その蛇口の下で、子役が頭を洗つてるぢやありませんか。今から思へは、何

んの變哲もない話ですが、その時はまつたくから、異人館へでも連れ込まれたやうな氣がして、びツくりしましたよ。

○

この節は芝居の舞台にも、すつかり西洋風が這入つて來ましたんで、小道具なぞも、みんな本物を使ふやうになりましたが、以前は、德利でも茶碗でも殘らず張物を使つて演つたもんです。それア粗末だと云へば、こんな粗末な代物はありませんが、そこが詰り、役者の腕の見せ所とでも云ひませうか。拵らへ物を使つて本物に見せるところに、藝があつたので御座いませう。いやしかし、どつちにしましても、茶碗へ本當におまんまをよそつて、舞臺で食べるなんざア、よく進んだもんですね。あすこまで行けば、舞台は大部樂になるに違ひ御座んすまい。

○

五代目が守田座で初めて助六をやつた時（明治三年）の事です。菊五郎の助六、芝翫さんの意休、粂若さんの揚卷といふので、まだ芝居の開かない前から大した人氣を呼んでゐました。ところがこゝに一つ、納まらないお人があつたといふのは、有名な芝翫さんのお袋さんで、たとへ狂言でも、日本一の人氣者が菊五郎などに、頭へ下駄を載せられては分が立たないから、止めて貰ひたいと云ひ出したんです。座元の守田さんの方では、撒物までしてしまつた後ですから、今更斯う云はれても、役を搗き換えるわけにも行かず、そこで河竹さんに相談して、下駄を頭へ載せないことに狂言を改めましてです。「助六さんその駒下駄を何うしやんすぞへ」のセリフで、五代目は「どうするものかお定り意休の頭へ載せるのよ。しかしおれが載せたなら、御贔負多い成駒屋、ふだん兄貴と立てる仲、こいつあ役でも載せられねえわえ」と啖手を拂ふ趣向でした。さて開けて見るとこの趣向が大受で、さしもの芝翫さんの人氣も、すつかり五代目に取られてしまふといふ仕末。これが評判になつて、守田座は大入を取りましたよ。

私はこの狂言で、中通りの三人と仕出しのぞめきに出てゐましたが、五代目に掛つて投げられる、このトンボで弱らされました。と云ふのは、例の草履下駄といふやつを穿いてゐたんで、どう返つても滑つて仕様がねえんで。……おまけに今と違つて、小道具の方ぢやア下廻りなんざ、てんで役者扱ひにしちやアゐないんですから、履物だつて、合ふやうなのを呉れる譯がありません。大抵足の二つぐらゐ這入るやうな、鼻緒のゆる

いやつをあてがはれてるんで。——何うにも仕方がねえし、怪我をしちやア勤まりませんから、跳になつて、返ることにしましたがね。すると仲間が承知しません。ちよいとトンボを返るのに、跳になるなんざ大業過ぎる。なる程さうにやア違ひないんですがね。困り拔いた擧句、今度は麻裏で出ることにしましたよ。これなら樂なもんですが、またいけねえんで。……吉原のひやかしが、麻裏草履はなからう。これも嘘に極んてるんですから弱りましたよ。ですけどお前さん、そんなことを云ふ當人達だつて、草履下駄でトンボが返れる譯はないんです。ええ儘よと思つて、その時分にや聞かない氣でしたから、腰ッ骨を折るつもりで、千秋樂まで草履下駄で返りましたが、いやどうも、今から考へるとぞつとしますよ、はい。

○

小道具にひどい目に逢つたのは、或る狂言で、私が眉間へ豆腐を打付けられる役をした時でした。毎日手の平へ少しづつ豆腐を隱して出るんですが、こいつを初日に半丁買つてくれたッ切り、四十二日打ち通す間、一度も買つてくれねえんですから堪りません。丁度四月に開いた芝居で、陽氣がぽかついてますから、十日と經たないうちに腐りが來ちやつて、舞臺で眉間へ付けるたんびに、いやその臭いの臭くないの、どうも滅法な臭ひでした。何しろ仕舞にや、豆腐へ黄色い泡が立つて來たんですから、ひどう御座いましたよ。附帳にない物は、半紙一枚だつて、餘計にくれるやうなことはねえんで、いやその時分の小道具なんて者ア、ひどいものでしたよ。

○

昔は、よく身分のある役者が威張つたと申しますが、身分があつたから誰でも威張つたといふ譯のものではなく、威張るお人は、それだけの腕を持つてゐたものでした。

○

これは當時やかましかつたお話ですが、名題になりました時の一番目「夜討曾我」で、中村宗十郎さんの十郎と、團十郎さんの五郎とが、拵らへに就て互ひにお讓りにならず、それが爲に宗十郎さんは、中日過ぎから、病氣と云つて芝居を休んでしまひました。詰り團十郎さんの五郎は寫實の意氣で、小手臑當腹卷草鞋といふ拵らへで出ましたのに、宗十郎さんの十郎は、素足に袴の股立を取つた昔の型をその儘で行くといふのが、お二人の御意見のお相違でした。どちらも大立者だけに、この時の

滌内の騷ぎと云つたらありませんでしたよ。——事の善し惡しは兎も角、今でしたら、拵らへの意氣が合はないために、芝居を休むやうな强いお人は御座んすまい。

○

中村仲藏さんの家號は、舞鶴屋ぢやアありません。榮家といふのが本當ださうですよ。これは私がまだ我鬼の時分、樂屋で湯に這入つてる仲藏さんに「親方の家號は何んてんです」と訊いたことがありましたが、その時仲藏さんは、「きまつてるぢやアねえか。三番叟の中の文句にもある通り、おれの家號は榮家だよ」と云はれました。舞鶴家といふのは、鶴藏さんの家號なんです。

○

それに就て面白い話は、七代目團十郎さんの番頭に、釜右衛門といふお人がありましたが、この人が或時樂屋内の者が「舞鶴屋々々々」と噂をしてゐるのを聞いて、「一體舞鶴屋つてえのは、誰のことなんだい」と訊いたさうです。そこで側にゐた者が「鶴藏さんのことだよ」と云ひますと、その返事が皮肉ぢやありませんか。「さうか、おいらはまた、舞鶴屋つていふから、太神樂のことかと思つた」——昔は、樂屋うちには、よくこんな話がありましたよ。

○

名前を繼ぐといふことは、私は大嫌ひな性分でしてね。よく、お前さんは何代目松助なんだ、と訊くお人がありますが、そんなことを訊かれると、まつたくいけませんよ。ですから松助の名を貰ふ時にも、師匠にちやあんと斷つたくらゐなんで。……地震の時に燒いてしまひましたが、私は師匠から、何代目松助といふんでない、五代目菊五郎の弟子の松助をやると書いた、書付が貰つてありました。何代目の襲名なんてのどうもかう、色々面倒でいけませんよ。

○

もう六十年からも前のお話ですが、私と死んだ尾登五郎とが、橋場にくすぶつてゐた時分のことです。遊びにゆくには錢はなし、芝居は休みと來てるんで、寒中を袷一枚で强がつてゐたんですが、丁度その頃、ひよつこり知り合ひになつたのが、久保田彥作さんといふお人でした。赤坂の萬屋といふ米屋の總領に生れながら、自分は御家人の株を買つて、見世を弟に讓つ

てしまつたといふ變つた方で、お作者になる考へから、大小を近所の荒物屋へ預けては、河竹さんのお宅へ通つてゐました。この久保田さんが、私共の部屋へ居候をするといふことにきまつた時は喜んだもんです。何しろ私と尾登五郎とで、寒中に坐布團を二枚引いた儘、ねんねこのやうな物にくるまつてゐたんですから、久保田さんが來れば、布團の上へ寢られるといふのが、何よりの樂しみだつたわけで。……

ところが、いざ一緒になつて見ると、久保田さんの布團がまたなんともお粗末なもので、三人はおろか、一人だつて滿足に寢られない始末ぢやアありませんか。おまけに、久保田さんて方は、天ぷらそばを二つがけづつ食べなければ、(一つが丁度今の二つぶりですから只今ですと四つづつ食べる譯合です)。それでないと、食べたやうな氣がしないといふくらゐ大きな體なんですから、夜中なんぞ、うかうかしてゐた日には、押潰されてしまひます。ですから溫かいどころぢやなくて、おちおち寢ることも出來ませんでした。そこでそのことを話しますと、久保田さんも氣の毒に思つたと見えて、自分の引いてた布團を三分で私共に讓つて、どこかへ引越してしまひました。

後に村幸治といふお作者になつて、默阿彌さんが、「自分の書いた物に、版權を附けるなんて事はいやだ」と仰しやつたのを「あなたのお爲ではない、子孫のためだから」と云つて、河竹家の版權をきめたのは、この久保田さんださうです。

○

尾登五郎は、何かにつけて新工夫の巧い男でしたよ。五代目が明治十九年に、千歳座でチャリネの芝居をやつた時にも、秋葉ッ原のチャリネの小屋へ行つて、仕掛の種を見破つて來たのは尾登五郎でした。

○

今の芝居で一番有難いと思ふのは、電氣ひとつで、何うにでも舞台の樣が變えられることです。これから考へると、もとの芝居は實に情けないやうなものでしたね。狂言中に稻妻を光らせると云へば、表二階に二つある窓へ、道具方が鏡を持つた儘つかまつて、そこからぎらぎらやつたんですから思ひやられます。雨や雪が降れば、幾日でも稻光は休みでしたよ。五代目は流石に凝り性だけあつて、こんなことでも道具方にまかせつ放しではなく、いつも弟子のうちから人をきめて、色々註文を付けてはやらせましてす。

○

五代目が高橋おでんの狂言を新富座でやつたのは、おでんが御處刑になつて間もない、明治十二年だつたと思ひます。何しろおでんといふ女は、その當時新富町に住んでゐたんですから、當人を見た人が澤山あつただけに、凝り性の師匠は、おでんの住んでた近所へ行つて様子を聞いたり、情夫の小川市太郎に會つたりして、隨分工夫を凝らしました。私も一度、髪屋から出て來るところを見たことがありましたがね。どうしてなかなか、毒婦なんて恰好の女ぢやありません。しとやかな御新造風の人でしたよ。あとで新橋にゐた茶幸さんから聞いたことですが、このおでんが、鍛冶橋内の裁判所でお調べを受けた時に、拔けるやうな白い顔に亂れかゝつた鬢の毛を口に銜へて、身動きもしずに立つてゐたさうです。おまけに裁判官の前で、何もお願ひはありませんが、もう一度小川にだけ會はせて下さいと云つたとかで、茶幸さんも、いい覺悟だとびつくりしてゐました。

その小川市太郎といふ人には、茶幸さんの家で會つたことがありますが、今から考へると、何んでも大變新らしい人でしたよ。おでんのことを話すのに「彼が彼が」つて云つてましたからね。その時分こんな言葉を使ふ人は、滅多にありやアしまんでした。新富町邊の遊び人だと聞きましたが、乾度、出は士族かなんかに違ひありますまい

○

これもあの當時聞いた話ですが、おでんは横濱に出掛ける時には、いつも新橋の角から、横濱通ひの乘合馬車へ乘つたといふことでした。丁度今の萩の餅屋の前に乘場があつて、一日に二度横濱へ出たもんです。三人乘の上等の幌馬車で、おまけに馭者は異人なんだから、面白いぢやありませんか。たしか横濱までが二圓位でしたらう。

○

茶幸さんで思ひ出しましたが、櫻田本郷町の角から、土橋の方へ向つた北側に、古くから梅茶といふ料理がありましたよ。十何間かの間口に、奥深く離れがいくつもある大した家でした。ここの主人が大の成駒屋さん贔負でしてね。大阪の梅玉さんなどは、自分の家のやうにしてゐたもんです。左樣さ、明治二十四五年頃までありましたから、御存じの方も澤山お有りでせう。

○

本讀を聽かなかつたばかりに、大變なしくじりをしたことがありますよ。たしか明治十一年の新富座だつたと思ひますが、西郷隆盛の芝居で八十幾日か打通した時のことです。私は小島丈六といふ役を頂戴しましたが、初日の直ぐ前の日まで病氣をしてゐましたので、唯頭取に役の筋だけ聞いて舞台へ出てしまひました。何でも、馬で出て來る左團次さんの桐野利秋に、竹を切つて鞭に渡すといふだけの役でしたが、その竹を渡す時に、私は氣を利かせたつもりで、笹ツ葉をすつかり扱つて渡したもんです。ところが、これが飛んだ間違ひだつたんですよ。桐野利秋といふお人は、萬事上杉謙信の型を學んだとかで、いつも青竹の鞭を持つてたさうですが、この竹の葉が萎れないうちに、敵の陣地を落すといふのがみそたんださうで……私はまつたく、そんな事とは知らなかつたものですから、鞭にするのなら、なまじ笹ツ葉なんか附いてない方がよからうと、餘計な事をお前さん、考へ過ぎたばつかりに、取り返しの付かないことをしてしまひました。

さア、樂屋へ這入つてから、これがために師匠には怒られるし、左團次さんには濟まないしで、すつかり途方に暮れました

よ。私ア死ぬまで附けこなつもりでゐた髷を、師匠の前で切てしまつたのはこの時です。いくら開化だと云つても、この時分にや、自分から髷を落さうたんて人は、人だつてありやアしませんでしたからね。――家へ歸つて上さんに、お前さんまア何うしたのさ、と云はれた時には、私ア斯う、胸が一杯になつて、ちつとの間、何んにも云へませんでしたよ。

○

髷を切つてから、當座困つたのは、鬘下で御座いましたよ。その頃の名題下は、なかなか鬘下に羽二重を使ふやうな、そんな贅澤は出來なかつたんで。……みんな金巾なんですから堪りません。いくら鬢附油を引いても、毛の強い坊主頭ぢやア、受付けてくれねえんです。その當時壽美藏さんなんか、あまり油を塗り付けたために、すつかり頭へ地膨が來ちまつて、大弱りでした。私アそろそろ油も塗り切れませんので、仕方なしに後ろの方を糸で結いて置きましたよ。今から思ふと夢のやうです。

○

衣裳で困つたのは、初めて蝙蝠安をやつた時でした。方々探

しても、どうも氣に入つたのがないので、仕方なしに、上さんの喪服を着て勤めたんですが、これが幸ひに御見物の御意に叶つたので、ほッとしました。震災まで大事にしてゐましたが、あの時燒いてしまひましたよ。

○

世話物の方では、藍微塵は道樂者の若旦那、茶微塵は泥りッ氣なしの、遊び人の着物といふことになつてゐます。どなたがおきめなすつたか知りませんが、藍微塵といふ着附は、いなせな中にも、どこか人柄なところがありますが、茶微塵となると、どう見ても惡の方になりますんで。……芝居でも、着附ひとつで、半分はその人の柄が出來上るのですから、なかなか油斷は出來ません。

○

たしかなことは覺えてゐませんが、八代目（團十郎）さんの舞台を、我鬼の時分に二三度見たことがありました。その當時大阪で豪勢鳴らしてゐた、『難波の太夫といふお人が下つて來て、八代目さんと「三十三間堂」を出しましたが、そのお人は片ッ方入れ眼で、おまけにお猿のやうな顏をした方でしたから、見物衆にはてんで受けずに仕舞ました。

○

私はこの年をして居りますが、食べ物は、日本食よりも却つて洋食の方が好きなくらゐ、まア今の世の中に馴れてるつもりで居ります。ですが唯一つ、蒸汽船へ乗ることだけは、何んしても出來ないので困りますよ、はい。もつともこれは、若い時に、汽船でひどいめに遇はされたことがありますんで。……まだ梅五郎と云つた當時の明治十二年に、横濱から伊豆の下田まで乗つた、このたつた一度の海の旅が、運惡くひどいシケだつたもんですから、大こりにこりてしまつたやうな譯なんです。

これは横濱から名古屋へ通ふ蒸汽でして、名古屋への初めての旅興行に出かける途中だつたのですが、汽車で行くより、蒸汽の方が安いなどと考へたのが大間違ひでした。船が小田原の沖へ掛つた時分から、そろそろテンテレツクが始まり出して、熱海なんて所を通る時分には、それこそみんなが、金盥の中へ顏を突込んだ儘、身動きひとつ出來ない仕末です。

何しろ二月の寒いさなかに、單物に薄い綿入を一枚重ねたきりで、毛布ひとつかけずに、下駄を枕にして、鮪や鮨と一つ部

屋へ寢かされてゐんですから、否の臭ひだけでも、大抵胸が惡くなつてしまひますよ。おまけに、船は逆立をするやうになつて、機械がカラ廻りをする音と、浪と嵐が暴れ廻ると來ては、生きた空も何も、あつたもんぢやありません。汚いお話ですが、傍にゐた者が展げた小間物見世が、自分の膝元へ流れて來ても、それさへよける氣力がないんです。まづ地獄の責苦とでも申しませうか。

一晩中石ころのやうに揉まれ通して、あくる日のお晝頃下田へ着きましたが、十日も寢ずにゐたやうに、體中がへとへとです。それでも船は、半日ばかりそこの造船所で手入れをして、晩方には出帆するといふんですが、もう私共は、我慢にも二度と乘る勇氣はありやァしません。切符は無駄になつても、生命には換えられないといふんで、とうとう私共は、あくる日一日休んだだけで、その次の日に天城山を越して大仁へ出ましてす。今では自動車が通つてるさうですが、何しろその時分の天城山ですから、足もとから猪の出るやうな凄さで、怖さと云つたら、またひと通りぢやァありません。途中で獵師におどかされて、いつそこんなことなら、あの蒸汽で行けばよかつたと、泣くにも泣かれない思ひをしました。ですが、そんなことをしながらも、あれから名古屋まで歩いたんですから、驚くぢやありませんか。おかげで足へ二つも豆を踏出してしまつて、名古屋へ着いても、肝腎な芝居が、滿足に出來ないのには弱りました。

その時でこりましたものですから、いまだにどうも、船ばかりは乘る氣がしません。（續く）―三月五日―

白く輝く

——詩六篇——

北原白秋

柳鷺

鷺は棲む、正身の
白き聖。

しづりうつ雪の柳に
やや燻みて。

つくづくとうち見やる
水、枯葦。

白く耀く

まさしくもみ冬なり、
白ひと色。

鷺は棲む、羽ごろもの、
笠の翁。

いとどしく、薄墨の
空飛ぶもの、

蒿雀（あをじ）かと、眼は放て、
また眺めす。

言問はす、立ち舞はす、
日のくれぐれ。

鷺は燃ゆ、白毫（びやくがう）の
明（あか）る眉間（みけん）。

二月

息繼がず、
冬のひばり、
さへづりの
短くて。

氷はる
河のうへ、
ぴしりうつ
缺片(かけら)、氷。

とりどりに
子らは觀る、
むら消えの
雪を、田を。

ちちら、ちちり、
空のこゑ、
まだ辛し、
春は來ず。

匂だつ
畦の土、
また、今朝も
凍みこほりぬ。

雀と雪

閑かなり、
庭の雪、
凍みこほり、
こはばりぬ。

きびしきは

寒の冴え、
木のかげも
貧しくて。

足跡よ、
誰がつけし、
雪の窪
また照らす。

いとどしく
うごくもの、
せちに啄む、
壁の底。

雀なり、
眞黒なる。
目につきて
目を去らず。

噛む

氷柱噛む
白き犬、
月を噛む。

碎くなり、
痛烈に光るなり。

言問はむ、
この犬の怖るるもの。

五月蠅なす神は澄む
木にも岩にも。

光るなり、
氷柱の神。

犬は噛む、
月を噛む、
かりかり噛む。

白き氣韻

目ざましきもの、白辛夷(しろこよし)、
白き胸その百千鳥(もゝちどり)。

夏は岩が根、白牡丹、
圓光はなつ番ひ燕。

月は良夜(あらたよ)、白かんば、
白き鹿立つ、花芙蓉。

へうと飛びゆく雲は冬、
鶴に身をかる幻術師。

神はまします、靈氣に
白き氣韻は澄みのぼる。

花椿

黄鳥ねむる花椿、
月は翁の面のうへ、
鼓うてうて、おもしろく、
春はふたたび、花椿。

春宵一刻の値

春の夜

芥川龍之介

一

僕はコンクリイトの建物の並んだ丸の内の裏通りを歩いてゐた。すると何か匂を感じた。何か、？――ではない。野菜サラドの匂である。僕はあたりを見まはした。が、アスファルトの往來には五味箱一つ見えなかつた。それは又如何にも春の夜らしかつた。

二

U――「君は夜は怖くはないかね？」

僕――「格別怖いと思つたことはない。」

U――「僕は怖いんだよ。何だか大きい消しゴムでも噛んでゐるやうな氣がするからね。」

これも、――このUの言葉もやはり如何にも春の夜らしかつた。

三

僕は支那の少女が一人、電車に乘るのを眺めてゐた。それは季節を破壞する電燈の光の下だつたにもせよ、實際春の夜に違ひなかつた。少女は僕に後ろを向け、電車のステツプに足をかけようとした。僕は卷煙草を啣へたまま、ふとこの少女の耳の根に垢の殘つてゐるのを發見した。その又垢は垢と云ふよりも「よごれ」と云ふのに近いものだつた。僕は電車の走つて行つた後もこの耳の根に殘つた垢に何か暖さを感じてゐた。

四

或春の夜、僕は路ばたに立ち止つた馬車の側を通りかかつた。馬はほつそりした白馬だつた。僕はそこを通りながら、ちよつとこの馬の頸すぢに手を觸れて見たい誘惑を感じた。

五

これも或春の夜のことである。僕は往來を歩きながら、鮫の卵を食ひたいと思ひ出した。

六

春の夜の空想。――いつかカツフエ・プランタンの窓は廣い牧場に開いてゐる。その又牧場のまん中には丸燒きにした鷄が一羽、首を垂れて何か考へてゐる。……

七

春の夜の言葉。――「やすちやんが靑いうんこをしました。」

八

或三月の夜、僕はペンを休めた時、ふとニツケルの懷中時計の進んでゐるのを發見した。隣室の掛け時計は十時を打つてゐる。が、懷中時計は十時半になつてゐる。僕は懷中時計を置き火燵の上に置き、丁寧に針を十時へ戾した。それから又ペンを動かし出した。時間と云ふものはかう云ふ時ほど、不思議に急に過ぎることはない。掛け時計は今度は十一時を打つた。僕はペンを持つたまゝ、懷中時計へ目をやると、――今度は十二時になつてゐた。

九

誰か椅子の上に爪を磨いてゐる。誰か窓の前にレエスをかがつてゐる。誰かやけに花をむしつてゐる。誰かそつと鸚鵡を絞め殺してゐる。誰か小さいレストランの裏の煙突の下に眠つてゐる。誰か帆前船の帆をあげてゐる。誰か柔い白パンに木炭畫の線を拭つてゐる。誰か瓦斯の匂の中にシヤベルの泥をすくひ上げてゐる。誰か、――ではない。まるまると肥つた紳士が一人、「詩韻含英」を擴げながら、未だに春宵の詩を考へてゐる。

……

元祿の春宵

室生犀星

一

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅　芭蕉

元祿元年の春宵、初瀬の觀音に芭蕉は前の十八日の緣日に拔けた參詣を、あとの平の日に詣でた。

春も半ばの程で、心も落着く溫かい宵の口であつた。芭蕉は社寺に詣ることが好きなのは、性來の物珍らしさに就く心でもあつた。境內の櫻も仄暗い中に立つてゐる。――內陣に二對あるぼんぼりも柔らかい藍色の闇を白う浮かしてゐる。芭蕉はかういふ景色にいつも單調を發見してゐた。彼の新しい物の見方は稍々ともすると平凡な幽遠にそむいた心でゐたが、今夜はそれにも拘はらず或物優しい親しみを感じた。

それは堂の隅の上敷の上に先刻から物音も立てないお籠りの人を見出したからであつた。御明しはお籠りの人へ漸つと到いてゐるくらゐの暗さだつた。女人である證據は髮に一層の黑みを帶び、橫顏の白うたよやかな有樣でも解るのであつた。彼女は低い殆聞き取れない程の小聲で、詠歌のやうな誦經を絕えず口の上にのぼらせ、時々頭を垂れては禮を致してゐた。物淑やかさは靜かさの中に乳を嗅ぐやうな一種の物惱ましさをも放つてゐた。芭蕉は却つて平の日に詣つたことを仕合に思ふた。

彼は境內に暫く佇んで、更けゆく春宵の音に耳を澄してゐたが、先刻から氣が付かなかつたのであるが堂の前の樹の根の上にも、お籠りの人が最う一人ゐることを見出した。そこは全くの深い闇であつた。それにも紛れない女人の生白い容顏の在りかは、さういふところへばかり到く星明りの中に却つて瞭らかに浮き上つてゐた。芭蕉は或る恭愼の情と遠慮の心とを併せて感じた。彼は物靜かな足どりで境內をそとに向いて步き出した。彼の心は嚴しい程でもない物優しい壓迫を感じ、一刻も早くこれらのお籠りの人々のさまたげをしてはならぬと思ふのであつた。

彼は物ゆかしさを感じたのであつた。女人の性情の外に或る幽遠に隈取られた美しさを、それが彼の心に永年働きかけてゐた人と未來への考へを結び付けたのであつた。彼は左ういふ考

への中に自身の沈潜を思ふことは、常に否まれぬ歓びであつた。何を祈り何を女人が願ふてゐたかは知らない、唯、彼の見たものはゆかしさの底にある美しい姿であつた。人間の心がなびいてゆくところの清らしさで、それが宵のほどであるのに有明のやうに新しく映つてくるのである。芭蕉は香氣の高い春宵の路上へ出て、灯の更ける初瀬通りを眺めた。

二

春の夜は櫻に明てしまひけり　　芭蕉

「いもやすく寝られざりけり春の夜は花の散るのみ夢に見えつつ」（躬恒）「新古今」

花時の明るさは夜も罩められる明るさである。何となく氣候のせいか寝られぬ床の中に彼は居た。そして彼の思ふことは寝床の中の何時もの埒もない空事であつた。四十八歳の芭蕉の心を往來するものは、天下の俳諧道でもなければ又已れの大成を思慕するのではない、――唯、彼にもやうやく人を厭ひ他の情を思ふことに疲れるばかりであつた。自ら老ひ、自ら年とることに生きる物憂い心が、次第に彼の夜々の思ひに加はり悩ましてくるのだつた。彼はそれを自ら解からうとしながら何時の間にかうとうとするのだつた。

世は春でカラリと晴れ明けた空には、却つて秋夏の靜かさ以上のものがあつた。明け方の中にこの古い櫻のたゝずまひを縁取り、この櫻の明るさが誘ふあかりは、一さう清く穏やかな心に残るのであつた。

三

草臥て宿かるころや藤の花　　芭蕉

大和丹波市の里に近づいたころは、旅好きの芭蕉もほとほとに疲れてゐた。村里にはまだまだ灯は入らないが、晩春の大陽路には烈しい木の芽時の空氣に刺戟さへ覰ぎ當てられるほどだつた。暖かい雜草と埃とに蒸された草鞋の底は、いきれで熱かつた。

「丹波市の泊りにしやうか？」

芭蕉は尾張から伴ふた杜國をかへり見た。美青年の俤ある杜國は芭蕉よりも先きに草臥れ、右足を引摺つてゐたくらゐであつた。

「わたくしも全かり疲れました。」

路上に奥大和からの駄馬が通つて行つた後さへ、乾いた陽内

ほど蒸しあたゝかい日であつた。

宿は往來から入り込んだ茶店も兼ねてゐる旅籠であつた。馬の草鞋に駄菓子を鬻ぐ店の間も埃だらけだつた。洗足に立つた芭蕉は、堀井戸の冷たい水に足を浸しながら、手を額のあたりに動かしながら旅の具の始末をして居る杜國を差し招いた。

格子型に編んだ竹の棚から垂れた藤の花が、虻と蜂の唸り聲の中から美事に咲き揃ふてゐた。

「だいぶ老木らしいぢやないか。」

根の幹は太く嚴丈だつた。芭蕉はその明るい花の下に立つた。

「水も好い水ですね。」

杜國は冷たい水で草鞋を洗いだ。芭蕉は何時でもその日の旅の草鞋は洗つて木にかけて乾かすのが常であつた。杜國は師の次の枝に、自分の草鞋をかけた。「かうして早めに宿をとるのも落着いてよいものだ。」芭蕉は花の下を去らずにゐた。

宿の女が手拭を持つて來たが、二人が洗ぎを濟したあとなので笑つて引き返した。

二人は部屋へ通つたが、垣の前に無雜作に束ねられて此處にも藤の花が美しく咲き垂れてゐた。まだ灯に早く併し宵の程に近い、蒼みをふくんだ薄煙が漂ふてゐた。

頭陀物語に、「或人翁に物語りけるは、貴坊は紙衣のあとなきひ雲に別れ水に伴ひいづちを宿と定め給はず、行脚いづれの日かをかしかりし。翁ほゝ笑み給ひて、旅せぬ人はさこそ思はめ、行脚は苦樂を露とす、……と答へたり。

笈の小文に、「よし野行脚の時の句にして、その紀行の文にはく、旅の具多きは道のさはりなりとて物皆拂ひすてたれども、夜の料にと紙衣一つ合羽やうのもの硯筆紙藥に晝笥なんど物に包んでうしろに背負ひたれど、いとど脛弱く力なき身のあと樣にひかふるやうにて道なほ進まず、只ものうき事のみ多し、とありてこの句見えたり。

長日の趣を詠る歌、「夕ぐれにおもへば今朝の朝がすみ世をへだてたるこゝちこそすれ」有家。

四

芭蕉は江戸座の其角に誘はれて、春宵、猿若町の芝居の桝の中にゐた。芭蕉は子供のやうに歡んで小屋の中の美しい空氣に溺くんだ。双柳の袖を振る女や、女を取捲く芝居小者の愛想振りにも何等の反感を有たなかつた。彼の面容に浮ぶものは絶え間もない微笑であつた。其角は心ひそかに師の心がかういふ空氣の中にゐることをも、平氣であるのに驚いたくらゐであつ

た。併し乍ら其角の最つと驚いたことは、この喧騒の中にゐる師の落着き振りと、決して調和を破らない澁い雜閙を制してゐるやうな表情であつた。酒席往來の烈しい背其角の心に重りかかるものは、芭蕉が喧騒の中にゐて益々靜かさに透つてゐることであつた。

芝居を出て二挺の駕が深川を指して行く途すがら、芭蕉は垂れの內から、

「けふは氣苦勞をかけて濟なんだ。」

と言つた。

「師匠こそ退屈なされたでせう。」

「わしは面白かつた。」

芭蕉はこれ以上話さなかつた。息込みの駕屋の草鞋のひたつく音ばかりで、二挺の駕の垂れはお互ひに上らなかつた。其角は今日少しも芭蕉が退屈さうな容子や、故意とらしい風流人の勿體をしなかつたこと、名もない江戸座の末弟にまで手厚く挨拶を返したことなどを想ひ返したが、實際芭蕉は心から芝居を面白がつたのだらうかと、何か怪しまない譯に行かなかつた。ハネ前に芭蕉は酷く疲れてゐたので、其角は何度も中途で小屋を出やうかと誘ふて見たが、芭蕉はハネるまで桝を出やうとしなかつた。平常から丹念な人ゆえ、感興を殺ぐやうな野暮をしない要心を思ふと、其角は師翁の心を靜々と感じ入るばかりであつた。平常感じないものをも自然に加えられて來て、其角は今さら師翁の何物かに壓迫されてゐた。二挺の駕は別れた。

芭蕉はその翌朝——明方から生暖かい雨が庵のうしろの古池の涸れた乏しい水を動かしてゐるのを見て、なほ頭が草疲れてゐることを感じた。からだの弱い彼は生暖かい雨に物憂く眼を遣りながら、自分の健康があゝいふ場所柄に適し兼ねることを思ふた。其角には話さなかつたが彼は最うあゝいふ桝の中に坐ることに、甚だしく憊れることを經驗した。

併し芭蕉は今朝見る庭先の風情に、何時もとは變つた或る複雜な氣分の入り込んだ景色を見入つた。雨にぬれた枝、池のまわりの枯草に雜つた青い草や莖、近隣の誰かゞしてゐる話し聲、それらは疎らな寛濶のひまひまに物慵い或る單調さで、何時までも動かないで續いてゐた。彼は頭が疲れてゐるせいであらうかとも思ひ、生暖かい雨のせいかとも考へたのであるが、結局、何も考へ當てられなかつた。唯、物憂い、ねばり氣のある風景は、刻刻に春を急ぐやうであつた。

　春雨や蓬をのばす草の道　芭蕉

湖水眺望

唐崎の松は花より朧にて　芭蕉

或人云、花よりは花から也、比良の高嶺の花から續きて松も朧にてよろしとの吟也と此說は其角反考が說にそむけばいぶかし。（句選年考）

朧のかかつた宵更けたころの、松の葉の光が妙に仄白い——花時の服にあやなす松のまぼろしかも知れなかつた。湖水は穏やかな朧の中の月を溶いてゐる。松は暗いが湖水の明りの這ふてくるのと、薄月とに浮き上つて見えるのだつた。

芭蕉は堅田の千那の庵にゐた。（晋風氏說）せいの矮い垣を越えるものは、下這ふおぼろけた明りで、穏やかさは百年の昔と渝らなかつた。彼の心を往來するものは、昨日と今日へ亘る輪廻ではない、片雲に身をまかすものの妙な傷みやすい心だつた。彼は垣の外へ出て歩いてゐる内、いつもの空虛な心もちを發見した。彼は何も考へてはゐなかつた。唯、茫々たる風景の内に魂のない彼を發見するのであつた。

春宵雜談

佐佐木茂索

山房清談ふるひしが花野素通りす

漫然こんな俳句を思ひ出した。誰の句であつたか、ひよつとしたら一碧楼の作句かも知れない。もう十四五年も前に、新傾向句の隆興時代に、偶目したのだから、不確かである。だが、作者の誰であるかは、別段ここでは重要ではない。標題に「春宵雜談」と先づ書いたので、漫然清談を想起したまでである。清談でなく、雜談であるのが、讀む人に氣の毒な位のものであるに過ぎない。

こないだ、ある人の結婚披露の宴に招かれた歸り途、四五人同じ自動車のなかで、——外は、もうさつきからの雪でまつ白だ。その上、なほどんどん降りしきつてゐる。——十二時も過ぎた時分だ。世間はしんと靜まりかへつてゐる。ゴムのタイヤは積つた雪に、かすかにきしむ音を立てながら走つてゐた。—

「こんな晩、一杯いけるロだといいね。また僕のうちへでも來て貰つて、姉妹でもおいて——何でもいいから夜の明けるまで、遊んでゐたいね。」

「ほんとに。——」

何かの拍子に彈んだ氣持ちになり、何となく友達と、——友達でも何でもいい、今まで一緒にゐた人達と、別れたくなくなる氣持ち、そんな氣持ちになることは、ままあることだ。その程度で、「この良夜をいかんせん」の氣持ちには、僕と雖しばしば際會する。夏でも冬でも、季節は何時でもいい、——戸外に眞白な雪を見て、何となく人戀しくなつて、——男同志で、別にいやらしくもあるまい。——

自動車が雪を衝いて走る、それも惜しい、何も蚊も、すべてを今あるままに引留めておきたい、そんな氣持ちで、置酒徹宵を語り合つたが、別に實現もしなかつた。てんでに、さよなら、おやすみ、で散り散りに別れてしまつた。

もう少し若かつたら、さうもあとで思はんではない。僕は幾年か牛込に住んでゐたが、その頃はよくぶらぶらと神樂坂を散歩したものだ。人通りも疎らになつた屋台で立喰ひなど、さうして、友達の誰れ彼れを斷居に誘つて何するでもなく、すれば何か悪い事をして夜をあかし、精も根もなくなつてから別れたものだ。——

だが、「春宵一刻云云」はそんな事ぢやないのだらう、もつと何か——。

僕は芭蕉の句のなかでも、

猫の戀やむとき閨の朧月

こんな句はきらひである。何だが性に合はないのだ。「春宵一刻價千金」といふ題下で作文するに當つて、思ひ出したのが此句——あるひは僕が下賤なのかも知れない、だが下賤でないにしても、あるにしても、僕不學で斯如題下に想華の煥發するものがないのは甚遺憾である。いまだ曾て、春宵、千金にも代へ難しと觀じたことがないからでもあらう。

閨の朧月いつしか消えて、ぼんやり朝となり、「——かき曇されし春の雨」——續いて思ひ出す句に碌なのはないが、いづれも僕の連想を呼ぶものではない。まだしも緣のあるのは「——松は花より朧にて」の境地だ——と、云ひ切らう。

ここで雪の夜の置酒徹宵へ幾分連絡するのである。

僕はいま鎌倉に住んでゐるが、芭蕉の句の中に、鎌倉へ行く人を見送るとてとか何とか前書があつて、

霜をふむでちんばひくまで送りけり

といふような句があつた。僕が鎌倉へ移り住む時には、そんな人は——あまりな餘事はさしおかう。

鎌倉は、——ある人人には或は夏ばかりかも知れない。現に僕にも曾ては鎌倉は夏ばかりの鎌倉であつた。その後、ある時は麻雀の鎌倉だつたかも知れない。しかし、昨今の僕にとつては、——僕並に病弱な家族にとつては、鎌倉は常住の鎌倉である。

春さきの鎌倉がどんな處か、僕はまだ知らない。しかし屹度ぶらぶら歩くにもつて來いの夜を持つであらう、と思つてゐる。

春の晩、ふらふらと名もない小徑を行くのはいいものである。水つぽい空氣に月の色などを氣にしながら、横町の垣根の下を何かなしに歩く、のん氣である。

新芽の匂ふなかに、明るい窓があり、思ひがけず、賑やかな笑ひ聲を聞くなど——通俗小説をかいてはいけない。

僕は今氣力衰へてゐる。神思恍惚として、

「いい晩だね。」

さうはいかないのである。なにしろ、君考へてみたまへ、はてものことに腹空へるわざを、以上したのである。

巴黎仙女譚

西條八十

巴里の廣小路(グラン・ヴールヴァール)へ夜々出沒する魔性(ましやう)の女(をんな)たちは、まるで規則でもあるやうに左側(ひだりがは)の歩道(ほどう)(オペラ座の方から行つて)しきや歩かない。

これはその左側の歩道の散歩を特に愛してゐるF君を中心としての話である。

媚(なま)かしい春の夜(よ)だつた。マロニエの若葉ものびて、その葉(は)末れにベルリッツ語學校の赤い廣告燈がいよいよ赤く仰がれた。舖道のカフェーの椅子(いす)に居る米國婦人の氣の早い夏帽子にも、すでにグラン・ブールヴァールに春の深くなつたことが窺はれた。

F君はその晩(ばん)の拉典區(カルティエ・ラタン)で、學生並の手輕な晩餐を認(したた)めると、

いつもの通りバスでサンミシェルの橋の袂からオペラ前まで行つた。さうして下りしなに、角の寶石商の窓玻璃でネクタイの歪みを直すと、スネーク・ウッドのステッキを立てて、ゆつくりゆつくり例の左側を歩きだした。——

F君に言はせると、グラン・ブールヴールと、サンミシェルの通りと、モンパルナスの通りと、この三つの地域を夜、散歩するのに、それ〴〵××的な目標があるのださうである。

まづブールヴールでは、ヴォードヴィル座の前あたりで松葉杖のネネに邂逅すのが樂しみである。次にサンミシェルでは、背のずぬけて高い、愛嬌たつぷりのマダム・ヤマに逢ふのが樂しみである。そしてモンパルナスでは、カフェー・ロオトンドの往來へ向いた椅子で、コンセールに合せていつも首を掉つてゐる、晝間はモデル稼ぎの西班牙女、モーベーを見つけるのが樂しみなのださうである。さうして、昔、吉原を一廻り素見してからで無くては眠れないと云ふ人があつたやうに、この三つの地域のどれかを歩いて、どれかの目標にぶつかつた後でなければ、F君はその下宿へ戻つて安らかに眠ることが出來ないのである。

この女たちの中で、松葉杖のネネだけは特徴が有るので私も見憶えてゐる。右脚の無い、細面の眼のいい女で、いつも拄杖に縋つてブールーヴールを歩いてゐる。雨の夜ふけ、オペラの歸りなどに、暗い横町の角にしよんぼり客待顔に佇んでゐる彼女の小づくりな姿を見ることは、さすがに一味の哀憐を唆つた。

もつともこの哀憐と、それからもう一つ、卑しい好奇心——これが浮れ男を惹付ける彼女の重大な要素になつてゐるのださうな。通常年齢と生國を訊くに始まる初會の寢物語が、彼女に於ては「おんみは如何にしてその一脚を失へるや」から起るのである。

だが曾て私たちがネネの噂話をした時、Fは最後になつて、私にこんなことを教へた。

「好奇心でネネに寄つてくる奴なんて、まだ巴里の趣味が洗錬されないのさ。リュー・ド・ピギャルの七十三へ行つて見ろ。片輪娘だけ集めた家が在らあ。片手片足はおろか、眼つかちだつて三つ口だつて、みんな揃つてどんな複雑な好奇心でも滿足させるのさ。」

私もこれには度膽を抜かれて一の句が繼げなかつたのである。

それから拉典區のマダム・ヤマ。——このご當人にはついぞお目に掛らないが、彼女の有名な「指あそび」の噂だけは

洩れ聞いてゐる。

話によるとなんでも彼女は一度ヤマダとかヤマダチとか言ふ日本人と結婚をし、子供まで生んだにも關らず、棄てられてしまつたのださうである。で、爾後日本人に深い怨恨を抱いて、機さへあれば誰でも構はず復讐をやる。その復讐の方法がすこぶる奇拔、且つ辛辣で、それが所謂「狩あそび」となつて表現されるのである。

それはどんな方法かと云ふと、まづ彼女は日本人を見るとその持前の滴るごとき愛嬌と片言の日本語とで巧みに蠱惑してホテルへ連れ込んでくる。さうして、「××」××××××××××××××、彼女は、

「では狩あそびをしませうよ、それは〳〵面白い遊びよ。」

と、もちかける。

その狩あそびでは、彼女が兎とか鹿とかいふ優しい動物になつて、相手の男が獵師となるのである。彼女は室中を逃げ廻る。男はそれを捉へるべく追廻す。××××××××××××××、××××××××××××××××××××××。

いかにも面白さうな遊びなので、たいていの日本人はこの申出を承知する。さうしていよ〳〵狩あそびが始るのであるが、彼女は多年の熟練で、實に瓢簞鯰のごとくぬらりくらりと男の手の下を潜りぬけ、廣からぬ室内を胡蝶のやうに翩翻と飛びまはつて、容易に捕へられやうとしない。×××××××××××××××××××××××××××、×××××××××。

かうなつては最初面白半分で掛つた男も、いきほひ眞劍にならざるを得ない。×××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××××××××××××。×××××××××××××××××××××。

夢中になつた男は、この時隣室で自分の狂態を覗き見してゐるもう一人の日本人のあることを知らない。皮肉なマダム・ヤマは、これよりさき別に一人の日本人を拉し來つて、ひそかに興味ふかいこの光景の見物をさせて居たのである。

だからその翌日あたり、リュー・デ・ゼコールの支那料理の卓で、こんな會話が二人の極東人の間に換される。

「君、昨夜僕は面白いものを見たぜ。あるホテルで拉典區名物『狩あそび』といふのを見物したんだが、それに出て來た日本人が、さう言つちや失禮だが、頭の禿げぐあひのあたり、君にそつくりだつたぜ。」

「それは近頃迷惑な話だ。」

「『靈の狩獵』（シャス・スピリチュエル）つてのは、原稿のままヴェルレエヌに預けといて失されてしまつた惜しいランボオの詩集の題だが、昨夜の

『愛の狩獵』の面白さはたしかにそれ以上だつたよ。」
「…………。」

閑話休題。

さてF君は鹹いマリイ・ジョーンを燻しながら燈火明るい歩道をふらり〳〵行き戻りしたが、どうしたかその夜は松葉杖のネネにも出逢はなかつた。

もちろん、帽子まぶかに額髪を半島形に眉の間までつき出した口紅の朱いマドモアゼルは、何人となく早速で擦れちがひざま、

「あなたや」と艶な掛聲をしてゆく。

だがF君は心得たものだ。稻妻のごとく聲とともに掠過し去る女はよし、纏綿として三四間あとを追ひ來る稍々執拗なものに對しては、忽ち「セルヴイ！」と聲をかける。これは吾國の「違ふんだよ」と似て非なる言葉で、かゝる妖魔を西の海へさらりと拂ふに覿面な効能を持つ呪符である。F君に云はせるとこの呪符を體得するだけに無慮三歳の日月を要したといふ。

ところがその夜のF君の頭は、よほど變調を來たしてゐたものに相違ない。かれはいつもほど敏活にその呪符を應用することを誤つて、妙な機會からネネでも無い未知なマドモアゼルと或るカフェーの椅子に向ひ合ふ仕儀になつてしまつた。

かうした種類の女の美醜を鑑別するために、わざ〳〵一碗の珈琲を傾けることは、通の恥づべき行爲である。よろしく無駄口をききながら××××××××××××、――と云ふのがF君の不斷の口癖なのだが、その夜に限つてF君はその自定の憲法をもむざ〳〵破つてしまつたのだつた。さうしてその擧句がわけもなく、溫順しくノコ〳〵と女のあとへ跟いてホテルへ行つたのだから、頭の變調さ加減がおもひ知られる。

愈々ホテルへ着いてからのF君の一擧一動。――そんなことはここに述べる必要もなく、また明叙すべき筋合ひのものではない。

F君は今日本に歸つてゐるが、彼はいつも外國の土を踏まない友人たちに向つて言ふ。

「君等は女の長繻絆姿しきや見てゐないだらう。おれはシュミーズと靴下だけの女の姿も見て來てゐるんだ。それだけおれの青春の追憶は二重に悲痛なんだ。」と。

つまりその夜もF君はこの悲痛な追憶のよすがである襯衣一枚の女を傍觀しつつ　××××××××××××。

と　かれはその相手の女が奇妙なことをやり始めたので吃驚した。

××××××××女は、××××、ちやうどＦ君の足の上に俄然頭を抱へたなり突伏したものである。

「おい、どうしたんだい？　え、え、氣分でも惡くなつたのかい？」

Ｆ君は慌てて訊いた。

女は顏をあげて、Ｆ君を見ると、ニツコリして答へた。

「いいえ、さうぢやありません。わたしお祈りするんですのよ。小さい時から癖になつてゐるので、お祈りしてゞなければ寢られないんですよ。」

女はそのみぢかい眞紅の絹の襯衣から白いふつくりとした、まだ筋肉の發育し切つてゐない優しい兩肩を露はして、俯伏したなり靜かに靜かに祈禱しつづけた。口の中で何かしきりに言つてゐるらしい。頸すぢのおくれ毛が微かに微かにそよぐ。

Ｆ（エフ）君はそれを××××××見るともなく見てゐるうちに、自分の心がかうした環境に在つてはあるまじき、一種の冷嚴なものに占められるのを感じた。かれは眼前の女に昔祈禱を敎へたその父や母のことを想像し、幼（いたいけ）く家庭に在つたころの彼女の淸純な姿を想つた。彼はそれから引いて、久しく考へても見なかつた自分の故國の肉身（みうち）の上にさへ遙かに思ひを走せた。

彼は何となし壓迫を感じて手近の窓を明けた。

春の夜空は美しく晴れて、星は夜光蟲のやうに重く淀（よど）んで輝き、どこからともなくリラの花の匂ひが泛び入つてきた……

これが婦人雜誌の原稿だと、私は、Ｆ君が祈禱する女の敬虔な姿にうたれて、我破とはね起きて、それなり宿へ歸つたことにして殊勝らしくこの稿を終へる。だがこの雜誌ではほんたうのことを書いても差支へあるまい。

Ｆ君は××××××××××、××私にこの話をして聽かせたのである。

見しは今日・聞きしは昨日

田中貢太郎

芳賀博士の事ども

○

『地にひれふして天地に
いのりし誠いれられず
日出づる國の國民は
あやめもわかぬ闇路ゆく

大葬の今日の日に
流るる涙はてもなし
きさらぎの空春淺み
寒風いとど身にはしむ』

の奉悼歌、大正天皇の永久の大行幸の奉悼歌を作つた文學博士芳賀矢一翁は、大行幸を奉送することもできないで、御大葬の前一日、即ち昭和二年二月六日、六十一歳を以て永眠した。

博士は小肥滿のした、猫脊の、見るから好好爺的な風貌をしてゐたが、單なる世間的な好好爺ではなかつた。嘗て法學士山田某が債務のある高利貸を撲殺して金を奪ひ、死體を鞄に詰めて信濃川に投棄した所謂山戀事件なるものが起つて、高等教育に對する物議をかもした時には、博士は文學によらなければ人格を養ふことはできないと云つて、法科萬能の學風を斥けて文科のために氣を吐いた。又嘗て禁酒論がかまびすしかつた時には、博士は伊勢大神宮初め日本八百萬の神でお神酒を供へて祭らない神はないと云つて、冷罵一番したことがあつた。皆新聞記者の問ひに對して不用意に發した片言隻語であるが、非常に世間に衝動を與へた。博士は國文學の權威であると共に實行ノ

勇氣もあつたが、謙讓でそれを包んでゐたので、すこしも鋒鋩を露はさなかつた。嘗て大町桂月翁が博士を評して、『僕たちは雜漢まではゆくが、博士は菩薩だ』と云つたことがあるが、面白い批評だと思つた。博士は學者であり、人格者であり、酒徒であると共に、日本人らしい日本人であつた。川柳阪井久良岐翁は博士の死を痛んで、『又しても日本人が日本人でなくなり』と云ふ追悼句を咏んだ。その久良岐翁は、桂月翁の告別式の日に、『飲中の八仙一つ星に化り』と云ふのを咏んでゐるが、いづれも良くはまつてゐて面白い。

○

芳賀博士の無頓着なことは有名である。一錢持たずに車に乘つて、その車夫に金を出さして二人で飲み歩いたと云ふやうなことも聞いてゐる。宴會へ往くにも會費を持たずに往つて、『今日は金を忘れて往つたから、上田に出してもらつた』と云つて、上田萬年博士から會費を借りて來るやうなことはさらにあつた。私も何時か神田小川町の書肆へ往つて、そこの主人と話してゐると、博士が來て、『飲みに來たけれども、金を持つて來なかつた、貸してくれたまへ、』と云ふので、主人の方がかへつて恐縮して金を出してゐたことを見てゐる。天金あたりへ往く途でもあつたらう。博士は天麩羅が好きで、その比は一週間おき位に天金へ往つてゐた。

その博士が一日電車に乘つた。それはなんでも品川の方へ往つての歸りであつたらしい。電車の中へ入つて電車賃を拂はうと思つて、金入を探してみると金入がない。博士は大に困つたが、そこが無頓着な博士であるから、誰れかそのうちには知つた人が乘るだらうから、知つた人が乘つたら借りやうと思つて、近眼の眼鏡の下から乘る人を一心になつて注意してゐると、日本橋へ來たところで、やつと元の生徒であつた知人の顏を見つけた。博士は喜しいので知人の前へ來るなり、人のゐるのもかまはず、

『おい君、電車賃を貸してくれたまへ、』

と云つたので、云はれた知人の方が恐縮して、もぢもぢしながら、

『先生、ほんとですか、』

と云ふと、博士は平氣で、

『ほんととも、誰れか知つてる人が乘つたら借りやうと思つて、知つてる人の乘るのを待つてた、』

と云つたので、知人も笑ひながら金を出した。

○

大正二三年比の夏のことであつた。芳賀博士の家では家を擧げて大磯へ避暑したことがあつた。その時博士は東京に用事があると、そのつど一人で出かけて往つたが、その博士の歸る時間になると、子息達は、

『お父さんが乾と前を通るから見てゐやう、』

と云つて、二階の窓に集まつて前を通過する列車に注意する。すると果して列車の二等室に洋服のポケツトに入れてゐたウヰスキーに陶然となつてゐる博士の姿が見える。

『ゐる、ゐる、』

『やつぱりゐらつしやるわ、』

子息だちは腹を抱へて笑ひあふ。時とすると博士は書物を一心になつて見てゐることもある。それは博士が列車を乗り過して大磯停車場から西へ向つて行くところであつた。

『今日は何處まで往つて氣が注くかなあ、』

などと云つて子息だちが待つてゐると、近い時には國府津、時とすると沼津、靜岡まで往つて引返して來ることがあつたが、その時又大磯を東に往きすぎることもあつた。

○

明治四十四年比のことであつたやうに思はれるが、晋羽三丁目に住んでゐた芳賀博士は、何時も江戸川の終點まで電車で歸つて來て、其所から車に乗つて歸るので、そのあたりの車夫は皆知つてゐて、博士の姿を見かけると、

『博士だ、』

と云つて、呼ばなくても氣を利かして車を持つて往つたものだ。ところで某夜、したたかきこし召した博士が遲くなつて例の如く電車で歸つて來たところで、おなじみの車がゐないので、ふらふらと歩いてゐるうちに小便がしたくなつた。そこで便所はないかと思つて注意しいしい歩いたが、ひどい近眼であるからはつきりと見えない。さうしてゐるうちにやつと便所が見つかつたので、博士は喜んで悠然と用を達して立ち去らうとすると、

『こら、』

と云つて怒鳴りつけながら、博士の片腕を鷲摑みにした者がある。博士は驚いて、

『ど、どうしたのです、』

と云ふと、

『此所をなんちう心得へてをる、あアン、』

と云つて相手はそりかへつた。其所は交番で相手は巡査であつた。新米のその巡査はさんざん博士の油をとつた後に科料にした。桂月翁に云はせると、如何に醉ひたればとて、所謂上

戶本性あり、決して交番と便所とを間違ふるものに非ず。よしや、交番と便所とを間違ふるとも、巡査が眼を開いて居りさへすれば、交番の中へ小便をさせるべき筈のものに非ず。交番に小便せらるるは、必ずや巡査が眠り居りし也』で、博士が交番に小便したのは、『夜遲く歸る每に、交番の巡査の眠り居るを見ては、豈に市民のために公憤を發せざるを得んや。その公憤、發して小便となれり』であるさうであるが、それは桂月翁一流の見方であらう。しかし、面白いことには、博士の事件があつてから間もなく、萬朝報が夜遲く社員を出して、都下の交番の巡査の勤怠を調べさしてみると、その大半は眠つてゐたので問題になつた。

○

芳賀博士は世間から爪はじきせられてゐる門下後輩でも良く面倒を見てやつた。この人たちのことを彼れ此れ云ふ者があると、『あれでも研究してゐるから感心だ。』と云つて決して惡口を云はなかつた。溫藉なさうした人格の人であるから、無論人とも爭はなければ、家にゐても小言一つ云つたことがなかつた。無論家のことは夫人に任かせきりであつたので、夫人は四男五女と云ふたくさんの子女を養育する旁、この神のやうな又大きな嬰兒のやうな博士の世話をしなくてはならなかつた。博士は酒を好むと共に淡巴菰も好んで、眠るまで葉卷を口にしてゐるので、そんなことにまでも氣をつかつて、時を見はからつてそれも口から離さなくてはならなかつた。私も音羽の博士邸を訪うた時、博士が一寸位になつた葉卷へ黑もじをさして、それを口にしてゐるのを見てなるほど博士は淡巴菰が好きだなと思つたことがあつた。

博士夫人名は鋼子。大正十三年八月一日、五十歲を以て歿くなつたが、夫人に先だたれた博士は、その年から年年遺言狀を書くやうになつた。夫人によつてきりもりされてゐた家と云ふことが、はじめて眼の前に見えて來たためであらう。それほど博士は夫人を信賴してゐたので、夫人に逝かれたことはたへがたいことであつたらう。博士はその苦しみをまぎらすために、その當座非常に酒を飲んでゐた。

その時博士だちは輕井澤にゐたが、九月の末になつて輕井澤を引揚げて來る日も、博士は例によつてぐでぐでに醉つて體が利かないので、令息だちで汽車の中へ擔ぎ込んだ。そして汽車が出て横川まで來たところで、博士の姿が見えない。もしかするとトンネルの中へでも落ちたではあるまいか、驛長に賴んで探してもらはふと云ふことになつて大騒ぎをしてゐると、その

列車に三木本眞珠店の若主人が乘りあはしてゐて、
『博士は熊ノ平でおおりになつたやうでしたよ、』
と云つてくれたので、やや安心はしたものの、體が利かなくて擔ぎ込んだほどであるから、又何處へひつくりかへつてゐるかも解らない。
『それ、』
と云つて、皆で横川から熊ノ平へ引返してみると、博士は熊ノ平から輕井澤へ引返してゐることが解つたので、又輕井澤へ引返してみると、博士は輕井澤に待つてゐて、
『どうも小供だちを輕井澤へ置いて來たやうな氣がするので、引返して伴れに來た、』
と云つた。

○

明治四十年比私が芳賀博士を知つた比には、博士は音羽の三丁目に住んでゐた。博士は明治三十八年から大正六年十二月まで音羽に住み、それから竹早町に移つて大正十三年十二月まで住み、其處から現在の大塚坂下町の邸に移つたのであつた。その博士が竹早町に住んでゐる比のことであつた。ある雨の日の夕方、傳通院前の電車停留場の傍にある小さな寺の門の下に、ぐうぐうと眠つてゐる洋服の男があつた。暢氣なのかだらしないのか今の時代に珍らしい人もあるものだと思つて、電車を待つてゐた一人の男が傍へ往つてみると、どうも見たやうな顏であるから、なほ精しく見てみると、芳賀博士である。驚いて車を呼んで來て、起して車に乘せ、博士邸へ送りとどけさしたのであつたが、それは博士が電車の乘換をして、待つてゐるうちに睡くなつたので、其所へ往つて眠つたと云ふことが解つた。その博士は歿くなるすこし前にも、萩野由之博士のお通夜に往つて、そのまま萩野博士の棺前へ寢込んでしまつたので、その場に居あはせた人だちが、
『萩野君が定めて喜んでゐるだらう、』
と云ひあつた。私も博士が宴會の席上で醉ひつぶれて寢込んだことを二度ばかり見てゐる。

○

昨年の三月初めのことであつた。上州中之條の農學校に奉職してゐる知人と、中之條の隣接村の村長とが伴れ立つて出て來て、同村の和利之宮と云ふ村社を昇格するために上京したから、芳賀博士に紹介してくれと云ふので、二人を同道して坂下町の博士邸を訪ふと、博士は宮中へ伺候したと云つて留守で

つた。そこで博士の歸還時間を聞いて、午後になつて再び出直して往つてみると、私達の前を往つた自動車が博士邸の前へ往つて停つた。博士が歸つて來たところではないかと思つて、急いで往つてみると、果して博士で、片手に白い包みをぶらさげ、片手に洋杖を持つて自動車からおり立つた。

『先生、田中でございます、お願ひしたいことがあつて、今朝一度お伺ひしました、』

と云ふと、博士はしよぼしよぼした眼で私を見て、

『田中さんか、お入り、』

と云つて、玄關の左側の應接室へ案内してくれた。そして腰をかけたところで、博士は手にしてゐた白い包の中から、小さな玩具のやうな銀の箱を出して、

『今日は宮中へ呼ばれて、御馳走になりましたが、私は眼が見えないものですから、この箱を料理だと思つて、ナイフで切りかけたが、切れないのでまごまごしてゐると、傍の人が注意してくれました、』

と笑ひながら、この箱を開けると中には五色になつた金平糖が入つてゐた。博士はその金平糖を私だちの掌にそれぞれ入れてくれて、自分でもつまんで口にしたが、後で聞くと澄宮樣の御命名式に連つてゐたらしかつた。私だちは宮中の下賜品であるから持つて歸ることにして紙に包んだが、村長は博士のら滴れて卓の上に落ちてゐたものまで拾つた。

そして、私が村長に代つて神社のことを話して、これに關係ある神社局長などに紹介を頼んだところで、

『私は眼が惡いから、田中さん、あなたが代りに書いてください、』

と云ふので、私は博士の言葉に從つて、博士の名刺に紹介の文句を記入した。實際博士の眼は失明に近いほどであつた。それはもう七八年以來のものではあるが。途中で人に逢つて挨拶せられても解らないので、桂月會の席上で『私は眼が見えませんから、挨拶をせられても解りません、どうか私を見かけても挨拶をしないやうにしてください、』と云つたことがあつた。昨年の十月十日になつて、桂月翁の三令息が上野の精養軒で結婚披露をした時に、記念の書帖を出すと、博士はやつと姓名だけ書いた。私が博士に最後に接したのはその十日の席上であつた。そして、本年一月二十日、飯田町三丁目の敎文社と云ふ書肆の主人を同伴して訪問した時には、腎臟が惡くて逢はれないと云ふことであつたから、萩原賢次郎君を介して書肆の主人のために著書の序文のことを依頼して歸つて來た。

○

芳賀博士に直接聞いたことはないが、博士の近眼、博士の眼の悪いのは糖尿病のためだから、日本酒は飲まないと云ふことであつた。さう云へば私が知つてゐる博士は、何時もウヰスキーを飲んでゐた。私だちも宴會の幹事をするやうなことがあると、

『芳賀先生には別にと、』

と云つて別にウヰスキーを出したものであつた。博士は壯健なやうで時どき病氣をした。昨年の春から夏にかけても可成の大患をやつた。眼の手術をしたこともあつた。その博士は大正八年比にも非常に健康を害してゐた。今、竹早町の元の博士邸を讓り受けてゐる川俣馨一君は、俳人大須賀乙字君と二人で、その時竹早町の博士の許へ見舞に往つたが、乙字君は人生は如露如電、何時どうなるかも解らないから、筆蹟を願つて置かうと云つて、途中で畫箋紙を買つて持つて往つた。博士は平生揮毫はしなかつたが、その時は、

『それぢや、僕も書くから、君も何か書いて置きたまへ、』

と云つて承知したので、乙字君は得意の俳句を書いた。

笊の底山吹の落花叩けども

すると博士も揮毫してくれた。その時川俣君のもらつた二枚の揮毫の中の一つには、

世の中に一つしかなき山をいにしへは日の本の山と思ひけるかな

他の一つには、

くにつ文くにつことばをきはめてぞ誠の道はしるべかりける

の和歌が書いてある。乙字君の方は何と揮毫してあつたかも解らない。ただその博士の健康を心配して、博士の毫揮を片見にしようとした乙字君が、博士に先だつてその年歿くなつたのは悲しいことであつた。私は晩年乙字君と親しくして、俳席にも呼ばれ、館林に躑躅も見、飯能の天覽山では靑嵐の句を作りあつた。

やはり乙字君が歿くなつた年の秋、川俣君は木村鷹太郎桂月翁の三人で瀧野川の紅葉へ往き、その歸りに桂月翁と二人で、又博士の見舞に往つたが、博士邸を出てキリシタン坂をおッかけたところで、桂月翁が、

『どうも芳賀博士は長いことはないよ、もうこれ位しか持たない、』

と云つて、右の指を三本見せた。川俣君は、

『三年かね、』

と云ふと、桂月翁は、

『三月だよ、』

と云つた。その桂月翁も大正十四年六月十日、博士に先だつて永眠して、博士に弔はれた。

野田大塊翁の事ども

○

政友會副總裁野田卯太郎の大塊翁は、昭和二年二月二十三日午前四時四十八分七十六歳の生涯を終つた。私が大塊翁を初めて見たのは大正八年七月十六日、板垣伯が歿くなつた日であつた。その日芝愛宕町の板垣邸では、葬儀副委員長となつた大塊翁が、枠の大きな眼鏡をかけた眼を落して、芋のやうな葉卷をくはへ、象のやうな巨大な體を彼方此方に見せてゐたが、その時板垣邸に元の自由黨の壯士で板垣家に寄食しながら小遣取に灸點などをしてゐた上田繁馬と云ふ老人がゐたところで、その上田君の容貌から體格から殆んど大塊翁にそつくりであるうへに、後頭部へ禿げさがつた禿の具合まで好く似てゐたので皆が注目した。ただ違つてゐるのは光澤の相違で、上田君のは薄黃ろになつてゐるのに對して、大塊翁のは銅色を帶びて鮮に光つてゐた。玄關で見舞客の名を記入してゐた男が、それを見て土佐訛で、

『上田は居候ぢやきに、食物がわるいぞ、』

と云つたので、大笑になつたのを今に記憶してゐる。

○

犬養木堂であつたか、綿入りと云つて揶揄したことがあつたが、大塊翁の俳句は蘭の畫と共に大塊翁でなければできない境地があつた。そして、その蘭の畫は朝鮮時代に山縣伊三郎君に手ほどきしてもらつたもので、俳句は角田竹冷宗匠に仕込まれたものである。『筑前の香椎の宮の椎拾ひ』これが竹冷宗匠に寺入の時の句だと云ふので、『大塊や元は香椎の椎拾ひ』と、つまらないことを云ふ者があるが、私は大塊翁の飄逸な俳句が好きだ。俳句にならなければ狂句になる。狂句にならなければ何かになる。そこに芭蕉の句境もあれば、一茶の句境もある。

政友會福岡縣支部の長老で大塊翁と親しかつた森田正路君の話では、大塊翁が竹冷宗匠に寺入した時の句には、未だ、『先生が生徒を伴れて椎拾ひ』の相句があつたと云ふことである。大塊翁の俳句として世間に知られてゐるのは、『尙蕪るはばかりながら日本種』、原の町無線電信の落成式に遞信大臣として臨席し

た時の『一瞬四千哩然も無線かな』、岐阜縣の鐵道開通式の時の『飛彈の山汽笛一聲汽車通ず』、普選通過の時の『三味太鼓峠の茶屋の花見かな』などである。東拓副總裁時代に滿蒙視察に從つた時作つた『夏空や興安までは一區域』の句は、北京政府の神經に衝動を與へ、日本は興安まで一區域にする野心があると云つて外交問題を惹起した。上下四千载の俳句國、俳句によつて外交問題まで惹起したのは我が大塊翁唯一人あるのみだ。

○

福岡市の福岡日日新聞の社員の間に三笑會と云ふ俳句の會があつたところで、大塊翁は自分から進んで名譽會長になり、森田正路君を無理に常任幹事と云ふことにして、歸縣のたびに榮屋旅館と云ふので三笑會を開かせた。その榮屋は大塊翁の常宿で、泊るたびに一枚の浦團では足が出るので二枚にして寢ると云ふ所である。そこでは宿の小供と湯に入つたり、子守がゐれば『ヨンちやん、お前五體をこすつてやりやい』などと云つた。大臣になつて歸縣した時、榮屋の女將も『野田さん、』では惡いと思つたので、『閣下、』と云つたところが、返事をしなかつたと云ふやうな逸話もある。大塊翁が歸縣したことが解ると政友が續々と詰めかけて來るが、俳句の時には何人が來ても面會を謝絕した。そして句作の後では得意の蘭を描いて會員に句贊をさしたり、會員の描いた畫に句贊をしたりした。又自分が名譽會長就任以來無缺席の會員には、西園寺公の短冊を貰つて賞與にしたこともあつた。そんな關係であるから時に隨つて三笑會の會員には繪端書を送つて來た。本年の正月には、『鬼門避けて羽子に恵方の遊び哉』と云ふのを送つて來たが、それが紀念となつたのは悲しいことだと福岡日日新聞の追懷錄の中に云つてある。最後の句は二月四日の節分の宵に作つた『節分やけふこの頃の福は內』と云ふのであるが、これは辭世の句にしても可いだらう。

○

政友會福岡縣支部が福岡市の橋口町にあつた時分のこと、その支部の前にゐた洋服屋が大塊翁に洋服を作らさうとしたが、きつかけがないので畫絹を持參して大塊翁に逢ひ、

『先生、家の寶にします、どうか俳句を、』

と云つたので、未だ人から揮毫を賴まれないうちのことであつたから、すつかり好い氣持ちになつて、俳句を揮毫してやると、洋服屋先生有難うの十回も繰り返して返つて往つたが、間

もなく禮に來て、
『この間は有難うございました、おかげさまで家の寶ができました、』
などと云つた後から、そろそろ奥の手を出して、
『先生も一つ洋服を、』
と云つた。自分の俳句を家の寶にしようとしてゐる洋服屋に對しては、惡い氣もしないし、厭と云ふのも氣の毒であるから、たうとう一張作つてしまつたが、それを森田正路君の口から聞いた西園公、ある日、訪問して來た大塊翁に、
『野田君も、この比、俳句をやるさうだな、』
と何くはぬ顏をして云ふと、大塊翁は得意になつて、
『先達て國の洋服屋が家の寶にすると云ふものですから、』
と洋服屋の絹地に俳句を書いてやつたことを話すと、
『だから洋服を作つたらう、洋服屋の智惠には、さすがの君も及ばないね、』
と云つたので、大塊翁も初めて氣が注いて苦笑一番。

○

大塊翁は福岡縣山門郡山川村野町武宮與七方で呱々の聲を揚げた。父親は佐平、母親はイシ。岩戸川と云つて九州相撲の頭取をしてゐた前記武宮與七の夫婦養子になつてゐたと云ふから、佐平君も大塊翁のやうな巨大な體を持つてゐて相撲取として養子になつてゐたのではあるまいか。その佐平君は大塊翁が四つか五つの時に歿くなつたので、母親に抱かれて三池郡岩田村の母親の實家へ歸り、祖父の森右衛門君と云ふのに養育せられることになつたが、そこは母親の兄の萬藏、即ち伯父が豆腐屋をしてゐた。大塊翁は『おいどんは、豆腐屋をやつたことは、なかたい、』と云つてゐたが、そんな中であるから豆腐屋はしないにしても豆の袋位は擔いだものだらう。寺小屋時代は菓子屋の障子に石を投げつけたこともある。油を買ひにやれば惡戯をして溺し、それをごまかすために水を入れたので、ぱちぱち云つて火が點かないために惡事露見。飴賣と喧嘩して飴箱を飯江川に投げ込んだこともあつたが、何處かに間の延びた所があり、落した褌を首に卷いて歩くと云ふ有樣であつたから、人から馬鹿卯太と云はれてゐたが、漢學塾で漢文を讀み、國民の友を讀むやうになつてから世の相が解つて來た。隣家の蠟の原料になるはじの實を採るのを生業にしてゐる老人が、はじ採りに伴れて往つたところで、何時の間にかすべての呼吸を飲み込んでしまつて、自分でそつと採りに往つて長崎在住の外人に賣つて儲け、西南の戰爭が起ると、米を買ひ占めて官軍に賣りつけて儲

けた。ある時、その米代を荷車につけて歸つてゐて途中で落してしまひ、ワハツハツで濟まして愚痴も云はなかつた。自由民權論が起ると、政治に目を注け、小區會議員になつたのを手初めに、縣會議員になり、三池銀行を興し、三池紡績會社の社長になり、明治三十一年初めて代議士となつたが、巨大な體に充滿してゐた智惠の閃きによつて、井上馨に知られ、勝海舟に知られ、山縣有朋に知られ、桂太郎に知られ、西園寺公望に知られた。もつとも井上馨には政治家になると云つて、『議員になるよりも角力になれ、』と云つて叱られたことはあるが。やがてその智惠は、桂對西園寺の情意投合や肝膽相照の重要な位置に立つことになつた。東洋拓殖會社が創立になると副總裁になり、政友會の幹部に入つて遞信大臣となり、加藤內閣では商工大臣となり、それから政友會副總裁となつた。世人は大塊翁の好和的な政治的手腕を見て一代の妥協政治家のやうに云ふが、それは正直にして率直な個人としての彼を知らない人の云ふことだ。彼は國家的に物の結末を見てゐた國士的政治家であつた。第三次桂內閣が組織せられて、憲政擁護運動が熾烈を極めた時、桂から大塊翁に政友會の緩和運動を賴みに往つた時の大塊翁の返事を聞くが可い。『かうなつちやあ、あんだか辭職するより道はごわせんな』

濱口空谷翁の事ども

現下の政界の中心人物濱口雄幸の空谷翁の出生地は、高知縣長岡郡五臺山村空谷（かうこく）であるから、私の鄕里とは背中合せである。背中合せといふよりは、元私の鄕里三里村の內の池と云ふ部落に屬してゐたが、自治制が布かれた時から五臺山村に屬したものである。二三軒しか民家のない、人と狸とが一緒に住んでゐるやうなその空谷の西に當つて、大石谷と云ふ所があつて、これも自治制の布かれた時から五臺山村に屬してゐるが、そこは大石正巳君の出生地である。

濱口氏の本姓は水口、父は胤平。空谷翁には、義清、義正の二人の兄があつたが、中兄義正君は池部落の青木家を繼いで、女學校長から縣の教育會長までやつた人であつた。空谷翁は水口家の末つ子として、今も昔も同じやうな、笑ひもしなければ憤りもしない無口のむつつりで、小學校から歸つて來ると、女郎蜘を捕つて來て喧嘩をさして遊んだ。黄と黑の縞のある二匹の蜘は人間にけしかけられて糸を吐きながら噛みあふのであつた。祭禮に往つて土産に買つて來た菓子をやつておくと、他の小供にだまされて取られて來た。

『阿房ぢやないか、』

と家の人は考へこんだことがあつたが、しかし學校の成績は優等であつた。

○

中學校に往くやうになつてから高知市に家を持つてゐる中兄の許に寄宿してゐた。この中學生のむつつり屋は、新らしいものを身に著けるのが嫌で、汚い服を著、破れ靴を穿き、帽子もぼろぼろになつたのを冠つてゐた。學校の悪戯者は、この憤りもしなければ、議論もしない、又笑ひもしない、金佛のやうな變物を憤らすつもりで、皆と一緒に廊下に置いてある彼の辨當を開けて飯を棄て、かはりに小石を詰めながら晝飯になるのを待つてゐた。そして、晝飯の時間になつてむつつり屋がその辨當を開けたところで、小石が入つてゐるので、一眼見ただけで元のとほり包んだままで平然としてゐた。むつつり屋は中學校でも優等を續けて二年から四年に飛んだ。夜は二時から三時頃まで勉强した。中兄は心配して早く寢るやうに注意した。

『もうやめえ、死ぬるぞ、』

その中兄の家に同じやうに寄宿して女學校へ通つてゐる女生徒があつた。それが濱口現夫人であるが、その時はむつつり屋の眼中にはなかつた。

○

むつつり屋は間もなくこの夫人の家へ贅せられることになつて、中學校を卒業すると共に安藝郡の人となつた。空谷翁が三木武吉に云つたと云ふことを人傳に聞くと、空谷翁は初めは宗教家にならうと思つてゐたが、家庭や周圍の事情で役人になり、更に政治に足を踏み入れて今日に至つたと云ふことになつてゐるが、近親者の言によると政治家は彼の素志であつたらしい。

空谷翁が京都の高等學校へ入學した年、夏中休假に歸つたところで、親類の某が來て、

『君は政治科をやると云ふが、政治家になるには、辯論が達者でなくてはいかん、君は寧ろ文科へ入つて、哲學をやつて學者になるが可いだらう、』

と云ふと、今まで一回も憤つたことのなかつた空谷翁は勃然と怒つて、

『これはけしからん、僕は實際政治家になる決心をしてゐる、そんなことを云はれては養家に對しても困る、』

と言つて初めて龍鱗を見せたが、大學になつてからは小野塚喜平次博士と一二を爭ふた。ある時小野塚と二人で校庭を散歩した時、小野塚は自分から政治學者になるつもりだと云ひ、

君は將來何になるつもりか、』
と問ふと、
『僕は大藏省へ入つて經濟を研究して、實際政治家になるつもりだ、』
と云つたと云ふやうなことも傳へられてゐる。

○

力と重みで大演說とせられてゐる空谷翁の演說は、大正六年以後のものである。大正六年は政友會の支持によつて組織せられた寺內內閣の總選擧のあつた年で、空谷翁は高知市から立候補して政見を發表したが、自由民權の發祥地として雄辯家の續出してゐる土佐の、而も中央の政見發表演說としては甚だ拙かつた。その時空谷翁と選擧を爭つたのは、中野寅次郎翁であつたが、中野翁は有名な雄辯家であるからますます見おとりがする。そこで憲政會支部では、有志な座談をさすが可いと云ふことになつて、有志を集めて座談さしたところで是れも拙い。辯說を重んずる土佐で、かうして演說が拙いうへに、政府の壓迫があり、主義として戶別訪問もしなかつたので、前大藏次官憲政會幹部の聲望を以てしても、中野翁のために一蹴せられて落選し、天下をして呆然たらしめたが、その苦い經驗から彼の大辯說が生れたのであつた。

○

中野翁が空谷翁に勝つたのは、良く云へば弱者に同情し、惡く云へば强者に反抗する土佐人の性癖にもよるが、中野翁は古い自由黨の有志で、多年國事に盡瘁した經歷があるうへに、何人にも惡まれない圓滿な人格の所有者であつたからでもあつた。かけ値のない所を云へば、これは空谷翁に官吏の經歷があらうが、憲政會の幹部であらうが、その時一水力電氣の重役であつた中野翁に勝を讓るが當然であつた。かうして空谷翁が情義道德の前に破れたやうに、土佐では他にも一人の社會的名聲のある人物が選擧に破れてゐる。それは仙石貢君である。仙石君の相手は光森德治翁であつた。光森翁は古い田舍辯護士であつた。しかし古い田舍辯護士と云つたところで、その人格に於て、人物に於てどつちが豪いと云ふことは解らない。仙石君は骨力の强い大學出の男で、政商と因緣のある、また豪商の主管と云ふ所であるが、光森翁は世外の人であつて、毎日鮎を釣りに往つては、携へて往つた小鍋でその場で煮て飯を喫ひ、餘分の魚は水の中に放つと云ふ風がはりな男である。しかし、仙石君と靈犀相通ずる所がないでもない。嘗て幡多郡の女を妾にし

て家を持たしてあつたところで、番地を忘れると共に、女の名も忘れたので、

『幡多から來てゐる女はをらんかノウシ』

と云つて街を呼び歩いたことがあつた。又そこの妾の侍女を某士に許したところで、某士大に喜び、一夜深更侍女がり往きての翌日、光森翁に逢つた。光森翁が聞いた。

『肥つてをつても顔はきれいだらう、』

曰く、

『やつしやらしちよつたよ、』

『それ、は、』

光森翁は顔の色を變へて默つてしまつたが、その日かぎり妾を追つた。

○

空谷翁は明治三年生れの五十九、夫人は四つの妹。夫婦の間に二男四女を持つて、悠然として山が崩れて來ても動かないやうな家庭を作つてゐる。それは第二女が女子大學の女學部にゐた時、國語讀本の中にある義太夫と云ふことが解らなかつたと云ふに徴しても、その家庭の容が想像せられる。無論一家の人だちは物見遊山と云ふことを知らないのである。

今は時めく內務大臣家、自動車もこの比は玄關口へ入るやうになつたらしいが、憲政會の悲境の時代は、よく護國寺前をてくつてゐるのに往き逢ひ、桂月翁と一緒で桂月翁が挨拶する時には、私も一緒になつて挨拶をしたものだ。人間は憂患に生れて安樂に死す。この比の空谷翁は、寺內內閣の組閣に際して、大藏大臣の口がかゝると、『御親切は有難いが、濱口雄幸は男でございます、』と云つてはねつけた當年の意氣の依然たるものがあるだらうか。人の氣持ちは日びに新になつて往く。朱に交はれば赤くなると云ふ俚諺もある。いかがはしい政商などを近づけて、その德を傷づけるやうなことはないだらうか。

大雪の苦難を逃れて

相馬御風

○

私達はこんなに雪の爲に苦しめられたことは嘗てなかつた。雪國に棲んでゐる以上、雪に對する或程度までの用意と覺悟とのあるのは、もとよりのことであるが、それにしても此の冬はあまりにひどかつた。

此の冬になつて初めて雪らしい雪の降つたのは、舊臘二十四日の夜からであつた。その晩私達四五人の歌仲間が或寺の一室に集つて、小さな爐を圍みながら歌を詠んだり歌の話をしたりして夜を更かした。風のない靜かな晩であつたが、その靜けさはいつもとは違つてゐる。外は夕方から一寸先も見えぬほどにこまかな雪が降り頻つてゐるのであつた。

「今夜こそはうんと積るのだらうよ」

そんなことを時々口にしながらも、私達はその場のしめやかさに心を惹かれて、誰一人先に立たうとするものがなかつた。昨今殊に御重態と報じられた先帝の御上についてお案じ申上げるうれはしげな言葉も、時々私達の間に取交はされた。かうして靜かな雪の夜は音もなく過ぎて行つた。

時計を見て驚いて私達の座を立つたのは、夜なか過ぎ一時に間もない頃であつた。外へ出て見ると案じた通り雪はもう膝を沒するほど積つてゐた。しかし、私達は誰もその用意をして來てゐなかつたので、宿の主が藁沓を履いて先に立つて、私達の爲に道を踏んでくれることになつた。

先帝崩御の悲しい知らせに私達が驚かされたのは、その朝であつた。雪はなほ降り止まなかつた。黒布を垂れた國旗は、深い雪の中に立てられた。

音もなく白雪ぞ降るあめつちを深くとざせるうれひの
中に

私はその日からした一首を私の歌日記に書き加へた。

しかし、その雪は僅二日間降りつゞいたゞけで止んで、あとからこの地方としては底氣味のわるいほどの暖かさと、晴天とがつゞいた。そして地上に積つてゐた雪もいつしか消えて、天地は今にも春がめぐつて來さうに思はれるほどのうらゝかさを呈した。海も毎日のやうに凪いで、波の上遠く雪に被はれた能登の山々もはつきり見える日さへ少くなかつた。

「こんな晴々しい天氣のつゞく正月つてあるもんだらうか」

「諒闇中でなかつたら、どんなに賑やかなことだつたらう。」

人々はそんな風に話し合つて、あまりに天候のよすぎるのを不思議がつた。こんな工合で私達は一月の半ば過ぎまで乾いた大地を踏み歩いてゐた。

「今年は奇態なことに茶の花が皆下へ向いて咲いてゐる。かういふ年は大雪が來ると昔からの言ひ傳へだが、困つたものだ。」

冬の初め頃より〳〵こんなことを話し合つて來るべき冬の不安を嘆じてゐた人達までが、いつの間にかそんな事を忘れて、その代りに、

「かう雪が降らんでは、今年の稲作が案じられる、少しは降つてくれてもよさゝうなもんだ」などと呟くものすらあるやうになつた。そんな理由から、どこかに雨乞ひと同じやうに雪乞ひの願掛けをした村さへあるといふ噂さへ耳にした。

「雪乞ひの願掛けとは妙だ。これまでにそんなことを聞いたことがない。神樣もさうやたらに手前勝手の願をかけられては、さぞ困らつしやることだらう。」

そんな風に私達の間には、それを笑ひ話の種にさへしてゐた。かうした油斷のさなかへやつて來たのが、此の冬の大雪であつた。

○

一月十八日から降り出した雪は、二月に入つても止まなかつた。一尺、二尺、三尺と地上の雪の深さは日を追ふて増した。ラッセルの鳴らすやるせなげな汽笛の音が頻繁にきこえながらも、汽車の時刻などはてんで當にならなくなつた。線路の除雪人夫がラッセルに跳ね飛ばされて死んだり負傷したりしたとか、列車が龍巻に捲かれて顚覆したとかいふ物凄い話もつぎつぎに傳へられた。二月に入つてから間もない日の新聞に、K—といふ村の役場が雪の爲に倒潰し、村長が下敷となつて慘死をとげたといふ記事なども見えた。しかもそれは其の村長からの

手紙が私の許に屆いた翌々日のことであつた。かうして雪の脅威は日に日に物凄く私達の上に迫つて來た。

大正天皇の大喪儀を東京で行はせられるといふ日、このあたりの邊土でさへも、町といふ町、村といふ村で、それ相應の遙拜の式典を擧げようといふ、其日になつて、降雪は殆ど絕頂の度に達した。六日の夜から七日へかけて新たに積つた雪だけでも、優に四尺はあつた。あそこでも家が潰れかけた、こゝでも軒が落ちかけたといふ知らせの爲に多くの人々は騷ぎ廻つた。鐵道は無論不通の狀態にあつた。家々の門の雪の上に立てられた弔旗は渦卷く吹雪の中に飜つてゐた。小學校で行はれる遙拜式にと參列する人々は、いづれも深い雪の中を泳ぐやうにして行つた。

しなさかる越のひなにしわが住めや白雪かつぎみゆきををろがむ

ふりしきる雪の中にしひむがしのみやこのかたををろがむあはれ

寺々で撞く弔鐘の音が吹雪のうづまいてゐる闇空に異樣なものさびしさを漂はせた。道行く人々はいづれも雪達磨のやうに全身眞白に雪を被いでゐた。「オー」「オー」といふ叫び聲が、おのづと人々の口から洩れた。

式が濟んで歸らうとした頃には、雪はもう家々の軒近くまで積つてゐた。奉仕に出てゐる消防夫の一隊によつて、一筋の細い道が開かれてはゐたが、それさへ踏むたびに股まで埋つて容易に進めなかつた。辛うじて自分の家まで來て見ると、戶口が殆んどふさがれるほどに雪が積つてゐた。

「こんなに降つてはしまひにはどうなるのだらうか」といふ不安が先づ胸を騷がせた。その夜は殆んど眠らずに明かした。

○

八日、九日と雪はます／＼烈しく降り頻つた。家々では女や小供までも吹雪の中を屋根に上つて雪を掘り落した。しかし落すあとから／＼雪が積つた。道路も庭も空地も降り積つた雪の上へ更に屋根から卸した雪が積まれた爲に、屋根よりも高くなり、戶口といふ戶口は悉くふさがれて、家の中は晝夜を別たぬ闇となつた。しかも雪はなほ止まない。ミシリ／＼といふ物凄い音を立てゝ居る家の中に、人々は今にも潰されさうに思はれる恐怖と不安とに慄えた。細い小路に面した家々はすつかり出入口をふさがれてしまひ、辛うじて高窓や二階の窓から穴を堀つて出入した。

鐵道はつひに九日から絕對に不通狀態に陷つてしまひ、郵便

や新聞はいふに及ばず、電話も電信もつぎ〳〵に不通となつた。先年大雪崩の爲に百餘の人命を犠牲にした親不知では又々以前よりも大きな雪崩があつて、いつになつたら鐵道が開通し得るかわからぬことになつたと報じられ、先づ以てその方面の交通が全く斷たれてしまつた。引續いてそれとは反對の方面で、筒石といふ村に大雪崩があつて、二十餘の人家が潰された上に、これも鐵道開通の見込みが立たないことになつた。かうして越後の最西部に位する私達の一部は全く他地方との交通を斷たれ、孤立無援の狀態に置かれることになつたのである。

しかも、降雪はなほやまなかつた。十日、十一、十二、十三日と日が進むにつれて、私達の不安はます〳〵暗黒になつて行つた。

見舞に來てくれた人々の口から、又見舞に行つて還つた人々の口から、頻々として悽慘な噂を聞かされた。或村では雪崩と地辷りの爲に人家が二十戸餘も埋沒した。或村では雪崩につぶされて十何人慘死をとげた。或村では雪中火を失してムシ燒同樣に家も人も燒かれた。日く何、日く何と一種の流言蜚語とさへも思はれるほどの怖ろしい話が、つぎ〳〵に際限もなげに傳へられた。しかし、私達にとりての何よりも大きな脅威は、食料の欠乏に關する報告であつた。無論大都會の生活とは違ひ、冬期間に備へる爲に各自多少の蓄へはしてゐたもの丶、それでも大きな不安があつた。お互に蓄へてあるものを出し合つたにしても、此の先一週間なり十日なりこのまゝの孤立狀態が續くとしたら、つまりは玄米の粥でも啜つて辛うじて命をつなぐやうにならざるを得ないことは明らかであつた。さて、その後は……かう考へると居てもたつてもたまらぬ不安に脅やかされずに居られなかつた。

晝は私のやうなものでも、持ち慣れないシャブルを持つて出入口をあけたり、屋根の雪を下したりする働きを多少ともせずにはゐられなかつたから、まだしも氣が張つてはゐたが、夜になつて全家族爐を圍んで靜かにしてゐると、そこには言ひ樣のないさびしさと不安とが湧き起るのであつた。さうした空氣になじんでいつとなしに平氣になつてゐる小供たちの樣子を見るにつけても、私などは時に涙ぐましいほど感傷的な氣持にさへなつた。

空地といふ空地に積まれた雪が既に屋根より高くなつてゐた以上、家はまるで穴居の形であつた。隨て外部の物音は、雪を吹き捲く烈風の唸りさへ聞えないで、物凄い靜寂が家の内部全體を領してゐた。たゞ時々屋根に積つた雪の重みに壓されて、家のあちこちがミシン〳〵と鳴る音が、私達を脅やかすだけで、

あつた。

幸ひ電燈が晝間でも點せるやうに送電されたので、家の中の暗さが二三日で救はれたけれども、晝夜の別ちなく電燈の光の下に生活してゐる氣持は、あまりにわびしかつた。夜が明けても、日が暮れても。そこには何の張合ひもなかつた。食事の度毎に「もう晩の御飯なの？」とたづねる幼女のあどけなさにも、私達は笑ふ氣にはなれなかつた。

「私達がこんなにしてゐる間にも、晴れた空の下に乾いた土の上を歩いてゐる所があるんですものね。」こんな言葉が時に妻の口から洩れたりした。

「まつたくだ。そんな明るい天地が同じ此世界にありさうな氣もしないがねえ。」などと私も合槌をうつたりした。

東京のまん中でスキー服を着て銀ブラをやつて得意になつてゐる人間もあれば、赤倉あたりへスキーに乘りに來て、やれ宿屋の蒲團が堅くて困つたの、やれ玉子しか食べるものがなくてやり切れなかつたのと贅澤を云つてゐる人間があつたりするやうな世間が一方にありながら、かうして雪の底に埋められて刻刻に迫る危險と、日々に押し寄せる食糧缺乏の不安とに脅やかされつゝ生きてゐる世間も一方にある。さうしたことを考へたりして、時に私達は皮肉な微笑を禁じ得ないこともあつた。

「それにしても有りがたいものさ。雪の此の綺麗なことをみろ。世の中にこれほど清いものはなからう。これが若し灰や土のやうな色でもしたものであつて見ろ。それこそ堪つたもんぢやない。同じ苦まされるにしても、この方がよつぽど我慢がしよいわけさ。」屋根の雪を堀りながら時にはこんな警句を吐いて皆の元氣を鼓舞する才人もあつた。

しかし、不安は日を追うて高まるばかりであつた。夜間寝て居ても目のさめる毎に起き出てゝ、外をのぞいては天候を窺つた。しかも、その度に失望を重ねるばかりであつた。

○

と、何でもそれは十三日の午後三時頃であつたと記憶する。思ひがけなく雪の切れ目から太陽の光が洩れた。降りしきる雪が、その光をうけてきらめき、地上に積つた雪の肌が眩さに堪へないほどに輝いた。その瞬間、「ワッ！」といふ歡聲が、あちらの屋根からもこちらの屋根からも、一度に湧き起つた。折から私は高窓を透して外の空模樣を窺つてゐたのであつたが、何といふわけもなしにその場に跪いて幾度となく太陽を拜んだのであつた。今おもひ返して見ると、その場合の私の動作のあまりに狂的であつたのに寧ろ氣恥かしくさへ思ふが、その瞬間は全

く眞劍であつた。
　しかし、その歡びもほんの束の間で、すぐに又空一面に雪雲が蔽ひかぶさり、やがてすさまじい西北風と共に、ひどく降つて來た。
「ああ、もうだめだ！」
　人々の口からは、おのづとかうした絶望の聲が洩れずにゐなかつた。食糧についで薪炭その他の燃料の欠乏も、そろ〳〵迫つて來てゐた。
「この上焚き物でもなくなつたら、一體どうなるといふのだらう。」さうした恐怖は誰しもいだかずにはゐられなかつた。
「どうしよう？　どうしよう？」
　と騒いで見たところで何とも致し方のないことは知れ切つてゐた。
「なあに、かまふもんか、いよ〳〵となつたら片つ端から家をぶちこわして燃やしてるさ。そのうちにや雪も晴れようし、日も出ようといふもんだ。」
　やけ糞になつてこんな冗談を云つて笑つてゐる者もあつたが、それとて腹からの安心があつての上でないことは、いふまでもなかつた。
　しかし、妙なもので、不安も恐怖も行くところまで行つてしまふと、おのづとそこに一種の安らかさが出て來るものである。
　戰ふだけ戰つて、しかも結果はます〳〵惡くなつて行くのであつたにも拘らず、私達の心にはいつとなしに安心に似た一種のあきらめが出て來た。
「なあに、どうせなるやうにしかなりやしないのだ。かうなつた以上、もうびく〳〵したつてしかたがない。いつそ晩酌でもうんとこさと飲んで陽氣にやつつけるがいい」
　しまひには私までがそんな氣になつてしまつた。そしてその晩はかなり飲んだ。私が醉ふと子供達までも一緒になつてはしやいだ。家の潰れる心配も、食糧や燃料の欠乏しつゝある不安も、すつかりもうどこかへ飛んで、私達一家は薄暗い電燈の光の中で、火のかん〳〵起きた爐の周圍で、その夜は實に愉快に戯れ合つた。
　そればかりでなく、醉つた元氣で、私は町うちの狀況を見に出かけさへした。スキー帽を深くかぶり、マントに身を包み、藁の深沓を穿き、スキー杖を一本携へて、玄關口の穴から雪の階段を登つて雪の上へ出た。しかし、夕方かなり堅く踏みかためて置いた雪の上の道は、いつの間にかすつかり掻き消されて、新しい雪がもう一尺餘も積つてゐた。見るかぎりたゞ一面に皚

險たる雪の山であつた。何もかもすつかりもう埋められて、どこに家があるか、どこに木があるかさへわからなかつた。風はあまり强くなかつたが、雪は隙間もなく降つてゐた。町中は街燈が全部雪の下になつてゐたが、ほんのりとした雪あかりがあるので、道筋のいくらか低くなつてゐるのだけはわかつた。電柱は低いのは皆雪にうもれてゐたが、高いのはまだ一丈近くも雪の上へ出てゐるので、その列によつて危險を避けることが出來た。私は殆ど夢中になつて町の中央部の方へと歩いて行つた。

どこがどこだか皆目わからなかつたけれども、あちこちに屋根の雪を堀つてゐるらしい人々の叫び聲が聞えた。私はいく度も道を踏み外しては雪の中へ深く埋つた。時には胸のあたりまでも埋つて、辛うじて匍ひ出るやうなこともあつた。寒氣はかなりひどかつたのであらうが、私の全身は燃えるやうにほてつて、汗がたく／＼流れ、喉がひどく乾いた。時々雪を摑んでは口に入れた。

そんな風で、見舞はうと思つた家は幾軒もあつたが、唯一軒入口がわかつたゞけで、あとは凡てわからなかつた。その唯一軒さがし當てゝ訪ねた家の人々と見舞の言葉を取り交した瞬間などは、これがつひ十日前まで繁く遇つてゐた人達だつたらうかと思ふほどに珍らしかつた。話し合ふことは一週間このかた雪に苦しめられた經驗に外ならなかつたが、これでも話し合ふことによつて相互にどれほど元氣づけられたかわからなかつた。

「苦んでゐるのは自分達ばかりでない、他にも大勢ある。自分達だけが雪との戰ひに努めてゐるのではなく、誰も彼もが全力を擧げて戰つてゐるのだ」

さう思ふことそのことだけでも、どんなに力强く感じさせたかわからない。

「私たちはまだこれでもどうにかやつてゐるが、あちこちで立往生してゐる汽車の乘客達はどんなに難儀をしてゐるかわかりませんよ。それも一日や二日ならまだ堪へられもしませうが、一週間もそのまゝでは、全くどうなつてゐることか知れません。此の町だけにも少くとも二三百人は滯在してゐるといひますから。」

「成程、そいつあ氣の毒ですね。宿屋だつてさう／＼食糧の備へもないでせうからね。」

「宿屋もさうですが、旅客の方にも金の餘裕なんかない者が多數でせうから、全く途方に暮れてることでせうよ。何でもかなり多く雪埋めになつてる列車の中にゐて、驛の方からの食事の配給によつて辛うじて命をつないでゐるさうですがね。さうい

ふ人達なんかの苦しみと不安はどんなだかわかりませんよ。それに中には隨分悲しい事情の下に旅をしてゐる人もあるでせうし、又どんなにか急ぎの旅の人もあるでせうにね。」

こんな話を聞いて見ると、一刻もぢつとしてはゐられぬやうな氣もするのであつたが、しかし今更私達にはどうすることも出來ない。私達自身既に手を拱いて運命に從ふより外道のない瀬戸際まで來てゐるのであつた。

私達の間にはまた先年の關東大震火災當時に於けるあの地方の人々の苦んだ有樣についての憶ひ出話などが取り交された。そして、

「あんなことさへあるんですからね。」

「まつたくですよ。」

お互にさういひ合ふことによつて、現在自分達の瀕してゐる危險を無意識の間にいくらかでも輕く感じようとはしたものの、しかし却てそのあとから一層暗い不安が私達の心を曇らせさへするのであつた。何となれば、これが假に地震でゝもあつたなら、一時的の危險はより大きからうが、その代り逃げるべきところもあれば、また他地方からの救援にも預ることが出來るであらう。しかし、今の私達の場合はそれとは違つて、逃げるに道なく、避けるに處がない。どこもかも同じ雪の中である。單に陸上の交通が絶對に斷たれてゐるばかりでなく、海は連日連夜荒れ狂うてゐる。此上の激浪が押し寄せて來ないだけが、せめてもの幸ぐらゐなものである。此上もし海からは激浪に攻められでもしたら、洪水にでもなつたとしたら、それとも地震でもやつて來たとしたら……それこそ萬事休矣である。

「だがまあさう取越苦勞をせずにお互に防げるだけ防いで行きませうよ。そのうちには雪も止むでせうから。」

何かと不安な言葉を取り交し合つても、つまりはそこへ落ちつくより外にしかたがないのであつた。

「まあお大事に！」

「お大事に！」

お互にしん底からさうした挨拶をかはしながら私は一時間ほどしてその家を辭した。そしてやはり雪の穴を匐ひ上つて、往來へと出た。僅一時間のうちに足跡の道はすつかり搔き消されてゐた。しかし、有りがたいことには、その時雪は降りやんでゐて、ほのかに月のありかゞわかるほどに、雲が薄くなつてゐた。

「ありがたい！　そろ〳〵晴模樣になるのかな。」

私は大聲をあげて叫びたいほどの嬉しさを感じながら、空を見廻した。けれどもやつぱりだめであつた。雲の薄いのはほんの頭の上だけで、かんじんな西の空が依然として物凄い墨色を

してゐた。

「ああ、まだ駄目なのか。」

再び私はもとの通りのさびしい氣持になつて雪を搔きわけながら歩いた。足跡が搔き消されてゐるので、道は一層危險であつた。狹い通りを歩く時などは、一足踏み外すと家の軒下か高窓の中へでも落ち込まなければならぬやうな危險がいたるところにあつた。私は一歩毎にスキー杖で、探り〱歩くやうにして進んだ。

だが、人間の頭は時として突拍子もない働き方をするものだ。私は其の時さうした危險を氣づかひながら歩いてゐながらも、途方もなく馬鹿げた昔話を心におもひ浮べて、妙なをかしさに操られてゐた。それはかの有名な『北越雪譜』といふ書物に書いてあつた話である。

それは年越のめでたい晩に或家の高窓から座頭が轉げ落ちたといふ實話らしくない實話である。折からその家では家族外二三の來客が集つて、酒宴をしてゐた。來客のうちに物識りがあつて、都では年越の夜には鬼が來ると云つて厄拂ひをするなどいふことを得意になつて話してきかせてゐた。そこへ高窓から人間らしいものが降つて來たのだ。一同は驚いて「そら鬼がやつて來た！」と立ち騒いだが、よく見るとそれは福一といふ名の座頭であつた。大した怪我もなかつたので、一時は皆大笑ひをしたが、やがて氣がつくと家族の者は怒り出した。「時もあらうにこのめでたい年越の晩に、しかも吉方から目のない者が落ち込むなんて、全く緣起でもない」かう云つて彼等は罵り騒いだ。けれども座頭は落ちつき拂ひ、一首の狂歌を以てそれに答へて、罪を謝した。「惠方から福一といふこめくら（米倉）が入りてしり餅つくはめでたし」

私はそれをおもひ出したのであつた。そして一時は自分の現在立つてゐる境遇とはあまりに不調和な一種のをかしさをさへ感じたのであつたが、すぐそのあとから私みづからのさうした馬鹿らしさを冷笑せずにゐられないやうな氣持にもなつた。

ああ、しかし、何といふ莊嚴さであつたらう。やがて私が疲れを休めるべく歩みをとめた時、そして一にぎりの雪を口に入れて快い冷たさと潤ひとを味ひながら突立つた時、突如として私の眼に映じた光景！おそらく私はいつまでもあの瞬間を忘れ得ないであらう。

それは私の家から程遠くないところを流れてゐる幅十間ほどの川に架けられた橋の上であつた。橋の上といつても、一丈二三尺もの高さに積つた雪の上であつた。家といふ家、木といふ木、柱といふ柱はことごとく埋められて、見渡す限り白皚々た

る高低起伏はてしない雪の高原であつた。そこには電燈の光一つ見えなかつた。ほんのりと月明りを含んだ雪空が低く垂れてその雪の高原を覆ひ包んでゐた。たゞ一筋黒く、しかも底知れぬ深さを持つた地の裂け目かなぞのやうに川の流が眼下に見え、その先に同じく眞黒な海の一とところが雪の山と雪の山との間を、立ちふさいでゐるだけで、その他のあらゆるものが一様に蒼白いほの明りに包まれてゐた。折から風が杜絶えて居たので、音といつてはたゞ轟々と絶間なくつゞく浪の響だけで、生きもの丶聲などは無論全く聞かれなかつた。聲や音ばかりでなく、動くものとても何一つ見られなかつた。

私はたゞ茫然としてさうした天地の間に立つてゐた。恐怖も不安も何もかも私の心から消えてゐた。私にはたゞ快い驚きがあつたゞけだ。どこから來たのか、どこにゐるのか、そしてどこへ行くのか——そんな意識すら私にはなかつた。その瞬間私はたゞ天地と一つになつてゐた。生も死もその瞬間私にとりては無かつたのだ。

○

雪の中へ轉んだり、道を踏み外して落ち込んだりしながら、やがて私は自分の家のあたりまで來た。しかし、おほよその見當はついてゐるもの丶、どこが確かに自分の家だか容易にわからなかつた。それぱかりでなく、辛うじて見定めて入らうとすると、先刻私の匍ひ出た戸口への穴が殆んどふさがれて、僅に直徑二尺ほど明いてゐるだけであつた。

私はそこにしやがんで、何といふわけもなくや丶暫くその穴をのぞいてゐた。その穴の中は眞暗であつた。底知れず深いやうにも感じられ、手を入れるとすぐ屆きさうにも感じられた。ああ、しかし、その穴の底にこそ、私達の巣があるのであつた。そして此の小さな穴こそ、この唯一つの小さな穴こそ、私達の住居と外界との唯一の通路であつた。單にそれは唯一の通行口であるばかりでなく、實に唯一つの生命の門であり、二つとない活路なのであつた。

今私は初めてその事實を知つた。そして慄然とした。およそ七八日の間、私達は日夜降りつゞく雪に對して全力を擧げて戰つて來た。或は屋根の上の雪を掘り落したり、或は門口の雪を堀りのけたりして、たゞもう無暗と働きつゞけて來た。しかし、唯の一度もかうして自分達の置かれてゐる狀態を、外部から見定めることがなかつた。私は今初めてそれを見たのだ。

ああ、何といふみじめさだ。まるでムジナかモグラモチのやうなものではないか。いや、危險に於てはそれどころではない

のだ。私がこゝ一週間もの間、こどもと協力して必死の働きをつゞけて、辛うじて開いて來た活路は、たつたこれつぽつちの小さな穴に過ぎなかつたのか。何といふあはれさだ。何といふ小さな人間の力だ。私はむしろその場合そんな風に自らを笑ひたくさへなるのであつた。

しかし、何といつても、その穴は私達にとりては、今のところ最も大切な關門であつた。その穴の底を外にして、私達の住むべきところはないのであつた。そこにはなほ私達を容れて餘りある安全な空間がある。暖をとるべき燃料も、食ふべき食糧もまだいくらか殘つてゐる。着るべき衣服も、眠るべき寢床もある。それにしても、この穴の底に、これほど深い雪に埋められて、なほ且どこへも行かずにじつとしてゐる家族のことを思ふと、私は妙に淚ぐましくもなるのであつた。

しかし、それは私達ばかりではなかつた。見渡す限りの眞白な雪の曠野の底には、互に壁を以て隔て合ひつゝ、或は五人、或は七人、或は二人、或は三人といふ風に、それ〴〵の家族が相寄つて、不安におびえつゝ生きてゐるのであつた。それを思ふと、一層私の心は暗くなつた。そして人間の弱小な力を以てしては、此上もう如何ともすることの出來ない自然の前に、私はたゞ祈るより外なかつた。

穴は深かつた。杖で探り〳〵足の方から辷り込むやうにして、私は底に達した。玄關の中からは電燈の光がさして居た。こどもたちの話聲がきこえた。急いで戸をあけると、

「とうちやん！」

と先づ七歲になるアヤ子が呼んでかけ出して來た。大きな二人の男の子等も後からついて出て來た。

「ひどかつたでせう。」と男の子等は私をいたはつた。

「かあちやん、來て見なさい。とうちやんが雪達磨になつて來た！」アヤ子はかう叫んで、母を呼んだ。

彼等が私の身の上を案じ、且さびしさと不安とのあまりどんなに私の歸りを待遠しがつて居たかは、直に私に感じられた。

しかし、その場合私はすぐに上ることは出來なかつた。私はそのまゝシャプルを持つて、再び外に出た。そして今自分の辷り込んで來たばかりの穴の修理にとりかゝつた。長男も出て來て私に手傳つた。かうして私達父と子とは、一家の者の生命の門を切り開く爲に汗を流して働いた。

その翌日も相變らず降り頻つた。屋根の上には更に又二三尺も加はつたらしく見えた。しかし、私達はもう疲れ切つて居た。出入口と、往還への步道だけは何としても堀り開いたり、踏み堅めたりせずには居られなかつたが、屋根まではとても力が及ばなかつた。人を傭ふにしても、今となつては容易に得られなかつた。私達はもう觀念してしまつた。

「もうどうなつてもいゝさ。」

さういつた一種のすてばちに近い安心もあつた。その日は何もせずに爐端で茶を飲んだり、煙草をふかしたりして、漫然と暮した。新聞を見ないこと既に六日、郵便の來ないこと既に八日、私達はもう廣い世間から殆んど隔絶した形になつてゐるのであつたが、しかしそんなことはどうでもいゝといふやうな氣持になつてゐた。こどもたちはこどもたちで、いつの間にかすつかり境遇に慣れてしまつて、平氣で遊んだり騷いだりしてゐた。

けれども、その日の午後になつて、突如として私達の耳を驚かした凄慘な報道があつた。それは私達の町から約四里隔つた磯部村大字大洞といふ部落で、雪崩と地辷りとが一時に起つて、五十戸程の部落の大半が殆んど埋沒し、その上火災を發して今なほ盛に黑煙を揚げつゝあるといふことであつた。

「なんてこつたらう。」

「まつたく、どうなるといふんでせう。」

私達はさうしたあまりにもむごたらしい他村の消息に戰慄すると同時に、どう成り行くかわからぬ私達自身の運命の前に、今更の如く怖れをのゝかずにはゐられなかつた。

その日の午後は殆ど全く其の凄慘な災害についての噂で持ち切つてゐた。私達の氣持はその爲にだん／＼高くなるばかりであつた。しかし、降雪は日暮に近づくにしたがつて、密度を減じた。そして外へ出て見る每に、空の雲がだん／＼薄くなつて行くやうな氣がした。それればかりでなくこゝ十數日の間、一日として眞黑な雲に閉されて居らぬ日のなかつた西北の水平線の際が、思ひもかけず隙いて見えるやうになつた。」

「やッ、宮崎の鼻が隙いて來たぞ！」

「霧足もどうやら揃つて來たらしいぞ！」

「いよ／＼あがるかな？」

さうした叫び聲が、屋根の上に雪堀をしつゝあつた人々の間に、威勢よく取交された。二階の窓をあけて空模樣を覗ふ度に、私は人々のさうした歡ばしげな聲を聞いた。

「西に小霰、風の王。」

九年前に亡くなつた私の父が、冬每に口癖のやうに云つてゐたさうした言葉をおもひ出させるやうな細かい霰がやがて盛に

降つて來たのを見るにつけても、私までが何だか天候回復の近きを信ずるやうになつた。

「いよ〳〵天氣になるぞ！」

私は思はず妻やこどもたちに向つてさう叫ばずにゐられなかつた。

私のさうした晴々しい叫び聲を聞くと同時に、家内の空氣は突如として一變した。

「晴れる!?」

「天氣になる!?」

こどもたちは急にはしやぎ出した。そして何といふこととなしに家ぢうを躍り廻つた。

「うれしいな、お天氣になるぞ！」

アヤ子までが大きな兄達の後について、さう叫びながら跳ね廻るのであつた。

私もその夜は少々晩酌の度をすごした。しばらく戸外をのぞいて見ようともしなかつた妻までが、夜になつてから高窓をのぞいて見て、

「何だか外はいゝお月夜のやうですよ。」

と叫んだりした。

「月夜だ？」

「お月様が出たの？」

「ほんと？」

家ぢうが再びこんな風に湧き立つた。

その夜は久しぶりでよく眠れた。目のさめたのは朝の六時少し前であつた。私は北向の縁側寄りの障子に近く寢て居た。縁側の外には硝子入の雨戸があつたが、その外の庭には屋根の上までも高く雪が詰め込まれてゐるので、晝でも眞暗であつた。しかし、その縁側の東の端が二階への昇り口になつてゐて、梯子段を昇りつめたところの壁の上部に小さな高窓が切つてあつた。一時は廂の上に積つた雪の爲にその高窓までがすつかりふさがれてゐたが、屋根の雪を二度まで落したので、前日の夕方までは辛うじてその窓だけは明いてゐた。

ところで、私は目をさますと同時に、その高窓がどんな風になつてゐるかを覗ふ爲に、縁側の障子を明けて見た。するとどうだらう。そこには私達が二十日以上もの永い間、一度も見ることの出來なかつた、ほのぼのとした曙の光が、疑ひもなく晴れた空の明りが射してゐるのではないか。

「ありがたい！」

その瞬間私は思はずさう叫ばずにゐられなかつた。

「おい、いよ〳〵晴れたよ。」

私は妻を呼んだ。その時もう起きかけてゐたらしい妻は、
「さうですか。」
といひさま元氣よく起上つた。そして身じまひもそこそこにして、
「本當でせうか。」
さう云ひながら、緣側へ出て梯子段を昇つて行つた。と、忽ち上から妻の頓狂な叫び聲が聞かれた。
「まつたくい〻お天氣ですよ。……まあ、なんてよく晴れたんでせう。」
私もぢつとしてはゐられなかつた。すぐに飛び起きて、寢卷のま〻で梯子段を昇つた。そしていきなり高窓を覗いて見た。
その瞬間の驚きと歡び！それは如何なる言葉を以てしても到底言ひ現はせるものではなかつた。
空は一點の雲もなく晴れ渡つてゐた。私達は二十數日目でそれを見たのだ。こんな青空が、こんなに美しい空が、そのま〻私達の上にかくされてあつたのか——そんな氣さへした。見渡すかぎり白一色の雪の曠野、そしてその涯を取圍んで空高く立ち並んでゐる雪の高嶺の崇高な姿！火打山、燒山、雨飾岳、駒ヶ岳は云ふに及ばず、白馬山の頂までが、まだ明け切らぬ空の果にくつきりと浮出て見えた。太陽はまだ昇らなかつたが、鉾ヶ岳と火打山との間の空が既に薄紅に染つてゐる。
何といふ美しさだ。何といふすが〳〵しさだ。いや、何といふかう〳〵しさだ。私達は昨夜までおびえてゐた不安や恐怖などはすつかり忘れ果て〻、や〻暫くはたゞもうその美にうたれてゐた。
私達はその朝を永く忘れることは出來ないであらう。

○

八日間に亙るあらゆる人々の必死の苦鬪も、唯一日顏を出した太陽の功德の前には、あまりにもちつぽけに見えた。しかし、人々はその功德に感謝すると共に、それに力を得て疲れ切つた肉體は蘇生した如く元氣づいた。老若男女悉く家を匍ひ出して、太陽の光の中に全力を擧げて働いた。昨日までは漁師達すら忘れてゐた海の面には、その日は早朝から漁舟が群をなしてゐた。
その日私達は又七日以來不安にふるえ焦燥に苦みながら滯在してゐた多くの氣の毒な旅人達が、危險をも忘れて小さな發動機船とそれに曳かれた小舟とに乘せられ、しかも狂喜の喚聲を發しながら出立して行く涙ぐましい光景をも見た。
久しぶりで仰ぐ太陽の光はあまりにまぶしかつた。しかし、

人々は目がくらむまでもそれを仰ぎたがつた。屋根の雪を掘り落す人、空地へ捨てる雪を莚に載せて運ぶ人、家の出入口の雪の穴を掘りひろげる人、雪の上の道を踏み固める人――到るところ營々として働く者の姿が見られた。

久々で魚肉を味ひ得たその日の夕食のうまさ、久々で手足をのばして寢ることの出來た其夜の就床の快さをも、私達はおそらくいつまでも忘れ得ないであらう。

その翌日は珍らしく雨が降つた。氣温が不思議なほど高く、春を思はせるやうな靜かな雨が終日降りつゞいた。そして雪は非常な勢で融けた。しかし、それが又人々の心配を新たにした。場所柄によつてはその爲に洪水のおそれがあつたと共に、屋根の上に落し殘してある雪がその爲に急に重量を増す危險があるからであつた。

私達は再び雨を冒して働かねばならなかつた。深切な人達の助力によつて、私の家などは其日も終日除雪につとめた。

十七、十八、十九、二十日と、隱やかな日が其のあとからつづいた。皆の上に始めて本當の安心が來た。欠乏して居た食糧も縣廳からの救助船やその他によつて充たされた。郵便も二十日に始めて配達された。「郵便！」といふ呼聲を私達は十二日目で聞いた。ふだんは何氣なく聞流して來たその聲を、その時私達は躍り上るほどのうれしさを以て聞いた。更にそれと共に受取つた遠方の深切な人々からの同情ある言葉を、私達は涙なしに讀むことは出來なかつた。

大正十二年の大震災當時に於ける其の地の人々の經驗談も、おのづと追想された。

○

記錄によると、今年の雪は寛文二年以來始めての大雪だとのことである。この何百年に一回といふ大雪のにがい經驗を嘗めさせられたのは、よく〳〵の惡因緣といはなければならぬ。しかし、その苦しかつた經驗も、今となつて見ると、必しも苦み損ではなかつたやうな氣もする。

それにしても、此の雪の爲に犧牲となつた多くの罹災者の身の上を思ふと、私達は勿體ないほどの幸運の下に置かれてゐたことをおもはずに居られぬ。慘死をとげた人々は無論のこと住むべき家をつぶされたり、耕すべき土地を地辷りの爲に失つたり、肉親の人々に死なれたりした多くの人々の不幸は全く何といつてよいかわからぬ。深い雪の底に埋められたまゝ、まだ死體の發掘されずにゐる人々も少くないといふことである。おそらく今なほ毎日泣きながら雪を掘つて愛する人の骸を探し求

めてゐる人もあることであらう、家を失ひ、土地を失つて、此の先どうなることかと途方に暮れてゐる人もあることであらう。

積つた雪は刻々に解けつゝある。解けるあとから〳〵大地に吸はれて、いつとなしに雪は消えてゆく。そして春はめぐつて來る。だが、いかに天地の春がめぐつて來ようとも、ついに再び運命の春に遇ふことの出來ない人々も、少くないであらう。

自分達の危險をのがれてから後の私達の間には、さうした不幸な人々について噂がつぎ〳〵に心を暗くさせる種となつてゐる。しかも私達のうちの幾人かゞ天地の春の來復と共に、凡てを忘れ去らないでゐるであらうか。

○

十日以上他の地方との交通を斷たれたのであるから、食糧の欠乏を來したことはいふまでもなかつた。しかし、何といつても田舍に生活してゐる者は、それ〴〵多少の蓄へを持つてゐる、又粗食にも堪へることも出來る。そればかりでなく相互に扶助し合ふ精神は、まだ〳〵地方生活者の間にかなり濃厚である。それらの點では大都會の生活者のさうした場合の窮狀とは比べものにならぬ。今回の雪難に際しても、相互の危險を救ひ合ふ上に、又相互の窮乏を助け合ふ上に、人々はどんなに美しい心を働かせ合つたかわからぬ。十日以上も他地方との交通を斷たれ、しかも他からのさまでの應急的救援をも與へられなかつたにも拘らず、多くの人々がよく此の苦難を脫することの出來たのは、主として地方生活者の間に今なほ生きつゝある、助精神の然らしめたところである。「この貴いものを失つてはたらぬ！」といふ覺悟が、私達のやうなものゝ胸にも湧然として起らざるを得なかつた。

しかし、一方に私達はさうした美しい心を以て助け合つたと同時に、他方に於て私達の間に、しかも日頃は口論一つしたことのない隣人同志の間に、かなり烈しい爭ひの演じられたことも事實であつた。就中家と家との密接してゐる密聚部落に於て、各自の家を潰されないやうにと屋根の上の雪を掘り落すべき場所について、如何に多くの人々が、如何に烈しい、如何に醜い爭ひを演じたことか。雪を掘ることそのことをすらそつちのけにして執ねく爭つてゐる人々をすらも、私達はいたるところで見た。

けれども此の地方の人々が口癖のやうにいふ如く、雪は全くオバケのやうなものだ。消えてしまへば、影すらも殘らない。人間の必死の働きを以てしても如何ともすることの出來なかつた雪が、一たび太陽の光と熱とを受けると、いつしかあとかたも

なく消え去つてしまふ。そして大地はいつの間にか芽生え、花咲く春となる。人々はその爲に互に爭ひ合つたことなどはすつかり忘れ去つて、人々は互に喜び合ふ。

○

天候恢復と共に、人々が依然として深い雪の底にうもれてゐながらも、急に元氣づいてお互の無事を祝し合つた有様は、まつたく此上なく快かつた。つひ昨日私達三四の仲間が集つて、雪崩に襲はれながらも不思議に救ひ出された一人の友人の爲に催した蘇生祝ひの小宴の如きは、私達にとりて近來になくうれしく樂しい集りであつた。それとなく互に涙ぐみさへもしつゝ、私達は語り合つた。

その一人の友人といふのは、低い山と山との間にある農村部落に住んで、農を家の業としてゐる男であるが、若い頃から俳句や歌に趣味を持ち、どこか脫俗的な風格を備へてゐるところから私達の間では「和尚」といふ綽名までつけられてゐた。

何でも此度の大雪になり出してから四日目の朝であつた。町の銀行につとめてゐる一人の友人が私の家へ雪見舞にやつて來て、私の家の樣子をたづねた後で云ひ添へた。

「和尚が雪崩にやられたさうです。」

私はどきつとして問ひ返した。

「エッ、和尚が……」

「しかし、運よく掘り出して貰つて助かつたさうです。おまけに大した怪我もなかつたといふことです。」

「さうですか、それならまあよかつたが、僕は今どきつとしましたよ。」

私の胸騷ぎはすぐに治つたが、しかし、それと同時に私の腹の底からは抑へきれない笑ひが込み上げて來た。しかも、それは私ばかりでなかつた。期せずして友人も私と共に吹き出してしまつた。「何でも細君と一緒に屋根の雪おろしをしようとして、下の方からそろ〳〵つつき始めると、俄に怖ろしい勢で屋根の雪全體がなだれ落ちて來て、和尚一とたまりもなく埋められてしまつたんださうです。」

から友人が笑ひ〳〵話すのを聞きながらも、私の頭の中にはその場合の「和尚」の格好があまりにあざやかに描き出されて來るのであつた。そしてそれと同時に、氣の毒を通り越して、矢張たまらない可笑しさがこみあげて來るのであつた。

「いかさまあの和尚の事だからシャブルを片手で差し上げでもして、下から鳥でもさすやうな格好で屋根の端へのぞいてる雪でもつついてゐたんでせう。それでなくてさへ藁屋根の雪おろ

しほど危險なものはないといふのに。」から友人も重ねて笑ひながら註を加へた。

「それでも運よく細君の方が別の側に居たので、氣ちがひのやうになつてわめき立てたさうです。その聲に驚いて近所の人達が驅けつけて、眞劍に雪を堀つてくれたので、うまく救ひ出されたのださうです。何でも三尺以上の深さの雪をかぶつて居たといふ話でした。それに少くとも十四五分間は埋つてゐたといふことですが、まだ窒息してはゐなかつたさうです。簑を着て、背笠を被つてゐたといひますが、急に窒息しなかつたのは其の笠のおかげだと云ふことです。何でも藁屋根の雪おろしをするには必ず背笠を被れといふのが、昔からの戒めださうですからね。」

友人は更に話をつゞけた。

「堀り出された時は、和尚うつ伏しになつてぼんやりしてゐたさうです。家の中へ助け入れられ爐端に休ませて貰つても、かなりながい間ぼんやりしてゐたといふことです。あの和尚があれ以上ぼんやりしたら消えてしまひさうなもんだが――私は話した人とそんな冗談を云つて笑つたんですよ。」から云つて友人は更に笑ひを新たにした。

私も笑はずにはゐられなかつた。しかし、私は云つた。

「だが運よく助かつたからかうして笑ひ話にしても居られるんですが、結果が反對だつたら、それこそ今頃は大騷ぎだつたんですね。あの人もずゐぶんいろ／＼なひどい目に遭ふが、やはり運好く生れて來てゐると見えて、不思議にうまく難をのがれますね。まああれで一種の偉人とでも云ふんでせうよ。」

私達がこんな風にして「和尚」遭難の報告に接してからといふもの、雪の爲に苦しめられながら、何かにつけて私達の間にその話を好話題の一つとして來た。そしてつひに昨夜の蘇生祝ひの會をさへ實現するに至つたのであつた。

無論「和尚」は涙を流さんばかりに喜んだ。「俺は五十三にもなるがこんなに嬉しいことは幾度もなかつた」彼はそんなことを云つたりした。

「因緣つて妙なもんです。私はその前夜村の寺での御大葬遙拜式に列して、村の人達と御通夜をしながら、みんなに向つて、生死の運命は一天萬乘の天皇陛下ですらおのがれになることは出來ぬといふやうな話をしたんです。それがその翌朝早速自分の身の上にあんな災難が來たんですからね。助け出して貰つた時には、まつたく勿體ないほどに思ひました。」

彼は更に雪に埋つた時の樣子について語つた。

「苦しい中からも、私の頭の中には非常な速力で廻轉する廻り燈籠の繪のやうに、こども達の顏、姉の顏、友達の顏が幾つも幾つもつぎ〳〵にはつきり浮びました。俺はこんなみじめな死にやうをするのかなあとも思ひました。ふだんは良寛さんの人間は災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく死ぬ時節には死ぬがよく候といふ手紙の文句なんかに成程と感心したりしてゐるが、あんなことになると、いやはやそこどころではありません。今から考へると、あんまり自分のくだらなさがなさけなくもなりますが、まつたくあの時はもがきました。雪の中に埋つてゐるのだから聞える筈はないんだが、それでも無茶苦茶に「助けてくれ、助けてくれ」と叫んでゐたやうな氣がします。雪の重さなどは少しも感じなかつたが、たゞもう全身が苦しくて〳〵たまりませんでした。笠を被つてゐたおかげでいくらか空間があつたけれど、顏が雪についてゐたから呼吸がだん〳〵と苦しくなるので、頸を無暗に動かして雪に穴をあけやうとして居たやうな氣もします。しかし、しまひには胸がもうかきむしられるやうに苦しくなり、何もかもわからなくなつてしまひました。そのうちに何だかぽつと明るくなつたやうな氣がして、やがてガヤガヤと人の話すやうな聲が聞えて來たのです。オヤツと思ふと同時に、苦しい中から、「助かつた！」といふ考が頭の中にひらめいたやうに思ひます。或はその時はもう人の手で引き出されて居たのかも知れません。」

「それでいよ〳〵引き出された時はどんな氣持がしたね。」かう私はたづねた。

「どんなこんなつて、いやもう嬉しいのと、らくになつたので、何が何だかわからずに、ぼうつとしてゐました。雪の上へ頭をすりつけて「ありがたうごさんした」と誰にといふことなく禮をいつた時なんか涙が流れてしかたがない位でした。しかし妙なもので、あゝした時には、いやにあまえたい氣持になるものと見えて、抱いてくれるといへば抱かれたいやうな氣もしました。掘り出してくれた人達に對しては無論のこと、自分の姉までが何だか非常に貴いやうにも感じられました。しかし、自分の置かれた位置の危險を思ひ返して脅えるやうになつたのは、よほど時間がたつてからです。」

そんな風に「和尚」の話は、次から次へとつゞいて、容易に盡きなかつた。

「だが、それにつけても私は人間といふものゝ淺間しさをつく〳〵感じたことが一つあります。何でもあの日夕飯の時だつたと思ひますが、姉も私も「かうして皆さんのおかげで死んだ命をよみがへらせて貰つたんだから、もう何の慾も出すまい」

なんていやに殊勝な事を誓ひ合つたといふもんです。一茶翁の「今年からまる儲けぞよ今朝の春」といふ句なんかも其の時引合ひに出したりしました。それが、どうでせう。其の翌日からもう元通りに意地ぎたない私ともなれば、又わからずやの婢ともなつてしまつて、今となつては更にあの時あれほど貴く見えた婢とももと〳〵通り愚にもつかぬ小ぜり合ひさへやるやうになつてしまつたといふわけです。私なんかは到底もう救はれつこのない人間ですね。かうして皆さんから蘇生祝ひなんかしていたゞいても、當人は蘇生どころの騷ぎぢやありません。」

最後に、結論のつもりでもあらう、「和尚」がこんなことをしみじみ話した時には、私達も流石に笑へなかつた。

「それは決して君ばかりぢやない」――かうした反省が私の胸にピリツと來た。それは先年の大震災當時及びその後に於ても、特にしげく私達の聞かされた話であつた。而も今や何百年目に一度といはれるほどの大雪の苦難を辛じて逃れたばかりの私達の誰もが、殆んど同樣の經路を辿りつゝあるではないか。

「しかし、又それが凡夫の凡夫たる生活なのでもあらう。苦しんでは忘れ、忘れては更に苦しみつゝ最後の淵へと一歩々々辿つて行く、それでいゝのかも知れない。」私達はそんなことをも語り合つた。

話し、食ひ、飲み、うたひ、最後に飯を食つて、更に又大に話し込んで、やがて外へ出た時は、夜はひどく更けてゐた。しかも、又してもひどい降り方で雪がやつて來た。いつの間にかもう脛の半ばを沒するほど新らしい雪が積つてゐた。多くの人々の足跡で固めた深い雪の上の道も、かき消されてゐるところが少くなかつた。その上へ私達は新たに又私達の足跡を印しながら歩いた。しかし、それもあとから〳〵降る雪に消された。

「又大雪になるんぢやなからうか。」かうした不安が微かに感じられないでもなかつたが、しかし、私達は皆默つて歩いた。

けれども、今日になつて見ると、すつかり晴れ上つて、私達は又うらゝかな太陽の光の中に立つことを得た。

（二月二十四日）

裸にした蔣介石

古莊國雄

東洋のナポレオンだの、ジンギスカンの再來だなどと歐米人の中には蔣介石を恐れてゐる者がある。わづか一ケ年余りの間に、武力的に思想的に支那の三分の二を風靡した形になつてゐる蔣介石はとにかく現代の驚異でなければならない。『蔣介石はどこへ行く？』——これは單に支那のみならず、日本にとつても、否、世界的の重大な問題である。私は蔣介石の將來に何よりの興味を惹かれるものであるが、未だ日本人に知られざる蔣介石の半面、蔣介石の日常生活——人間としての蔣介石を紹介したいと思ふ。先づ人間としての蔣介石を知る事が、支那の事局を見る上に最も必要な事であり、しかも、こうした事がいつも閑却されてゐるのが、日本にとつて非常な不幸であると私は思ふ。

一　蔣介石と女

蔣介石は可なり好色漢である。國民革命軍總司令だの、中央執行委員會常務委員長などいふ物々しい肩書を着けてゐる現在では、自ら遊蕩三昧に耽るやうな暇もあるまいが、彼がいい意味の女好きである事は部下に對する心遣ひでよく解る。支那從來の軍閥の兵士といふものは土匪と五十歩百歩の連中で、戰爭すれば行く先々で掠奪する。婦女を犯す。蔣介石の國民軍も、軍紀は極めて嚴しく拵へてゐるが、なか〳〵理想通りにはやれぬやうである。それに現在では多數の異分子も交つてゐる。だから各處でやはり兵士の婦女凌辱問題が持上るのである。蔣介石はそれをなるべく大目に見る。政策的に不都合な兵士を斬罪に處し、その首を街頭に晒して軍紀を示すやうな場合もあるが、大抵の場合は大目に見る。自分がやはり女を好むので部下の心を思ひ遣るのである。第一革命後、上海で彼と同居してゐた小室氏などはこの間の事情を知り拔いて、非常に蔣に敬服してゐる。

上海當時の蔣は年もまだ二十を越したばかり、正妻はあつたが、相當遊里にも足を運んだやうである。小室氏の述懷によれば二三人で女を買ふ場合、蔣は必ず友人達に美しい女を奬めたさうである。そして自分は一番惡い女で滿足する。武人肌の彼にこうした粹人的の氣持があるのは面白い事である。しかも蔣を見るあらゆる女が何となしに蔣の人物に惚れ込んでゐた。今は上海で盛んに賣出してゐる柳などいふ女優も、當時若い革命家の蔣に思ひを寄せて興味ある場面を演じたらしい。あれもこれもも早一場の昔語りとはなつたが、蔣の一生にとつてはいい彩りである。蔣の現在の夫人は二度目の妻である。漢東から、宜昌へ、宜昌から武昌へと、國民政府の進出とともに蔣に前後して長江筋に乘り出した蔣夫人は、今、風光明媚な廬山にゐる。『香廬峯の雪』で名高い廬山、今は近代的な避暑地、遊覽地としての設備が完備してゐる長江筋の誇りである廬山に、聰明なモダーンガール式の顏をした蔣夫人は夫の運命に幸多かれと祈つてゐる。南昌に總司令部の置かれた時である。南昌から廬山まで汽車で四時間、それから駕で上り二時間、多忙な軍中からこの交通の不便を苦にもせず蔣はしば〳〵夫人のもとに通つたものである。いい意味の好色漢である彼は夫人を人一倍大事にする。廬山の駕かきは夫人に會ひに行く蔣をかついで一回六ドルといふ前例のない多分の料金を貰つて喜んだ。警戒の兵士も連れず、氣輕に駕に乘つて廬山に登る。そして賤しい駕かきが『蔣大帥、蔣大帥、蔣大帥は豪いお方です。私達にまで大變親切なお方です』と隨喜の淚をこぼすのである。

夫人との仲が大變にいい蔣介石は、前述のやうに部下に對しては寛大であるが、自己の生活だけは聖人君子のやうに固くなつてゐる。

そして蔣の此頃最も困つてゐるのはロシア人の行動である。急進的な共産宣傳かと早合點してはいけない。蔣の困るのはロシア人の性的赤化である。現在革命軍や國民政府の中には二百餘名のロシア人が入り込んでゐる。そしてボローヂン氏やガロン將軍などの頭株は何れも夫人同伴であるが、多數の青年士官などは皆獨身である。しかもロシア人の性的興奮の程度は支那人以上であるらしい。革命軍では隨時に小宴會、大宴會などを催す。その場合、血氣にはやるロシアの士官などは呼ばれた支那藝妓などを衆人環視の中で辱かしめやうとさへする。その時、寧波（ニンポー）人の血を多分にうけついでゐる蔣介石の顏面はきり〳〵と引しまる。いら〳〵した氣分がその眉宇にうかゞはれる。一二度は蔣の怒りが爆發して可なりの騷ぎとなつた事があつた。が、ロシア側の謝罪でやうやく納つた。こんな具合に彼

は女に興味を持ち、男が女を好む事に、充分な理解を持つてゐるが、人前をもはばからぬ亂淫を極端に嫌ふのである。ロシアの恩義は充分に承知してゐながら、ロシア人の目にあまる行動には困り拔いてゐるのである。

二　蒋の日常生活

支那人は一般によく／＼の朝寢坊である。支那の武將などいふ者も午過ぎでなければ床を離れない。ところが蒋は大の早起である。どんな日にでも六時には起上る。そして孫文直傳の質素な軍服を着ける。近着のニューヨーク・タイムスにも蒋介石會見記に巧みに蒋の風格を述べてゐる。

『彼はいかめしい位階の肩章や腕章をつけてゐないが、一見、犯すべからざる威嚴を備へてゐる。』

ニューヨーク・タイムスの記者も、蒋介石が長い會談の間に決して茶を呑まず、白湯ばかりすすつてゐるのに不思議がつてゐる。それから餅菓子や干菓子が出ても一向口にしないのを不思議さうに記してゐる。これについて面白い話がある。蒋は大正三年頃、大森の體操學校附近に暮してゐた事がある。それは士官學校に學んだ後、高田の騎兵聯隊にしばらく勤めた後の話——蒋の生活は先妻とともに和氣靄々たるものであつた。生活費は義兄陳其美氏（袁世凱の廻し者の爲に暗殺された人）から充分に送られてゐた。蒋はその頃、用兵地誌や、支那英雄史などを熱心に學んでゐた。特に長髮賊の亂、その平定の方略などには限りなき興味を覺えてゐた。その當時から蒋は普通の支那人と餘程變つた性格の持主であつた。第一に唾きを吐かぬ。支那ではどんな高位高官の者でも、梅蘭芳などいふ美しい俳優でも平氣で人前に唾を吐く。が蒋は決してそれをやらない。日本人以上に綺麗好きである。まるで支那人とは思はれぬと近所の人人まで感歎してゐた時、蒋にはまた支那人にも日本人にもめつたに見られぬ一つの癖があつた。それは茶を飮まぬ事である。茶のみならず、あらゆる人造的な飮料を飮まぬ事である。そしてたヾ白湯のみを飮む。或人がそつとその譯を問ふた處が、蒋はいつになく聲をひそめて次のやうに答へたさうである。

『毒藥で暗殺されるかも知れませんからねえ……』

實に蒋はその當時から他日爲すあるを期し、その準備をしてゐたのである。——外面いかにも外敵に無頓着を裝ひ、身邊の危險を知らぬものの如く見える蒋の一面には、白湯の外一切の飮物を口にせぬといふ細心な注意が拂はれてゐるのである。

彼は英語の知識が極めて淺い。だが、東洋殊に支那の書籍は可なりに讀む。現在の劇務に當つてゐながらも餘暇ある毎に非

子や老子を繙いてゐる。彼の勉强の方法は一日一書といふ遣方である。今日老子を讀めば、明日は莊子を讀む。そして現在までに支那の經書には一通りの研究を積んでゐる。同時に軍事學についての造詣は可なり深いものである。

彼はまた音樂を好んでゐる。支那古劇『空城計』などは彼の最も好むもので、人の前でその一節を歌つたりする事もある。

三　蔣介石の特質

彼は支那人に珍らしい寡言の男である。三日位ほとんど無言で暮す事もあるさうである。そして彼は何よりも信義を重んずる。この點で彼は『支那人は實に困つたものである。日本人ほど信義に篤い國民であつたらば……』痛歎した事もしば／＼ある。その彼が、最近アメリカの新聞に國民革命軍總司令蔣介石の署名の下に大體次のやうな宣言を發表してゐる。

『余はむしろ愚直な男である。學問がない。マルクス主義の事など少しも知らぬ。しかし余は支那人を知つてゐる。支那人が何を願ひ、何を望むかをよく知つてゐる。支那人の心を知るが故に支那の大衆は余に從ふのである』

と豪語してゐる。彼の理想は遠大である。帝國主義打破、軍閥打破、不平等條約の廢棄などいふ當面の問題以上に、彼の心は支那人の心理的革命までに馳せてゐるやうである。彼の大業の前途を云爲する前に、まだ彼の眞面目について語らねばならない。

彼は金錢問題などで決して人に迷惑をかけない。それどころか、不遇の友人などに對してどこまでも親切な態度をとる。開應時などいふ蔣の老朋友が今は上海で不遇に泣いてゐるが、蔣は決してこんな舊友を見棄てず、物質的にも可なり援助し、懇切な情味あふるる手紙などを送つてゐる。親友のみならず部下に對しても物質的に心を配つてやる。彼のこうした情義的一面が、大衆の信望を集めてゐる所以である。彼の郷里寧波の商人や、上海の豪商なども、單なる御都合主義からでなく、彼の人物に傾倒して財的援助を申し出るものが多いのもなるほどと合點が行く。

彼の父は彼の幼時に死んだ。彼は賢明な母の手で育てられた。やゝ長じて寧波の親戚に預けられたがその當時から儕輩に拔んでてゐた。そして浙江省の選拔學生として保定府の軍官學校に送られたのであつた。彼は幼にして別れた父の事をいつも口にする。そしてその忌日命日には質素ながら極めて嚴かな支那式の追悼會を行ふ。同時に老いたる母に對しても遺憾なく孝道の美徳を發揮してゐる。

四　彼の奇智

革命の父孫文もなか〳〵奇智に富んだ人物であつた。孫は日本に亡命し、或はハワイ――アメリカ、歐洲各地に轉々してさまざ〳〵な迫害を蒙つたものである。或時は支那領事館の一室に監禁され、やうやくにして支那ボーイを買收し、同志に密書を渡した事もあつた。或は危機一髮の際に、洋館の窓から巧みに脱け出して官憲の度膽を拔いた事もあつた。

蔣介石も孫文に劣らぬ機智と膽力の持主である。話は大正五年の春にさかのぼる。

蔣介石は張人傑とともに上海、南京間にある江陰の砲台攻略を企てた。江陰の砲台を護る守備隊の內、約二大隊の砲兵は蔣介石に內應してゐた。――現在の國民軍の北伐に際しても屢々見られた光景であるが、支那の戰爭の特色は買收、內應、裏切等の續出にある。實際に砲火を交へるといふ場合はごく少ない。砲火を交へぬ戰爭といふのが一笑に附すべきものでなく、徹頭に研究すべきものであるに拘らず日本人はそれを『支那式の戰爭』として一概に輕視する。怪しからぬ話である。が議論はともかくとして、蔣介石は內應者の合圖によつて堂々と江陰の砲台に乘り込んだ。戰はずして砲台を陷れ、台上には五色の革命旗が高々と翻つたのであつた。蔣介石は壇上に立つて兵士に向ひ、三民主義を說き、國民革命を高唱した。江陰の附近には常州、無錫などいふ富裕地がある。當時當面の敵であつた張勳、馮玉祥（馮玉祥も當時は蔣と對敵關係にあつた）の軍は、江陰を占領して意氣揚々たる蔣に向つて俄かに妥協を申し込んで來た。妥協は安易に行はれた。そして兩軍共同して常州、無錫の地を掠奪した。街の小路では老幼の別ちなく婦女が强姦された。共同掠奪などといふ如何にも支那式の妥協が行はれたかと思ふ間に、蔣の運命は急轉した。彼の部下となつた師團の中に裏切者が現はれたのである。

蔣の首には七十萬圓の懸賞がかけられてゐた。そんな事には氣付かず蔣は部下に掠奪禁止の命令を下し、町には『軍紀を冒せば斬る』云々の告示を出して大に軍紀の振肅を示し、町に善政を施き、商務總會に向つては軍費三十萬元を出せといふ要求をしてゐた。そしてその交涉がなかなか纏らぬのに業をにやし、城內に向つて威嚇砲擊などを行つてゐた。その間に例の裏切者が現はれて、蔣介石及び張人傑を次々に捕縛したのであつた。支那の戰爭の變幻極まりなき事は昔も今も變りがない。捕へられて張人傑は絕望の底に沈んでゐた。蔣はひそかに微笑してゐた。蔣は懷中してゐた二百

元を五人に分與した。衛兵は監禁室の戸を開いて見れた。案外に出るより早く、蔣は衛兵の鐵砲を奪つた。そして軍服を脱げと命じた。蔣の權幕に恐れた衛兵は蔣の言ふまゝに軍服を脫いだ。蔣は速座に兵卒に早變りして、上海に脫走したのであつた。その時に示された蔣の機智はそればかりではなかつた。蔣は同じく監禁の憂目を見てゐる人々を援くる爲に、眞に巧妙なる手段をとつたのであつた。蔣は自己に好意を持つ小隊長に因果をふくめて、營內に大混亂を起さしめた。蔣の脫走した後、營內は見る間に修羅場となつた。兵士同志のなぐり合ひ、奪略――買收、裏切などが連續して、兵士はお互に自分は誰に從ふべきか、何を爲すべきかが判らなくなる。そこでめちやくちやに騷ぎ出す。この大混亂に乘じて、張人傑初め、蔣の腹心の人人は全部脫走したのであつた。

五　危險を恐れず

夫人に會ふ爲に廬山通ひをする蔣介石は廣東を出發して以來、あらゆる場合に前人未踏の勇敢な行動をとつてゐる。從來の軍閥の首領と比較すれば格段の相違がある。私は張作霖が北京へ行く場合の物々しい汽車を見て驚嘆した事がある。列車の各部に大砲があつた。そして張の乘つてゐる車の兩側には夥しい機關銃が備へ付けられてあつた。呉佩孚などでも同樣である。軍閥のうちでも比較的進歩的な頭を持つてゐる孫傳芳などでさへ、その南京にゐる時は七重、十重の軍隊の垣に衞られてゐるさうである。そこへ行けば蔣介石の態度は變つてゐる。彼は或る都市を占領する。彼の入城に際して一切の警護を連れない。民衆歡呼の中に、民衆にすれすれになつて歩みを進める。最近（一月十七日）の例は九江入りの時である。彼は隨兵の一人も從へなかつた。そしてロシア顧問七名、支那の幕僚十名、ただそれだけで悠々市中を練りまはした。停車場から汽船長安に乘るまで、狹い市中に彼は苦力の體に時々接觸しながら、何等の不安も感ぜぬといふ調子であつた。歡迎の民衆に向つて軍事顧問ガロン將軍は支那語で挨拶した。蔣介石は熱意ある言葉で、南昌入りの時と同樣な演說を試みた。

『國民革命の第一過程は三年後に來る。三年後に起る日英戰爭、その時が國民革命完成の時である。民衆よ、我々の唱ふる主義に共鳴し、靜かに時機の到來を待て！』

蔣の短かい演說に民衆は熱狂した。歡迎の旗は九江全市を埋め、殆んど國祭日のやうな熱狂振を示したが、蔣の身邊には何等の不吉な事故も起らなかつた。この事實が、蔣介石にとつて何よりの强みである。

六　蔣の思想

數日前の新聞には、蔣はボローヂンなどを逮捕するかも知れないといふ支那電報が現はれたが、それは蔣の眞意を知らぬもののの想像に過ぎないと私は思ふ。現在の國民政府は廣東から長江筋までの各省を支配し、餘り評判はよくないが軍費を盛んに出して財政的にも相當の根强さを持つやうになつてゐる。しかし、三年前、國民黨苦難の際に受けたロシアの精神的、物質的援は可なり大きいものであつた。その有難さを最もよく知つてゐるものは蔣介石である。しかも彼は信義に篤い人物である。今になつて、露骨に露人排除の行動に出るやうな人物ではない。彼は『ボーさん、ボーさん』と言つて、親のやうな親みと、師に對する尊敬をもつてボローヂンに接してゐるさうである。彼はボローヂンから種々つぎ込まれてゐるが共産主義者ではない。ボローヂンもまた現在の支那に共産主義を行はんとするやうな野暮な男ではない。蔣介石はどこまでも支那の愛國者である。そして孫文の三民主義の繼承者である。彼は前述の米誌に三民主義を解說して――三民主義とはナショナリズム、ソシアリズム及びデモクラシーの合體である――と說いてゐる。然し、私は蔣に對していろ〳〵と思想的にその抱負を檢討するのは無理な話ではあるまいかと思ふ。孫文の三民主義なども、蔣介石の心にはさほど深く咀嚼されてゐないやうな氣持さへする。彼は武人である。若き純な武人である。そして愛國者である。そこに彼の强みがあり、現在のやうな花々しい効果をあげたものであると思はれる。文豪エッチ・ジー・ウエルス氏は最近長文の『支那事局論』を發表した。そして『現在において世界の歴史を變革しつつあるは支那である』と喝破し、大要次のやうな說を吐いてゐる。

『支那の現狀を眺めて最も注目せねばならぬ事は、支那改造の大事業が決して一人の偉大なる人物の仕事でないといふ事である。――ナポレオン式の豪傑はロシアにも支那にも現はれない。これが新らしき時代の姿である。英雄豪傑の半ば冒險的な大業といふものは最早過去の遺物に過ぎない。――支那の國民黨政府といふものはモナーキーでもない。獨裁政治でもない。アメリカやフランスの如き共和政治でもない。――ロシアの革命運動は第一に社會組織の革新を目標としたものであつた。その次にロシア人の幸福といふものが考慮されたのである。しかし支那の國民黨は初めから『支那人の爲の支那』を高唱してゐる。私有財產の傳統などは充分に認めて、敢て冒さないのを原則としてゐる。どこまでも人民本位であ

り、人間の幸福を目ざしてゐる事が、國民革命運動の特質である』云々

これも一種の見方である。ウエルスは蔣介石をストロング・マンとしない。英雄扱ひにしない。どこまでも國民黨といふ堅固な、近代的な組織の力が新らしき支那を作りつゝあるものと解してゐる。しかしウエルスの解釋はやや、自己本位の見方に陥つたものではあるまいか。國民政府（共產黨も抱擁したる）の組織は强大なものであるが、蔣介石といふ新らしき武人の出現も決して輕視してはならないものである。一種の英雄的存在が支那人の心を異常に捕へる事も考へねばならない。武裝せず、悠々として民衆の前に進み得る、ほとんど支那歷史あつて以來の武人ともいふべき人物の出現に目をみはらねばならぬ。秩序整然たる日本においては平凡な大臣の出入にさへ、物々しい警戒を行ふのではないか。

蔣介石は『日英戰爭が近く起る』とか、『我等の敵は軍閥と日英の帝國主義だ』とか、『我等の眞の目的は世界革命にある』とか、『列國は我々を承認しなくてもいい。我々の方から頼まなくても、列國が止むなく我々の膝下に服するであらう』とか、いろいろのことを公言してゐる。しかし實際の彼は、それほど日本を憎んでもゐないし、世界革命などいふ大なる抱負を抱いてゐるのではないらしい。方便の爲にいろいろと大言壯語する。そしてその大言壯語が非常に効果的であるのが支那の特色である。蔣介石や革命政府、或はボローヂンなどの壯語に餘り怒つたり、驚ろいたりしない事である。そして熱心に支那の推移を見つめる事である。

七　蔣介石の强味と弱味

蔣介石の率ゐてゐる青年學士軍を見るがいい。何といふ壯烈な姿であるか。普通の支那人とはまるで異つたやうな顔付である。私はその寫眞を見て白虎隊を聯想した。飯盛山に立籠つた白虎隊のやうな決死的な氣分が、何れの顔にも現はれてゐた。私がこの話をすると、最近支那歸りの人は次のやうに言つた。

『國民革命軍は傳令の末に至るまで革命の精神に燃えてゐます。そして支那革命の事業を尊い宗教的の大業のやうに考へてゐます』

だから彼等は强いのである。米國の一記者も或時蔣介石に次のやうに問ふた事がある。

『馮玉祥はどんなものであるか』

すると蔣は言下に答へた。

『馮玉祥を知るならば馮玉祥の軍隊を知らねばならぬ。どん

な人間が軍隊を指揮してゐるかといふ事を知るよりも、どんな人間が軍隊そのものを構成してゐるかを見極める事が重要である」

こんな風に蔣介石はクリスチアン・ゼネラル馮玉祥をさへ問題にしてゐない。いはんや、張作霖、其他北方軍閥の軍隊などを意に止めてゐない。彼はどこまでも自己の軍隊を誇り、自己の軍隊に信賴してゐる。彼の絶大の強味はそこにある。そして今後、更に支那を風靡する如き活躍を演ずるかも知れない。

しかし、こうした強味を持つ一方、彼には一つの弱味がある。それは共産黨との軋轢であり、一つは軍部内の勢力争ひである。これに就て詳述する餘裕はないが、彼の武力的勢力が増大すればするほどこの内部的の危險も增大しつゝある。そして彼の性癖が極めて短氣であること、極端に潔癖である事も彼にとつて意外な破綻を招く結果になるかも知れない。幸にして現在まではさほどのボロを出さぬやうであるが、手鼻をかます、唾をはかす、手紙に一字でも誤字があれば、速座に破棄して讀む事を欲しないほどの彼の性癖には相當危險の慮があるやうである。

八　支那革命秘話

彼は日本に對して心からなる好意を持つてゐる。アジアの將來は日本と支那の提携による外はないと述べた事も屢々である。

しかしながら彼が黄埔の軍官學校時代から多數の朝鮮學生を養成した事を一部の日本人から非常に批難された事がある。それについて彼は次のやうに辯明してゐる。

『それは朝鮮の獨立を計るなどいふ大それた目的の爲ではない。或は多數の鮮人學生の中にはそんな考へを抱いてゐるものもあるかも知れないが、それは私の關せざる處である。朝鮮人は元來、小才子的で、利巧で、いろ〳〵の仕事を手傳はせるのにまことに具合がいい。だから、國民政府でも鮮人を使用してゐるが、全く、便宜上の問題で、それ以上の考へは毛頭ない』

これは蔣の告白を信じていいものと思ふ。

最後に私は支那革命秘話とも稱すべき最近の蔣介石對孫傳芳の秘密交渉事件を記したい。これは日本人のうちで知る者はごく〳〵少數のやうである。そして、支那革命の道程において今後も時々起りさうな問題であるから、可なり注目すべき事實であると思ふ。

今、革命軍に攻め寄せられて、武運拙なく日本へ亡命說まで

傳へられてゐる孫傳芳は、支那軍閥のうちでも比較的進步したものである。孫傳芳自身も、それから孫の軍隊も――。そして最も早く排英運動、愛國運動の必要を力說してゐたのが孫傳芳であつた。

ついこの程の事である。孫傳芳から蔣介石に支那一流の妥協を申し込んだ。それに對して蔣介石の答へが振つてゐる。

『第一は孫君も國民政府の中央委員となること。それから、私（蔣）が民衆の爲に、朝は早く夜は晩くまで傳票で自働車に乘つて働く事を認むること。孫氏の部下は正規の軍隊及び土匪軍とも同時に解散し、國民革命軍の組織に改變すること。それならばいつでも妥協しやう』

これに對して孫傳芳側からは國民革命の主義には贊成するが、孫自身の名譽地位は棄てられない。そして、國民政府の中に共產黨員が最後の一人でもある間は孫は國民軍に入るわけには參らぬと申し出た。

それに對して蔣介石は

『然らば誰々を共產黨員と認めるか』と反問した。

『それは判らぬ』

といふのが孫傳芳の答へであつた。そして、世界をあつと言はせさうな蔣對孫の妥協は不調に終つた。妥協が無事に成立すれば、革命軍はわざと一回だけ孫傳芳に勝を讓つて面目を立たせ、その上で改めて孫傳芳を革命軍中に迎へ、上海其他における、排英運動の共同宣言を發表する筈になつてゐたさうである。革命運動の樂屋裏をのぞけばこんな面白い場面がある。これだから支那に對する私達の興味は津々として盡きないのである。（終）

新東京生活案内記

（一）江戸前料理　舌頭太平樂

小野賢一郎

上野山下の清凌亭で鮟鱇の鍋をつッついてたら、一靑年記者はあんこうの肉と豆腐とウドばかり食つてゐたッけ。彼にはとろりと舌にのる皮やアラはむさきものに思へたに違ひなし。ト同時にキモや皮や骨ばかり食はせるケチな料理屋に見えたにちがひない。

有樂町の花の茶屋に大阪の客をつれていつた。

「おひるはドコで召上りました」

「本鄉バアです、トンカツは大きくて安いですなア」

飛んだ客を伴れて來たことを悔ゐたがモウ刺身が出はじめた。食事がすんで「すぐお宿ですか」と聞いたら「エ、少し早いから柳原へいつて出來合ひの洋服と外套を買ひませう」といつた。この夜、ゾツとして風邪を引いた。

○

清凌亭は死んだ和田垣謙三老人に案内されたのが初めてだつた。うづみの御飯や胡麻豆腐などが看板らしい。うづみめしといつても豆腐と海苔とお汁が飯にかけてあるだけのことだ、しかしうまい、朱の橋の擬寶子が入口にあつて不忍の蓮の眺めもあり本鄉台の夕日もいゝが上野山下としては一寸食へた、ソレが藝者がはいるやうになつてからは豆腐の忍川の傳をそこなさ

ゝ食ひ物はまづくなつた、うづみ飯の飯がべた〳〵して豆腐と溶けあひかけてはモウ米の擬貨子もおしまひだ。但し御繁昌――あんころの肉のみ食ふ人種によつて。乃至藝者の酌によつて。

○

芝の美食倶樂部の昔は言はず、有樂町の花の茶屋、正に前茶は頂戴する。大繁昌、萬歳、主人有福、鼻高々、その鼻の高さがお客の胸を惡くするのかしないのか、ソコは御贔負びいきのお氣持次第だ。恰もこゝの本家の觀ある赤坂山王台の星ケ岡茶寮の主人北大路魯卿先生に似も似たり、魯先生は書、篆刻、陶器何でも御座れの才人、堂々として天下の士のやうにいふ人もあるが尊大の見本のやうにいふ人もあり、會員組織の會員になつて光榮がる人もあれば「あれは三流の料理だ」とケナす人もあり、世はさま〳〵だがサテ「花の茶屋」――魯先生の豪威には迚も及ばないがお客の胸先三寸、サテ奈何。

器物も盆栽も床の物も頂戴しますが燒物煮物を盛るアノ西洋皿式ヤキモノはいかゞです。ぶちこわし、正に器物の一切をぶちこわす矣。

「おい〳〵、濤溌亭の事をいふな、根岸の笹の雪だつて藝者がはいるンだよ。昔は吉原のかへり、笹の雪の豆腐で一ぱい、[illegible]潮のかへり、豆腐で一ぱい、雪見のかへり、豆腐で一ぱい――といふところが今ぢや安來節です。あの豆腐はおかみさんの顏と共に老熟したかもしれませんがエッサッサぢや笹の雪も食へません。誰かの小説のモデルになつた松本幸四郎の弟子の唐人さん、たしか愛蘭生れと思つてゐますが髪の毛の赤い爲に松英男といふ藝名をもつて藤間の踊くらいやつた男ですが、とう〳〵大阪で橋の上から身を投げて死んだ――その唐人さんですら笹の雪三十八皿、トいつても猪口の大きなのに豆腐がのつかつてるのです、マア凡人はせい〳〵十皿位だが――毛色目色の變つた人ですら喜ぶ笹の雪、それが今ぢやエッサッサです、それに昔は笹の雪の海苔は呑めたもんです、海苔場を自家用としてもつてゐたンです、いゝ海苔でしたがね、海苔も今ぢやエッサッサでせうかね」

○

「新橋の新富ずしはいかゞです」
「すてき、正に我意を得たり、ですがね」
「ですがね――がどうしたンです」
「ですがね、あのをやぢセルの袴なんか穿いて、一々御託宣が

あるンです、ゑびー一つ、廿五錢は驚きませんが文句つきがイケないといふンです」

「はゝあ、新橋の江戸銀の傳ですな」

「江戸銀は新橋界隈ぢやうまいもの屋ぢやありませんか、私はヒイキですよ。腰かけてやるには江戸銀乃至ちとせを以て新橋驛界隈の尤としてますがね」

「いや、私のいふのは江戸銀のをやぢやをかみが、だん／＼成功――つまり儲かるンですな、そして金庫を据えてみたり金歯を殖やしたり金時計がブラ／＼するやうになると客の氣持が變る――といふことを言ひたかつたんです」

「ハヽン、するど銀座の鉢巻岡田はドウですかな、江戸銀式でウメエモノヲクワシテヤルといふ意氣込みはおンなじぢやありませんか」

「岡田ですか、アレはアレでいゝンです。不動貯金を一寸しかけてヤメたとこなンかうれしいですよ。夫婦とも芝居狂、成田の不動狂、モ一つ夫婦つながり歩く狂ですがアンナ江戸末期的夫婦が銀ブラの中にあるのは愉快ですね」

「あの茶わんは？」

「七八種のタネを入れるらしいがによンぼ（敢て女房といはず）に知らさない位をやぢ御秘傳らしい。しかし食ひ物、酒もよしとして夫婦仲のいゝ事と、時々チヨチ、チと睨み合ふ時にお客として居合はすれば更に妙、をやぢは勳八等にして左右衛門に似たり、によンぼはサテ誰にしようか、コイツ辻淵にしやべると鉢巻がこわい」

○

獸阿彌物の臺辭（せりふ）に出てる本所の小大橋（舞臺ではコテエキヨウと聞ゆ）兩國驛の近くだつたがコノ樽の腰掛、相當にやつてゐたが震災後とう／＼あとなし。

「坊主しやも」震災後も依然として舊態を存す。こゝの「はんだい」うまし。「いれごみ」も依然、但しおかん稍駄目なり。

○

「ヅナベ」敢て解を要せぬやうだが「ナマヅナベ」の略、須田町「いく榮」御繁昌

○

東京で「ふぐ」と濁り關西で「ふく」と澄む。東京では近海ものゝ小さなのを煮て「しようさい」といふ、水天宮のカネ尚無論煮る一方だがうまし、昔も今も變らないところうれし。下

關から移入するもの、數寄屋橋のさくま、歌舞伎座前のなるみ等、等、等、いろ〳〵あるが日本橋食傷新道の重亭は下關の材料を自家で料理してゐる。この重亭を發見して最初銚子の河豚で料理させたのは死んだ力士九州山であつた。ふぐ百種、眞のうまい河豚はなか〳〵素人にはわからぬ、河豚を友とする私としていろ〳〵說があるがこゝでは止す。駄句一二。

河豚酒や一碗にして生き仁王

河豚食うや富士に夕雲かゝる夕

○

「H君がね、ゆふべ憤慨するンです。N氏に槇町の春日に招待されたンですツて。そのかへり私ンとこへ來ましてね、Nの奴、あンなチヤチなとこへ招待しやがつてツと大變なンです。春日はソレ御承知の一人前十圓の御料理、あの主人は經歷も面白い人ですし庖丁も東京としては茶趣味の興都庵と共に定評があるンでせう。ところがH君の事です、料理は出すだけ、酒はおちようしを置いてゆくだけ、一ぱいだツてお酌しないものですからモダンボーイには不快だつたらうと思ひます、いかに春日と雖もモダンボーイHにかゝつては銀座のアルプスの分量の多きに及ばず、瀧の芳醇だツて纖手なくンば村時雨に及ばずツてわけでね」

○

銀座の天金にいつた大阪もの「おいしうおすな、この天ぷらのころもはドウどす、モダンガールの外套のやうどすな」

東京府下の青年「銀座の茂竹の天ぷら〳〵といふからいつてみたが何でい。衣はカンに至り袖ワンに至る……衣の奴ドツかへふツ飛んでるね」

老人「種のいゝのにはうすくとも衣がしつくりしてゐやす」

青年「一寸、をやぢ、天金の漬物は素敵だな、天ぷらより漬物が中幕だぜ」

○

三十間堀の支那料理芳蘭亭にいつて、定食を食つた後、シユウマイとソバを出さなかつたと怒つた客があります。シユウマイに燒ソバがないと支那料理を食つた氣がしないと見えます。

○

食通なンださうですが、柳光亭にいつて鷄の骨の中の髓を食

はせろといつた文士があります。大川ぞひでは「くりか」も一寸食はせましたが、こゝも藝者御入来以来御縁がなくなりました。濱町の浪速家はいかゞです。いゝぢやありませんか。天ぷら花長は——たいした背譜をしたもンですね、御座敷天ぷらでウントこさと儲けたらしいが今日只今の實用新案とやらのアノ揚げ台はドウです。大阪は文樂座の床といふところ。をやぢが乗つかつて一席揚げて客の前へ出す、電氣のスイッチを切るとクルりと廻り舞臺で、今度は後ろの方にお待ち兼ねの客へまた一席、油の煙に卷かうといふ——をやぢの背景は金屛風であり、をやぢの反對側は大鏡で盆栽が置いてあるといふ道具立です。うまい、まづい——ですか。ソコはソレ、大道具大仕掛といふところ、それに揚げ立は大ていうまいものです。

ほんとうに、うまい天ぷらは伊井蓉峰君にでも聞いてみませう。

○

淺草の金田は相變らずのきれいごとの鳥鍋。落葉の庭も結構ですが、折角しやもをいゝ氣で食つてゐるのに、裏の方で鷄がしめらるゝ悲鳴、それに夕方ボーンと鐘なんか打込まれては正

に諸行無常てッやつ。

○

公園へぬけ道の「すし清」が一日に二十五俵の米を握るといふことですが、本當でせうが。——さうかもしれませんよ、何しろこゝのすしは大きいところが身上ですからな。米は何等米でも丼に山盛りがうける何とか食堂の全盛の今日ですから、すし清の握りが大きいのは當然で、二十五俵の繁昌も當然でせう。

○

すし屋のおやぢの爪に垢がたまつてはゐませんか。すし屋ののれんで紺の匂ふ家は今でもありますか。

○

年々の竹葉亭の團扇かな

あの竹の繪が刷られた團扇の好みも連綿としてつゞいてゐますが、朝早く新富町の竹葉の門前で、何百の鰻から二三びき本筋ものをひつこぬいてゐるおやぢの姿も連綿としてゐませう。それにその昔講釋家共一を家の抱え同然にして、その弟子、また

その弟子と畫家が親に竹の葉をかきつゞけたのも連綿としてゐませう。何はともあれうたぎは竹葉ですが矢張昭和二年ですな、「株式會社竹葉亭」で主人が頭取なんださうです。株主には特遇があるんださうで、株式會社なりやこそチエンストアがあちこちにあるわけ　そして本店以上に銀座、丸の内支店が利益をあげるわけ。

竹葉亭本店が震災で焼けたのは御同様さまに御氣の毒だが、多くの繪畫が焼失したのは、「小美術館竹葉亭」として惜しかつた。

○

山谷の重箱のすつぽん煮は近頃どうか知らんが、震災で俳人其角の長い手紙は焼けたらうな。山谷としいへば八百善と江戸からの名物も今ぢや築地で御開業、さはさり乍ら昔の味、今はありやなし。焼けのこつた土藏の重寳は贅立で拝見したが、近頃はいかならん。二三度いつたくらゐだから口を控へませう。

赤坂は三河屋、先代三河屋の遺族を震災の時、命がけで救つたといふので板場が貰つたこの看板、お座敷三四間、手堅くやつてゐるが、庖丁未だ衰へず、兎角板場の前をお客に通らせるほどの心がけの家、大ていうまきもの。

○

さて〱、おつぎは支那料理より花月、築地大待合の食べ物とり合せより丸ビルの食堂、西洋料理とまゐりたいところだが、口は禍の門、少々手をくれの氣味はあるが、こゝいらで口ふさぎに、一ぱい入れませう。

(二)東都名物屋臺ずし

―「口中が曇らぬ鏡」―

小　島　政　二　郎

断つて置くが、僕は食しん坊ではあるが、決して食通ではない。その上、通り一ぺんの漫食家で、特に壽司好きと云ふので

もない。いやに燈明ばかり輝くが、昔と違つて、「あすこが旨いよ。」と云はれても、「さうか。」とばかり、一里を遠しとせずに駈け着ける熱心さも、近頃は頓に消耗した。かてゝ加へて、困ることに、壽司屋なんと云ふものは、大抵一區に一軒ぐらゐづつは旨く食はせる店があるものだ。それを知らずに、「あすこが旨い、ここがまづい」の品隲は憚り多い、とホヽ敬つて申す。現に、十五區どころか、郊外の目白――戸田子爵邸の横に、名は忘れたが、旨く食はす家があつた。今でもあるかどうか詳かにしないのを殘念に思ふが。

稍古い話になるが、三宅やす子さんの夫君故恒方博士と或料理屋で落ち合つて、いろ〳〵旨い物屋の話を仕合つた時、壽司の話が出たら、やつぱり京橋の幸壽司かなと云はれた。誰も不服はあるまいと思ふ。

あの通りを、中橋廣小路、通三丁目と歩いて來ると、山本山の少し手前の露地の奥に、吉野鮨と云ふ家がある。こゝもなかなか食はせる。まだ學生時分、三宅周太郎がこの近くに下宿をしてゐて發見した家で、よく御馳走になつた。今と違つて、その頃は出前專門と云つてもいゝ店構へで、暖簾をくゞつてはひると、すぐ足許にテーブルが一脚置いてあつたきりだつた。目の前に握り場があつて、職人の頭の上の電話がしつきりなしに鳴つてゐた。三宅は、どこへ掛けるのか、ここの電話をよく借りたらしい。彼は壽司の味を褒めるのと一緒に、「あすこの家の人は氣が利いてゐるよ。僕がちよいと電話を拜借と云つて機械にかゝると、きまつて立つて姿を消してくれるんだ。苦勞人だあね。」と推奬して措かなかつた。退いて貰つていそ〳〵と、ニコつく顏を一生懸命に引き締めながら、手短に打ち合せを濟ますやうな相手を持つてゐなかつた當時の僕にとつて、その言葉は、どんなに戀愛の空想を刺戟し、どんなに羨望の情を湧き立たせたことであらう。――馬鹿だね俺も。

まだ今の鴻の巣が鎧橋の河岸にあつた頃、そこはフランスの象徴詩派を崇拜するわが若き詩人等にとつて、唯一の巴里風のカッフェであつた。北原白秋氏の「思ひ出」の會もこゝで催された。歳若くして文壇を席捲し、鬼才の名を恣にした谷崎潤一郎氏もよくそこへ姿を現した。その外、永井荷風氏を初めとして、「三田文學」「スバル」等に據る高踏派を以つて自ら任じてゐた若き時代の云はゞそこが倶樂部だつた。それを遠くから眺めてゐると、當時の文學青年だつた僕達の目には、そのメーゾン鴻の巣は、とりもなほさずヴエルレーンやジヤン・モレアスが屢々酔ッぱらつたり詩の朗讀を催したりしたと云ふ巴里のカ

ツフエ里猫(シャノワール)だつた。さう云ふ新らしい感覺詩人の一人に木下杢太郎氏があつて、「河岸の夜」や「荒布橋」など云ふ作品によつて、あの邊一帶の風物に、白金(はくきん)の霧を振り掛けて見せてくれた。僕達は氏によつて、初めて死んだ風景を生きた風景にモデファイして見ることを教へられたのだ。夜になるとは、セーヌ河の縁を歩くやうな氣持で河岸通りへ散歩に出て、彼等の詩の一部分を形成してゐた江戸情調の誘ふがまゝに、所謂河岸の立ち食をして廻つた。さうして「壽司は魚河岸に限る」などといゐたものだ。しかし、殘念なことに、その頃の味の記憶が今舌に殘つてゐない。その後病的にチブスの傳染を恐れた結果、一切立ち食を廢してしまつたので、東都名物舊魚河岸の鮨の味をあげつらふことの出來ないのは遺憾に堪へない。

立ち食で思ひ出したが、銀座の横町にも隨分澤山な屋臺店が暖簾を垂れてゐる。あの中に、もと資生堂の向う横町に「菊さん」と云ふ江戸ツ子の屋臺があつた。酒ツくらひで、少し遲く寄ると、うしろの緣臺に大の字なりに踏ン反り返つてしまつてゐて、いくら賴んでも食べさせてくれなかつた。壽司の能書は、僕は大抵ここで教へ込まれた。惜しいことに、もう故人になつてしまつた。

板新道(いたじんみち)の近くに、「小その」と云ふ家のあることを教へてくれたのは、神田伯龍だつた。築地小劇場の人達が大分贔屓にしてゐた。しかし、今は代が變つた筈だ。

素に戻つて、日本橋から神田へ出やう。外神田(そとかんだ)にある僕の家の親類では、壽司と云ふと、下谷の松山壽司から取り寄せてゐるが、このことはやがて神田に碌な壽司屋がないことを證明するのかも知れない。但し僕は知らない。

松山壽司は隨分老舗だ。昔の格はすつかり崩してしまつたが、それでも下谷ではまづここだらう。飯の焚き方にひどく出來不出來があるが、握りの丁寧なのが氣持がよい。おばケ横町の角に、「みかめ」と云ふ店が出來て、松山の獨占であつたあの邊一帶の待合と云ふいゝお得意を大分蠶食したと聞いてゐる。店へ食べに行つてゐると、主人が口八ケ釜しく職人や下働に小言ばかり云つてゐるのが耳に附いて仕方がない。

壽司と云へば與兵衛——貴つたものだ。中學生の頃まで、[illegible]場所を見に行く樂しみのうちには、ここで食べることも含まれてゐた。晩飯に、藥研堀の鳥安へ連れて行かれれば、もう云ふところはなかつた。しかし、長ずるに從つて、與兵衛の壽司が僕は嫌ひになつた。あのちよいと甘みのあるやうな味が氣に入らないのだ。どうも技巧が勝つて、ジワ〱と出るべき味が[illegible]されてゐると思ふ。

水木京太の、奥さんが笹卷が好きで、よくお相伴にあづかるが、僕は餘り好きではない。酢のウンと利いたのが好きな人には氣に入るに違ひない。が、鮨とか赤貝とかのないのが僕には寂しい。但し遠い遠足の日のことなどを思ひ出して、時ならず懷しさの胸を過るのは惡くない笹卷情調だ。場所の關係上、馳走になるのはすべて虎の門のらしいが、竈河岸に本店がある。神田の淡路町の通りにも「毛拔壽司」の看板が上つてゐる。

　山の手へ飛んで、神樂坂の下に紀の善と云ふこれも古い家があることを書き洩しては惡からう。麻布の飯倉片町の停留場の近くに、鳴門と云ふ家がある。ここの壽司は、下町流のアツサリした握りに堪能した人達の間に大分愛好者が多い。麻布に住まいする方々には失禮な云ひ分だが、狸穴から向うに、この程度に食べさせる家があらうとは實際夢にも思はなかつた。南部修太郎にさう云つたら、馬鹿にして貰ふまい、數へ立てれば、まだ大和田の鰻、興津庵の茶料理、と來た。成程、さう云はれれば、稻荷壽司の「おつな」と云ふ家も龍土町にあつたつけ。このは、皮が裏返しになつてゐて、見た目に肌理こまやかで綺麗ださうだが、お稻荷さんと云ふ奴、どうもあの皮膚の色が貧乏世帶を思はせるので好きになれない。

「本所に過ぎたるものが二つあり」とよく講釋師が云ふが、壽司に於る四谷が正にそれである。二つではないが、一軒素晴らしく過ぎたのがある。見附から、新宿の方へ半丁も歩いて行くと、左側で「みさご」と云ふ家――。ここは誰を連れて行つても褒めるから、確に旨いのだと信じてゐる。

　小林きよ子さんは、大地震の前後には麴町の下二番町に住んでゐた。あの大騷動が稍鎭まつた頃、頻にお壽司が食べたくつて仕方がないままに、見附の方へ探しに行つて、偶然「みさご」へはひられた。旨い。――が、やはり食べ物の點では四谷を輕蔑してゐたのだらう、地震の直後であんまり旨いものを口にしなかつたせゐで、それでこんなに旨く感じたのだらうと思つて歸つて來た。がその後二度目に食べに行つた時も、旨かつた。三度食べに行つても、四度食べに行つても、（いや、一度ぐらゐは家へ取つたのかな）旨い。そこで初めて、シチュエーションによる旨さではなくて、獨立的に美味を持つてゐることを知り、痛に敬意を表してゐたさうだ。

　慶應義塾の某教授の如きも偶然通りがゝりに試食してコロリと參つて、東京第一の壽司家を發見したとばかりに翌日食堂で再征の有志を募つてゐたのを見たことがある。傍から慶應第一の美食家西村富三郎氏が、素知らぬ顏をしてからかつてゐた。

水上瀧太郎氏のところへ遊びに行くと、よくここのお壽司な

御馳走になる。が、同時に、酒客である氏は「みさご」の酒のいゝことを褒めるのを忘れない。實際、珊樂は壽司を食べずに、刺身かなんかで、飲んでゐる。それはいゝが、奉公人が無精を極め込んで盃も湯呑も一緒コタに洗ふことがあるらしく、時時酒の匂がプーンと來て茶の飲めないことがある。壁に瑕とでも申さうか。

波多野承五郎氏の「古渓隨筆」を讀むと「鮨屋に訊くと、一番最初に玉子燒の鮨を食ふ人は鮨通だと認める。何となれば食味的に最も多く鮨屋に依つて力を盡されてあるのだから、先づ以て之を味ひ、鮨屋の技倆を試験すべき筈だからと言ふ」とあるが、僕は海苔卷を食べて見れば、大抵そこの壽司の旨いまづいは分ると思つてゐる。さう云ふ點から云つて、以上僕の食べた壽司屋のうち「みさご」程海苔の吟味してある家は一軒もない。一口アングリやると、春淺い香が鼻を打つて來る……

但しこの家は一時人に店を讓つて僕等を失望させたが、近年再び素の主人が姿を現してゐる。喜ぶべき現象だ。一言餘計なお世話を燒けば、この家では上等の方を注文されるがいゝ。但し海苔と玉子とだけは、普通の握りにして貰ふといゝ。

まづ僕の知つてゐる壽司屋と云へば、あらく\こんなものだ。

(三) 帝都八大劇場案内

三宅周太郎

さう、昨年一昨年の一月初頭であつた。新成當時の歌舞伎座の二階正面で私は芝居を見てゐた。と、幕間になると私の隣へ松竹合名社長の大谷氏がふいと見えた。おあいそのいい方の氏ではあるが、私などの所へわざわざ見えるのはどちらかと云ふと珍しい方だ。私が挨拶をするかしない中に、

「ね、三宅さん、この小屋を見て下さい。やつとこしらへあげましたよ。立派に出來たと皆さんが仰有つて下さいますが、これは私の涙で出來上つた小屋です。とても當り前の商賣つ氣

だけではこんなことは出來ません。私も芝居が好きと云ふ奴にとつつかれてゐるので、どうにかこしらへあげたのです。しかし全くこれまでにしたのは私の涙で仕あげたからですよ。これは私の涙のかたまりです。」

いづれかと云ふと訥辯な方の氏ではあるが、比較的流暢に私に云ふのである。――無論、新築の挨拶の積りもあらうが、始終、芝居では敵役の憎まれ口ばかりきく私であるだけに、多少共氏の心境小說的に、新歌舞伎座の生ひ立ちを私に語られたわけである。

が、私はこの言葉を今でも言葉通りに眞面目に、そして意味深く聞いてゐる。時として、用の序など歌舞伎座の前を通つたりして、ふとあの巨大な新劇場を眺めて、大谷氏云ふ所の涙のかたまりと、一寸重々しい氣持でその建築を見あげることさへある。

實際、震災で劇場を全部なくして、しかも、何年とたたない中に、あのでかいものをこしらへあげる。それも失禮ながらありあまる金を持つての仕事でないだけに「涙のかたまり」は決して誇張でないと思ふ。勿論、あれだけの資金を投じながら、相手が一かバチかの水ものの芝居であるだけに、ビジネスたるにはあまりに非實業的な企てであらう。私もこれが好きと云ふ奴にとりつかれても事實の言葉とは聞かれない。――歌舞伎座と云ふと私は時々この大谷氏の心境物語を思ひ出すのである。

百貨店の松屋が急に銀座へ出て來て、あれだけの大擴張をひよいとやつてのけた。それをあつと云つてゐたある新聞の家庭流行記事專門の記者があつた。成程、さう聞くとさうだ。が、それと同じことが云へるのは正にこの歌舞伎座である。

何と云つても百貨店の松屋なみによく出來てゐるのは爭はれない。松屋へ買ひ物でなく、食堂を目的には入つた序など、あの六階から下をのぞいて見る。丸で映畫の背景なみに、下の空地をぞろ〳〵とお客がうごめいてゐるのは流石に壯觀である。同様に、歌舞伎座の三階へ上つて下を見て見給へ。丁度松屋の六階から見下す感じに、人間が蝟集してゐる。昔、內藤鳴雪の句か何かに「三千の俳の衣や秋の風」と云ふのがあつた。それ程清澄でないにしても、滿員の一夕歌舞伎座が容れる所の三千の觀衆を、三階から見下して見る圖は五右衛門ではないが、絕景かな絕景かなである。

それに、歌舞伎座は器の大以外、その大の器をどこから見ても割にいびつでなく見られる點に「よく〳〵出來てゐる」と思はず甲をぬがせられる。ある時、二階桟敷の一番終りか[illegible]と云

やうな場席で見物したが、よく見えた。芝居の棧敷やうづらのケツ、は見にくいのは既定の事實だ。大阪など中流の芝居ではこれを三等席程度に引き下げてゐるのでも分る位だ。が、よく見えた。兎角歌舞伎座の芝居の惡口を書くと云つて怒りを買ひ易い私も、それには甲をぬぐ。歌舞伎座は劇場建築として甚し今の所かけ値なく日本一である。それに昔からの傳統で二階正面以外は、夏も割に風がよく通す。ブルジョアの慣例は、夏の歌舞伎座のうづらか棧敷を買つて觀劇する「汗知らず」の觀樂がその一つになつてゐる筈である。

唯、いけないのは食ひ物がまづい點だ。おまけに高い方だから猶更いけない。具體的な憎まれ口をきくと、地下室の吉喜の一圓三十錢也の日本料理の定食は恐しくまづい。寧ろ別館辨松の一圓辨當が優る。尤も、佳作は別館二階の支那料理であの一圓五十錢と二圓の定食は結構である。私などそれにきめてゐる。も一つ我々甘黨だけの傑作、いや、帝都各劇場を通じて甘黨を喜ばせる傑作は、歌舞伎座の地下室、即ち右の吉喜の隣のおしるこである。御膳金十五錢也だが實に美味である。帝劇は食ひ物がうまいので推賞したいが、そこの十二錢也のおしるこより、僅か三錢の違ひで歌舞伎座の方がどんなにうまいか。私はいつもそれを樂しみに地下室へ下りてゆく。但し、うまいのはそこのうちだけで、三階にある方は多少劣ると思ふ。これを要するに東洋一と誇る歌舞伎座の特記すべき個性は、一、生ひ立ちの記で大谷氏の涙のかたまりであること、二、どこからもよく見えること、三、食ひ物がまづくて單に地下室のしるこだけが名人氣質を持つてゐることどもであらう。

外觀こそカーキ色でよくないが、新橋演舞場も亦、相當行き屆いた劇場である。唯、不思議にこの劇場は土間が見にくい。そして聲が聞えにくい。その癖、二階は一切そんな缺點がないのだ。その上、賣店と食堂とはこの上もなく豊富で、休憩室の完備など都下有數のものだ。聞けばあの通り大きくなくて、建築費は歌舞伎座同程度の百七十萬圓を費したとか。外見が惡くて中味がいいのはこの劇場のいつ迄もあきの來ない床しい個性の一である。が、見物席は常に萬全を期すなら、二階をとることであらう

海外文人逸話とも云ふべく、文豪バルザツクはコーヒー小説コーヒーコーヒー小説コーヒーがその一生であつたとか。つまり、コーヒーばかりのんで、小説ばかり書いてゐたのがバルザツクの一生のわけである。と、聞くにつけて、もし新橋演舞場へバルザツクをつれて來たら、多分、バルザツクは喜ぶだらうと思ふ。その理由は、ここのコーヒーが實にうまいからである。

先づ二階片隅の菊屋のコーヒーである。いつでも舌をやくやうにあつい。そしていつでも決して濃淡に變りがなくて同一の濃度でどろつとしてゐる。一體、劇場のコーヒー位浮氣なものはないと云へる位、うまかつたりまづかつたりする。それは幕間にどつと喫茶店へ客が押しかけて、一度にコーヒーを平げてしまつて、後は勝手に休止の狀態に返へるからだ。段々それは改良せられて來たが、大體に喫茶店がこみ合ふ幕間のコーヒーはまづく、すいてゐる幕間のコーヒーはうまいのが原則である。が、菊屋は一切そんな難がない。いつでも同じくあつくてうまい。しかも値段も十五錢程度だが、市中へ持ち出しても負けまい。不二屋の二十錢のコーヒーに匹敵し得る内容を持つてゐると思ふ。

下の精養軒のバアのコーヒーも菊屋に劣らぬ位にうまい。この二ケ所の喫茶店のコーヒーの如き、實に帝都の各劇場を通じて、どこにも見當らぬ美味贅澤低廉の傑作である。假りにもバザルツクが喜ぶだらうなどの無禮な空想を走らせ得る位、演舞場のコーヒーは劇場國の佳品である。それに菊屋でも精養軒でも一切がハイカラなのも一層あの美味を文學的にする。新橋演舞場の偉大な個性として世に紹介する所以である。

客扱ひの至れりつくせりは本郷座と、淺草松竹座とである。一つはそこには震災前の女給制度が殘つてゐて、前者は戸田某、後者は人も知る國木田獨歩未亡人がその主任として監督に當つてゐるからであらう。市村座の復活の出方のくりから紋々的紹介など女給だけにある苦もないが、多年の效で丁寧親切である。出方制度は賛成し兼ねるが、女給制度は強ち惡くない。注意を怠らなかつたら一つの特色となる筈である。

滑稽なのは本郷座の食堂だ。改修前は食堂が小さかつたが、今度は馬鹿に大きくなつた。二階の食堂の廣さなど、今は逆に都下の劇場中の雄なるものである。あの食堂で知人を搜すのに河向うの船頭を呼ぶ感じは、前の食堂で隣人との食器がカチカチふれ合つたのに、よくよくこりたからであらう。地震でこりた人が急に郊外生活を愛し出す感じである。この二座を共通して安心美味な食事は、二重の上等辨當（一圓三十錢）であらう。

一切特徴がないのは邦樂座だ。見物席が狹すぎるのなどは缺點でこそあれ、何等特色にならない。設備も出鱈目で食事の如き一切各劇場より粗惡である。喫茶店のコーヒーは飴湯の方に近い。經營者に人を得ないのであらうか。人があつても說を容れないのであらうか。今の中に具眼者が出ないと時勢にとり殘される心地さへする。

帝劇は芝居より食堂がいい。東洋軒の支那料理の如きは、市價よりも安い方で隨分美味である。夏あつかつたのにこりてか、今度は例の冷風器が出來て、夏も凉しくなつた。が、缺點は觀客席の三階が昔からだが恐しく見難い。四階を廢して三階にしてしまつたのも名だけで實が伴はない。兎に角帝劇はうまいものを食はしてくれる所と思つて行けば一切不平はないのである。唯、事務員の親切だけは多としたい。歌舞伎座など他山の石となすべきであらう。

市村座は急に昔のままの坐る小屋になつてしまつた。恐らく個性と云ふ點から見ると、一番個性はある。皆散髪でゐる中に、市村座だけはちよんまげを結つてゐる形だからである。が、かう云ふ特色はあまりにも深刻で、今の世に德川時代の制度がぴつたりしないのは致方のない次第である。

しかし、我々が一人で芝居を見る場合、ここに怪我の功名の場席がある。それは椅子席にすることだ。平土間の後にあるので見榮をはる人、或は、近眼の人にはむかない。が、一人で土間や棧敷にゐるのはかなりみづらいことだ。それだけに體裁こそ惡いが、右の椅子席にすれば場代も三圓五十錢程度に安い。それで隣近所に超然として見てゐられる。おまけに下へ毛布の足を入れる袋がつけてあるので思つたより寒くない。市村座はすべて德川時代だが、ここの僅かながら椅子席を作つた所に、やつと我々との接近を保つてゐると云つて誇張でない。

最後に、築地小劇場である。冬寒く夏暑いのを苦にする必要はない。市村座だつてそれだからだ。結局、螢の光り窓の雪で芝居を勉强するつもりで居れば、かう云ふバラツクも却つて奥床しい氣がする。

辨當は三十錢のライスカレーと、サンドウヰツチの外、何も出來ない。我々は昔木村屋のパンを持つて大入場で修業して來たのだ。それから見るとライスカレーを食つて、水を貰つてのんであの芝居を見るのは誠に世は昭和である。小さき築地の個性は、マチネーの九十九錢と云ふ場代と、そしてあのライスカレーでもあらうか。（完）

（四）都下映畫常設館

近藤經一

東京にある映畫常設館の案内を書くべし、といふのが、私に與へられた問題である。

×

そこで、先づ、諸君、諸君は、その東京に、一體幾つ位の映畫常設館があると思はるゝか？

恐らくは、その余りに多きに驚かるゝことであらうと、私は思ふ。

昭和二年版の「日本映畫事業總覽」によると、現在、東京府下に、二百二の映畫常設館がある。そして、その中の八王子、及青梅、立川等にある五館をのぞいた百九十七館といふものは、東京市内及び事實上、市内と目すべき近郊にあるのである。だから、東京市及びその近郊の人口を三百萬とすれば、その人々は、一萬五千人について一つの映畫常設館を持つてゐることになる。

此の比數は、世界に於ても、恐らくは、決して下位に在るものではあるまい、と思ふが、然し、我々が、此處に注意しなければならないことは、此の數多き東京の（獨り東京のみではない、日本中のといふべきであるが）映畫常設館の質は、支那、シアムは知らず、諸外國のそれに比して余りにも劣つてゐるといふことである。

事實、公平に云つて、現在の日本の映畫界を、外國の、少くともアメリカのそれに比較した場合、一番見劣りのするものは、監督でもなければ、俳優でもなければ、カメラマンでもなければ、スタヂオでもなければ、照明装置でもなければ、出來上つた商品でもなければ、此の映畫常設館そのものなのである。そして、私に、此の日本の映畫常設館の質が劣等であるといふことが、日本の映畫事業の進歩をさまたげてゐる最大の原

因であるといふことを――その理由を述べることは、少し長くもなるし、本稿としては横道すぎるから、略するが――此處に明言するとともに、何はともあれ、此の稿を一讀して下さつた諸君に、映畫事業發達の根柢は映畫常設館の改善に始められなければならないものだといふことを、それだけは、憶えておいて戴きたいのである。

×

さて、話が横道に行つたが、本道へかえる。

本當のことを云ふと、私は、此處に、日本に於ける映畫常設館の系統だとか、それからファースト・ラン・ハウス（所謂「封切館」といふ）とか、セカンド・ラン・ハウスとか、それ以上のものとかいふものに就て書いて、それを諸君の豫備知識として、先を書いてゆくといふ書き方をしたいのであるが、それは長くもなるし、それに、稍專門的で、或ひは多少退屈なものになるかとも思ふので、そんな專門的なことは一切ぬきにして、單刀直入に、その二百有余の常設館の中から、種類、系統に從つて、その代表的なものを幾つかづつ擧げるといふ簡單な書き方にしやうと思ふ。

さて、先づ西洋物を專門にしてやつてゐる館から始めるが、現在、かゝる館は、此の二百の中に僅か七八館を數へ得るにすぎない

その中の代表的なものは、淺草の帝國館と、新宿の武藏野館とである。そして、現在、日本に輸入される外國物の目星しいものは、東京に於ては、總て、此の二館の中のどちらかで封切されると云つていゝ。だから、此の二館にさえ注意をしてゐれば、外國物の一流のものは、決して見逃がさないことになる。

近頃、淺草に於て、稍帝國館の向ふを張り出した西洋物專門館に東京館がある。これはアメリカのパラマウント社の日本支社が直營するものであつて、主としてパラマウントの映畫を封切するのであるが、近頃及び將來とも、武藏野館と組んで他社の作品をも封切上映するらしいから、ともかく注目に値する。

同じくパラマウント社の直營する神田の南明座及び芝園橋の芝園館は、共に武藏野館で封切したものを、そのまゝ、その次の週に上映する、所謂セカンド、ラン、ハウスである。だから、武藏野館で、もし見そこなつたものがあつたら、その次の週中なら、此の二館の中のどちらかで見ることが出來るといふ譯だ。

帝國館で封切されたもの丶セカンド・ラン・ハウスは、昨年の暮までは、割に、はつきりしたので六本木松竹館といふのがあつたが、今では、銀座の銀座シネマと目黒の目黒キネマといふのがある筈なのだが、どうも、その上映々畫の關係が、武藏野と芝園、南明との樣に、はつきりしてゐない。

六本木松竹館は、その興行が松竹の手を離れると同時に、目今では、上映々畫なども之れといふ、はつきりした方針も、系統もなくなつてしまつた樣だ。これは、やり方によつては面白いのであるが、現在の日本の狀態では、上手くやつてゆくのが、なか／＼六ケ敷い方法である。現在上映してある映畫は、大てい古物の樣である。

此の他に西洋物專門館としては、神樂坂の牛込館と神田昌平橋のシネマ・パレスとがあるのみだ。兩館とも、多くは古くて有名な西洋物のむし返しをやつてゐる。が、それだけに、特殊なファンはあるだらう。又、どうかして見逃がした名映畫を見たいと思ふ人は、此の兩館に氣をつけてゐると、いつかは上映されるわけだ。

さて、西洋物は、それ位にして日本物に移る。

松竹キネマの蒲田撮影所の作品は、現在、全部淺草の電氣館で封切される。電氣館は、今日、淺草に於て只一軒の木建築の館である。

此の電氣館と同時に封切つたり、或ひは一週おくれて上映したりする松竹映畫の專門館に新宿の松竹館と、新富町の新富座と、麻布の南座とがある。

その他、此の松竹の日本映畫が、段々と廻つてゆく館が、上述二百館中約四十館ある。

日活の映畫は、現在、その時代劇と現代劇とで、各々一つづつの封切館を持つてゐる。前者は淺草の富士館で、後者は同じく淺草の三友館である。

そして、此の兩館で封切される新、舊兩派の映畫中の、いゝものを引き拔いて、それを同時に封切上映する特別封切館に、神田神保町の神田日活館がある。

日活のセカンド・ラン・ハウスとしては、上野のみやこ座、櫻田本鄕町の日比谷日活、四谷見附の四谷館等をあげることが出來る。

その他日活の映畫の廻る館は、二百館中、約六十館ある。

帝國キネマ株式會社の封切館は淺草の大勝館であつて、その映畫の廻る館は三十位あるだらう。

東亞キネマの封切館は轉々として移るが、現在では淺草の遊樂館で、その映畫の廻る所は二十館もあらうか。

マキノ・キネマの封切館は、淺草の千代田館で、その映畫の廻る所、帝キネと略匹敵するであらう。

此の他に、最近、アメリカのユニバーサル日本支社が、京都太秦の阪妻スタヂォと契約して、そこで作つた日本映畫を自分の所のアメリカ映畫と並べて上映し始めた。その封切館は、淺草の日本館と、溜池の葵館とである。

それから、現在松竹が買ひ受けて、配給してゐるが、阪東妻三郎の主演映畫は、これだけは、何故か淺草の松竹館で封切され、その後は總ての松竹系統の館に上映されてゐる。

×

以上で、現在東京にある映畫常設館の、どこが、どんなものを、どうやるかの大體を述べ終つた。

どこで、どんなものを見らるるかは、諸君の御勝手である。

（五）デパートメント買物漫談

三宅やす子

デパートメント・ストア

何でも一箇所で揃ふから、都會人はみんなデパートメントに赴く。それ許りではない。少し許りの買物を平氣で宅に届けて貰へることが忙しい生活、雜沓する電車を利用する人達に、何より有難いものに思はれるのだらう。實際、何處からこんなに人が集るのかと驚く程、否、何をそんなに買物があるのだらう、と思って見度い程、都下の各百貨店は或場合、人の押合ひである。

客が混み合ふのに賣子はその割合に少い。欲しい物を包んでくれる事が、やつとの事で、種々の品を出して呉れる等は、餘計な手數の恩惠を施すやうな顏をされたりする。十錢の物を買つても一々引合せて、包んでからでなければ受取れない。それがかなり手間取つたりすると、こんな處で買物をするものではない、と思ふ事もあるけれど、それで矢張り大抵の買物をデパ

ートメントで濟まさうとするから不思議だ。

然し凡そうるさいつて、あんなゴタ／＼した處はないかも知れない。商品が雜然と並んで、店員が愛想のない顔をして立つて居て、客が先を爭つて買ふ。第一エレベーターに押し合つて乘る時の混雜、混雜の時は階段を利用してほしいと或處などでは書き出してある、其階段を、昇降する人々の、忙しさうな足の音、忙しい足音に追ひかけられて、皆誰もそゝくさと上つたり下つたりする。

日和の日でも齒のついた履物をはく人が可なりあるが、雨降り上りの泥濘の町を、歩いて來た泥足駄で、ガタ／＼、コト／＼齒ぎしりのような音を立てゝ、大して感心もしない商品を漁り歩く圖は、しみ／＼今の都會生活の悲哀である。

震災後三越が、下足をやめるか否かについて客に問ふた事があつた。結局止めた方が可いのだつたらう、現在の各百貨店の樣式は生れたが、當時の不衛生な埃だらけの空氣は、たしか率先して油を敷いた白木屋の轍を諸店でふんで、今は少しよくなつて居る。けれど自動車の排してゆく大路や、郊外の悪路を渉つてゆく、今の日本服の客には、かなり宏壯なビルヂングと泥下駄の曲藝はいゝ對象であるのみならず、くたびれる然である。

然し、何と云つても、私達百貨店から利便を受けて居るものは、每月何度となく足を運ぶ、生活と密接なものになつて了つて居る。

私の知つて居る店

ずつと古くから三越で買つて居るので、何番の誰へと云つて、こちらの姓を云つておけば、時によると少し廻り道をしてまだ歸宅しないうちに品物が届いて居る便利があるが、品は普遍的で、特殊の味に乏しい。時日を嚴重に遵へないこと、急の染物でもすぐに間に合ふ事など、大都會の大百貨店の有難みを思はせるに充分だが、ひろく大きいだけに、大ざつぱな點がある。季節始めに物を買へばよいが、間に買ひにゆくともう無い位である。それで、着物はよく白木屋に行つたが、震災後は、前ほどいゝものが得られないので此頃久しく足が遠ざかつた。本建築でも出來て、もつと品が潤澤になつたら、また可いものが出るのだらう。

松屋は一寸した事から殆んど一週間に一度位行く。行つても大して自分の買物をするのではない、買へば旅行具位のものだが、玩具好きな少年の言葉に從ふと、松屋の玩具は種類が東京中で一番あるのださうで、それから價が廉く、市中の玩具店の

ものより一二割廉いといふ。これは一々市價を比較した閑人の子供の調査だから當つてゐるであらう。雛時など澤山の雛人形を並べて居るが、あれも大方、市價より廉いのかもしれない。すると、目抜の場所に一軒店を持つて居る玩具店などは、かうした百貨店にどん／＼客を取られてゆくから、なほ更廉く賣る事は出來ない道理である。玩具の一例は凡ての品にあてはめられる。銀座四丁目を背景に持つた松屋は、すつかり今川橋の時とは客の種類が違つて來た。從つて商品の體裁もかはつた。入口の季節々々の飾つけが私は好きである。それと音樂があるのが、人の足音を和げて可い。

松坂屋はシネマ銀座の時間を待つ時よく入る。でなければ催物の時——錦紗小紋と友染縮緬の特價品が澤山あつて、廉いのがいつも目につく。丸菱は平面にひろがつてゐる點で——つまり昇降の手數がないので見易く、客がこんで居ないので買ひ易い。商品が一寸現代的な點、たとへば手袋とか、海水着とか、さういつた種類のものが、手近く、間に合ふものがあるのは、他の安い店でさん／＼探したあとなどに氣附く事である。お召の價で廉い訪問服を卒先して賣り出したのは贊成だ。これからは縞の時代でなく勿論、色と線の配合だから、現代人にくすんだ縞などなくて可い。

近年郊外住宅地の發展につれて新宿一帶の繁華、殊に、三越の新宿分店が、食料品に力を入れて賣つて居るのは一寸目につく。食料品といふより、洋食折詰、各種料理の折詰其他、高等漬物屋とでも云ふ感じ。カツレツやコロツケを箱につみあげて箸で包んで居るのなどは、現代式漬物屋である。こゝの食料の客と、呉服物の客は少し客が違ふらしく、所謂ハイカラな好みのものは賣れ殘つて居て、時々、時節はづれの浴衣などに思ひ懸けないいゝ柄を手に入れる事がある。

高島屋は今迄帶のよい處ときめて居たが、先頃少し難しい好みの染物を誂へた處が書家の圖案の氣分を生かして、染色の技倆を充分見せた手際には感心してしまつた。こゝの友染の美しいのも特長だが、もつと新らしい柄を染めたら、欲しくなる人も澤山あるだらうか。

鏡

私は生活の必需品といふようなものをあまり買はないので、主に呉服物の話になつて了ふが、着物や、其附屬品を買ふ時、鏡が店内に充分でないと不便を感じる。三年許り前、私はある新聞に此事を書いた事がある。當時三越の呉服賣場に鏡はなかつた。それで番頭に斷つて手洗場に持つてゆく不體裁且不愉快な

思ひをした。勿論これはそんな處に持つてゆく客の無作法よりも、鏡を置かない店の方の落度だ。其頃でも洋服や帽子の賣場にだけは鏡があり滑稽なのはコートは洋服地で作るからか、そこには鏡があつた。其後今では何處でも小さな鏡を所々に立てゝあるが、あの小さな鏡などはいはゞ申譯の不親切極まるものである。其點、松坂屋は銀座でも、上野でも鏡が、大柱の四方にあつて、これがわざとらしくなく、客の姿をうつし、一寸眼にふれた反物を、身體にあてがつて見られるので、非常に感じがよく、便利でもある。半襟の賣場に、横に廣く、半襟賣場中のひろさ位の鏡をおいてあるのなど一寸した事だけれど、殊に可い。女は女同志よく氣附く意地の惡さで、あなたにそんなものが似合ふかといふような眼で店員にヂロリと流し目を送られ乍ら、派手すぎる襟を鏡の前に持つて行つて、返しにくる間の惡さ、それを救ふものは手近にうつるように充分に配置された鏡の他にはない。

鏡を充分に置くからには、木棉物の處にも是非入用である。廉い一反の買物で、新らしく裝ふ人のために、柄の選擇はなほ大切だから。

食堂

まづいものが食べたかつたら、デパアトメントの食堂に行くと可い、と斯樣云ひ度くなる位、味覺を虐待されるもの許りか並んで居る。と云つて、あの廉い價で、おいしいものを食べようと云ふ方が無理だと云はれるかしれないが、食物をあてに行くのでなくても、用達しをして居る間に食事時になる以上、又歩き疲れて一寸休息したくなる以上、も少し何とか工夫はならないものだらうか。御飯付、お椀付といつた量をみせつけるおどかしよりも、二三品、料理だけを別に注文させてくれたら助かるのだけれど、何でも三十錢か五十錢できまりよく御飯をつけてあるので困つてしまふ。見本品を棚に並べておくのは松屋の創案らしいが、今では何處でも眞似て、ズラリと並べておくのを大勢で立つて見て居るのは隨分變なもの、三越の食堂はまづいけれど食器が可いのでいゝ。松屋は白い布を卓にかけてないから食堂内が陰氣にきたなく見える許りでなく、そこへ給仕人が盆で運んだものを一々ぢかに卓上に置くので、感じの惡い事、他では皆盆にのせておいてゆくのを、こゝは客をぢかに置き、醬油つぎを體操みたいな手つきでポンと卓上においてゆかれると、前の人の食べたあとなど、何とも云へないきたなきい家庭の感じ。だがここの開店された頃は箸を包んだ紙が一杯散亂して居るのが目立つたが此頃は、通り言葉で云ふ客種も

り、掃除もゆき屆くので、床の上の箸紙はなくなつた。

松坂屋（銀座）の食堂は一寸感じがいゝ。卓の眞中に草花の鉢をおいたりしてある。（尤もこれに値段附のついた儘のはおかしいが）上野の松坂屋は上野驛の背景があつて風變りである。鮨ばかりも七八種あつて、食品に都だの東だのといふ名が附けてある。朝飯何時より、も變つて居る。たかここは、上野驛の他に、上野の展覽會の影響も多少受けるのだらう。現に、私なども、展覽會を據にあそこへ寄つて見るのである。

高島屋は變な食堂がなくて、地下室の富士見軒だから助かる。丸菱も通り拔けが賑だけれど、味は食事の間には合ふ。

そのほか

銀座邊を歩くと、松屋の包紙で包んだものを（日本橋では三越の）持つて歩く人を澤山見受ける。が此頃諸方で、特に云はなければ紐で結んでくれなくなつたのは、紐の節約かもしれないが、落ちにくいとも一つ買はうと思つたものをやめて了ふ事が往々あり、下らない惜しみ方だ。包紙の儘持つて歩くお客は、商店の方から云へば、只で廣告して歩いてくれるサンドイッチマンにも當る。も少し親切に客の便利を計ればよささうなもの。

帯を卷いた儘積んでおくのは呉服屋さんが背負つて歩いた時の遺風で時代錯誤なものと思ふ。場所を工夫して、上から掛けて見せておかなければ、買ふ氣にはなれない。

私はデパアトメントの話を書かうとして、自分に偏つた話許りしたやうな氣がする。書いて了つてから、私は東京の氣分の、濃く出てゐるデパアトメント、ストアを、けなし乍らも、非常に好んで居る事に氣が附いた。今名を擧げた店の外にも、私の入つて見るところは二三ある。土曜日曜を避けて殊に午前に行くと、閑つぶしにしては、何處でも興味のあるところである。いろ／＼のものが見られて、私はそれ／＼の店に好きな點をみつけてゐる。

(六) カフエ廻り十二軒

酒井眞人

私は一個の未完成の小説家でしかない。私はウエイトレスの中から細君を掘り出す目的でカフエに通つてゐるのではない。私はカフエ通(つう)にならうとも、カフエ的の勢力を得ようとも思つてゐはしない。私は面白いからカフエに行くのである。カフエでぼんやりトグロを卷くことは、私には文壇の大家を歷訪するよりも面白いのである。カフエで女か友達を相手に氣焔を上げることは、私には麻雀を遊ぶよりも面白いのである。ただそれだけのことである。

だから私は、氣が向きさへすれば、長い時間をテエブルの上に肱をついて、巣の中央にゐる時の蜘蛛のやうに注意深く、ドアを明けてはいつて來る人間の表情態度を探偵しながら、この退屈な、しかし家にゐるよりは退屈でないこの步哨時間を、いつもきまつてカフエで過ごして來るのである。

思へば私がカフエに沈湎してから、もう七八年であらうか。私には私がなしたことをなすの權利があつたやうにさへ思へるのだ。だが私ももう三十だ。いゝ氣になつてこんな生活をもう十年も續けてゐたら、この私の生活が私を座洲させて了ふに違ひない。願はくばこの一文、過去の私の廢墟の上に、再びは來ない程に壯んな、耽溺を愛嬌に變へて了ふ程に燦爛たるカフエの記憶を立てよう決心で、私はその選ばれたる勇士として、いや人がこれからカフエの覇者の位につく用意として、こゝに私自身の單純な姿を示しながら、主だつた市内のカフエの特色を思ひつくまゝに書き殘して見よう。

× × ×

私は一日に一ぺんは何處かのカフエにはいらぬと習慣を破るやうな氣がしてひどく淋しくなるといふ滑稽な氣性を持つてゐるのである。他人にとつては何んとも說明のしようのないやうなこの私の氣性も、今では何かカフエの玄祕な理法によつての

はないかしらと考へられるのである。

カフエといへば私は直ぐ本郷を思ひ出す。始めてカフエに味を占めたのが本郷の或る小さなカフエだからだ。K氏がこゝを背景にして小說を書いたり、「友人のKがこゝの女將を張つたり、又私は私で滿足と嫉妬の交つた氣持で、たつた一人の女の爲めにどんなに苦心をしたか、私は今でもカフエの心臟としてあの湯島のカフエを忘れることが出來ない。私はこのやうにして本郷から銀座の眞ん中へ乘り出した。文科大學生であつた私は、カフエに新らしいことが澤山にあるのを見、又面白い慰みや私が今迄拒絕してゐたやうな愉快なことのあるのを知つて、この行樂を遂に耽溺にまで陷れて了ふに至つた。

それで何んとなく懷しいのは三丁目近くにある燕樂軒だ。建物や設備など一向氣の利いたところはないのだが、それでゐて不思議にノンビリ出來るカフエだ。屋台に似合はず萬事が質素で、女の着物など銀座のタイガーあたりに較べると天と地との違ひなのだが、それでゐて野卑に落ちず、何度行つても惡る慣れじて來ぬ愼しやかな女の待遇（もてなし）にはひどく好感が持てるのだ。私は學校を出て以來用のなくなつてゐた本郷にこの頃又用事が出來、歸りに通りかゝるので無愛想なこのカフエのストォブを三日に一ぺん圍むことになつたが、數時間に亘つて駄辯や相談を交すのには實に恰好のカフエである。出來料理はあんまり

は何處でも食べぬから、こゝの洋食がうまいのか不味いのか一向に分らぬが、ピーナッツとビールの一點張りで、横目で眺める程の美人がゐないのがいつそ氣休めとなつて、ドッシリ尻を据ゑて「さて銀座にしようか淺草にしようか」と晩のプログラムを徐ろに立てる――といふカフエである。筋向ふに一判セント・ルイスとかいふ小型のカフエがあるが、そして私も折に觸れては珈琲の一杯も飲む客なのであるが、不思議にこゝで一つビールでも飲まうといふ氣にはならぬのである。そして又實際本郷のどのカフエも、五六年前のやうには陽氣に餘り繁昌してゐないやうだ。これは銀座のカフエが近頃俄に低下して、學生でも相當歡迎されるところから、一直線に銀座か淺草の本舞台に突貫する結果かも知れない。或ひはカフエなどへ入浸つてゐたら、相互に殺戮し合つてゐる今の學問競爭に忽ち落伍して了ふからであるかも知れない。さういへば允よく友達と行つた南天堂の二階のカフエも、餘りこの頃では髮の毛の長い若い作家達を見受けぬやうである。

本郷邊で少しカフエらしい空氣を吸ひながら一杯飲まうといふことになると、どうしても切通しを下つて廣小路に出ることになる。不忍ノ池に出ようとする角に、割合に新らしいカフエ

繁昌がある。上野には惜しい位粋揃なカフェで、ウエイトレスなども中々の粒揃ひで、銀座に出しても優に一二を爭ふだらうと思はれる。だから物好きなカフェ探求者は、銀座から青バスに乘つて上野にわざ〳〵飮みに來て、又引き返して、例へばここにライトオンあたりの出身ウエイレスがゐるとすれば、その女からの言傳(ことづて)をちやんと向ふの昔の同僚に傳へてやるといふ具合なのである。ヘンな音樂などをやらずに、エヂソンの蓄音器を備へた切りで、女が少し乙に氣取つてゐるのは何んとも笑止だが、又それだけに物欲しさうに客席にこばり付いてゐないのが頼母しい。そんな譯で私は別にこゝに根柢のある愛着は待たぬのであるが、銀座にも飽きるとふと何かの切掛でブラリとやつて來るのである。この近所の肉屋の經營だといふことだが、さしてビフテキの味には新味もないらしく、たゞこのカフェの何處となく手入れがよく行屆いてゐるのが鳥渡氣持がよいのだ。

この菊屋に對陣してゐるのが斜向ひの三橋亭だ。改築後中々立派になり、夜などオーケストラを賑かに囃し立てゝ、確か電氣光線までオペラがかつて、醉つ拂つて行つた客などの女のあしらひ方、中々に慣れたものである。馬鹿にして。私など、手練の結果大抵のカフェなら一人入つて行けるのであるが、こゝばかしはどうも奥行のないところにポツネンと迷ひ込むやうな氣がして、店頭一歩のところで怖氣がついて了ふのだ。三人位で陽氣に騒ぐカフェであるらしい。所謂カフェらしいカフェなのだと見える。

震災前には淺草へ行けばきつと寄つたカフェ・アメリカ改めオリエントも、とんと近頃ではご無沙汰勝ちだ。あのアメリカの夜の喧噪が妙に刺戟的だつたので、私は活動寫眞を途中で脱して迄こゝへやつて來たものであるが、兎に角オリエントは今でも不思議な魅力を持つてゐる。別に近頃では女が揃つてゐるといふではなし、設備の感じがいゝといふのではなし、だが蛇のやうに長いあのオリエントには、何處か淺草的のポプユラリティがあるやうだ。度外れの喧囂と醉漢とコップと白粉の匂ひのするカフェだ。こんな陽氣な、そして又險惡なカフェは、東京中にもきつとないに違ひない。だが夜少し晩くなつてこのカフェで、耳一ぱいに喚猿(わめき)のやうな騒音を詰め込んで、ぼんやりビールでも飲んでゐると、何かから殖民地の港のカフェにでもゐるやうな氣持になるのだ。それに女の數の多いこと、あの胴の長いカフェの中をどうやら忙しさうに上氣して右往左往する様子は中々の見ものだ。あゝなると料理がうまい不味いの問題ではない、園遊會のやうな底抜けの陽氣さだけだ。淺草にはその他娯樂を始め小さなカフェは澤山あるが、興味を持てるやう

なところはないやうだ。女が直ぐ寄つて來て、皮膚の荒れた不景氣な顏をつん出して、註文を煩く催促などすると全く助からない。

先づそれよりは氣心の知れた銀座へ一氣に出かけて了ふことになる。ライオンかタイガーか、差し當つては先づこの二つだが、そして大概は二つ諸共に入つて來るのだが、今では心易さがどつちにあるのだか分らぬ位だ。何んといつてもライオンは我が儘がきく。友達を探すやうな風をして眞ん中に入つて來、嫌な奴が來てゐたらその儘拔け出て了ふ藝當も平氣で出來るといふものだ。女もスレてゐない點では東京一かも知れない。誰れにでも直ぐ懷くが、割合に一歩手前の堅氣さを持つてゐるといふ評判だ。私は女を皆見知つてゐるといふ譯ではないが、いくら頑張つてゐても常連の特點で嫌な顏もされないので、ナマ一杯で一時間を經たすことも出來るのである。こゝへ行き始めてからもう何年か經つが、他にどんな面白いカッフエが出來てどんなに私が熱中しようとも、再びこゝへ元通り出發することになるだらう。だがこの頃のライオンは完全にタイガーに抑されて了つた形である。タイガーを輕蔑してゐる間に、どん／＼ライオンの客が向ふ河岸へ吸はれ始めて來たのだ。客ばかしではなく女迄幾人か反逆して了つたとは少々皮肉だ。タイガーの營業繁昌の根元は、美容に汲々たる女達の客への巧みた待遇であるが、金のあることが何よりの客の資格であるから、女はジャズに浮かれて品や質がないのも尤もだ。だがそれだけにおしなべて愛想のいゝのが、嫌でも客を引き寄せずには置かぬのだ。客の弱點を掴むこゝのマネーヂャアは中々利口だ。

カッフエ・キリンは、他よりも五錢安いビールを飲み乍ら、互に囁つてぼんやりするのにいゝ。さすがは明治屋の出店だけあり、こゝの少女等が、おつとりしてゐるので氣樂に飲めるのだ。こゝなら子供を連れても親を連れても入れるカッフエだ。獨逸人がよくやつて來て歌を歌つてゐる太陽軒や、料理がうまいといふエー・ワン・カッフエや、辛い日本酒を飲ませるアルプスや、氣の毒な位元氣のないプランタンや、葡萄酒をおまけにしてくれるカッフエ・コーザンや――こんなに廻ると目が昏んで仕方がない。

(七) 東京郊外の新名所

松川二郎

東京は主として西郊へ西郊へと伸びてゆく運命を有つてゐる。それは單にその外緣についてのみ觀察すれば、板橋・王子附近、尾久附近、千住附近、及び龜戶・大島附近等北郊東郊の發展ぶりは、大森・目黑・澁谷・中野・方面即ち南郊西郊の發展ぶりに比して、必ずしも遜色あるものとは言へない。見方に依つては大塚、尾久、龜方などの方が外の方面に較べて特に特別な發展をして居ることも事實だ。然し更に一歩を所謂「郊外の郊外」に轉じて見ると、東京が西へ西へと伸びて行つて居る傾向が、明らかに認められるに相違ない。北から東へかけては荒川、中川、江戶川など幾つかの大きな川があつて、其の延伸を自然的に妨害してるといふ地形上の關係もあるし、元來本所深川方面は將來も工場地帶で（現在も左樣ではあるが）、さう急速に橫に伸びる必要を迫られて居ないといふ事も關係してゐる。それに反して南方は貿易港たる橫濱を控えてる上に、その中間である川崎附近が工業地帶となつた關係上、恰かも大阪と神戶の關係の如く、遠からず東京と橫濱の間には人家がギッシリ建て詰まつて、殆んど一つの市街地となつてしまふに相違あるまい。その勢は宛ら眼に見える如くであり、又現に事實さうなつて行きつゝある。

そこで私の專ら言はふとする西郊であるが、この方面は住宅地として、遊樂地として、何處までも、ずんずん伸びてゆく運命をもつて居るやうに思はれる。それは土地が東京の山手たる麻布、赤坂、四谷、小石川などに接續してる關係もあるし、又其處には何等自然的の妨害物がなく、ひろびろたる曠地が殆んど際限なく展けてゐるといふ、地形上の關係があることは言ふ迄もない。それにもう一つ重大な關係がある。

私がこゝに「西郊」といふのは、大體に於て、南は目黑蒲田電車の目黑驛から丸子多摩川に至る線と、北は池袋驛と川越市

とを結びつくる東武鐵道の東上線と、此の二つの線に依つて堺せられる地域を指して居るので、幾何學的に言つてもその區域が東京の西郊であるのみならず、地勢上或ひは土地の氣分から言つても、此の間が東京の郊外の特色を最もよく發揮した「西郊」の區域でなければならない。東京の郊外の特色とは、言ふ迄もなく武藏野の氣分である。今日の東京の郊外に武藏野の俤を求むることは、甚だ困難であらう。或ひは不可能だといふかも知れない。しかし私は尙ほ其處に、多少の氣分だけは見出すことができるとおもふ。

武藏野に特有なカラアは丘陵である。雜木の林である。櫟の並木である。萱と薄である。更に、さういふものの上にぽつこりと出てくる富士である。西郊の特色が全くそれであつて、西郊の興味は丘と林の興味である。その丘と林との間に建設せられた畠と村落との興味である。村落の半ばは今や「文化住宅」或ひは「田園都市」と變りつゝあつて、

住吉に文化住宅二戸三戸
低利資金のにほひするかな。(讀人不知)

それが東京の郊外のカラアであり、又「現代武藏野」のすがたでもあるのだが、兎に角丘から谷へ、谷から丘へと上つたり下つたりして行く路、黃ろく熟した麥の畑、紫色の若葉の幾汲となくつゞいた甘藷の畠、こんもりと茂つた欅の森の社、竹藪の奥に見える古い萱葺の家、風の音ばかり鳴つてる廣い野原、淺い雜木林にさした日の影、藁繩でからげた荷をさげて電車に乘つてる人。さうした景物は、西郊でなければ見られない景物である。

それが又、東京の人の趣味には可なり適つて居るらしいのである。關西地方の人に言はせたら、なンやい阿呆くさい東京の郊外はつまらんなと言ふに相違ないが、東京の郊外散策者は、その平凡な——詰らぬ武藏野の中に、一種言ふべからざる趣味を見出してゐるのである。畑と雜木林と丘陵の間をあてもなくぶらぶら漫步するところに、興味を感じてゐる。獨步の言ひ草ぢやないが、岐れ路に立つたらステッキを立てて見て倒れた方へと歩いてゆく、が結局は何方へ行つても、大抵は同じ道へ出るのだ。それが武藏野、即ち東京の郊外の興味であり、東京人の趣味である。とは言へぬ迄も少くも東京の郊外散策者には、さうした趣味を有つた者が可なり多いのは事實である。

東京の郊外に、交通機關及び遊樂機關の發達の遲々たることは、まことにお恥かしい次第で、京阪地方に比して殆んど較べ物にならない事は、誰れしも常に言つてるところ、昭和二年の今日、單線でしかも三十分隔發車なんていふ乘合馬車みたいな

電車がのさばつて居るのは呆れる外ないが、それが矢張り、右の如き東京人に特有の趣味性が與つて多少の原因を成してゐるかとも思はれるのである。

さてと、元來こんなことを書く積りぢやなかつたのであるが、東京郊外の發展の比較的に遲々たる所以を、少ゥしばかり申譯をして、新らしい名所の紹介に取かゝらうといふ、それにしても之から列擧する所の「新名所」が、いづれも西郊に屬してゐるのは、つまり東京の郊外的發展は現在は勿論、恐らく將來も亦、さうした一般的趨勢のもとに在るといふことを、豫め頭の中に入れて置いて頂きたいと思つたからである。ところで「新名所」などいふものが、さう幾つもあるべき筈のものではないが、此頃できた目黑蒲田電車沿線の「多摩川園」や、武藏野鐵道沿線の「豐島園」などは、何れもまだ繼續工事中で、先づホヤ〱の新名所と言つて宜しからう。

「多摩川園」は目黑蒲田電鐵會社の經營で、乘客吸引の爲につくつた小さな遊園地。丸子多摩川の停車場を降りると直ぐ前で、夢のお城、お噺館、魚のトンネル、動物のお家、鐵の塔、シーブレン、陸上波のり、その他等々、もつぱら子供を喜ばせる設備がしてある。勿論土曜から日曜にかけて子供をつれて遊びに行くところで、鶴見の花月園の規模を小さくしたやうなものであるが、特色は夢のお城の中にあるトルコ風呂で、伊太利式の大理石張りの大浴場と、大きな浴槽になみなみ湛へた綺麗な湯とは、ちよつと嬉しい氣がする。殊に湯好きの東京人には歡迎され相な氣がするけれど、大阪の新寶塚に比すれば物の數かはだ。もつとも入浴は無料だ。何しろ規模が小さい。紹介したり惡口を言つたりでは、何の役にもたゝぬかもしれないが、魚のトンネルは建築が面白く出來て居つて、案內書に『珍魚澤山』と書いてあるから、何が居るのかと入つて見たら、金魚が二三十匹と鮀が二疋。動物のお家には猿が十一頭ばかり。水禽のお家にはペリカンと鴨と鵞鳥、鷺、鶴鳥、それから雁は名札のみで實物は見當らず。『眺望絕佳』の鐵の塔が高さ僅かに二十五六メートル、但し案內書に海拔二百五十五尺とあるのはおもしれえと賞めてやりたいが、大阪天王寺の名物「通天閣」が海拔五百尺と稱して居るのを模倣したもので、而もその高さは漸やく半ばにしか達せぬのだから、笑は——いや些と賞めにくい。而して此塔に登る料金十錢也。その他シーブレン、陸上波のり、驢馬、子供自動車、同自轉車、各金十錢也。

僕おもふに、電車會社は都會人を郊外へ引出して其乘車賃を獲るだけで澤山だ。これ位のしみッたれた設備で三十錢といふ入場料がすでに高い上に、何彼につけて十錢づつ搾取しようと

すゐのは、蟲もよすぎるし、政策上から言つても甚だ拙いやり方ではないか。その點にゆくと大阪の人は、何と言つても商賣上手だ。もう大分以前の話で、此頃そんなことをやつてるかどうか知らないが、大阪と奈良市とを結びつけてゐる大阪電軌線の中央、大和河内に跨がる生駒山を貫通して一萬一千八百八十呎の「生駒トンネル」がある。日本で二番目か三番目の長トンネルで夏はこのトンネルの中が莫迦に涼しいので、毎夜納涼電車を運轉し、西口が日下停留場で東口が生駒停車場だが、生駒までの往復切符を貰つておけば、トンネルの中を幾回往復してもよろしいといふ事にして、且つ日下遊園地では盛んな河內音頭（盆踊）を催ふして、無料で觀覽に供してゐた。それで涼を追ふて集まるものウンカの如く、殊に日下と生駒の間は電車がこはれ相な騷ぎで、幾往復はおろか一往復さへ命がけの、大汗ダクダクなのだが、兎に角幾回往復しても無料といふのは、大阪式でおもしろいと私は感心した。目黑蒲田電車は、東京の郊外電車中では珍らしく活氣を帶びた會社で、營業方針が頗る進取的だ。都會人を郊外へ郊外へと引出す爲に、絕えざる努力を拂つてゐる點は、つねに私の注意を引いて居る。從つて大いに望みをも囑してゐるのだが、も少し規模を大きく、コセコセしないでやつて貰ひたい。そしたら私はいくらでも提燈を持つことを辭せないつもりだ。

丸子多摩川から東京横濱電鐵が分岐して、神奈川迄通じてゐる（此線は近く目黑の祐天前及び澁谷驛を經て新宿驛へ連絡する）が、その沿線に目下同社が建設しつゝある「綱島溫泉」なども、新名所の一つとして數へらるべきものであらう。それは鶴見川の左岸で、大分大きな浴場を建ててゐるが、其處から鶴見川に架けた大綱橋を渡ると、向ふ岸は即ち大綱村で、東京の人は餘り知らないが「大綱鑛泉」といふ鑛泉地である。例のラジウム泉で、ラジウム泉といふもの今日では少し時代錯誤の感もあるが、永命館內湯の檢定書を見ると一リットル中に一〇・四七マツヘのラジウム・エマナチオンを含むとある、それ位含んで居れば、まづ眞正ラジウム泉と稱して苦しくあるまい。少くも關東地方では第一位だ。鑛泉旅館も四五軒あるが、永命館を除いては悉く料理兼業で、つれ込のお客を的にして居るやうな構えである。

新設の綱島溫泉もおそらくラジウム泉で、且此邊に溫泉の湧く筈もないから無論沸し湯であらうが、兎に角その落成と同時に東京横濱電鐵が盛んに宣傳するに相違ないから、此の大綱橋を挾んで、鶴見川の谷も急激に開けてくるであらう。こゝら邊は桃の名産地で、その花の咲く頃暫らくの間が美くしい外け、

格別の眺望もなく、環境の極めて平凡なことが缺點だが、歷史上にはちよつと面白い處で、丸子の渡津(ワタシ)から電車線路の外側に沿ふて通じてゐる道路は昔の鎌倉街道で、「回國雜記」の著者道興准后は、淺草鳥越の里から新羽(ニツパ)を經て鎌倉へ出るのに此道を通つて居るし、丸子と子母口との丁度中央にある小田中は、延喜式に謂ゆる小高といふ驛家の在つた處で、相模から武藏を經て下總に出る東海道官道に當つてゐた。「萬葉集」の東歌の中に、

橘の古婆の放髪(はなり)がおもふなむ
心うつくしいで吾(あ)れは往かな

と歌はれたアイヌ美人の居つたのも、此あたりであらうと私は見當を附けてゐる。いやもつともつと古い。橘村子母口はアイヌの貝塚があるので有名な處だし、丸子の對岸(即左岸)の沼部にも、大森にも、同樣の貝塚がある。貝塚と貝塚とに依つて繼がれる線は、即ちアイヌ時代の海汀線であつて、そこに海岸道路の通じて居つた事が想像される。從つてその道路は石器時代から開かれた、武藏野最古の道路の一つで、それを奈良朝、平安朝、鎌倉時代と、ずつと踏襲して來て居つたことが推定されるのである。元住吉といふ停留場で降りて、西の方へ少しばかり行くと、その貝塚や古墳のある子母口である。

「豐島園(としまえん)」は石神井(しやくじい)川の清流に臨んだ練馬城址を開いたもので、武藏野電鐵の練馬驛で降りると、案內標には五町とか六町とか書いてあるが、實際は十町ぐらゐの距離がある。これは本年二月の開園で、城址の全部と其南涯下の水田を埋立てて、總面積五萬坪、先づ日比谷公園ぐらゐの大さだから、大分規模が大きい。石神井川は遊園地の中央を貫流してゐる。その水を引いて七千坪の遊船池をつくつて居る外、舊城址の中にも湧泉を利用して、五つ六つの小池があつて、水に豐富なのを特色の第一として、トラック、ベースボール・フイルド、フートボール・グラウンド、バレーボール・コート等を始めバスケット・ボール、ホッケイの競技場、殊にテニス・コートを硬球用十個を設備せる外、オリンピック型で長さ百メートルのスヰミング・プールを設けるなど、廣大な地域を利用して運動競技の設備を完備し、其の他大きなスタンドもあるし、伊太利ゴリの劇場に型取つたといふ野外劇場、大きな野外奏樂堂、鉢植の草花で埋めた溫室風の食堂など頗る行屆き、且つ園藝部を置いて初夏は苺摘み、秋はぶどう摘みに都會人の園藝趣味を滿足せしめやうといふ計畫も、なか〳〵氣が利いてゐる。殊に舊城址の土壘の上に立つて、園內を一望に見晴らしたはればれしい眺望も、出色のものである。夏は水に枕んだ二箇所の松林に風が吹拔けて涼

しいであらう。資本金百萬圓、無論土地の價がその大部分を占めて居るには相違なからうが、兎に角大分金をかけて造つてある。東京の郊外の遊園地では、今日の處これが白眉だ。

此の石神井川の下流は瀧野川となつて楓溪をつくり、その源は三寶寺池から出てゐる。三寶寺池の上の臺地は練馬城とは深い關係を有つた石神井城址で、池の下流は東京府の水泳場になつて居るが、三寶寺の池は東京近郊には珍らしく古色蒼然として、幽邃な趣に富んだ池である。それに紅葉も東京近郊での美しさだ。あの附近も自然の風致を害しないやうにして開いたら、すばらしい遊園地が出來さうにおもはれる。

多摩陵も新しい名所として、無論逸することはできない。寧ろ新名所の筆頭に置くべきものである。然し多摩陵のことはすでに新聞などにも、いろ〳〵出て居るし、私としても外の雜誌に詳しく書いて居るから、こゝには言はないが、多摩陵を中心として彼の附近も急速に開けて來ることは明かだ。北條氏照の墓のある所から、八王寺城址である城山、あのあたりは風景に落付と深味があつていゝ處だし、距離は少し離れるけれども多摩河畔の瀧山、高月の兩城址も眺望が佳い。高月城址は大石定久が瀧山に築城する以前大石氏の居城のあつた所で、「回國雜記」に前後二回まで記載されてゐる大石信濃守の屋敷といふのは、其處を指してゐるのであるが、道興准后がその風景を敍して、「一閑乘興屢登樓、遠近江山分幾州、落雁叫霜風颯颯、白砂翠竹斜陽幽」と言つて居る通り、多摩川河畔でもちよつとあれ位景色のよい所は、外にはないと私は思つてゐる。多摩陵や八王子の方から行つては可なり距離があるけれど、青梅電車の拜島から五日市鐵道に乘換えて東秋留で降りれば十町足らずの處である。

それから、多摩陵の餘惠を受けて最も繁昌すべきものに、高尾山がある。京王電車は東八王子から多摩陵前まで線路の延長を出願して居る相であるが、結局は高尾山麓迄その線路を延長してゆくに相違ない。今に必らず、さうしなければならなくなる。折もよし、高尾山にはケーブル・カアが開通して清瀧橋から樂王院迄、殆んど足を勞せずして往けるやうになつた。高尾は小さい山、標高は二千尺に足りない——詳しく言へば千九百七十三尺しかない山だけれど、妙に深山性を帶びた山で、曾て私は『高尾は婦人持ちの深山幽谷だ』と言つて笑つたことがあつたが、全く樹立が深くて、到る處に溪流あり瀑布ありて、深山幽谷の小規模を成し、山頂の展望の廣濶雄大なことたども、人の意外とする所である。紅葉は評判ほどに多くはないが、黒い杉の間などに點綴した美しさは、矢張りこゝで無ければ覩られぬ風

致である。婦人子供をつれて登るには、實に手頃で恰好な山だ。

武州御嶽にもケーブル・カアをつくつて欲しいし、多摩上流の氷川村へも早く電車をひいてほしい。そして楽に日歸りのできるやうにして、彼の繪も及ばぬ好風景の地へどし／＼生活に疲れた都會人を送つてやりたい。東京の郊外の誘客施設は、私にはどうもまだるツこくて我慢がならない。

(八) 銀座と淺草

廣津和郎

銀ブラといふ言葉は、今は東京人ばかりではなく、地方の人人にも、それが何を意味するか、直ぐ解るらしい。自分は大阪の心齋橋筋で、大阪の青年達が、『久しぶりで銀ブラをしたいな』と云つてゐたのを聞いた事がある。銀座はその現物はあの通りの外貌で、外國の都會の目抜きの街から較べたら、實際田舍町のやうな感じがするであらうが、併しわが日本の大東京が、日本人に取つて憧れの都であると共に、銀座はその大東京の中心地として、やつぱり特別の印象を人々に與へてゐるらしい。——『久しぶりで銀ブラがしたいな』東京にゐた事があり、銀座をぶらついた事がある人々は、ふとこんな風に思ふ事が時々あるらしい。例の松島事件で、大官達を取調べに上京した角南検事が、新聞記者達に包圍された時にも、その逃げ言葉の一つとして、それを使つてゐたのを新聞で讀んで、自分は頬笑んだ。『いや、今日は一日休息ですよ。晩には久しぶりで銀ブラでもして見たいと思つて……』——事件の内容を何とかして喋らせようとして執念くつき纏ふ新聞記者達の鋒鋩を、角南検事はかういふ言葉で、輕くはづしてゐる。——その事それ自身は何の興味もないが、『久しぶりで銀ブラでもしたいと思つて』といふ言葉は、知らず識らずの間に、日本人の心に、あの銀座が隨分深くにじみ込んでゐる事の例の一つとして興味がある。

新しい辭書には、銀ブラ――銀座散歩を意味す、といふやうな事が載つてゐるかも知れない。ブウルヷルをぶらつく人（ブウルヷリエ？）といふ言葉があるやうに、今に銀ブラリストといふ言葉も出來るかも知れない。

それは兎に角として、さういふ誰でも知つてゐる銀座の案内記を、この自分に書けといふ事だが、一體誰でも知つてゐる場所の案内記を書く程六ケ敷い事はないだらう。富士登山案内記、日光案内記といふやうなものなら、これは案外興味をもつて書けるかも知れない。けれども、今更中央公論の讀者に向つて、銀座の案内記、皆さん百も御承知の銀座の案内記を書くといふ事は、どうも執筆者の情熱を湧き立たせる種ではない。かと云つて、四月の花見時を目當に上京する地方の人々に東京の名所を案内するやうなつもりで書くといふ事は、自分などの任ではないし、又さういふ手引を載せる事は雜誌中央公論の任でもないだらう。

そこで、結局案内記は單なる印象記となるより仕方がない。

いろいろ考へて見たのだが、結局それより外に好い知慧も分別も浮んで來ない。――自分と銀座と云ふ事を考へて見ると、最近はどうやら銀座通を歩く氣もなくなつたし、又たまに銀座まで出る事があつても、急いで素通りすると云つた具合になつてしまつたが、これも年齡のためか、或は時期の問題かも知れない。自分などが二十二三の時分、未だ學校生活が終つたか終らなかつた時分には、時の新進流行作家吉井勇、谷崎潤一郎、長田秀雄、等々の人々が、始終銀座邊のカッフエエで飮んでゐるといふ事を、我々は耳にしてゐた。これは丁度東京にカッフエエなるものが出來始めた時分で、文壇カッフエエ黨（此處では本文の主旨から云つて、文壇第一期銀座黨と云つた方が適當かも知れないが）の第一期生とも云ふべき人々だつた。併しやつぱり年齡の問題か、興味の問題か知らないが、その人々の姿があんまり銀座通に現れなくなつた時分になつて、第二期のカッフエエ黨――即ち文壇銀座黨が現れた。久米正雄、宇野浩二、その他の連中はこの期に屬すべきものだらう。かくいふ自分などもこの時期のもので、一時は一日中の殆んど全部を銀座で過したと云つても過言ではない。自分はその頃麴町にゐたが、起きると直ぐ銀座通に出かけ、夜が更けなければ家に歸つて來ない。毎日毎日がさうである。春夏秋冬がさうである。宇野と自分とは互に酒は飮めないから、珈琲、紅茶ばかり飮んでゐたが、よくもあんなに珈琲、紅茶が飮めてゐたものだと、今思ふと我乍らあきれざるを得ない。

一體そんなら銀座の何處がいいのかと云はれたら、何處だか

解らない。けれども、これは、一つの習慣で、夕方になると、あの解り切つた銀座の灯が、へんに魅力に感ぜられて來るわけなのである。——一體何處に魅力があつたのだ、と今自分で考へても、やつぱり一種の病氣のやうなものだらうと思ふ。

近頃は村松正俊、酒井眞人君達が、文壇での最も著しい銀ブラリストであらうが、この人々はつまり第三期に屬すべきであらう。先日丸の内ホテルで偶然横光利一君と向ひ合せの室に泊る事になつたが、横光君は毎日眼がさめると、銀座に出て行きたくなる、何故だか解らないが出て行きたくなる、と云つてゐた。丁度我々の銀ブラ時代の年齡と丁度同じ年齡に達した横光君達は、これ亦問はれても『わけの解らない』銀座の魅力に、毎夜惹きつけられてゐると見える。——横光君、片岡鐵兵君（片岡君は第二期時代からの間歇的銀ブラリストだつたが、今又横光君達と一緒に、銀ブラ派の新時代を作つてゐるらしい）等は第三期に屬すべきか、或は第四期か。——

これは『カツフエエ案內』を受持つてゐる酒井眞人君の領域を犯す事になるが、此處に第一期時代よりももつと先輩である一人の老大家が、近頃最も熱心なる銀ブラリスト、カツフエエ黨になつてゐるといふ現象がある。その名は永井荷風氏。——これは一體第一期から第四期までの間のどの分類に入れるべきだらう。若し云ひ得べくんば、『返り咲き派』とでも稱する例外現象として取扱ふべき種類なのかも知れない。この派には生田葵氏などといふ中老人もゐる。

扨て、これでは銀座案內記としては勿論、銀座印象記としても頗る蕪雜なものになつてしまつたが、自分が銀座から最も强い印象を受けたのは、大正十二年の大晦日の銀座だつた。東京の目拔きの場所といふ場所が、あの大震火で燒き拂はれてしまつた時、自分達は、毎日銀座の復興を見に行つたものだ。何しろ銀座の復興する事が何よりも嬉しかつた。子供のやうな心持で、明るい灯を求めてゐたに違ひない。畫家達がバラツク街の裝飾をするといふ新聞記事や、何や彼やが、何より自分の興味を惹いた。十字屋のバラツク、銀座食堂のバラツク、それから新しい畫家達が設計したとか裝飾したとか云はれてゐるカツフエエ・キリンのバラツク——このカツフエエ・キリンのバラツクは、晝間見ると、その裝飾の美しさと奇拔さとが愉快だつたが、夜になると眞暗になつて、折角の裝飾繪もよく見えなかつた。これは裝飾した畫家達が、晝間ばかりを考へて、夜の事を忘れてゐたらしい。これは畫家のやりさうな事で、夜の事を忘れてゐるといふのは、彼等が結局專門の建築家より間が拔けてゐるために違ひない。と云つたやうな事を、當時自分達は云つて

笑つたものだ。もつとも、やがてそれに氣がついたと見えて、その看板を外側から電燈で照らす工夫をしたらしいが。――そんなものが、ポツポツ建ち始めるのを、毎日見てゐた自分は、大晦日になつて、兎に角、バラツク街の、裏側には眞暗な闇が巣喰つてゐるとは云へ、外側だけでも、今日見るあの銀座が、殆んど完全に出來上つたのに、歡喜の聲を揚げたものだ。今から考へると子供染みた感激ではあるが、その當時の東京市民で、大晦日に銀座に出た人は、地震後四月目であの銀座が華々しく復活した事に、みんな狂喜したものだつた。――今別段あの銀座通を歩いても、何の興味も湧かないが、併しあの當時、子供見たやうに狂喜した記憶は思ひ出しても惡くない。

淺草は六七年前に屢々出かけて行つた。これは少々莫迦々々しい事ではあるが、その頃、自分はへんに苛立たしい氣持で、何も蚊も無興味になつてしまつて、その日その日を持扱つてゐた。その中に、自分は最もとぼけた遊戯――球ころがしなるものに、へんに面白味を感じてしまつたのである。面白味といふのは當らないかも知れない。やけ糞な、わけの解らないやるせなさの捨て場――そんな風に云つた方がほんたうかも知れない。それは射的や引つかけ釣などと同じやうに並んでゐる遊戯場で、半間に一間の台に、穴が幾つか開いてゐて、それに『敷』とか『島』とか『朝』とか『日』とか書いてある。それに球を突き入れては、『朝』と『日』とに這入れば朝日一個が取れ、『敷』『島』に這入れば、敷島一個が取れると云つたやうな遊戯である。それをやつてゐるものは、職人、小僧、商人、さう云つた連中ばかりで、知識階級の人間など一人もない。――自分は毎日毎日、何といふ事なくそこに通つて行つた。自分に取つては活動寫眞も興味がなく、オペラも興味がないので、淺草の興味は、唯その球ころがし屋一つにかかつてゐた。それで、毎日淺草に出かけて行きながら、自分は淺草の何事にも殆んど氣がつかなかつた。その後自分は、その遊戯の熱中が少し鎭まつたので、それから淺草のその他の部分を歩きまはつて見るやうになつたが、淺草といふものの複雜さは、自分には未だによく解らない。上にのべた球ころがしにしろ、花屋敷にしろ、活動小舍にしろ、安來節にしろ、道ばたのアイスクリーム屋にしろ、夜遲くなると怪しい場所へ客を案内しようとする朦朧車夫にしろ、すり、きんちやくきり、無頼漢、詐欺師等と云ふやうなものを、その素性を百も承知しながら、平氣で止宿客としてゐる宿屋にしろ、公園のベンチの上で、夏や春秋は愚か、冬でさへも居眠りしてゐる浮浪人にしろ、ただれて、はげたペンキのやうな顏をしてゐる女達にしろ、一つとしてこの大東京の裏面

のやけくそと現世的な享樂と悲慘とを語つてゐないものはないが、併しそれをもう少し深く見ると、その表面のみだりがましさの底に、淺草には又不思議に澄んだ、眞實な、江戸の傳統が殘つてゐる。——十二時過ぎ頃、北田原町の『公園への近道』である、西側に飲食店の並んでゐる細い露次、そんな中に深更まで店を開いてゐる支那料理屋などに寄つて見ると、そこには雜多な客のゐる中に、土地の人の湯歸りにワンタンなどを食べてゐるのに出會ふ事がある。それ等の人々同志が挨拶してゐるところを見ると、何處までも洗練されてゐて、義理堅くて、丁寧で、そして新開地東京市の何處でも見られない温かみと深切心とが感ぜられる。それはぢみでもあり、深く彼等の住んでゐる土地を愛してもゐる、不思議に垢拔けた人々である。自分はさういふ人々を見ると、久保田万太郎氏の作物などを思ひ出すが、淺草といふものの複雜さが想像されて、我々門外漢には、この土地を見究める事は容易な業ではないといふ氣がつくづくする。今の東京で最も騷雜なものと最も透明なものとを同時に持つてゐる——自分は時々この土地に住んで、この土地のさういふ性質を、もつと知つて見たいやうな氣がする。地震後は前ほどの品物もなくなつたやうだが、區役所横丁——あの大阪の心齋橋筋などを思ひ出させるやうな細い横丁の兩側のショウウヰンドウも、淺草のけばけばしさとは反對の、質實な感じのするもので、自分はあすこを歩く事が好きだが、淺草の眞面目は六區よりも、却つてこの邊に味はれる氣がする。

扨て結論だが、銀座を理解する事は何も六ケ敷い事はない。三度か四度あの通を行つたり來たりして、二軒か三軒、カッフエエで珈琲を飲んでればそれでいい。昔煉瓦地と云つたものだが、その名稱通りに、西歐文明を片つぱしから鵜呑みにする、日本の現代を代表するために生れた街で、一軒の店で佛蘭西製の新香水を賣つてゐれば、その隣りでは獨逸製の强精劑を賣つてゐる。そしてモダーン・ガールとモダーン・ボーイとが、腕を組み合つて、レコードから覺えた外國の歌を口笛で吹きながら歩いて行く。——その通り、諸君の眼に見える通りが銀座である。この街はこの調子で今後も發展すべきで、今後復興局のやる通りに、近代的西歐都市の形を、益々模倣して行けばそれでいい。(或畫家や趣味家が、日本の江戸時代のやうな建物で銀座を復興せよと云ふやうな事を云つてゐたが、まあそんな事は却つて銀座としては厭味になるだらう。)

ところが、淺草を理解する事はとても六ケ敷い。これは三度四度の散歩では到底解らない。尠くとも二年や三年は住んで見なければ、その眞相は解らないだらう。(終)

ダイダラ坊の足跡

柳田國男

一　巨人來往の衝

東京市は我日本の巨人傳說の、一箇の中心地と云ふことが出來る。我々の前住者は、大昔曾てこの都の青空を、南北東西に一跨ぎに跨いで、歩み去つた巨人のあることを想像して居たのである。而うして何人が記憶して居たのかは知らぬが、其巨人の名はダイダラ坊であつた。

二百五十年前の著「紫の一本」に依れば、甲州街道は四谷新町のさき、笹塚の手前にダイダ橋がある。大多ぼつちが架けたる橋のよし言ひ傳ふ云々とある。即ち現在の京王電車線、代田橋の停留所と正に一致するのだが、あのあたりには後世の玉川上水以上に、大きな川は無いのだから、巨人の偉績としては甚だ振はぬものである。併し村の名の代田は偶然で無いと思ふ上に、現に大きな足跡が殘つて居るのだから爭はれぬ。

私は到底其舊跡に對して冷淡であり得なかつた。七年前に役人を罷めて氣樂になつたとき、早速日を卜して之を尋ねて見たのである。ダイダの橋から東南へ五六町、其頃はまだ畠中であつた道路の左手に接して、長さ約百間もあるかと思ふ右片足の跡が一つ、爪先あがりに土深く踏み付けてある。と言つてもよいやうな窪地があつた。内側は竹と杉若木の混植で、水が流れると見えて中央が藥研になつて居り、踵の處まで下ると僅かな平地に、小さな堂が建つて其傍に涌き水の池があつた。即ちもう人は忘れたかも知れぬが、村の名のダイダは確かに此足跡に基づいたものである。

あの頃發行せられた武藏野會の雜誌には、更に此鄰村の駒澤村の中に、今一つのダイダラ坊の跡があることを書いてあつ

た。それを讀んで居た自分は此日更に地圖を辿りつゝ、其方に向つて巡禮を續けたのである。足跡の一つは玉川電車から一町ほど東の、たしか小學校と村社との中程に在つた。是も道路のすぐ左に接して、略同じ位の窪みであつたが、草生の斜面を畠などに拓いて、もう足形と見ることは困難であつた。併し踵のあたりに清水が出て居り、其末は小流をなして一町歩ばかりの水田に漑がれて居る。それから第三のものは小字の名も道も忘れたが、何でも是から東南へ尙七八町も隔てた雜木林の間であつた。附近に所謂文化住宅が建たうとして、盛んに土工をして居たから、或は既に湮滅したかも知れぬ。是は周圍の林地より僅か低い沼地であつて、自分が見た時にも早足跡に似た點はちつとも無く、住民は新地主で、尋ねても言ひ傳へを知らなかつた。さうして物ずきな所謂史蹟保存も、流石に手を著けては居なかつたやうである。

代田と駒澤とは足の向いた方が一致せず、おまけに皆東京を後にして居るが、之に由つて巨人の通つた路筋を考へて見ることは出來ぬ。地下水の露頭の爲に土を流した場處が、通例斯ういふ足形窪を作るものならば、武藏野は水源が西北に在る故に、ダイダラ坊はいつでも海の方又は大川の方から、奧地に向いて濶歩したことになるわけである。江戶には諸國より色々の人が來て住んで、近世始めて開けた原野が多からうと思ふのに、[illegible]時の間に處々の郊外に、斯うして大昔の物語を傳へたものか。自分たちは之を單なる不思議と驚いてしまはずに、今すこ[illegible]しんみりと考へて見たいと思つて居る。

たゞ不幸なことには多くの農民の傳說が、江戶の[illegible]にも[illegible]錄せられぬうちに消えてしまつた。百年あまり前のことで[illegible]る。小石川小日向臺の本法寺といふ門徒寺の隱居に、十方庵[illegible]順といふ煎茶のすきな老僧があつた。たゝみ焜爐といふ物を[illegible]道具と一しよに携帶して、日返りに田舍へ出かけて、方々の[illegible]の陰に行つて茶を飲み、野らに働く人たちを捉へて話を聽[illegible]た。遊歷雜記と題する此坊さんの見聞錄が、江戶叢書の一部[illegible]して出版せられて居る。それを搜して見るとほんの一つだけ[illegible]王子の豐島の渡しの少し手前の畑の中に、ダイダボッチの塚[illegible]いふものがあつたことを誌してある。こゝでも土地の字は代[illegible]と謂ひ、昔巨人が此邊をあるいた時、其草鞋にくつゝいて居[illegible]砂が落ちこぼれて、此塚になつたと村の人たちが彼に話した[illegible]ある。其塚は今どこに在り、其口碑を談つた農夫の家は、ど[illegible]なつてしまつたかも尋ねやうは無いが、兎に角に生眞面目に[illegible]んな昔話を聽いたり語つたりした者が、つひ近年迄はこの地[illegible]さへ居たのである。

二　デエラ坊の山作り

松屋筆記には又斯んな話を書いて居る。著者は前の煎茶俳と略同じ時代の人である。曰く、武相の國人常にダイラボッチとて、形大なる鬼神が居たことを話する。相模野の中に在る大沼といふ沼は、大昔ダイラボッチが富士の山を背負つて行かうとして、足を踏張つた時の足跡の窪みである。又此原に藤といふもの丶少しも無いのは、彼が背負繩にするつもりで藤蔓を搜し求めても得られなかつた因縁を以て、今でも成長せぬのだと傳へて居る云々。自分は以前何回もあの地方に散歩して此事を思ひ出し、果して村の人たちが今ではもう忘れて居るか否かを、確めて見たい希望を持つて居たが、それを同情して八王子の中村成文君が、特に我々の爲に調べてくれられた結果を見ると、中々どうして忘れてしまふどころでは無かつた。

右の大沼とは同じで無いかも知れぬが、今の横濱線の淵野邊停車場から見える處に、一つの窪地があつて水ある時には之を鹿沼と謂つて居る。それから東へ寄つて是も鐵道のすぐ傍に菖蒲沼があり、二つの沼の距離は約四町である。デエラボッチは富士山を背負はうとして、藤蔓を求めて相模野の原ぢうを捜したが、どうしても無いので殘念でたまらず、ぢんだら(地團太)を踏んだ足跡が、この二つの沼だといふ。又此原の中程には幅一町ばかり、南北に長く通つた窪地がある。デエラボッチが擔桙を引きずつてあるいた跡と稱し、現に其地名をふんどし窪ととなへて居る。境川を北に渡つて武藏の南多摩郡にも、之と相呼應する傳說は幾らもある。例へば由井村の小比企といふ部落から、大字宇津貫へ越える阪路に、池の窪と呼ばるゝ凹地がある。長さは十五六間に幅十間ほど、梅雨の時だけは水が溜つて池になる。是もデエラボッチが富士の山を背負はんとして、一跨ぎに踏張つた片足の痕で、今一方は駿河國に在るさうだ。成ほど足跡だといへばさうも見えぬことは無い。又同郡川口村の山入といふ部落では、繩切と書いてナギレと訓む字に、附近の山から獨立した小山が一つある。是はデエラボッチが背に負うて遣つて來たところ、繩が切れて爰へ落ちた。其繩を繋ぐ爲にふぢ蔓を探したが見えぬので、大にくやしがつて今から此山にふぢは生えるなと言つたさうで、今日でも山中此地に限り、ふぢは成長せぬと傳へて居る。但し其ふぢといふのは葛のことであつた。巨人なればこそ其樣な弱い物で、山でも擔いで持運ぶことが出來たのである。

甲州の方ではレイラボッチなる大力の坊主、麻殻の棒で二つの山を擔ひ、遠くへ運ばうとして其棒が折れたといふ話が、一

本傳說集にも甲斐の落葉にも見えて居る。東山梨郡加納岩村の石森組には、其爲に決して麻は栽ゑなかつた。栽ゑると必ず何か悪い事があつた。其時落ちたといふ二つの山が、一つは鹽山であり他の一つは石森の山であつた。或知人の話では鍬の柄で二つの土塊を荷なつて行くうちに、一つは抜け落ちて鹽山が出來たと謂ひ、其男の名をデイラボウと傳へて居た。デイラホウは其まゝ信州の方へ行つてしまつたといふことで、諸處に足跡があり又幾つかの腰掛石もあつた。

我々の祖先はいつの世からとも無く、孤山の峯の形の秀麗なるものを拜んで居た。飯盛山といふのが、その最も普遍した名稱であつた。御山御嶽として特に禮拜する山だけは、此通り起原が尋常で無いものゝ如く、說明せられて居たやうに思はれる。後には勿論之を信ずる能はざる者が、所謂大話(おほばなし)の著想の奇に興じたことは確かだが、最初に重きを置いたのは麻殼葛の莖の點では無かつたらうと思ふ、六かしく言ふならば此種巨人譚の比較から、どの位まで精密に根原の信仰が辿つて行かれるか。それを究めて見たいのが此篇の目的である。必ずしも見かけほど呑氣な問題では無いのである。

三　關東のダイダ坊

自分たちは先づ第一に、傳說の舊話を保存する力といふものを考へる。足跡がある以上は本當の話だらうといふことは、論理の誤りでもあらうし、又最初からの觀察法では無かつたらうが、兎に角に斯んなをかしな名稱と足跡とが無かつたならば、如何に誠實に古人の信じて居た物語でも、さう永くは我々の間に、留まつて居なかつた筈である。東京より東の低地の國々に於ては、山作りの話は漸く稀にして、足跡の數はいよ〱多い。即ち神話は遠い世の夢と消えて後に、人は故郷の傳說の巨人を引連れて、新たに此方面に移住した結果とも、想像せられぬことは無いのである。けだし形狀の少しく足跡に似た窪地をさして、深い意味も無くダイラボッチと名付けたやうな場合も、或時代には相應に多かつたと見なければ、說明のつかぬ程の分布があることは事實だが、大本に溯つて若し巨人は足痕を遺すもの也といふ教育が無かつたら、到底是までの一致を期することは出來ぬかと思ふ。

上總下總は地名なり噂話なりで、ダイダの足跡の殊に遍ねき地方と想像して居るが、自分が行つて見たのは一箇處二足分に過ぎなかつた。旅はよくしても中々そんな處へは出くはせるもので無い。上總では茂原から南へ丘陵を一つ隔てゝ、鶴枝川が西東に流れて居る。其右岸の立木といふ部落を少し登つた傾斜

面の上の方に、至つて謙遜なるダイダッポの足跡が一つ殘つて居た。足袋底の型程度の類似はもつて居るが、此邊が土ふまずだと言はれて見ても、なる程と迄は答へにくい足跡であつた。面積は僅かに一畝と何歩、周圍は雜木の生えた原野なるに反して、此部分のみは麥畠になつて居た。爪先は要でも高みの方を向いて居る。土地の發音ではライラッポとも聞える。兩岸の岡から岡へ一跨ぎにしたと言ふのであるが、向ひの上永吉の方では、松のある尾崎が近年大に崩れて、もう足跡だと說明することが出來なくなつて居る。たゞ其の少しの地面のみが別の地主に屬し、左右の隣地を他の一人で持つて居る事實が、多分以前は除地であつたことを、想像せしめるといふだけである。

埴生郡岡見漫錄を見ると、此地方の海岸人がダンダアと謂ふのは、坊主鮫とも稱する一種の怪魚であつた。それが出現すると必ず天氣が變ると傳へられた。或は關係は無いのかも知れぬが、事によるとダイダ坊も海から來ると想像したのではあるまいか。常陸の方では、風俗畫報に出た「茨城方言」に、ダイダラボー、昔千波(せんば)沼邊に住める巨人なりといふ。土人言ふ此人大昔千波沼より東前池(ひがしまへいけ)まで、一里餘の間を一跨ぎにし、其足跡が池となつたと言ひ傳ふる假想の者だとある。其足跡の話は吉田氏の地名辭書にも見え、或は椎塚村のダッタイ坊などの如く、あちこち徘徊した形跡は勿論あるが、それを古風土記の大櫛岡の物語が、其儘殘つて居たものと解することは、常陸の學者には都合がよろしくとも、他の方面の傳說の始末が付かなくなる。自分はさういふ風に地方々々で、獨立して千年以上を持ち傳へたやうには考へて居ないのである。

下野では又鬼怒川の岸に立つ羽黑山が、昔デンデンボメといふ巨人の落して往つた山といふことになつて居る。此山に限つて今何一筋の藤葛も無いのは、山を背負つて來た時に藤の繩が切れた爲だといふのは、少々ばかり推論の繩が切れて居る。或は此山に腰を掛けて、鬼怒川で足を洗つたと謂ひ、近く其時の足跡と傳ふる二反歩ばかりの沼が二つあり、土地の名も淺沼と呼ばれて居る。足のすぐれて大きな人を、今でもデンデンボメ樣だと謂つて笑ふといふのも(日本傳說集)、信州などの例と一致して居る。

枝葉にわたるが足を洗ふといふ昔話にも、何か信仰上の原因があつたのでは無いかと思ふ。私の生れた播州の田舍でも、川の對岸の山崎といふ處に、淵に臨んだ岩山があつて、夜分此下を通つた者の怖ろしい經驗談が多く流布して居た。路を跨いで偉大なる毛脛が、山の上から川の中へぬつと突込まれたのを見たなどゝ謂つて、其土地の名を千束と稱するが、センゾクは又

分洗足であらうと思つて居る。江戸で本所の七不思議の一つに、足洗ひといふ怪物を說くことは人がよく知つて居る。深夜に天井から足だけが一本づゝ下がる。之れを主人が社杯で盥を採つて出て、恭しく洗ひ奉るのだといふなどは、空想としても必ず基礎がある。洗はなければならなかつた足は、遠い路を步んで來た者の足であつた。即ち山を作つた旅の大神と、關係が無かつたとは言はれぬのである。

四　百合若と八束脛

上野國では三座の靈山が、初期の開拓者を威壓した力は、却つて富士以上のものがあつたかと想像せられる。乃ち其峰毎に最も素朴なる巨人譚を、語り傳へた所以であらう。例へば多野郡の木部の赤沼は、伊香保の沼の主に嫁いだといふ上臈の故鄕で、我民族の間に殊に美しく發達した二處の水の神の交通を傳ふる說話の、注意すべき一例を留めて居る沼であるが、是もダイラボッチが赤城山に腰を掛けて、うんと踏張つた足形の水溜りだといふ口碑がある。榛名の方では又榛名富士が、駿河の富士よりも一もつこだけ低い理由として、其傍なる一孤峯を一畚(ひともつこ)山と名けて居る。或はそれを榛名山の一名なりとも謂ひ、今一畚足らぬうちに、夜が明けたので山作りを中止したとも傳へる。其土を取つた跡が、あの閑かな山中の湖水であり、富士は甲州の土を取つて作つたから、それで山梨縣は擂鉢の形だと、餘計な他所の事まで此序を以て語つて居る。此山の作者の名は單に大男と呼ばれて居る。榛名の大男は曾て赤城山に腰をかけて、利根川の水で足を洗つた。其折に臑(すね)に附いて居た砂を落したのが、今の膝神の社の丘であるとも謂ふ。

それから妙義山の方では山上の石の窓を、大太(だいだ)といふ無双の強力があつて、足を以て蹴開いたといふ話がある。仲仙道の路上から此穴のよく見える半年石(はんねじ)といふ處に、路傍の石の上に大なる足跡のあるのは、其時の記念なりと傳へられた。鍼石錄といふ書には、大太は南朝の忠臣なり、出家して其名を大太法師、又の名を妙義と稱すとあるが、如何なる行違ひからであらうか。貝原益軒の岐蘇路記を始とし、此地を過ぐる旅人は、多くは之を百合若大臣の足跡と教へられ、あの石門は同人が手馴らしの鐵の弓を以て、射拔いた穴だといふ說の方が有力であつた。百合若は舞の本に依れば玄海の島に年を送り、とても關東の諸國までは旅行をする時をもたなかつたやうに見えるが、各地に其遺跡があるのみか、その寵愛の鷹の綠丸までが、奧羽の果でも塚を築いて祀はれて居る。如何なる順序を經てさういふことになつたかは、茲で簡單に說き盡すことは不可能だが、つ

まりは村々の昔話に於て、相應に人望のある英雄ならば、思ひの外無造作にダイダラ坊の地位を、代つて占領することを得たらしいのである。

自分の是からの話は大部分が其證據であつて、特に實例を擧げる迄も無いのだが、周防の大島の錨ヶ峠の近傍には、現在は武藏坊辨慶の足跡だと稱するものが殘つて居る。昔笠佐の島が流れようとした時に、辨慶ここに立つて踏張つて之を止めたといふのである。紀州の日高郡の湯川の龜山と和田村の入山とは、同じく辨慶が畚に入れて荷うて來たのだが、鹿瀬峠で朸が折れて、落ちて此土地に殘つたと謂ひ、大和の畝傍山と耳成山、一說には畝傍山と天神山とも、やはり萬葉集以後に武藏坊がかいつで來たといふ話がある。朸がヤーギと折れた處が八木の町、いま〳〵しいと棒を棄てた處が、今の今井の町だなどゝも傳へられる。そんな事をしたとあつては、辨慶は人間でなくなり、從つて此世に居なかつたことになるのである。實に同人の爲には有難迷惑な同情であつた。

それは兎も角として信州の側へ越えて見ると、亦盛んにダイダラ坊が活躍横行して居る。戸隱參詣の道では飯綱山の荷負池が、中陵漫錄にも出て居て既に有名であつた。此以外にも高井郡沓野の奥山に一つ、木島山の奥に一つ、更級郡猿ヶ番場の峠にも一つ、大樂法師の足跡池があると、信濃佐々禮石には記して居る。少し南へ下れば小縣郡の靑木村と、東筑摩郡の坂井村との境の山にも、其間二十餘丁を隔つて二つの大蛇法師の足跡があり、何れも山頂であるのに夏も水氣が絶えず、莎草科の植物が茂つて居る。昔巨人は一跨ぎに此山脈を越えて、千曲川の盆地へ入つて來た。其折兩手に提げて來たのが男嶽女嶽の二つの山で、それ故に二峰は孤立して間が切れて居るといふ。

東部日本の山中には此類の濕地が多い。それを鬼の田又は鬼の田と名けて、或は蒔かず稻の口碑を傳へ、或は稻に似た草の成長を見て、村の農作の豐凶を占なふ習ひがあつた。それが足の田足の窪の地名を有つことも、信州ばかりの特色では無いが、松本市の周圍の丘陵には其例が殊に多く、大抵は亦デエラボッチヤの足跡と說明せられて居るのである。話をして見たいが長くなるから我慢をする。只一言だけ注意を引いて置くのは、爰でも武相の野と同じやうに、相變らず山を背負うて來た繩が切れて居ることである。足跡の濕地には甚だしい大小があるに拘らず、落し物をして去つたといふ點は殆ど同一人らしい粗忽である。小倉の室山に近い背負山は、デエラボッチヤの背負子の土より成ると謂ひ、市の東南の中山は履物の土のこぼれ、倭村の火打岩は彼の燧石であつたといふが如き、何れも一箇の

說話の傳說化が、到る處に行はれたことを示すのである。

但し物臭太郎の出たといふ新村の一例のみは、或はダイダラ坊では無く三宮明神の御足跡だといふ說があつたさうだ。今日の眼からは容易ならぬ話の相違とも見えるが、さういふ變化は既に幾らでも例があつた。上諏訪の小學校と隣する手長神社なども、祭神は手長足長といふ諏訪明神の御家來と傳ふる者もあれば、又デクラボッチだといふ人もあつて、舊神領內には數箇所の水溜りの、此のどちらとも知れぬ大男の足跡から、出來たといふ窪地が今でもある。手長は中世までの日本語では、單に給仕人又侍者を意味し、實際は必ずしも手の長い人たることを要しなかつたが、所謂荒海の障子の長臂國、長脚國の蠻民の話でも傳はつたものか、さういふ怪物が海に迫つた山の上に居て、或は手を伸ばして海中の蛤を捕つて食ひ、或は往來の旅人を惱まして、後に神明佛陀の御力に濟度せられたといふ類の言ひ傳へが、方々の田舍に保存せられて居る。名稱の起りはどうあらうとも、畢竟は人間以上の偉大なる事業を爲し遂げた者は、必ず亦非凡なる體骼を持つて居たらうといふ、極めてあどけない推理法が、一番の根源であつたことは略確かである。それが次々に更に畏き神々の出現によつて、征服せられ統御せられて、終に今日の如く零落するに至つたので、ダイダばかりが見越し入道でも轆轤首でも、曾て一度はそれぞ〱の黃金時代を、もて居たものとも想像し得られるのである。

故に作者といふ職業の今日の如く完成する以前には、コントには必ず過程があり種子萌芽があつた。さうしてダイダラ坊は單に幾度か名を改め、其衣服を脫ぎ替へるだけが、許されたる空想の自由であつた。例へば上州人の氣魂の一面を代表する八掬脛といふ豪傑の如きも、なるほど名前から判ずれば土蜘蛛の亞流であり、又長髄彥手長足長の系統に屬するやうに見えるが、その最後に八幡神の統制に歸服して、永く一社の祀を受けて居ると云ふ點に於ては、依然として西部各地の大人彌五郎の形式を存するのである。しかも曾ては一夜の中に、榛名富士を作り上げたとまで歌はれた巨人が、僅かに貞任宗任の一族阿倍三太郎某の、其又殘黨だなどと傳說せられ、繩梯子を切られて巖屋の中で餓死をしたといふ樣な、花やかならぬ最後を物語られたのも、實は亦無用な改名に累はされたものであつた。八掬脛はさう大した名前ではない。一掬を四寸としても精々三尺餘りの脛である。だから近世になると色々な講釋を加へて、少しでも其非凡の度を恢復しようとした跡がある。例へば此國の[illegible]主小幡宗勝、毎日牛に乘つて京都へ參覲するに、午の刻に家を立つて申の刻には到着する。依て羊太夫の名を賜はり多胡の[illegible]

銘に名を留めて居る。八束小脛は其家來であつて、日々半太夫の供をして道を行くこと飛ぶが如くであつたのを、或時晝寢をして居る脛の下を見ると、鳥の翼の如きものが生えて居た。それを拔り取つてから隨行が出來ず、半太夫も參勤を怠るやうになつて、後には讒言が入つて主從ながら誅罰せられた、などゝ語り傳へて愈々我ダイダラボチを小さくしてしまつた。

五　一夜富士の物語

話が長くなるから東海道だけは急いで通らう。此方面でも地名などから、自分が見當を付けて居る場處は段々あるが、實はまだ見に行く折を得ないのである。遠州の袋井在では高部の狐塚の西の田圃に、大ダラ法師と稱する涌水の地があるのを、山中共古翁は往つて見たと言はれる。見附の近くでは磐田原の赤松川爵の開墾地の中にも、雨が降れば水の溜まる凹地があつて、それは大ダラ法師の小便壺と謂つて居るさうである。尾張の呼續町の内には大道法師の塚といふものがあることを、張州府志以後の地誌に皆書いて居る。日本靈異記の道場法師は、同じ愛知郡の出身である故に、彼と此と一人の法師であらうといふ說は、主として此地方の學者が聲高く唱へたやうであるが、それも辨慶百合若同樣の速斷であつて、到底一致の出來ぬ途法も無い距離のあることを、考へて見なかつた結果である。

例へば丹羽郡小富士に於ては、やはり一簣の功を欠いた昔話があり、木曾川を渡つて美濃に入れば、いよ〳〵其樣な考證を無視するに足る傳說が、もう幾らでも村々に分布して居るのである。通例其巨人の名をダヾ星樣と呼んで居るといふことは、前年「民俗」といふ雜誌に藤井治右衛門氏が書かれたことがある。此國舊石津郡の大淸水、兜村とかの近くにも、大平(だいら)法師の足跡といふものがあると、美濃古蹟考から多くの人が引用して居る。里人の戯談に此法師近江の湖水を一跨ぎにしたと謂ふとあることは有名な話である。

奇談一笑といふ書物には何に依つたか知らぬが、その近江の昔話の一つの形かと思ふものを載せて居る。古大々法師(だいだほし)といふ者あり。善積郡の地を擧げて悉く掘りて一簣と爲し、東に行くこと三歩半にして之を傾く。その掘る所の處は即ち今の湖水、其委土(よつち)は今の不二山なりと。而うして江州に在る所の三上(みかみ)鎭岩倉野寺等の諸山は、何れも簣の目より漏り下るものといふとある。孝靈天皇の御治世に、一夜に大湖の地の土が飛んで、駿河の名山を現出したといふことは、隨分古くから文人の筆する所であつたが、それが單に噴火の記事を傳へたのなら、恐らく此樣には書かなかつたであらう。即ち神聖なる作者の名を逸した

のみで、神が山を作るといふことは當時至つて普通たる信仰であつた故に、詳しい年代記としては當然に之を錄したといふに過ぎたかつた。日本紀略には天武天皇の十三年十月十四日、東の方に鼓を鳴らすが如き音が聞えた。人ありて曰ふ、伊豆國西北の二面、自然に增益すること三百餘丈、更に一島を爲す。則ち鼓の音の如きは神此島を造りたまふ響なりと。伊豆の西北には島などは無く　大和の都まで音が聞える筈も無いのに、正史に洩れて數百年にして此事が記錄に現れた。しかも日本の天然地理には、斯う感じてもよい實際の變化は多かつた。乃ち山作りの神の永く足跡を世に遺すべき理由はあつたのである。

湖水の附近に於て、此信仰が尙久しく活きて居たらしいことは白髭明神の緣起などが之を想像せしめる。木內石亭は隣所の人で、石を研究した篤學の徒であつたが、其著雲根志の中に次の如く記して居る。甲賀郡の鮎河と黑川との境の山路に、八尺六面ばかりの巨石があつて、石の上に尺許の足跡が鮮かである。寶曆十一年二月十七日此地を訪ねて之を一見した。土人云ふこれは昔ダヽ坊といふ大力の僧あつて、熊野へ通らうとして道に迷ひ、此石の上に立つた跡であると。ダヽ坊は如何なる人とも知らず、北國諸所には大多法師の足跡といふものがあつて、是も如何なる法師かを知る者は無いが、思ふに同じ人の名であらうと述べて居る。自分の興味を感ずるのは、ダヽ坊といふ樣な奇妙な名は是ほど迄弘く共通して居りながら、却つて其跡たる足形の大さばかり、際限も無く伸縮して居ることである。

そこで試みにこの大入道が、果して何れの邊まで往つて引返し、若くは他の怪物に其事業を讓つて去つたかを、尋ねて見る必要があるのだが、京都以西は暫らく後廻はしとして、北國方面には自分の知る限り、今日はもうダイダ坊、或は大川坊の名を知らぬ者が多くなつた。併し三州奇談といふ書物の出來た頃までは、加賀の能美郡の村里にはタン〳〵法師の足跡といふ話が傳はり、現に又其足跡かと思はれるものが、少なくも此國に三足だけはあつた。所謂能美郡波佐谷の山の斜面に一つ、指の痕まで確かに凹んで、草の生えぬ處があつた。其次に河北郡の川北村、木越の道場光林寺の跡といふ田の中に、是も至つて鮮明なる足跡が殘つて居た。下に石でもある爲か、一筋の草をも生ぜず、夏は遠くから見てもよくわかつた。今一つは越中との國境、有名なる栗殼の打越に在つた。何れも長さ九尺幅四尺ほどとあるから、東京近郊のものとは比べものにならぬが、其間隔は共に七八里もあつて、或は加賀國を三足に步いたのかと考へた人もある。勿論其樣な細引の如き足長は、釣合ひの上からも到底之を想像することを得ないのである。

六　鬼と大人と

高木誠一君の通信に依れば、福島縣の海岸地方では、現在は單にオビトアシト(大人足跡)と稱へて居る。しかも其實例は極めて多く、現に同君の熟知する石城双葉の二郡內のものが、九ケ處まで算へられる。其面積は五畝步から一段まで、何れも濕地沼地であり、又は溜池に利用せられて居る。鐵道が縱斷してから元の形は損じたけれども、久ノ濱中濱の不動堂の前のつゝみ、それから北迫の牛沼の如きは、大人が此二ケ處に足を踏まへて三森山に腰をかけ、海で顏を洗つたといふ話などがまだ殘つて居るといふ。

宮城縣に入ると伊具郡鹿狼山の巨人などは、久しい前から手長明神として祀られて居た。山から長い手を延ばして貝を東海の中に探つて食うた。新地村の貝塚は即ち其貝殼を棄てた故跡などゝいふ口碑は、必ずしも常陸の古風土記の感化と解するを須ゐない。名取郡茂庭の太白山を始として、磯の田野には次次に奇拔なる印象が、多くの新らしい足跡と共に散亂して居たのである。但し大人の名前ぐらゐは、別に奧州の風土に適應して、發生して居てもよいのであるが、それさへ尙往々にして關東地方との共通があつた。例へば觀迹聞老志は漢文だからはつきりせぬけれども、昔白川に大膽子と稱する巨人があつて、村の山を背負つて隣鄉に持運んだ。下野の茂邑山は即ち是であつて、那須野の原には其時の足跡があるといふ。但し其幅は一尺で長さが三尺云々とあるのは、是も少しばかり遠慮過ぎた吹聽であつた。

尤も大膽子を本當の人間の大男と信ずる爲には、實は三尺二尺といつて見ても尙少しく行過ぎて居た。だから惡路王大竹丸赤頭といふ類の歷史的人物は、後に其塚を開いて枯骨を見たといふ場合にも、脛の長さは三四尺に止まり、齒なども長さ二寸か三寸のものが、精々五十枚ぐらゐまで生え揃うて居たやうにいふのである。從つて名は同じく大人と謂つても、近世岩木山や吾妻山に活きて住み、折々世人に怖ろしい姿を見せるといふ者は、言はゞ小野川谷風の少し延びた程で澤山なのであつた。それが紀伊大和の辨慶の如く、山を背負ひ巖に足形を印すといふことも、見やうによつては愈々以て尊び敬ふべしといふ結論に導いたかも知れない。即ち近江以南の國々の足跡面積の限定は、一方に於ては信仰の合理的成長を意味すると共に、他の一方には時代の好尙に追隨して、大事な昔話を滑稽文學の領域に、引渡すに忍びなかつた地方人の心持が窺はれると思ふ。若しさうだとすれば中世以來の道場法師說の如きは、亦歷史家た

ちの此態度に共鳴した、結果と言つてもよいのである。

奧羽地方の足跡の段々に小さくなり、且つ岩石の上に印した例の多くなつて行くことは、不思議に西部日本の端々と共通である。自分などの推測では、是は巨人民譚の童話化とも名くべきものが、琵琶湖と富士山との中間に於て、殊に早期に現はれた爲では無いかと考へる。しかも山作りの一條の其後に附添した挿話で無かつたことは、略確かなる證據がある。會津柳津の虛空藏堂の境內には、有名なる明星石があつて、石上の足跡を大人のだと傳へて居るのに、猪苗代湖の二子島では、鬼が荷なうて來た二箇の土塊が、落ちて此島となると稱し、其鬼が怒つて二つに折れた天秤棒を投込んだといふ場處は、湖水の航路でも浪の荒い難所である。即ち足跡は大抵人間より少し大きい位でも、神だから石が凹み、鬼だから山を負ふ力があつたと解したのである。增見遊覽記には南秋田の神田といふ村に、鬼步荷森があると記して、繪圖を見ると二つの路傍の塚である。あんな遠方までも尙大人は山を運んであるいた。さうして少なくとも其仕事の功程に由つて判ずれば、鬼とは謂つても我々のダイダラ坊と、もと／＼他人では無かつたらしいのである。

七　太郎といふ神の名

自分等が問題として後代の學者に提供したいのは、必ずしも世界多數の民族に併存する、天地創造譚の些々たる變化では無い。日本人の前代生活を知るべく一段と重要なのは、何時から又如何なる事由の下に、我々の巨人をダイダラ坊、若くは之に近い名を以て呼び始めたかといふ點である。京都の附近では山澤の遍照寺の邊に、大道法師の足形池あることを、都名所圖會に挿畫を入れて詳しく記し、乙訓郡大谷の足跡淸水は、京羽二重以下の書に之を說き、長さ六尺ばかりの指痕分明也とあつて、今の長野新田の字大道星は即ち是だらうと思ふが、去つて一たび播州の明石まで跨出せば、もうそこには辨慶の荷塚があつて、奧州から擔いで來た鐵棒が折れ、怒つて其棒で打つたと稱して頂上が窪んで居た。だからダイダ坊などはよい加減の名であらうと、高をくゝる人も或は無いと言はれぬが、自分だけはまだ決してさうは考へない。畿內の各郡から中國の山村にかけて、往つては見ないが大道法師、ダイダラ谷ダイダラ久保といふ地名が、竝べてよければ幾らでも玆に擧げられる。つまりは話は面白いが人は知らぬ故に、大人といふ普通名詞で濟まして置き、辨慶が評判高ければあの仁でもよろしとなつたのであらう。笠井新也君が池田の中學校に居た頃、生徒にすゝめて故鄕見聞錄を書かせた中に、備前赤磐郡の靑年があつて、地神山

東近山の山上の石の足跡を語るのに、大昔造物師といふ者が來て山から山を跨いで去つた。それで土人が其足跡を崇敬すると述べて居る。耶蘇教傳道の初期には、何れの民族にも斯んな融合はあつたものである。

紀州の百餘の大足跡は其五分一を辨慶に引渡し、殘りを大人の手に保留して居る。美作の大人足跡も其一部分を土地の怪傑目崎太郎や三穗太郎に委讓して居る。西は備中備後安藝周防、長門石見などでも只大人で通つて居る。それから四國へ渡ると讃州長尾の大足跡、又大人の蹴切山がある。伊豫でも同じく長尾といふ山の麓に大人の遊び石といふ二個の巨巖があつた。阿波は劒山々彙を繞つて、固より數多い大人樣の足跡があり、或は名西地方の平地の丘に、山作りの畚の目から、こぼれて出來たといふものも二つもある。土佐でも幡多高岡の二郡には、色々此例があつて何れも單に大人田、もしくは大人足跡で聞えて居た。だからもう此方面にはダイダラ坊の仲間は無いのかと思ふと、豈に測らんや柳瀨貞重の筆錄を見ると、却て阿波に近い韮生郷の山奥に、同名の巨人は依然として隱れて居た。即ち此筆者の居村たる柳瀨の在所近くに、立石光石降石の三個の磐石があつて、前の二つはダイトウボウシ之を棒にかつぎ、降石は袂に入れて此地まで歩いて來ると、袖が綻びてすつこ抜けて爰へ落ちた。それで降石だと傳へて居たのである。

そこで私たちは是ほどにして迄も、是非ともダイドウボウシでなければならなかつた。理由は何かといふことを考へて見る。それには先づ最初に心づくのは、豐後の嫗嶽の麓に於て、神と人間の美女との間に生れた大太といふ怪力の童兒である。山崎美成の大多法師考に引用する書言字考には、近世山野の際に往々にして大太坊の足跡と傳ふるものは、疑ふらくはこの蹴童のことかと言つて居る。證據はまだ乏しいのだから冤罪であつては氣の毒だが、少なくとも緒方氏臼杵氏等の一黨が、この大太を家の先祖とせんが爲に、頗る古傳の修正を試みた痕は認められる。成程後に一方の大將ともなるべき勇士に、足跡が一反歩もあつては實は困つたもので、山などはかついで來なくとも、別に神異を說く方便はあつたのであらう。しかもどうして大太といふが如き名を附いたかと言へば、やはり神子にして且つ偉大であつたことが、その當初の特徵であつた故なりと解するの他は無いのである。

柳亭種彥の用拾箱には、大太發意は即ち一寸法師の反對で、是も大男をひやかした名だらうと言つてある。大太郎といふいみじき盜の大將軍の話は、夙く宇治拾遺に見えて居り、烏帽子商の大太郎は盛衰記の中にもあつて、至つて有觸れた名だから

不思議も無いやうだが、自分は更に溯つて、何故に我々の家の惣領息子を、タラウと呼び始めたかを不思議とする。漢字が入つて來てちやうど太の字と郎の字を宛てゝもよくなつたが、それよりも前から藤原の鎌足だの、足彦帶媛（たらしひこたらしひめ）だのといふ貴人の御名があつたのを、丸で因みの無いものと斷定することが出來るであらうか。筑後の高良社の延長の解狀には、大多良男と大多良咩の此國の二神に、從五位下を授けられたことが見え、宇佐八幡の人聞菩薩朝記には、豐前の猪山にも大多羅咩神を祭つてあつたと述べて居る。少なくもその頃までは、神に此樣な名があつても怪まれなかつた。さうして恐らくは人類の爲に、射貫き蹴裂きといふやうな奇拔極まる水土の功を爲し遂げた神として、足跡は又其宣誓の證據として、神聖視せられたものであらうと思ふ。

八　古風土記の巨人

さう考へるとダイダラ信仰の發祥地で無ければならぬ九州の島に、却つて其口碑のやゝ破碎して傳はつた理由もわかる。即ち九州東岸の宇佐と其周圍は、巨人神話の古くからの一大中心であつた故に、同じ古傳を守るときは地方の神々は其勢力に捲込まれる懸念があつたのみならず、一方本社に在つては次々の託言を以て、山作り以上の重要なる神德を宣揚した結果、自然に他の神々が比較上小さくなつてしまふので、寧ろ之を語らぬのを有利とする者が多くなつたのである。是は決して私の空漠たる想像說では無い。日本の八幡信仰の興隆の歷史は、殆ど一つ一つの過程を以て、之を裏書して居ると言つてよいのだ。

之を要するに巨人が國を開いたといふ說話は、本來此民族共有の財產であつて、神を恭敬する最初の動機、神威神力の承認も是から出て居た。それが東方に移住して童幼の語と化し去る以前、久しく大多良の名は仰ぎ尊まれて居たので、其證跡は足跡よりも尙鮮明である。諾冊二祖の大八洲生誕は說くも畏こいが、今殘つて居る幾つかの古風土記には、地方の狀況に應じて若干の變化はあつても、一として水土の大事業を神に委ねなかつたものは無いと言つてよろしい。其中に在つては常陸の大櫛岡の由來の如きは寧ろ零落である。それよりも昔なつかしきは出雲の國引きの物語、さては播磨の託賀郡の地名說話の如き、目を閉ぢて之を暗んずれば、親しく古へ人の手を打ち笑ひ歌ふを聽くが如き感がある。まだ知らぬ諸君の爲に、一度だけ之を誦して見る。曰く、右託加（たか）と名くる所以は、昔大人ありて常に勾（かゞ）りて行きたりき。南の海より北の海に到り、東より（西に）巡る時に此ところに來到りて云へらく、他のところは卑くして常

に匐り伏して行きたれども、此ところは高くあれば伸びて行く。高きかもといへり。かれ託賀の郡とは曰ふなり。その踰める迹處、しば〳〵に沼を成せり(以上)。私は實際斯う語つた人の後裔であることを、誇りとする者である。

證據は斷じて是ばかりでは無かつた。南は沖繩の島に過去數千年の間、口づから耳へ傳へて今も尙保存する物語にも、大昔天地が近く接して居た時代に、人は悉く蛙の如く這つてあるいた。アマンチュウは之を不便と考へて、或日堅い岩の上に踏張り、兩手を以て天を高々と押上げた。それから空は遠く人は立つて步み、其岩の上には大なる足跡を留めることになつた。或は又日と月とを天秤棒に擔いで、そちこちを步き廻つたこともある。其時棒が折れて日月は遠くへ落ちた。之を悲んで大に泣いた淚が、國頭本部の淚川となつて、末の世までも流れて絕えせずと傳へて居る(故佐喜眞興英君の南島說話に依る)。アマンチュウは琉球の方言に於て、天の人即ち大始祖神を意味して居り、正しく此群島の盤古であつた。さうして是が赤道以南のポリネシヤの島々の、ランギパパの昔話と近似することは、私はもう之を架說するの必要を認めない。

九　大人彌五郎まで

是までに大切なる我々が創世紀の一篇は、やはり人文の錯
に基いて、後漸く微にして且つ馬鹿々々しくなつた。九州北西
の英雄神は、故意に宇佐の勢力を回避して外海に向はんとした
かの如き姿がある。壹岐の名神大社住吉の大神は、英武なる皇
后の征韓軍に先つて、まづ此島の御津浦に上陸なされたと稱し
て、大宰管內志には御津八幡の石垣の下にある二石と、此浦の
道の辻に立つ一つの石と、三箇の御足形の寸法を詳述して居
る。何れも其大さ一尺一二寸、爪先は東から西に向いて居る。
信徒の目を以て見れば、それ自身が神の偉動の記念碑に他なら
ぬのだが、しかも壹岐名勝圖誌の錄する所では、此島國分の初
丘の上に在るものは、大は則ち遙かに大であつて、全長南北に
二十二間拇の痕五間半踵の幅二間、少し凹んで水づいて居ると
あるが、是は昔大といふ人があつて、九州から對島に渡る際
に、足を踏み立てた跡だと謂ひ、しかも村々にも同じ例が多か
つたのである。それ迄はまだよいが、肥前平戶島の海香瀨頭で
は、切支丹伴天連と稱する怪物があつて、海上を下駄ばきで步
月其他の島々に跨いだとも謂つて居る。即ち古く近江の石山寺
の道場法師の故迹と同じく、殘つて居るのは下駄の齒の痕であ
つたのである。

それから南へ下つては肥後鹿本郡吉松村の北、隣村では

根の七不思議に算へられる波留（はる）の大石の如き、共に大人の足跡といふのみで、神か鬼かのけぢめさへ明瞭で無い。其名の早く消えたのも怪むに足らぬのである。ところが是から東をさして進んで行くと、諸處に恰かも群馬縣の八掬脛の如く、神に統御せられた大人の名と話が分布して居る。阿蘇明神の管轄の下に於ては鬼八法師、又は金八坊主といふのが大人であつた。神に追はれて殺戮せられたといふかと思ふと、塚あり社あつて永く祀られたのみならず、其事業として殘つて居るものが、悉く凡人をして瞠目せしむべき大規模なものであり、しかも人間の爲には功績があつて、或はもと大神の眷屬であつたやうにも信ぜられたのであつた。

其矛盾の最初から完全に調和せぬものであつたことは、更に日向大隅の大人彌五郎と、比較して見ることによつて明白になるかと思ふ。彌五郎は中古に最も普通であつた武家の若黨家來の通り名で、それだけからでも神の從者であつたことが想像せられる。而うして大人彌五郎の主人は八幡樣であつた。大隅國分の正八幡宮から、分派したらうと思ふ附近多くの同社では、その祭の日に必ず巨大なる人形を作つて之を大人彌五郎と名け、神前に送り來つて後に破却し又は燒棄てると、恰も津輕地方の佞武多（ねぶた）などと一樣であつた。さうして其行事の由來として、八幡神の大人征服の昔語を傳へて居たのである。或は其大人の名を、大人隼人などと說いたのも明白なる理由があつた。即ち和銅養老の九州平定事業に、宇佐の大神が最も多く參與せられ、其記念として今日の正八幡があるのだといふ在來の歴史と、斯うすれば確かに稍一致して來るからである。

大人隼人記といふ近代の傳記には、國分上小川の柏子橋の（かしはご）に於て、日本武尊大人彌五郎を誅戮したまふなど〻謂つて居るさうだ。其屍を手切り足切り、爰に埋め彼處に埋めたといふ類の話は、今も到る處の住民の口に遺つて居るのだが、しかも一方に於ては大人は御靈であつて、足跡もあれば山作りの物語も依然として承繼せられるので、それほど優れた神を何故に兇賊とし、屠つて後又祭らねばならなかつたかの疑は、實はまだ少しも解釋せられては居なかつた。大隅市成村諏訪原の二子塚は、一つは高さ二十丈周五町餘、他の一つは略其半分である。相距ること一町ばかり、是も昔大人彌五郎が草畚で土を運んだ時に、捧が折れて飜れて此塚と爲つたといふ點は、富士以東の國々と同じである。獨り山を荷なうて來たのみで無い。日向の飫肥（おび）の板敷神社などでは、稻積彌五郎大隅の正八幡を背に負ひ、此地に奉安して社を建てたと謂ひ、やはり其記念として
ふ所の人形送りは、全然他の村々の濱殿下りの儀式、隼人征討

の故事といふものと一つである。それから推して考へて行くと、肥前島原で味噌五郎と謂ひ筑豊長門に於て與輪と謂ひ、備中で溫羅といひ美作で三穂太郎目崎太郎と謂ひ、因幡で八面大王など〻傳へて居る怪雄、それから東に進むと美濃國の關太郎、飛驒の兩面の宿儺、信州では有明山の魏石鬼、上州の八掬脛、奥羽各地の悪路王大武丸、及びその他の諸國で簡單に鬼だ强盜の猛なる者だと傳へられ、殆ど明神の御威德を立證する爲に、此世に出てあばれたかとも思はれる多くの悪者などは、實は後代の神職の物語に、若干の現實味を鍍金するの必要から出たもので、例へば物部守屋や平將門が、死後に却つて大に顯れた如く、本來はそれほど純然たる兇賊では無かつたのかも知れぬ。それは改めて尙考ふべしとしても、少なくとも彌五郎だけは忠實なる神僕であつた證據がある。而うしてそれが殺戮せられて神になつたのには、又別個の理由があつたのである。

もう長くなつたから兎に角に此話だけの結末をつけて置く。我々の巨人說話は、二つの道をあるいて進んで來たらしい跡がある。其一方は夙に當初の信仰と手を分ち、單なる古英雄說話の形を以て、諸國の移住地に農民の伴侶として入來り、彼等が榾火の側に於て、兒女と共に成長した。他の一方は因緣深くして、春秋の神を祭る日每に必ず思出し又語られたけれども、愛でも信仰が世と共に進化して、神話ばかり舊い型を、固守して居るといふことは難かつた。乃ち神人等は高祖以來の傳承を無視する代りに、之を第二位三位の小神に付與して置いて、更に優越した統御者を、其上に想像し始めたのである。名稱は形である故に、固より之を新なる大神に移し、一つ〱の功績だけは古い分から之を下臈の神におろし賜はつたのである。菅原天神が當初憤恚激怒の神であつて、後久しからずしてそれは眷屬神の不心得だから、訓誡してやらうと託宣せられ、牛頭天王が疫病散布の任務を八王子神に讓られたといふが如き、何れも大人彌五郎の塚作りなどと、類を同じくする神話成長の例である。幾ら大昔でもそんな事は有得ないと決すれば、恐らくは又次第に消えて用ゐられなくなることであらう。

村に淋しく冬の夜を語る人々に至つては、其點に於て稍自由であつた。彼等は澤山な自分の歷史を持たぬ。さうして昨日の向ふ岸を、茫洋たる昔々の世界に繫ぎ、必ずしも分類せられざる色々の不思議を、其中に放して置いて眺めた。一旦不用になつて老嫗の親切なる者などが、孫共の寢付かぬ晩の爲に貯へて居た話も、時としては再び成人教育の教材に供せられる場合があつた。即ち童話と民譚との境は、渚の浪の如く常に搖き動いて居たのである。而うして若し信じ得べくんば力めて之を信じ

ようとした人々の、多かつたことも想像し得られる。傳説は昔話を信じたいと思ふ人々の、特殊なる注意の産物であつた。即ち岩や草原に殘る足形の如きものを根據としなければ、之を我村ばかりの歴史の爲に、保留することが出來なかつた故に、殊にさういふ現象を大事にしたのである。而うして我が武藏野の如きは、兼て逃水堀兼井の言ひ傳へもあつた如く、最も混亂した地層と奔放自在なる地下水の流を有つて居た。泉の所在は度々の地變の爲に、色々と移り動いた。郊外の村里には曾て淸水があるに由つて神を祭り居を構へ、それが又消えた跡もあれば、別に新たに現れた例も亦多い。此の如き奇瑞が突如として起る毎に、或はかのダイダラ坊樣の所業であらうかと解した人の多かつたことは、數千年の經驗に生きた農夫として、些かも輕卒淺慮の推理では無かつた。説話は即ち之に基いて復活し、又屢ゝ其傳説化を繰返したものであらうと思ふ。

筆者の關係した「郷土研究」、「民族」の二つの雜誌に出た材料は、自由に使用して一々に出處を示さなかつた。終に臨んで總括して其寄稿者に御禮申す。又問題を簡略にする爲に、わざと細かな敍述を省いたのも不本意である。

投稿規定

一、投稿は今後書留郵便にて送附されたし。尚返信用書留郵劵を必ず封入の事。

此規定に反して萬一紛失したる場合あるも本社はその責に任ぜず。

一、投稿は「中央公論編輯部、投稿係」宛に郵送されたし。

その場合必ず「中央公論原稿」と傍書ありたき事。

個人に宛てゝ發送せらるゝは差支なきも一度は必ず係り手に渡るものなれば直接係に送らるゝ方便利です。尚個人の私宅に宛てゝ送らるゝ事は絕對にお斷りします。

演藝時評

正宗白鳥

マクベスを觀て

昨夜、築地小劇場でマクベスを觀た。それから今朝坪内博士飜譯のマクベスを復讀した。

私は、日本で上演された沙翁劇では、「ハムレット」と、「シーザー」と「オセロ」とを觀てゐる。しかし、一度も感心したことがない。西洋文學のうち、沙翁の戲曲は私に取つては最も不思議な作品である。傑れた批評家の沙翁論を讀むたびに、この作者の偉大さに感心させられる私も、原作に直面すると豫期してゐるほどの感興の得られないのを常としてゐる。多年文學によつて人生を知らうと努めてゐる私は、沙翁研究を疎かにしてゐるのではない。先日松居松翁氏のラヂオを通しての沙翁講演をさへ聽きのがさないやうにした。松翁氏は、名優カインツに面會した時、談たま／＼トルストイの沙翁蔑視說に及ぶと、カインツは簡單に「トルストイは馬鹿だ」と云つたさうである。……ところが、極東の孤島に生れて、葭の髓から天を窺ふ如く、遙かに輝いてゐる歐洲の諸詩星を仰見てゐる私には、沙翁の光輝がつねに稀薄に見えてならないのだ。ハムレットの如きは、どこが面白くつてあんなに騷がられるのだらうかと、奇異に感じてゐる。

今度の小劇場の「マクベス」は、これまで私の觀た日本の沙翁劇のうちでは、まだしも見應へのしたものであつた。形は調つてゐなかつたが、氣込みがあつた。坪内博士の飜譯に依らないで、一層現代語化されてゐる鷗外氏の飜譯を用ひたのは、この劇團としては當を得てゐるのだが、しかし、それにしても、外國古典の臺詞が、普通の見物の耳には聽取れさ

りでない。役者も、氣持を現はさうとばかり努めてゐるためか、せつかちで早口で、言葉使ひが不明晰になつたが、沙翁特有の言葉の妙味を、舞臺に於て現代の日本人に傳へるのは、絕對に不可能であると思はれた。明窓淨几の下で靜かに讀んで味はふべきものである。沙翁が用ひてゐるエリザ朝の感情の表現法は、近松あるひは默阿彌などに現はれてゐる昔日本の感情の表現法と同樣に、その時代その國民の耳や心に適應したのであらうが、他國民には不意味に感ぜられることが多い。日本の見物が、今尙喜んでゐる默阿彌の「つらね」や「掛詞」が、外國人に興味を覺えさせないのと同樣である。

私は、第一場の荒れ地に現はれた三人の妖巫を觀て、西洋の女乞食でも出て來たのかと思つた。のつけから、大悲劇のイルージョンが破れてしまつた。英雄マクベスを凡人化する演出法を取つたのださうだが、妖巫をまでも凡人化乞食化したのであらうか。

由來日本人は、英雄崇拜の人間性に於ては、他國人にひけを取らない筈で、舞臺の上でも英雄豪傑が橫行濶步してゐたのであるが、近時は文壇の風潮や好尙が變遷して、ナポレオンでも豐太閤でも西鄕隆盛でも、淺弱卑少な人間として取扱はれることが流行しだした。個人主義英雄主義は、文壇の最新派の人々の目からは時代遲れになつてゐるらしい。絕えず社會民衆を念頭に置いて、古來の所謂英雄なるものを英雄扱ひせず、無論おのれ自身も英雄を氣取つてはならないことになつてゐる。私もかういふ說には同感である。たゞ私の疑つてゐることは、今日の文壇で所謂社會意識をもつて製作に從事してゐる作家等は、自己の個人的名聲などは顧慮してゐないのであらうかといふことである。傑れた作品を發表して文名を天下に轟かさうといふやうな個人的功名心に刺戟されて筆を執ることは全くないのであらうか。

そこで、沙翁など昔の作家について考へるに、彼等は製作に際して自我に執しなかつた。つねに社會民衆の心を心としてゐた。見物の好みにかなふやうに戲曲を作つてゐた。民衆の代表者として、また見物と妥協して創作してゐたので、無論自作を後代に傳へようといふ野心は有つてゐなかつたのであらう。沙翁は、老後の安靜なる生活を支持するに足るだけ

の資産をつくつたのと、この作品が次第に時代おくれになり新進の年少作家から舊物扱ひされるやうになつたのを考へて、いさぎよく隱退を企てたのであつたらしい。

さういふ穩かな心掛を有つてゐる狂言作者シェークスピアは、無論「マクベス」をも民衆を喜ばせるやうな英雄の悲劇として書いたに違ひない。四大悲劇その他重な悲劇は、英雄のあるひは帝王貴人の苦悶滅亡を取扱たので、さうでない悲劇を、沙翁が豫想した筈もないし、當時の見物も喜ぶ筈もなかつた。大伽藍の崩れるやうな壯觀が悲劇の悲劇たる所以で、その外形の堂々たる大伽藍にも腐蝕し倒壞すべき弱點を藏してゐることが古來の見物の心を動かしたのであつた。ホーマーの描いた英雄アキリーズが踵にだけ弱點を有してゐた以來、あるひは「ニーブルンゲン」物語の英雄が、滿身に巨龍の血を浴びて金剛不壞の力を具へながら、木の葉に蔽はれて血汐のかゝらなかつた、肉體の一部だけに弱點を有してゐた以來、歐洲の大詩人の英雄の取扱ひ方に、私は一致點を見てゐるのである。運命の不可抗力と、いかなる英雄も有つてゐる人間的弱點は、古來の詩人の見つけどころであつたのだが、近代では、歐洲の作家の目にも、運命の力が影が薄くなり、堂々たる人間的大伽藍も、埴生の小屋のやうに見窄らしくなりだした。

その思潮は築地小劇場の「マクベス」にまで及んで、妖巫はたゞの乞食女になり、マクベスもチョコマカした卑小な人間になつた。私は外國の名優の演出振りを知らないから、今日の築地型のマクベスにも一つの舞臺上の存在として價値を置いていゝのかも知らないが、それでは、マクベスのあの誇張的な臺詞が可笑しい。

「マクベス」は、沙翁劇中での凄味に富んだものとされてゐるが、內容から云へば、今日の目では凄味なんか殆んど感ぜられない。新樣の舞臺裝置あるひは古典的外形美によつて、沙翁の作を舞臺で味はふ外ないやうに思はれる。例の門番など、沙翁常用の道化で、當時の見物を笑はせるために、かういふ役を用ひたのであらうが、後代の見物や讀者には、何の興味もないものである。沙翁の駄洒落は、「暫」など日本古劇の駄洒落を連想されるが、こんな內容の上で後代の者には

興味のないところを除いて行くと、「マクベス」が次第に細くなつてしまふ。餘すところ幾何もないやうに思はれる。

築地の沙翁演出の試みもいゝことには違ひないが、私には、これだの何年か前にやつた「シーザー」だのが、この小劇場で見た最も面白くない芝居であつた。

私は、同座特有の年少の觀客に伍して、可成り多く、ここの飜譯劇を觀た。窮屈を忍び、寒暑を忍んで、學校へでも行つてゐるつもりで觀て來たのであつた。書物の上でしか歐洲劇を知らない私は、得るところが少くなかつた。そして、土方君や小山內君や、俳優諸君に對して、蔭ながら敬意と親しみをもつてゐたのであつた。その上、この劇場の熱心な見物諸君にも好意を寄せてゐたのであつた。

しかし、俳優の技藝について云へば、みんな未熟であると云ふ外はない。そのうちでは、私は汐見洋君が一種妙技の域に達しつゝあるやうに思つてゐる。私は多年贔負役者を有たなかつたのであるが、「白鳥の歌」や「煙草の害」や、「休みの日」を見て以來、汐見君を贔負役者にしてゐる。青山杉作君にも矚目してゐる。

「兒島高德」の芝居

「乃木將軍」や「楠正成」の芝居は觀なかつたが、「兒島高德」（歌舞伎座二月興行）は、改造社に招待されたので觀た。多數の見物を吸收しなければ立行かない商業劇場の現狀を考察すると、かういふ一般向きらしい新史劇を續演するのを、藝術の立場からのみ批判するのは氣の毒に思はれる。現今の雜誌社や出版屋が、賣るためには、どんな不樣なことしてゐるか。內容に力を注ぐよりも賣廣めの手段に、いかに多大な力を勞してゐるかを注意すると、現今の劇場をのみ責める譯には行かないのである。作家と俳優、書肆と劇場とを比べて見ると、私にはそこに共通の時代相が考へられるのである。

「兒島高德」にも、挿話として戀愛事件が取扱はれてゐて、そこには舊史劇の人物の口にしさうでないことが語られてゐ

る。作者が現代の作者であることの證明になつてゐるのが面白い。何年か前に觀た幸田露伴氏の「名和長年」は、壯年以上の有髯男子を感動させた勤王劇であつたが、あれは、團十郎などの喜びさうな活歴物であつた。露伴氏のことだから詞句が緊張してゐて、松居氏の新作のやうに蕪雜ではなかつたが、しかし、私は、かういふ二つの史劇に對して、同じ程度で倦怠を覺えるのである。傳統的に、日本國民の感激の泉となつてゐる忠君愛國を主題とした脚本の上演は一般の見物の心を惹くのにふさはしいので、興行政策として當を得てゐるのであらうし、かういふ種類の演劇に感泣する見物の多いのを、國家安泰のために私は祝してゐるのであるが、しかし、帝劇式歌舞伎座式忠君愛國劇が、干菓子の如く、繪卷物の如く、たゞ奇麗事で甘く取扱はれてゐるのは、ある意味で、忠君愛國を冒瀆してゐるやうにも思はれる。兒島高德その他の勤王家は、逆境に處して、自己の理想のために艱苦悲痛の生を過した譯である。美しい服を着用して、氣取つた感想を吐露して滿足するやうな遊戲的な生やさしい心境ではなかつたに違ひない。………私は勤王劇上演に大贊成である。しかし勤王を生やさしいものと思はせて、見物に媚びるやうな作品は、世道人心のためによろしくないと思つてゐる。「兒島高德」のあとで、「落人」や「小狐禮三」を觀て、多年親しんで來た梅幸羽左衛門の肉體が衰へてゐるばかりでなく、彼等の有つてゐる歌舞伎情調も、廣々とした舞臺に影が薄くなつてゐる淋しさを感じた。「小狐禮三」の如きは、いかに名人默阿彌の作であるとは云へ、愚劇である。

今日の歌舞伎劇の中心が菊五郎と吉右衛門であることは、世評の通りである。

吉右衛門について

その吉右衛門の芝居を、新橋演舞場で觀賞した。この二月興行は初日から大入續きであつたさうだが、私の行つた最終日の前日にも滿員であつた。舊劇は義理見物によつて辛うじて命脈を維持してゐるので、演技その物は殆ど一般民衆の

興味を惹いてゐるのではないと云はれてゐるが、劇場へ入つて見てゐると、必しもさうは思はれない。義理で爲方なしに切符を買はされても、芝居を觀てゐるうちは、面白くないものを不承々々觀てゐるのではあるまい。本當に面白くないものなら、義理の負擔に喘ぎながらの見物がさう何時までも續く筈はないと思はれる。藝術以外の役者贔負やいろ〳〵な遊蕩的氣分から舊劇が持囃されるのであらうが、カツフエーや料理屋や呉服店の存在が、現在の社會に必要になつてゐる如く、さういふ遊戯本位の劇場も、今日の都會には必要なのである。

たゞ、さういふ演劇に飽足りない人間も次第に多くなりつゝあるのだ。菊五郎や吉右衛門も、一般見物の遊蕩慾を滿足さすだけで他意がないのなら、現狀を續けていゝ譯だが、今日の劇場に飽足りない人間に、藝術的感動を與へようとするのなら、現狀維持に安んじてはゐられないであらう。

私は、年齢の關係から、梅幸や羽左衛門などの所演によつて歌舞伎劇を味つて來た、菊吉兩氏などをば、私よりも一時代若い後輩のやうに思つてゐた。それで、兩氏が相提携して市村座でいろ〳〵な舊劇を演じてゐた時分に、たまに觀に行つたことはあつたのに、若輩として輕視してゐたせいか、今思出して印象が朦朧としてゐる。當時の彼等の技藝は果して傑れてゐたのであらうか。異色があつたのなら私の頭にもつと印象されてゐなければならぬ筈である。あの當時は彼等の舊劇修養時代で、舊套を脱した新味を發揮してゐたのではあるまい。

私は兩氏の私生活については殆んど知るところがないが、その一人は名門の出であり、はじめから大舞臺で育ち、一人は、さほどに光つた父祖の力を借らず、「子供芝居」から叩上げて、今日對立するやうになつたことに、ある興味を有つてゐる。吉右衛門が淺草あたりの小劇場で、團藏の眞似をして光秀などを器用に演じてゐた時分に、菊五郎は歌舞伎座に於て、お坊ちやん然として可愛らしく、片々たる子役を親爺の傍で演じてゐた。子供芝居に出すと小器用な小間しやくれた役者になると、團十郎などが注意してゐたさうだが、さういふ說も的中してゐるかどうだか分らない。吉右衛門の如き

も、子供芝居の修養が役に立つてゐたのかも知れない。（この二氏の如きは、何十年か前の歌舞伎の世界に生きてゐたならば、古名優に遜色のない大俳優として生長したのであらうが、時世の推移はそれを許さなくなつてゐる。）

菊吉兩優を昔の團菊の對立に比する人もあるやうであるが、菊五郎が先代と遜つてゐる以上に、吉右衛門は團十郎と藝風を異にしてゐる。私は、今度、「馬盥」及び「連歌」の光秀に扮した彼れを觀て、時代の推移を感じて、その點で感興を覺えた。私は二十數年前、學生時代に、團十郎晩年の光秀を觀て、その濶達な風丰と朗々たる音聲に感動し陶醉したので、その時の舞臺の光景を可成り明瞭に記憶してゐるが、今日の俳優は、餘程鈍感でない限りは、あゝいふ英雄的光秀を模してばかりはゐられないのだ。彦三郎の茫漠たる信長と對照してもそれが察せられる。五世幸四郎や海老藏以來、光秀の見せ場になつてゐた刀を擔いでの大睨みは、歌舞伎特有の味はひになつてゐるのだが、現代見たる吉右衛門は、いくら舊習に安んじてゐるつもりでも、あゝいふところだけでは滿足してゐられないらしく、多少の心理描寫を試みようとしてゐたらしかつた。そして、大まかな歌舞伎の味ひと心理描寫とは矛盾してゐるのである。今度觀てゐると、脚本は單純で、古名優の、目に訴へるいろ／＼な仕草が、外形美の藝術として殘つてゐるだけなのだから、光秀の心理の推移などによつて見物の心を動かすよすがはないのだ。だから、今の見物は、光秀の反逆に同感することも反感を抱くこともなく、ただ、戰國時代の英雄らしい擧動に譯もなく見惚れてゐるだけなのである。……強いて心理問題に立入ると、信長に對する執念深い怨恨を主とするものと、男性的謀叛を主とするものと、役者の解釋に二種の別があるので、團藏と團十郎との光秀演技法の別れるところであると、私は劇通に教へられてゐるが、現代の思潮から批判すると、築地でマクベスが凡人化されてゐるのを一例としていゝやうに、團藏の演技法の方が團十郎のそれよりも、現代的深刻性をもつてゐる譯である。全體團十郎は、英雄崇拜時代に、舞臺に活躍してゐたので、その颯爽たる藝風が尊重されたのだが、現今なら、團藏の皮肉な、クスムだ、卑小な人間味を現はした藝風も、築地的近代劇と似通つたところがあつて、一部の人には、團十郎

以上の價値を置かれるかも知れない。

私は、吉右衞門の所演に一度感動させられたことがある。それは、數年前邦樂座で演ぜられた縮屋新助であつた。この狂言は默阿彌の傑作であつて、團藏の新助も、彼れの所演中の優秀品の一つであつたさうだが、吉右衞門も、團藏に學んで自得したところがあるのか、あの執念と陰慘味は觀客の心に浸染した。この執念と陰慘味は、鶴屋南北を主として日本の舊劇には、いろ〳〵な狂言に現はれてゐるのだが、多くは、馬鹿々々しく妖怪化されてゐたり、茶番染みてゐたりして、現代人の鑑賞に堪へられるものではない。しかし、吉右衞門の新助には、我々の心を舞臺へ手繰り寄せるに足るほどの魅力があつた。お芝居でない眞の藝術の力であつた。人間の生存に重大な力をもつてゐるこの執念と陰慘味（人生宇宙の明るみの底を流れてゐる暗黑の力）を、現はし得る俳優は、吉右衞門の外にはあるまいと、それ以來私は信じてゐた。菊五郎は明るみだけを有つてゐる俳優である。梅幸は、四谷怪談や累を演じて妙技を發揮してゐても、吉右衞門の新助によつて表現されてゐたやうな眞の執念眞の暗黑性を有つてはゐない。

ところで、今度の演舞場では、吉右衞門は「縮屋新助」のやうな脚色とはちがつた、むしろ形の上の豪快味を現はすにふさはしい「桔梗の旗上げ」の光秀に於て、團藏張りの執念深い人間性を微見かしながら、執念と陰慘の底へもぐつて現はしてもいゝ筈の「法界坊」は、可笑味一方で現はしてゐる。見物は非常に喜んでゐる。見物と一しよになつて遊んでゐるやうな演出振りは、江戸狂言の一面の趣きを見せてゐて、氣輕な面白味がある。底拔けの遊び氣分は、今日の作者の筆では、とてもかうは作出し得ないだらうと思はれる……しかし、これで、表面の滑稽の底に執念と陰慘味とを藏してゐたなら、單なる笑劇以上のものになつたであらうし、また吉右衞門なら、工夫したら、さういふ味ひが出せないことはないだらうと思はれる。自分で掘つた穴へ自分で埋められるのも、可笑味ばかりではない筈だ。「ハテ恐ろしい執念ぢやなあ」と、道具屋甚三は叫んでゐるが、あの殺したり殺されたりの一場は、膚淺な滑稽になつてゐるだけで、所謂執念の現はれ

は感ぜられなかつた。

沙翁の芝居に附物の道化役も我々には面白くないが、舊劇の道化も、一種卑俗な様式が出來てゐて、たび〳〵出てゐるものには、鼻について厭味である。「黒手組」の權九郎でも、寺小屋の「涎くり」でもさう思はれて、見てゐて、笑ふよりも欠伸が出るだけだが、「法界坊」の番頭長九郎の如きも、その滑稽振りが、舊劇の常套などで、嫌惡の感じに襲はれた。

兎に角、光秀、法界坊、おくみなどを見て、吉右衛門の技藝の範圍の狹隘でないことを知つた私も、彼れの新劇演出の可能性は疑つてゐる。彼れは、現代の「縮屋新助」は演じ得ないだらう。

「平將門」

誰れに訊いても評判がいゝので、本鄕座の「平將門」を最終日に觀た。私は、井上正夫といふ俳優は、帝國劇場の舞臺開き(?)に觀て以來、觀たことがなかつたのだが、今度觀て驚いた。近來これほど舞臺に惹きつけられたことはなかつた。この「將門」に比べると、前夜觀た「法界坊」などは、低級な遊戯に過ぎない。たゞ觀てゐただけでは原作の筋がハツキリ呑込めないが、そんなことはどうでもいゝやうに、井上は原作の部分々々を生かして、我々の心を引立たせる。かういふ熱情の露出した演出振りはたび〳〵見せられたら、次第に飽きが來るのではないかと危まれたが、兎に角近來の劇壇の異彩である。井上としてはこの熱情を深潜するやうに心掛くべきであらう。井上の外には小堀が傑出してゐる。

私が作品としての「將門」に感心したのは、將門と三郎との兄弟關係である。その愛憎離反の心理狀態は、深刻に穿たれてゐる。こゝは凡手の及ぶところでない。ちよつとした情緒とか、新しい思想とか、氣の利いた思付とかで、月々に雜誌に現はれる有振れた作品に感心するのとは、感心の度合ひが違ふ。私は、眞山氏の戯曲は清新味を缺いでゐるやうにを

りをり思つてゐたが、この「將門」くらゐになると、樣式の古い新しいは全然問題ではない。

傑れたる史劇には、過去の人間が描かれてゐるばかりでなくつて、現代の人間が描かれ、未來の人間が描かれてゐるのである。「平將門」はさういふ史劇の一つである。そして、原作を讀むだけよりも、井上の所演を觀る方が一層効果があるやうに思はれる。（二月二十八日東京にて）

劇評について

私は二十餘年前讀賣新聞紙上に、二三年間劇評を書續けたことを思出すと、隔世の感じがする。あの頃の劇評家招待席に於ては、私が最年少者であつた。熱心で忠實な演劇鑑賞家であつた故三木竹二氏をはじめ、伊原青々園、杉贋阿彌、岡鬼太郎氏などの劇通の間に伍して、小さくなつて、二階桟敷から、舞臺を覗いてゐたことが、今は懷かしみをもつて追憶される。あの頃の私の批評は粗暴であつた。松居松翁氏の新作を罵倒して、氏から長い反駁書を私信として突きつけられたり、小山内薫氏飜譯の「ロメオとジユリエツト」を批評して、氏の才人らしい辯駁に接したり、川上音次郎が自分で新聞社へ來て、私の批評に文句をつけたりしたことが、私の演劇修業中の事件として思出される。當時の私の批評は甚だ粗暴ではあつたが、しかし、現狀滿足で技巧の批評のみを事としてゐたその頃の劇通の批評のうちでは、私の批評には新味があつたやうに思はれる。現狀に不滿足で、潑溂たる人生味を演劇に求めようとする青年らしい意氣込みはあつた。

爾來二十餘年。私は芝居を觀續けてはゐたが、暇潰しの退屈さましの遊び場所として劇場へ足を運んでゐたゞけで、いつか自分で戯曲に筆を執らうとは、夢にも思つてゐなかつたのみならず、演劇の向上革新などを考へたこともなかつた。自由劇場や文藝協會や藝術座などの新劇運動についても、茫然として傍觀してゐたに過ぎなかつた。一般民衆の遊戯場である芝居に、六ケしい注文をつけたつてどうなるものかと、多くを期待してゐなかつたのであつた。

しかし、二十年の間に、演劇も兎に角變つて來てゐる。今に滅亡すると、一部の文學者に期待されてゐた歌舞伎劇が相かはらず榮えてはゐるが、商業本位の大劇場でさへ、時々文學者の新作を上演目錄に加へなければ、後目たく思ふやうになつてゐるのは、私の劇評家だつた時分とは、劇界の空氣の異つたことを證明してゐる。築地小劇場のやうな飜譯劇專門の劇場が、年中興行を續けて行けるやうになつたのも、時代の變遷を示してゐる。

外國のものなら、何でも有難がつて受入れる日本人氣質は、芝居の方面でも、雜然として外國の新奇なもの、あるひは外國まがひのものを、無差別に受入れたがつてゐるらしいが、芝居は、小說や繪畫とは違つて、一般民衆多數の見物の同意を得なければ、經濟的に成立しないのだから、はかぐ\しく運びがつかない。私はその劇界の現狀を悲しむよりも、そこに興味を有つてゐる。

西洋受賣りの議論や獨合點の片々たる新作を試みてゐるのも面白いのだが、現代の民衆を征服し、感激させるやうな新作を著すのは、一層痛快なことであらう。さういふ人が一人二人現はれてもいゝ譯だ。

三月の「演劇新潮」を見ると、菊池寛氏は、二月の歌舞伎座が馬鹿々々しい狂言をのみ並べてゐるのを嗤つてゐる。私も略々同感である。しかし、大劇場の上演に適するやうな傑れた新作が、何處に潜んで不遇を歎じてゐるであらうか。

秦豐吉氏の劇評も何處かで二三度讀んだ。日本人は今尙、西洋見物をして歸つて來ると、大人國から小人島へ渡つた人間のやうに、そり反つて大言を吐いて見たくなるものかと、可笑しく思はれたが、しかし、氏の舊劇評などには情狀を斟酌しない痛快味があるのだ。西洋の土を踏んだことのない私が、二十餘年前に讀賣新聞でやつた劇評は、秦氏の劇評と同じ調子であつた。(疑ふ人は、明治三十七八年の頃の讀賣新聞を圖書館へ行つて調べて見るといゝ)たゞあの時分は、劇界の氣運が動いてゐない時分であつたから、私の批評は全然沒分曉漢の暴評視されたが、秦氏の批評は多少の價値を置かれるのだ。

三宅周太郎氏の劇評は、これまでも時々讀んでゐたが、今、三月の「演劇新潮」所載の分を讀んで、氏の緻密で忠實で感受性に富んでゐる舊劇批評に感心した。今日の時世では、年若くして歌舞伎芝居の味ひをこれだけに嚙分けて味ふ人は、他に多くはあるまいと思はれた。ある藝術をこれだけに味ひ得られるのは幸福である。氏の批評振りから察すると、バタ臭い未熟な新劇などは、本當は氏の口にあはないらしい。そして、氏の新劇評を見ると、時世に妥協して強いてそれに價値をくつつけてゐるやうに思はれる。私は、そこに時代の姿を見るとゝもに飽足らぬ思ひをしてゐる。

私には軍縮論者ばかりが聰明な頭腦の所有者だとは思はれない。……保守黨にも頭のいゝ者があるであらうし、進歩黨にも頭のお粗末な者があるのだ。

三月の各座の出し物を新聞で一覽したが、私の觀劇慾をそゝるものは一つもなかつた。まだしも二月の芝居の方がよかつた。上演に適した新作の缺乏してゐる今日、古物を並べるのは止むを得ないとして、もつと撰擇を嚴にするやうに、大劇場の當事者に勸めたい。二月の「小狐禮三」を觀た時には默阿彌を侮辱するためにこんなものを出したのかと私は思つた。(二月一日、大磯にて)

成嶋柳北の日記につきて

永井荷風

舊南葵文庫の司書であつた高木文さんが今年の夏の初わたくしを麻布の廬に訪はれて、先頃成嶋柳北の孫に當る大嶋隆一さんといふ青年に會つたことを語られた。高木さんの話によると大嶋さんは其祖父柳北の詩賦文章を蒐集して全集を編纂しやうと志し、其の事に關してわたくしの意見を叩き併せて柳北の傳をつくつて貰ひたいと言つて居られたから、不日高木さんの紹介狀を持つてわたくしを訪ふであらうとの事であつた

旬日にしてわたくしは果して大嶋隆一さんの來訪に接した。名家の子弟を草廬に邀へる事を得たのはわたくしの身に取つて無上の幸となした所である。大嶋さんは見たところ年は猶三十には至るまい。痩立のどこやら品の好い面長の顏立はわたくしをして直に柳北先生の著しく頤の長い肖像を思ひ浮べさせた。隆一さんは柳北の一女の大嶋氏に嫁して、柳北の亡き後に生れた人である。

大嶋さんは曾てわたくしの雜著漫筆のたぐひを讀み、わたくしが年少の頃より柳北の詩文を愛誦してゐることを知つてゐると言はれた。又近き頃現時文壇の某氏が柳北を以て一介の戯作者となした事についてわたくしが其の謬誤を指彈し、

つゞいて又わたくしが幕末名士の文章を讀む毎に特別の感動を覺えて止まない所以に說き及んだ、其等の拙文をも大嶋さんは一讀の勞を惜しまなかつたと言はれた。そしてわたくしに向つて、今日操觚を業となすもの〻中能く其の祖君の生涯と心事とを了解し得るものは恐らくはわたくしの外にはないであらう。わたくしに囑して祖君の傳をつくらしめたいと云ふのは此の故に外ならないと言はれた。わたくしは形を正して過賞の敢て當らざることを述べ、又名家の傳をつくるが如き資格のないことを述べて固くその請を辭した。

然しわたくしは此日大嶋さんの談話によつて新に柳北の生涯について知る事を得たものが尠からずあつた。之に加るにわたくしは又柳北が十七才の時より其晩年に至るまで書きつゞけてゐた手澤の日記が今日猶完全に保存せられてゐる事を聞くに及んでは覺えず胸の躍るのを禁じ得なかつた。わたくしは大嶋さんに答へて若し柳北が自筆の日記を見ることを許されたら或は菲才を顧ずして其傳記を草するが如き感奮の情を發するに至るやも知れないと云ふ事を陳べた。

夏はいつか過ぎ秋も漸く盡きやうとする頃に到つて、大嶋さんは祖君の日誌著書書簡のたぐひを大きな革包に收めて、之をわたくしの家に持參せられた。日誌其他の文書は現時神戸市に居住せらる〻成嶋朝一さんの庫中に秘藏せられてあつたのである。神戸の成嶋家は明治元年戊辰四月柳北が幕府參政の職を辭するに莅んで代官川上氏の男信包(のぶかね)を養子として之に家を繼がせた其の後裔である。信包の家は維新の後士族となり、隱居柳北の家は東京府平民となつて茲に成嶋家が二軒に分れた。明治二十九年に柳北の詩鈔と遺稿二卷とを博文館から出版せしめた成嶋復(また)三郎は平民となつた成嶋家をついだ人である。成嶋家の系譜については別に細說する考である。

今大嶋さんのわたくしに示された日誌は次の如くである。

一　日記一卷（嘉永六年癸丑八月より同年十二月晦日に至る）

一　硯北日錄七卷（安政元年甲寅正月より萬延元年庚申に至る）

一 投閑日錄二卷（文久三年癸亥八月より元治元年甲子に至る）

一 日ごとの塵（一名春聲樓日乘）二卷（慶應元年乙丑より同三年に至る）

一 太田營公私日乘一卷（慶應二年丙寅七月より同三年に至る）

一 柳北閑人日乘一卷（明治元年戊辰四月より十月に至る）

一 庚午日乘一卷（明治三年庚午正月より）

一 辛未日錄一卷（明治四年辛未正月より）

一 明治五年柳翁洋行會計錄一卷

一 西遊日乘一卷（明治六年癸酉八月二日より十一月に至る）

一 濹上日乘五卷

第一戊寅（明治十一年）

第二戊寅己卯（明治十二年）

第三庚辰（明治十三年）

第四辛巳（明治十四年）

同　壬午（明治十五年）

第五癸未（明治十六年）

一 甲申日乘一卷（明治十七年甲申正月より十一月廿六日に至る即終焉の二日前まで）

以上卷數として二十三冊である。此の他に明治二年に成つた航薇日誌及明治五年歐米漫遊中の日誌があつたさうであるが是二部は明治三十年七月岸上質軒が柳北全集を刊行した際に散佚して今は其所在を知らないと云ふ事である。

柳北は肺を病むで明治十七年十一月廿八日に向嶋の閑居に歿した。享年四十八である。其著述の生前に板刻せられたものは何有仙史の名を以てした柳橋新誌二卷。柳北奇文二卷。熱海文藪一卷があるに過ぎない。一時世人の愛誦して措かなかつた詩賦文章大半は朝夜新聞と花月新誌とに連載せられたまゝになつてゐたので歲月と共に忘れられんとするに至つた。柳北逝いてより八年の後、明治二十五年に至つて遺子復三郎が朝夜花月兩誌に掲載せられた先考の遊記漫筆のたぐひを集め柳北遺文二卷をつくり、又小野湖山の編輯した先人の詩鈔一卷とを併せて倶に之を書肆博文館から寸珍百種叢書本の中に交へて刊行した。大嶋隆一さんの談話に因ると、是より先に復三郎は病癈の身となつてゐて遺稿の編纂の如きも實は博文館々員が代つて之をなしたと云ふことである。

明治三十年七月に岸上質軒が以上既刊の詩鈔遺稿及び柳橋新誌京猫一班等の艷史に加ふるにまた未刊の草稿遊記歌集等を以てし、其略傳年譜を添へて玆に柳北全集を編纂した。此全集は一世を風靡した才人の面目を窺ひ知らしむるに足るべきもので、編纂者の苦心も亦推測せられる良書であるが、如何なる事情の爲か雜誌文藝倶樂部の臨時增刊として世に公にせられた。

柳北の略傳は既に汎く世に知られてゐる。信夫恕軒の撰文を刻した石碑は今猶向嶋木母寺の境内に立つてゐる。又柳北が三十二歲の秋に自らつくつた濹上隱士傳は岸上氏の編纂した全集の卷首に掲げられてある。同書には又年譜略が附載せられてゐる。此の三種を併せ見れば柳北が一生の事蹟は頗明瞭である。闕く所は其の祖先と其の死後の事並に家族姻戚の事である。

大嶋隆一さんのわたくしに示された成嶋氏先祖書(かき)について見るに、成嶋氏は源姓より出で新羅三郎義光を其の始祖としてゐる。新羅三郎義光の後裔は世々甲斐國某郡成嶋村に土着し遂に地名を以て氏となした。天文年中に成嶋惣太夫信郷(のぶさと)なる者があつて甲斐國主武田信玄に仕へ、其の歿した後は成嶋村に隱棲してゐた。信郷の嫡男道雪信次(どうせつのぶつぐ)に至つて始めて江戸

に來つて德川氏に仕へ、寛永七年に御廣間坊主となり四十俵二人扶持を給せられ、寛永十八年に二ノ丸坊主組頭に昇進し、萬治二年九月行年七十歲を以て歿した。此の道雪信女が成嶋家の始祖となされてゐる。兒がなかつたので養女方の孫に家を繼がせた。之を道雪信好と云つて正德五年五月十日行年五十八歲で歿した。道雪信好には嫡男道珍信近と云ふ者があつたが、父に先立つて早世したので、松平下總守の家來奧州白河の人平井金左衞門信休の次男信遍が養子となり寶永二年五月に家督を繼いで道筑と稱した。成嶋氏の家名が儒者として世に顯はれ始めたのはこの道筑信遍からである。道筑は荻生徂徠の門に遊び、其學徒の好んで爲した所に倣つて成嶋の姓を假飾して鳴氏となし、名を鳳卿と稱した。字は歸德また子陽。號を錦江と云ひまた芙蓉道人といつた。錦江の行實は原念齋の「先哲叢談」に載つてゐる。之を大嶋さんの示された成島家先祖書と對照するに官名祿高などに些少の相違があるが、重要なる所には誤謬がない。これ故わたくしは讀者に便ならんが爲「先哲叢談」の全文を採つてこゝに書き下すことゝした。

「錦江本姓ハ平井氏陸奧ノ白河ニ生ル。幼ニシテ江戸ニ來リ十七歲ニシテ成嶋道雪ト云フ者ノ嗣トナル。性學ヲ好ミ徂徠ノ說ヲ悅ビ乃チ其徒ト周旋ス。一時著稱アリ。成嶋氏ハ大府ニ仕ヘテ坊主タリ。錦江其ノ職ヲ襲フ。天文二年同朋ノ班ニ進ム（荷風曰ク、元文武鑑ニ御同朋格奧勤百俵トアリ）其爲人ニ至ツテハ則チ南郭ノ贈序アリ（荷風曰ク、服部南郭ノ文集第三編卷五ニ贈鳴歸德序アリ又飛鳥山碑帖序アリ）以テ其概ヲ想フニ足ル。曰ク。歸德ハ朔北ノ產、人ト爲リ弘毅ニシテ志節概ヲ尙ブ。又倜儻恢廓ノ士ト相親善ス。俠少年ノ邑居ニ居ル者ト雖街モ義氣若シクハ才能アル者必撫シテ之ヲ愛ス。用イテ以テ其力ヲ盡サシム。躬ラ亦專ラ公ニ奉スルヲ以テ志ヲ立ツ。人ノ善言ヲ聞キ若シクハ奇策有ル者ヲ見テハ乃身ヲ傾ケテ之ヲ引薦シ唯後レンコトヲ恐ル。冀クハ以テ國家ノ用ニ供セント。前後此ニ由テ拔カレテ良吏トナリ績ヲ效スルモノアリ。(略) 歸德旣ニ自ラ勤力ヲ竭スコトヲ以テ遂ス。亦盛世ノ明試スル所ト雖其忠義公ニ奉ズルニ非ズンバ何ヲ以テカ此ニ至ランヤ。則チ士ハ以テ弘毅ナラザル可カラザル者カ。

錦江ハ享保ノ間ニ方ツテ禮記明律ヲ侍講シ寵遇日ニ厚シ。十三經二十一史ヲ賜フ。其ノ餘恩準ノ齎甚多シ。自ラ芙蓉樓

ノ記ヲ作ツテ曰ク「辛亥（享保十八年）ノ冬余一小樓ヲ江上ニ架シ之ヲ顏シテ芙蓉ト曰フ。以テ藏書ノ所トナス。芙蓉ノ名ハ何ニ取ルヤ。之ヲ芙蓉ノ峰ニ當ルニ取ルナリ。芙蓉相距ルコト實ニ三百餘里ナリ。而モ坐シテ三峰ノ雪ヲ挹スル者ハ其ノ高ク且ツ秀レバナリ。樓ハ何ニ由ツテ起ルヤ。蓋シ家ニ賜書千餘卷アリ。帷房側漏ノ地ニ辱メラレンコトヲ恐ル。此樓ノ起ル所ナリ。」云々錦江ハ又倭歌ヲ善クス。冷泉公ヨリ傳フ。其ノ集ヲ密郁訥捺密ト曰フ。三代ノ波ヲ言フナリ。蓋シ泉家三代ノ點定ヲ歷タリ。故ニ以テ名クト云フ。「おもへども、ひとのわざにはかぎりあり、ちからをそへよ、あめつちの神。」「すぐなるを、まもるときけば、なにごとも、神にまかする、身こそやすけれ。」此ノ二首嘗テ自ラ書シテ信濃飯田ノ人某ニ與フ。偶狐ノ爲ニ憑ル所トナル者アリ三年ニシテ去ラズ。某乃チ斯ノ歌ヲ誦ス。狐即去ル。此狐後ニ又江戸本所石原商家ノ女ニ憑ク自ラ太ダ錦江ノ歌ヲ畏ル丶コトヲ陳ブ。

天文二年金輪寺ノ住持宥衛命ヲ奉ジテ碑ヲ飛鳥ノ邱ニ立ツ。錦江代ツテ文ヲ撰シ幷セテ書ス。人往イテ之ヲ觀ル者多シ。後ニ搨裝シテ帖トナス。傳ヘテ奇賞トナス。遂ニ轉ジテ櫻町天皇ノ乙覽ヲ歷タリト云フ。

相模ノ酒匂川ハ歲々漲流患ヲナス。官吏之ヲ治レドモ功ナシ。田中丘隅、字ハ喜古、武藏川崎ノ人ナリ。錦江嘗テ一見シテ即其ノ常人ニ非ルコトヲ察シ遂ニ薦メテ酒匂ヲ治セシム。果シテ績ヲ底ス。乃其ノ東西ニ堤シ名ケテ文命ト曰ヒ、碑ヲ立テ丶以テ事ヲ紀ス。錦江喜古ニ代ツテ文ヲ作ル。享保十四年喜古歿ス。錦江又其墓記ヲ撰ス。

芙蓉樓集ハ家ニ藏シテ未ダ刊布セズ。余嘗テ之ヲ借覽スルニ卷帙頗浩瀚タリ。廣ク時彥ニ交ル。錦江職ニ在ルコト五十餘年。一日モ直ヲ闕カザルコト傳ニ見ユ。而シテ餘暇ノ撰著此ノ如シ。常人ノ及バザル所ナリ。

荻正卿ニ復スルノ書ニ曰ク「老禿今茲七十有二歲。肉斤酒斗。步走飛ブガ如シ」ト。此レ寶曆十年春ノ事ナリ。嗚呼老健ノ賴ムニ足ラザルヤ是歲九月十九日ニ歿ス。友人入江南溟傳ヲ作ル。墓ハ江戸本所本法寺ニ在リ。」

わたしくは右の如く先哲叢談の文をこゝに寫すに當つて直に思を回らすことは成嶋錦江の芙蓉樓集が今猶何處にか存在

してゐるであらうか否かと云ふ事である。先哲叢談の著者原念齋が之を借覽したのは文化年間のことであらう。成嶋氏の子孫は其後と雖長く其の家に祖先の文集を保管してゐたに相違ない。柳北が「土用干ノ記」なるものを見るに「萬卷ノ書ヲ貯ヘタランニハ之ヲ曝ス日數モ亘リテ樟腦買フ錢モ夥シケレド、余ハ戊辰ノ變ニ愛ヲ割キテ盡ク賣却シタレバ、今ハ唯祖考ノ親寫セルモノト校訂セシモノ而已ゾ存セリ。其他ハ皆常ニ座右ニ在ル書ナレバ曝ス可キモノトテハ無シ。」と言つてゐる。柳北の邸は江戸時代には下谷和泉橋通に在つたが、安政乙卯の震災にも火災を免れ、戊辰の後は或は向嶋、或は洲崎町馬喰町より淺草門跡の構内等處々に移居したが、幸に一度も池魚の災には遭はなかつたやうである。されば祖考の藏書の散佚したのは恐らくは柳北即世の後であらう。

先哲叢談には成嶋錦江の和歌を錄しながら其詩については言ふ所がない。江村北海の日本詩史は蘐園錄稿に選入せられた錦江の作七首の中奥宮詞と遊獵歌の二首を以て調に合つたものと評してゐる。こゝに遊獵歌を錄すれば下の如くである。「八月陽侯起海波。樓船萬弩射蛟過。君恩更有如泉酒。醉向秋風聽棹歌。」

飛鳥山の丘阜は大正の今日に至つても幸に公園となつてゐるがため辛じて昔日の勝概を想像することが出來る。此地は昔王子稲荷の別當金輪寺の所領であつたが、元文丁巳の春將軍吉宗公の命によつて荊蕀を伐栽して櫻樹數千株を植付けてより始めて都人遊覽の勝地となつて今日に至つた。成嶋錦江が金輪寺の住持に代つて櫻花の由來を記した其の碑は今も猶舊の所に殘つてゐる。わたくしは錦江が飛鳥山の碑文を讀むに及んで、こゝに又之が七世の孫に當る柳北が明治の世に隅田川流燈會の記文を公にし、或は又多摩河畔なる小向井村に梅園の賞すべきものゝ在る事を世人に紹介した事等を思ひ合せると、成嶋氏累世の文章が江戸及東京の風流雅事を皷吹するに與つて大に力があつた事を一言して置かねばならない。

成嶋錦江が元文二年將軍家の給仕人たる坊主の職より擧げられて奥儒者となつてから、其子孫は柳北に至るまで世々其職を襲いだ。奥儒者とは親しく將軍の身邊に仕侍して讀書講學の事に當るものを云ふ。寶曆十年九月十五日錦江の歿した

後其長男龍洲が侍講の職をついだ。龍洲名は忠八郎、諱は和鼎。字は某。寛政十一年七月二日老病を以て職を辭し、文化五年五月四日に壽八十九才で歿した。龍洲の世に至つて始め百俵の封祿は次第に増されて二百俵となり、其座席も又進んで御書物奉行格となつた。龍洲には嫡男織之助といふものがあつたが早世したので、其の女婿なる同朋格北角久琢有次の子仙藏を養子にして家を繼がせた。仙藏は諱を勝雄、字を叔飛と云ひ、衡山と號した。衡山は寛政年間には書物奉行を勤め、文化五年正月より西丸奥儒者となり、文化十二年七月十九日に行年六十八才で病死し、嫡男邦之助をして家督を相續させた。

邦之助後に邦之丞は諱を司直、字を邦之といひ、東岳また翠巖と號した。東岳は和漢の學に通じ侍講在職中將軍家代代の實記を始め其他記錄の編纂を成し、天保十二年八月には多年精勤の功に依つて其座席は御廣敷御用人格五百石高となり、諸太夫に叙せられ、名を圖書頭と改めた。然るに天保十四年十月廿五日に奥儒者の職を免ぜられ隱居閉門を命ぜられた。此時壻養子なる桓之助稼堂も既に西丸奥儒者を勤めてゐたが養父と同じく免職となつた。先祖書には父子處罰の理由を明にしてゐないが、按ずるに老中水野越前守免職の事に連累したのであらう。

成嶋家先祖書にはこゝに又成嶋東岳が天保三年壬辰閏十一月二日其の妹の嫁した小南市郎兵衛の事に連累して五拾日の間謹愼を命ぜられた事を記載してゐる。但し是も亦其の理由を明にしてゐない。然るにわたくしは偶然之を温古新聞記と云ふ無名氏の舊記について知ることを得た。事件は講談或は演劇に於て見るが如き奇怪なるものである。それ故煩を厭はず之をしるす。

東岳の妹ますの良人は大御番格奥詰小南市郎兵衛といふ旗本で、その時年は四十一。大嶋流鎗術師範の家柄である。天保三年二月七日、市郎兵衛は西丸御小姓組へ出てゐる羽太求馬といふ旗本の屋敷の初午祭に招がれて行き酒に醉つて歸り騷いだ後夜になつてから求馬の娘お房と人のゐない一間の炬燵にあたつて猥らな事をしかけた折柄、求馬の三男鬼八郎と

云ふ者に見咎められて大騷となつた。お房は年三十四。三味線もひくし踊もをどる。一度嫁に行つたが身持がよくなかつたので離縁になり實家へ戻つてゐる中、用人渡邊權之進と云ふ者に見染められ再縁をする相談がほゞ整つてゐた。さういふ事情から、羽太家の用人權之進はお房が來客と密通したといふ騷ぎに嫉妬の怒を催し、小南市郎兵衛に對して嚴談に及んだところ、市郎兵衛は一向に取合はないので、權之進はお房を絕籠に載せて一旦小南方へ連れ行き、更に二三の知人と共謀して、主人羽太求馬夫婦に迫り、其の命令の如く言ひこしらへ、お房に其の髮を切らせ尼になる由の書置をかゝせて、髮の毛と共に書置を小南の妻に送つた。又小南の舅に當る成嶋東岳の屋敷にも人を差出して嚴談に及んだ。其結果小南は一時お房の身を引取り、其髮の生揃ふのを持つて何處へなりと縁付かせる事。それまでの間お房への手當料として金子廿四兩を渡した上、若し又お房が懷妊でもしてゐた場合には金子參兩を渡すべき事となり、權之進は右の證文と金子とを請取つたが、其後お房の母お富が之を知り、金子を取つては穩でないからと云ふので、已む事を得ず權之進は人を以て金子を小南方へ返した。それやこれやの騷がいつか世間に知れ關係者一同吟味を受け、用人權之進は主人の差圖を待たず自分一個の了見を以て勝手次第の取扱をなしたのは武家奉公をする者としては不屆至極だと云ふので、遠嶋の刑に處せられ、お房の父求馬と小南とは免職となり、成嶋東岳は五十日の差控を命ぜられたのである。

東岳は八十五歲の高齡を保ち文久二年閏八月二日に歿した。孫柳北が二十九歲の秋である。

東岳には女兒が二人あつたが男の子がなかつたので、文化十三年十二月廿日に奧醫師杉本宗春院良敬の次男稙之助良讓を聟養子に迎へた。稙之助は字を倫卿といひ、筑山と號しまた稼堂秋揖、凝紫樓とも號した。天保十四年十一月養父東岳が隱居謹愼を命ぜられたにつき家督を相續し、將軍家實紀及後鑑の編纂、南山史の編集、また將軍家系譜の調査、海防錄の著述をなし、嘉永四年六月廿九日より奧儒者となつたが其職に在ること久しからずして嘉永六年十一月十五日に遽に病んで歿した。行年五十一才。翌年三月十七日に至つて始て其訃を公にしたのは、其男甲子太郎(柳北)が跡目相續の手續

の濟またなかつた故であらう。

成嶋稼堂には三男一女があつたが男子は二人とも早世した。柳北は其三男である。これは先祖書に記載されてゐる所であるが、茲に柳北は稼堂の實子ではないと云ふ說が今日では成嶋家の子孫の間に傳へられてゐる。先祖書の卷尾に柳北の女婿成嶋謙吉氏の書入れた文を見るに、「成嶋柳北翁は襁褓ノ時［　　］男ヲ貰ヒ成島桓之助ノ實子トセシナリ。明治中興ノ變事以後ハ其實方兄弟姉妹ト往復ヲ始メ爾來今日ニ至ル。其實子ナラザリシコトノ發覺セシハ［　　］ニシテ其時マデ柳北本人モ之ヲ知ラザリシト云フ。森省吾楠山孝三郎ハ實兄ナリ。又一柳某ノ母ハ其實姉ナリ。余ハ未ダ他ニ實兄弟アルヲ知ラズ。明治廿八年十月二日附記。謙記。柳北翁ノ甥ニ松本郁朗菅沼達吉アリシコトヲ傳聞シ居レリ。」

右の文中文字を缺いてゐる處は筆者が他日調査の後に書入れやうとして其のまゝ果さずにしまつたのであらう。筆者謙吉氏は明治四十三年四月十八日に世を去つた。柳北の日記及先祖書等は謙吉氏の男朝一さんの家に保存せられてゐる。

成嶋氏累世の墓碣は悉く本所押上（太平町）なる本法寺の塋域に在つたが明治四十二年雜司ケ谷東京市墓地に移された。

成嶋氏の賜邸は之を武鑑に徵するに先祖錦江の時より代々淺草御厩河岸に在つた。錦江が有廟吉宗公より賜つた經史子書を藏せんが爲に江上に一樓を架し名けて芙蓉樓と云つたといふのも御厩河岸の屋鋪内のことであらう。御厩河岸は現時厩橋の架せられてゐるあたりである。橋は明治時代に新に架せられたもので江戸の時代には渡船場であつた。錦江の後其男龍洲の時。天明三年の武鑑はたまたま其賜邸の地を淺草堀田原となしてゐるが以後は舊の如く再び御厩河岸としてゐる。堀田原は現時淺草三間町邊の總稱で御厩河岸に接近してゐる。それ故わたくしは堀田原も御厩河岸もつまりは同じ地を指したのではないかと推測してゐる。猶考ふべきである。

成嶋氏が御厩河岸の賜邸は柳北の祖父東岳の世までつゞいて天保十一二年の頃に下谷仲御徒町に代つた。嘉永三年の江

戸切繪圖を見るに、成嶋氏の屋舗は和泉橋通藤堂侯上屋舗の裏門と相對した邊に在る。現時御徒町電車通の西側であらう。

佐藤一齋の愛日樓文に水月樓の記といふのが載つてゐる。水月樓は享和年間に成嶋東岳の居た家で、一齋の記に「樓は墨水ノ涘ニ在リ（略）成嶋學士東岳コレニ居ル（略）一帶ノ長流洋洋トシテ藍ヲ拖ク岸ヲ隔テ、峙ツモノ東江禪寺タリ。」といつてゐるが東江寺の在る處がわたくしには明でないので、之と河を隔てゝ相對した水月樓の那邊に在つたかを定めることが出來ない。

成嶋柳北の生れた家はそが誕生の年より考へて下谷仲御徒町移居の前で、猶淺草御廐河岸に在つた時である。

わたくしは柳北の日誌を讀まんとする人の便宜にと漫然として以上の如き事を書きつゞけたのである。

柳北の日誌は玆には掲載しない。他日大嶋さんは之を編纂して出版すると云ふことである。（大正十五年十一月草）

文藝時評

佐藤春夫

はしがき

題目を發見することが批評の、殊に時評の主要な仕事の一である。題目さへ決定すれば自づから言ふべきことは出て來るのだが、その題目がどうしても思ひつかない。つまり私がこの時代に對してさう特別のものの見方を持つてゐないといふことになるらしい。甚だ恥づべきことではある。が、事實であつて見ると正直にさういふより外に仕方がない。かういふ事でも引受けて暫く續けてやつてゐるうちにはモ少し世の中の事情も判り自分の意見も出來て來ようかと思ふので、ともかくも引受けてやつて見ることにした。そこで樣々の人々に今日の時代の文學者としての問題は何かといふ愚問を、まるでおれが歩いてゐるのは何所だ——おれの見るべきものは何だといふやうな愚問を發して見たけれども、誰も成程と思ふやうな答は與へてくれなかつた。(それは當然のことである、)ただ人々が異口同音に答へたことは「どうも格別な問題のない」といふのであつた。「問題のない」とは天下泰平といふことか、衰頽的なといふことか。兎も角も適切な時評的項目を直ぐに教へて呉れる人はなかつたとさういふ時代であることは確からしい。仕方がないから噂話のやうな漫談でもしてゐるうちに自然と何か問題にぶツつかりさうなものだ。と呑氣に構へてゐるのだが、まるで棒にあたることを目的にうろつき廻つてゐる犬のやうな譯で、いふまでもなく決して批評家としての名譽ではない。恐らく偉い批評家といふものはどんなに問題のない所からでも問題を引出すに違ひない。だから僕は偉い批評家といふ名譽は放擲することにして世間で皆が言ひふるしてゐる題目でも滿足して取上げることにしようと思ふ。その中で多少でも外の諸君と違つた見方が出て來た

らお題目といふものである。

一圓本の流行

文學者に關係のある社會で此頃最も澤山話柄となるのは、何々全集の出版に關する事であるらしい。注目すべきことであるかどうかは考へて見なければ分らないが、ともかくも目につく出版界の現象ではある。書物が廉く手に入るといふことはまるで論ずるまでもなく結構なことである。又あらゆる種類の全集と稱するものが、續々出ることは讀者にとつてそれぞれ欲する所のものが得られるといふ次第で、これまた考へるまでもなく甚だ結構なことである。それでそれぞれの出版者がみんな儲け、また我々文學者がその餘澤を受けるといふ事實も滿更結構でないこともない。何もかも結構づくめで、どう考へても文句のいひやうはなさそうに思へる。また別に好んで文句を並べたいわけでもない。たゞ僕の不思議に思ふことは、今日まで發表された幾つかの「全集もの」の編輯についてこれがどういふ方針とどういふ主張とで出來てゐるかといふ趣意を明かに知り得る出版がまつたくないといつても差支へないやうな氣がする一事である。勿論それぞれ相當の趣意書はあり、またそれぞれの標題によつてもその方針が推測されないではない。僕のいふのはさういふ點ではないのである。僕はこれだけの出版に殆んどどれにも責任ある監輯者の署名のないことをさすのである。僕は決してそれぞれの出版書肆の誠意を疑はうとするものではない。今日有數なるそれぞれの出版書肆は何れもそれぞれの權威をもつた書肆ではある。また發表された書目を見れば一議論の餘地は充分にあるにしても大體の方針に於て間違ないものと思へるのも事實である。それにしても今日我が國の權威ある出版書肆は必ずしも權威ある文藝批評家ではない。忌憚のないところをいはして貰へれば、出版者諸君は算盤が立つかたたぬかについて考慮を支拂ふほど、編纂の方針に遺漏のない事を期したるや否や。僕はその點をいふのである。無論出來得る限りよきものにしたらうとは信ぜられる。しかし諸作はどのやうに

鯱鉾立ちをして見ても文藝鑑賞の上に於ては大して卓見をもつてゐる筈はない、といつて見たところでさう諸君を侮辱したことにはなるまいと思ふ。事實、諸君はそれらの計畫をたてるについては何れ多少とも各々その道に明るいところの人々を相談相手にしたに違ひないのである。僕は諸君がなぜその相談相手の名前をそれ〴〵の出版物の監修者或は編纂者として署名しなかつたかといふのである。僕は別段有名無實な肩書澤山の名前を裝飾的に列記せよと要求するのではない。それよりも事實その出版物に參與したところの實際の人物を明記することがそれらの人々に對する禮儀でもあり、また如何なる趣意書や廣告文よりももつと雄辯にその出版物の本質を語る筈たのである。いふまでもなく諸君は諸君の信頼しない人達に相談をする筈はないのだから、諸君が信頼したその人達の名前をそこに並べて貰ひたかつたのである。それが有意義な大出版であればあるほどこのことは必要である。諸君がそれをしたかつたといふのを、しかし僕は大して咎めだてやうと思つていふのでもない。これは一寸したことで、しかし今までにさういふ習慣がもしたかつたならばかういふ機會にその習慣を新しく作るがよからうと思はれる。つまり僕のいひたいのは文學者の仕事を、も少し文學者自身の手に委ねて貰ひたいといふだけなのである。何故僕がそんなことを望むといへば、諸君の今日のやうなやり方を進めて行けば、それでなくてさへも多少その傾向があるところの、文藝或は文明批評の權威よりも賣れるものが一番いいものだといふ出版商賣の見方が、正しい批評の上に被ひかぶさつて了ふ危險を感ずるからである。

もう一つ序でに小さな文句をいへば諸君は「全集」といふ日本語の安全な意味を甚だ朦朧とさせて了つた。諸君が好んで使つたこの言葉は明かに嚴密なる意味に於ては間違つて使はれた日本語である。諸君の所謂「全集」は全豹を窺ふに足るものであらうが、結局選集ではないか。それ〴〵の叢書ではないか。外に適切な言葉がないのではないのに、何を好んで間違つた言葉を諸君の大出版の上に冠しなければならぬか。言葉にはそれ〴〵に縁がある。我々文學者といふものは言葉を神樣と思つてゐるだけに、諸君のさほどとも思はぬことを甚だ苦にする。文學者のこの神經を諸君に認めて貰ひたい。

しかし以上のやうな些細なことどもも若し諸君のしてくれたところの仕事がほんとうに世の中に影響を與へるならば、すなはち何十萬を以て算するといふ民衆の、昨日までは新聞の通俗小說だけが面白かつた頭の中に、眞の文學的或は思想的敎養の發芽を促すに役立つた曉には、藝術的精神に自覺した民衆は進步した讀者となり、その進步した讀者自身が今現に僕がいつてゐるやうなことどもを彼等自身でいひ出すやうな傾向を生ずるかも知れぬ。僕の望むところはその點にある。同時に今日の出版界の諸君に望むところは諸君が、如何に進步した氣むづかしい讀者の前にもいつまでも滿足せられるであらうやうな出版物をこの後提供せられんことにある。

ことの序でに出版界の諸君にもう少し僕の意見を聞いて貰ふとすれば、今日このやうに成功した出版物によつて諸君は巨額の利益を占めると一緒に、今まではほんの細い商賣であつた出版業も一つの相當な事業家らしい事業とするに足るといふ素地をつくつたわけだが、されぱといつてあらゆる有益な書物が、どれもこれもみんな何萬何十萬と賣れるわけではないのだから、その餘り賣れさうもない、しかし社會にとつて有益なそれらの書物の出版を餘り面倒くさがらないで、かへつてその種類の出版にももう一層忠實な、熱心な、主義方針の一定した出版方針を確立し、出版事業が單に物質的に引合ふ事業だといふ考へをも一步進めてその事業本來の使命を自覺して貰ひたいといふ一事である。諸君が民衆によつて得たところのものを如何にして民衆に報ゆるかといふことを僕は興味ある問題として眺めるであらう。

……この結論だけならばほぼ同じやうなことが我々文學者自身についてもいへるかも知れぬ。

文壇の社會化

ともあれ出版界の諸君の努力で我々の著作が廣く社會の全體に行き涉ることによつて所謂文壇なるものが、一般社會の方へ浸透して行くことは爭はれない事實であらう。鉦や太鼓や、活動寫眞やサンドウヰッチマンや、大賣出しのやうな宿

板や、たとへさういふものゝお庇ではあるにもせよ、さまざまな文學が社會のあらゆる方面へ行きわたると同時に、自づから我々文學者の名前が擴まり、從つて人々の口に上る機會も多くなることは疑ふべくもない。

先日、書籍の小賣店を經營してゐる或る人の話では、改造社が「日本文學全集」の廣告をしてその内容見本を各小賣店にくばつて以來、街で道路修繕の仕事などをしてゐるらしい汚れた法被着の工夫風の男などが「どうだ、此頃は何か只でくれるものはないか。」などといつて店へ立ち寄るのが時々あるといふ話であつた。鼻紙にもならぬ紙質だから、まさかさういふ用途のためにさう内容見本を貰ひに來るのではなく、「恐らくはその「只でくれるもの」の中から斷片的な知識なり樂しみなりをそれ相應に攝取するのだと見て大過なからうから、この一事を見ても我々文學者の名前などが行きわたる範圍は我々の想像以上に廣いことだらうと思はれる。すなはち、文壇の社會化といふやうな文字を使つて見ても差支へなからう。

それにしても文藝がどういふ風に社會の中に浸潤して行くかは事實の結果を見なければ計り得べくもないけれども、我我の想像の一面は人づてに聞く或はものの本で讀むロンドンやパリイなどの社會の一面などを想像させせないではない。文學者を友達にして愉快に思ふ若い金持ちやら、またはその作品は何も知らぬが、その名前を知つて自分達のソサイテイへ文學者を招待するレデイなどが、案外遠くない未來に我國にも現出するかも知れない。その結果は文藝作品並びに文藝家が外の一般社會の現象と今よりももつと密接な關係を生ずるやうなことも加はつて來るに違ひない。聞けばフランスなどのやうな藝術國では、純粹の藝術が純粹に鑑賞される機會が隨分多いかと思ひの外、「それが反つてもつと功利的な政治などと結びつけられて了つて、例へばゴンクール賞金の如きでさへも、それが外國人に與へられたりするやうな場合には、その内面には政治的外交的の一手段を含んでゐるなどといふことをいはれるやうに、文藝の社會化はやがて一面からは、一般社會の法則が所謂文壇といふ特別の社會へその手掛りを擴げることにもなりさうに思ふ。これは東洋流の文人墨客的平

安を保つ上からは一つの恐るべき現象だとも思へるが、それよりも今までのやうな無意識的に引込思案な我々の傳統的な文人氣質がいやでも應でも外側からかういふ風にして崩れて了ふのを僕は矢張り樂しみにして見ることが出來る。すなはち文壇的生活は、今よりももつと複雜で、もつと社會の影響に反應しなければならなくなるところの必然に迫られるだらう。さうしてつけ燒刃の呼び聲でなく、また文學者自身がせい〳〵心掛けるでもなく、是が非でも我々に社會人としての自覺と反省とを促すやうな時機も遠くはないであらう。我々の生活は問題は擴大されるだらう。

何んにしても、文壇の社會化は時代遲れのひねくれ者でない限りは、これを祝福していい。それにつけても、今日の文壇的な餘りに文壇的な我々の作品や論題は一刻も早くもつと社會的のものになつていい。ならざるを得ない。謂ふところの意味は必ずしもプロレタリア文學者の宣言と同じものではないかも知れない。このことについては、何れ別に論ずるが、僕の見るところでは、プロレタリア文學者がそこに中心をおくところの問題は、確かに今日の社會の重大なる問題であることは爭へないけれども、しかし彼等が言ふが如く、必ずしもその唯一のものとも僕には思へない。このことはもう一度論じなほすとして、もつと廣い意味で、もつとさま〴〵な點で、我々の文學には確かに餘りに時代の反映が少なすぎる。もつと時代の問題を發見し、もつと時代の問題に答案を與へ、もつと時代に詰問し質問しかけるべき點が含まれてゐてもよい筈である。すなはち、僕は思ふ我々の文學の中には餘りに文明批評が缺除してゐないか。さうしてそれ故一たびは折角、民衆の中へ浸みわたつて行つても彼等が我々と一緒に生活しないのではないかを僕は恐れるのである。

文壇人の空名が社會的に擴まるであらうことを豫想してそれが文學者の社會的地位の高まることだなどとそゝつかしくも早合點しさうな人々もないとは限らぬと思ふので、僕は文學者の社會的地位が高まるとはその名前が喧傳されるなどの謂ひではなく、我々の仕事の精神が、彼等の中に浸み込むことだけであつて、それ以外のことは寧ろ反つて社會的複雜の文壇的浸入であることを豫め警告すると同時に、正に社會化せんとする我々の事業なり精神なりが、この際もつと不可侵

力と抱括力の彌綴を期しなければならぬのを感ずるのである。

廣告文のことなど

出版物が多量生産的になるに從つてさまざまな廣告でその販路を擴めようとするのは自然の勢である。今までも既に新聞の廣告面に表はれる廣告は賣藥や化粧品などに次いで書籍雜誌がその甚だ重なものであつたが、その傾向は益々甚だしいものになり、四分の一面大のものが二分の一面、やがて全面、更にたうとう二面大のものさへ現はれ、ただ大きさだけではなくその方法に於てもあらゆる手段をつくすことになつて來た。

一體雜誌がその廣告の中で目次項目以外に内容の註釋めいた文章やらその雜誌の主張めいた文句を挿入し始めたのはそれ程古いことではない。多分十五年かそこらにしかなるまいと思ふ。ジヤアナリズム發達史の大項目である。その現象が始めて現れた時、確か正宗白鳥氏がそのことの不愉快を洩らした文章を發表したのを見たやうに覺えてゐる。さうして我々も正宗氏の考へに對して私に同感したものであつたが、この廣告方法は瞬くうちに出版界に行きわたつて了つた。そればかりではなく、更に新しい方法として作者の寫眞をその廣告の中に組込んだり、甚しきに至つては小說の主要人物であるといふので、良家の子女であり、紳士の妻である人の肖像がその文學的作品の廣告として役立つなどの「憂鬱なる現象」をさへ生ずるに至つた。廣告の目的が人々の好奇心に訴へ、人々の目を瞞着してでも商品の販路を擴めさへすればいゝといふのであつて見れば、誠に巧妙なる廣告術といはなければならぬ。しかし我々は文學者の見地から考へて見なければならないが、文學上の仕事といふものは、たとへそれが事實を描いた場合にでも單なる三面記事的の噂話を人々に提供してゐるのではなく、寧ろ反つて三面記事的な見方以外に人生を見る方法のあることを人々に同感して貰はうとするにあるのは、改めて說くまでもない筈である。しかも出版者編輯者は作者の努力を見事に裏切つてすべての文學的作品を單な

る三面記事的興味として見ることを讀者に要求してゐるかの如く見える。それらの編輯者出版者は文學的教養を讀者に與へんがために文學的制作をその誌面に掲げんとするのであるか。それともすべての人生を井戸端會議的興味として見ることを强要することによつて文學者の事業を痛快に打破しようとするのであるか。それとも問題は單に賣れさへすればいいといふのか。何にしても默過していいこの事實を當の作者が默視してゐるとすれば、これは正しく文學者の卑屈であつて、さればこそ僕は「憂欝な事件」と呼ぶのである。近頃この事實について三四の人々が自分と同じ意見を發表したのは當然ながら會心のことである。實は僕は去年の年末に地方の某有力新聞社から談話筆記を求められてこのことについてこの意見を述べたのであるが、どういふわけだか、僕の言說は活字になつてゐなかつた。恐らく新聞社は有力な廣告主に不快の感じを懷かせたくなかつたからであらうかと察せられる。當時僕の憂欝はこれがために二倍になつたものである。

前述の事實と同日に論じては聊か氣の毒ではあるが、この間から目についてゐる「世界大思想全集」の廣告文の如きもこれが立派な有意義な出版であるだけに僕をして少しばかり機嫌を惡くさせるものである。この廣告文は先きには「世界は今や物語、小說の時代にあらず」云々といふ言葉を以て宣傳せられてあつた。今日はまた「本全集は、他の小說、物語類と違ひ、たゞ讀み捨てにさるべき一時的興味のものではない」と書かれてある。同種類の他の出版を壓倒せんがための排他的廣告の可否は暫らく別として、このやうな立派な計畫を思ひつく出版者が、斯くの如き無意味な寧ろ非常識な廣告によつてその成功を急ぐことは、一考を煩したいものである。今日の我々の如き作者の小說なり物語なりがつまらないといはれるのならば、僕は笑つて暫く引下つてもいゝ。しかしすべての大作家の偉大なる文學的作品がすべての大思想家の大思想よりも今日の時代に緊急なもので無いかどうか。またすべての傑出した小說物語の類が果してたゞ讀み捨てにさるべき一時的な興味のものであるかどうか。またかういふ疑問を起すのは僕が小說作者であつて無意識の中に我田引水的の見地に立つてゐるがためであるか。若し顧へるならばこの廣告の責任者に示教を垂れられたいものである。

同じ廣告は中里介山氏の一文を拔抄してゐる。

春秋社の「世界大思想全集」の宣傳パンフレットを見ると「世界は今や物語・小說の時代に非ず」とある。これでは作家の立場が脅やかされるやうに見えるが、また僅かに一面の眞理も見える。物語小說等所謂文學と呼ばるべきものも不朽のものは時代を超越して不朽である。が、これ等はもとは皆思想の根幹によつて咲き出でた花である。先づ此の花が觀賞さるゝのは自然であるが更に一段の進步は此の花が如何なる地盤によつて如何なる營養によつて如何なる幹根枝葉によつて咲き出で、また如何なる實を結ぶかを味はゝなければならぬ。然るに近來日本に於ては、ほとんど世界有名の文學は譯し盡してゐるにかゝはらず、思想哲學の源泉が之に伴はない憾みは確かにある。この點に於て物語小說の讀書から思想哲學の探究に向上するのが順序であり、また物語小說を讀むにしても、この思想大系から讀むと別に異つた光彩陸離たるものを發見されるであらう。

さうしてこの抄錄には「總ての根幹」といふ題が與へられてある。中里氏は流石に「物語小說等所謂文學と呼ばるべきものも不朽のものは時代を超越して不朽である」と記してある。しかし「が、これ等はもとは皆思想の根幹によつて咲き出た花である」云々と續けてある。僕は疑ふのである。果して總ての文學的制作が花であつて思想がその地盤であり榮養であるかどうか。「物語小說の讀書から思想哲學の探求」に向ふことが本當に所謂「向上」であるか。僕思ふに、總ての文學的述作の根元をなす所のものは思想でもなく哲學でもなく、寧ろ人類の生活そのものなのである。この地盤この榮養この根幹によつて藝術も亦思想や哲學と同じやうに生れ出たものであつて、思想や哲學が別段に文藝の源泉といふわけではないのである。傑出した總ての物語小說はそれ自身直接に一個の思想であり、一個の哲學である。恰も傑出した思想傑出した哲學がそれ自身一つの藝術であると選ぶところがない。いづれも人間生活の源泉から發してそれの各々自然なる必要なる結果として、あるものは小說となりあるものは哲學書となり、あるものは思想となつたのである。文學とは決して思想や哲學に着せた通俗の衣裳ではないのである。思想や哲學と文學とをかくの如く區別してその優劣を問ふが如きは餘りにも「大思想」的でなさすぎる。

またこの廣告には書籍同業者の席上で、その全集のために熱辯を揮つてゐる後藤子爵の寫眞が出てゐる。また衆議院議長粕谷義三氏の文章がある。僕はこの廣告の中にもすでに僕が前項に於て述べた藝術界思想界と一般社會との複雜なる混和結合の一現象を見るのである。僕は後藤氏及粕谷氏が有名な政治家であることは知つてゐる。しかしこの人々が世界大思想全集のどの一卷を愛讀してゐるであらうかを失禮ながら疑ふものである。またこの全集がほんとうに民衆によつて了解されることが、粕谷氏後藤氏の如き今日の爲政家の目で「健全なる思想の根柢を培ひ、また實に偉大なる思想を新たに生むべき素地を作り而して昭和の新時代に貢獻するところあるべきを信じ」られるかどうかをも疑ふものである。これらの書物の中にはほんの十年前までは「危險な洋書」として國禁の書物であつたもの或はその同じ著者のものさへも加つてゐる筈である。時代は進み、道徳は歩むとはいへ、昨日の危險なりし思想哲學が、今日健全な思想の根柢をなすに役立つといはれて見ると、その「健全なる思想」なるものに我々はちよつと不安を感ずるのも無理ではあるまい。

この全集の廣告についてはくどく言ふやうで甚だ氣の毒ではあるけれども、それが偶々目に觸れたので一例として題目にしたのであるが、同種類の他の大出版を引合に出して見ても、きつと殆んど同樣に論ずべきことがあるに違ひない。偶々この廣告が手元にあつて引合ひに出たので、それ以外に決して他意あるわけではなく、この全集の成功を僕も亦希望すべきであることは念のため言ひ添へておかなければならぬ。只これ程有意義な企てでさへ、これほど商策を弄することを敢てしなければならぬやうに思はれる時代そのものについて僕はいひたかつたのである。

人々はこれを單に廣告であつて、その廣告文に對してこのやうに嚴密な批別を下すことの不當を逆に駁論するかとも思ふ。しかし試に思へ、廣告文ほど民衆に多く讀まれるものはないのである。その範圍は廣く、その機會は屢々繰返される――それが廣告といふものの本來の使命なのだから。だから僕は廣告文なるものを見る度びに、そこに書かれてある事柄を常に甚だ重要視せざるを得ない。廣告は或意味に於ては民衆の教科書でさへもあり得る。僕は小學時代に假名遣ひの間違

つた廣告を餘りに屢々見るために教科書にある正しい假名遣ひとの異疑について疑ひを持ち、つひには間違つた方に從つた事實の記憶がある。今日すべての出版者が、民衆全體の幼稚な頭にどうぞ「間違つた假名遣ひ」を教へ込まないやうに願たいものである。すべての出版業に、それは同じく商賣とはいひながら、賣藥品などよりももつと文明の上に直接な非常な影響があるものだといふ諸君の使命をもつと明瞭に自覺して貰つたならば、僕が諸君にいふところのこれらの言葉も他山の石として惡意なく聞いて貰へるだらうと思ふ。

文壇外の名家と文壇

文學的刊行物がやうやく一般社會化せんとする氣運が現はれると同時に、一般社會との接觸によつて所謂文壇以外の有名な人々が、各々それ〴〵の方面のえらさを以て文藝思想界とも關係を生じて來る有樣は、前項に後藤氏粕谷氏などが引に出たところでも一つの例を見たけれども、この現象はこの後もつと頻繁になることと思ふ。今日でも既に「文藝春秋」などでは各方面の名家に文筆を持たせてゐる。これはジヤアナリズムとして確かに一の好き進歩である。文學者の社會すなはち文壇が所謂文學青年上りの文士達ばかりによつて成り立たずに各方面の人々によつてその仕事がされるのは、決して不愉快なことではない。たゞ一つ注意すべきことはそれ〴〵の方面の名家が、しかし、それ〴〵の有名とえらさとをそつくりそのまゝ文學的社會の上にまで持ち込んで來ることは、――その人自身にさういふ考へを少しも持つてゐないのに、一般の讀者がさういふ風に受けとるのは多少の警告を要する事實である。假りに東郷元帥が何の某の小說を褒めたからといつてその小說が必ずしも文學的に傑出したものではないかも知れぬ。しかし、東郷元帥が褒めた作品があるとすればそれは確に一種のジヤアナリステイツタ・バリユウを生ずるには相違ない。僕か出版者の商人的見解が純粹な文藝批評を掩うてしまうことを喜ばないと同樣にこのジヤアナリステイツタ・バリユウが、また純粹な文藝批評を左右することがあつたなら

ば、確かに我々多少の考慮を拂はなければならぬ。僕はもとより文壇以外の人々の批評を無視しようといふ排他的な考へは、少しもあらう道理はないが、しかし他の方面のえらい人の見方が文藝的にもいつも正しいと考へることの危險だけは避けたいといふのである。これは正しく純粹な文藝批評に對する理由なき脅威である。徳富蘇峯氏は東郷元帥の如く文學と無關係な人ではない。また徳富氏が推奬したといふ島崎藤村氏の「嵐」は正しく無視することの出來ない作ではある。しかし徳富氏がこれを推賞したがために、その作の價値が一段と加はるといふことになるのは、如何なものであらうかと思ふ。かういふ事實は專ら現今の文藝批評そのものの權威なき事の反面である。

僕は無論徳富氏を、またその事業を尊敬しないものではない。しかし偶々「文藝春秋」三月號の誌上の徳富蘇峯氏座談介の記事を讀むに及んで、同氏が果して現今の我國の文學についてどれ位理解を有つてゐられるかを疑問に思つた。

例へば菊池さんなんかお考になつたらをかしいと思ふかも知れぬがあの四十七士に對する一般世間の意見でも、これまでは大石内藏之助が道樂したのは、女は嫌ひであるけれども、涙を呑んで女の顏を眺めたやうに世間では思つてゐた。私は初めから左樣に思ふて居ない。大石は元祿男でさういふことは好きであつて、自分もどうせやがて死する身だから、今の中思ふ存分に遊んで置かうといふので遊んだので、これまで大石をまるで朱子學風の學者とか村夫子のやうに言つて居つたのが、これに依つて初めて大石も解放されて幾らか人間に近くなつて來たであらうと思ひます。是まで皆んなから感激されて來たので、大石も嘸草葉の蔭でをかしくて迷惑であつたらうと思ひますが、私の言ふ所を見て、初めてお前の言ふ所が本當だと思つてゐるだらうと思ひます。これは極めて小さなことですけれども、すべて私は餘り偉く人を見ないのです。で皆んな、勿論つまらない奴はつまらない奴だと思ふし、偉い奴も、これはもう菊池さんなんて百も御承知になつてゐると思ふですけれども、偉い奴だと思つても始終偉くあるのぢやない。或る瞬間に偉いことはあらう。併し又時としては實に愚劣極まつたこともあるし、英雄の心事と言つて、英雄が始終英雄の心事ばかり持つてゐては、この俗世界には棲めない。今の伊藤さんの話のやうに、をかしいこともあるし、馬鹿々々しい所もあり子供の樣な所もあつていいと思ひます。私は成るべく有りのままの觀察をして行つてゐるのです

これはその席上に於ける德富氏の談話の一節である。僕はこの記事を讀んで德富氏がさも一つの大發見であると思つてゐるらしい大石内藏之助の見方は、芥川龍之介氏がもう餘程以前に發表した「大石内藏之助」以來我々には一向珍らしくも何んともないばかりでなく、また「例へば菊池さんなんかお考になつたらをかしいと思ふかも知れぬが」云々とあるのが僕にとつては如何にもをかしく思へるのである。我が菊池氏の如きは偶像破壞的な見方を殆んどその文學的仕事の主なるものとしてゐるかとさへ思へる人である。若し德富氏が菊池氏の作品に多少親しんでゐるとしたならば、間違ひにもこんなことをいふ筈はないのである。をかしいことには此席上には菊池氏はもとより芥川氏もゐるのである。しかもこの人達はそれらのことについて一言も觸れてはゐない。たゞ席上の山本有三氏が、それも「いや、なか〳〵結構で面白いと思ひます」と合槌を打つてゐるにしか過ぎぬ。この席上は合評會や討論會ではないのだから菊池氏芥川氏の態度は甚だ奥ゆかしいものでないことはない。しかし僕はこの兩氏が文壇といふものをもつと德富氏に印象するために何か一言いふことの方が、兩氏その人のためにはともかくも、我々文壇のためには遙によかつたかと思ふのである。又兩氏を無意識に係扱ひにしてゐる德富氏にとつても、その場では多少の失禮ではあるにしても、それ位のことは知つておいて貰つた方がよかつた。(――昔日、阿蘇山下の一青年であつた先生は僕のこの不遜な言ひ方を宥して下さるだらう)

また同じ「文藝春秋」の二月號には深田康算博士がバルザックの知られざる傑作について細しい梗概をものしてゐる、深田氏は無論尊敬すべき學者である。しかし深田氏がものされたこの文章は今日の文壇にとつて殆んど無駄だつたといつてもいゝ。なぜかとならば知られざる傑作は我々の文壇ではもう餘りに知られ過ぎた傑作だからである。その譯文は廿年以上以前から、少くとも三種以上現れてゐるものである。また深田氏がその文章の最后に書き加へたセザンヌの言葉の如きも殆んど今日の讀書子には常識的に知られてゐる言葉である。深川氏が書かれた文章がまじめな熱心なものであるだけに、僕は深田氏が我國の文壇或は讀書界の現狀について迂遠なることを感じさせられた者である。

最後に自分のことを例に擧げて恐縮ではあるが、「小泉八雲全集」の「支那怪談」の譯者は僕がかつて譯したことのある文章を參考にすることなしに飜譯をしてゐられる。もとより無學で不文な僕の譯文の如きは參考として一顧の價値もないものには違ひない。しかし何故かういふことを僕が言ひ出すかといへば、その忠實な好個の譯者は原文の中にある支那音を漢字にあてはめることのために異常な苦心をされたらしいのに、それが完全に報いられなかつたのを自から殘念がつてゐられる。僕の譯文を若し御覽になつたならば多少の參考になつただらうといふ自惚れが僕にもないではない。

何故これらの些細なことを、分けても自分のことなどまで持ち出していふかといへば、それ〲の方面の名家がそれ〲に多少文筆に關係のある人達でありながら、意外にも(或は甚だ當然にもといふべきかも知れぬが)ともかくも殆んど我々文壇的生存なるものに目もくれてゐないかの如き點に於てどこか共通したものを發見するからである。成程我々この文壇なるものはそれ〲の名家から見れば甚だ幼稚なものであるかも知れないけれども、幼稚ながらにもそれ〲少しづつの何事かはなしつゝあるとは認めて頂きたいものである。古人の書と海外の書との頁を繰るに寸暇も持たれないではあらうが同時代同國土のよしみには時をりは我々の幼稚な仕事をも顧みるだけの餘裕を持たれたいものである。又文壇的の場合にものをいひ筆をとられる時には、どうぞ何の氣がねもなくそれ〲の名家がそれ〲の方面に於て學ばれたところの最善の、もつとも精一杯の努力を惜まれることなく、我々をも決してそれ程幼稚なものと思はずに取扱つて貰つたならば我々としても亦必ずや甚だ得るところが多いに違ひない。僕は我々の文學が民衆によつて注目されると同じやうに知識的貴族の前にもも少し注目されることを要求したい——こゝに名前を揭げた諸名家に對しては妄言の多罪を謝しつつ。

研究社

新英和大辭典

岡倉由三郎先生編

英米辭典最新特色の綜合！
而も徹底的國民化の實現！

世界大戰後に於ける英米辭典界の革新は驚嘆に堪へたるものがある。然るに我國に於ては徒らに手輕なる間に合せなる小辭典流行時代を現出して、依然直譯的移植と意味解釋以上に出る良書が少い。彼の語彙の豐富・熟語例文の饒多を誇る物も宜し、而も『之こそ求める語義だ』との強き信頼を與へ進んで語法解釋にも及ぶので無ければ辭典の眞生命を握んだと言へない。本大辭典は玆に深き自覺を以て編纂された。即ち飽く迄我民衆の理解を標準として英米辭典界の最新傾向を攝取し、語義・語法徹底の爲には同意語の挿入・語原の添加等を敢行し、其他譯語の完全なる現代譯・例文熟語の有機的排列等、全て過去の類書に發見し得ざる諸特色に滿つる。冀くは聰明なる國民・學生諸賢、本大辭典の包容大海の如くなるを活用せられよ！

最新刊

［特色］

語彙 最新語は勿論百般に亘りて遺漏なし

譯語 直譯的因襲を脱し現代譯初めて完成

語原 簡潔要領を得て學習の興味を倍加す

同意語 譯語の直後に挿入し語意を徹底せしむ

語法解釋 意味解釋に止らず文法作文力に資す

發音符號 表音語を新統一し發音大辭典の偉彩

熟語成語 語數遙に原書を超え且排列に苦心す

例文例句 頻豐富縱横活用して語意解釋を助く

・帝紅色總クロース・機械綴・頗美本・
・四六判二段組・總二千〇六十頁・

定價金六圓五拾錢（送料書留小包三十六錢）

特價金五圓五拾錢（但し十萬部を限る）

見本贈呈

東京麹町區富士見町六丁目五番地　研究社　振替東京二八六〇一（賣捌全國各地書店）

婦人

◆春季特輯◆「非戀愛」

イフ(if)物語

□扮裝者の獨白……新居格
もし有島武郎があの場合死を選ばなかつたら
□間寓……谷讓次
もしお宮貫一が夫婦になつてゐたなら
□大衆劇への進展……仲木貞一
もし島村抱月が今生きてゐたなら
□無政府地獄……安成二郎
もし大杉榮が甘粕に殺されなかつたら
□一つの復活……高田保
もしカチユーシヤがネフリウドフと結婚したなら

■政略結婚哀史……矢田插雲

■悲劇病患者のはなし……古田花枝

戀愛結婚と媒酌結婚と

□結婚の旅のむづかしさ……白柳秀湖
□悲戀結婚是非……鶴見祐輔
□吾れに一案あり……高島米峰
□戀愛結婚をとるが併し……廣津和郎
□救ひは彼女自身の心に……吉田絃二郎
□何とも言へない結婚……橋爪健

■時評……吉野作造
■黑い繪具……原阿佐緒
■白堊館の主……古莊國雄

■結婚に於ける戀愛の完成と創造……中桐確太郎
■結婚制度の崩壞……清澤洌
■新しき結婚形式……片岡鐵兵
■自由結婚の解體……室伏高信

■十五歲未滿活動寫眞觀覽禁止法案是非……冊名家

永年難治の習慣も忽ち改まる

簡易な禁煙方法

驚くべき「カロット」の効力

昨年三月五日の讀賣新聞はポー型の天才富ノ澤麟太郎氏の死を報じてゐるが、その後に『彼の生命を奪つたものはバットではないかと思はれる。彼は一日に十三箱も吸つてゐたからだ』とある。バットの十三箱とは聞くだに物凄い。兎に角、煙草の害は過度に用ふるに依つて起ることは事實だが、吸つてゐる中に段々多量に吸ふ樣になるので、不知不識の間に身體を惡くしてゆくものである。煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものでない所が、茲に面白い一つの禁煙方法がある。「カロット」を一度口にすれば煙草を用ゆるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく適量の朝鮮人蔘の精氣を含んでゐるから根氣をよくすると同時に温雅な香氣と忘れ難き清涼な甘味は、輕い刺戟と快感を長く口中に殘して、一度之を口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて斷じて二度と吸ふ氣になれない。殊に口中の惡臭、又は食後や夜中口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する効力がある。但し、これは眞劍に煙草をやめようとするのでなければお勸め出來ない。何故なら再び煙草がまずくて吸へなくなるからである。是は實業之日本社あたりでも實驗して此効力に驚いてゐるのでわかる。煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病消化不良その他禁煙したら乾度肥つて身體を改造し得るだらうと感じてゐる方は是非一度カロットを試みられるが良い。大倉男爵の大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。

春の夢

正宗白鳥

（一）

牛込區矢來町。中原平作の邸宅。和洋折衷の新築で、庭園には、樹齡の老いた八重櫻が一本あつて、花は略々散つてゐる。

その櫻樹のほとりに、平作の弟、中原陽吉（四十歲。脆弱らしい男）が、肱掛椅子を据ゑて、それに、氣樂さうに身を埋めて、靜かな春の光を浴びながら、西鶴の「好色五人女」の第四卷「戀草からげし八百屋物語」を讀耽つてゐる。

そこへ、平作の次女伊津子（二十一歲。斷髮洋裝の美女）が、派手な帽子を被り、手に風呂敷包をもつて、外から歸つて來たところらしく、邸宅の一角から現はれて、陽吉の側へ近づく。

伊津子　叔父さん。御勉强？。……何、讀んでゐらつしやる？（甘つたれた口調で云つて、覗き込む）

陽吉（振返つて微笑して）今日は何處へ行つてゐた？。

伊津子　石本さんのお宅へ。……でも、ふみちやんがゐなくつて詰らなかつたわ。

陽吉　今日は風がないから、街上を歩いてゐても氣持がいゝだらう。

伊津子　でも、何處へ行つても人が一杯で煩いのね。あたし久振りで鎌倉の海が見たくなつてよ。叔父さん、連れてつて下さらない？。

陽吉　お父さんが承知すりや連れて行つてやるよ。

伊津子　あたし、お父さんに無斷で行つてもいゝのよ。叔父さんが連れて行つて下さりさへすれば。

彼女はこんな話をしてゐるうち、陽吉の持つてゐる書物を覗いてゐたが、つひにその書物を手に取つて、

伊津子　これ、面白い御本？。

陽吉　あゝ、面白いよ。あとで貸して上げるから讀んで御覽。

伊津子　西鶴（と、書物の表題を讀んで）あたし、この作者の名前を知つてゐてよ。どんなことが書いてあるの？

陽吉　そりや面白いことが書いてあるさ。おれは、二十歳時分に――さうだ、丁度お前くらゐな年齢に、はじめて西鶴を讀んだのだね（伊津子を見て感慨に耽つてゐるらしく）この「五人女」の八百屋お七のところを暗記するほど讀んで、しまひには、お七の姿が目のさきにちらつくくらゐになつてゐたのだが、今日讀むと、あの時分とはまるで氣持が異つて見えるよ。

伊津子　八百屋お七と云つてどんな女？。

陽吉　お前は、八百屋お七のことを知らないのか。小姓の吉三に會ひたくつて放火をして、鈴ケ森で火あぶりにされた有名な女ぢやないか。

伊津子　あたし、そんな女のこと聞いたことないわ。放火したり火あぶりにされたりして、いやな話ねえ。あたし、そんな女には興味が有てないわ

陽吉　まあ、さう云はないで、この書物を貸して上げるから、讀んで御覽。昔の女の話だつて馬鹿にしたものぢやないよ。………全體こんな櫻の花の散りかゝつた所へは、お前のやうな現代女よりは、振袖姿のお七が現はれた方が、よつぽどよく似合つてるんだ。

伊津子　あたしがゐて不似合ひなら、あちらへ行つちやうからいゝ。

伊津子が笑つて行きかけると、陽吉、手を伸して留める。

陽吉　まあ待て。ちよつと聞きたいことがあるんだよ。………石本の叔母さんはどんな顔してゐた?

伊津子　(不思議さうに)石本さんの叔母さんの顔?。あの方の顔は不斷と異つてやしないわ。叔父さんはなぜそんなことをあたしに訊ねるの?。

陽吉　おれは十年以上もあの人に會つたことないのだから、いゝ加減お婆あさんになつて、顔に皺が出來てやしないかと思つて訊ねたのだ。

伊津子　あら、石本さんの叔母さんの顔には皺なんか出來てやしないわ。隨分奇麗よ。ふみちやんのお母さんとは思へないほどに美くしいのよ。

陽吉　さうかなあ。

彼がれ何かを思浮べて默つてゐると、伊津子が行きかける。そこへ、西洋室の窓が開いて、伊津子の姉知恵子(二十二歳、頭髮は手輕に西洋風に結つて、不斷着の和服を着けてゐる)が顔を出す。

知恵子　叔父さん、そこにゐらつしやつたの。あたしそこへ下りて行きますわ。待つてゐらつしやい。

彼女がさう、聲を掛けたので、伊津子は足を留める。陽吉は椅子を離れて、快活に手を伸して、天に向つて欠伸をする。知惠子が輕快な足取りで入つて來る。

知惠子　叔父さんは何時の間にこんな所へ椅子を持出したんです?。

陽吉　春の日光を全身に浴びようと思つて。……

知惠子　日光浴をなさるのなら、鎌倉の濱でなすつた方がよかあなくつて?。こんな狹苦しいお庭の中で、埃くさい空氣を吸つて日光浴したつて、大した効能はないだらうと思はれますわ。

陽吉　それは當然の理窟だね。(櫻樹のほとりを歩きながら) しかし、鎌倉のおれの家の庭で一人ぼつちで日光浴をしてるたつて面白かないからね。

知惠子　鎌倉のお家なら、あたし、いつだつて行つたげますわ。

伊津子　あたしだつて、鎌倉へなら、何時だつて行つたげますわ。

陽吉　ハヽヽ。おれも色男だな。お前達のやうな美しい若い女に隨き纏はれて。……だけど、お前達を鎌倉へ連出すことは、お父さんが承知しないだらう。おれが一週間ばかりこの家の厄介になつてるのさへ、お父さんはいやがつてるらしいから。……おれの思想が若いお前達に感染すりやしないかと、お父さんは心配してるんぢやないか。

伊津子　叔父さんの思想と云つて、どんな思想?。

知惠子　共產主義でも社會主義でもなさゝうだし、どんな思想か知ら。

陽吉　おれに思想もなにもあるものか。お前達の方が却つて過激な思想を有つてるんだよ。

知惠子　あんなひどいことを。……あたし達ほど溫和な思想を有つてる人は、滅多にありやしませんよ。

伊津子　(考へて) 叔父さんは怠けものだから、怠け癖が傳染しちやいけないと、お父さんは心配してるんぢやないこと。

陽吉　あるひはさうかも知れないね、（家の方を見て）かうしてお前達と話をしてゐるところを、お父さんに見られたら、よく思はれないに違ひないよ。……おれも、今日中に鎌倉の穴の中へ引込むことにしようかな。

伊津子　あたしを連れて行つて下さらない？。

陽吉　さういふ譯には行くまいよ。

知惠子　叔父さん。本當に今夜鎌倉へお歸りになるの？。あたし、秘密（ないしよ）で叔父さんに御相談したいことがあるんだけど。

陽吉　ホウ。お前がおれに相談したいことがあるのか。ぢや此處で云つたらいゝぢやないか。

知惠子　でも。……（妹を氣にして躊躇する）

陽吉　伊津子がゐちや云へないのか（伊津子を見て）ぢや、お前はあちらへ行つといでな。

伊津子　あたしが聞いちやなぜいけないの？（不機嫌らしく云つて、動かないでゐる）

陽吉　人間は妹にだつて聞かせたくない話があるものだよ。……意地惡をしないで、ちよつとの間、彼方へ行つといでよ。

知惠子　當惑した態度をして默つてゐる。伊津子は不平らしい顏して動かないでゐる。陽吉は緊張した光景を訝りながら見てゐる。やがて

陽吉　ぢや、その話は一先づ見合せることにして、家（うち）へ入つて紅茶でも選（よ）んで貰ふことにしようか。

伊津子（ふと尖つた聲で）あたしには姉さんの相談事が分つてゐてよ。

陽吉（驚いて）分つてるのなら　お前が側にゐて、聞きたがらなくつてもいゝぢやないか……まあ、その話は後にしよう。

陽吉は行きかける。

知惠子　伊津（いつ）ちやんに聞かれて困るやうなことぢやないのよ。あたし、今此處で叔父さんにお話しするわ。

陽吉　ぢや、承はらうか。……若い女でおれに打明話を聞かせて呉れるのは、お前達ばかりだ。

彼れは、それに興味を感じたらしく云つて、椅子に腰をおろす。知惠子、その前に立つ。伊津子、少し離れて立つ。

知惠子　あたし、此處にゐちやいけないことが出來かゝつてゐますの。五月のはじめまでには、人の氣のつかない所へ行つてゐなきやいけないと思つてゐるんです。

陽吉　親の家にゐちやいけないと云ふのは變だね。どういふ事情があるんだ。

知惠子　五月の十日頃までには、エンプレス何とかいふアメリカの汽船が横濱に着くんですつて。その汽船が着く前に、あたしはどうかしなきやいけないの。

陽吉　その汽船で誰れかゞ西洋から歸つて來るんだね。……それで。

陽吉　座を乘出して訊く。知惠子、語るに躊躇してゐる。

伊津子（二人の側へ近づいて）その汽船で歸つていらつしやる人は、岸邊さんぢやなくつて？

陽吉　岸邊？。東洋新聞の特派員で外國へ行つてる岸邊德藏のことか。あの男はお前達のお父さんに信用されて、お父さんの專門の學問に必要な書類を買つて來ることになつてると聞いたことがあつたが。……知惠子は岸邊に會つちやいけない譯があるのか。

伊津子　そんなことぱないわねえ。姉さん。岸邊さんは、たび〳〵姉さんやあたしに、外國の繪葉書を送つて呉れたぢやないの。あの方が歸つていらつしやるのなら、あたしにも屹度珍らしいお土産を持つて來て下さるに違ひないわ……お父さんが許して呉れゝば、あたし、姉さんと一しよに、横濱の棧橋まで岸邊さんをお出迎へに行きたいと思つてよ。あたし、外國の汽船を見ることと大好きさ。思つても胸が踊るやうだわ。

知惠子（妹の方へは目を留めないで）お父さんが岸邊さんの歸朝を歡迎して、この家へお招きするやうだつたら、あたし

を此處から追出すと同じことになるんです。

陽吉　お父さんは岸邊をお前のお婿さんにしようと思つてるのかい。ついぞ聞いたことがなかつたが……

知惠子　さうぢやないの。そんなことないわ。……だけど、岸邊さんが日本へ歸つて來て、あたしの家へいらつしやるやうになつたら、あたしがとても此處にじつとしてはゐられなくなることが、今目の前に見えてるやうなんですもの。……それは、岸邊さんのことは別にしても、あたし、先日叔父さんに承はつた天主教のお寺へでも入りたいと思つてゐますのよ。

陽吉　これは驚いた。その若さで、尼寺入りをしたいといふのは驚いたな。おれが先日話したのは、西洋の昔話なんだよ。今時お前達がそんなものにかぶれちやいけないね。

知惠子　どうせ叔父さんが、お寺入りの案内者になつて下さらないことは分つてましたの。でも、あたしがこの家から飛出したら、鎌倉のお家へでも、何處へでも、叔父さんがあたしの身を引取つて庇護つて下さるに違ひないと、あたしは獨り極めに極めてるんですけど。

陽吉　そりや、事によつたら庇護つてやらないこともないが、話の筋道が立たなきや困るね。

知惠子　理窟なんかどうでもいゝぢやありませんか、叔父さんにも似合はない

陽吉　成程ね。若い女の尼寺入りや家出の原因を訊ねるのは野暮かも知れないね。岸邊といふ男に對する戀愛上の煩悶の結果とでもして置かうか。

伊津子　あたし、岸邊さんが歸つていらしつたら、珍らしい外國のお話が聞けると思はれて、樂みにして待つてるわ。あたし達に送つて下すつた繪葉書には、面白さうな文句が書いてあるんですもの。姉さんはなぜ岸邊さんを嫌つたがるんでせう。あんな柔しい親切な人を。

知惠子（目を尖らせて）そりや、岸邊さんはあなたには親切で柔しいんでせうけれど。
伊津子　姉さんにだつて親切ぢやなくて？。……姉さんは一ころ、岸邊さんに宛てた手紙を毎日のやうに書いちや破り、書いちや破りして書直してゐたぢやないの。
知惠子　嘘仰有い（きつい聲で云つて）あなたこそ、伊津子さんに似てると云つて岸邊さんが寄越したアメリカの女優の繪葉書を、大切さうに机の引出へしまつて、わざ〳〵石本さんのお家へ持つて行つて見せたりしたぢやないか。
伊津子　それがなぜいけないの？。……だつてあんな繪葉書を頂いて悅しかつたんですもの。……あの繪葉書を叔父さんにも見せて、あたしに似てるか似てないか批評して貰ひたいと、今思つてゐてよ。
知惠子　お世辭をそのまゝに信用して。あなたもお目出たいのね。あなたが何であの女優に似てるものですか。
陽吉　ハヽヽ。馬鹿な言合ひは止せよ。……しかし、知惠子が尼になつて伊津子が女優になつたら、中原平作の家庭も破滅だが、それも要するに空想に過ぎないね。
伊津子　アラ、あたし、女優なんかにならうと思つてやしないことよ。
陽吉　さうか。たゞアメリカの女優に似てるのを名譽としてるだけなんだね。……岸邊さんの繪葉書と比べて見なくつても、お前の顏立や樣子が、アメリカの女優に似てることはたしかだよ。
知惠子（妹に向つて）ぢや、繪葉書を持つて來て、似てるか似てないか、叔父さんに見て頂くといゝわ。
伊津子　ぢや、待つてゐらつしい。あたし繪葉書を持つて來るわ。
　伊津子が、家の中へ入る。陽吉、ニヤニヤ笑ふ。
知惠子　この頃の伊津子と云つたら、人のおだてに直ぐに乘せられるんですよ。
陽吉　あの子は少し滑稽だよ。（ふと氣づいたやうに眞面目な顏して）それはさうと、お前の秘密の相談と云ふのは何だ

い。まさか、髪をおろして墨染の法衣を着たいといふことぢやあるまいね。
知惠子　たとへ、あたしを鎌倉のお家にかくまつて下さらなくつても、あたしの身に何事かあつた時に、お父さんによく辯護して頂きたいんです。あたしのことはあたしの勝手にさせといて、お父さんなんぞに干渉して貰はないやうに、叔父さんの力でよく取做して頂きたいんです。
陽吉　しかし、それはおれの力では不可能なことらしいぜ。おれは、お前のお父さんには信用がないんだから。……お前が突飛なことでもやり出さうものなら、おれがお前達を煽動したやうに思ふだらうよ。
知惠子　だつて、あたしの今度の決心は、叔父さんに煽動されたゝめぢやないんですもの。叔父さんに責任はありませんわ。
陽吉　ところが、親といふ奴は、子供の不始末を他人の所爲になりつけたがるものだからね。おれがお前のために辯護するもしないも、お前の所行はおれが幾分かの責任を脊負はなければなるまいね。
そこへ、伊津子が入つて來る。二人の話の樣子の眞面目なのに目を留めて、
伊津子　姉さん、お母さんが呼んでてよ。
知惠子　さう？（陽吉に向つて微笑して）あたし、叔父さんにお約束したらもう安心ですわね。
さう云つて、家の中へ入つて行く。
陽吉　何だ。獨り極めで、安心だの約束だのと云つて。………（繪葉書をもつて近よつた伊津子に向つて）時節が時節だから、お前達も春愁を感じてるのかい。姉妹でタワイのないことを云つてる。
伊津子　（叔父の言葉の意味は耳に留めないらしく）でも、叔父さんは姉さんに何かお約束をしたのぢやない？
陽吉　そんなことはないよ。全體姉さんはどうしようと思つてるんだらう。おれは一週間もこの家にゐるのに、嚴粛な平

和な家庭だと思はれるばかりで、何も變つたところはなささうに思はれたのに。
伊津子（叔父の言葉の意味は耳に留めないらしく）岸邊さんのことはどうだか知らないけど、叔父さんが鎌倉へお歸りになつたら、ある人を此處へお招きすることになつてるのよ。
陽吉　そんなことがあるのか。ある人と云つて誰れだらう？。
伊津子　石本さんの奥さんが、紹介者としてその人を連れていらつしやるんですつて。
陽吉（驚いて）石本の妻君が？。………おれはちつとも氣がつかなかつた……そして、知恵子の家出がそのことゝ關係があるといふのはどういふ譯なんだい。
伊津子　ぢや、姉さんは叔父さんに家出の相談をして、叔父さんがその相談をお引受けなすつたのね。
陽吉　なに、姉さんだつて本當にさう極めてる譯ぢやないんだらう。お父さんやお母さんに、うつかりそんなことを云つちやいけないよ。
伊津子　云ひませんとも。云つて呉れと頼まれたつて云はないわ。この頃、姉さんがお腹のなかで、あたしに邪慳になつてることに、あたしよく氣がついてるのよ。
陽吉　だつて、お前達は大變仲がよさゝうに見えるぢやないか。二人つきりの姉妹だから仲をよくするのが當然なんだが。

彼れは、口先のお世辭に過ぎないやうにさう云ひながら、伊津子が手にしてゐる繪葉書を、奪ふやうに取つて、
陽吉　これがアメリカの女優か。なる程。……何處かお前に似てるやうだね。お前と姉さんとが似てるよりも、この女優とお前とがよく似てるやうに思はれるよ。……容貌から云つたなら、姉さんが尼寺へ入つて、お前が女優になるのが嵌り役だね。

彼れがさう云ひながら、絵葉書と伊津子の顔を見比べるので、伊津子は少し極りの悪い様子をする。

陽吉　さう云つたからつて、知恵子が醜いと云ふんぢやないぜ。知恵子は尼さんに似合はしい神々しいところがあるやうだ。

伊津子　そりや、姉さんはあたしのやうに下品ぢやないわ。

陽吉　ウ、ン（厳い返事をして、ふと厳い目顔をして物を考込む）

伊津子　叔父さんはどうしたの？。

陽吉　どうもしないよ。

伊津子　あたし、叔父さんがそんな怖さうな顔をする方とは思はなかつた。

陽吉（顔を和らげて）ハ、、、。お前達が夢のやうなことを云ふから、おれも夢のやうなことを考へたのだ。お前達がおれに感染れるよりも、おれの方がお前達にかぶれたのだね。馬鹿な話さ。

伊津子　それは何のこと？

そこへ、西洋室の窓から、中原平作（ある大學の教授で、法制史の學者。五十餘歳）の顔が現はれる。

平作　そこにゐたのか。

陽吉　家の中は陰氣だから、此處で日光浴をしてゐたのだ。

平作　さうか。おれも庭へ下りて見ようか（顔を引込める）

陽吉（薄笑ひを浮べて）お父さんは、今おれがお前に悪い智慧をつけてるやうに思つてるだらう。

伊津子　あたし、あちらへ行つてよ。……この御本も拝借するわ。

彼女は、椅子の側にあつた「五人女」にふと目をつけて、それを持つて家の中へ入つて行く。

平作は家の中から出て來ながら、彼女と擦れ違ひに、「伊藤に、椅子を持つて來いと云つて呉れ」と吩咐ける。

陽吉　今歸つて來たのか。不斷よりも歸りが遲いやうだね。

平作　なに、不斷よりは少し早いくらゐだ。お前はこの頃時間の觀念を超脫してるから、時間の早いも遲いも分りやすまい。

陽吉　ところがさうでないよ。此家の御厄介になつてから、毎日の時間の經過を痛切に感じてゐる。鎌倉に居ると、一日や二日はボンヤリしてゐて、朝が午後だか、夜が朝だか分らないやうな氣持で暮すことが多いんだが、此方にゐると、僕の心の中に、時間が時計のやうにハツキリしてるよ。

平作　ハヽヽ。お前は何時になつても共同生活の出來にくい人間なんだね。……しかし、それほど居づらい所に、なぜ我慢して逗留してるんだい。他所へ遊びに出るやうでもないし、人が訪ねて來るやうでもないし、強いて東京で愚圖々々してる必要はなさゝうぢやないか。

陽吉　理窟はさうだがね。理窟通りには行かないものさ。

そこへ、書生が籐椅子を持つて來る。平作、腰をおろしながら、はじめて目に留めたやうに櫻を見上げて、

平作　櫻も何時の間にか散つちやつたね。（と感動したやうに云ふ）

陽吉　僕は此處へ來てからは、毎日この櫻を見てゐたよ。

平作　お前はおれとは違つて風流心があるからいゝ。

陽吉　ところで、何か變つた話でもあるのかい。

平作（心の動搖を現はしたやうな態度で陽吉を見て）……實は、お前が鎌倉へ歸る前に、一度話して置きたいと思つてゐることがあるのだ。

陽吉　ぢや、此處で直ぐに承はつた方がよさゝうだね。僕は事によつたら、この次の汽車で歸らうかと思つてたところなんだ。

平作　次の汽車で?。何か急用が出來たのかい。

陽吉　僕に急用のあらう筈はないが、長々とお邪魔をして相濟まんといふことを、今不意に感じたゝめなんだ。……まあ、そんなことはどちらでもいゝとして、肝心な用件を早く聞きたいもんだね。

平作　用件と云つて事務的の事ぢやないがね。おれの家庭の内情について一應お前の耳に入れて置きたいと思つてることがあるんだ。

陽吉　(乘出して)家庭の内情?。兄さんは今日は家庭の内情を僕に打明けて呉れるんだね。

平作は輕く首づいて、話の最初の言葉を見つけるために苦心してゐるらしく默つてゐる。陽吉は聞耳を立ててゐる。

そこへ、平作の妻園子(四十五歳。年齢よりは若く見える美しい女)が、家の中から現はれる。

園子　お父さんもお庭にゐらしつたの?。戸澤さんがいらしやいましたよ。急な御用がおありになるさうで、應接室でお待ちになつてゐます。

平作　さうか(顏を顰めて立上り、陽吉を見て)ぢや、ちよつと行つて、直ぐに話を濟ませて來るから、此處で待つてゐてくれ。

平作、急いで家の中へ入つて行く。陽吉、呆氣に取られて目送する。と、此方を見てゐた園子が、沓脱ぎへ足をおろす。さつき平作が來た時には、椅子を離れなかつた陽吉も、今度は、珍客を歡迎するやうな態度で、椅子から立上る。園子、近よる。

陽吉　わたしが此方へ來た時には、櫻は滿開でしたが、もう大方散つてしまひましたね。

園子　さうですね。（ちよつと、櫻を見上げたが、何の感じもなささうである）
陽吉　まあ、お掛けなさい。
園子　有難う。
陽吉　今日は面白い日ですよ。この櫻の下がわたしの宿の客室見たいで、次ぎから次ぎへと、いろ〳〵なお客様の訪問を受けてるやうです。
二人は向合つて椅子に腰をおろす。
園子　此處がそんなにお賑かでしたの？。（沒感情の口調で云つて）さつき主人が、重要なお話をしてゐたやうぢやありませんか。
陽吉　いや、まだ何も聞きませんでした。これから聞かうとしてたところでした。
園子　わたしはあなたが鎌倉へお歸りになる前に、一度聞いて頂きたいと思つてることが御座いますのよ。
陽吉　さうですか。ぢや、早速承はりませう。……今度は邪魔の入らないうちに、お話の要點を早く承はりませう。
園子　あの知惠子のことで御座んすの。よさゝうな緣談がありますのよ。
陽吉　さうですか。それは結構ですね。
園子　ところが、困つたことが起りかゝつてゐますのよ。わたしの二十年あまりの心盡しが水の泡になりさうなので、わたし此間からオド〳〵してゐるんです。
陽吉（思はず乘出して）それはどうしてゞす？。
園子はあたりを顧みる。そして、怯む心に力をつけて、
園子　知惠子は自分の生みの母親が外にあるといふことを、薄々感じてるらしいんです。

陽吉　姉さんは何を仰有るんです？。僕にはあなたのお言葉の意味がよく分りませんよ。

園子　わたしの言葉の意味がお分りにならない？。（陽吉の眞意に疑ひを挾んでゐるらしく）それでは、あなたも二十年この方、わたしを知惠子のほんとうの母親だと思つていらつしやつたんですね。

陽吉　これは驚いた。これがあなたの口から出たのでなければ、わたしは決して信用しませんね。……知惠子や伊津子の生れた時分には、兄貴は京都の學校に奉職してゐたのだから、僕には内輪の事情がよく分らなかつた譯だが。……しかし、今まで夢にもそんなことを疑つたことはありませんでしたよ。

園子　詳しい事情を今お話してなんかゐられませんけれど、知惠子が薄々勘附いたゝめに、わたし達夫婦は此間から當惑してゐるんです。

陽吉　だつて、これまで無事に通つて來て、今度あの子の身の極りがつくことになつたのなら、それでいゝぢやありませんか。

園子　ところが、これがあの子だけの問題ぢやなくて、わたしと主人との間の新しい事件になりかゝつてるんです。それについちや、主人からあなたにお話しするかも知れませんけれど、わたしが二十年の間、誰れも知れない苦勞をして來たことだけは、あなたもよく察して下さいまし。今だつてわたしは、毛筋ほどもあの子の不爲を思つてやしませんわ。

陽吉　……さう承つて見ると、わたしも思當ることがありますよ。さつきも二人を前に置いて見てるうちに、さう思つたんですが、知惠子には妹のやうな華やかな美しさがありませんね。あなたを母親に有つてゐたら、そんな筈はないんですからね。

園子　伊津子が姉さんよりも美しいつてことがあるものですか。

陽吉　不思議なことがあればあるものだ。……全體知惠子の本當の母親は誰れなんでせう。今まで生きてゐるんでせう。

園子　それはわたしからは申上げられませんわ。いづれ、兄さんから詳しいお話があるでせうけど、わたしが、長い間姉と妹の間に何の分隔てもしないで育てゝ來たことだけは、あなたもよくお心に留めてゐて下さいましな。

陽吉　それは仰有るまでもないことです。わたしがそんな疑ひを起したことがなかつたくらゐですから。

そこへ、知惠子が顏を出す。二人は言葉を噤む。

知惠子　叔父さん。直ぐに應接室へいらしつて下さい。

園子　お客樣はもうお歸りになつたの？

知惠子　えゝ。

園子（陽吉に向つて）ぢや、兄さんからよくお聞きなさいまし。お差支えさへなければ、わたしも、お話のお仲間に入れて頂きますわ。

陽吉　兄が何を話すか。兎に角行つて見ませう。……此間うち、家の中の空氣が妙に鬱陶しいと思つた。

椅子から立上る。園子も立上る。知惠子がソツと見てゐる。

（幕）

（二）

應接室。そこには、百科全書を收めた書架があつて、ソクラテスの胸像が懸つてゐる。

圓卓を眞中にして、平作と陽吉とが差向ひに腰を掛けてゐる。

陽吉（前の幕よりは意氣銷沈してゐる）ぢや、石本の妻君が知惠子にその重大な秘密を微見(ほのめ)かしたのだね。

平作　しかし、それは好意を持つてしたことなんだから恨めないよ。岸邊と知惠子とが思合つてるのが、事實だとする

と、岸邊の歸朝するまでに、知惠子を緣付かせなければ、危險だからね。だから、石本の妻君も骨を折つて、あの子に適當した靑年を搜して吳れたのだが、知惠子は利口で神經質だから、素直に同意するか、どうだか氣遣はれるのだ。……お前から知惠子をうまく說得して貰へまいか。鎌倉の家へでも連れて行つて、いゝ時機を見て話して吳れるといゝと思つてる。

陽吉　僕の手に知惠子を預けようと云ふんだね。兄さんも今度は僕のやうなものに娘を托さうとするのかい。僕もはじめて信用を得た譯だな。

平作　そんな皮肉は云はないで吳れ。……しかし、知惠子をどう說きつけようともお前の勝手だが、岸邊と知惠子との間に血がつながつてることについちや、飽くまでも隱しといて吳れ。全體知らないで濟むことを强いて知らせるには及ばないんだからね。

陽吉　それは承知した。知らなきや知らないで、一生安穩に世を渡つて行けるものを、强いて知つて苦勞をする必要はないんだからね。……しかし、石本の妻君の紹介する貝島といふ男には、僕も念のために一度會つときたいものだね。知惠子の一生を托するに足る男だかどうだか、僕の目で見ときたいよ。

平作　それは構はない。お前にも引合せるやうにするから、よく見といて吳れ。（と云つて、感慨を籠めた口調で）おれの過去の秘密は、一度はお前に打明けようと思つてゐたのだがね。あるひはお前の方で早くから知つてゐて知らん顏してるのかも知れないのに、此方から改まつて打明けるのも却つて變だと思はれたから、今まで默つてゐたのだ。……しかし、かう打明けてしまふと、懺悔でもしてしまつたあとのやうに、胸がすが〳〵しくなるよ。

彼れがさう言終るや否や、慌たゞしく扉が開いて、園子が轉げるやうに入つて來る。二人は驚いて立上る。

平作　どうしたのだ？　何事が起つたのだ？

園子（青い顏して、震えてゐる手で、一葉の洋紙を夫に突きつけて）知惠子が家を飛出したのです。これを御覽なさい。

平作（奪ふやうに紙片を取つて）これが遺書か。……これには理由が書いてないが、たしかに勘付いたのだな。

園子　無論原因は分つてゐます。

平作　石本の妻君が餘計なことを知らせるからいけないんだ。

園子　今更、人の所爲にしたつて爲方がないぢやありませんか。今の場合一刻も早く後を追驅けて連れて歸らなきやなりません。（夫を責めるやうに云ふ）

平作　あの子は何處へ逃げたか、お前に心當りはあるのか。

園子　わたしには分りませんさ。夢にも知らなかつたことだから、見當がつきません。

平作　伊津子を呼べ。あの子は知つてるかも知れない。

伊津子は母親の後に隨いて來て、扉の間から、そつと覗いてゐたので、父親の言葉を聞くと、歩を進めて、皆んなの前へ顏を現はす。

平作　伊津子はそこにゐたのか。お前は姉さんの行先を知つてゐないのか。

伊津子　わたし、知りませんわ。（さう答へながら、陽吉の方を見る）

平作　知惠子は今までゐたやうぢやないか。誰れも氣がつかなかつたのか。

園子　ゐなくなつてから　まだ十分も經ちますまい（次第に冷靜になる）

平作　宿俥に乘つたかも知れない。伊藤をやつて聞かせて見よう。

平作　部屋を出て行く。伊津子も隨いて出て行く。

園子（陽吉に向つて）あなたには心當りは御座いますまいね。

陽吉　ありませんね。しかし、あの子が大した無分別をする筈はないから、心配しないでもいゝでせう。二三日うちには行先も分りますよ。

園子　わたしもさう思つてゐますけど、若しも變つたことでも出來て、わたしの所爲にされちやたまりませんわ。

陽吉　なに、あなたの所爲になる氣遣ひはありませんよ。事情が世間に公けになれば、あなたが今まで隱忍してゐたことが誰れにでも認められるばかりで舊惡發露の恥辱を感じるのは、兄貴ばかりなのぢやありませんか。

園子　誰れの恥辱になつても同んじことですわ（と云つて疑ひの目で陽吉を見詰めて）知惠子はさつき、お庭であなたに何か云つてゐませんでしたでせうか。

陽吉　さうですね。多少變つたことを云つてはゐましたが、なあに、若い女が夢を見てるんだから、心配なことはありませんよ。

園子　伊津子も知惠子も、姉妹とも、何かにつけて、叔父さん〳〵とお父さんよりも叔父さんを尊敬してるやうですから、知惠子の隱れ場所が見つかつたら、あなたによく說諭して頂きたいと思ひますよ。

陽吉　兄貴もわたしにさう云つてましたが、わたしには若い娘を說諭する資格はありませんよ。この歲になつても、極つた女房さへなくつて、僅かな休職手當で、辛うじて田舍生活をしてゐるやうな意氣地なしなんですから。

園子　だつて、あなたは物質には成功なさらなくつても、人間として潔白な方なのぢや御座いませんか。

陽吉　わたしの生涯が潔白だとしても、それは詰らない潔白な生涯なんです。……お互ひに此處で悠長な話をしてゐるよりは、あちらへ行つて、知惠子の搜索の手傳ひでもしようぢやありませんか。

彼れはさう云つて立ちかけたが、園子はじつとしてゐる。

園子（微笑して）陽吉さんは空呆けてゐらつしやるのね。あなたは、知惠子の居場所をよく知つてゐらつしやるんぢやあ

りませんか。知惠子はあなたの差金で家を飛出したに違ひないと、わたしはちやんと察してゐますわ。あの子が向う見ずに家を飛出したりなんかするものですか。

陽吉　これは驚いた。わたしが何でそんな餘計な差圖をするものですか。

園子　お隱しにならなくてもよ御座んすわ。あなたになら、わたしども安心してあの子をお任せすることが出來るんですから。……でも、主人には、せめて一日でも默つてゐて下さいましな。

陽吉　あなたがそんなに獨り極めに、わたしを惡者にしちや困りますよ。わたしが餘暇があつて惡戲が好きだつたにしても、此家の娘を唆かしたりなんか決してしないつもりです。さういふ點は潔白だから信用して下さい。

　そこへ、平作が慌ただしく入つて來る。

平作　今石本へ電話を掛けたら、妻君が直ぐに來ると云つてたよ。あの妻君にはあるひは心當りがあるのかも知れないね。

　陽吉は「石本の妻君」といふ言葉を聞いて心の動搖を顏に現はす。

園子　知惠子も何だつて人騷がせをするんでせう。……さつきまで、不斷と違つたところはなかつたのに、だしぬけに遺書を殘して飛出すなんて、わたしどうしても腑に落ちませんよ。

平作　若い女は、發作的に何をやりだすか分らないものだよ。

陽吉　ところで、姉さんは、それを僕の所爲にするんだから、僕も迷惑だよ。

平作　お前の所爲に？（陽吉の方を見て、ふと思當つたやうに）お前に關係があるんぢやないか。さう聞くと、おれもそんな感じがしだした。

陽吉　戯談云つちやいけないよ。無理やりに僕の責任にされちやたまらないね（腹立たしさうに云ふ）

平作（眞面目に）いや、お前の惡戲なら安心だと、おれは却つてそれを希望してゐるのだ。

そこへ、書生が戸口に現はれる。

伊藤　俥屋で訊ねましたら、知惠子さんは、あしこの自働車でお出掛けになつたさうで御座います。

平作　それで、何處まで行つたか分つたのか。

伊藤　その自働車はまだ歸つてきゐりません。歸つて來たら、運轉手に直ぐに宅へまゐるやうに云つて置きました。

平作　さうか。

書生が、あちらへ行きかけると、

平作　それから伊津子に、直ぐ此處へ來るやうに云つて呉れ。

書生　ハイ。

書生が入つて行く。

園子　不斷着のまゝで一人で自働車に乘つたりして、どういふ量見なんでせう。

平作　しかし　運轉手に訊いたら、多少見當がつくかも知れないね。

園子　それが當てになるものですか。自働車を下りて、行衞を晦らましたら、分りつこはないぢやありませんか。

平作　さうケチをつけるな。あの子は馬鹿ぢやないから、おれ達に迷惑を掛けることはすまいよ。

園子　それは、あの子のことですから、先きから先きへと計劃を立てゝしたことかも知れませんわ。

書生が入つて來る。

伊藤　あの伊津子さんは、お家の何處にもゐらつしやいませんですが。

平作　伊津子がゐない？　そんな筈はないぢやないか。

園子　どうしたんでせう。

彼女は色を失つて、慌てゝ部屋を飛出す。平作も隨いて行く。
陽吉、腑に落ちない顏して椅子に腰をおろして、煙草に火を點ける。

（幕）

（三）

鎌倉の中原陽吉の家。
書齋と寢室と兼用の質素な部屋。
寢臺には、知惠子が横たはつてゐる。その側で、伊津子が肱掛椅子に腰を掛けて、陽吉に借りた「五人女」を讀んでゐる。電燈が二人の間に照つてゐる。

伊津子（書物から目を離して、姉の方を見て）叔父さんはもう歸つて來る時分よ。
知惠子　さう？　春の夜も、待つてると隨分長いものね。
伊津子　姉さんはよく眠れるわね。あたし目が冴えて決して眠氣が差して來ないことよ。
知惠子　あたしだつて、しみ〴〵眠つてなんかゐなかつたの。トロ〳〵と眠りかけると、直ぐに變な夢を見續けるのよ。今日はなぜこんなに變な夢を見るんだらうね。
伊津子　どんな夢？
知惠子　あなたに話したら、嗤はれさうな夢なのよ。
伊津子　あたし達が、今日牛込の家を出て此處まで來たことも、夢のやうぢやないの？
知惠子　あたしが鎌倉へ來たことは、前から考へた上でしたことだけれど、あなたの姿を見た時には、あたし、夢を見て

ゐんぢやないかと思つたの。……生身の伊津ちやんがあたしの後を追つて、わざ〳〵鎌倉まで來る譯がないと思はれたんですもの。……でも、よく來て呉れたわね。あたし一人だつたら、こんな淋しい所で、叔父さんの歸りをボンヤリ待つてなんかゐられないに違ひないわ。

伊津子　だつて、お父さんのお許しがなくつても、姉さんと二人で叔父さんのお家を訪問することは堅く約束してゐたぢやありませんか。……だから、姉さんがあたしにも知らさないで、一人で此方へ來るつていふ法はないと思はれてよ。

知惠子　だつて、今日は、あたし、たゞ遊びに來たんぢやないんだもの。一時も家にじつとしてゐられないやうな氣持がして、何か目に見えない、變な者に誘はれて家を飛出したんですもの。……でも、よかつたのよ。鎌倉の海の中なかへ入つて行かないで、無事に叔父さんの寢臺の上に休息することになつたのは、あたし、どんなに幸ひだつたか知れなかつたの。

伊津子　「少し考へがあつて家を出る」と、遺書に書いてあつたわね。あたしは、姉さんが叔父さんと打合せをして、一足先きへ鎌倉へ出掛けたのに違ひないと思つて、安心してゐたのだけれど……

知惠子　此方を目あてにして家を出た譯ぢやなかつたのだわ。

伊津子　ぢや、無方針だつたのね。……でも、姉さんが此方に落着いてゐたのは、姉さんのために幸ひだつたばかしでなくつて、あたしのためにも幸ひだつたのよ。姉さんが此處にゐなかつたら、あたしの身もどうなつたか知れなかつたの。一人だつたら、とても落着いて書物を讀んで、叔父さんの歸りを待つてなんかゐられやしないわ。

知惠子　それは何の本？　面白い本？

伊津子　ちつとも面白いところなんかありやしない。讀んでて頭が痛くなるばかりよ。……叔父さんはなぜ、こんな古くさい書物を讀むんでせう。

知惠子　あたしに見せて頂戴。

手を伸して伊津子の持つてゐる書物を取つて、寢臺の上に身體を起して、書物を讀みかける。

伊津子（あたりに耳を留めて）靜かなところねえ、幽かに波の音が聞えるばかりで、あたし達の壁の外には、人間の聲は何處にもしていないぢやないの。此處の老婢も、あたし達をいゝお留守番にして何處まで行つたんだらう。

知惠子、書物を讀續けてゐる。

伊津子　叔父さんと一しよに、誰れかをあたし達の迎へに寄越すでせう。伊藤でも來るか知ら。……誰れが來ても、あたし當分此方で遊んで行くつもりよ。姉さんも、直ぐに歸る氣になれないでせう。

知惠子、なほ書物を讀續けてゐる。

伊津子　姉さんには、あたし大事な話があるのよ。

知惠子、懶さうに目を上げる。

伊津子　姉さんは此間石本さんの奥さんから、大事な事を聞かされなくつて？　姉さんの身の上に關係した大事な事なのよ。

知惠子　いゝえ、なんにも。

伊津子　でも、それが、今日姉さんが家を出たあとでは、公然の秘密になつてゐてよ。石本の奥さんが、云はなくつてもいゝことをお喋舌したつてことが。……

知惠子（訝しげに）それがあたしに關係したこと？

伊津子　えゝ。姉さんは本當に石本の奥さんからなんにも聞かなかつた？

知惠子（じれつたさうに）聞かないから聞かないと云つてるぢやないの？　あたし、あなたに隱しやしないわよ。

伊津子　變ねえ。あたしも半信半疑なんだけれど。

知惠子　それはどういふことなの？　あなたも思はせ振りは止して、早く云つておしまいなね。

伊津子　ぢや、云つちまふわ。(姉の顔に心をも見透すやうに目を注ぎながら)　姉さんとあたしとは、お母さんが異ふんですつて。姉さんだつてそんなことはとても信じられないでせう。

知惠子　ぢや、あのお母さんは、あたしの本當のお母さんぢやないつて云ふのね　(驚愕と恐怖に打たれたやうな態度で、妹に詰問す)

伊津子　あたしにはとても信じられないことなんだけど……

知惠子は、凶夢の中の人を見てゐるやうな目で妹を見詰める。伊津子は姉の目を恐れる。

伊津子　姉さんは誰れからもまだ聞かされなかつたの？　姉さんはそれを聞いて知つてゐればこそ、今日だし抜けに家を出たのだとばかり、あたし思つてゐたのに。さうぢやなかつたのか知ら。

知惠子　あたしは、今はじめてあなたの口から聞かされたのよ。

伊津子　ぢや、あたし云はなければよかつたのね。

知惠子　……さう聞いて見ると、あたしいくつも思當ることがあるわ。……今日、何者かに誘はれて家を出るやうになつたのも、さういふ理由があつたゝめだわ。……あのお母さんはあなただけのお母さんで、あたしのお母さんぢやなかつたのね。

伊津子　あたし、どうしても信じられないの。

知惠子　だつて、あなたは、今御自分の口でさう云つたぢやないの。お母さんの生んだ子は、あなた一人だと、お母さん御自身の口でさう云つて、あなたに話したのなら、それほど確かな證據はないぢやないの。

伊津子　あたし、お母さんから直接に聞いたのぢやないわ。……あたしが夢でも見て思違ひをしたのかも知れないから、姉さん、怒らないで頂戴ね。

知惠子　今になつて、そんな氣休めを云つたつて駄目よ。……でも、よく打明けて呉れたわね。あたし、二十年の間の事が、今夜はじめてハッキリ分つたやうな感じがしてよ。(悄然として)あたしは、もう歸つて行く家がなくなつたのね。

伊津子　……だつて、誰れも姉さんを家から追出さうと思つてる人ありやしないわ。今日も姉さんの行衞が分らないと云つて、みんなで大騷ぎをしてゐたのぢやありませんか。……お父さんまでも慌てゝ、電話をあちらへ掛けたり、此方へ掛けたり、伊藤が自動車屋を見に行つたり、そりや大變だつたのよ。

知惠子　あなたはそんな騷ぎを見て、ひとりで面白がつてゐたのね。

伊津子　あたしも一しよになつて騷いではゐたけれど、姉さんが鎌倉へ出掛けたことは、大抵想像がついてゐたから、さう心配はしなかつたの

知惠子　あなたとあたしとは、年齡が一つ違ひなのね。

伊津子　それがどうして？

知惠子　まあ。あなたはそれを不思議に思はないの？

伊津子　一つでも年齡が違つてるから、あなたが姉さんで、あたしが妹。ちつとも不思議なことないわ。

知惠子　あたしには、あなたのことを思ふと、何から何までみんな不思議でならないのよ。あなたのその髮の毛一本もあたしには不思議に思はれるの。………あなたの顏がアメリカの女優に似て、あたしの顏が、尼寺入りをするやうに生れついてるのも不思議に思はれてよ。………二十年、同じ家で同じ食物を食べて育つて來た姉妹でも、人間はまるで違つてるのね。

伊津子　人間は、兄弟でも親子でも、一人々々多少違つてるのは當り前ぢやなくつて。（努めて微笑を浮べて、淋しさうに感傷的に）あたし達の運命がどんなに變つて來ようとも、あたし達は心を一つにして助け合つて行きませうね。あたしにはたつた一人の姉さんだし、姉さんにはたつた一人の妹なんですもの。

知惠子　（冷かに）伊津子さんは夢見たいなことを云つてる。あなたとあたしが助け合ふんですつて？……岸邊さんは何時の間にかあなたを思ふやうになつたのぢやなくつて？　それで、あなただつて、岸邊さんの歸りを、お腹の中で待遠しく思つてるんぢやなくつて？

伊津子　そんなことないわ。

知惠子　お父さんやお母さんも、………お母さんと云つてもあなたのお母さんのことなのよ。お二人とも、あなたのために、岸邊さんの歸朝を待つてゐらつしやるのよ。その譯が今はじめてわたしによく分つた。

伊津子　それは姉さんの邪推かも知れないわ。石本さんの奥さんが、近日ある人を紹介すると云つてゐらつしやるのも、姉さんの縁談に關係してるんぢやなくつて？

知惠子　さうして、岸邊さんの歸朝前に、邪魔ものゝあたしを片附けて置かうとするのね。その譯が今はじめてあたしによく分つたの。

伊津子　……（呆氣に取られたやうに姉の顏を見る）

知惠子　だから、誰れかゞお迎ひに來たら、あなた一人でお歸んなさい。あたしは、此處に殘つてゐて、叔父さんに相談して、將來の方針を極めることにするわ。

伊津子　姉さんを殘して置いて、あたし一人で歸れやしないわ。姉さんも此方にゐることは、さつき電話で家へ知らせたんですもの。……二人が別れ〲に歸るのは詰らないぢやないの。どうせ鎌倉に來たくらゐだから、二三日逗留して、

江ノ島へも遊びに行つちやどう？また此方へ來ようたつて、當分家を出られないに違ひないから。

知惠子　氣樂なことを云つてるのね。……あたしは伊津ちやんと、二人つきりで差向ひで、そんな氣樂さうな話を聞かされてゐるのが不思議でならない。

伊津子　あんまり靜か過ぎて、何だか氣が滅入つちまふやうだわね。老婢さんは何處まで行つたのか知ら。……お勝手の樣子が分つたら、あたし、お茶でも入れるんだけれど。……姉さんは喉が乾かないこと？　あたし、さつきからお茶でもサイダでも飮みたくつてならないの。海岸へ來ると、喉が乾くといふのは本當ね。

知惠子、寢臺から下りて、羽織を引掛ける。

伊津子　姉さんは何處へ行くの？

知惠子　あたし、叔父さんのお出迎へに停車場へ行かうと思つてるの。

伊津子　ぢや、あたしも一しよに行くわ。

知惠子　あなたは此處で本でも讀んで待つてればいゝのよ。

伊津子　でも、姉さんを一人で出して、若しも間違ひがあつたなら、あたしの責任になるぢやないの。

知惠子　間違ひと云つて、何の間違ひ？　あたしが絶望して鎌倉の海へ身投をするとでも思つてるの？……あなたがさう思つてゐたなら、大變な思違ひよ。

伊津子　姉さんが絶望して、そんな詰らない考へを起さなければ結構だわ。今日牛込の櫻の木の下で、叔父さんに尼寺のお話なんかして、あの時でさへ、姉さんはいやに厭世的だつたぢやないの。

知惠子　今のあたしはあの時のあたしぢやないのよ。叔父さんが面白さうに話してゐた修道院の昔話なんか、夢のやうなことに、もうかぶれてやしないわ（ある力に燃えたやうな態度で妹を見て）今は、あたしの前にはあなたが立ちはだか

つて生きてゐるだけなの。あなたの前には、あたしといふ人間が、邪魔者になつて生きてゐるのよ。

伊津子　思はず恐怖に襲はれて立上つて、知惠子と對立す。

伊津子　姉さん、どうかして？　氣をお鎭めなさいよ。

知惠子　伊津ちやんはあたしが怖いの？　あたしこそ、あなたが怖いのよ。……あなたのお母さんは、あたしのお母さんの手からお父さんを奪つたのぢやないの？

伊津子（反抗的に）そんなことはどうだか分りやしないわ。お父さんに聞いて御覧なさいよ。

知惠子　お父さんも手頼りにならない人ぢやないかね。二十年の間、あなたのお母さんの云ひなり次第になつて來たのだもの。……その上あなたは、あたしから岸邊さんを取らうとしてるんでせう。

伊津子、反抗的態度を持して默つてゐる。

知惠子　さうでないといふ返事は出來ないでせう。

伊津子　あたし、言譯なんかしないことよ。

知惠子　あなたの髮の毛の一本々々が逆立ちしてるやうにあたしには見えてよ。

伊津子　姉さんの髮の毛こそ。……

姉妹は、互ひに憎惡恐怖の目で見合つてゐる。

（幕）

（四）

陽吉の住宅が一方に見える松原の一端。

月が明るく差してゐる。

陽吉と石本圓吉の妻とみ子（四十歳くらゐ。派手な服装をしてゐる）とが、並んで入つて來る。

陽吉（一方を指差して）あしこが僕の家です。此處で少し休息して行きませう。姉妹の前ではしみ／″＼お話も出來ないから。

陽吉、松の木蔭に憩ふ。とみ子もそのほとりに蹲る。

とみ子　いゝお月樣ですこと。こんなに冴えた月は、東京ではとても見られませんね。

陽吉　僕は毎晩のやうに此處へ出て來てるんですよ。外の散歩から家へ歸つても、老姉の外には話相手はないんだから、詰らなくつて、此處で休んで、煙草でも吸ひながら、月でも星でも眺めて時間を潰すんです。

とみ子　でも、風流ぢや御座いませんか。こんな松林の奥に住んでゐらつしやるのは。ゴミ／＼した東京からお歸りになつて、こんな松林の中へお入りになつたらさぞせい／＼した氣持におなんなさると思はれますわ。

陽吉　だつて、僕はまだ浮世を棄てた風流人になり切つてゐやしませんよ。明日の日にでも田舍を引拂つて都會の雜沓の巷へ飛出すくらゐな娑婆つ氣は、持つてるんだが、この年齡になつて、まだ世間の信用が薄いから駄目ですね。兄貴だつてまるつきり僕を信用してゐないんですからね。……獨身を通して來たことが、こんなに僕の出世の邪魔にならうとは思ひませんでしたよ。

とみ子　ぢや、なぜ何時までも御結婚をなさらないんです？

陽吉　この頃は眞面目でそんなことを訊いて呉れる人もなくなりましたがね。（感慨を催しかけたが、それを打消すやうに笑ひを洩して）月夜の松林のなかでこんな話をするのは、通俗小説の一章見たいで、感傷的になつていけないから、止しますが、この年齡になつてあなたをこんな所へ誘つて來るやうになつたのは不思議ですね。あなたは何とも思ひませ

んか。

とみ子　今日牛込のお宅であなたにお目に掛つたゞけでも、夢のやうなことなんですからね。知惠子さんなんかゞあんまり突飛なことをなさるものだから、わたしまでもそれにかぶれて夢見たいなことをするやうになりましたのね。汽車の中でも、時々わたしがいゝ氣になつて鎌倉なんかへ行つてもいゝのか知らと思ひましたよ。

陽吉　しかし、兄貴夫婦は、知惠子の不意の家出をあなたに關係があるやうに思つてゐますからな。

とみ子　さう思はれちや、わたし大變に迷惑いたしますわ。

陽吉　あなたは知惠子の素性を當人にお話しになつた覺えはないんですね。

とみ子　まだ疑つていらつしやるの？

陽吉　疑ふも疑はないも、そんなことはどちらでもいゝと、僕は思つてるんです。二人の姉妹は、かねて遊びに來たがつてゐた僕の家へ來る機會が出來たのだし、僕はまたあなたを僕の家へお誘ひすることが出來たのだから、結構な譯なんですよ。

とみ子　さうすると、わたし一人が馬鹿な目を見たことになりますのね。餘計なお喋舌をして一家に風波を起したやうに、無實な罪を、わたし一人が脊負はれて、詰りませんわね。

陽吉　あなたゞつて、月夜の鎌倉を御覽になつたのは損にやならないでせう。後になつていゝ思出になりますよ。…………人間の運は不思議なものだと、僕は汽車の中でたび〳〵思つてゐたのですがね。二十年前には、あなたと月夜の散歩でもしたいと、何度望んでゐたか知れなかつたんですが、その希望が二十年後の今日、四十にもなつてから偶然實現されたんですね。

とみ子は、こんな所に二人だけで對座してゐるのを不安に感じだす。

とみ子　さあ、早くお家へまゐりませう。早くお二人に會つて、お變りのないところを見なければ、わたしの役目が濟みませんわ。

陽吉　なに、大丈夫ですよ。……どうせ、二人は今夜直ぐには東京へ歸へりたがらないでせうし、わたしも兄貴に頼まれたこともあるんだから、二三日二人を此方に留めて置いて、よく説諭しようと思つてゐるんです。

とみ子　それでは、わたしが此方へ伺つたのは何の役にも立たないぢやありませんか。お二人を今夜のうちに東京の御兩親の側へお返ししなければいけませんよ。

陽吉　それは、あの二人があなたに隨いて今夜歸る氣になつたら、連れてお歸んなさい。わたしは、停車場までお見送りしますよ。……わたしは、退屈なものだから、知惠子や伊津子のやうな若い女には、時々ハイのない昔の話をして聞かせたりなんかしましたがね。わたし自身もさういふ話をしてるうちに、年甲斐もなく、昔の夢を思出したりするんですが、あなたのやうな昔馴染に會つて、若いものゝ假色を使ふのは氣恥かしい譯ですね。……さあ、行きませうか。

　陽吉は立上つたが、なほ物を考へてゐるらしく、歩くに躊躇する。

陽吉　しかし、謹嚴な兄貴にも昔さういふ不身持なことがあつたんですかね。僕にはまだ信じられませんよ。

とみ子　（ふと勢ひ込んで）でも、伊津子さんはお母さんそつくりですけど、姉さんの方はちつともお母さんに似てゐらつしやらないぢやありませんか。

陽吉　それはさうでせうが、……今になつて事實の眞相を明かにしたつて、何の足しにもならないでせうのに。……

　馬鹿だなあ。

とみ子　でも、わたしも今夜は、承らなくつてもいいことを、あなたから承はつたやうに思はれますわ。

陽吉　（笑つて）あゝ、さうか。月夜の松林なんて、無駄な一場なんですね。しかし、我々には時々かういふ無駄な場面

がなくつちや、一生が落寞としていけませんよ。………さあ、急ぎませう、彼女達は。馴れない家で窮屈さうにしてるでせう。

二人は急ぎ足で入つて行く。間もなく、老婢が現はれて、二人の方を注視しながら入つて行く。

（幕）

（五）

（三）と同じ部屋。

知恵子と伊津子とは、畳の上に倒れてゐる。

陽吉ととみ子とが入つて来て、姉妹の異常な有様を見て驚く。

陽吉　オイ、どうしたのだ。眠つてるのぢやあるまいな。

知恵子の側へ寄つて引起す。知恵子、夢から醒めたやうにキョト／＼あたりを見廻す。

陽吉はつゞいて伊津子をも引起す。伊津子も夢から醒たやうに、キョト／＼あたりを見廻す。

陽吉　オイ、どうしたのだ。二人とも眠つてゐたのか。

伊津子　叔父さん。あたし一人でお話するから、姉さんをあちらの部屋へ連れてつて下さい。

知恵子　あたし、叔父さんに一人でお話したいから、伊津子をあちらの部屋へやつて下さい。

陽吉　譯が分らないな。……ぢや、どちらか奥さんに随いて次の室へ行つといで。一人だけ後に残つてゐろ。

とみ子　何のことやらわたしには分らないけれど、あちらのお部屋へ行つてゐますわ。……ぢや知恵子さん、わたしと一しよにあちらへいらつしやいな。

彼女は知惠子の手を執るやうにして入つて行く。

陽吉は、たゞ一脚しかない椅子に腰を掛ける。

陽吉　そこへ坐れ。

伊津子は陽吉の前に坐る。

陽吉　全體どうしたのだ？二人とも眞青な顔して、まるで氣絶してゐたやうぢやないか。

伊津子　あたし、氣絶したも同様だつたの。叔父さんに起されなかつたら、あのまゝ息が絶えたかも知れなかつたのよ。

陽吉　まさか強盗が入つてお前達を脅かした譯ぢやあるまい。姉妹でどうしてゐたのだ？

伊津子　あたし、姉さんにどんな目に會はされるか知れないと思つたのです。あたしは、姉さんに恨まれるのね。あたしの知つたことぢやないのに。

陽吉　不思議だね。あんなに仲のよかつた二人が、氣絶するほどに爭つたりなんかするのは。……おれが紅茶でも入れて仲直りをさせてやらう。

伊津子　叔父さんはそんなに氣輕に云つてゐらつしやるけれど駄目よ。生きてるうちは姉さんと仲直りは出來さうぢやないの。あたしだつて覺悟してるわ。

陽吉（微笑して）何だ大袈裟に。

伊津子　叔父さんにはあたし達の心が分らないのね。……あたし、五分か十分かの間に、世の中がまるで變つたやうに思はれるの。生れ變つたやうに思はれてよ。

陽吉　何を呆けたことを云ふのだ？

伊津子　呆けてなんかゐるものですか。……あたし、今になつて、岩淵さんの云つた話の意味や、いろ〳〵なことがハツキ

り分つたやうに思はれてよ。

陽吉　……ハ、ア。お前が姉さんの戀を横取りしようと云ふんだね。何だか昔話見たいだが、今時の若い女にもそんな熱があるんだな。……ぢや、お前達は今までこの部屋で、岸邊といふ男のことで言合ひをしてゐたのか。呆れたものだね。

伊津子　口へ出して言合ひはしなかつたの。でも、姉さんの心の中は、あたしにはよく分つてるの。

陽吉　まだ岸邊の歸つて來ない前から、二人で爭ふにも及ぶまい。（笑顔から嚴かな表情に變つて）しかし、姉さんにも前にも云つて置くがね。岸邊は中原家の一族と緣組みをする譯には行かないのだよ。その理由はお父さんから聞いてゐるのだから、機會を見てお前達に話してもいゝ。……兎に角、さういふ譯だから、お前達もおれの前で仲直りをして、おとなしく兩親の家へ歸るようにしろ。

伊津子　叔父さんはあたしを失望させようと思つて、そんなことを仰有るの？　叔父さんはそんな人とは思はなかつた。

陽吉　おれは本當の事を云つたのだ。お父さんに頼まれて、知惠子を説諭する筈だつたのだ。偶然、知惠子を説諭する前にお前を説諭することになつちやつたが。

伊津子　ぢやあたしが何んにもならないことに一生懸命になつてゐたと、叔父さんは仰有るの？

伊津子は、泣き聲でさう云ふとゝもに、そり返つて卒倒す。

そこへ、とみ子が入つて來る。

とみ子　あなた、大變ですよ、知惠子さんが、さつきのやうに卒倒しましたよ。わたしは、あたり前のお話をしたばかりなのに。

陽吉　あなたの所爲でも僕の所爲でもありませんよ。……二人に水でもぶつかけてやりませう。

そこへ老婢が心配さうな顏をして入つて來る

陽吉　大急ぎでバケツか金盥に水を汲んで持つて來てくれ。

老婢　ハイ（出て行く）

とみ子　お二人ともどうなすつたんでせう。

　彼女は恐怖に襲はれてゐる。

陽吉　あなたもとんだかゝり合ひがつきましたね。知惠子をこちらへ運んで下さい。二人を並べて、頭から水をぶつかけませう。

とみ子　そんな亂暴なことをなすつてよろしいの。

陽吉　爲方がありませんよ。……さつき二人が生返つたのが不思議ですよ。

　夢見るやうに伊津子の顔を見詰める。老婢が力を入れてバケツを運んで來る。

（幕）

人物

中原　平作　（五十餘歳）

弟　陽吉　（四十歳）

妻　園子　（四十五歳）

娘　知惠子　（二十二歳）

娘　伊津子　（二十一歳）

とみ子　（四十歳くらゐ）

落葉日記

岸田國士

一

東京の近郊――雑木林を背にしたヴイラのテラス。

老婦人

牧

アンリエット

弘

秋の午後――

長椅子が二つ、その一方に老婦人、もう一方に青年が倚りかゝつてゐる。それが毎日の

習慣になつてでもゐるらしく、二人とも、極めて自然に、ゆつたりとした落ちつきを見せて、靜かに讀書をしてゐる。

老婦人は、純日本人式の普段着、たゞ、肩から無雜作に投げかけた毛皮の襟卷が、さほど不調和に見えないほどの身ごしらへ、身ごなし。

青年は輕快な散步服。無帽。

牧。(書物が手から滑り落ちるのを拾はうともしないで)少し步きませう。

老婦人。(書物から眼をはなさずに)もうあと二三枚……。

牧。(起ち上り、默つて、相手が讀み終るのを待つ。が、なかなか濟みさうもないので、また眼を卸ろす)

老婦人。(眼をあげずに)靜かになさいよ。

牧。(漠然と)靜かにしてゐます。

長い沈默

牧。(獨語のやうに)あなたほどのお年になられても、まだ、ものに凝るやうなことがおありと見えますね。

老婦人。……。

牧。ものに凝ると云つても、そのことに熱中する、つまり、われを忘れてどうかうと云ふやうなことはおありにならないでせう。やめようと思へば、何時でもおやめになれる……。それをやめないでいらつしやるのは、たゞ、ほかになさることがないからなんでせう。少くとも、ほかのことをなさるのと、別に違ひはないからでせう……。さうでせう。して見ると……。

老婦人。(相變らず眼を伏せたまゝ)また、うるさいから……。

牧。（笑ひながら、）しつッこいねえ、お祖母さま、あなたは、世の中の人間が、みんな、さういふ風に、老眼鏡をかけ、背中を丸くして、宗教の本を讀んでゐれば、それで間違はないと思つておいでになるんでせう。

老婦人。間違がなけれや、どうなのさ。やかましいね、ほんとに……（書物を青年の鼻先につきつけ）これが宗教の本ですか。

牧。（聊か拍子抜けがしたやうに）なんだ、アナトオル・フランスか……。La Vie en Fleur……。あんな爺にかゝり合つてると、ひどい目に遭ひますよ。

老婦人。餘計なことを言つてないで、用意をなさい。（起ち上らうとする）

牧。（それを制して）その前に、お祖母さま、一寸、お話しておきたいことがあるんです。（間）此處でもいゝでせう。

老婦人。……？

牧。それぢやどうぞ……（と、老婦人を再び座につかせて）變だな、すこし……？

老婦人。なにさ、早く云つたら……。

牧。今、言ひます。かういふ話をする時は、そんなに顔を見ないで下さい。

老婦人。あなたが下を向いてゐればいゝでせう。それで、わたしに、どうしろといふのさ。

牧。もう御存じなんですか。

老婦人。なにを……。まあ、いゝから云つて御覧。

（間）

牧。お祖母さまは、アンリエットをどういふ處へお嫁にやらうと思つていらつしやるんです。

老婦人。あの娘をお嫁にやるのは、わたしぢやない。立派なお父さんがあるんだもの……。

牧。しかし、そのお父さんは、外國にばかりいらつしやるし、お母さんが亡くなられてからはお祖母さまのあなたが

何もかも、引受けていらつしやるんでせう。さうすると、結婚のことだつて、あなたが、いゝつておつしやれば……。

老婦人。まあ、お待ち……。わたしには、それや、幾分の責任はある。しかし、たゞそれだけさ。あの娘は、自分で自分の道を撰ぶやうに教育してあるんです。

牧。どうか知ら……。

老婦人。なんです、失敬な……。お前こそ、まだ海のものとも、山のものともわからないぢやあないか。今やつてゐる法律なんか、何になるものか。アンリエットは、あれで、なかなか頭のいゝ娘だからね。

牧。僕には勿體ない……。お祖母さまは、一體、どういふ男が、お好きなんですか。

老婦人。わたしがかい。

牧。（一寸まごついて）お年は別として……。

老婦人。どうして？ だから お前は駄目なんだよ。若いばかりが女ぢやあるまい。笑ふたら云つてあげやうか。氣障でしやうがない、お前見たいな男は……。（怒つたふりをする）

牧。（とぼけて）お髪に松葉がひつかゝつてゐますよ。

老婦人。（こだはらずに、取つて捨てる）

牧。お祖母さまは、いくつの年にお嫁にいらつしやつたんです。

老婦人。どうして？

牧。どうしてゞも……。

老婦人。わたしは 早かつた……。十八の春……。アンリエットの年に、わたしは、もう女學校をすまして、例のパリアニさん、あの人のお母さまのオリガさんのところで、伊太利語の勉強をしてゐたものだ。

牧。お祖父さまが、驢馬から迎ひに來て下さるのを待つていらしつたわけですね、お祖父さまが、この山……？

老婦人。お年かい？ さあ、兎に角、お前見たいに若くはなかつたよ。口髭を生やして、堂々たる紳士だつたから……。

牧。堂々たるはいゝな。お祖母さまも、その頃は、楚々たる令孃で……。

老婦人。あたり前さ。お前のお母さんほど丈は高くなかつたけれど、アンリエット見たいに、おちび、さんでもなくさ……。

牧。さうですとも……。その上、乘馬と幅飛びがお得意でね……。

老婦人。（笑ひながら）それはうそ……。

牧。ねえ、お祖母さま、あなたが、お祖父さまと御一緒に巴里でお寫しになつた寫眞が、此の間、お母さまの手文庫から出て來たんですよ。裾のしぼんだ黒いカアプを、から、輕くひつかけて……。あれは、ルユクサンブウルでせう。誰かの像の前で、鳩に餌をやつてらつしやるところ……からいふ手つきで……。それを見て、僕は、「へえ」つて云つたきり、そこへすわつてしまひました。

老婦人。そんな寫眞があつたかね、お祖父さまはどうしてるのさ。

牧。お祖父さまは、これはまた、どうかなされればよさゝうなものを、ステツキを兩手で、から、水平に持つたまゝ——器械體操でもするやうにね——つくねんと、若い美しいお祖母さまの横顏を見つめておいでになるのです。

老婦人。何を云ふんです。

牧。なるほど、髭だけは立派ですね。

老婦人。さうですか。

牧。さうです。

老婦人。あの頃の寫眞は、さうだ、隨分長く出して見ないから……。わたしの處にも、そんなのがある筈だ……。へえ、

ぢや、あん時だ、きつと……。

長い沈默

牧。お祖父さまと云ひ、うちのお父さまと云ひ、アンリエツトのお母さまと云ひ、みんな早死をしたんですね。
老婦人。早死をしたね。イヴオンヌなんか、まだ三十にもなつてなかつたんだからね。
牧。僕も早死をしさうだな。今度は、まあ助つたやうなものだけれど……。
老婦人。お前は、それがいけないんだよ。すぐに自分を弱いものと決めてしまつて……。
牧。決めてやしませんよ。だから、今日だつて、テニスをやらうつて云へば、例の、柔道二段が、君は駄目だつて、やらせないんです。アンリエツトはまた、それをいゝことにして、僕の方を振り向きもしないんです。
老婦人。Tu es bête !

長い間沈默

老婦人。寒くないかい、お前、何も上へ着なくつて……。今日は、風が冷たい。
牧。一と月ぐらゐ、すぐたつてしまひますね。（間）こゝへ來た時は、まだ白楊（ポプラ）の葉が、こんなに黄色くなつてませんでし
た。兎に角、もう、病人とは見えないでせう。
老婦人。見えない。だけど、もうあと、一年間は用心をするんだね。また何時かのやうなことがあると……。
牧。（急に暗い顔をする）海岸行きを止めて、もう少し、こゝにゐたいなあ。

間

老婦人。寒くさへならなけれやねえ……。何しろ、冬向きぢやないよ、こゝは……。
牧。どつち道、僕はこゝにゐない方がよさゝうですね。

老婦人。どうして？

牧。どうしてつて……。お祖母さまは、一番、二つのわけを御存知なんでせう。

老婦人。さ、もう、そのことを云ふのはおよし。男らしく、さつさと發つておしまひ、ね。お祖母さまもわるかつた。もつと早く、お前の心持ちを汲んで、できるだけのことをすればよかつたんだけれど……。もう、今になつては、どうすることもできない。お前はこれから、どんな幸福でも……。

牧。得られるつておつしやるんでせう。僕さへ、それを望めばね。しかし、お祖母さま、僕は、今が一番幸福なんですよ。いゝえ、ほんとです。アンリエットは、まだ時々は僕と二人きりで遊んでくれます。朝の食卓は、毎日僕たち二人だけの爲めに用意されてゐるでせう——お祖母さまは、遲くお目覺めですからね。

老婦人。Pauvre garçon！

牧。今だつて、御覽なさい、もう日が暮れる、また二人きりになれる。さう思つただけで、氣分がこんなに、いゝぢやありませんか……。

老婦人。（青年の肩に手をかけ）氣分がいゝなら、泣くのはおよし。さ、その邊を一と廻りして來よう。

牧。……。

老婦人。さ、お起ち……。

此の時、運動服姿の少女が、ラケツトを振りながら、現はれる

アンリエツト。あゝ、喉が渇いた

老婦人。もう濟んだの。

アンリエツト。だつて、ボールが見えたいんですもの、暗くつて……。

老婦人。それや、さうだらう。
アンリエツト。でも、まだ御飯ぢやないでせう。あら、どうなすつたの、收兄さま？
老婦人。シヤトオブリヤンに泣かされたんですつてさ。
アンリエツト。小説を讀んでお泣きになつたの？　可笑しいわ。
老婦人。それより、お前、弘さんは……。
アンリエツト。えゝ、それがね、お祖母さまのとこへ、左樣ならをしに來ようとしてらしつたのよ。さうしたら、そら、あの柿の木を見て、柿を取るつてきかないの。だから、あたし、お祖母さまに伺つて來るから、待つてらつしやいつて、さう云つて來たの。
老婦人。まだ熟してやしないでせう。
アンリエツト。でも赤いことは赤いわよ。だから、取つてもいゝこと？
老婦人。あゝ、それやいゝけれど、怪我をしないやうになさいよ。
アンリエツト。えゝ。（行きかける）
收。（起ち上り）僕も取らう（かう云つて少女の後を追ふ）
老婦人。つるやにさう云つて、物干竿を出してお貰ひ。
收。あゝ、さうだ（裏の方へ走つて行く）
老婦人。（叱るやうに）また、走るんぢやありません。
すると、入れ代りに弘が現はれる
アンリエツト。あら！

弘。もう遅いから、僕、歸りますよ。また叱られちやわ……。

アンリエット。（つまらなさうに）どうして……。

弘。柿は明日でいゝでせう。

アンリエット。明日でいゝでせうつて、御自分で云ひ出したくせして……。

弘。（快活に笑ひながら）さよなら、小母さん（帽子を脱ぐと、いきなり、全速力で走り出す）

老婦人。みなさんによろしく。

弘が去つた後へ、牧が竹竿を持つて出て來る

アンリエット。（その竹竿を取らうとする）どら、貸して……。

牧。君ぢや駄目だよ。

アンリエット。いや、あたしが取る。

老婦人。アンリエット。アンリエット！

アンリエット。（その方をちらと見て、投げ出すやうに竹竿を牧の手に渡す）あたしにも取らしてね。

二人姿を消す

老婦人。（両人を見送つた後、再び書物の頁を繰る）

長い沈默

アンリエットの聲。あれがいゝわ。もつと、こつち……、そら、そこよ……。赤いのがあるぢやないの……盲ね。

老婦人。（時々聲のする方に氣を取られるらしい。それでも、すぐに、書物の上に眼を落とす、音讀をし始める）J'étais loin d'être un beau garçon et le pis est que je manquais de hardiesse. Cela me nuisait auprès des femmes.

アンリエットの聲。まあ。そんなにひどくしちや、傷がついてよ……。あたしに貸して……(間)大丈夫よ……見てらつしやい。

老婦人。(音讀する)Car J'estimais que le plus grand péché d'une femme est de n'être pas belle.

アンリエットの聲。どうするの。樹へ登るの……。あぶないわよ。

老婦人。(一寸、耳を聳てる。が、すぐに)Je remarquais que dans le monde, beaucoup de jeunes gens, qui ne me valaient pas, plaisaient et réussissaient mieux que moi.

アンリエットの聲。その枝に、いつぱい赤いのが生つてるぢやないの。えゝ、その、あなたが乘つてらつしやる枝……。

老婦人。J'ai toujours cru que la seule chose raisonnable est de chercher le plaisir.

アンリエットの聲。(一段聲を張り上げて)あら、お祖母さま、あのねえ、牧兄さまがね、柿の樹の高い處へ登りました。

老婦人。(顔を上げて、心持ち眉をひそめるが、すぐにまた眼をおとし)Il n'est pas difficlie de s'apercevoir si un homme est heureux ou malheureux La joie et la douleur sont ce qu' on dissimule le moins, surtout dans la jeunesse.

アンリエットの聲。いやよ、いやだつてば……。お祖母さま、牧兄さまが、あたしに、澁柿をぶつけます。(はしやいで)そんなことをするなと、かうしてよ。

長い沈默

老婦人。Ils étaient jaloux, haineux, ambitieux. J'étais indulgent et paisible; j'igrorais l'ambition.

アンリエットの聲。あら、いゝの、そんな無茶なことをして……。

老婦人。Il y a de ces passions violentes qui font les grands hommes et dont je n'avais pas l'étoffe.

アンリエットの聲。お祖母さま、牧兄さまがね、柿を皮ごとたべますよ……。よろしいんですか。ずるいわ、そんな……。

老婦人。（だんだん、落ちつかぬ様子を示しだす。眼を書物から放し、時々、聲のする方を見る）

アンリエットの聲。お祖母さま。

老婦人。なんです、やかましい。

アンリエット。お祖母さま、あのね（姿を現はす）あのね、牧兄さまがね、柿の樹の上でお晝寝をするんですつて……。眼をつぶつて、腕組みをして、眠てるの。いくら棒でつツついても、起きないわよ。

老婦人。いたづらするんぢやありませんよ。もう降りるやうに、さうお言ひ……。

アンリエット。（笑ひながら去る）

老婦人。（しばらく默讀を續けてゐる）

アンリエットの聲。牧兄さま、早く取つて頂戴よ、暗くなつてよ。（間）いやね、もう少し左、左よ、右だつたら……。それや、右ぢやないの……。そこよ、手がさわつてるのにわからないの。それ、それ、えゝ、それよ。

老婦人。（再び音讀を始める）Mais ce dont je m'aperçus après une longue observation, c'est que le désir embellit les objets sur lesquels il pose ses ailes de feu, que sa satisfaction, décevante le plus souvent, est la ruine de l'illusion, seul vrai lien des hommes.

アンリエットの聲。もういゝわ、それくらゐで……。ほんとに、いゝのよ、もう澤山……。（聲がふるえる）もうよして頂戴……、そんなに上は、あぶなくつてよ、ねえ、牧兄さま、もういゝつて云ふのに……（泣聲になる。急に、高い聲で）お祖母さま、牧兄さまが、云ふことを聽きません。ずんずん高い處へ登つて行くんですよ……細い枝のところへ……。

老婦人。（びくつとする）牧、もう好い加減にしないかい。

長い沈默

アンリエットの聲。それ御覽なさい。(間)え！ みんなで……？ 隨分あるわ……。一い、二う、三い、四お、五つ、六、七、八あ、九、十、十一、十二……十三……

老婦人。(また、讀む。今度は、やゝ、高い調子で)

O Thébains ! Jusqu' au jour qui termine la vie
Ne regardons personne avec un oeil d'envie.
Peut-on jamais prévoir les derniers coups du sort
Ne proclamons heureux nul homme avant sa mort.

アンリエットの聲。あら、どうするの、そんな上へ登つて……收兄さま、駄目よ、駄目よ、その枝は駄目、……後生だから、降りて……。

老婦人。(此の時、突然何かに怯えたやうに、書物を放して手を、痙攣的に、口のところにもつて行く。そして、アンリエットの「あッ、あぶないッ！」といふけたゝましい叫び聲が聞える前に、もう立ち上つてゐる)

——幕——

二

老婦人
アンリエット
一枝
弘
つる

翌年の三月下旬の朝――

前と同じ長椅子が二つ、その一方に老婦人、もう一方にアンリエットが倚りかゝつてゐる。
二人とも、讀みかけの書物を膝の上にのせたまゝ、默つて、何か考へてゐる。
少女は喉に濕布をしてゐる。

老婦人。もうぢき本郷のお叔母さまが見えたら、御挨拶だけして、すぐあしたのおさらへをするんですよ。

アンリエット。えゝ。でも、十時には弘さんがいらつしやるのよ。

老婦人。今日は、まだ、テニスはいけません。

アンリエツト。どうして………？

老婦人。どうしてつて、お前、やうやく熱がとれたばかりぢやありませんか。

アンリエツト。ぢや散歩は………？

老婦人。今日、一日、ぢつとしておいで、ね、好い子だから………。此の次の日曜は、テニスでもなんでもなさい。弘さんには、蓄音機でも聴かせておあげ………。

アンリエツト。あの方、蓄音機なんかお嫌ひよ。

老婦人。そいぢや何が好きなのさ。

アンリエツト。あたしの聲を聞くのが好きなんですつて………。

老婦人。（可笑さをこらえて）お前の歌かい？

アンリエツト。歌でもなんでもよ。あたしが默つてると怒るわよ。

老婦人。「怒る」とはなんです。

アンリエツト。お怒りになります、そいぢや……。

老婦人。やれやれ……。お前のお相手には持つて來いの人だ。ぢや、お祖母さんには、後生だから、もう少し默つてゝおくれ。お前と一緒にゐると本なんか讀めやしない。

アンリエツト。だつて、お祖母さまは……。

老婦人。もう澤山……。口を縫ひつけとくから……。

アンリエツト。（唇を結んだまゝ——口を縫はれたつもりで——聲を立てゝ笑ふ）

老婦人。（それには相手にならずに、書物の頁をくる）

……長い間。

つる現はる。

つる。お手紙が參りました。

老婦人。（手紙を受け取り、開封する）本郷へ電話をかけてね、もう奥さんはお出掛けになつたかつて聞いて御覽。

つる。はい。（去る）

老婦人。手紙を讀む。手紙は外國郵便である。可なり長文である。それは、身内の者からの懐しい便りに相違ない。それはまた、ある重大な意味を含んだものでもあるらしい。そして、最後に、いろいろな云ひ知れぬ感動を、讀むものゝ心の隅々に殘すものでなければならない。

アンリエット。（此の間、祖母の顔色と、その心持ふるへてゐる手先に、不斷の注意を拂つてゐる。つひに堪りかねて）お父さまからでせう。

老婦人。（默つてうなづく）

アンリエット。（遠慮して）なんて……。あたしには……。

老婦人。（手紙の頁を一枚一枚あらためて見る。封筒の中をのぞく。）御免、御免、これがさうだ……。さ、あつちへ行つて、ゆつくりお讀み……。

アンリエット。どうして、此處で讀んぢやいけないの。

老婦人。此處でもいゝさ……。少し、靜かにして……。（讀みつゞける）

アンリエット。（これも夢中になつて、手紙を讀む）

老婦人。（一度讀み了つて、更に讀み返す）

つる現はる。

つる。あの、本郷の奥さまは、もう一時間ばかり前にお出掛けになつたさうで御座います。

老婦人。あゝさう。ぢや、もう見える時分だから、用意をしてね。

つる。はい。(去る)

老婦人。(手紙を封筒にしまひながら)お父さまから、なんて?

アンリエツト。一寸待つて頂戴よ。六ケ敷いことが書いてあるの。あたし、わからないわ、こゝんとこ……。

老婦人。讀んで御覧。

アンリエツト。いやあよ。

老婦人。おや、お祖母さんにも……?

アンリエツト。だつて……。ぢや、お祖母さまのところへは、なんて……?あたしのこと、書いてある。

老婦人。書いてあるとも……。お前のことばかりさ。

アンリエツト。ほんと?何か、あたしのこと、云つておあげになつたんでせう。ひどいわよ、お祖母さまつてば……。

老婦人。どら、讀んで御覧。

アンリエツト。ぢや、あたしがいゝとこだけね……。――「十一月二十日出の手紙、旅をしてゐたので、今日やつと受け取りました。字も文章も、だんだん上手になつて……」――いやなお父さまね、こゝはいや……――「あの寫眞で見ると、すいぶん肥つたやうだが、なかなか可愛らしい……」――お笑ひになるから、いや。駄目だわ、どこを讀んでも……

……。

老婦人。そんなことばかり云つてないで、みんな讀んだらいゝぢやないか。

アンリエット。ちや、こゝだけね。――「收さんはお氣の毒なことだつた。その場にゐたお前もさぞびつくりしたらう。止めても聽かなかつたと云ふのだから、お前に罪はないわけだが、一緒に遊ぶときは、誰とでも、よく氣をつけないと、さういふ取り返しのつかないことになる。お前に怪我がなくつて、まあ、よかつたが、木登りなんか、女の子はしない方がいゝ。」――しない方がいゝですつて……。

老婦人。（眼に涙をためて）收のことはそれだけ……？

アンリエット。えゝ。それから、こゝは飛ばしてと……。

老婦人。どこを飛ばすのさ。

アンリエット。――「此の次は佛蘭西語で手紙を書いて御覽。お祖母さまに直していたゞかないでだよ」おつと……讀んぢやつた。

此の時、つるに案内されて、一枝が現はれる。喪中に相應はしい日本服。

一枝。お變りはいらつしやいませんか。

老婦人。ありがたう。あんたこそ……。

一枝。御勉強？アンリエットさん。

アンリエット。（會釋）

一枝。お風邪はいかゞ……。もう、およろしいの。

老婦人。家に引込んでるのが嫌ひな娘で……しやうがないんだよ。よく、早く出て來られたね。

一枝。でも、樂しみにしてゐたんですもの。（あたりを見廻し）一ケ月ぶりですわね。すつかり春らしくなつて……。

老婦人。ちや、あつちへ行かうか。

一枝。いゝえ、こゝがよろしいの。（椅子を引き寄せて、すわる）

アンリエツト。ぢや、叔母さま、御ゆつくり………。（去らうとする）

一枝。あら………どこへ？

老婦人。あんまり長く外にゐると、またなんだから………。あとで、呼んであげます。

アンリエツト。（去る）

一枝。もう大丈夫だと思つてゐましたのに、此處へ來ると、やつぱり…………（眼にハンケチを當てる）

老婦人。それや、さうだらう。

長い沈默

一枝。柿の木、もうお伐らせになりましたのね。

老婦人。あれで、なかなか手間が取れたんだよ、運び出すのに………。丸一日がかりだつた。倒したのを見ると、隨分、大きな樹さ。根も掘り出して、持つて行かせたの。あの跡には、牧の好きだつた「もつこう薔薇」でも植えようかと思つて………。

一枝。………。

老婦人。わたしも、秋から、すつかり老い込んでしまつた。

一枝。そんな心細いことをおつしやらないで下さい。お母さまは、あたくしなどよりは、ずつとお元氣ですわ。お樂しみがおありになるせいでせうね。

老婦人。樂しみつて、あんた……。

一枝。あたくしなんか、その後、本を讀む氣もしませんもの………。

老婦人。それはまた、別さ。わたしのは、これや、病氣だもの。

一枝。そんな御病氣なら結構ですわ。でも、こんなことぢやいけないとは思ひますの。近頃、また、更紗を描いて見てるんですのよ。碌なものは出來ませんけど、あれでまあ、暇潰しにはなりますから……。

老婦人。それはいゝ。こんだ、見せて貰ひに行かう。それから、もつと氣の晴れるやうなことして見るんだね。もう、テニスなんか、駄目かね。

一枝。あたくしがですか。おやおや、どんな格好でせう。

老婦人。格好なんかどうだつて、やつぱり氣持を明るくするのは、運動に限るやうだね。

一枝。……。

老婦人。音樂なんかも、いゝだらうけれど、あれは、また、自分で自分に強ひることができないから……。

一枝。さうですわ……。多少、機械的にでもできることでなければね。

老婦人。相手がゐてくれるといゝんだよ。

長い間

一枝。相手がゐてくれるといゝんですわ、どんな相手でも……。

長い間

老婦人。收なんかも、病氣のせいもあつたらうけれど、何か運動のやうなことをしてゐる時だけだつたからね、快活らしく見えたのは……。

一枝。あの子は、運動は、あんまり好きぢやなかつたんですけれどね……。

老婦人。それが、やれば、あゝなるんだから……元氣さうに……。面白さうに……。

一枝。アンリエツトさんと一緒だつたからでせう、それは………。
老婦人。そればかりぢやないよ。

長い沈默

一枝。子供の時から、木登りなんか、唯の一度だつてしたことはないんですけれどね。全く不思議なくらゐですわ……
……。あの日に限つて………何んだつて、また………。
老婦人。もう、それを云つたつて、仕方がないさ。（手紙を見せながら）今、兒からも云つて來たんだけれど………。
一枝。お兄さまは、もう御存じなんですの。
老婦人。あの知らせを讀んだのが、二月二十日と書いてある。――冬の間、アルヂエリヤの方をまわつてゐたらしい。
一枝。よく旅にお厭きになりませんわね。
老婦人。あれから、もう十年、地中海のぐるりを歩きまわつてゐるんだからね。――娘の大きくなるのも見ずに………。
一枝。お獨りでね。
老婦人。………。
一枝。アンリエツトさんをお呼びにならうとはなさいませんの。
老婦人。若い娘が、旅で一生を送る考古學者についてまはつても仕方があるまい。以前のやうに、巴里に落ちついて、研究をしてゐるんなら別だけれど………。

長い沈默

一枝。あたくしね、昨日、本棚の整理をしてゐましたら、牧の日記を見つけましたの。
老婦人。日記をつけてゐたのかい、あの子………。

一枝。飛び飛びなんですけれどね…………。どの日附を見ても、Hがどう云つたの、Hがどうしたのつて書いてあります
でせう。Hつて誰かと思ひましたら…………。
老婦人。アンリエットのことだらう。
一枝。えゝ。あたくし…………始めて知りましたの。
間。
老婦人。Pauvre garcon!
長い沈默。
一枝。ちつとも、氣がつきませんでしたわ。（間）――隨分苦しんだらしいんですの。
老婦人。よく默つてゐてくれたよ。――自分でも、いろいろ考へてゐたらう、出來ない相談だと云ふことを…………。
一枝。従兄妹同志ですけれどね…………。
老婦人。それにしてもさ…………。よく默つてゐてくれた…………。
一枝。えゝ。
老婦人。それに、アンリエットは、あの通り勝氣な娘だから、收にはどうかね。今更、そんなこと云つたつて始まらない
けれど…………。
一枝。西洋人の血が交ると、あゝなるもんですかね。
老婦人。なにがさ。
一枝。いゝえ、氣性がね。
老婦人。氣性は、あんた、お父さん似だよ。

一枝。さうでせうか知ら………。さう云へば、收もお父さん似ですわね。

老婦人。あんたのとこのは、弟のくせに、誰からでも兄さんと間違へられるほど大人しかつた。やつぱり、早死をする子さ。——さういふことを、つくづく、此頃、思ふやうになつたよ。（ボンボンを一つ口に入れ）どう、一つ………。いゝボンボンだよ。

一枝。ありがとう、たくさん………。

此の時、奥から、蓄音機で、マスネエのエレジイが聞えて來る。

一枝　どなたか來てらつしやるんですの

老婦人。弘さんだらう。——アンリエットのテニスの御相手でね、なかなかしつかりした青年だよ。

一枝　あゝ、何時か、いらしつた、あの元氣のいゝ………。

老婦人。少し仲がよすぎるやうだけれど、まあ、まあ。（微笑）

一枝。（これも、強いて、笑顔を作り）さうですわ。——なかなかね

長い沈默。

老婦人。昇も、無頓着なやうで、やつぱり、殘して行つた娘のことは氣になると見えて、今日なんかも、先々のことを、色々相談して來てゐるんだがね。——わたしも先は見えてゐるんだし、かうして手許へ置くのも、少し氣がゝりになり出したよ

一枝　………。

老婦人。その時になれば、どうかなるとは思ふんだが………やつぱりね。

一枝　………。

老婦人。イヴオンヌは、どうしてか日本の氣候に慣れないで、とうとうあんなことになつてしまつたけれど、母親の無い女の子は可哀さうだね「有りがたう」と「今日は」といふ言葉を覺えに、遙々海を渡つて來たやうなものだつた……
……アンリエットのお母さんは……。

一枝。ほんとですわ。

老婦人。今日は、どうしてまた、こんな話ばかりするんだらう。

一枝。あたくしの滅入つた顔を御覧になつたからですわ。來るときは、それは晴れ晴れした氣持で出かけて來るんですのに……。

（室内に慌しい足音が聞えると、急に、窓のカーテンが開く。アンリエットの姿が現はれる。）

アンリエット。こゝから御免遊ばせ。あのね、お祖母さま……弘さんが急に大阪へいらつしやることになつたんですつて……。

老婦人。なんだつてさ……。

アンリエット。どうしてですか。

老婦人。へえ。弘さんに、ここへいらつしやいつて……。

アンリエット。（走り去る）

老婦人。アンリエットの顔を見たかい。

一枝。（うなづく）

（跫音が止る。——弘、アンリエットと共に現はる。）

老婦人。ほんと、大阪へいらつしやるつて……。

弘。（一枚と老婦人に會釋した後）今朝おやぢから云ひ渡されたんです。出し拔けなもんだから、面喰つちまひました。

老婦人。大阪へは、お勤めの口がきまつたんですか。

弘。それもあるんですけれど……。え丶、まあ丶さうなんです。

老婦人。それはお目出度う。會社？　銀行？

弘。さあ、どつちへ廻されますか。はじめ、いろんなことをやらされるらしんです。

老婦人。實地研究といふわけですね。大阪には、お知合ひがおありになるんでしたね。

弘。え丶、おやぢが心易くしてゐる人で、いろんな事業に手を出してる人なんですがね……。その人のうちへ、まあ、預けられるわけなんです。

老婦人。それで、何時、おたち？

弘。それが可笑しいんです。此の月曜なんですつて……。服を作るひまもないんですからね。

老婦人。此の月曜つて云ふと、（指を折り）あと四日ですね。前から、ちつともお話はなかつたんですの。

弘。僕が行くことですか。それが、前から、僕を呉れつていふ話だけはあつたんです。

老婦人。おや、お養子にいらつしやるんですの。

弘。え丶、まあ、早く云ふと、さうなんです。

此のあたりから、アンリエツトは、今にも泣きだしさうな表情になる。

老婦人。（此の様子を見てとつて）アンリエツト、あつち行つてね、つるやに、お晝の用意はどうか聞いておいで……。もうぼつぼつか丶ろやうにつてね。

アンリエツト。（縛めを解かれた小羊のやうに走り去る）

一枝。失禮ですが、向うのお孃さんは……？

弘。（手眞似で）これつばかりの子供ですよ。

一枝。でも、あなたが、まだお若いから……。それや、お樂しみですわね。

弘。（笑つてゐる）

老婦人。まだお決まりになつてるわけぢやないんですね。

弘。まあ、決まつたやうなものです。考へたつてしようがありませんからね。その代り、いやだつたら、何時でも出て來ますよ。

一枝。まさか……。

老婦人。そのお孃さまとは、もう何遍もお伺ひになつてるんでせう、きつと…………、

弘。二度……三度……でしたかな。だつて、十六なんですよ。

老婦人。可愛らしい奥さまができるでせう。

弘。すぐ結婚しやしませんよ。

老婦人。（笑ひながら）それや、さうでせう、どうしたつて……。

一枝。（笑ふ

弘。（頭を掻きながら）養子つて、いやなもんですつてね。

老婦人。さうとも限りませんわ。ぢや、なんですね、東京へは滅多に出ておいでになれませんね。

弘。（快活に）出て來ますよ。アンリエットさんがどうしてるか、見に來なくつちや……。

老婦人。（一枝を顧み）ねえ……それは、それは…………。

弘。當分は日本にいらつしやるんでせう。

老婦人。ゐますとも……。わたしをほうつて、何處へ行くもんですか。ねえ、一枝……。

一枝。（眼で笑ひながら、うなづく）

弘。（少しまごまごして）それでも、また、お父さまの御都合で……。

老婦人。あ、それは、どうなるか、わかりません。どうせ、何時か、わたしには、一人きりになるでせう。

一枝。あたくしがゐますわ。（弘に）ねえ。

弘。さうですとも……。

老婦人。一人になるのが淋しいと思つたのは、もう五六年も前のことですよ。

一枝。あたくしなんか、お母さまのやうには、なれませんわ。

弘。僕の母も淋しがりで、今朝から泣き通しなんです。

一枝。やつぱりね。下がおありにならないから……。

老婦人。なあに、子供は親のことなんか考へてやしないからね。

一枝。……。

老婦人。行きたい處へは、さつさと行くし……。死にたい時には、さつさと死ぬし……。

一枝。（淋しい微笑）

弘。いやだなあ、小母さんは、皮肉で……。

老婦人。（笑ひながら）日曜毎に、テニスをしにいらつしつた家を、お忘れになつちやいけませんよ。

一枝。（これも、強いて笑顔を泛べ）それから、柿の木から落ちて死んだ男の子のゐた家をね。

老婦人。さう。

弘。(面を伏せ)忘れません。

老婦人。アンリエットも、これから、テニスの御相手がなくつて、淋しがるでせう。

此の時、突然、窓のかげで、アンリエットの啜り泣く聲が聞える。一同、その方を見る。

老婦人。(異様に緊張した表情で)弘さん、それぢや、今日は、お話はこれだけにして置きませう。おたちになる前に、もう一度いらしつて下さい。お別れに、お茶でも飲みませう。アンリエットは、少し氣分が惡いやうですから、失禮させて頂きます。

弘。はあ、では、御免下さい。何れ、また……(會釋して去る)

沈默。

老婦人。アンリエット……(返事がない)アンリエット……(靜かに起ち上り奥にはいる)

やがて、彼女は、アンリエットの肩に手をかけ、いたわるやうにして現はれる。

一枝。どうしたんですの。

老婦人。(元の座につき、アンリエットを膝の上に抱きながら)泣くひとがありますか、そんなことぐらゐで……。

アンリエット。(恥かしさうに老婦人の胸に顔を埋める。が、何を思つたか、急に、其處を離れて、奥へ逃れ去る。階段を駈け上る足音。)

老婦人。(あつけに取られて、一枝と顔を見合せるが、不圖、或る疑惑が頭をかすめたらしく、急に席を起つ。しかし、思ひ直して、今度は、足音を忍ばせながら、靜かにアンリエットの後をつける)

一枝。(獨り取殘された形で、無意識に席は立つたものゝ、ぼつねんと、二階の上を見上げてゐる。)

長い沈默。

暫くして、老婦人が相變らず足音を忍ばせながら現はれる。極度の不安から解放された時の、やゝ疲れたらしい顔つき。

一枝。大丈夫ですの。

老婦人。なにが？　アンリエットかい。（それに答へず）やつぱり、いけなかつたね。

一枝。でもね………。さういふもんですわ。

老婦人。（歎息をつき）またかと思つた。

一枝。え？　またかとは………？

老婦人。さうだ……泣きたいだけ泣くがいゝ。女は……、若い女は、涙と一緒に悲しみを流してしまへるんだからね。

三

老婦人
アンリエット
つる
醫師

其の年の秋の午後——葉の落ちつくしたポプラ。

窓が開いてゐる。室内は、よくは見えないが、たゞ、老婦人が、忙しさうに出たりはいつたりしてゐる樣子が見える。

アンリエツトの、「お祖母さま、一寸、いらしつて……」といふ聲が二階から聞える。
つるが、家から出たりはひつたりする。
やがて、外出の服裝をしたアンリエツトが先に立ち、老婦人、續いてつるが現はれる。

老婦人。（時計を見ながら）まだ少し早いね。今から行くと、一時間も待たなくちやなるまい。
アンリエツト。少し早い目に行つた方がいゝことよ。叔母さま、五時に向うに行つてらつしやる筈よ。
老婦人。あ、さうさう、お父さんは、お前にキツスをなさるかも知れないから、びつくりしちや駄目だよ。
アンリエツト。キツスなんかなんでもないわ。あたし、お父さんがお立ちになる時のこと覺えてるの。お髭が痛くつて、どうしようかと思つたわ。お祖母さまはなさらないの。
老婦人。お祖母さんもしたいんだけれど、これは、お父さんの方で、びつくりするだらう。

から云ふと、急に、片手を額にあて、もう一方の手を、アンリエツトの肩に支へて、ひよろひよろツと前にのめらうとする。

アンリエツトと、つるが、慌てゝ、抱き止める。

アンリエツト。お祖母さま、どうなすつたの。
つる。御隱居さま。………。

兩人は、老婦人を、長椅子に倚らせる。

つる。お醫者樣をお呼び致しませうか。
アンリエツト。一寸、電話をかけて……溝口先生のとこね……早くよ……。
つる。（走り去る）

アンリエット。（泣き聲で）お祖母さま、御氣分がおわるいの。何かお藥は………？

老婦人。（力なく手を振る）

アンリエット。（老婦人の額に手をあて）おつむり、下げていらしつた方がよくはありませんの。

老婦人。（角の立たないほどに）お前が、あんまりせかすからさ。（間）——心配しないでいゝよ。

長い沈默。

アンリエット。あつち、どうしませう。

老婦人。もう少し休んで………。すぐなほるだらう。

つる、現はる。

つる。いますぐお見えになります。丁度、お出かけにならうとしてらつしやる處で御座いました。

老婦人。なに、一寸眩暈がしただけさ。お醫者さんなんか、よかつたのに………。少し喉がかわくやうだから、熱いお茶を一杯入れて來ておくれ。

つる。はい。（去る）

アンリエット。今日は、いらつしやらない方がよくはないこと？

老婦人。なあに、大したことはあるまい。——わたしが迎ひに行かないつていふ法はないよ。

アンリエット。でも、かうやつてると、遲くなりやしないか知ら………。

老婦人。うるさい娘だね、大丈夫、時間はあるつて云つてゐるぢやないか。——お前だけが待ち遠しいんぢやありませんよ。お父さんだつて、お前一人がお迎へに出てゐても、およろこびになりはしないよ。

長い沈默。

つる、茶を持つて來る。

老婦人。（靜かに、茶を飲む）應接間を奇麗に片づけてね。それから、食堂の電球を取替へとくこと、忘れないでね。

つる。はい。

老婦人。（自分で脈を見ながら、獨言のやうに）年を取ると生意地がなくなるね。――御免よ、アンリエット。お祖母さんは、今、少し意地の悪いことを云つたね。さうぢやない。お前のお父さんは、お前の顔を見に歸つてらしつたんだ。だから、お前が一番にお父さんの前に出て、「お歸りなさい」つて云ふんですよ。さうしたら、何んておつしやるだらう。お父さんは、先づお前を兩手で抱いて、「よく長い間をとなしくお留守をしてゐたね」つて……。それから、お前の頰をさすりながら、「お母さんそつくりになつた」つておつしやるだらう。（間）つるや、もうこゝはいゝから、早く晩の仕度をしておいで……。よしやはまだ歸らないかい。

つる。はい、まだ……。あの人は御使ひが遲いんで困ります。

老婦人。お前だつて早い方ぢやないよ。さ、お醫者さんが見えたら、こゝぢやなんだから、上へ上らう（時間を見て）まだ二十分は大丈夫……。（起ち上らうとするが、また椅子に倚りかゝる）をかしいね、どうもまだいけない。

アンリエット。もう少し、このまゝにしてらしつた方がいゝことよ。（外の方を見る）お苦しんですの。

老婦人。いゝや、かうしてれば、どうもない。――誰か、このまゝ、そつと、東京驛まで連れて行つてくれるものはないか知ら……。

アンリエット。（面白がつて）椅子ごと？

老婦人。あゝ。椅子ごと擔いで……。何んだと思ふだらう、みんな……。

アンリエット。人がたかつて來るわね。

老婦人。息子の歸りを出迎へに來た、年取つた母親の、慘めな姿だと知れば、笑ふものもあるまい。どら、その襟卷を取つておくれ。

アンリエット。（老婦人の肩に毛皮の襟卷を着せかける）

老婦人。かうしてると、裾が寒い。何かかけるものを……。

つる。（奥にはひる）

アンリエット。そんなにお動きになつちや駄目よ。

老婦人。お前も、そこへ掛けたらどう。立つてちや草臥れるだらう（アンリエットの、帽子からはみ出てゐる髪の毛を直してやりなどする）お前に此の帽子は一番よく似合ふわ。どれ、あつちを向いて御覽。よし、よし……。お父さんに會つたら、何んて云ふの。

アンリエット。（云ひにくがつて、からだをひねる）

老婦人。なんて云ふのさ。――默つて、さうしてるのかい。

アンリエット。ほかに澤山人がゐるの。

老婦人。さあ、どうだか……。誰にも知らせなかつたかも知れないね、あの人のことだから……。尤も新聞には出てゐたんだから、歸つて來ることは知つてゝも、着く時間なんかわかるまいしね。昔のお友達やなんかとは、どうなつてゐるんだか……。

アンリエット。でも、お父さまは、有名な學者なんでせう。

老婦人。佛蘭西ではね。それが却つて、日本の學界に容れられない理由らしいね。牧のお父さんなんかは、あれで、三十そこそこで博士になつたんだけれど、お前のお父さんからは馬鹿にされてゐた。學問の系統が違ふと、あゝまで排斥し

合はなくつちやならないのかね。

アンリエツト。牧兄さまのお父さまは、人類學の方でせう。

老婦人。あゝ、さうだ。それや、アルケオロオグとしちや、お前のお父さんは、世界でも、第一人者だよ、今ぢや……。

　　つるが、羽根蒲團を持つて來る。

つる。(それを着せながら)あの、先生がお見えになりました。

老婦人。それぢや、失禮ですが、こちらへつて……。

　　つる去る。やがて、醫師を案内して來る。

醫師。どうなさいました。

老婦人。(元氣を裝つて)いいえ、なんでもないんで御座いますよ。一寸眩暈がいたしましたの。此間中からの疲れが出たんで御座いませう。

醫者。はゝあ、今日は、いよいよ、お着きの日ですな。今、お出掛けの處だつたんですか。

老婦人。はあ、丁度出掛けようとして、こゝまで參りましたら、ふらふらつといたしましたものですから、かうやつて、休んでをりましたんですの。

醫師。こゝぢや御窮屈でせう。まだ、ふらふらなさいますか。

老婦人。今、こゝぢやあんまりだと思ひまして起ちかけたんで御座いますけれど、なんですか、まだ……。

醫師。(脈を取りながら)はゝあ……。

老婦人。何時か、かういふことがあるだらうと覺悟はしてをりましたんですけれど……。

醫師。覺悟は大袈裟ですな。いや、大したことはありません。

老婦人。例のぢや御座いますまいか。
醫師。いや、いや、それとは違ひます。やはり、輕い腦貧血でせう。大分、お氣をお使ひになりましたらうからな
老婦人。え〻、もう二度とないことで御座いますから………。
醫師。お舌を一寸……。は、結構……。（瞼などを見たる後）それでは、お胸をさつと拜見して置きませう、念のために……
（胸に聽心器をあてる）たしかなものです。御心配はいりません。ですが、今日は、安靜になすつていらしつた方い〻でせう。
老婦人。無理で御座いませうか。
醫師。御要心をなさるに越したことはありませんな。私が伺つた以上は、お止め申すより外はありません。
老婦人。少しぐらゐの無理なら……。
醫師。それがいけません。普斷、人並はづれて御養生家でいらしやるのに、今日はまた……。それや、特別のなんでせうが、一つ御辛棒を願ひます（頭を搔きながら）驚きましたな、どうも……、奥さまに、私から、こんなことを申し上げなけれやならないなんて……世の中も變れば變るものです。
老婦人。から、生意地が御座いません、かうなりますと……。
醫師。お察し〻ます
老婦人。（涙をふきながら）諦めませう。アンリエット、それぢや、お前、一人で行つておいで……。行けるね。本郷の叔母さまを見つけてね、一緒にお父さまを探してお貰ひ……。つるやを連れて行くかい。
アンリエット。い〻わ。
老婦人。途中は大丈夫だね、いや、やつぱりつるやを連れておいで。

アンリエット。いゝのよ、お祖母さま。東京驛なら、わかるわ。

老婦人。さうかい。本郷の叔母さまは、婦人待合室で待つてらつしやる筈だからね。時間はまだゆつくりだから、慌てないでもいゝよ。

アンリエット。お父さまは、どんな服を召していらしやるか知ら……。

老婦人。さあ、それはわからない。お前、お顔をよく覺えてないんだね。叔母さまは、いくらなんだつて、憶えてる筈だ。（考へて）ぢやね、かうするといゝ。――此の寫眞を持つて行つて、見比べて見るさ、汽車から降りる人の顏を一々……（さう云つて、笑ひながら、頸にかけた鎖を外し、アンリエットの頸にかけてやる）

アンリエット。（その寫眞を一つ時見つめてゐる）

老婦人。鼻の横に大きなホクロがあるから、それを目印にしてね（醫師に笑ひかけ）丸で昔の親を訪ねて見たいですわね。叔母さまが訊いたら、一寸氣分がわるいのでつて云つておくれ。お父さんにも、出がけに眩暈がして倒れたなんて云つちやいけませんよ。さあ、あんまり遲くならないうちに、出掛けなさい。（つるに）運轉手は、何處かへ行つてやしないかい。つる。（走つて外に出る）

アンリエット。（いそいそと）行つて參ります。（走り去る）

老婦人。（默つて、それを見送る）

長い沈默。

醫師。お孃さんを御覽になるのがお樂しみでせうな。

老婦人。伜で御座いますか。えゝ、それや、もう……。年寄なんか、こちらでいくら待つてゐましても……。

醫師。なに、それは、また、別ですよ。

長い沈黙。

老婦人。去年の今頃も、先生がかうして駈けつけて下さいました。

醫師。あゝ、さうさう……。しかし、どちらも、違つた意味で、私が不必要でしたな。――あの時は、全く、手の下しやうがありませんでした。

老婦人。あたくしが、こゝに、かうして、書物を讀んでゐましたんですよ。

醫師。さうでしたか。お驚きになつたでせう。

老婦人。變なものですわね。あの子が――收つて申しますんですが――柿の木へ登つて柿を取つてゐることは知つてゐたんで御座いますよ。危いことをする、早くやめてくればいゝ、さう思ひながら、つひ、止めることもせず、ぼんやりにばかり氣を取られてゐたんで御座いませう。

醫師。よくあることです。たしか、御孃さんもその場にいらしつたんでしたな。

老婦人。あれが何か、大きな聲で、しきりにあたくしに云ひつけてをりますのが耳にはひりながら、どうしたと云ふんでせう……あれで、一度か、二度、注意はしたと思ひますんですけれど……。

醫師。どうも怪我と云ふものは、こいつ、豫め、なんとするわけにも行きませんしな。

老婦人。それがね、後から考へて見ますと、たゞの怪我ぢやないらしいんですの。こんなこと、申上げていゝかどうか存じませんけれど……。

醫師。いや、それは伺ひますまい。醫者はたゞ、與へられた場合の處置さへ講じればよろしいのです。立ち入つたお話は、お互のためによくありますまい。それに、あまり、また、御話が過ぎると、お疲れになりますから……。もう暫く、かうしてゐて、お部屋へ御連れしませう。大分、冷えて來ました。

老婦人。あの柿の木は、その後、伐らせてしまひましたの。

醫師。伺ひました。

老婦人。その跡へ、「もつこう薔薇」を植ゑさせましたんですけれど、よくつかないらしいんですの。牧といふ子が、あの花が好きでしてね。

醫師。はあ。（脈を見る）

長い沈默。

老婦人。なんですか、胸騒ぎがして………。

醫師。（默つて脈を見つゞける）

つるが現はれる。

つる。（醫師に）何か御用は御座いませんですか。

醫師。あ、それぢや、一寸、わたしの家へ行つてね、……いや、伴のものにこれを取りにやつて下さい。（紙片に何か書きつけて渡す）

つる。はい。（退場）

醫師。御氣分は………？

老婦人。少し頭痛が………。

醫師。靜かになすつていらつしやい。すぐよくなります。汽車は、何時ですか。

老婦人。五時三十分………。

醫師。（時計を見ながら）五時三十分と………。

老婦人。間に合ひませうか。

醫師。何がですか。

老婦人。お隠しになつてはいけません。仰しやつて下さい。ほんとうのことを……。

醫師。ほんとうのことゝ云ひますと……。

老婦人。丁度必要なだけ……。（絶息）

醫師。なにがです。

老婦人。あたくしの命が……。

醫師。御冗談おつしやつちやいけません。

老婦人。（苦しさうに）こゝでは困ります。

醫師。えゝ、今……。

老婦人。つるや……。

醫師。女中さん……。

つる、急いで現はる。

老婦人。つるや、わたしを、向うへ連れて行つておくれ。

醫師。いや、一寸待つて……。奥さん、何んでもありませんよ。これくらゐのことはざらにあります。

老婦人。それやさうでせう。

醫師。お連れする前に、一寸、カンフルを一本射しときませう。

老婦人。注射ですか。

醫師。必要はあるまいと思ひますが………。

老婦人。そんなら、よしませう。痛い思ひをするだけ損ですわ。

醫師。そんなことおつしやらないで………。

老婦人。そんなら、このまゝ、ぢつとしてゐませう。

醫師。それだけはつきりなすつていらつしやれば文句はありません。（つるに）お床の用意は出來てゐるんですか。

つる。はい。

醫師。お二階でしたな（間）それではと………（考へる）何か、下に敷くものはありませんか。もう暫く、このままの方がいいでせう。

つる奥に去る。やがて、クッションを二つ三つ持つて來る。

醫師。それで結構（老婦人の腰の下、肩の下などに敷く）どこか、お痛いところはありませんか。

老婦人。頭が………。

醫師。（脈を取りながら）それは、御心配いりません。普段、あゝいふ風に申上げてあつたものだから、若しやとお思ひになるのでせうが、此の通り、心臓はたしかなのですから、決して怖くはありません。動脈硬化も、奥さんぐらゐの程度なら、まだまだ………。（間）お顔色がだんだんよくなつて來ました。（つるに）お宅には、ウヰスキーかなにかありませんか……葡萄酒でもよろしい。

つる。葡萄酒なら御座います。

醫師。少しどうぞ………。

つる奥に去る。やがて、葡萄酒を持つて來る。

醫師。(それを老婦人に飲ませる)先生、少しづつ、召上つていらしつたんですな。(瓶を檢めながら)これは、なかなか、上等な品物に違ひない。なんですか……ハ…ウ…テ………サ…ウテルネ……。

つる。オート・ソーテルヌで御座いませう。

醫師。(つるの顏を見上げ)なるほど、耳學問といふやつで……。

つる。(口を抑へ、聲を立てずに笑ふ。が、急に眞顏になり)御隱居樣、お寒くは御座いませんか。

醫師。さやう、少し、薄いやうですね。もう一枚、何か……。(體溫器を挾ませる)

つる、奥にはひり、別の羽根蒲團を持つて來る。

老婦人。先生はお寒くはありませんか。

醫師。いや、わたしは、太つてますからな。

老婦人。もう何時で御座いませう。

醫師。今が、きつちり五時です。

老婦人。………。

醫師。折角の日を、どうも殘念でしたな。

老婦人。あたくしは、もう息子を一人失くし、嫁を一人失くし、孫を一人失したんですからね。それから、もう一人の息子は、十年間もあたくしをうつちやらかして、旅へ出たまゝ歸つて來ようとはしなかつたんですもの。それでも、自分の手許には、さきほどの、あの孫娘を、世の中にたつた一つしかない寶のやうに、大切に預つて、可愛がれるだけ可愛がつて來ましたのが……それさへ、今日、赤の他人に奪はれてしまふんです。赤の他人も同樣です。それは、旅から歸つて來る倅のことを申すのではありません。もう一人の、何處からか、不意に現はれて、あたくしの

息子だと云つて、大きな顔をしてゐる男です。

醫師。………。

老婦人。これは自分の娘だ！——さう云つて、また、あたくしの手から、あのアンリエットを攫つて行かうとしてゐるんです。あたくしの伜なら、そんなことはしない筈です。ねえ、さうぢや御座いませんか。

醫師。………。（體温器を外して見る。首を傾ける。不安らしい表情）

老婦人。あのアンリエットの爲めには、あたくしは、殆ど、一人の男をさへ殺しました。その男とは、やはり、あたくしの可愛がつてゐた孫です。父親を失くして、一生眼を曇らせてゐるのかと思はれるやうな、あの淋しい男の子……。このあたくしですよ、あの牧を殺しましたのは………。

醫師。奥さん。（溜息）

老婦人。えゝ、さうです、柿の木から……。あの柿の木のてつぺんに、アンリエットの心臓が、赤く、ぶら下つてゐたんですもの……。

醫師。奥さん。

老婦人。（殆ど口の中で）頭が……頭が……。

長い沈默。

老婦人。（だんだん興奮状態になる）一枝、ゆるしておくれ。お前の、かけがへのない一人息子が、ああまで思ひつめてゐたアンリエットの眼に、その頃から、弘といふ青年が映つてゐた——それから、その青年の方でも、アンリエットを——から思ひ込んでゐたわたしが、此の春、どんな悲劇を見せられたか、一枝、お前だけは、ちやんと、それを知つてゐるね。

醫師。（老婦人の脈を取る）

老婦人。お前は、その時、牧のことを思ひ出してゐた。さうして、わたしを、例の眼で見てゐた。わたしは、此の一年間、お前のその眼を、どれだけ避けようとしてゐたか。お前は、なんにも知らないといふだらう。誰がそれを知つてゐやう。だが、お前は、やつぱり、母親だもの……。子供の運命については、神の聲を聞くことのできる母親だもの……。お前は、その敏感な母親の鼻で、わたしの罪を嗅ぎ當てゝゐたんだね。

醫師。（益々不安な表情）

老婦人。（息苦しさうに、しかし、朗らかな聲で）

O Thébains! Jusqu'au jour qui termine la vie
Ne regardons personne avec un œil d'envie
Peut-on jamais prévoir les dernier coup du sort?
Ne proclamons heureux nul homme avant sa mort.

長い沈默。

つるが、白い布の包みを持つて、恐る恐る近づいて來る。醫師の手に包みを渡し、何やら小聲で囁く。醫師、うなづく。

醫師。（老婦人の耳元に口を寄せ）大分およろしいやうですから、向うへお連れしませう。

老婦人。お默り……。お前はお父さんと何處へでも行くがいゝ。お祖母さんは、もう川のないからだだから、お前たちの邪魔にならない處にゐよう。

醫師。風邪でもお引きになるといけませんからな。

老婦人。アンリエット……。どうして、お前は、何時までも、そつちを向いてるの。怒つたのかい。何も、そんなに怒る

ことはないぢやないか
醫師。（つるに眼くばせしながら、老婦人のからだを起さうとする）
つる。（それを、向う側に廻つて、手傳ふ）
醫師。（突然）あ、いけない、いけない。（手を放す。急いで、注射の用意をする）本郷に御親戚があるんでしたな。電話があり
ますか。
つる。はい。
醫師。あまり、びつくりなさらんやうに……それでも、至急、お出でを願つて下さい。
つる。御病氣だと申し上げてもよろしいんで御座いますか。
醫師。勿論、さう云つて……。
つる。本郷の奥様は、只今、停車場の方へ、お宅の旦那様をお迎へに行つておいでになる筈で御座いますが……。
醫師。こちらへ、御一緒に見えるんですか。
つる。さあ、それは……。
醫師。兎に角、お知らせだけしといて……。ほかには別に、お知らせするところはありませんな。
つる。あたくしでは、一寸わかり兼ねますが……。
醫師。よろしい。取敢へずお願ひします。
つる、急いで退場。醫師、注射をする。
老婦人。アンリエット……アンリエット……。
醫師。今、すぐ……。もうぢきです

老婦人。收、何をそんな顔して見てるんです。そんな處に、誰もゐやしないよ。

醫師。（老婦人の脈を取る）

長い沈默。此の頃から、夕日があたりを染め、老婦人の顔に、一種、壯嚴な光を浴びせはじめる。

老婦人。（やゝ穩やかな調子に復し）そうら、歸つて來た…………。もう少し遲いと、母さんは、お前の顔が見えなかつたんだ。さ、こつちへおいで…………。海は荒れなかつたかい。（間）よく歸つて來てくれたね。あんまり遲いので、母さんは、お前が道を迷つたんぢやないかと思つて心配したよ。まあ、どうしたの、その姿は…………。

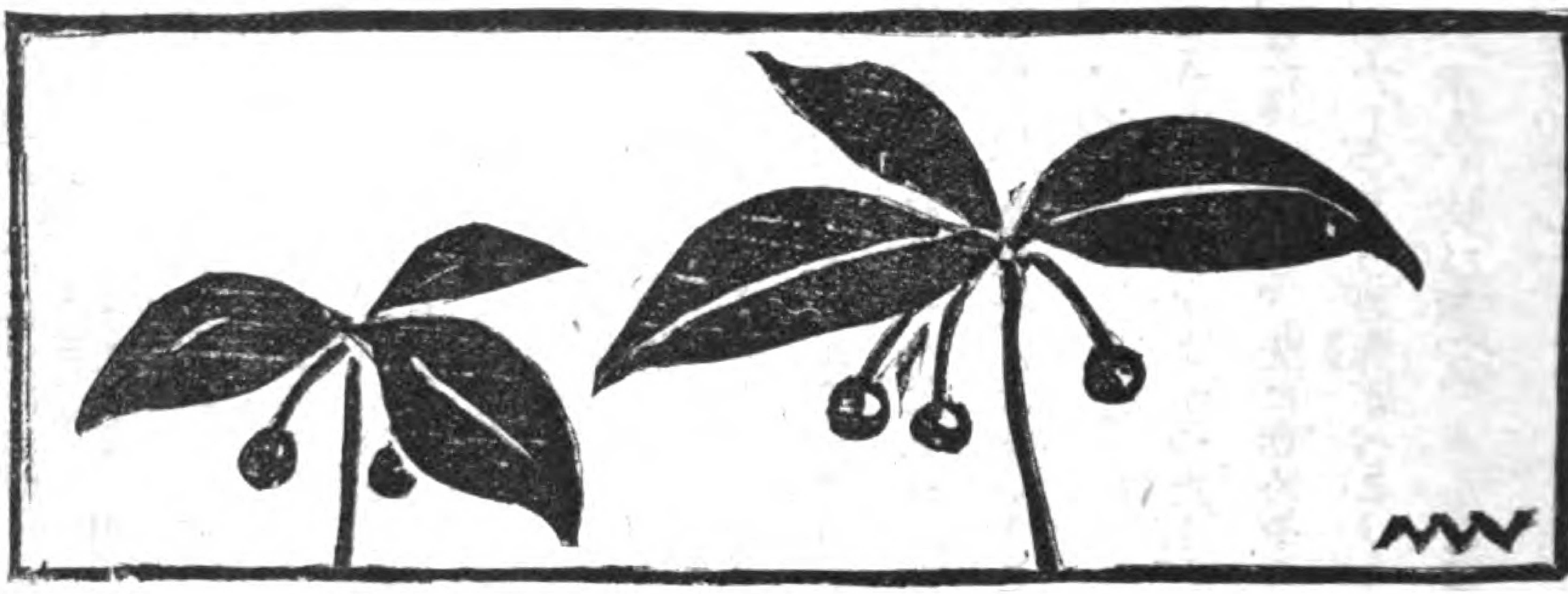
長い沈默。

みんな揃つたかい。收はどうした、收は…………（間）あ、誰か、早く…………。（間）宥しておくれ、みんな、宥しておくれ…………。わたしは、たゞ、少し、長生きをしすぎただけだ…………。たゞそれだけだ…………。

日が沈み終つて、舞臺、次第に暗くなる。

——幕——

作者附記——此の戯曲の「一」は、昨年七月、文藝時代に、「第一幕」と題して揭載したものですが、その後、「二」と「三」とを書き足して、新たな一篇を得ました。「第一幕」を讀んでゐない讀者の爲めに、編輯者の諒解を得て、特に全篇を載せて貰ふことにしました。



川はまり

里見弴

「ほとゝぎす！」

電話が遠いのか、何度も何度も訊き返すのに業を煮やして、仕舞には私も、怒鳴りつけるやうにさう云つた。――こゝからはいくらも隔てゝゐない京の西郊にある撮映所に仕事をもつてゐて、而も口の贅澤な瀬木のことだから、大方お馴染のうちだらう、それなら、聞えさへすればすぐ嚥み込める筈だと思はれるのに、受話器のなかにも變らない、いつもの寢惚聲で、

「ほとゝぎす？　なんだいそれア」

「ほとゝぎすだよ。知らないかい？」

「知らない」

それから、凡その見當を數へかけたが、途中で面倒になつたので、自働車で來れ

ばすぐだから、あとは運轉手にでも案内して貰へと云つて電話を切つた。

嵐峡に臨んだ斷崖に乗り出して、束柱を高く、中二階ほどに浮めて建てた風雅な座敷へ戻つて來た。早飯で出かけて、ケーブルカアで比叡山に登つたり、夏の半日をあちこち歩き廻つて來たあとで、さういふ座敷に夜食の膳を待つ氣持は樂しかつた。高倉はホワイト・シャツ一枚になり、そのまた釦をはずして、大きな胸に扇風機を擁え込むやうにしてゐた。入側の、丁度肘がかゝるほどの高さの敷居に近く、お孝は、横坐りの足頭を小さな座布團のそとへ滑らしてゐたが、鼻緖の跡の、薄く埃の色に染つたのも、いかにもさういふ行樂の歸途らしかつた。

「どう？　來るつて？」

高倉と瀨木とは、一二度顏を合せたくらゐの仲だつたが、私とは小學校時代からの友達で、遽にさういふ人を呼び迎へるにも遠慮は要らなかつた。それどころか、京都の市役所に勤めてゐる高倉としては、自分にはどうせ文學やなんかのことは解らないんだから、さういふ人が來て、君の話相手に成つてくれゝばなほ結構だ、といふやうな、すなほな心遣さへ見えた。毎日のやうに宿へ誘ひに來て、あすこゝと、一箇所でも餘計に案内して廻らうとするやうな、やゝ鄙びた親切氣と共に、またそんな細いところもあつた。

「來るつて」

「さうか、それアよかつた！　ぢア、もうちつと飯を待たせやうか」

「なに、いゝさ。先に始めやうよ。來ると云つたつて、いつのことか、なか／＼あてになる男ぢアないんだ」

「あたし、もうお腹がぺこ／＼」

お孝も、笑ひ顏で、そんな風に云つてみせた。

「さうでせう」

と、高倉は、扇風機の前から振り向いて、「何しろ、妙心寺だけ、プログラムになかつたものが殖ちやつたから」
「でも、あすこは面白ござんしたよ。あの、案内者のお爺さん、すつかり氣に入つちやつたわ」
「八方睨みの龍の由來かね？　あの話は面白かつたね。ドカーン！　なんていきなり机を叩きやアがつたりして……」
「あたし吃驚しちやつたわ。お堂のなかに響き返つて、大きな音がしましたものね」
「それに薄暗いと來てるし……」
高倉は、思ひ出しても可笑しい、といふ風に、クック云つて笑つた。
二三間離れて、丸火屋の電燈が灯つてゐた。冬ならば、空も透き、水の面も少しは窺へる筈の硝子戸のそとは、たゞ一面の青葉で、それに映る灯の色が、涼しげで、綺麗だつた。吃驚するほど青かつた。そのなかを、まるで丸火屋から立ち□る煙かなぞのやうに、小さな羽蟲がウヨ〳〵渦をまいて動いてゐた。——山間のせいか、ちつとも風はなかつた。
私は、敷居に腰かけ、硝子戸の小端に背を倚せて、うすら勞の眼を瞬ぎもせずに、その夥しい羽蟲の、うじやつこく飛び交ふ様に見入つてゐた。騒がしからぬほどに、下の方から、川瀬の音が聞えて來た。
「それで……」
と、お孝は、巻煙草に火をつけながら、「瀬木さん、どこへ行つていらしつたんですつて？」
こゝへの道に、偶然通りかゝつた撮映所の門前で自動車をとめさせ、私だけ降りて、瀬木を尋ねて行くと、事務所の人の答へに、先刻寝間着のまんまでぶらツとはいつて來たが、いつの間にかまたどこかへ出て行つて了つた、大方玉突へでも行つてゐるんぢやアないかしら、といふやうなことで。それがいかにも瀬木らしくて可笑しかつたので、自動車に歸へるなり、そのまゝをつれにも話して聞かせた。お孝が訊くのは、その、寝間着のまゝで行つてゐたといふ先方だつた。
「さアね、別に訊いてもみなかつたけれど、兎も角一度は撮映所に歸つたんだね。歸つて、俺の行衛を聞いたればこそ、

電話をかけてよこしたんだらうから」
「でも、ずゐぶん暢氣ねえ」
「尤も、うちも、あれからさう遠くはなささうな話だつたけれど」
「ふーん」
高倉が、返事とも笑ひ聲ともつかないうけ答をしてから、「どうです、貴方も、帶でもおとんなすつたら」
「いゝえ、あたしさう暑くありませんわ」
「さうですか。あたしはまた暑がりの汗ツかきで……」
そんな風に、話にまとまりがつかないうちに膳が運ばれて來た。すき腹に、酒も食べものもうまかつた。尤も、飲むのは私だけで、高倉もお孝も食べるだけ食べると、さつさと箸を措いて了つた。酒のうまさもうまさだつたが、私には、瀬木の來るのが心待ちにされて、いつまでもぐづり／＼手酌でやつてゐた。
ポツリ、ポツリ、茂れるだけ茂り重つた青葉の上に、大粒なやつがやつて來た。
「あら、夕立が來さうですよ」
「あゝ、これで助る！」
高倉は、果實の皿を片手に、わざ／＼立つて行つて、葉房のあちこちを搖らせてゐる雨の足を眺めて ゐたが、「あゝ光つた！」
その聲が終るか終らないに、嵐氣が、水のやうに流れ込んで來て、雨音も急に繁くなつた。
「ちよつと惡くないな、こゝに來て夕立にあふなんぞは」
「こんなに大きな木が生えてゝ、……大丈夫かしら」

お孝も、腰を浮かして、おもてをすかして見た。途端に鳴りだした。さう近くはなささうだつたが、山や谿に木靈を返して、おどろ〳〵しく、響も永く續いた。

「あら、いやだわ！」

「大丈夫！　それより、瀬木のやつ、途中でこいつを喰つたかな？」

この、山腹にある料理屋へ來るには、自動車を降りてから、二人とは並んで歩けないほどの徑をやがて半町ほども登らなければならない。そこまで來てゐて、雨具の用意がないとすれば、ちよつと困つてゐるだらうと察しられた。

蝉光に閃く空が、瞬きながら、煖房の隙間を彩つたと思ふと、忽ち沛然たる大雨になつて來た。ド、ド、ド、ドツと、遠い峰々からおろして來る風に、あけ放した窓のうちまで、霧になつてしぶきかゝつた。と見ると、先刻、あれほど群つてゐた羽蟲が、どこにどうなつたのか、影も形もなく、明い火屋の周りには、たゞ青々と、木々の梢が荒れ狂つてゐた。

「こいつはなか〳〵えらいぞ」

私はまづ膝を抑しやつて置いて、それから座布團ごと席をいざらうとしたが、細に編んだ籐莚が、いつの間にかもうじつとりとなつて、思ふやうにはすべらなかつた。

「いやアねえ」

「何がいやなことがあるもんか。いゝ氣持ぢアないか」

「雷、嫌ひですか」

「えゝ。どうもあんまり……」

高倉は輕く笑つて、

「ちア、こゝ締めませうかね」

「あゝ、締めてくれないか。だいぶ吹ッ込んで來るやうだぜ、こゝらは」

云つてゐるうちにも、雷雨はますく\募つて來た。電燈が二三度瞬いたと思ふと消えて了つた。部屋のなかゞ暗くなると、一二分おきに空を染めだす薄紫の白光(びやくくわう)が、ひとしきり鮮(あざや)にきらめいた。帳場の方では、燭臺の用意に立ち騒ぐらしい人聲もしてゐた。

「ほんとに、大丈夫かしら」

「大丈夫でないとしたところで、どうすることも出來やしないぢアないか」

「だつて……」

雷鳴は、殷々(いんいん)と硝子戸を顫はせて近づいて來るやうな氣がした。

「困つたねえ、こりア」

自分たちのことより、私は、潮木の上を案じてさう云つたのだが、

「なに、じきやむよ」

と、高倉は、京都のことなら、なんでも自分の思ふまゝにでもなるやうな調子で、暢氣らしく、そこへ長々と寢そべつて見せたりした。

間もなく、燭臺をもつてはいつて來た女中に、私は、手のすいてゐる若い衆でもゐるなら、この降りのなかを氣の毒だけれど、自動車のはいらなくなるところまで、今にも來てゐるかも知れないつれの、雨具の用意もして、出迎へてゐてくれないか、と頼んだ。

「へえへ、承知いたしました」

「誰か、さういふ人がゐますかしら」

「へえ、爺やさんがゐやはりますさかい……」

「さう。ぢアひとつ、氣の毒だけど出てゐて貰はふかな。俄雨だから、むかふだつてきつと、傘一本もたずに出かけて來てるに違ひないと思ふんだ」

「ほんに！　そらさうどつしやろ。それに、あんたはん、電氣消えてますよつてん、馴れんお方はんやつたら、お提灯がなうては、ようあがつて來てくれはれしめえん」

「然し」

と、高倉が、腕時計を燭臺の灯にすかして見ながら「だつて、もう君、九時すぎてるぜ。ほんとに來るのかしらん？電話で、はつきり來るつてことになつてるのかい？」

「大抵……といふ程度なんだがね」

「よろしゆ御座ります。兎も角もお迎ひ出しときますさかい……」

「え〻。ぢア、どうぞさういふことにしてください」

女中がさがつて行つて、五分とた〻ないうちに、けれども、い〻按配に電燈だけは灯つた。

「あ、來た、來た！」

思はず知らず、お孝は、男のやうな調子で、歡喜の聲をあげた。

酒も丁度ほどあひだつたので、待ち切れずに、私はお茶漬で飯をすませて了つた。お誂むきに、その時分から、雷鳴が遠のき、雨も細くなりかゝつた。

「あいつのずぼらと來たら、とても話にならないんだからね。十時まで待つてみて、もし來なかつたら出かけやうぢアな

いか」

「さうね、こゝのうちでも、あんまりおそくまで、氣の毒だわ」

「それに君、爺さんだつて……」

「さうだよ、出かけやうよ」

自動車を呼んで貰つて、私たちはそろ〳〵歸り支度をした。疲れと滿腹とから、宿に歸つて、のう〳〵と手足を伸したい氣にもなつてゐた。

やがて、自動車が來たとの知らせに、私たちが暗い、足もとの惡い山徑をおりかけた時には、雨はもう、スーイ〳〵と糸を引くやうに、まばらに落ちて來るばかりだつた。却つて、名殘の風に梢を搖られるたびに、パラ〳〵、パラ〳〵ッと降りかゝつて來る滴の方が、重たく傘の柄に響いた。

「滑るよ！」

「ずゐぶん暗いんですねえ」

「ぢア、提灯のすぐあとンなれよ」

そんな風に、聲をかけ合ひながらおりて行くと、彼方からも、自動車の助手が迎ひに來てくれた。それが、提灯もちの若い衆の方へ、いきなり何か早口で喋りかけたが、その京訛のなかから、私はやつと、「川はまり」といふひと言だけを捉へることが出來た。

「何？どうしたの？」

足を早めて、前の者に追ひ縋つた。

「何か出たんですとさ」

提灯もちのすぐあとに續いたお孝が、不安さうな顔を振り向けて、「川なんとか云ふもんですって」

「だから、川はまりだらう？」

「え〻。……なんなんです？　その、川はまりってのは？」

「投身さ、誰か川に飛び込んだんだらう」

「あら、さう！　あたしやまた、川瀬の親類みたいなもんで、誰か抓まれでもした人があるのかと思つた」

「冗談いふない！」

「あら、ほんとよゥ！」

それには構はず、自動車の助手の方へ、

「死んだのかい？」

「い〻え、ほと〻ぎすの爺やさんが引きあげてやんなはつたんやさうです。親子づれで、子供が三人も……」

「どうしたい、それで？　まだそこらにゐるのかね？」

「え〻。ついあこのお茶屋で、着物やらなんやらもろて、もう去にかけてますわ」

「さうかい！」

思はず急ぎ足になつて行くと、近所の料理屋の板場らしい、キャラコのシャツ一枚の男や、雨外套を羽織つた在郷軍人などが、てんでに提灯を提げて立つてゐる後姿が、まづ目にはいつた。そこは、檜葉の、さつとした生垣で往來からかこつただけの、氷水とか、茶菓子くらゐを商ふ掛茶屋で、葦簀の軒に、丸提灯をはづしたあとの、球ばかりの電燈が、無態にブラ〳〵さがつてゐた。そのいやにギラつく灯の下で、無論遠慮のない、濡れ放題の床板にべつたりと坐り込み、兩掌に顔を埋めて、クツ、クツ、クツ、ク、と、時をおいて糸でも吊りあげられるやうに、肩を揺りあげてゐる女があつた。

そばに、ボカーンとして突ッ立つてゐるのは、七八つと、五つ六つくらゐの、お河童さんにした女の子だつた。嬰兒（あかんぼ）は、その茶店のおかみさんか、でつぷり肥つた四十女が抱いて、うしろから、母親の背なかに押しつけ、白木綿の兵兒帶のやうなもので、結付（ゆひつけ）おんぶにさせられてゐるところだつた。

「もうえゝ！　もう、いつまで泣いてんと去（い）んなはれ！　なア、ほんまにあんた運がえゝのどつせ。おすさんによう禮いふてな。もう二度とこんな阿呆らしいまねしなはんなや！　な、えゝか！　さ！　ちんと嬰兒（やや）こ負ひなはれへんかいな！」

まるで叱りつけるやうな調子で、そんなことを云ひ續けながら、腋（わき）から手を廻して、胸で兵兒帶を綾にかけてやつた。ほとゝぎすの爺さんらしい姿は、そこらに見えなかつたが、第何班とか書いた在郷軍人も、そばから何か云ひ聞かせてゐた。

私には、もうこの上そこに立つて見てゐられないやうな氣がして來た。何故か、お孝には尚更見せて置きたくなかつた。振り向いて、すぐうしろに立つてゐたのを、肩で突きやりながら、

「行かう！」

と、云つた。

「行かう！」

と、高倉の聲も、思はぬ横手の方から聞えて來た。私たちは、すぐその近くにあつた自動車のなかにはいつたが、運轉手も助手もゐなかつた。道案内に立つた若い衆が、呼びに行つてゐる間、さうかと云つて、突つ張りクションの上にぢッと腰を据えてはゐられなかつた。誰が先ともなく、私たち三人は、いつの間にか、左側の窓から折り重つて顏を出してゐた。

（兎も角、お前も小説家ぢアないか。見て置け！　落ちついて、しつかり見て置け！）

その時になつて、私のどこかに、そんな風な聲をたてるものが出て來た。

母親は、色は黒かつたが、櫛巻の額つきの賢さうな、キチンとした顔だちだつた。子供たちも、[illegible]よく見ると、眞山[illegible]は男の子だつたが、とりわけその子などは、器量よしだつた。兩方から、母親の袂の先にぶらさがるやうにして、もうそろ／＼歩きだしてゐた。母親は、袖口にひつ込めた右手で顔を蔽ひ、左は背なかに廻して、あつちこつちに、矢鱈と頭をさげながら、そろり／＼歩いてゐた。

「あゝ、下駄どうした、下駄！　先刻の下駄どこイやつた！」

さういふ叫び聲の下から、もう腰の曲りかけた婆さんと、若い男とで、下駄を二足もつて來て、彼等の行く手に並べてやつたが、母親は、頻に會釋するばかりで、なか／＼それへ足を乘せやうとはしなかつた。

「何いふてんね！　これ、あんたの下駄やで！　跣で歩いてたら、それこそ近所さんにひやかされるがな！」

茶店のおかみさんは、相變らずづけ／＼やつてゐた。

そこに、ほとゝぎすの爺さんといふのが、どしや降のなかを、出迎ひ行つて貰つた禮にと、少し餘分に包んで、若い衆にことづけてやつたのに、禮を云はふとしてか、蓑の裾をワサ／＼鳴しながら驅けつけて來た。

「唯今はどうも……」

「あゝ、吹き降りのなかをお氣の毒さんでした。たうとうつれが來ないで……」

「へえ、……いえ、どうも、おゝきに……」

「然し君は、いゝことをしてあげたね」

「へえ」

「ほんまにえゝことしたげなはつたわ」

と、茶屋のかみさんが横あひから引きとつて、「あんた後生よろしで！おすさんがゐなはらんだつたら、も、すんでのことに、親子四人づれ死なんならんとこを……。まア、あん時のおすさんの聲つたら！　わて、あんたが、間違ふて川へはまんなはつたとばかり思て、とんで出て見たんやけど、なんせあの吹き降りどつしやろ……」

このおかみさんのお喋りの間に、私はお孝に耳うちをして、いくらかの金を包ませ、そばにゐた在郷軍人に頼んで、投身未遂の女にやつて貰はうとした。

「それアどうも……。然し、失禮ですが、貴方は、どちらのお方で……？」

「東京の者です。大へんぶしつけですが、これで、なんか子供さんたちにでも買つてやつてくださいつて、どうぞ、貴方からよろしく……」

「はア、承知しました」

けれども、その在郷軍人の口上は、癪にさはるといふほどではなかつたにしても、氣には入らなかつた。何遍も、よく禮を云へ、を繰り返して、いやに仰々しく勿體をつけてゐた。氣がつくと、いつの間にか運轉手も來て、もうハンドルを握つてゐたので、すぐ出して貰つた。……男の子の尻ツぺたに、ダランと附紐の垂れてゐたのが、最後に眼に滲みついて殘つた……。

その場から離れて來てみると、私たちは、それ〴〵みんな亢奮してゐた。

「然し、よかつたねえ！」

「なんだつて死ぬ氣になんぞなつたんでせう」

「よかつた！　瀨木のやつが、約束どほり來てゐたら、今ごろはもうすつかり冷たくなつてたんだ。いつものづぼらのおかげで、親子四人助かつてるなんて、あいつ、夢にも知らないんだから面白いなア」

「いやね、僕アね、正直いふと、君が、瀬木君の迎ひに、――それも爺さんだつていふに、あの君、嵐みたいなおもてに立たして置くなんて、ずゐぶん、――ほんと云ふと贊成しなかつたんだよ。それも、あとから來るのが、女子供だとでもいふんなら、それアまた別だけれど、大の男が來るのに、いくら召使だつて爺さんを出しとくなんて、實は、ちよつと不人情な話だな、と思つてたんだよ。だけど、それが、かういふことになつて來てみると、君、ほんとにいゝことしたね！」

「なに、僕アなんにもそんなつもりで出してやつたわけぢアなし、全く君の云ふとほり、ちつと不人情だつたと思ふくらゐなんだがね……」

「それアさうね」

「いや、そいつたつて、何も、君を、咎めだてをするわけぢアないけど、……だつて、さうぢアないか。女子供なら知らないこと、あんな君、そいつちアなんだけれど、少々雨に濡れたくらゐで、なか／＼風邪ひとつ引きさうにもない、……ねえ、君、さうだらう？」

「さうだよ」

さう說伏されながらも、私の頰からは、明い微笑が消えなかつた。

「それが君！」

と、高倉は、大きな軀を乘り出すやうにして、「これが、偶然にも、四人まで人の命を助けることになつたんだから……
……」

「まア、結果から云へばね……」

「よかつたよ！　ほんとによかつたよ！」

高倉は、まるでそれが可笑しいことででもあるかのやうに、急に聲をあげて笑ひだした。

「あたしやまたね」

お孝も、とても默つてゐられないといふ風に、「あたしやまた、親子づれの河はまりがどうとかかうとか云つてたから、これアもうきつと、河童みたいなもんが、仔をつれて岸へでも這ひ出して來たんだらうと思つて……」

「河童！」

高倉は、また大聲をあげて笑つた。そしてそれが鎭まると、瀨木の迎ひに爺さんを出してやつた私の不人情から、偶然にもそれで、とんだ善根を積むことになつた不思議な廻合せについて、何遍でも、繰り返し繰返し同じことばかり云つてゐた。運轉手までが、とき〴〵その話のなかへ割り込んで來たりした。

自動車は、やがて、灯の多い京の街にはいつた。

春來る

徳田秋聲

一

「どこか暖かい處へ行きたい。」

痔の手術をして病院を出てから、もう大分の日數がたつてゐるのに、創口がまだ十分肉の上つてこないのに氣を腐らしてゐる彼女は、時々そんな事を言つてゐた。

今一ト息といふところへ來て、兎角肉の上りの遲いのには、掛りの博士も梏かしさを感じてゐた。去年の夏から一年越し惱んで來た彼女の痔の療治が、漸く全癒期に近づいた今、どうかすると又た小い穴が出來たりして彼女の心を暗くした。疑惑が生じて來た。そして内科で一應診察を受けることになつた。その結果輕い肺尖だといふことになつた。女學校時代の肋膜の痕迹が殘つてゐるけれど、それは何でもなかつた。

「でもほんの輕いんですつて。成るべくなら海岸へ行つた方がいゝけれど、それよりか書くことを止めて、規則正しい生活をしなければ可けないんですつて。心配しちや可けないつて言つたわ……私が力を落したものですから。だから私書かなけあ食べて行けないと言つてやつたわ。」

或日彼女は病院から歸ると、さう言つて彼に告げた。しかし彼が心配するほど、彼女は氣にもしてゐないらしかつた。弱さうに見えて、しかも女には珍らしい負けじ魂をもつた彼女は、さう云ふ場合反撥心を起すのが常であつた。弱味を見透されるのが大嫌ひであつた

「やつぱり海岸へでも行かなけあ不可けないんだらうね。」

「それあ行くに越したことはありませんさ。だけど私東京を離れるのが寂しい！」

彼も彼女を遠く放してはおけなかつた。

「僕も一緒だつたら！」

「それなら可い。」

轉地の場所や、方法や經濟などの實際問題について、二人は暫らく話し合つた。氣分が憂鬱になつた。彼は毎夜彼女が寢汗を搔くことなどを思ひ合せて、痼疾の病原が案外深いところにあるやうに思はれると共に、何もかも知り悉してゐる薄倖な彼女の生涯が、哀れに傷ましいものに思はれた。

しかし其から大分たつてから、づつと傷の手當をしてもらつて、特別た親愛をもたれてゐるII——博士の手で、レントゲンにかけて確かな診察をしてもらつた結果、肺尖加答兒だと見られたのが、ほんの肺尖がいくらか低いといふ程度ので、古い肋膜が心持殘つてゐるくらゐのものだといふことが明らかになつた。

「私の體は脆弱いやうで何處かに强いところがあると言つたわ。創も完全に癒るには癒るけれど、もう一度ちよつと惡い

肉をかいた方が早いだらうつていふの。こんなに迯つてゐて、一度も二度も痛い目に逢はなけあこの傷が完全に癒せたいもんだかつて言つてやつたら、皆な笑つてゐた。」愛子は子供のやうに言ふのであつた。

小野は愛子が病院で、傷の手當をしてもらふ博士に、どんなに甘へてゐるかゞ解るやうに思へて、くす〳〵と笑つた。

愛子には普通の女には見られない媚めかしさがあつたが、本質的には普通の男にも見られないやうた爽やかさがあつた。小野は彼女と親しみが深くなるにつれて、誰にも多く氣づかれない彼女の男性的な氣象の、ひどくさくりとした處が氣に入つてゐた。すらりとした彼女の骨格にさへ、彼は屢々美貌の少年と共にゐるやうな氣分を感じた。肩を聳やかして談論にはづむ時の透きとほるやうな彼女の聲と態度、服從者に對する時の彼女の俠氣と切放れの好さ、それはちやうど好い意味での女團長をでも見るやうな感じがあつた。彼女の容貌と氣象は、義俠心に富んでゐたとか聞く父親酷似であつたが、その容貌と氣象は、生憎にも彼女を餘り幸福にはしなかつた。

小野は寒いうちだけでも、愛子をどこか暖かい海岸で暮させたいと思つたが、彼自身も二月から三月へかけての寒さには、大抵一度は執拗な氣管支炎に惱まされるのが常なので、仕事の隙を見て、交通の便利た湘南地方に、借家を見に行かうと考へてゐたが、氣に引かゝつてゐるだけで、彼自身も彼女も容易に決定的にはなれなかつた。

「F——さんのお話では、大磯だと安くゐれて、大變好いやうなのよ。あの方ちよい〳〵行くらしいわ。」

F——といふのは愛子が長女を内弟子に預けてゐる舞踊の師匠であつた。

「少し遠くはないか。」

「え。たゞ話すの。必ずしもそこへ行きたいと言つてるんぢやないのよ。」

勿論彼女は何處へ行つても、長くはゐられない質であつた。それは去年の秋溫泉へ行つた時の樣子で小野に解つてゐた。彼女には都會の灯と活動館と本屋と喫茶店と美容館とが必要であつた。今の場合では信賴するに足る博士も缺くこと

の出來ないものであつた。

「私自分の分をもつから暖かいところへ連れてつて！何處でもいゝわ」愛子は時々ねだつた。

　するうち幾箇も引受けてしまつた小野の仕事が段々切迫して來た。その中にはさう遠いところへ出られないほど切迫したものも一つ二つあつた。小野は差當り其等の仕事を仕揚げるため、どこぞ近いところで、スチームの設備のあるところを擇ばなければならなかつた。

「ぢやね、二三日O―町のホテルにゐて、そこで少し餘裕をつけてから熱海へ行かう。」

「さう。嬉しい。」

　直ぐその晩一人の若い人に送られて二人は家を出た。

二

　このホテルは二人に取つて、思出の深い場所であつた。昨年のちようど今頃、忙しい仕事に追はれてゐた小野は、或夜急に彼女を誘つて此處へやつて來たのであつたが、その時も思ふやうな部屋がなくて、離れの日本室へ漸と落着くことが出來たのであつた。今度は殊に御大喪のために、どこのホテルも一杯であつたところから、小野が上つて自身に交渉しなかつたなら、危うくお斷りを喰ふところであつた。今は火と火と觸れ合ふやうな其の時の熱情は薄らいでゐたけれど、一年前の其の頃から見ると二人の關係もひどく複雜になつてゐたと同時に、氣持も深くなつてゐた。

　二人は去年來たときと同じ庭を通つて、その部屋とは又違つた端の方の部屋へ案内された。ボーイの總支配をしてゐるT――さんの細君が出て來て、わづか二三日ゐたきりであつたけれど、長い間のお馴染のやうな親しさで、瓦斯ストーブをつけてくれたり、大きい瀬戸の火鉢に、こて／＼火を起してくれたりした。そこへ子供のやうに無邪氣な旦那のT――

さんも廊下にしやがんでお辭儀をした。そこは十五疊ばかりの書院造りの立派な座敷であつた。眞中にある紫檀の卓子の兩方に二人は倚りかゝつて見たが、寒いのと廣いので、書く氣分になれさうもなかつた。

「これあ駄目ね。」愛子が四邊を見廻はしながら言つた。

その日も彼女は熱があつた。疲れても居た。

「私ならこの部屋は餘りばあつとして書く氣分には迚もなれない。それに寒くて……。」愛子は肩を搖りながら後ろを振返つた。

小野は孰を見ても氣品の高い支那趣味の書畫の貼られた屛風や、額や掛軸や投込の花などを見てゐたが、こゝは去年居た二階の部屋よりもづつと立派であつた。彼は二階のその部屋での第一夜の印象などを思ひ浮べてゐた。その翌日愛子は彼女の宿へ歸つて行つた。そして何喰はぬ顔で小野の留守宅を訪問して、子供達の機嫌を取つたりした。獨り殘つた小野は仕事も手につかず、半日ぼんやりしてゐた。都てが夢のやうであつた。するうち日が暮れかゝつて、電燈がついた。小野はその電燈の下に、孑然と坐つてゐたが、食事をしてもペンを執つて見ても氣分が落着かなかつた。寂寥がひた／＼と疲れた彼の胸に押してゐた。

彼は愛子へ電話をかけようかと思つて、下へおりた。そして縁側から庭へおりて、木値の方へ行つてみた。長い廊下を二度ばかり曲つて玄關口へ出ると、そこの左手の方に電話室があつた。小野はその前まで行つたけれど、愛子が若しかすると居ないであらうことを恐れて、かけるのが躊躇された。

彼はまた部屋へ戻つて來た。ふと荇ると、昨夜電球をくるんだ紅い色で縁を取られた彼女のハンケチが刺戟づよく彼の目についた。愛子の深い目や紅い唇が、そこにまざ／＼と甦つて來た。彼は起ちあがつて其のハンケチを釋いた。そして其を口に當てた。凋んだやうな彼の感覺が、花のやうに美しく咲いて來た。

それから一時間ほどたつと、部屋の外に跫音がした。襖を開けてそこへ中腰になつてゐるのはボーイであつた。

「芳村さんからお電話です。」

小野は飛びたつやうな思ひで、電話口へ駈けつけた。

「……來ない？」

「行つてもよろしいんです。」

一時間とたゝないうちに、松葉散らしの緑色の羽織を着た夜會卷の愛子の生き〳〵した姿が、彼の部屋へ現はれた。

その夜も二人は窓の白らむまで話してゐた。

「ちよつと極りがわるいな。」T――さんが本館の方に若しかしたら、部屋の都合ができるか否かを問合せに行つた後で、小野は去年のことを思ひ出しながら愛子を見た。

「そんなこと介意ふもんですか。あれほど好い感じをもつてるぢやありませんか。」

本館の方で、十時に立つ客が一人あるから、それ以後なら其の部屋が開くのだといふことが、やがてT――さんによつて報告された。そして愛子がコンパクトを取出して、白粉の少し剝げかゝつた鼻の邊へポットをつかつてゐると、間もなく、

「どうぞ。お部屋の支度が出來ましたから」と、本館の方のボーイの一人がやつて來て、スウトケースや化粧袋を持出した。

やがて二人はその部屋へ落着いた。ダブルベッドや洗面器や、簞笥や、椅子や、建築は簡素であつたが、簡素なりに氣の利いた造り方であつた。三つもついた電燈の仄かな光りや、洗面器のうへと化粧台のうへとに懸つた姿見の鏡面から來る水々しい反射などが、如何にも爾やかな落着を與へた。

「いゝぢやないか。」

「好い！　どて〳〵した飾りがなくて、却つてひそりとした親しみがあるのね。」愛子はさう言つて、洗面器の上にある鏡の

前に端麗とした體を少し嬌態を作つて立つてゐた。この夜の彼女は井桁の飛模様のある、寧ろ黒に近いやうな煤んだ紫の羽織を着てゐた。去年のその頃着てゐた、燃えるやうな緋色の地に、白い絞りの模様の浮出した紋羽二重の長襦袢のかはりに、わざと赤と桃との淡色にぼかされた錦紗のを着てゐたが、さう言つた餘所行きの長襦袢を、惜しげもなく寢衣に着るのが、ベッドの情趣を樂しむ彼女の不斷の癖であつた。長襦袢に限らず總て晴着と不斷着とを區別するやうなことを彼女は嫌ひであつた。愛子は去年初めて此處へ來た頃から見ると、扮裝がづつと大人つぽくもなつてゐたが、或る意味では趣味が豐富にも派手にもなつてゐた。

「着物はもう入らない。それ處ぢやないんですもの、先生の愛の前にも私一生懸命になつて好いものを書かなくちやあ。ねえ、本當よ。」

さう言ひながら、やつぱり新らしい衣裳が小野の前は事後承諾で彼女自身働いた報酬で時々作られた。

「外延的にひろがりすぎると、藝術家の生活は破れがちなんだからね。それだけは氣をつけてくれね。」小野は時々氣をつかふのであつた。

「ようく解るわ。決してそんな事はしない。たゞ餘り慘めだと氣持が暗くなるから。」

「それも解るけれど……。」

小野は色々の場合に突當つて、純な愛子の深い氣持が次第に解つて來るのを感じた。未だに信じ切ることのできない彼の心持は、一面主觀的に言へば、古い藝術上の物の見方からでもあつたが、一面から言ふと、彼女の内面と外面とにある不可思議な魅惑力の美しさであつた。總て美しい人がもつ悲劇的な運命は、若しも彼女が眞の意味の生活に目覺めなかつたならば、その眩惑力があるためにこそ、何んな數奇な生涯を彼女に送らせるか知れないのであつた。それは彼女を心から信じうるほど、深く廣く愛の翅をひろげて、彼女を抱擁し切ることのできる男性が、さうさらには世の中にあり得ないか

らであつた。勿論それには附帶條件をも考慮に入れない譯には行かないにしても、そして其は打算なしには生きて行かれない現世の生活法則に餘儀なくされたものであるにしても、兎に角彼女のもつ多様で纖細な容貌の美しさと、妙に鋭く幽い心とから來る魅惑的な雰圍氣が、今迄の彼女を、餘り幸福にしてくれなかつた事は事實であつた。

何うかすると、小野も自分の立場へ退却しなければならないやうなはめに陷ることが屢々あつた。彼女を持切れないやうなことが度々あつた。しかし矢張り手放すことが出來なかつた。確信をもつて彼女を愛することのできなくなつたやうな場合、その疑惑が彼女の屢々口にする彼の利己的な淺果敢さから來てゐることに思ひ到りつゝも、尙且つ彼女の愛を素直には受け容れられないことが度々であつた。そして其の後から「矢張り己のものだ」と感じさせられながらも、本質的な愛は兎に角、惡戲(いたずら)な彼女の目が、不斷に多くの異性に向つて、蠱惑的な雰圍氣を放撒しつゝあるやうに思へてならなかつた。

「やつぱり己の愛子だつたんだな。」

「さうですとも。貴方ばかりが愛してゐるやうに考へるのが、貴方の利己主義だと言ふのよ。」

「己には自分自身の條件に自信がないからさ。」

「何うしてなんでせう。何かと言ふと別れる〳〵つて、こんなに生活氣分が交錯して來てゐるのに、貴方の惡い癖よ。」

こゝへ來る四五日前にも、ちよつと然うした事件が生じた。彼は苦しさの餘り家を出た。そして彼の其の家を出たことが又た彼女の心を暗くさせた。彼女は病院の歸りを、何うかすると十二時近くまで町をぶらついた。書くもの〳〵惱みもあつたので、ひそやかに仕事の氣分を醸さうための自己試煉でもあるらしかつたが、それがまた小野の頭に暗い影を投げずにはおかなかつた。

「どこで何をしてゐたのか、はつきり言つてごらん。」小野は彼女に乘しかゝるやうにして、笑談らしく詰つた。

「むさしの館へ入つてゐましたさ。歸りにコーヒの一杯も呑んでゐれば、すぐ十一時になつてしまふぢやないの。」愛子は

悪戯な目をして笑つてゐた。

ボーイが彼女の着替を箪笥へ仕舞つたり、寢衣をもつて來たりした。

「何か召食りますか。」

「さうね、私何か食べたい。」愛子が甘へるやうに言つた。

「食堂がある？」

「まだございますでせう。」

二人はやがて食堂へ案内された。去年來た時は、ちよつとも部屋を出なかつた。そして食事を運ばせてゐたので、二人が食堂へ入るのは今夜が初めてであつた。愛子は鏡の前で、ちよつと顏を直してから部屋を出た。

獨逸人と、アメリカ人と、男女四人が、彼方此方の食卓に向つてゐた。二人は中程の食卓に就いて、ひそ〳〵話しながら、肉叉を動かせてゐた。後で知つたのだが、タイピストである二人の米國婦人の視線が、時々愛子に注がれた。彼等は食後の喫煙を樂しみながら、別の食卓にゐる紳士と話を交へてゐた。

「西洋人つて皆な好い顏してゐるね。女はいけないが、男は。」

「さう。でも何だか動物的な感じね。」

「美しいとは思はない？」

「活動なんか見てゐると、そんな氣もするけれど、本物は何だか肉がぶく〳〵して厭ね。でも何の人も口元が好いのね。きりりとしてゐて。」

そこを出ると、愛子はサロンルームへと彼を誘つた。去年は部屋へ入る前に、暫らくそこで休んでゐた。紅い化粧煉瓦で飾られた暖爐に、赤々と石炭の燃えてゐる前に、若い一人の外人が、ちら〳〵する火光を打守りながら、愛子[illegible]げ

な視線を送つたことも、唯今のことのやうに思ひ浮べられた。

五六人の外人が暖爐に集まつてゐた。ダンスレコードをかけてゐる男もあつた。日本人が一人、にこ〳〵しながら、隅の方のデスクの前に腰かけながら、微笑ましげにレコードに耳傾けてゐた。

やがて西洋人の影も少くなつた頃、

「レコードかけてもいゝ。私唄が聞きたい！」さう言つて愛子が蓄音器の側へ寄つていつた。二人きりの部屋へ歸つたのは、十一時過ぎであつた。

三

仕事に取りかゝる前の焦燥に苛々しながらも、何にも出來ないやうな日が幾日となく續いた。愛子は大抵八九度もの熱が間歇的に出てゐるらしかつたが、全然けろりとしてゐる時もあつた。彼女は憂欝な部屋に飽きて來ると、「先生、二三枚レコードをかけても可いでせう」と言つて、荒い海老茶色のお召の寢衣のうへに、黒いシャルムーズの羽織を引かけながら、サロンルームの方へ出かけて行つた。北海道生活をした彼女に取つては、その部屋の赤煉瓦の暖爐が何となく親しいものに思はれたが、實はホテル生活にもそろ〳〵飽きが來てゐた。何處へ行つても彼女はさう一所に長くはゐられない質であつた。枝から枝へと身を交す小鳥のやうに、心が動いて行つた。

小野は高い卓子に向つて、その日の日課である一日分の仕事に熱中してゐたが、暫くでも愛子が傍を離れて行くと、直ぐ心が空洞になつた。彼はペンをもちながら何をかけてゐるかと思つて、レコードに耳を傾けた。小野たちの部屋はちやうど其のサロンルームに隣接してゐて、部屋の外は共通のサンルームになつてゐた。小唄の好きな彼女は、吉原藝者の「海晏寺」か何かをかけてゐるらしかつたが、暫くすると蓄音機の音も絶えて、朗らかに澄んだ彼女の話聲が耳につい

た。小野は漸とのことで仕事がすむと、ぶら〳〵サロンルームの方へ出て行つた。彼は何うかすると誰にも氣分を擾亂されずに創作に沒頭することのできる時間を欲したが、それは終日も〳〵仕事が手につかないほど、彼女と一つ部屋に閉籠つてゐた果ての、だらけた氣分の隙間に起る孤獨慾で、暫らくでも彼女を見失ふことは、矢張り寂しかつた。

二人は大抵十時頃にのそり〳〵と朝の食堂へ出て行つた。愛子は病人々々した顏をして、小野と直角に食卓に倚つたが、コンフレックスに少し匙をつけたかと思ふと「もう澤山！」と口を歪めて寂しげに匙を措くやうな事が多かつた。起きるのがひどく遲くなつて、食堂がお仕舞ひになつた時などは特別にサンルームの方へ運んでもらつた。カアテンを捲くとすが〳〵しい海風が流れ込んで、麗らかな日光が、喫茶臺や籐のクションを辷つて、牀の上にまで溢れた。

小野は其の前夜も其の又前夜も、今夜こそ本腰をすゑて仕事にかゝらうと思ひながら、愛子と他哩のない話に耽つてゐるうち、いつか時間がたつて、愛子がベッドに上つてから、椅子のうへに胡坐をかいて、原稿紙と睨めつくらを初める頃には、スチームの管も漸やう冷めがてに、何の部屋も寢靜まつたホテルのなかで、自分一人が取殘されたやうな寂しさに襲はれるのであつた。

「先生！」愛子が寢床のなかから黑瞳がちな目を開いて呼んだ。

「何に？」

「ちよつと來て。」

「だつて、今夜は大變なんだよ。」小野は自身に力づけるやうに言ふのであつたが、努力は長く續かなかつた

「もう遲いんだね。」

「さう。」

「己はすつかり自己がなくなつてしまつたやうだ。己は何にも出來やしない。愛子が居ればゐたで、居なければ居ないで

……。」彼は愛子の方へ顏をもつて行きながら、溜息をついた。

「さう、そんなに私が可愛い！」愛子は嫣然した。

小野は疲れた體を、暫らく廣い寢臺の端に横へた。

「だが何時までこんな事が續くかね。」

「またそんな事を考へる。惡い癖ね。貴方の死ぬまでよ。」

それから又話がつゞいて、小野は再び卓子に向ふ勇氣もなくなつてしまふのであつた。

しかし書けないで苛々してゐる小野を見ることが、又た彼女の氣分を荒ませた。

「お書きなさい、お書きなさい。今夜こそお書きなさい。」

外で日本食を食べて歸ると、愛子は突つくやうに言ふのであつた。

「私も今夜も書くわ。」愛子はさう言つて、紙のポートフオリヤと原稿紙やインキを枕頭へもつて行つて並べた。そこには小さい台のうへにスタンドが置いてあつた。

その宵に二人は訪ねて來た若い人達と一緒に、外へ食事をしに行つた。そこでは鷄の外に、愛子の好きな新らしい海鼠だとか、海老魚の鬼殼だとか、貝の酢のものだとか、新鮮な肴が豐富であつたので、その晩も割合氣持のいゝ其の二階の蕪村のかゝつてゐる小室で、小野は少しばかり酒を飮んだりした。

愛子は三四日つゞいて通つてゐる耳鼻科の醫者へ其の晩も、時刻を計つて鼻を洗ひに行つての歸りであつた。

「いや餘り强く洟汁をかむと、中耳炎になると言つた。今のところ其の心配はないけれど。」初診の時そんな事を言つてゐたが、初めのうちは長い頸に濕布もしてゐた。小さいをりに鼻の手術もした經驗があるので、醫者嫌ひな彼女も、内心警戒してゐた。

訪問客のなかには、小野の長子の多嘉夫もゐた。他の子供も同じであつたが、彼は父と愛子とに出られると、氣恥かしさうであつた。愛子も此處へ來る三四日前にも、多嘉夫や其の友人達と一緒に、外國船と見送りの光景とを見物かた〴〵彼等の友人の一人を横濱に見送つた。朝立つとき、下宿にゐた愛子は、小野が朝夙くから居なくなつてゐたので、女中の誤解から、前夜家を出たものとばかり思つて、出立際から氣分が濁つてゐた。小野が遙かに自分から遠いもの〻やうに思はれて、横濱へ行つても氣分が暗かつた。そして濱と東京とへ亙つて、支那料理やカフェやバラアも、方々三人ばかりで藝術談などに興じながら押し歩いて、夜おそく歸つて來た。

翌日も小野と彼女とは、別れ〴〵に外へ出た。そして其の晩も彼女は歸りが遲かつた。愛子は一面小野にも訴へがたい創作上の惱みをもつてゐたが、小野に信頼しきれないやうな氣惑ひも感じてゐた。同じやうな不安が小野にもあつた。

雞屋では話がはづんで、愛子も皆なも元氣づいてゐた。

「先生はちよい〳〵水ぎわの家へなんて行くんだからな。」愛子は何かの拍子にふと口走つた。

「餘り私がお荷物になつてお困りのやうなら、別れてもい〻のよ。」そんな事も言つてゐた。

「追分でも謳はない？」小野は愛子を唆つた。

「謳つてもい〻けれど、咽喉がわるくて。愛子さんもこんなに方々體がわるくちや悲觀してしまふ。けれどさう長生はしたくないと思ふの。四十婆さんになつても生きて行かなけあならないことを思ふと厭になつてしまふわ。精々三十五、それ以上は生きたくない。」

雞屋から歸つてから、皆なはどか〳〵と部屋へ入つた。そしてボーイに番茶や菓子を命じた。

「ちよつと隣りの部屋へ行きたい。皆なで行きませう。先生も附合つて。」愛子は誘つた。

「何だからよく西洋人がゐたやうだぜ。多勢行つて示威運動でもするやうでも悪いからな。」

「ううん、そんな事ないのよ。皆んな好い感じをもつてゐるのよ。さあ行きませう。」

「まあ、行つておいで。後から行くから。」

皆んなはサロンルームへと押し寄せて行つた。小野は横濱行きのこともあつたし、若い人達のなかに我張るのも氣恥しく思はれて、暫らく部屋に殘つてみたが、さうする事がまた老年の片意地のやうにも思はれて寂しかつた。彼はそろりと部屋を出て、喫煙室の前に立つと、ボーイが引戸を引いてくれた。

中には外人がうよ〳〵してゐた。赤い火の前にも、眞中の大きい圓卓子にも、それから少し離れた他の卓子やデスクにも。小野がそれらの外人の椅子の後ろを通つて、ストーブの左側の壁ぎわにあるクションと椅子とに凝つてゐる愛子と若い人達の傍へ寄つて行くと、誰かゞ席をあけて坐らせてくれたり、煙草にマチを擦つてくれたりした。小野はゆつたりした態度で、トランプを遊んでゐる圓卓子の連中や、ストウブの近くに椅子を取つて連りに話を交へてゐる紳士と伊太利系の面貌を具へた美しい婦人などを見廻はしながら、若い人がかけはじめた日本物のレコードに耳を假してゐた。づつと向ふの卓子で、何か飲料を取つてゐた職業婦人が二人、鉢の植木の隙間から、茶褐色の目を見張つて、じつと此方を見てゐるのに氣がついた時、小野はちよつと羞恥を感じたが、それよりも愛子の氣分が、横濱行きの其れの延長といつたやうなもののあるのが氣にかゝつた。

「成程好い顔をしてゐるね。」小野はストウブ際にゐる婦人のことを噂した。タイピストなどとちがつて、此の婦人には智識階級らしい溫雅な氣分が感ぜられると同時に、餘り白くない皮膚や鼻や目などが外國婦人の嫌ひな小野にも好い感じを與へた。

「さうでせう。だから私言つてるの。廊下なんかで逢つても、私に親しみの表情をするのよ。」

すると多嘉夫が、その婦人と話してゐる才槌頭の紳士へ顋をしやくつて、

「あれ學校の先生ですよ。」と教へた。

「さう。」愛子は受けたが、どこか氣持が硬かつた。

小野から言へば、ダブルベッドなぞあつて、紅い繻袢や帶や紐や派手な縕袍などの仕末された亂れ函が片隅の棚の上においてあつたり、部屋へ入ると化粧品の匂ひなどの鼻にしみる、どこか憂鬱な濕やかさをもつた部屋が、秘やかな二人の生活氣分を語つてゐるやうで、多嘉夫などにゐられることが、何かしら氣の差すことであつた。愛子の氣持も多分それに似たやうなものかも知れないのであつたが、しかし其の場合の彼はそこまで考へる餘裕がなかつた。彼にはどこまでも自然主義的な箇性欲念が粘りついてゐた。

小野は程なく椅子を離れて、獨り部屋へ歸つた

暫らくすると若い人達もぞろ〱歸つて來た。愛子の歸つたのは、それから少し間をおいてからであつた。

皆なが歸つてから、小野は力めて仕事に取りかゝらうとしたが、氣分がさつぱりしなかつた。彼はまた少しばかり横溢行きに拘泥をつけた。そして二人が打釋けるまでには、ちよつと時間がかゝつた。

四

十一時頃に漸と目をさました彼等は、食事をサンルームへ運ばせた。愛子はどこか餘熱のあるやうな顏であつたが、縫きものの前に急ぎの小ひさい仕事を控えてゐたので、コンフレックスやパンやを少しばかりに、コーヒを半分ばかり飲むと、クションに腰かけて、暖かい陽を背に浴びながら、熱心にペンを動かしてゐた。小野も彼女と向き合つてペンを執つた。

愛子は後半の十二三枚を、立どころに書きあげた。書きあがつた時の喜悦と幸福は、何時の場合にも極度に彼女の氣分

な態度を明るい無邪氣なものにしてしまふのであつた。

「先生ちよつと此處のところ聞いて。私ほんとうに能く書けたと思ふわ。」愛子はさう言つて、一種の妙な甘さをもつた感傷的な調子の底に、澄んだ張りのある聲で、會話のところを讀みはじめた。

「好いぢやないか。」

「私書けるわね。」愛子は甘えるやうに言つた。

「さうさ。會話の運びなんか、よく頭腦が利いてるぢやないか。」

小野は氣安めばかりで言つてるのではなかつた。彼は自分などの素氣も艶もない會話よりも愛子の方が餘程巧いと思はせられる事が多かつた。愛子の氣分や氣質を呑込んでゐるだけに、一層それが愛すべきものに思はれた。彼女の聲の旋律にかゝると、一層それが美妙に響くのであつた。字も好きであつた。

「愛子の聲は提琴の咽ぶやうな聲だね。」

「さう！それよりか小説は何う？」

「好いさ。」

「うゝん、本當のことを言つて。」

「ほんとに好いと思ふね。その材料を己も書かうとおもふが、書く必要はなくなつたやうだ。今に己の株を取つちまふだらう。いや、それ以上に己にないものが愛子にある！」

「うゝん噓よ。先生なんて三十年もの積み重ねがあるんですもの。知つてますよ。」愛子は言つたが、

「でも是なら能く書けたと言ふものね。」

「まあね。」

しかし愛子は後でがつかり疲れてしまつた。そして熱が出て來た。晩も何にも食べずに、へと／＼とベッドに横はつた。

「あゝ、何うしてから體が惡いんだらう。私死ぬかも知れないことよ。」

「さうかも知れないね。」

「もう好い加減こゝを引揚げませうか。」

「もう飽いた？」

「さうぢやないの。先生が何も書けないのに、お金がかゝつてお氣の毒だから。」

しかし愛子が飽いてゐることは、小野に解つてゐた。彼女は日本座敷の情調を懷しんでゐた。その方が氣分の纏まりがいいのであつた。

間もなく小野も一つ仕事を仕上げた。しかし未だ他の仕事が頭に引懸つてゐた。愛子もその頃有名であつた彼女の學校時代の同性愛を取扱つた不思議な長編小說の、次ぎの續きの纏まらないのに苛々してゐた。揭載の雜誌が、婦人文藝の雜誌として、權威のあるものだけに、一層思ひを惱ませられた。

或晩彼女は小野が或る娯樂雜誌に連載してゐる通俗物の續きに筆をつけようとして、取寄せた今月號のゲラ刷を見てゐると、愛子が傍から手を出した。

「見せて！」

「見なくても可いよ。」

「どうしてよ。」

「こんなもの恥かしいからさ。」
「あんたのやうな大家でも。」
「おれは何時でも恥かしい。自分で讀むさへね。」
「ほう！」
愛子はじつとグラ刷に讀み耽つてゐたが、やがて憂欝な表情で、
「私先生にお願ひが一つあるんですけれど、肯いてくれる。」
ひどく眞面目だつたので、小野は彼女の目を見詰めた。
「町子をF——さんへ内弟子に入れてから、私一度も行かないのね。委せきりにされるのをF——さんは大變悅んで下すつてゐるやうだけど、でも餘まり放抛つておくのも惡いでせう。」
「さうね。」
前にも愛子はF——と子供を一日ホテルへ招きたいと言つてゐたが、小野が否定した事があつた。
「それに寫眞をほしがつてゐましたから。」
愛子が子供と銀座で撮つた寫眞が、下宿からホテルへ三四日前屆けられてゐた。愛子はそれを見せ旁々子供の樣子を見たいと言ふのであつたが、それよりも明るい東京の町が、疾うに戀しくなつてゐた。
「こゝへ一軒家を借りたら何うかね。」小野はホテルへ來てから、一緖に外を散步したとき言つて見たのであつた。
「こゝなら相當空氣も好いし、そんなに不便でもなささうだ。」
「そして何うするの。」
「お互ひに往來するのさ。きあ僕が入浸りになるだらうがね。」

「それなら好いけれど、郊外は眞平御免だわ。」

愛子はいつでも郊外生活を否定した。一つは前の愛人との難澁な郊外生活の佗しさに懲り々々したところもあつたが、彼女の憧れが都會の町の明るい電燈やイルミネーションや、活動館や喫茶店や美容館や雜誌店にあることは、今更のことでもなかつた。

愛子は何うかしてホテルを脱け出さうと企んでゐたが、斷定的には切出しかねてゐた。それに彼女の子供に對する感情には、男のそれよりも淡泊(さつぱり)したものがあつた。普通女性の愛し方ではなかつた。子供の生涯を慮つた計畫的なものであると同時に、自分の藝術修業の生活とは判然切離されたものであつた。普通女性のやうな世話をするかはりに、當然父親の背負ふべき責任を果すためにも働かなければならなかつた。

「いけない？」

「いや、行つても可いよ。」

「今貴方の小説を見て、思ひ出したの。」

小野の小説は眞の父と養父との愛情を書いたものであつた。愛子が子供を思出したといふのも、勿論嘘ではなかつた。

「だが矢張こゝへ歸つておいで。」

「ええ、歸りますとも。」愛子は透さず應へた。

しかし翌日になると、彼女はけそりと其の事を忘れたやうに、隣室のサンルームで、御大喪の新聞記事なぞに讀み耽つてゐた。彼女は皇族の姻戚關係だとか、皇女方の生活などにも興味をもつてゐた。

小野が傍へ寄つて行つた。そこには誰もゐなかつた。

「K―さんも行列のなかへ入つたのよ。」

愛子は宮中に關係のあるK―博士から、時々其の邊の噂などを聞いてゐた。K―博士には痔の手術以來づつと世話になつて、無邪氣に甘へたり、駄々を捏ねたりしても厭な顏をされない程度にまで親しくなつてゐた。彼女はK―博士に恐皆信賴してゐた。そして病氣のことは一切委かせ切つてゐた。

その日も彼女は何も食べられなかつた。蜜柑の汁を吸ふきりであつた。蜜柑を吸ひだすと際限のない愛子であつたが、好んでポンカンを食べてゐる彼女に取つては、ホテルの凋びた蜜柑は、食慾を唆らなかつた。それに彼女は氣紛れな健啖家でもあつた。間食家でもあつた。夜更けには殊にさうであつた。規律づくめなホテル生活は、さうした彼女の氣分に取つては、ひどく窮屈であつた。

小野は仕事の捗取らないのに倦んじて、ベッドに横はつて、頭をかゝへてゐた。刺戟と感興の乏しいこの日も暮れてしまつたのであつた。

愛子は狹い籠の小鳥のやうに、しやならくした體をして、氣分の遣場もないやうに、部屋のなかをあちこち歩いてゐた。

勿論彼女はいつもの癖で、二つの姿見の前に、自分の顏や姿を、色々のポーズを取つて映してゐた。顏が美しく映ると燥ぐのであつたが、厭なところが出ると、氣分が暗くなつた。

「自己陶醉家だな。」

「さうぢやないわ。私自分の惡いところを能く知つてるわ。私ほど自分の醜いところに敏感なものはないのよ。だけど、私は私なりに好いところもあると思ふのよ。」さう言つて愛子は踊るやうな手つきをしながら、そこらを泳ぎまはりながら、

「小い時分鼻がぺしやんこなのを悲觀して、死んでしまつた方がいいなんて思つたもんだけれど、生きてゐて幸福だつたわ。先生にもこんなに愛されて。」

「僕も不思議だな。愛子がこんなに好きなのが。そしてかうやつて一緒にゐると、初めて訪ねて來たM——夫人の愛子の幻影が、いつも浮んで來る。」

「さう。そんなに美しかつて？」

「それに溫順しい奥さん風で……。あの夫人から今の愛子を考へることは出來ない。愛子は二重人格だ。」

「さうか知ら。」

「あの頃——さうだM——さんと別れてから、撮影所へ行つたね。」

「歸りに鮨屋へつれてつてもらつたでせう。迚も嬉しかつた。迚も光榮に思つたものよ。私が御飯を盛つてあげたり何かすると、恐縮です〳〵つて、先生が幾度も言つたわ。そしてサイダをついでくれたりして……。」

「あの時分許したらうか。」

「許した。」

「さうだかな。」小野は咽喉で擽り笑ひをした。

「しかし何うしてかう好きなんだらう。」

「私も。性が合つてゐるのよ。」

「頭の天邊から足の爪先きまで。」

「さう。」

「しかしM——さんが矢張り似合つたね。」

「あんなのは綺麗といふだけよ。普通あんなのが好い男なんだけれど、詰らないぢやないの。だけど、鼻や顔のところは、なか〳〵ノーブルな輪廓よ。希臘人のやうな……。」
「西洋人は何んな男でも、さう變なのはないね。」
「私ちつとも好いと思はれない。あんな綺麗さ嫌ひよ。獸のやうに太々しくて。」
小野はベッドをおりて、彼女を後ろから抱きあげた。そして部屋中を歩いた。それから愛子が小野を負つて歩いた。
洗面器に湯が一杯たゝへられた。
「どうするの。」
「髮でも洗つたら、せい〳〵するかと思ふのよ。長く髮を洗はないと、眩暈がしたり何かすることが能くあるの。」
「そんな處で。」
「高いお金を拂ふんだから、お湯でも不斷につかはなけあ。それあさうよ。」
湯が一杯になつたところで、愛子は釋いた髮を浸して、石鹸で使ひはじめた。
「御免なさいね。こんな處をお見せして。」
「そんな事も好きさ。」
「女の化粧してるところを、男には見せないものだと言ふわ。あんたはさうぢやないのね。だから何んな汚らしいところも、平氣で見せられるのよ。――こゝんとこへ少し石鹸つけて頂戴！」
小野は後ろの方へ石鹸をこすりつけた。
愛子は叮嚀に洗つてから、湯を取替へ〳〵して、石鹸を洗ひおとした。そしてガーゼ手拭で器用に濕氣を拭き取ると、輕く束ねあげて黄楊櫛を前に差した。

こうしてゐるうちに、熱と疲勞が襲つて來たので、寢衣に着かへてベッドに横はつた。小野も何だか倦んだやうな氣分になつた。

「しかし此頃は惰性でもつてるやうなものだね。去年こゝへ來たときから見ると。」小野も天井を眺めながら呟いた。

「それれで可いのよ。惰性で結構もつて行けるものよ。かうなつてしまへば、何うしたつて離れつこなしよ。」

「おれだつて放さない。しかし此の二三日少し變だな。憂欝に感じてゐるんだらう。」

「貴方も私も書けないから苛つくのよ。」

「ホテルの主人と大分懇意になつてゐるやうぢやないか。此の間も食堂へやつて來て、じつと傍にゐたね。」

「さうよ。何だかひどく私に叮嚀なのよ。私達の事を解つてくれてゐるのよ。」

「魅惑力のあるところは、好い意味での妖婦型といつたところもあるからな。それも美貌の罪だから仕方がないが、僕は又たさう云ふところがひどく好きなんでね。だが、餘り惹着けてくれるなよ。」

「ぢや私浮氣？」

「さうぢやない。愛子の心の据りは好く解つてゐるんだ。この頃それが能くわかつて來た。」

「今頃？だから貴方は駄目だといふのよ。何うして信じきられないんだらう、こんな私を！」

「女の美そのものが誘惑するよりか、誘惑され易い弱味をもつてゐるものだから。」

「ふうん！。私が誘惑される？普通の美や、普通の型の富やなんかに惹れるやうな、そんな女？、」

「だが人が好いからな。」

「ほゝ、私がそんな生娘か知らん。これでも散々苦しみぬいて來てますからね。」

それから小野の時々行つたことのある、待合の主婦の噂や、小野の亡妻の話が出たりした。何時かのやうに、「二十五年

も此の人をもつてゐて贅澤だ！」などとは言はなかつたが、好くも言はなかつた。

「貴方の奥さんの場合だけを語らないつて言つてる譯ぢやないのよ。一般の人妻といふものに就いて言つてゐるのよ。私の母だつてもさうよ。」

「それは解つてゐる。」

「それで母なんて可笑しいのよ。私に嫉妬めいたことを言ふのよ。それはね、母が長いあひだ辛抱して保つて來た貞淑な妻としての立場からよ。私がこんな風になつて、誰のものとも決まらないでせう。そして騒がれたりするのを、父の妻としての母から考へると、矢張妻といふものの大事な立場を侵されるやうな感じがされるんでせうね。それは私も解るのよ。」

「例へば？」

「私が自分でも知らないでゐて、人を惹付けるやうなことがあるんでせう、そんな事が妻のある方の場合なんて罪悪に思はれるのね。母にそれを言ひ出された時、私變な氣がしたわ。」

「だが危いからな。」

「厭わ。私からなんて離れたことは一遍だつてありませんわ。前からの生活の色々な事情があつたりして、みんな私を持ち切れなくなつてしまふのよ。」

「又た新しい戀愛が發生するのも面白いな。」

「ふん、新しい戀愛なんて、考へるだけでも怖いことだわ、藝術と結びつかない戀愛なんて、私に取つて何の價値があるんでせう。だから何んなことがつても、別れるなんてことだけは考へないでね。」

「そんな積りで言つてるんぢやない。」

「それは判つてるけど。」

その夜もいつか更けわたつて來た。サンルームの電燈もいつか消されて、何の部屋も森としてゐた。

「遲いんだね、もう眠らう。」

「だけど、私思ふわ、勉强しなけあ可けないつて。私きつと好いものを書けるやうになるわ。小說もだけれど、ドラマをね。」

それから前に書いた二つの戲曲や、書きたいものゝ腹案などについて愛子は黑い目を輝かせながら、熱情的に話した。

暫くしてから、「先生」と呼びかけて、

「多嘉夫さんは多嘉夫さんで、いづれお父さんと異つた道を步む好い藝術家になるでせうから、先生の衣鉢は私に繼がして！」

「衣鉢も好いが、愛子には愛子の好いところがあるんだから、それを伸ばして行かなくちやあ。私だけの型へはまつちや矢張駄目なんだからね。」

「それあさうね。藝術の本質のこととなれば。でも私男では、それは違つたものにしろ多嘉夫さんね。女では私になりたいわ。私その積りで伸びて行くわ。私こんな事を考へるのよ、先生！」と愛子は遽かに詰つた聲になつて、

「ねえ、悲しいけど、たへとば先生が私より先にお亡くなりになるとするでせう。さうした時も思つてゐるのに。ねえ先生」と、彼女はまた呼びかけた。

「私先生のお墓だけは。一つ別のものにしたいのよ。奥さんと埋けられるのは厭！だつて是は何も奥さんから引離したいといふ事ばかりぢやないのよ。先生は藝術家よ、一家族のものであるよりも、皆んなのものなんですもの。奥さんは唯、女性の中から撰ばれないで貴方のお仕事やお心持の伴侶になつた人ぢやないんですものね。偶然に奥さんになつて、貴方の子供さんを産んだ人よ。本當は廻り合つた異性は私よ。私ね。」

そして彼女はお金をためて、彼のために大理石の墓を刻みたいといふのであつた。

小野は皮肉も言へなかつた。

六

或日愛子はひどく惡かつた。十時頃にちよつと起きて、食堂へ出ようとしたが、起き出す力もなかつた。

「困つたね。こゝで甚く惡くなるやうだと。」

小野は嵐にめげた小鳥のやうに、枕に顔を埋めて、悲しげな目をしてゐる彼女を見詰めるのも遣瀨がなかつた。

「何にも食べられない。」

「何にも。」

サンルームへ出てみると、窓の外には二日ほど前に降つた薄雪が花床や丘の隈などに未だ殘つてゐて、絹から漉されたやうな日光に、大氣が蒼く靉靆立つてゐた。

「少し開けて!」愛子が聲かけた。

小野は一枚硝子戶を繰りあけた。冷たい風が颯と頰に當つた。小野は久しくやつたことのない深呼吸を試みた。

隣りのサロンルームの、小野の部屋の廊緣とも共通の廣い廊緣の日南へ出て、今日は日曜だと見えて、鳥の囀るやうな外人が椅子をもち出して圍つてゐた。トランプをやつてゐる人々もあつた。編みものをしてゐる婦人もあつた。小野は異鄕へ來て働いてゐる彼等の生活の單調さを思つた。そんなところへは餘り顔を出さなかつたけれど、震災前、ホテル創立の時から、づつと此處にゐる獨逸人で、語學の教師をしてゐる人もあつた。彼は毛が少し白くなりかけてゐたが、大抵三度々々こゝで食事をしてゐた。そして獨身であつた。

小野は獨りで朝の食堂へ出て行つたが、彼も餘り食慾はなかつた。彼はボーイと談話を交へながら、忙しげに匙をコンフレツキスにつけてゐた。今のところ、家庭もホテルも、彼に取つては同じやうなものであつたが、家を出がけに「お父さん何處へ行くの」と玄關口へ出て來た末の女の子のことなどが、何うかすると思ひ出された。彼は食物や着物のことなど考へてみようとも思はなかつた。彼は段々憂き世放れがして來るやうに思へたが、矢張り超越しきれない多くのものがあつた。彼は自動車に乘つてゐる時が、一番氣持の好い時であつた。

部屋へ歸つてくると、その日の原稿を取りに來てくれるK――青年が來てゐた。

「どうも愛子が惡いんでね。」

「困りますね。」

「ほゞ一定してる熱の出工合は、たしかに感冒だと思ふんだけれど……。この邊に好い醫者はゐないか知ら。」

「居ます。博士もゐます。お呼びになりますか。」

「呼んぢや何う？」小野は愛子を振返つたが、愛子は「いや……」と言つたきり目を瞑つた。

直きに午後になつた。K――青年も用事を達してから歸へて行つた。

「醫者を一人呼ばうぢやないか。段々惡くなるやうだと困るからね。」小野はすかすやうに言つた。

「こゝのお醫者なら厭(いや)！」

「ぢや何處の？」

「××院へ電話で聞いて見てからなら……K――さんによ。先生からかけて！」

「さう。」

小野は入りつけない電話室へ入つて行つて、病院へかけた。そして外科のK――博士へ出てもらふやうに頼んだ。

博士は直きに出てくれた。

「愛子が長らくお世話になりまして。」小野はそんな挨拶を前置きに、一と通り病状を話した。

「今日はまた甚く苦しみますので、お醫者を呼ばうかと思ふんですが……。」

「困りますね。」博士は當惑した。

「痔の方からの熱でもないでせうが、矢張り胸が惡いんでせうか。」

「いや、その方は大丈夫だと思ひます。痔の方も、もう一寸のところで、今一度膿の少しばかり摂取る必要がありますけれど、何うしてもお遣りになりません。しかし其のための熱ではないでせう。」

「何しろひどく神經質だもんですから……。」

「若しそちらで診ておもらひになるのでしたら、私の知つてゐる人で、W――博士なら確かですが……。」

「さうでせうか。」

暫らく博士は思案してゐるらしかつた。

「夕方にでも私が行きませう。」

「さうですか。愛子もひどく貴方に信頼してるやうですから、恐縮ですが、さうして戴ければ……。」

小野は悦んで部屋へ復つて來た。

「K―さんが來てくれるさうだ。」

愛子はそれが當然豫期されたことであるやうに、「さう!」と目で頷いてゐた。

彼女はひどく胸に壓迫を感じてゐた。何うかすると今にも死んでゝもしまいさうに苦しんだ。

「餘程好意をもつてゐるらしいね。」

「さうよ、好意よ。」

高貴なあたりでも信任の厚い博士が、ちよつと電話で相談しただけで、新婚に自分から遠くへ來てくれることは、愛子に取つては頬笑ましい滿足であつた

愛子はしばらく博士の噂をしてゐた。人格者であること、內科にも優れてゐること、質素であること、物質に物堅いことなど。

「お勤めも辛いけれど、止めれば開業でもしなければならないからつて言つてゐたわ。まあ醫者としてはちよつと偉い人らしいのね。」

小野は全然無關心でも聞いてゐられなかつた。

「お醫者といふものは、實に單純で好いものだなあ。」

愛子はいつかそんな事を口にしてゐたが、單純なために彼等自身が藝術家などに比べて幸福だと云ふ意味にも取れたし、生活或は戀愛の相手として安易だといふ意味にも取れた。そしてそれがちよつと小野の頭に刺さつてゐた。

小野は身のまはりを片着けたりしたが、愛子は好意で來てくれるのだから、一緒に食堂へ出て行くくらゐのことはしたいやうに言つてゐた。

「あの人達も藝術家の雰圍氣に觸れてみたいのよ。だから、若し好かつたら一緒に晩餐を食べるのも惡くはないと思ふの。」

「これも可からう。」小野もそれを望んだが、これには此處の食事は何うかとも思つた。

夕方小野は受附のところで、ウェストミンスタアを買ひに出てゐると、そこへ入口のドアを押して、一人の嚴重造りな紳士が入つて來た。ちよつと莊重に瞬く目がふと振りかへる小野を見すえた。小野が手術に立合つたとき見た博士とは少し違つたやうな感じであつたが、直きに判つた。博士が大きな軀を、少し前へ屈むやうにして、チミッドな調子で何か

ひかけようとするので、
「K――先生ですね。何うも遠方のところ恐縮です。」
小野はさう言つて博士を部屋へ導くと、愛子にも其の事を告げて、安樂椅子をすゝめた。博士はぎごちなく椅子にかけた。そして莨を吸ひながら、心配さうな表情で容態を聽きはじめた。
「熱をお計りになつてゐますか知ら。」
小野はよくは知らなかつたが、七度ばかりあるやうに思つてゐたので、其のとほり告げた。
後ろ向きに寢てゐた愛子が、そつと上身を捻ぢて此方へ顔を向けた。
「あら、あんな出鱈目を言ふ。」
愛子が笑つた目つきをしてゐるので、小野もちらと其の顔を見て、
「さう。僕は知らないもの。熱ぐらゐは自分でちやんと計つて、覺えておくが可いんだ。」
小野はちよつと不機嫌になつて笑ひ返すやうに言つた。
すると愛子も少し間をおいてから、例の頭腦の好さと落着とを示して、
「K――先生」と親しげに呼びかけて、
「あのう、熱は八度から九度もございますのよ。それに何にも食べれませんの。」
「食慾のないのは可けませんね。一つ拜見しまして。」博士はさう言つて、半分ばかり飲んだ紅茶をそこにおいて、ベッドの傍へ寄つた。小野も反對の側から近よつて、博士が脈搏を取つてから、伊達卷や細紐を解くのに手傳つた。博士は聽診器を湯で暖めたりして、腫れものにでも觸るやうに、敏感で駄々ッ兒な愛らしい患者の胸部や腹部を診察した。
やがて博士は創を診た。

「レゾールはおありでせうか。」博士は患者にとも小野にともなく訊いた。

ちやうど棚の上にレゾールや受水盤があつた。博士はレゾールの瓶を取りあげて振つて見てゐた。

「これは五十倍ですね。」

すると愛子は神經質な聲で、「K――先生！」と呼びかけた。

「いつもちつと薄くしますのよ。私田舍で、瓶の底に殘つてゐたレゾールを、看護婦の不注意で其のまゝ使つたもんですから、夜通し創が痛んで、迚も困つたことがありましたわ。」

「大丈夫です。」博士は頰に擽たい笑を押し殺すやうにして、小野と二人で、洗面器の湯で、受水盤に取つたレゾールを更に薄めた。

「さあ。ピンセットがなかつたですかね。」

「ピンぢや駄目ですか。」小野は愛子の鐵ピンを一つ差出した。

「可いかも知れませんね。」博士はそのヘーヤピンをレゾールに浸しながら、ベッドの端において、診察に取りかゝらうとした。

「どうもピンぢや……？」博士は困つてゐた。

小野は部屋を出て、ボーイに若しピンセットがあるなら、貸してくれないかと頼んでみた。大きなピンセットがちやうど受附のところにあつたので、ボーイが早速持つて來てくれた。

博士は局部を照すために、小野にスタンドを持つてゐるやうにと計つた。

「二人で見るの厭！」愛子は少しでも痛いことをされる不安な豫感に戰きながら、振返つた。

毛のもじや〳〵した博士の大きな手が、蒼白い愛子の肌の上にピンセットを動かしてゐるかと看ると、疵口へ詰めてあ

つた脱脂綿の一と捻りがそつと取りのけられて、博士の指が、赤黝い色に皺をもつてゐる創迹の肉を、押したり揉んだりしてゐた。

「こゝ痛いですか。痛くない。」博士は幾度も押して見ては訊いたが、痛みはなささうであつた。

「膿も出ませんな。すつかり乾いてゐますな」博士は息詰まるやうな微聲で言つて、尚入念に捻りまはしてゐたが、

「創はすつかり癒つたやうですな。この間診たときのやうな穴は、もうありませんな。」博士も意外の様に言ふのであつた

「すつかり好いんですか。」

「どうも癒つたやうですな。」

「それさへ癒れば……。」

博士は創迹の手當てをして、軟かいホーゼや着物をそつと絡はらせて、毛布をかけた。

二人はまた椅子に差向ひにかけて、煙草に火をつけた。

一年ごし悩まされた創が全く癒つたときいて、愛子は遙かに氣分が晴々して來たが、それはむしろ當然だといつた風に、わざと默つてゐた。

「先生！」愛子はしばらくすると聲かけた。

「K——先生、私の從妹はこんな風で、チブスで死んでしまひましたよ。」

女學校時代に、一年生であつた愛子と五年生であつた學校切つての美貌の女との、熱烈な同性愛のなかを割いた彼女の從妹が、後でその事を苦に病んで、極度の熱に浮かされながら、譫言にもそれを忘れることの出來なかつた悲慘な死樣を、愛子は今でもまざ〳〵思ひ浮べることが出來た。

愛子は今の自分の執拗な熱をチブスではないかと思つて、博士に警告したのであつた。

「食物が少しこぢれたのです。どこも大して悪くはありません。たゞ物が食べられないと、衰弱しますからね。これが恐いのです。」

そして博士は名刺を一枚取出して、處方を書いた。

「病院へ取りにおいでになつても、この邊の藥局でも孰でも構ひませんが……。」さう言つて名刺を小野に渡した

「胸をひどく苦しがりますが……。」

博士は鈍いなりに何處か強い輝きをもつた強い目をして、愛子から小野へ移した。

「やつぱり女學生時代の肋膜が　いくらか痕迹を殘してゐますから、幾日も熱がさめないと、いくらか起つて來るかも知れませんが、それはさして心配はありません。絕對にないとは言へませんけれど。たゞ何にも食べないでゐると……何にも御腹にありませんからね。」

「それでも鮨を少し……それから蜜柑は盛んに食べるやうですが。」

「事によると姙娠ぢやないかと思ひますが……。」博士はさう言つて、小野を見詰めてゐた。

「そんな事は絕對にないと思ふが……。」小野は愛子を振返つた。

愛子は此方むきに、少し上身をおこして、細い顎を白い兩手に支へてゐた。深い瞳が黑々と美しく輝いて、髮が額から頬に亂れかゝつてゐた。ゑびと黑との矢絣の褞袍の下から、桃色の長襦袢が　二の腕あたりにたよ〳〵に絡はりついて、毛布にくるまつた胴から腰のあたりが、人魚のやうに、輭やかに橫はつてゐた。

「K――先生！」彼女はまた呼びかけた。

「先生のお名が新聞に出ておりましたわ。」

博士は相變らず銅像のやうな表情をしてゐたが、御大喪の噂が、靜かに話された。

博士はけそりとした。

「Ｉ――博士はシャツやチョッキや十一枚も襲ねて、懐爐を五つも入れて、身動きもならない位でした。」博士の顏には微かな微笑が浮んだ。

「懐爐を十も入れて來た人があつたさうです。」

その邊の噂さがしばらく續いた。そして其から又た愛子の體の事に移つて行つた。

「先生！」彼女はまた呼びかけて、

「私ここへ來て、短篇を一つ書きましたのよ。その疲れもございますの。熱があつても何でも、小說が出來あがるときの樂しさつたらございませんのよ。私が書くときは、內の先生が始終傍についてゐて、字なんか入れてくれるんですの。」愛子は悧らしげに言ふのであつた。

小野は擽つたく思つた。さう言つた愛子の頭腦の好さも好きであつたが、餘り擴げられるのも困ると思つた。

「それあそんな事もあるけれど……。」小野は苦笑してゐた。

博士は一度立ちかけたが、ステーションまでの俥の來るあひだ、再び腰をすゑて話してゐた。

博士は程なく歸つた。ちやうど入れちがひにＫ――君が用達しにやつて來てくれた。藥がすぐ調へられた。

その晩愛子はけろりと熱がさめてしまつた。

「よかつたわ、あんなに先生の御厄介になつた創が癒つて！」

愛子は鏡の前で顏を直してゐた。

「わたし見つともなかつた。」

「何でもいゝ。體さへよくなれば。」

「何だか白粉がのらなくなつたわ。」

「さう。肌が變だよ。」

「本當よ。べとりとしなくなつたわ。水が惡いからよ。私郊外は厭。早く歸りませうよ。」愛子は遽かに氣にしだした

その晩は愛子はよく眠つた。小野は仕事に熱中した。

× × × × × ×

× × × × ×

翌朝は好い天氣であつた。二人は暫らくぶりで外氣に當りたくなつた。

木の根方などに、汚れた雪がまだいくらか殘つてゐたけれど、どこか春らしい氣分が、木々の梢や風のそよめきにも、仄かに感ぜられるのであつた。

雪國に育つた二人は、雪解頃の北の國の自然を懷かしく思ひ出しながら、霜釋けのしたホテルの後ろの丘を登つて行つた。



燈下

久保田万太郎

□

權七。　左官

おみね。　權七の女房

太吉。　同小供

市藏。　左官

使の男。

□

東京。（淺草今戸附近）

□

現代。（大正八九年ごろ）

□

四月のはじめ。夜八時すぎ。

太吉（十一二）一人、膳のまへに、時はづれのおそい夕飯をたべてゐる。――おみね（四十二三）長火鉢のまへに、ほどきものを

しながらその給仕をしてゐる。

長き間。

……戸外はうす曇つてゐる。

太吉。お茶……（茶碗を出す）

おみね。（顔を上げて）もうおしまひ……？

太吉。…………………（うなづく）

おみね。まだ、お前、二つだよ。

太吉。…………………（うなづく）

おみね。どうしたの？――喰べられないの？

太吉。…………（うなづく。――やゝさびしく……）

おみね。可笑しいぢやアないか？――晝間つから、今日は、何にも喰べてゐないんぢやアないか？

太吉。…………

おみね。だめだよ、お前。――いまつから、そんな。――たんと喰べさせたいと思ふから、おつ母さん、今夜でもお前の好きな筍をさうやつて煮といて上げたんぢやアないか……

太吉。…………

おみね。もう一つお上り。――ね、もう一つ……

太吉。…………

おみね。かるくつけて上げよう。――ね、さうしよう。――それならいゝだらう？――喰べるだらう？

太吉。うゝん……（うべなはない）

おみね。嫌かい？

太吉。…………（うなづく）

おみね。こまるねえ、ほんたうに……（ふと寂しくその横顔をみる。）――どうしてさうなの、このごろ？――どこか悪いんぢやアないか？

太吉。…………（かぶりをふる）

おみね。わるかつたら悪いといはなくつちやアいけないよ。――えゝ……？

太吉。…………………（うなづく）

おみね。（鐵瓶をとつて急須にさす。──茶碗に茶をつぐ）あいよ……（わたす）

太吉。………………（うけとる。──つゝましくそれを飲む）

間。

……おもての格子あく。

外の聲。（しづかに）御免……

おみね。（炭をつぎながら）はい……

外の聲。……おいでゞございますか？

おみね。何誰？

外の聲。小柴でございます。

おみね。小柴……？──あゝ、市藏さん……

外の聲。へえ……

おみね。まア……（火箸を灰にさす。──炭斗を膝から下ろして）さア。──さア、おはいり……

外の聲。へえ、有難うございます……

おみね、立つ。——太吉、いそいでおみねの顔をみる。

おみね。いゝよ、さうしといて……

おみね、よきところに座蒲團をもつて來る。——市藏、障子をあけて入つて來る。

おみね。さア。——さア、此方(こつち)へ……
市藏。へえ。——へえ、有難うございます。——(膳の出てゐるのをみて)あゝ、これは、御飯中(ごはんちゆう)で……
おみね。いゝえ、構はないんです。——これは、いま、子供が……
市藏。(遠慮ぶかく)しかし……
おみね。いゝえ、ほんたうに。——どうぞ……
市藏。さうでございますか？——では、ずかずかと。——御免下さいまし……
おみね。さア、ずつと……

市藏、座敷にとほる。——おみね、膳を片よせたりほどきもの〻始末(しまつ)をしたりする……

市藏。(あたりのさまをみて)小父さんは、今晩……？(心やすだての感じに)
おみね。えゝ、一寸いま……

市藏。お出かけです？

おみね。先月までは、まだ、寝たり起きたり。——どちらかといへば、まだ、床の上にゐるはうが多かつたんでございますけど、今月になりましたら、めつきりもう元氣が出て、床が敷いてあるとくさ〲していけない、いいから上げてしまつてくれ。——さういつて、始終、このごろはもう起きてをります。——一日隔きに、お醫者へも、ぶら〲自分で歩いてまゐつてをります……

市藏。さうでございますつてね。——いえ、それは、この間、途中で六さんにお目にかゝりましてね……

おみね。あゝ、そんなやうな。——さういつてをりました、六も……（急須に湯をさす）

市藏。で、六さんに、いろ〲お話をうかがひました。——もう大丈夫でございます。すつかり以前に返りました。——一人でもう外へ出られます。——六さん、喜んでさういつてゞ……

おみね。えゝ。——でも、いゝえ、すぐもう戻ります。——近所まで一寸出ましたんですから……

このうち、おみね、煙草盆に火をとつて市藏のまへに置く。

市藏。（改めて）小母さん、御無沙汰をいたしました。（叮嚀なうちに親身な感じをこめる）

おみね。いゝえ、此方こそ。——たび〲お見舞下すつたのに、まだ、そのお禮にもうかゞひませんで……

市藏。いゝえ、飛んだ。——でも、だん〲その後、およろしい方で結構でございます。

おみね。有難うございます。——おかげさまで、まア。——矢つ張陽氣がよくなりましたら……

市藏。………………（うなづく）

おみね。いゝえ、それが、もう大丈夫だから外へ出る、いつまでうちに引つ込んでゐたら切がない。――自分からさういつて無理に出はじめたので、そんな輕擧をしたらと、まはりでみんな留めましたが聞きません。――自分の體は自分が一番よく知つてゐる。――そんなことをいつて、あなた……（わらふ）體は直つても强情はなほりません……（茶をついで出す）

市藏。あゝ、これは。――どうぞ、もう……

太吉、つと立つて來ておみねに何かいふ。

おみね。何だねえ、お前。――小柴の兄さんにまだ御挨拶もしないで……

太吉、ぱつたりそこへ手をついて頭を下げる。

市藏。（あいそよく）へえ、今晩は。――（おみねに）いつも、しかし、太アちやんは音無しくつて……

おみね。いま、夜學の先生から歸つたところで……。（……太吉から眼を離さないでいふ）

市藏。あゝ、それは……

おみね。夕方、お夕飯になるのが待ち切れず、頂かずにまゐつちやア歸つて來て。――おかげでいつまでもお膳が片づきませんで……

太吉。……………（何かさゝやく）

おみね。え？――えゝ？――あゝ。――あるだらう、そこに？

太吉。うゝん……

おみね。そんなことはないだらう？――先刻みたよ、わたし。――昨夜みてゐたあの本だらう。

太吉。……………（うなづく）

おみね。よくみて御覧。――ないことはないから。――箪笥のうへをみて御覧……

　　太吉、おみねのそばを離れる。――さがす……

おみね。ないかい？――あつたらう……？（太吉おみねのそばを離れる。――さがす）

太吉。……………（うなづく）

おみね。それ御覧……

　　太吉、さがしたそのお伽噺の本をもつて、そのまゝ消えるやうに奥へ入る。――市藏、おみね、ともにみ送るとなしみおくる……

市藏。（ふと）どうかなさいましたか？

おみね。えゝ？

市藏。いゝえ、太アちやん。――どこかいつもと？――どこかいつもの音無しいのと……？

おみね。（さびしく）えゝ……

市藏。何かかう元氣のないやうな。――どこかお惡くつても……？
おみね。いゝえ、どこが惡いといふ風もないんですけど、何ですか、このごろ。――だん〳〵このごろ因循してまゐつて。――顏いろでもちツとも冴々してくれないんでございますの。（……歎息するやうに）
市藏。それは、しかし……
おみね。平生でも口かずのすくない子がよけい少くなりましたのに、この四五日、食までまた細くなりました。――べつに間のものもいたゞかないのに御飯を頂きません。――で、學校と夜學の先生へ行くほかは外へもまるで出ず。――始終、あゝ、奥に引つ込んで本ばかりみてをります。――どういたしたのか得體が分りません……（あぐねたやうにわらふ）
市藏。矢つ張、小父さんの。――とも〴〵小父さんのことを心配なすつた氣疲れ。――快くなつたので急に安心した。――そんなやうな、まア……？
おみね。それは、いゝえ、わたくしより誰より心配したのはあの子で。――一トころ惡いさかりなんぞ、それこそ、ほんたうに、側にみてゐてもいぢらしいくらゐ夢中。――平生、矢つ張、お父つあん子といはれるだけある。――近所の方なんぞでもみなさんさういつて下すつたんで……
市藏。それぢやア尚更……
おみね。（うなづくやうに）ですから、いゝえ。――大きにそれはさうかも。――さうかも知れません
　　　　間。
市藏。（しみ〴〵）しかしさうやつて。――太アちやんまでさうやつて心配なすつたんですから。――御丹精です。――皆

さんのみんな御丹精です。——快くおなりになつたのに不思議はありません。
おみね。（同じくしみ〴〵）一時は、いゝえ、眞實にどうなるかと思ひました。——いまだからお話出來ますけど、とても
これは快くならない。——快くなつたにしても、これは、とても以前の體にはならない。——一生もうすたりものだ。
——さう思つて、わたくし、自分にもう仕方がないと斷念めました。（窃と眼を拭く）
市藏。いゑ、御尤もで。——われ〳〵にしても、蔭ながら、飛んだことになつた。——いま、こゝで、もしものことでも
あつたらまづさきに組合のこつた。——どうしたつて無事ぢやアすまない。——折角、去年、あゝやつた小父さんが、
あれだけ苦心して纏めたことが水の泡になる。——われ〳〵、すこしでもあのとき、お手傳ひしてゐるだけ吐胸をつき
ました。
おみね。はじめにあのおたづね下すつたのは、あれは。——たしかあれは一月の……？
市藏。二十一日。——ちやうど初大師の日で。——實は、うちの奴ら二三人で、鋼の奴が今年前厄だから西新井へ連れて
行つてやらう——さういつて云かけようとしたところへ歩きの新公が來て、實は、今戸の親方が、四五日まへから急に
これ〳〵。——不意だから驚きました。——何としても、その少しまへ、初寄合でお目にかゝつたときには何のことも
まだなかつたんですから。——が、すぐにそれから……
おみね。いゝえ、お宅へだけでも早くお知らせしなければ。——さうしなければいけないと思つたんですけれど。——さ
うは思つても、さア、何といつてお知らせしたらいゝか？——外の疾病と違ひます。——眞逆、急に、昨夜氣がへんに
なりました、とも……
市藏。それは、もう……
おみね。……ほんたうに。——ほんたうに太吉と二人で途方にくれました。——たゞもう泪ばかりさきに立つて何をする

しがく、もつきません。——でも、六がよくしてくれると、御近所の方がみなさん御親切にいろ〳〵いつて下さるので、どうにか立つ瀬もつきました。——しツかりしなくつちやアいけない、お前がそんなことでどうする？——いくら自分で自分を叱つても。——叱つたそのときは、さうだ、自分がこれぢやア太吉が可哀想だ。——さう思つて、決してもう泣きますまい。——このさきどんなことがあつても太吉のために飽くまで平氣でゐよう。——ちやんとさうお肚を決めても、そばへ行つて病人にこつちの顏が分らなかつたり、わけもなくいきり立つて病人が呶鳴り散したり。——い丶え、呶鳴つてくれるのはまだい丶んで、床の上に、だまつてぼんやり、心細さうな顏をしてぢツと下を向いてゐる。——そんなとこをみると、どうして、まア、こんな因果な。——い丶え、さうなるともう矢も楯もなく胸が一ぱいになります。——今度といふ今度はじめて自分のいくぢのないが分りました。（衛とまた眼をふく。——寂しくわらふ）

市藏。不意ですから、い丶え、御無理はありません。——これがヂリ〳〵とだん〳〵わる〳〵なつたとでもいふたら、また。——さうでたいんですから……

おみね。いま思ひますと い丶え、去年の夏あたりから幾らかその氣があつた……やうな氣がいたします。——矢つ張、蔭で、ヂリ〳〵わるくなつてをつたか知れません。——それといふのが、その時分から、大へんお酒がわるくなりました。——醉ふとすぐつまらないことに川くじらを立てました。——お氣がおつきなりませんでしたか？

市藏。さア、さう被仰られると……（回想するやうに）

おみね。それにはめツきり御酒弱くなりました。

市藏。あ丶、それは。——それはたしかにありました。——もう飲けねえ、もう俺は飲めねえ。——ぢきにさういひ出しました。——何です 小父さん、そんないくぢのないことを さういつてみんなが笑ふと、莫迦アいへ 酒なんてものはがぶ〳〵飲むからい丶つてものぢやねえ。——ホドだ。——ホドが肝心たんだ。——これまでそんなことをいはなか

つた小父さんが。――小父さんのいひさうもない臺詞をいつかいふやうになりました。

おみね。矢つ張、それは　外へ出ると自分に氣をつけたとみえます。――一つには、しかし、度を外すと苦しくなる。――

――どうもそんなやうに。――そんなやうな風もみえました。――飲みたくつても體のはうでいふことをきかない。――

――つまりだん〳〵さうなつてまゐつたんだと思ひます。

市藏。（つく〴〵といつた感じに）しかし怖いもんですなア……（半ば自分にいふやうに）

おみね。（うなづくやうに）全く、それは。――はじめに疾病の出たときのことを思ふといまでも體がふるへます。――いつかもこれはお話したと思ひますけど、いきなり太吉をつかまへて、何だ、手めえなんか。――手めえなんかどだい親なしつ子ぢやアねえか……（奥へこなし）

市藏。いゝえ。それは。――それは始めてうかゞひます。――そんなことを、小父さん……？

おみね。まだ、それ、お話し……？

市藏。いゝえ、まだ――。まだですが。――平生、けど、あんなにも伏せて置くことを……？

おみね。いゝえ、ですから。――平生とまるでうらはらな……。

市藏。で？

おみね。……いまゝでにしてもらつたのを誰のおかげと思ふんだ？――みんな俺のなさけぢやアねえか。――あのときもし俺が引取らなかつたら、手めえいまごろ、香具師の手にわたるか乞食でもしてゐなくつちやアならなかつたんだぞ。――その恩を忘れやアがつて。――さ、もう料簡がならねえ。――出て行け。――片時もゝう置くことは出來ねえからさつさと出て行け。――大したもう權幕……

市藏。…………………

おみね。ちやうどお銚子の切れ目で臺所へ立つたところ。――何事がはじまつたかと思ひました。――逆疾病とは知りませんから一生懸命留めました。――留めたつて聞きません。――留めれば留めるほど嵩にかかります……

市藏。…………

おみね。すぐそのまへまで機嫌よく。――いつものやうに機嫌よく太吉にからかひながらいたゞいてゐたゞけ、ほんたうに……

市藏。で、太ァちやんは……

おみね。太吉は何にも知りません。――何をさういはれるのかそれさへ分りません。――たゞもうおろ／＼して……

市藏。（いとほしむ感じに）ビックリなすつたでせう、しかし。――急にそんな夢にも思はない。――默つてここのうちの倅と思つてたに違ひないのを……

おみね。けど、いくら氣がさうなつたからつて、平生あれほどにしてゐたのを。――あれほど大切にかけてゐたのを自分からさうやつて。――自分からむざ／＼さうやつて……

市藏。…………

おみね。決していふな、口が腐つてもいふな。――もし、太吉に、ちツとでもそんな素性を悟らせるやうな眞似をしたらたゞは置かねえ。――もらつた子供だつて、俺には、實子より可哀いゝんだ。――へんな知慧をつけて根性を僻ませるやうなことをしたらほんたうに承知しないから。――始終口ぐせのやうにさういつてゐたのを、さういつてゐたその當人が自分からさう……

市藏。…………

おみね。人の心もちつてそんなにも脆いものかと思つたら。――さう思ひましたらつく／＼なさけなくなりました。

市藏。それは、しかし、あんまりさう深く。――あんまりさういふまい／＼と思つたのが反つて。――それが反つて逆に

……

おみね。さうでせうかしら？

市藏。……ぢやアないかと思ひますが。――で、このごろはどんな……？

おみね。このごろは、いゝえ、以前のもう通り。――ことによつたら、外に屈託のないだけ、以前よりもつと子煩悩になつたか知れません。――すこしみえないと、太ア坊はどこへ行つた？ まだ學校から歸らないか？ 遊びに出すのはいいかあんまり遠つ走りをさせちやアいけない。――うるさくそんなことばかりいつて……

市藏。と、その、愛想盡しの件は……？

おみね。まるで自分にさういふ覺えがないらしいんで。――そんなことがあつたといふ顔もいたしません。

市藏。……………

おみね。一度、ですから、何といふかそれとなくいひ出してみました。――取合ひません。――そんなことがあるものか。――いかに料簡が狂つたつてそんな莫迦なことが。――冗談もいゝ加減にしろ。――いふことゝいはないことがある。――すつかり機嫌をそこねました。

市藏。……………

おみね。これはいけない。――さう思つて話を外のことにごまかしましたけど！

市藏。それでしかし太アちやんは？――太アちやんのはうは？

おみね。矢つ張これも子供で。――優しくされゝばまたされるで。――矢つ張、また、以前のやうに……

市藏。何の、ぢやア、後悔れも……？

おみね。えゝ、いまのところぢやアべつに。――たゞ、いまお話したやうに、こゝへ來てわるく元氣がなくなつた。――變つたといへば、まア……

市藏。…………

おみね。呼ばれゝば、それは、いまでもすぐ側へ行きます。――けど、呼ばれなければいつまでも。――一人でいつまでもぼんやり。――それだけ氣に働きがなくなりました。――大きに、まだ、悪いさかりのことを思つて氣味がわるいのか知れません。（わらふ）

市藏。（遮るやうに）それは、しかし……

おみね。えゝ？

市藏。いゝえ。――（やゝ寂しく）さうぢやアないと思ひます。

おみね。さうぢやアない？

市藏。矢つ張それは小父さんのいつたことが祟つてると思ひます。

おみね。…………？

市藏。といふのが。――わたくしにその覺えがあります。

おみね。…………？

市藏。御存じか知れませんが、いまの親父はあれはわたくしのほんたうの親父ぢやアないんで。――ほんたうの親父はこつちの三つのとき死にました。

おみね。…………（うなづく）

市藏。そのあと、その三つになるわたくしをつれて、おふくろ、後添に入つたのがいまの親父のところ。――ですから、

物心のつくまで、いまの親父をほんたうの親父とばかり思つてをりました。

おみね。…………………（うなづく）

市藏。と、そのうち。――矢つ張十一か二のとき、これは近所によけいなことをいふ奴があつて、お前の親父はお前のほんたうの親父ぢやアない、お前はおふくろの連れつ子だ。――だからお前は可愛想だ。――さういはれたときの心もち。――ふいに水の底へでも引ずりこまれたやうに思ひました。

おみね。…………………

市藏。さうなると、それまでの、自分に對する親父のいろ〳〵の仕打。――べつに邪慳にされたわけでもないんですが、どこか奥齒にものゝ引ツかゝつたやうな。――煮え切らない、ふんぎりのつかない工合がだん〳〵分つて來ました。――さうなると、さア、優しくされゝばされるでさびしく、小言をいはれゝばいはれるで心細く。――だん〳〵料簡のこづんで來るといふ奴が、わるくこのごろしねくねする、年も行かねえのに生意氣だ。――と、今度はさういふことになります……

おみね。（歎息するやうに）矢つ張。――さうなりますかねえ……

市藏。しかし太アちやんの場合とそれとは違ひます。――まるで成立が違ひます。――無論、ですから、等並にはいへないものゝ、義理の仲といふことをいつてしまつた以上。――その以上はもう……

おみね。（臆病に）それはもう取返しがつきません。

市藏。いゝえ、ですから、さうなつたらいつそのこと、なんどりと、よく分るやうに、合點のよく行くやうにみんな打明けておしまひになつたら。――さうしておしまひになつたらと思ひます。――そのはうがよかアないかと思ひます。

おみね。えゝ……

市藏。打明けて、あなた、とツくりそれが太アちやんの胸に落ちたらこんなもう安心なことはありません。――無理から伏せて置くよりどんないゝか分りません。

おみね。それは、もう……

市藏。（やゝ恥ずるやうに）こんなことを。――こんなよけいなことを何もいふことはないんですけど、つい自分のうへに引くらべて、自分がもしあのときさうだつたら。――初手からはツきりいつてもらへたら、途中からあんなに親父を他人扱ひしずとよかつたらう。――延いておふくろによけいな肩身の狭いおもひをさせずとすんだらう。――さう思ふと、その……

おみね。…………………

市藏。いまになると、それが、親父に入らさる遠慮をさせるもとになりました。――そのために、親父、一日も一日もいまわたくしに。――（さびしく）そんなつもりでないだけ氣の毒でたまりません……

おみね。……………

市藏。いや、これは。――とんだこれは愚痴を……（わらふ）

おみね。いゝえ。――有難うございました、いゝえ。――さうかとつて、わたくし……

……拍子あく。

おみね。あゝ歸りました……

おみね、すぐに立つ。――障子をあける。……

外の聲。六か？

おみね。いゝえ、市藏さん……

外の聲。仲町の？

おみね。えゝ。――先刻からもう……

外の聲。さうか……

權七（六十一二）、あがつて來る。

權七。いや、お待遠。――もつと早くかへるつもりだつたんだが……（しごく元氣に。――が、どこかに大煩ひのあとのいた〱しさがみえる）

市藏。いゝえお留守に出まして……

權七。よくしかし來てくれた……

權七、さういひながら長火鉢のまへ（いまゝでおみねのすわつてゐた位置）にすわる。

市藏。……御無沙汰いたしました。（改めてあいさつする）

権七。いや、それは此方こそ。――また、心にかけて、たび／＼見舞に。――いろ／＼今度は心配かけてすまなかつた……

……

市蔵。いゝえ、そんなこと。――それよりだん／＼と快いはうで結構です。

権七。有難う。――おかげで思つたより早く快くなつた。――この鹽梅なら、月でも越したら、床上げをしてみんなのところへも顔が出せようと思つてゐる……

市蔵。しかし快いからつてあんまりさう輕擧をなすつたら……

権七。いゝや、大丈夫だ。――もう大丈夫だ。――このごろは、一日隔きに、手めえであるいて醫者へ行くんだ。

市蔵。さうですつてね。――小母さんにいま聞いたところで……

権七。内儀さんでも、六でも、それはまだ危えから止せといつたが、なアにいい、心配はねえ。――無理に押切つて出てみたんだ。――さすがにはじめはふら／＼しやアがつたが、すこし馴れたらぢきに何のこともなくなつた。――それから醫者へ行つてさういつた。――何とかいふかと思つたら、醫者の奴、それは好かつた、天氣でもいゝ日はそろ／＼もうそのはうがいゝんだ。――こゝへ來るばかりでなく、これからは、一日に一時間でも二時間でも時間を切つて毎日すこしづゝあるいたはうがいゝ。――さう／＼うちにばかりゐちやア反つていけねえ。――すつかり褒められたぢやアねえか……

おみね。（横から）先生もあなたの氣を知つてるから、いつても無駄と思つてわさとそれはさういつたんですよ。（わらふ）

権七。莫迦アいへ。――假りにも醫者がそんなちよろツかなことをいふけえ。――これといふたしかなみとめがついたからさういつたんだ。――（市蔵に）なア仲町の……

市蔵。（わらつて）それは、まア。――が、ちやア、毎晩こゝ……？

權七。さういふわけでもねえ。――出るのは晝間、醫者へ行かねえときだけだ。――それでも夜出るやうになつたのはこの三四日だ。――何としても好い陽氣になつたからなア。

市藏。花がもうすつかり咲きました。

權七。(うなづくやうに)咲いた。――もう、お前、公園の櫻なんか眞ツさかりだ。――箆棒に今年は早えよ……

おみね。いつ行つたんです、そんなところへ?

權七。そんなとこつて何處よ。

おみね。いゝえ、公園へ?

權七。(やゝうしろめたい恰好に)いま行つて來たんだ。

おみね。そんな、まア、遠くまで。――何處かそこいらまでといつたんぢやアありませんか?

權七。だから何處かそこいらまで行つて來たんだ。――醫者へ行くことを思へば。――醫者と公園と差渡しにしたら何ほどの違えもあるものか……

おみね。だつて、お前さん。夜ですよ。

權七。夜よ。――だから晝間のやうに人通りがなくつていいんだ。

おみね。…………

權七。そんなことといつてる手間に何とかしたらいゝぢやアねえか?――折角仲町が來てくれたんぢやアねえか?

おみね。えゝ、さう思つたんですけれど……

權七。さう思つたら早くしねえな。――何でもいゝ、有合せで。――仲町、臆病なことは嫌ひなんだから……

おみね。えゝ……(立ちかける)

市藏。（いそいで）あゝ、小母さん、わたくしなら。――わたくしならそんな……

おみね。えゝ。

市藏。ほんたうに。――ほんたうにどうぞ……

權七。まアいゝぢやアねえか。仲町の。――折角來たんぢやアねえか。――久しぶりに來たのに口ぐらゐ濡らして行くもんだ……

市藏。でも、今夜は、此方はそんなつもりぢやアないんで。――たゞ、まア、その後どんな工合か？――だん〳〵、それは、快いと聞いて安心はしてゐましたが……

權七。そつちはそのつもりでも此方は飲らしてえんだ。――どうも飲りながらでねえと話のあがきがつかねえ。――永年の仕來りで此奴はどうにもならねえ。

市藏。でも、それは……？（權七の顔をみる）

權七。えゝ？

市藏。いゝんですか、そんな……？

權七。何を？

市藏。いゝえ、そんなことして體に……？

權七。體に……？（急にさびしくわらふ）――いゝえ、俺は飲らねえ。――俺は飲らねえんだ。――俺だつて、お前、いのちは惜しいからそんなふざけたことはしねえ……

市藏。いゝえ、そんなら好いんですほど。――さうでもない、また……

權七。それア大丈夫だ。――いくら好きでも今度は懲りた。――第一飲みたくねえ。――まるで飲りたくねえ……

市藏。（半ば疑ふやうに）ほんたうですか？

權七。ほんたうだ。――嘘ぢやアねえ。――おそらくこのまんま飲めなくなるんぢやアねえかと思ふ……

市藏。さうでせうか？

權七。必と、何だぜ、口へ持つてつたつてもう受けつけねえぜ。

市藏。…………

權七。よくしたもんだ。――醫者がやいくいはなくつても、自然さう、そつちのはうから工合しきがついて來るんだ。

（わらふ。――おみねのはうをみて、何をしてゐるんだな？――さつさと仕度しねえかな？

おみね。すぐにしますけど。――でも、あんまり何にもないから。――お蕎麥でもさういひませうか？

權七。蕎麥？――（市藏に）どうだ、仲町？

市藏。いゝえ、もう。――（おみねに）結構です。――結構です。もう……

おみね。そんな遠慮なすつちやア……

市藏。いゝえ、遠慮ぢやアありません。――こゝへ來てそんな遠慮なんぞ。――ほしければ此方からねだります。

おみね。でも……

市藏。いゝえ、ほんたうに。――飯を喰つてすぐ出て來たんで。――とても、まだ……

おみね。だつて一つぐらゐ……

市藏。いゝえ、おあづけにします。――お預けにして置きます……

權七。（おみねに）いゝやな、そんなら。――うまくもねえものをそんなにいふこたアねえ。――六みたやうに意地の汚ねえんぢやアねえ。――あるもので負けて置いてもらへ……

おみね。さうですか？――ぢやア、まア、ほんたうの……

市藏。それも、いゝえ、わたくしだけなら。――わたくしだけでしたら、小母さん、ほんたうに……

おみね。えゝ……

おみね、臺所へ立つ。

権七。手めえの勝手ばかりいつてゝそつちのことを聞かなかつた。――でも、みんな、うちぢやア變りはねえか？

市藏。へえ、有難う。――おかげで、まア、丈夫なことはみんな……

権七。さうか、それア結構だ。――何よりだ……

市藏。へえ。

権七。親父はどうしてゐる？――相變らずか？

市藏。へえ、まア……相變らずで……（わらふ）

権七。どうしてあゝぼやくくしてしまつたもんか？――俺より、まだ、三つも下なんだぜ。

市藏。えゝ。

権七。あれア何だね、若いとき下直にあんまり體をつかひ過ぎたむくいだね。――さうでなくつて、あんなに。――いまッからあゝ……

市藏。…………

権七。しかし好い男だつたからな。――それに素人には惜しいやうなノドをもつてゐた。――あれで身が持てたら不思議

だつたか知れねえ。

市藏。……………

權七。人のことはいへねえ。――手めえにげんに罰があたツたんだ。――女と酒の違ひだけだ。（わらふ）

市藏。…………

權七。いつだかおふくろの眼が悪かつたつていふぢやアねえか？――どうした？――直つたか？

市藏。いゝえ、あれは、ほんのものもらひをこじらしたゞけなんで。――大したことはなかつたんで。――すぐもう直りました。

權七。それア好かつた。――眼は大切だから……

市藏。えゝ。それに眼の性のあんまり好くないはうですから……

權七。それア仕方がねえ。――若いときあれだけ泣き暮した眼だ……

市藏。（やゝさびしく）えゝ。

權七。で、どうだ、稼業のはうは？

市藏。えゝ、まア、ぼつ〳〵……

權七。ぼつ〳〵でもあれア結構だ。――世間はどこも酷いつてな？

市藏。お話になりません。

權七。この間、六に、いろ〳〵聞いて呆れ返つたよ。――どうしてさうだらう？

市藏。みんな、それ〴〵に、色んなことをいひますが……

權七。（やゝ顔を曇らせて）そんな風ぢやア何だらう？――従つて組合のはうもよく行かねえだらう？

市藏。えゝ、まア、それは。――それについて、いろ〳〵、小父さんの耳に入れたいこともあれば入れたくないこともありますが。――それは、まア、もつとさきのことにします。――いまは、まだ……

權七。さうしてくれ。――そのはうがいゝ。――まだ、いま、詰めてあんまりものを考へるなと醫者にもいはれてゐるんだ。

市藏。えゝ。

權七。聞けば聞き腹。――矢つ張、さうすれば、えうもねえ修羅をまたもやさねえとも限らねえ。――そんなことをしたらつまらねえ。

市藏。えゝ、ですから。――たゞしかしこれだけはいつて置きます……

權七。何を？

市藏。いゝえ、何があつてもみんな小競合。――去年のやうな騷ぎには大丈夫なりつこありません。――ですから、まア、それだけは御安心ねがひます。

權七。お前がゐればそんなヘマはやりツこねえ。――だから俺は安心してゐる……

市藏。いゝえ、さう行けばいゝんですが……

おみね、二本ほど銚子を入れ、箸だの猪口だのと一しよに臺所からもつて來る。

おみね。（權七に。）一寸、そこで、海苔を燒いて下さいません？

權七。海苔？――うん、よし……（すぐ長火鉢の抽斗から出す）

おみね、銚子を銅壺に入れる。幕あきの太吉の膳を見恰好よく按排して箸や猪口をそれにのせる。――その間に、權七、海苔を燒く。

おみね。御覧の通りほんたうに何にもないんですよ。――ただ、もう、ほんたうの……（膳をまへに出す）

市藏。い丶え、とんだ。――夜分上つて……

權七。お前が飲むんぢやアねえ。――さう思つちやアいけねえ。

市藏。え丶？（權七の顏をみる）

權七。お前のためでなく俺のため。――俺のために飲んでくれると思やアそれでい丶んだ。――さう思やア腹は立たねえ。（わらふ）。――燒いた海苔をおみねにわたす

市藏。…………？

權七。分らねえか？――俺のまへで、何でもい丶、飲んでみせてくれりやアそれでい丶んだ。――さうすれば俺の氣がすむんだ……

市藏。（わらつて）しかし……

おみね。（銚子を銅壺から出して）お燗がつきました。――さア……

市藏。へえ、有難う……（猪口を取上げる。――おみねのつぐのをそのま丶）しかし、それは……

權七。とき〴〵、い丶え、寂しくなるんだ。――どうにも手めえに恰好がつかなくなるんだ。――さういふとき、こうごろ、穴を呼びにやつちやア飲ませるんだ。

市藏。…………………
權七。が、彼奴、もと〳〵飮ける口でねえんだ。――猪口に一つか二つですぐ眞つ赤になる。――それでもいゝんだ。――それでも、此奴、氣はすむんだ……
市藏。…………………
權七。だから、何がなくつても、飮んでさへくれりやア有難えんだ。――さうすりやア、お前、とんだ功德になるんだ……
……
市藏。（わらつて）戲談を……
權七。いゝえ、全く。――全くだ……
市藏。…………………
權七。だから、みねえ、俺が飮まなくつても酒はある。――始終取つとかせるんだ。
市藏。…………………
權七。だから、まア、ゆつくり飮つてくんねえ。

……このうち、市藏、おみねにつがれて猪口をかさねる。

權七。（急に）太ア坊はどうした？――まだ夜學から歸らねえか？
おみね。いゝえ、もう、疾うに歸りました。
權七。どこにゐる？

おみね。奥にゐます。
權七。一人でか？
おみね。えゝ。
權七。呼びねえ。――こゝへ呼びねえ……
おみね。（やゝ力なく）えゝ。
權七。……買つて來たんだ。――かういふものを買つて來たんだ。（ふところから思ひ出したやうに買つて來た小さな玩具（おもちや）をつかみ出す）
おみね。何です？
權七。獨樂（こま）だ。（まはしてみせる）
おみね。まア……

ともく市藏も首をのばしてみる……

權七。器用に出來てるぢやアねえか。――大道（だいだう）で賣つてゐたんだぜ……
おみね。ほんとうに……
權七。呼べよ。――早く呼べよ……

おみね、立つて奥へ行く。

市藏。大道の玩具だからつてこのごろは莫迦に出來なくなりました。

權七。出來なくなつたとも。――なまじつか店でうるものよりよつぽど此方のはうが巧妙になつてる……

市藏。われ〳〵の子供の時分には、とんだり跳ねたりか、山吹鐵砲ぐらゐが關の山でしたが……

權七。さうだ、山吹鐵砲つてものがあつたな！

市藏。えゝ。

權七。いまでもあるかしら、あんなもの？

市藏。この間の彼岸に門跡さまでみかけましたが……

權七。矢つ張、ぢやア、あることはあるんだな！

市藏。可笑しなもんで、それをみたら、ふいと十二三の時分の氣になりました。（わらふ）

權七。（うなづいて）うん、あるもんだ。さういふこと。――俺のやうな年になつても餓鬼の時分だけはとき〴〵まだ戀しくなる。――（手を伸して銚子をとる）さア、一つ酌をしよう。

市藏。いゝえ、勝手にいたゞきます。

權七。まア、いゝぢやアねえか……

市藏。すみません、これは……（猪口を出す）

權七、酌をする。――おみね、太吉をつれて來る。

權七。（いへば七八つの子供の機嫌をとるやうに）太ア坊、來ねえ。――こつちへ來ねえ。――いゝもの買つて來てやつたぜ…

太吉。…………（權七のそばへ行く）

權七。獨樂だ。――かうして斯うやればすぐ廻る。――そら……（まはしてみせる）

太吉。…………

權七。廻してそれからかうやればいろ〳〵色が變る。――どうだ、そら？――もう一つ。――どうだ、今度……？（いろ〳〵してみせる）

太吉。…………

權七。どうだ、面白えだらう？――やつてみな。――自分で、さア、やつてみな……

太吉、いはれるまゝそこにすわつて獨樂をまはす。――無音のその寂しい擧止。――おみね、市藏、それとなくぢッとそのさまを（といふことは、同時に、權七のさうしたさまを）みまもる……

間。

格子あく。

外の聲。…………（何かいふがはツきり聞えない）

おみね。はい……（ふり返る）

外の聲。仲町の小柴から出ましたが……（やゝはツきり聞える）

市藏。わたくしいやうです……（持つた猪口を下に置いてすぐに立つ。――障子をあけて）何だ、お前？――何か用か……？

外の聲。…………（何かいふが聞えない）

市藏。何だつて？――一寸待ちねえ……（そのまゝ障子のそとに出る）

やゝ長き間。（……このうち、おみね、新しい銚子を銅壺に入れる）

……使の男、あいさつして歸つて行く。――市藏、膳のまへにかへつて來る。

おみね。御用ですか、お宅？

市藏。えゝ、一寸……（わらふ）

横七。何か……？

市藏。いゝえ出たあとへ人が來たもんで。――都合で、歸りに、一寸そこへよれとおふくろからいつてよこしたんで……

横七。どこだ？

市藏。いゝえ、この近所なんで。――山の宿なんで……

横七。ほんとの、ぢやア、歸りみちだ。

市藏。えゝ。――古い親父の時分からの、いゝえ、仕事さきなんですが、わるく堅い、口やかましい家なんで、あんまり平生顏を出さないんですが。――（おみねに）何時になりませう、もう……？

おみね。（時計を見て）九時……四十五分。――うちのは少しすゝんでるかも知れません。

市藏。それにしても、もう。――大へんこれは遲くまで……（急に冷えた猪口を干して下に置く）一寸出て飛んだ御馳走にな

りました。（そのまゝ立ちかける）

權七。（狼狽てゝ）まだいゝぢやアねえか――まだ、お前……

市藏。いえ、そこへよるとすると。――堅氣の家へあんまり遲く行くのは此奴……

權七。うん、それはさうだが……

おみね。ぢやア、まア、もう一つ熱いのを上つて……（銅壺から銚子を出す）

市藏。いゝえ。――いゝえ、もう……

おみね。まア、折角つけたんですから。――一つだけ。――一つだけでも……

市藏。でも……

權七。お前が飲まなくつて誰が飲むんだ？――お前が飲まなければ無駄になるもんぢやアねえか？

市藏。それは、まア……

權七。一杯でいゝ。――一杯でいゝから手だけつけて行きねえ。――あとは糠味噌へ入れたつていゝから……

市藏。さうですか？ぢやア、まア一つだけ……（もう一度猪口をとり上げる）

おみね。すこし今度のはつきすぎたか知れません。

（おみね、酌をする。――市藏、すぐまたそれを飲んで、今度は猪口を膳のうへにふせる。）

市藏。では、これで……

おみね。さうですか？――何にもこれはお構ひいたしませんで。――反つて御迷惑でございました。

市藏。いゝえ、とんだ御厄介をかけまして。――(權七に)小父さん、ぢやアお暇いたします。――そのうちまた――近いうちにまたうかゞひます。

權七。あゝさうしてくれ。――みんなにもいつてとき〳〵遊びに來てもらつてくれ。――誰も來ないと心細くつていけねえ。

市藏。え、よくみんなにもさういひます。――みんなは、まだ、小父さんがこれほどになつてゐようとは夢にも思つてゐません。

權七。もう大丈夫だ。――もとゝもうちツとも違はねえ。――強情も相變らずだ。――よくさういつてくんねえ。

市藏。えゝ、さういつてやります。――すつかり話したら必とみんな來れます。(わらふ)――(太吉に)ぢやア、太アちやん、左樣なら……

おみね。太アちやん、小柴の兄さんお歸りだよ。

太吉、ぼんやり立つてゐる。

權七。(何のこともなく市藏に)どうしたんだか、坊主、こゝんところ一寸元氣がねえんだ……

ふと、おみね、市藏のはうをみる。

間。

市藏。ちやア御免下さい……

市藏、出て行く。——權七、おみね、太吉、上り口まで送つて出る。

おみね。（うしろから）お歸りになりましたらどうぞみなさんによろしく。……

權七。（ともぐ〵）うん、さうだ。——親父やおふくろに俺がよくさういつたといつてくれ。——來月になつたらどこへ行くよりさき第一番にお前んところに行くから……

……市藏、それぐ〵それにこたへるがはツきり聞えない。

間。

……格子しまる。——權七をさきに、おみね、太吉、障子を閉めてそれぐ〵もとの位置にかへりかける。

權七。（しみぐ〵した感じに。——半ば自分にいふやうに）しかしいゝ男だ。——音無しい、性のしつかりしたいゝ男だ……

おみね。えゝ？

權七。いゝえ、市藏よ。——あんな放埒な親父でも仕合かよければあゝいふいゝせがれをもつことが出來るんだ……

（すわる）

おみね。（やゝ寂しく笑ひ……）（ともかく太吉とすわる。）

間。

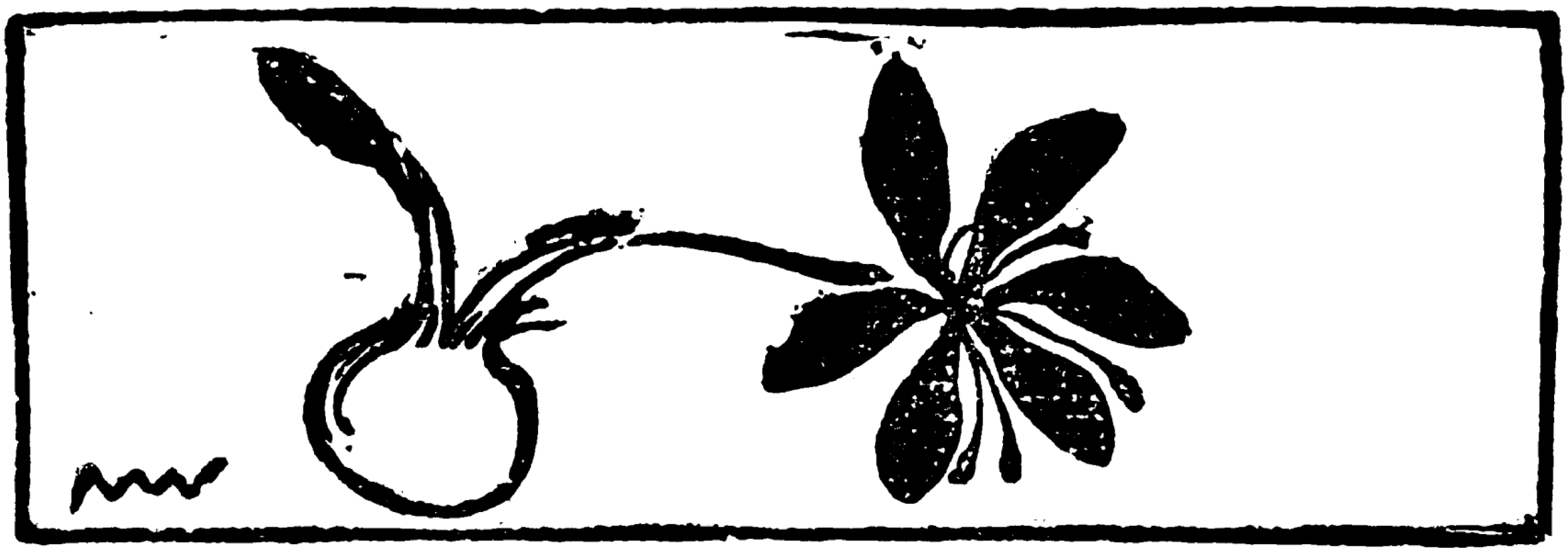
……權七、夕刊を擴げてよみはじめる。――太吉、獨樂をまはす。――おみね、膳のうへを片づける。

間。

……うす曇つた戸外にどこの花ともなくしづかにふかれて來る。

（幕）

（昭和二年三月）



鷺の踏切

小島政二郎

一

くれ竹の根岸の里も、今ではひどい場末になつた。夏になると、水道の水がチョロ〳〵としか出なかつた。いかにも方々で使はれ〳〵した末の、殘り水と云ふ感じが深かつた。

電車に遠いのは仕方がないとしても、ちよいとどこかへ行くにも、一々踏切を越えなければならないのが不便だつた。何しろ東北本線、奥羽線、信越線、海岸線、それに省線電車の上り下り、一度ギイと「通せん棒」を卸されたら最後、間が惡いと、二十分間ぐらゐ待たされることも珍らしくなかつた。

「いゝ加減に明けろやい。」

「いゝとも。死にたきや勝手に通れ。」

待ちあぐねた通行人と踏切番とが、どうかするとこんな口喧嘩を始めることもあつた。

私の家の近くにだけでも、寛永坂、鶯谷、御院殿、芋坂、乞食坂、とこれだけ踏切があつた。一番近いのが「鶯の踏切」だつた。小さな鄙びた踏切でデックリ肥つたお爺さんと赤ら顔の小さく顏の引き締まつたお爺さんとが、向ふ側とこつち側とで、しじゆう白い旗を振り合つては、桔槹のやうなものを卸したり上げたりしてゐた。春先など、近くの團子屋の店先に腰を卸して澁茶を啜つてゐる時には、これも閑な眺めだつた。

その頃、私のところではセッター種の犬を貰つた。毎朝一度づつ上野の山へ散歩に連れて行くのが私の役目だつた。その都度、この鶯の踏切の御厄介にならなければならなかつた。

「リツキ、リツキ。」

ともすると、地面の匂を臭ぎたがる犬を忙き立てて、私は何本も何本も走つてゐる線路の上を馳け拔けた。さうした行き歸りの短い通行の間にも、私は踏切りのお爺さん達が、一日代りに日當りのいゝ南側の番小屋を讓り合つてゐることを知つた。また、番人が一組ゐて、お爺さんの組と一日交替に勤務してゐることにも氣附いたりした。この方は、三十代の無口な二人だつた。

或日、嫂から電話が掛つて來た。兄が卒倒したからすぐ來てくれと云ふ口上だつた。

「おいツーリングへ電話をかけて、鶯の踏切の上まですぐ迎へによこして置いてくれ。」

女中にかう云ひつけて置いて、私はすぐ着替へにかゝつた。袴の紐を結びながら、ふと模樣によつては慶應病院へ入院させなければならないかも知れないことに氣附いた。で、

「判。」と妻に云つた。

「判？」

「判、判。」

私はそれ以上説明することが出來なかつた。目にも、心にも、卒倒したまゝ意識を取り戻さずに鼾聲を立ててゐると云ふ兄の姿がこびり附いてゐて離れなかつた。

クルクルと襟卷を卷いて、外套をはおるとその儘ボタンも掛けずに、私は家を飛び出した。眞直に驅け出すと半丁も行くと踏切だつた。見ると、柵棒は上つてゐた。「〆めた」と思つた。が、不安だつた。下りなければいゝがと心に祈つた。が、却つてそれが讖をなして、もう十足と云ふところで、ふいにギイと柵棒が上から下り始めた。瞬く間に水平に、私の腹を横切つて靜止した。

「チエツ。」

思はず舌打ちが出ようとした。と、その瞬間、一たん下りた遮せん棒が、音もなくつと半開きに上つた。思はず私は、柵棒の手許に目を轉じずにはゐられなかつた。そこには、例のデツクリ肥つたお爺さんが、丸々と目を浴びて立つてゐた。

「急いで――。」お爺さんが云つた。

「有り難う。」

一聲叫ぶと、私は外套の裾を蹴散らして飛び出した。線路の上を走りながら、下手の方に目をやると、鶯谷のステーションを今將に出ようとする電車の前面が、私を四角な磁力のある目で遠くから睨み据ゑてゐた。

これがキツカケになつて、私達は

「お早う。」とか

「いゝ陽氣になりました。」とか、朝晩の挨拶を取りかはすやうになつた。一人と挨拶をして、一人と挨拶をしないと云ふのもをかしなものなので、どつちからともなく、もう一人の赤ら顔の小さく體の引き締つた方のお爺さんとも、口を利き合ふやうになつた。下町に生れた私には、かうした市井的な交りは好もしいものの一つだつた。

日が經つにつれて、挨拶をして通り過ぎるだけでなく、時には二言三言立ち話をするくらゐの親しみも生じて來た。さうした會話の間から、私は、デツクリ肥つたお爺さんの方が唐澤と云ふ姓で、赤ら顔の小さく體の引き締まつた方が古谷と云ふことなどを聞き知つた。

或冷たい雨の降る日だつた。珍らしく弟が遊びに來た。玄關へ迎へに出た妻に

「あすこの、踏切の上の坂のところの路の惡いつたらありません。ヒヨイと踏み辷した拍子に、鼻緒を切つちやつた。何しろあの急でせう、片足だけぢや踏み締められやしません。おまけにあの、デコボコ路と來てゐる。あれつぽつちのところを降りるのに、難儀しましたよ。降りわづらつてゐると、踏切の番人が、わざ／＼お神さんに足駄を持つて來させて貸してくれたので、大助り。――人にや、親切にしなきやいけないと、つく／″＼思ひましたよ。」と云ひながら茶の間へはひつて來た。

「そりやかう肥つた、可愛いお爺さんぢやなかつたか。」

下から、炬燵に當つたまま私が聞いた。

「え、さう／＼。ゆつくり／＼口を利く――。」

「ぢや唐澤さんだ。」と、私は妻を顧みた。

彼女はすぐ、下女に足駄を持たせて、自身禮に出て行つた。それが私から妻へ、踏切番のお爺さんとの附き合が擴がつて行つた第二の機會だつた。

それから間もなく、その日は妻が私を學校へ送り出してから、ホッとして、南向きの部屋で新聞を讀んでゐたと云ふから恐く午前の十時頃だつたらう。突然カラッと玄關が明いて、

「御免なさい。」と、禮儀なんか構つちやゐられないと云つた感じの籠つた聲が耳を打つた。その急迫した響に妻は思はず反射的に、女中の返事も待たずに、

「はい。」と腰を擡げた。

すると、その聲は

「お宅の犬が、今犬殺しに連れて行かれましたから、早く、早く。」と疊み掛けて忙き込んで怒鳴つた。

妻はギョッとして、玄關へ飛び出して行つた。見ると、淺い帽子をかぶつた、赤ら顔の小さく體の引き締つた古谷老人が、緊張した顔を覗かせてゐた。脣が開いて、胸が動悸を打つてゐた。——老人は、妻と目を合はすと、ちよいと輕く禮したが、すぐ

「早く來て下さい、早く。」と云つたと思ふと、すッと顔を引ッ込めた。この動作が、いかに老人が大切な自分の持ち場を無理して拔けて來てくれたかと云ふことを語つて餘りあつた。次の瞬間には、妻も有り合ふ下駄の上に下りてゐた。彼女の目には、二三日前から鑑札を無くしたまゝになつてゐるリッキの首輪が大きく浮んだ。

「ママ。」

おとを追つて、火の附いたやうに泣き出した子供の聲を聞き捨てに、妻は往來へ驅け出た。近くに、古谷老人の小さな黑い後姿があつた。その遙か向うに、明るい日の下の凶兆のやうに眞黑い人だかりがしてゐた。

こんなことから、私達夫婦は、唐澤老人とばかりでなく、古谷老人とも親しみを持つやうになつた。いや、私達ばかりでなく、一家を擧げて親しくなつた。まづ第一に、リッキが散歩の行き歸りに、兩方の小屋へ首を突ッ込むことを覺えた。

するど、老人の方でも、お辨當にお魚の附いた時などには、骨を捨てずに取つて置いてくれた。

「カアチヤン、オヨメニクツトキニ……。」

どうかした拍子に、こんな唄を子供が歌ひ出したことがあつた。

「まあ、そんな唄どこで覺えて來たの。」と妻が云つた。

「この間踏切の横の原ツぱらで遊んでゐた時に、あの小さい方のお爺さんが、ベビ子さん〳〵、いゝ唄を教へて上げませうツて、幾度も〳〵歌つて聞かせたんですよ。」と、子守の少女が云つた。

「奥さま。」女中が笑ひながら口を出した。「古谷さんは、私達がベビちやまベビちやまとお呼びするのを、ベビちやまのお名前だと思つてゐるんでございますよ。――隨分おらしい名前だと思つてゐたら、櫻木町の西洋人の子も同じ名前だつた、なんて云つてゐるんでございますもの。」

「ホホホ。」

さうかと思ふと、女中の方が、使ひから歸つて來て挨拶を濟ますか濟まさぬに、

「奥さま。また今朝、踏切の上に首縊りがございましたんですつて。――いいえ、もう片附けられてしまつて、ありは致しません。唐澤さんが、どうしてああいつも同じ樹にばかりブラ下りたがるんだらう、ツて不思議がつてらつしやいました。」

「まあ厭だ。ぢやまたあの松の木？」

實際、驚の踏切は、昔から轢死人の名所だつたが、近頃では首縊りの名所に變りつつある觀があつた。多い時には、一月に一度、少くても半年に一度はきつと噂を聞いた。しかも、その發見者は、いつも唐澤老人か古谷老人だつた。

「この歳になつて、何の因果ですか。」

その度にかう言つては、唐澤老人は年寄らしく自分の不吉を悲しがつた。

幾度も立ち話を繰り返してゐるうちに、私はだん／＼二老人の過去や現在の家庭の狀態やを知るやうになつた。二人とも子には緣が薄くつて、夫婦と子供の三人暮しだつた。

「ええ、遊ばしといても勿體ないと思つて、家で家內に葉茶屋をやらせてゐます。」

或日、古谷老人からこんなことを聞き出したことがあつた。で、その晩、食卓へ向つた時、私は

「ね、同じことなら、これからお茶は古谷老人のとこで買つてやらないか。」

「えゝ。でも、下田端ぢや、買ひに行くのが大變ですわ。」

「そこは一つ、あの老人に屆けて貰ふのさ。朝出て來る時に。」

それ以來、私のところでは、お茶が拂底になる二三日前あたりに、女中が、

「濟みませんが、また明日いつものお茶をお願ひいたします。」と、踏切の小屋まで註文に行くのだつた。

すると、剽輕な古谷老人はすつかり商人口調になつて「へえ／＼、毎度有り難う。」などと云つて、女中を笑はせた。

こんな調子なので、あとから馴染になつたくせに、古谷老人との方が私にしろ早く遠慮が取れて行つた。長い停電のあつた時、

「濟みませんが蠟燭を二三本寄附して下さいな。」と云ひながらはひつて來たのも古谷老人だつた。

「さあ／＼。」

借りに來てくれたといふことが、自分一家に對する親しみの發露として、私には嬉しかつた。

二

唐澤老人にしても、古谷老人にしても、親切なと云ふ印象を私に與へた點では一致してゐるが、目に映る二人の姿は隨分異なつてゐた。古谷老人の方は、體こそ小さいが、血色もよく、肉も引き締まつて、どこからどこまでキビ〳〵してゐた。目尻の下つた感じと瞳の光り工合とが、何と云ふ譯もなく、私には好色漢らしい感じを與へたが、しかしこれは、いつぞや坂本の通りで、非番の彼が二歳ぐらゐの女の子を半纏おんぶしてゐたのを見て以來、私の好奇心が織り出した誤つた先入觀的想像の夢かも知れなかつた。彼はどうかすると、こつちの禮に對して軍人式に失敬を返す癖があつたが、その時も半纏おんぶの無帽の額へ、手を持つて行つた、それが、私にテレくささを隱す仕草としか見えなかつたのだ。しかし、背中の子は隣の子かも知れなかつた。或は子よりも可愛い孫かも知れなかつた。唯私には直感的に、老人の遲い子のやうな氣がしたのだ。古谷老人よ、私の出ない空想を許してくれ。が、兎に角、さう云ふ空想の可能を信じさせるだけの健康と活力とを彼が發散してゐたことは否定すべからざる事實だつた。

それに反して、唐澤老人の方は、デツクリ肥つてゐる割合に、一口に云へば影が薄かつた。もう自分のもつてゐた生活力を殆んど全部使ひ果してしまつた人に近い感じだつた。御隱居さんと呼ぶにふさはしい物腰恰好をしてゐた。緩漫な動作と、潤(うる)んだ瞳と、弛(たる)むささとがその體感(たいかん)だつた。口の利き方もノロ〳〵としてゐた、だから、夜を徹して踏切を守る役目との對照が、殊に痛々しかつた。この二人の肉體的の違ひは、その話題の上にも現れて、唐澤老人の話す話と云へば、大抵が昔の思ひ出だつた。

「今の閑院の宮樣のお屋敷、あれがあなた、松平出羽樣のお屋敷でさ。それ、芝居でやる河内山が、ここの御仕僧に化けて娘を救ひに乗り込む……。」

私はこんな話が好きなので、少からず、興味を持つて立ち話を續けることが出來た。

それは、秋がそろ〳〵深くなつて行く頃によくある、今にも降り出しさうな陰氣なお天氣の日だつた。夕方、倉介があ

つてこの踏切を越えようとすると、禿げ頭に向鉢卷をした唐澤老人が、番小屋の中に力なくグッタリ大儀さうに凭れてゐるのが目にはひつた。

「おや、どこかお惡いんですか。」思はず私は立ち寄らずにはゐられなかつた。

すると、老人は懶げに目を上げて、

「持病の喘息で……。」と云つた。その樣子が、いかにも口を利くのも辛さうだつた。さう云はれて見れば、唐澤老人は肩で息をしてゐた。そればかりか、喉が、紙が貼り附いて取れないと云つたやうな音を立ててゐた。

「そりやいけませんね。」

かう云ひながら私は狹い小屋の中を見廻した。と云ふのは、私の友達の一人に四歳からの喘息持ちがゐて、喘息が起るとは、所嫌はず黄い煙草を吹かしたり、パチ／＼線香花火ほどの火花を散らして燃える藥材の煙を喫いだりしてゐるのを思ひ出したからであつた。老人も定めし、ああ云つた種類の藥を使用してゐることと思つたからであつた。ところが、どこにもそれらしいものは見當らなかつた。

「喘息には藥がないんださうですね。何か一時押への藥でも仕したつてらつしやるんですか。」

知らなければ敎へてやらうと思つて、私はかう云つて聞いて見た。

「いや、いろ／＼やつて見ましたが、結局銀杏（ぎんなん）の實を焙烙で煎つて食べるのが一番利くやうです。しかし、そんなことぢやなか／＼收まりませんや。ひとりでに收まる時まで、ウン／＼唸つて我慢してゐるより外に仕方がないんです。業病ですよ。」

かう云ひながら老人は、汽車か電車が來るのであらう、重さうに體を擡げて小屋から出て、桔槹を卸した。それを見てゐて、私は悲しくなつた。こんな病體になつても、休めないのだらうか。休めるのだが、日給（だかどうだか知らないが、多分さうぢやないかと私は想像した）が欲しさに休まない程老人の生活は逼迫してゐるのだらうか。よしそれにして

も、それに代つて務めるべき息子の一人ぐらゐはゐさうなものだつた。それもゐないのだらうか。

　私は喘息持ちの友達と幾度も旅をして、その病氣の發作のいかに身を悶えて死を願ふ程苦惱の激しいものであるかを目のあたり見て知つてゐた。それだけに、やがて夜が來るこの番小屋にたつた一人唐澤老人を殘して行くのが非常に危惧された。夜が更けて空氣が冷えるにつれて、物の歩色もわかぬ程に胸を掻きむしつて惱むのではないかと思ふと、もうそれに堪へ得る體力のない老人が、八本の線路を越えた向うの小屋にゐる古谷老人にも知られずに、人を戀しがりながら誰からも看護を受けることが出來ずに悪夢のやうな一夜を明かすであらう光景が如實に想像された。

　幸ひ、私は今度の會合の席上で、多分その喘息持ちの友達に逢ふであらう。さうしたら忘れずに老人のためにたとひ一時抑への藥に過ぎぬとも、黄い煙草ともう一品の名を覺えて來よう。さう思つた私は、

「お大事に。」と帽子をちよいと取ると、その時唐澤老人がギイと上げてくれた桔棹の下を滑つた。その晩遲く、私は同じ路を逆に行つて來た。會場で、友達に喘息の藥の名を聞いたところが、

「もうそんな嗅ぎ藥は時代遲れだよ。この頃はね、アストールと云ふ機械が發明されて、みんなそれを使つてゐる。我我喘息持ちは大助りさ。――フーン、さうか。それぢやいつそのことアストールを買つてやれよ。」

　友達はさう云つて、勸めてくれた。私は大きに心が動いた。で、會の流れで銀座に出たのを幸ひ、友達に連れて行つて貰つて、或ファーマシーでそれを買ひ込んだ。――私はそのケースを左の手に下げてゐた。眞暗な天王寺の墓地を拔けて急な坂路にかゝると、手前の踏切の赤い灯が闇のに浮んでゐた。

「今晩は。」

　聲をかけると、戸が明いて古谷老人が姿を現した。

「やあこりや、大分ごゆつくりですね。」

「えゝ、今でつい……。」

云ひながらも、明けてくれた踏切を急ぎ足で線路にかかると、うしろから

「お休み。」

「御免。」

カタ〳〵と、駒下駄の音に、廣澤老人の小屋の木戸が、さツと明いた。その瞬間、私は嬉しかつた。老人がさう苦しますに半夜を過したことはそれだけでも明かだつたからである。ところが、意外にも、パツと開いた将棋型の、中一杯の光線に、私の見出したものは老人の姿一つではなかつた、彼に負けず劣らず肥滿した女の姿がそこにあつた。肥つた同志で窮屈さうに、同時に睦じさうに狹い小屋中に並んで腰を掛けてゐた。その一つが女の方の體が、もう一つの體と摩擦しながら離れて來た。

「お歸んなさい。」と女が云つた。お神さんであらう。夜目にも、いゝ血色と晴朗たる表情とが私の目に來た。

「その後いかがです。」

私はお神さんに會釋を返すと、彼女が通り拔けるだらうと思つてゐた豫期に反して、あのまゝグツタリと坐り續けてゐたとしか思へぬ老人の方を覗き込んだ。

老人は力なく、つぶつてゐた兩眼を開いて

「えゝ……。」と云つた。それは返事とも取れるし、溜息とも聞きなされる種類のものだつた。死に瀕してゐる金魚の目のやうな鈍い光が白目に澱んでゐた。

「僕は――。」病人に喋らすでもないと思つた私は、用意して來た嘘をすぐ云ひ出した。「私の叔父が醫療機械屋をやつてゐるので、今日あなたの話をしたら、ぢやこれを使つて見ろと云つてくれたのですが……。」

から云ひながら、私は包み紙をバリ〳〵破き出した。

「藥も貰つて來ましたから、ちよいと試して見ませんか。」

「そりやどうも御親切に……」

お神さんは禮を云ひ掛けたが、中から出て來たものが思ひかけぬ立派——と云ふのではないが、專門の品物獨得の落着いた品位を持つてゐたものだから「有り難う」と受けていゝのか惡いのか判斷に困るらしく、ためらつてゐた。その間に、私はガラス管へ教はつて來た通りに藥液の極少量を注ぎ込んだ。さうして

「さ、この管を喉の奥の方へあてがつた。——さう。——それから、僕がこのゴム袋を押しますから、それにつれてスウと息を吸つてごらんなさい。——よござんすか。」

當てがはして置いて、私はアトマイザーに壓力を加へた。

「どうです？」

老人は、子供のやうな單純さで大きく口を明けてスウ〳〵息を吸つてゐたが、私が訊ねてから一分ぐらゐ經つて、漸く

「あゝ樂になつた。」と肩を落して、しやちこばつてゐた體に大きく呼吸を入れた。さうして子供のやうに無邪氣な笑顏をゆつくり浮べた。

それまで息を詰めて見入つてゐたお神さんも、その時

「まあ有難い。」と思はず一人呟くやうに云つた。私も餘りの效果の覿面さに心臟がドキ〳〵するほど嬉しかつた。しかしそれよりも、聞く人を豫想に入れずに迸り出た唐澤老夫妻の喜びの一言づつが、どんなに私を有頂天にさせたことであらう。

三

私は妻に向つて冗談半分に云つた。

「お前達は怪しからんぞ。自分やベビ公の誕生日は忘れたことがないくせに、一家の主人たる俺の誕生日を祝つたことなんか一度もないぢやないか。」

「あら、そんなことないわ。」

「いや、そんなことある。去年祝つたか。」

「去年は、あなたが御旅行中だつたので止めたんぢやありませんか。」

「一昨年だつて祝はなかつた。」

「一昨年は、ベビが病氣で、それどころぢやなかつたんぢやありませんか。」

「兎に角、玆二三年、俺は自分の赤文字の日を持たなかつたので、年の記憶がなくなつていかん。今年は大いに祝つて貰はう。」

「えゝ〳〵、出費さへお厭いなければ、私の方は幾らでも盛大にすることは厭やしませんわ。その度に、親類の小さい人達が喜ぶんですもの。」

「ところが、今年は招待する人達に望みがあるんだ。」

「えゝ、そんなこと私構はないわ。」

「踏切のお爺さん達だぜ。」

「まあ厭だ。どうして？」

「どうツてこともないが、唯呼んで見たいんだよ。」

「あなたの物好きが過ぎるわ。」

「そんなことあるもんか。僕はさう云ふものか、あのお爺さん達が好きなんだよ。自分の誕生日に、好きな人達を呼ぶくらゐ愉快なことはありやしない。お前には默つてゐたが、前から呼ばうと思つて、それとなく二人の好きなものを聞いて置いたんだ。」

「さあ。」

「やつぱり酒ださうだ。肴は輕い魚に、湯豆腐が何より好物だと云ふから、世話はない。笹の雪を知らないと云つてゐたから、豆腐はあすこのを取つておやりよ。」

「物好きね本當に。」

ハイと云ふ代りに、妻はそんなことを云ひながら私の氣紛れを認容した。

私の誕生日は、十一月二十五日だつた。師走の風に、笹の葉がピラ〳〵忙しい音を立ててゐた。その日は丁度二老人の非番の日でもあつた。二人は夕方の約束の時間に、湯上りの匂をさせながら揃つてはいつて來た。私達は電氣ストーブで部屋を暖めて待つてゐた。

「ベビ子さん入らつしやい。」

商賣柄だけに、かう云はれれば子供も含羞ますに二人の傍へ行つた。私は主婦振りに、そんなことも嬉しかつた。一家中皆知つた顔ではあり、殊に酒が始まるとぢき、二人とも初めての家の客にと云ふギゴチなさを忘れて行つた。

やがて、部屋の空氣に酒の氣がしゆんで行つた。其頃から、二老人の聲が高くなり出した。しかし、醉ひつぷりにも、二人の性格の相違が現れるのを私は興味深く眺めてゐた。唐澤老人の方は、どうしても愚痴ツぽかつた。彼は私の問ひに答へて、「私もはや、明ければ六十六になりますよ。」と寂しさうに云つたが、古谷老人を指さして、「この人は——私より三つ下だつたね。これでて、子供は私ンとこよりは二つ歳上なんですから。」

「しかし、それにしても、お二人とも餘程遲い子持ちですね。」

「いゝえ、これで達者でゐさへすれば、今年四十二の長男がある筈なんです。——えゝ、妻は十二人の子持ちで、人様から羨ましがられる身の上でしたが、どう云ふものか二十五以上は育たないで、一人とられ二人とられ、今ぢやたつた一人になつてしまひました。」

「お幾つです？」

「來年檢査ですが、どうも道樂野郎で。——いゝえ、指物師のとこへ年期に出してありますが、天にも地にも此奴一人が私と婆さんの杖柱なんですが、どうかすんなり育つてくれればいゝと思つてゐます。まあ、此奴がどうにかなるまでは、私も鐵道の方に御厄介になつてゐなければなりませんので。——もう三年辛抱すれば、有り難いことに、私にも恩給が下りますので。」

「ぢや、これからはいゝ事ばかりがあなたを待つてゐる譯ぢやありませんか。」

「まあ順當に行けばですが……。しかし、この二三年私の體も大分弱りましたから、悴の成業をこの目で見られますかどうですか。」

いつまで行つても、この調子だつた。そのまた調子がいやにシンミリとしてゐて、聞く者の心を佗しい靜かな世界に誘ひ込まずには置かなかつた。

「私も素はこれでも横濱で、かなり廣く錫器の輸出商をやつてゐたものですが……。」

唐澤老人の愚痴は綿々として盡きなかつた。

「また十八番が始まつたぜ。」陽氣に發しようとしてゐる古谷老人は、かう云つて彼を窘めた。「折角のお酒がまづくなるよ。」

しかし、私は古谷老人とは異なつた國家を持つてゐた。私には、唐澤老人の愚痴は不愉快な滓を少しも後味の中に殘さなかつた。寧ろ彼の愚痴を聞いてゐると、統一のある哀切な低音の世界へ優しく連れて行かれる悲哀の快感さへあつた。彼の愚痴は、妙に實感を唆らなかつた。語弊はあるかも知れないが、一種藝術的なタッチをさへ私の心の上に殘した。さう氣附いて觀察すると、唐澤老人は愚痴を悲しんではゐなかつた。彼は愚痴を享樂してゐるかに見えた。愚痴を云ふことに、喜びと云ふか慰めと云ふか、兎に角一種の悲しい快感を味はつてゐるかに見えた。思ふに、素面で愚痴を云ふことは、彼にとつて餘りに實感があり過ぎて恐ろしいのではあるまいか。しかも運命の冷遇にばかり馴れて來た彼の心は、實感をエリミネイトした悲しみの情調や悲しみの豫感のうちにのみ、甘美な故郷を見出すのではあるまいか。實際彼は悲しみや苦しみや不幸やを味ひ樂しむ一種不思議な機能を、いつとはなしに自身のうちに育て上げて來たのではあるまいか。さうしてその實感をエリミネイトするものが、彼にあつては酒ではないのか。——私はそんな氣持がして來た。だから、唐澤老人の愚痴はちつとも厭ではなかつた。と云ふよりも、私の企てた酒宴を、彼流に享樂してゐてくれることを喜んだ。

が、醉ひの進むにつれて、唐澤老人も愚痴一色ではゐられなくなつた。と云つて、お上手一つ云へるではなし、唯菊正の味が舌に適したらしく、チビ〳〵舐めるやうにやつてゐる樣子がいかにも天眞で樂しさうだつた。和服を着ると、布袋のやうに見える體付——いや、顏がホンノリ上氣して、流石昔大所の旦那であつたらしい大腹と品位とが自と再び返つて來るやうに見えた。が、醉つたからと云つて、聲を高くするでもなく、一人ニヤ〳〵笑ひながら

「え？　伜ですか。えゝ、まあお蔭さまで、手前はまんざらでもないさうですよ。親方の云はれるには、道樂をするくらゐの者でなければいゝ職人にはなれねえツてね。しかし、そこがまた心配ですよ。同じことなら、ねえ旦那、堅造で腕のいい職人になつて貰ひたいでござんさあ」と、相變らず低い調子で、しかし嬉しさうに述べて行くのだつた。私は見てゐて、唐澤老人の心では今、喜びの波が徐々としてさゞ波を立ててゐるのを感じた。彼の喜びは影のうち、半音の中にのみおるやう

に感じられた。明るみへ出せば、酒一杯に歌はうとすれば、果敢なく消えてしまふ泡沫のやうなものに感じられた。こつちがその氣で耳を傾けさへすれば、唐澤老人の醉ツぷりには、蟹の泡ほどの低い喜びの音樂が奏されてゐるのだつた。盃を舐めるやうにしてゐる飲み方や、肴に滅多に箸を附けぬ食べ方も、確にこの彼の主調音に愼しく伴奏してゐるものに違ひなかつた。

やがて

「あゝいゝ心持だ。—御免なさいよ。」と云つたと思ふと、唐澤老人は人目に附かぬ隅の方へゐざつて行つて、弱々と體を縮めてゴロリと横になつた。すぐ年寄らしい鼾が聞え出した。妻は褞袍を擴げて、彼の足の方に立つた。

あとは、古谷老人の一人舞臺だつた。

彼は酒量もずつと多く、醉ふと歌ひたくなる性らしかつた。

「奥さんは長唄の方ですか。」などと頻に三味線を欲しがつてゐたが、どうしても妻が應じないので、しまひには一人で小唄を三つ四ついゝ氣持さうに歌つたりした。果ては立ち上つて、棚の達磨さんか何かを踊つて見せた。さういふ踊を初めて見る妻や女中達がお腹を抱へて笑ひこけた。

「では、今度はベビ子さんに、章魚の踊を一踊。」と云ひながら、赤い扱帶を借りてスッポリ頭から被ると、眞赤な顔から唇を尖らせ尖らせ、手をふるはせて伸び縮みしながら百面相の眞似をして見せた。

四

二老人招待の催しは、私の豫期以上に二人を喜ばせた。

「どうも昨晩は有り難うございました。すつかり命の洗濯をしちやいました。」

同じやうなことを云つて、二人から禮を云はれた。まんざらお世辭でもないらしいのは、その後古谷老人が女中に語れ、「あのお酒はどこのだい。」と聞いたさうであつた。酒も氣に入つたか知れないが、それ以上に、自分自身の口から云ふのは變だが、附き合以外の家庭から招かれたと云ふことが、二人を喜ばせたらしく私には思はれた。

對内的にも、妻は稍取り澄してゐて三味線を彈いてやらなかつたことを、後々まで後悔してゐた。

「ね、來年も招待しませうよ。今度は私もお望み通り、一緒になつて騷ぐわ。」

私は或意味で、妻にいゝ教育を施した結果になつたことを知つて喜んだ。女中達まで、人と親しくすることの愉快を知つたらしく、家へ使ひに來る人達への當りなどもどこか柔くなつたやうに見受けられた。

三月になつた。或日、踏切を通り拔けようとすると、ひよつくり古谷老人が姿を現して、

「旦那、お陰さまで、悴もやつと昨日免狀を戴きました。」と云ひながら顏中を皺にして見せた。息子と云ふのは、岩倉鐵道學校へ通つてゐたのだつた。

「そりやお目出度う。あすこを卒業すれば、食ひッぱぐれがないから安心ですね。で、もう口は極まりましたか。」

「えゝ、地方へ行く氣なら明日からでもあるんですが、出來るなら手許に置きたいと思ひましてね。」

「そりやさうでせうとも。――兎に角、これからはお樂しみですね。」

「あと二三年はさうも行きますまいが。」

月が四月にはひつて間もなくだつた。私が風呂にはいつてゐると、古谷老人の聲が聞えた。例によつて、お茶を屆けに來たらしく、夕方で臺所に出てゐた妻をつかまへて

「奧さん、喜んで下さい。悴もいよ〳〵何とかと云ふものを戴いて、仙臺に行くことに極りました。」と聲をはずませてゐた。

「まあ、それはよござんしたこと。でも遠くへお手放しになるのはさぞお辛いでせうね。」

「えゝ、東京へ置いといて貰はうと思つて隨分頼んでも見たんですけど、初手からそんな贅澤を云へた義理でもありませんし……。それに、ものは若へやうでさ。世間にや唐澤さんとこ見たいなこともあるんですからねに」

「唐澤さんとこつて？」

「まだ御存じないんですか。あすこの伜さん、検査に當つちやつたんです。何でも惡くすると、朝鮮へやられるかも知れないと云ふんで、爺さんすつかり悄げ込んでしまつてゐます。」

「まあ、そりやお可哀想に。――ちつとも知りませんでしたわ。」

突然フライパンの中で油の飛び上る音が、二人の會話を遮つた。

唐澤老人の不幸は、しかしそれだけでは濟まなかつた。夏が來ると、息子が脚氣を踏み出して歸つて來た。老人とは似ても似つかぬヒョロ長い姿が、入口に垂らした古簾の隙から覗かれた。蒼い生氣のない顔色をして、口をしじゆうあけてゐた。

「いかゞです？」

水氣の來る脚氣だと、よく利く療法を實驗的に知つてゐたので、私は一度踏切小屋へ容態を問きに行つたことがあつた。しかし生憎彼のは空脚氣だつた。

朝早く墓地へ散歩に行くと、ションボリと一人で朝露を踏んでゐる息子の姿をよく見掛けた。が、二人は面識がないので、默つて別れ別れした。

そのうちに、パッタリ見なくなつた。動けなくたつたらしく家の前を通ると、いつも蒲團の上に寢たり起きたりしてゐた。力なく團扇がハタリ〳〵動くのが見えた。日中肌脱ぎになつてゐる時などには、傍には、湯から上つたばかりのやうな赤身の枯を、申譯だけに手拭で隱したお神さんが、肋骨が一枚〳〵數へられた。大抵見てゐると、一日毎にぢり〳〵ぢり〳〵息子の生氣が、お神さんの肉體のうちに吸ひ取られて行くのが感じられるやうな氣がした。

九月にはひつた或日、唐澤老人の家の戸口に、「忌中」の簾が殘暑の厳しい日の光に白々と照らし出された。

唐澤老人の打ちのめされやうと云つたら無かつた。急に背中が丸くなつてしまつた。それでも一日も休まずに、鉢卷をしながらも踏切の桔槔の上げ卸しをしてゐた。が、桔槔につかまる時の外は、小屋の中に蟲のやうにぢつとしてゐた。

「どう云ふもんですか、息切れがして……。つひぞ今までにないことで。」

それだけ云ふのも大儀さうだつた。近くのステーションを、電車なり汽車なりが出たと云ふ知せのベルが小屋の中に鳴りわたるとは、ズルッと洟をすゝつて、草履をズル〱引き擦りながらノロ〱と小屋を出るのだつた。見た感じが、どこか足が浮いてゐた。唐澤老人の歩くあとには、何かしらスッとあとに殘るものが氣はひに感じられた。

「氣の毒だが、もう永いことはないぜ。影が薄いや。」私は妻に云つたりした。

「いやアねえ。」彼女はいたましさうに眉根を寄せたまま、私とこんな話をすることさへ、老人の命を縮めさうな懼りを感じて、目を伏せてしまふのだつた。「あんなに恩給のことを樂しみにしてゐたんだから、せめて一月か二月恩給を取らして上げたいわ。」

その後、妻は、唐澤老人の好きさうなものが出來る度に、女中に云ひつけて小屋まで持たせてやりやりした

人間の生命に對する本能的な執著力と云ふものが、どんなに強いものかと云ふ生きた證據を、私は唐澤老人の上に見たやうに思つた。秋と共に、彼は徐々に體力を恢復して行つた。少くとも、トボ〱と歩くあとから、何かしらスット陰氣が殘るやうな影の薄さだけは拭はれたやうに消えてしまつた。しかし、悲しみの影はどこかに殘つてゐた。後姿は、殊に寂しかつた。

やがて冬の寒さと一緒に、喘息と、新らしく得た心臓病とが、情容赦なく彼の體を痛め附けた。肥つたないに、唐澤老人は骨立つて來た。アストールでも抑へ切れないやうな喘息の發作が、いつにもなく彼を苦しめた。老人の目は險しくなつた。

十二月にはいつて、また私の誕生日が近附いて來た。私は主觀的に考へて、前年よりも今年の招待の方が、唐澤老人に

とつて慰安的な意味でより必要であることを思つた。――ところが、都合悪く、今年はその日が、老人の非番の日でなかつた。で、一日繰り下げて、此六日の晩に催すことになつた。幸ひ、若狹の松葉蟹がその日の午前に届いた。

例によつて、二人は揃つてやつて來てくれた。湯上りの皮膚が、電燈の光に艶々と幸福さうに輝いてゐた。一目見た時から、唐澤老人の目の上の肉が、グイと拇指で押された程窪んでゐるのに私の注意が行つた。そこから、憔悴の氣が漸一面に擴がつてゐた。しかし、光線の加減かしら、とも私は考へ返した。

古谷老人は、去年と少しも違つたところはなかつた。が、意外なことに、唐澤老人も、思つたより――いや、去年よりも寧ろ陽氣なくらゐだつた。

「喘息にお酒大丈夫？」

少し飲み過ぎると思つたのであらう、妻が私を次の間へ呼んで聞いた程だつた。――何かの話から、彼女が恩給の話を持ち出した。すると、唐澤老人は

「いゝえ、もう恩給なんか當てにしてゐやしません。」

「あら。なぜですの。」

「なあに。」と古谷老人が引き取つて、説明を始めた。「何でも來年匆々、我々の淘汰があると云ふ噂があるんです。六十上の者はみんなよさせられる……。しかし、そりやまだハッキリ極まつた譯ではないので、噂だけなんです。それをこの爺さんはすつかりもう極まつたことのやうに考へて……。えゝおい、取越苦勞なんかしなさんなよ。」

「うん、うん。」とそれには頷いて置いて、「家ぢや婆さんがシツカリ者だからな。」

「ハハハ……。」

この話は、私達夫婦の心に一抹の暗影を落したが、唐澤老人の他意ない樣子に、その場はぢき外のことに紛れるともなく紛れてしまつた。

やがて、妻が三味線を抱へさせられる程、一座は賑かにはしやいで來た。しかし、長唄以外を弾いたことのない彼女は

すぐ古谷老人の望むやうな意氣なものは、一つも彈けなかつた。
「ぢや、絃なしで一つ。」などと云つては、彼は端唄や小唄を幾つか歌つた。
「では、私も一世一代をやりませう。」突然唐澤老人が云ひ出した。さうして目尻に可愛らしい皺を寄せながら、「奥さん、濟みませんが、石橋を彈いて下さいませんか。」
「石橋？」古谷老人が大袈裟に仰反つて見せた。妻にしても、石橋とは意外だつた。が兎も角も、望み故彈き出した。唐澤老人の聲は、割に丸味のある、若い時は相當いゝ聲だつたらうと思はせる名殘があつた。が、節廻しに至つては、ふだんの喋り方と同じく、悠長を極めたものだつた。妻は、お辭儀の長い人と短い人とが互に頭の上げ卸しに食ひ違ふやうに、撥捌きに面喰つてゐた。しかし、第三者から見ると、その混亂のうちに、親しい滑稽味があつてよかつた。
　そんな鹽梅に、二人は十時過ぎるまで、心から愉快さうに遊んで行つてくれた。そのあとで、私達も一風呂浴びて、片附け物は明日のことにして寢た。
　ところが、翌る朝、私はけたゝましく
「あなた、あなた。」と妻に搖り起されて目を醒した。「あなた、唐澤さんが……。」
「うん？」
「唐澤さんが、昨夜首を吊つて死んだんですッて。」
「どこで？」私はガバと起き直つてゐた。
「踏切の上で。」
　踏切の上と聞くと同時に、見馴れた松の樹が、私の瞳の中に低く枝を擴げた。
　自殺の話を聞く度に、私はいつも一度は、死ななくとも濟んだらうにと思はないことはなかつた。しかし、唐澤老人の場合だけは、「無理もない」と云ふ氣持が一番最初に胸に來た。無論、老人が自ら命を縮めたことは悲しかつた。が、挨拶をして行つてくれたことが、別の意味で嬉しかつた。（をはり）



續軍港行進曲

宇野浩二

一

或晩、私が机に向つてぼんやり坐つてゐると、私の膝の上に眠つてゐた飼犬のルビが、突然耳を立てゝ、庭に向つてゐる障子の隅を嗅ぎ始めた。

「ルビ！」と私が隣の間に寢てゐる母の目を醒まさぬやうに、抑えた聲でたしなめると、彼は振向いて、何か訴へるやうに頭を下げながら、私の方へいざり寄つて來た。

その時、私はふと氣がついたのであるが、それと共に、「おにい……」と聞き馴れた聲が、微かに私の耳に聞えたやうに思つた。私は立上つて、そッと前の障子を開けて、縁側の外の暗に聞耳を立てた。その聲が横須賀から聞えて來る筈がなかつ

た。私は呼吸を凝らして、庭に飛び下りさうな犬を抱き上げながら、暗に向つて、

「だれ？」と小さい、しかし詰るやうな聲をかけて見た。

もう疑ひなかつた。

「お兄イちやん、あ、た、し、あたし、きみ子よ。」彼女の聲だつた。

「ちよつとお待ち、」と私は低い聲でいつて、部屋の中に引返し、靜かに後の障子を閉めて、犬を自分の坐つてゐた坐蒲團の上に下ろした。そして、「ルビ、待つてるんだよ、」と頭を叩きながら、その私の言葉を聞き分ける犬にいつて、そツと玄關に出て行つた。戸に附けられてあるベルを鳴らないように抑えて、一尺足らず開けた戸の間から路地の裏口へ行つて見た。すると、彼女はその中迄入つて來てゐた。夜目にも藝者らしい厚化粧した顏が、心配さうに呼吸を切つてゐた。

「どうしたんだ、今頃？」と私は分り切つたことを聞いて見た。

「どうしたつて、逃げて來たのよ。」

「……兎に角家へ入らう。」

「駄目！」と彼女は吐き出すやうにいつた。「横須賀の追手が來やしなかつた？」

「追手」と聞いて、私はぎよツとしたが、「それにしても……」といひかけるのを、

「駄目、駄目よ」と彼女は遮つて、「未だ來ないけれど、夜中にも來るかも知れないし、それに、あたし、もう母さんに會ふの厭だわ。お兄ちやん、直何處かへ連れてつてよ。」

さういはれると、私も一刻もぢつとしてゐられないやうな危險を感じたので、あわてた聲で、「ぢやあ、お前そこの角で待つてて。僕ちよつと母さんに斷つて來るから」といひ捨てて、私はそつと家の中へ入つた。足音を盜んで玄關を上つて行くと、いつの間にか母が起きて來てゐて、不安さうな顏をしながら、

「誰か來たか？」と聞いた。

「いえ、その、一寸困つたことが出來たんですが、大したことぢやないんです。一寸これから加藤のとこへ行つて來ます。」

母はすぐ勘づいたらしく、「歸つて來たの……？」と聞いた。

「えゝ、さうなんですが、何でもないんです。加藤の所へ行つて、加藤に賴んで來ますから、母さんは安心して寢てゝ下さい。」私はいひながら、用もないのに 机の上の物を手に取つたり置いたりしながら、「ぢやア、このまゝ、兎に角一寸行つて來ますから、大丈夫です、安心してて下さい。」と母になるべく口を開かせる間を與へないやうにして、不安さうな顏附をしてゐる彼女を見捨てて、そこ／＼に家を出た。

その翌日、加藤の指金で、私の家から一町ばかり離れた或路地の奧に貸間を見つけて、そこに彼女が住むことになり、食事は三度三度母がこしらへてくれる小さなお櫃に一ぱいの飯と、三重の鉢にお茶と香の物を入れたのを、私が家から運んだ。が、それが十日とつゞかなかつた。或日、私がその佗しい貸間の二階で、丁度彼女と晝飯を終つたところへ、家主のお上が變な顏をして、「こんな方が入らつしやいました、」と名刺を見せた。が、私はそれを手に取つて見る前に、身構をするやうな恰好で立上りたから、顫へる手でお上の手から二枚の名刺を受取つた。刑事と何とか組合員といふ肩書があつた。後で聞くと、私の家の近所の商店の御用聞の口から調べて來たといふことだつた。

「兎に角、私たちは何にも苦情をいはねえから、だまつて君子さんさへ返してくれたら、淸く手を打つて歸ります、」と一人の方の男が荒い言葉を優しい調子でいつた。

刑事の名刺を後で加藤が見て、こんなのは僞刑事ですよ、と笑ひながらいつた。

彼女は徹頭徹尾だまつてゐた。默つてゐる時と、ヒステリイを起した後で泣き止んだ時との、彼女の靑白い、高い鼻の横顏は、何ともいへぬ淨い表情を現はした。

私は意氣地なく彼女を階下の入口まで送つて行つた。彼女は相變らず無言のまゝで、二人の男に守られながら、横須賀へ行く前に買つて行つた氣に入りのパラソルを肩に擔ふやうにして、私の目から消えて行つた。

かういふ別れ方は私たちの情熱を煽ることに役立つたばかりだつた。私はその後無理な工面をしては、一層繁々と横須賀へ通ふやうになつた。無論、行つても、彼女を正式に料理屋や待合に呼ぶ譯には行かなかつたから、いつも例の初めて行つた時に泊つた房州屋に宿をとつて、彼女とあひゞきする習慣だつた。房州屋では私たちに好意を持つて、初めの時の表二階でなく、奥の離れの中二階を空けてくれた。そこで、彼女は別れる時、いつも目をうるまして、

「お兄ちやん、いつ迎へに來てくれるの？」といつた。

「出來るだけ早く、」と私はいつた。

「出來るだけ早くつて何日？」

「お兄ちやん、早くお姉ちやんを迎へに來て上げて下さい、」とよく彼女と一所に來た半玉の勝栗までが、芝居の子役のやうに言葉を添へていつた。

「出來るだけ早くぢやア、分らないわ、」と勝栗の加勢の言葉が彼女を感傷的にしたらしく、彼女は涙聲になつていつた。

「だつて、今度はちやんと借金を返して、おほつぴらに迎へに來たいと思ふから、」と私は別に豫算もないことを、口ごもりながらいつた。

「そんなお金お兄ちやんに出來るの？」とヒステリイ獨得のずばりとしたいひ方で、彼女は決めつけるやうにいつた。

「兎に角ね、……まア、この月の末まで待つて見てくれないか。」

「そしたら、お金が出來るの？」と彼女は疑はしさうにいつた。

無論、その時私は心の中に何の準備もなかつた。唯、彼女のヒステリイが爆發することを恐れて、お座なりをいつたの

に過ぎなかつた。ところが、その月の末の或日、私は例に依つて尾州屋の奥の中二階の客になつて、彼女と會つてゐた、午後のことだつた、彼女は昨日の通り勝栗と一所にやつて來て、勝栗が一足先に歸つた後で、一寸した言葉の行違ひからヒステリイを起し出した。一體お兄ちやんはいつから小説を書き出すのとか、こんな風に無理をして會つてゐても、何日になつたらいゝ日が來るのとか、あたしもうつく〴〵世の中が厭になつたから、お兄ちやん一所に死んでくれないとか、それに對して私の答が少しでも曖昧だと、彼女はそのどうにもならないこの世に對する不滿を私に向つて爆發さした。

それは實際どうにもならないものらしかつた。それは彼女の最も愛する者に對する憤りでも、或は又因業な大田原富松に對する憤りでもなかつた。それは大砲を持つて行かうが、軍艦をさし向けようが、どうにもならないものらしかつた。それは、後年、彼女の伯父が東京市長の椅子を拒んだのを、市會の何々派が納得させるといふ程度のものではなかつた。何故といつて、瀧澤行男には市長の椅子を拒みたい理由があつた。が、彼女には憤ることの何の理由もなかつた。しかし、彼女は始終何かえたいの知れないものに憤りを感じてゐたのだ。このえたいの知れないものを感じた人間にとつては、神と共に、世界の隅々にそれが遍在するものに違ひなかつた。

「お兄ちやん、お兄ちやん死ねる？ 死ぬことなど譯はなくつてよ。この扱帶一本で澤山。さあ、あたしをこれで締めて頂戴、さあ、締めて頂戴、さあ、締めてつたら！」

「だつて、死ぬ理由がないぢやないか？」

「どうして、どうして、さ？ あたしがこんなに苦んでゐるのに……。お兄ちやんは死ぬ勇氣がないのでせう。自分の死ぬのが厭なら、あたしだけを殺して、お歸りなさい。さあ、さあ、」といつてる中に、突然私がその一方の端を持つてゐた扱帶を引つたくつたかと思ふと、彼女は自分で自分の首にくる〳〵と二タ廻り程素早く卷いてしまつた。私は必死になつて、彼女と爭つた。

房州屋のその中二階は、開け放つた障子の外はトタン屋根とトタン屋根がつゞいて、三方に貸間をしてゐる他所の二階の部屋が覗んでゐる位置にあつた。丁度秋の演習が終つた艦隊が歸つてゐた頃だつたので、それ等の貸間の借主の水兵の友達を呼んで酒盛をしてゐた。幸ひ私たちの部屋の眞向ひの二階だけが留守らしく戸が閉まつてゐたが、左手と右手の二階では今にも屋根の上まで躍り出しさうな騒ぎをしてゐた。それでも、私は若し人に見られてはと思つて、彼女の首に卷いた扱帯の間に右手の指を三本入れたまゝで、左手で窓の障子を閉めながら、

「待て！待て！と低い聲に出來るだけの力をこめて叫んだ。彼女は本氣で縊めてゐるので、顏色が變りかゝつてゐた。私は全力で彼女の身體ごと抱いて、彼女の片手を痕のつく程強く摑みながら、首に卷かれた扱帯を解きにかゝつた。もう少しで醫者の厄介にならねばならぬところだつた。がさういふ峠を越えると、彼女はふとした機會から、さめ〴〵と泣き出すのが常だつた。涙が彼女のえたいの知れない憤りを洗ひ淸めるやうに思はれた。彼女は私の膝に寄りかゝつて、長い間泣いてから、

「お兄ちやん、君子のわが儘を勘忍してね。」といつた。

その時、勝栗が歸つて來て、部屋の外から、

「お姉ちやん……」と呼んだが、そこに思ひがけない、しかし見馴れてもゐる不穩な光景を見ると、何かいひかけてゐたのを口を噤んだやうに見えた。

「何？」と彼女はきツと顏を上げて、「家で何かいつてた？」

「いゝえ、箱屋さんの常さんがまり子姉さん（彼女は二度目に横須賀から藝者に出る時、マリイといふ洋風の名を慕つて、まり子と名乘つてゐた。）どこへ行つたんだろ、と獨言のやうにいつてましたから……」

「お帳場で何かいつてなかつた？」

「いえ、とうさんが一人で居睡りしてましたわ。」

「さう、ぢやア、あたし直後から歸るから、勝ちやん先へ歸つて、何かあつたら知らしてね。」

それから又一時間程彼女がぐずぐずしてゐる中に、歸りそこねたのが元で、又口喧嘩が始まつた。

「だつて、歸れといつたつて、もうこんなに遲くなつて歸れやしないわ！」

「ぢやア、歸らなくてもいゝぢやないか！」

「歸らなければどうするの？」

「逃げるさ！」

いきほひで、私はいつてしまつた。「だが…………」

すると、彼女は一寸の間ぎくッとした表情をしたが、直決心したやうに、

「ぢやア、待つてゝね。あたし勝ちやんにお人形さんをやつて來るから。でないと、外の千代龍さんや萬作さんたちが取つてしまふから。そして次手にあたしのもの持出せるだけ持出して來るわ。……」

私はその時はもう先に自分のいつた言葉を後悔してゐた時だつたので、忠兵衛が封印を切つた時のやうな思ひをした。

そして、私たちは心中をしなかつた代りに、大田原富松の所謂逃げるには危險極まる一本道を、駈落したのであつた。

秋の最後の歇いた午後だつた。私たちは雨降りの裝ひをした幌の俥で、わざと別々に房州屋を出て、停車場に向つた。私の車が後で、振り向くと、勝栗が町角の漬物屋の前に、氣にかゝる程いつ迄も立つてゐた。私たちが停車場へ着いた時、丁度汽車が出たばかりだつた。しかし一刻も猶豫して居られないので、驛前にゐた自働車の運轉手に、逗子までの賃銀を聞くと、十圓といふので、私が談判を進めようとすると、彼女が後から甲高い聲で、「行きませう、歩いて行きませう、」と促した。行手を見ると、道は驛前の廣場から直に羊腸たる山徑になつてゐるのに驚かされながらも、乘りかゝつた

船とあきらめ、それに好奇心と冒險心に刺戟されて、「ぢやア、歩かう、」と彼女の前に立つて、私の方が稍々ヒステリックになつて歩き出した。山徑は最初から呼吸苦しい程險しく急だつたので、前途が心配されたが、それでも四五町ばかり一と息に上ると、少し下りになつて、やがて山の背骨のやうな平坦な道にさしかゝつた。

「大丈夫、」といつて、私が振り返ると、

「一服しませう、」と彼女は切れ切れの聲でいつて、パラソルの尖の方を私に差し出した。左手は黄色くなつた木や草の險しい崖になつてゐて、右手は赤土の斷崖の下に今逃げ出して來た厳めしい軍港の全景がパノラマのやうに展開した。

長い間、二人は枯草の上に腰を下ろしたまゝ、呼吸切れのする聲で話し合つた。青々とした空と海と陸、空には眞綿のやうに光つて見える白雲――中世紀の畫家たちが、聖母の頭の上に描いた雲だ。誰かその雲を軍港の頭の上に想像したら う！――陸には兵器廠、軍艦製造機、ドック、起重機、煙突、道、停車場、無數の音と響、海には秋の演習を終つて歸つて來た艦隊、そして、見よ、停車場の出店の如くに、孤影悄然と見える一本煙突一本帆柱の軍艦も指摘される。

「お兄ちゃんの好きな橋立艦があそこにゐるわ。」

「うん。」

横須賀から田浦まで一里半――私たちが選んだのが偶然人里を避けた間道だつたと見えて私たちが田浦の驛へ出る迄の間に殆んど人に會はなかつた。田浦の驛を足下に見下ろす崖上に出た時、山徑はそこで盡きたと思はれた程だつた。やつと一本の松の枝を片手に握つて、崖の下を見下ろすことに依つて、目の下に玩具のやうに見える停車場が見出された。だから、そこへ下りて行くのに、私たちは大廻りをしながらも、何度木の根や草の根を足場にして、滑るのを防ぎながら道を辿らねばならなかつたか知れなんだ。が、丁度私たちが山の麓に下りた時、東京行の、私たちが先にで横須賀逃がした汽車の次のが通る時間に近かつたと見えて、待合室の外まで人々が溢れてゐた。私たちはわざと停車場から少し離れたと

ところに避けて、發車の時間を待つた。見上げるやうな崖の下に蔦の繁つた水溜があつたので、その縁に蹲んで水溜に顔を映してゐると、中に蟹の群が遊んでゐた。

「お兄ちやん、東京へこの蟹を捕つて持つて行きませうよ、」と彼女はいつか晴々した顔になつていつた。

それから一年間私は彼女と二人で、東京市外澁谷町の或竹屋の座敷を借りて、加藤の注意で、横須賀の大田原の手の者に見出されないやうに、假名をして暮した。母は丁度私が最後に横須賀へ行く前の晩、郷里の彼女の兄の重病を見舞ひや、私の身のおさまるのを待つ爲に、大阪へ行つたのだつた。三ケ月餘りして、彼女は兄の野邊送りを濟まして歸つて來た時私は未だ身がおさまらず、その竹屋に間借りしてゐたのだつた。

私は横須賀に行く時、私たちの以前に住んでゐた本郷の家をその頃知合になつた近所の夫婦者が近い中に國へ歸るといふので、彼等に留守を賴んで行つたのであるが、横須賀の不首尾の爲に元の家へ歸つて行けなかつた。その間に彼等は、私の僅ばかり殘してあつた家財道具を賣拂つて、夜逃同樣に國に歸つてしまつた。家財道具に未練はなかつたが、私があんなに愛し、又私をあんなに慕つた飼犬のルビは何處へ行つたらう？　それも加藤にいろ〳〵手を盡して探してもらつたが、到頭行方が分らなかつた。

母が大阪から澁谷の私たちの隱れ住居に歸つて來た時、最先に「ルビは？」と聞いた。

「横濱の西洋人が非常に欲しがつたものだから、やりました。その西洋人は箱根に別莊があつて、そこへ連れて行つて大事に育てるといつて居ました、」と私たちは用意してあつた嘘で答へた。が、その後、母が時々思ひ出して、「ルビは今頃どうして居るだらう？」といつた。が、彼女は直思ひ直すやうに、「しかし、西洋人の家なら始終好きな牛肉を食べさしてもらつてゐるだらう、」といつて寂しく笑ふのが常だつた。

その一年間の私たちの生活の艱難は、普通の人が十年間に賦せられる量を、一度に背負はされた重さだつた。彼女は毎

日程泣き且つ怒つた。一口にいふと、私が相變らず貧乏な爲に、私たちの日常生活がいつ迄も不如意であることを憤つた。二十歳を越えたばかりの彼女にとつて、よい着物が着られぬことも、よい家に住まれぬことも、面目い遊山の出來ないことも、悉く憤りの種に違ひなかつた。私は或日加藤に頼んで、彼の家へ勤めに出かけることにした。彼女は座敷の窓といはず、僅一方の開いてゐる縁側に面した三尺程隔つた塀といはず、林のやうに立てならべてある竹材の爲に、晝も夜も同じ暗さの部屋の中で、青春の日を暮すのに堪え兼ねて、僅に南向きの窓が、その前にならべてある竹材が三尺程空けて置かれてあつたので、そこから日光が射して來た。その下に家主から借物の机を置いて、私や彼女の姉やが感傷的な空想の物語を書いてゐる少女雜誌の口繪や挿畫を手本に、水彩繪具で模寫したり、それを鋏で切り拔いたり、又いつかの晩激しいヒステリヤを起して、歯で切々に引裂いた長襦袢の切で人形の着物をこしらへたりして、私の留守の間を潰してゐた。が、ふと彼女が向つてゐる窓に射す竹と竹との間からの光線が、浮々した話聲と足音に連れて、近くの道玄阪に巣喰つてゐる藝者や半玉が通りがゝりに、ぽつとして桃色の影を映して行くことなど珍しくなかつた。すると、彼女の少女雜誌の口繪を模寫してゐる靜かな空想は一瞬の中に破られて、忽ち現實の陰氣な、希望のない生活を反省させられると共に、彼女の疳癖がむら〳〵と起るのだつた。彼女は繪を描いた紙も、半分着物を着せかけた人形も、その場に放り出して、三十圓の月給をとる爲に、——といふよりは、一緒にゐると、彼女にヒステリイを起されることを恐れて、家にゐても出來る仕事を、わざ〳〵毎日出來るだけ早く出て、神田にある加藤の店に出勤し、出來るだけ遲く歸つて來る私を思ひ出した。そして、縁側から飛び下りて近くの自働電話をかけに行くのだつた。

彼女はよく怒る代りに、欺され易い性質でもあつた。それは彼女が世に稀な正直者である證據に違ひなかつた。彼女は私が加藤の家に出入りが出來ないと信じてゐた。それは彼女の二度目の横須賀出奔後は、大田原の家から時々いつかの刑事や何とか組合員が見張りに來るものだと信じてゐた、それは同時に彼女を神田方面へ來させない私の用心でもあつた。

加藤は獨身者でこれもヒステリイのひどい母親と、外に小僧をおいて暮してゐた。彼はよく私にこんなことをいつた。

「あの毎晩表を太鼓を叩いて通る救世軍といふものは馬鹿になりませんよ。しかし、私もどうかすると、いつそのこと、あの太鼓を叩いて、あの歌をうたつて歩いて見たいと思ふことがあります。救はれても、救はれなくても、救はれてると思つたらいゝのですからな。うちの母などあれで確かに救はれてゐます。無學な人ですが、救世軍に入つてから、聖書の文句を寫すやうになつて、あんな難かしい漢字を歪みなりに書くやうになりました。うちの私の机の前に、時々聖書の文句が紙に書いて貼つてあるでせう。しかし、キリスト教は佛教より確かに進んでますね。お經を寫したつて、無教育なものには何にも分りませんが、聖書なら分りますもの。」

私は又いつた。「僕もこゝから歸りに宮益阪下で電車を下りると、あの踏切のところでよく救世軍の歌を立止まつて聞くことがあります。僕等には說教は少し馬鹿々々しくて聞いてゐられませんが、太鼓と軍歌とには時々變な感激のやうなものを受けます。家で女にひどいヒステリイを起されて、打たれたり蹴られたりすると、時々あの太鼓の音を思ひ出して、いつそのこと救世軍へ入つてやらうかなと思ふことがあります。しかし、『唯信ぜよ、信ずる者は救はれん』といひますが、それは信じられないから困ります。僕んとこの奴なども、あれで何かに憧れてゐながら、つまり信じられないから、ヒステリイを起すんぢやないかと思ふんです。此頃は、時々横須賀へ歸るといひ出したり、僞名をしてゐることを大際で觸れるぞといつて脅したりして困らせられます。」

加藤は持前のこほん／＼といふ咳で答へた。その時、彼女から電話が掛つて來た。

「お兄ちやん、」といふ聲が泣聲に聞えた。

「なアに、どうしたの？」と私は出來るだけ彼女の機嫌を損じないやうに聞いた。

「あのね、あたし寂しいの。今日早く歸つてくれない？」

「あゝ、早く歸るよ。」

「早くツて、何時頃？　早くだけぢや分らないぢやないの？」と彼女の聲が急に劍を帶びて來る。

「さうだね、」と私はわざと優しい聲で、「ぢやア、四時にしよう。」

「さう、」と彼女の聲も忽ち優しくなつて、「ぢやア、宮益坂の下まで迎へに行つてるから、屹度、ね。」

そして、私は電話を切つて、加藤の傍に戻つて行つた。『誰にも分る株式相場』といふ本の校正刷が彼の前の、彼の母親が書いた聖書の文句の紙切の貼つてある下の机の上に載つてゐるのを、加藤は頻りに讀んでゐた。

「これは私の一か八かの仕事です、」と彼はいつた。その頃彼の商賣は可成り左前になつてゐたらしかつた。「その代りこれは電車の中まで廣告をしようと思ひます。」

「いゝでせうな、」と私は合槌を打つていつた。

それから、私はやつと思ひ切つて今の電話の話を彼にして、彼の乏しい財布の中から若干の金をもらつた。『誰にも分る株式相場』は景氣がよささうに思へたが、電車の中まで廣告したいといふ廣告費が彼に出來るかと心配になつた。彼の興廢は私の興廢でもあつたからだ。色々金策などの爲だらう、三時過に彼が家を出るのと一緒に、私は金策と五十歩百歩の難しさの、女の機嫌を取らねばならぬことを考へて、『誰にも分る株式相場』の校正刷を風呂敷に包んで、彼と外へ出た。電車が青山三丁目、四丁目と進むに連れて、私は何か消化しないかたまりが胸の中でだん〱大きくなつて來るやうな思ひをしながら、私の思ひに容赦なく、電車は宮益阪を下りて行つた。しかし、何より約束の時間が氣になつたので、停留所の電信柱に掛つてゐる時計を見ようとすると、その下に踞んでゐた彼女が、嬉しさうに手を上げて立上つたのが目に止まつた。

しかし、彼女のヒステリイが段々激しくなるにつけて、他人の家の間借りをしてゐたのでは色々極りの惡いことが起る

ので、私たちは思ひ切つて、代々木の練兵場に近い閑靜な屋敷町に一軒の手頃な貸家を見つけて引越した。その家には二階が一間あつたので、私たちの居間をそこに定め、母は薄暗い階下の部屋に、別れて暮すことが出來たが、それも肉親の目に見えぬ思ひやりが、二階と階下から互に呼吸を計りながら暮さねばならぬやうな日の連續に終つた。

そこは全く閑靜な屋敷町で、前は一戸大將の邸で、右隣は海軍少佐、左隣は何でも下町に店を出してゐる人の別宅とかで、家々に大小はあつたが何れも同じ、可成り背の高い立派な枳殼の生垣に廻らされてゐた。音といふのは時々人がその砂利道を歩く足音と、下の町の方の遠い物音と、稀に練兵場の方から傳はつて來る練兵の號令や突喊や喇叭の響位のものだつた。その間を規則正しい砂利を敷いた道が通じてゐて、朝も晝も人通りは數へる程しかなかつた。私たちがその家に入る時、大家の主人が「この家は實に家相のいい家ださうで、實際又不思議にこの家にお入りになつた方は乾度よくなつてお出になります。これで八代目になりますが、前の七代の方々はみんなよくなられました」といつた。この家相のいい、靜かな目出度い家に來てから、二ケ月と經たない或雨つゞきの秋の日の朝、「そんなら、私はしばらく赤坂の本庄へでも行つて來ます、」といつて、母は蛇の目の傘をさしかけながら、未だ涙の跡のある顏で、枳殼の生垣の間の道を出て行つた。無言で、目だけに物を言はせながら、玄關まで追駈けるやうに送つて出た私は、二階の居間で髮の毛を搔きむしりしながらヒステリーを起してゐる彼女の思惑を兼ねながらも、やつと玄關まで母を送つて出たのだつた。木が腐つて、建てつけの惡くなつてゐる門を、二三度がたがたと搖すり開けて、又がたがたと搖すりながら閉めた後に、門の鈴がしばらくなつてゐる中を、さくさくと砂利の道を踏んで遠ざかる母の足音を、私は聞えなくなる迄聞いてゐた。赤坂の本庄といふのは私の又從兄弟の家だつた。私はその日の午後、彼女の隙を見計らつて、自働電話で本庄にかけた。「今にどうかしますから、もう暫くの間……」と私は顏の見えない母にいつた。「わたしはどんな辛いことでも辛抱するけれど、今のやうではお前が……お前が……」と母の聲がかすれて、そのまゝ沈默した。「もう暫くです、もう……。僕は決心して居りますから……」

實際、その頃から私は次のやうに決心してゐたのだつた。私が彼女に改まつて別れ話を持ち出したところが、到底彼女が承諾する筈はなかつた。唯一の方法は彼女を置き去りにして、私が逃げ出すより外にない。しかし、幾ら心を鬼にしたところが、この家相のいゝといはれはするが、米櫃の中に一日分の米の餘裕もない家に、正直に二日でも三日でも私を信じて待つてゐる女を想像すると、折角の決心も忽ち鈍るのだつた。いろ〳〵考へた末、私は一先づその家をたゝんで、下宿住居をし、彼女にカフヱエの女給の職でも與へてから、逃げ出さうといふ方法を思ひついた。この計畫は稍々安心して考へられ、進行させる氣になつた。すると、妙なもので、そんな話を私の方から切出す前に、彼女の方から、

「お兄ちやん、」と或晩いひ出した。「あたしカフヱエの女給にならうか知ら。お兄ちやんの何處か知つてるカフヱエない?」

「それはいゝ、」と私はいつた。「そしたら、さうしてこれから二年、否、今となつたらもう一年でいゝ、一年辛抱してくれたら、お兄ちやんは屹度一人前の小説家になつて見せるから。」

すると又別の晩には、

「あたし、もう一度藝者に出ようか知らと思ふの、元の土地は厭だけど……」と彼女はいつた。「そしたら、お兄ちやんに月月お金を送つたげるわ。その代り今度はお兄ちやんも辛抱して會はないでね、月に一度位にして。そしていゝ小説を書いてね。カフヱエの女給もいゝけど、君子はもう着物がなくなつたもの、それに收入も少ないし。……」

「だけど、藝者はもういけないよ、」と私は本當にさう考へて、口に出したが、考へて見ると、矢張りそれが當時の私たちを最もよく救ふ方法に違ひなかつた。彼女はどういふつもりでいふのか、今度はなるべく會はない方がいゝといふ、さうだ、さうして、今度こそ私は一人になつて、一生懸命に勉强しようと思つた。長い間心にかゝりながら、離れてゐた文學を思ふ心が、戀人以上の魅力をもつて私の心に沸き返つて來た。

私はいつもかういふ場合の唯一の相談相手である加藤を思ひ出した。彼はその頃例の『誰にも分る株式相場』の出版で

一敗地にまみれて、債權者の目を逃れる爲に牛込の或裏町に逼塞してゐた。彼は私が彼女が又藝者になりたいといひ出してゐるが、前の横須賀逃走のことがあるし、どうしたらいゝだらうと相談すると、

「それは隱れるよりは樂ですよ。」といつて、こほん〱と咳をしながら、「その爲の桂庵ですから。桂庵ですから。桂庵に頼んだら、ちやんと前の話をつけて、又それ〱恰好な所へ向けてくれますよ。」

「でも、大田原が怒るでせう。」と私がいふと、

「なアに、どうせ藝者家の主人ですから、金さへ返したら文句はありません。」

そして、私たちは彼女が初めに世話になつた下谷の桂庵へ行つた。下谷の桂庵がいふには、「君子さんは、前の時神奈川の吉田が半分關係しましたから、矢張り吉田に内所にしておく譯には行きません。幸ひ丁度明日吉田が外の用事で來ることになつて居りますから、早速相談しておきませう。」

吉田といふと、私は久しぶりで、あの八字髭を生やした、善良らしい勳八等の桂庵を思ひ出して、一年の廻り燈籠が一と廻り元の所へ廻つて來たやうな氣がした。私は途で加藤と別れ、下宿へ歸つて、彼女にその日のことを、偶然町で桂庵に會つたことにして話すとその時まで陰氣な顏をしてゐた彼女は忽ち空が晴れやうに上機嫌になつた。私は彼女のその人一倍の喜びの顏が人一倍の憂ひの顏になることを思つて、はら〱しながら、

「だけど、君子、」といつた。「その代りお兄ちやんは屹度今から一年以内に『中央公論』か『太陽』の增刊に、お兄ちやんの小說が出るやうに勉强するからね。それ迄辛抱して待つてるんだよ。」

彼女はうなづいて、「屹度ね。指切りしませう。」と機嫌のいゝ時の證據に子供のやうな無邪氣さでいつた。「それで、お兄ちやんは當分この下宿にゐる？」

「いや、もう少し靜かな、安い下宿へ變らう。どの邊がいゝだらうな。君子の行くのが定つたら、半日だけ一緒に探して

ね？」と彼女の機嫌をとるつもりでいつた。

そして、數日の後、彼女は横濱の或町の藝者家に行くことに定つて、その日が明日となつた晩、私たちは殆ど夜通し泣きながら話し合つた。明け方になつてやつと少し眠つた切りだつた。そして、午前のうちに、二人で下宿を探しに行つて、九段の中阪の途中に適當な部屋を見つけた。彼女が前借した金の中からその約束の手附金を拂つてくれた。それは玄關の直左手の部屋だつた。部屋は直前を阪道の往來に面してゐるので、そこに坐つてゐると、往來の人々の足音が聞えた。私は彼女を下谷の桂庵の家へ送つて行つて、何故か大急ぎでその忙しい玄關脇の部屋に歸つて來て、自分一人になつたことを感じて見ると、久しぶりで人間世界に戻つて來たやうな氣がした。窓の外の往來の足音が頻りに私に何かを催促するやうな氣がした。

二

八年經つた。

八年前、彼女は横濱へ行つてから、半年ばかりの間に、行く前彼女が私と一緒に探してくれた私の下宿の部屋の前に三度現れた。

「お兄ちやん、」と忍び聲で呼ぶのを初めて聞いた時、私はこの前本郷の家で聞いた時より遙かに驚いた。私はこわ〳〵前の窓を開けて見た。すると、彼女は中腰になつて、格子につかまりながら、にこ〳〵した顔を見せた。

「どうしたの？」と私は強く咎めるやうな口調で尋ねた。

「入つてもいゝ？」と彼女は苦のなささうな調子で、甘えるやうに首を傾げた。

「お入り、」と私は澁々いつて、立上つた。直入口の戸を開ける音がして、元氣よく彼女が入つて來た。

「どうしたの、今頃？」

「心配しないでもいゝの、」といひながら、私の机の傍にぺつたり坐つた。机の上には、未だ彼女との約束を果さうとする迄には行かず、相變らず引換へに金になる童話原稿の書きかけが載つてゐたので、私はその上に彼女に見えないように肘を突いて、

「また逃げて來たんぢやないの？」と聞いた。

「今度の家が高松の家よりもつとけちで厭なの。」と彼女はいつた。「それで吉田に賴んで、今度同じ横濱で外の土地の家へ變ることになつたの。それで、明日が御披露目なので、髮を結ひに出た次手に來たの。」

「髮を結ひに出てこゝ迄來たのは大膽だね、」と私は驚いていつた。

「お兄ちやん、」と彼女は私の言葉には注意しないで、「あたし今日は少しお金を持つてるから、その邊を散歩しない？」

「そんな事をして又歸りそびれたり何かするといけないから、ねえ、少しこゝで遊んで行つて、そして大人しくお歸り、」と私はすかすやうにいつた。

結局、それから二人で神田邊を散歩し銀座へ出て可成り遲い電車で彼女は神奈川へ歸つて行つた。

その次は、半年程して、或晩また彼女の聲が私の窓の外に聞えた。その時は意外にも吉田と一緒だつた。吉田がいふには、「どうもこの人は我儘で、これ迄の家が厭だといふので、仕様がないから、今度は神奈川へ住み換へることになつたんです。それで一寸暇が出來たものですから、又一人で東京へ飛んで來られては困ると思つて、私が一緒について來たんです。」そして彼女の方に向つて、「ちやァ、君子さんを明日の午頃までお預けして行きますよ。まさかあんたの家から逃げ出すことはないだらうから、賴みますよ、」といつて、彼は歸つて行つた。私は嬉しくなかつたこともないが、こんな事が今後もしば〳〵あられては困ると思ひながら、約束のその翌日の午頃まで彼女のいひなりに二人で遊んだ。

「お兄ちゃん、どうしてんのよう?」と彼女は思ひ出したやうにいつた。「小説書いてるの? 本當に君子を迎ひに來てくれる?」

「迎ひに行くさ。しかし未だ初めからの勘定で二年が經たないぢやないか。やるよ。屹度やるよ。だから、君子も大人しく辛抱して、さう方々へ變らないやうにしなければ、吉田もいつてたが借金が増えるばかりぢやないか?」……

その時から又三ヶ月程後の或晩、彼女が三度目で私の窓の前に立つて、

「お兄ちゃん、」と例の甘えた口調でいつた。その頃は私ももう彼女に對する愛着が餘程薄くなり、小説が書けるといふ自信が可成りついてゐた時分なので、彼女をこれ迄よりは幾らか邪慳に扱つた。彼女はもう神奈川にもゐなくて、八王子へ變つたといつた。

「どうしてそんなに一つ所にゐられないの?」と私が少し嚴しい口調でいふと、彼女は目の中に涙を一ぱい溜めながら、

「だつて、今度は吉田がいつの間にかそんな風にしてしまつたんだもの、」といふ中にも、彼女獨得の大粒の涙を疊の上にぽた／＼と落した。

「吉田がどうしたの?」と私は久しぶりで彼女に愛着を感じながら、彼女を傍に引寄せて肩を叩きながらいつた。

「お兄ちゃん、小説まだ?」と彼女は泣きながらいつた。この問ひは私に苦手だつた。が、その時私はその二三日前、町で遠い親戚に當る商人に會つて、彼から若し二三ヶ月下宿の心配をしないで勉强したら、「お前はんのその望みの小説とかいふものが書けるのか。そしたら、それからはずん／＼それを書いて出世出來るのか?」と聞かれて、私は自信あるやうに「さうです」とはつきり返事した。すると、相手は「そんなら譯はない、いつでも私の所へお出なされ、まづいもんで辛抱するんなら、三月や四月、二階へ置いたげよう」といふので、「お願ひするかも知れません、その節はよろしく」といつて別れたことを思ひ出した。私は小説の思ひで燃えてゐた。すると、彼女の肩を抱きながら、ふと彼女との過ぎ去つ

た生活を考へたゞけで、これだけでも立派な小說が出來ると氣がついた。

「ね、」と私は彼女の肩を叩きながら、「兎に角、變つたら仕樣がないから、もう暫く八王子で辛抱おし。ね、いつか二年と約束したことがあるだらう、それが後もう一年になつた。今度お兄ちやんは或人の保護で、これから三四ヶ月の間たゞで食はしてもらふことになつたので、その間に乾度書くから、待つて、ね、ね……？」

「本當？」

「そら、あの中川といふ人だよ。いつかお前と一緒にお金を借りに行つた吳服屋さんだよ。あの人に二三ヶ月前町で會つて、そんな約束をしたんだよ。そして、書いたら、高木がいつでも一流の雜誌に紹介するといつてくれてるんだから、ね、幾ら遲く見つもつてももう半年の辛抱だ。」そして私はふとある事を思ひついて、「ぢやア、君子は今夜ここで泊つてお出で。僕は今夜ツ切りこの下宿を明け渡すつもりでゐたんだが……無論、拂はないさ、今夜は金をこしらへに行くといつてここを出て、そして、明日はその淺草の家へ行くつもりなんだ。」

「ぢやア、あたしどうしようか知ら？」と彼女は心細さうな顏をしていつた。私は實はその下宿を出るつもりはしてゐたのだが、彼女にその豫定の期日を一日早くいつたのは、その晩一と晩でも彼女と一緒に泊つて、若し翌日になつて彼女に氣が變られ、もう八王子へ行かないなどといはれることを恐れてだつた。そこで、

「今夜は君子は泊つた方がいゝんだらう？」と優しい言葉で、「しかし困つたなア、お兄ちやんは今いつたやうに、今夜金をこしらへに行くと、さつきお上に約束しといたんだから、今度歸つて來た時は金を持つて歸らねばならんし……」とわざと困つたやうに腕を組んで、「さうだ、しかし、君子は別にそんなことに關係ないんだから、こゝへ一人でお泊り、女中にちやんと賴んでおくから。そして、これから二人でそこらへ散歩に出ようぢやないか、お兄ちやんの寢床を敷いといて。そして、後でお兄ちやんがこの近く迄送つて來てやるから、君子は一人でこゝへ歸つて寢て、明日早くお歸り、ね、

女中に早く朝の御飯をこしらへるように頼んで行くから、」といふと、彼女は一寸顏色を曇らしたが、これから、所に散歩に出るといふことに慰められて、

「ぢやア、さうするわ、」といつた。彼女の高い鼻の橫顏がその青白い顏色の爲に効果を添へて、私の心を痛ました。

その晩、二人で散歩して、私は彼女がそのヒステリイ獨得の直覺で急に私の嘘を察して怒り出しはしないかとびく／＼しながら、彼女を下宿の方へ送つて行つた。「ねえ、もう半年辛抱おし。そしたら、屹度お兄ちやんは小說家になるから。ぢやア、こゝでね、」と阪の下の、下宿屋の見えるところで立止まつていつた。彼女も立止まつた。角の水菓子屋の方を見てゐる彼女の切の長い目が、うるほつて來さうな色に見えたので、私は彼女の肩を叩いて、一層優しく、「ぢやア、あそこで待つて、明日の朝、女中に頼んどいたけど、御飯を食べてお歸りね、あそこの下宿の御飯は久しぶりだらう、」といつた。

彼女は橫濱に立つ前の日、その下宿で私と別れの飯を食つたことがあるのだ。

「ぢやア、さよならね、今度のところは半年屹度辛抱するんだよ。」と私はいつた。

彼女はだまつて默頭いた。

「ぢやアね、誰か出て來たらいけないから、さよならね。行きなさい、」と私は胸の痛くなるのを感じながらいつた。

彼女は默つて、お辭儀をして、阪道を上つて行つた。私は一瞬間よく記憶するやうにその後姿を見詰めて、そして踵を返した。それが最後だつた。その翌朝、可成り早く、彼女にもう一度會ひたくなつて、私は下宿へ歸つて行くと、寢床は空になつてゐた。女中に聞くと、「今朝早くお歸りになりました。御飯をいつたんですけど、食べたくないといつて、」とのことだつた。私はぐツと來るのを、唾に呑み込んで、八王子なら飯田町だ、追駈けて見ようと思つて、「もうどの位前？」と聞くと、「一時間以上前です、」と女中はいつた。彼女は昨夜眠らなかたのだ。さう思つて、私は部屋の戸を閉めて、机の前に俯伏せになつた。

實際、私はその日の午後、無斷で手廻りの物を持つて、その下宿屋を逃走したのだつた。そして、半月後には生れて初めての小說を二篇まで書き上げ、その二篇とも、それを紹介してくれた友達並の、相當の原稿料も貰ひ、そして生れて初め雜誌社から小說の原稿を賴まれたのだつた。私は世話になつた淺草の商人の家を引上げて、無斷で逃走した前の下宿の負債を拂ひ、別に牛込の下宿に移つて、赤坂の親類に居候してゐた母を、同じ下宿に別に一間借りて迎へたのであつた。今になつてその頃のことを考へると、澁谷の家相のよい家の八代目の幸運を得つゝあつたのに違ひなかつた。私はそこで、初めて雜誌社から賴まれた原稿を書く爲に、原稿紙を持つて潮來へと出かけた。私の創作慾は綱を放たれた駒のやうだつた。三日の間、風が吹くと地震のやうに搖れる粗末な宿屋の二階の部屋で、所謂水鄉の眞菰の中を通る川蒸汽の風景にも目を止めず、夜になると遙かの遊廓から流れるやうに聞えて來る潮來節の三味や太鼓にも耳をかさないで、一氣に百何十枚の小說を仕上げて歸つて來た。彼女との二年間の艱難な生活を書いたもので、書いても書いても書き切れないで、それだけを前篇「苦の世界」と題した。下宿住居ではあつたが、私は好みで二階の日の射さぬ暗い部屋を自分のに借り、明るい南向きの二階の部屋を、誰に邪魔されることなく、近頃急に年とりはしたが、邪はれない明るい顏になつて來た母の部屋へ、私は元氣よく歸つて行つた。

「どう、早かつたね、」と彼女は縫物をしてゐた眼鏡を外して、南向の窓を背にしながら私に座蒲團をすゝめながらいつた。

「えゝ、一と切りの所まで出來たので歸つて來ました、」と私は潮來土産を彼女の前に並べながらいつた。

しばらくして、母が、

「あの、さうさう、昨日君子が突然入つて來てね、」といつた。

「えツ?どうしてこゝの所を知つたんでせう?」

「新聞で見たとかいつてたわ、」と母はいつた。「お前がゐると思つて入つて來たら、私がゐたもんだから、びつくりした顏

をしてたわ。だけど暫く話をしてゐて、丁度御飯時分だつたから、あの子の好きな玉子燒で御飯を出してやつたら、食べて歸つて行つたが、私がもうお前も大分年をとつたんだから、これからは大人しくして、時々遊びにお出で、二三日前に旅行に出たけれど、……そして今どこにゐるのと聞くと、横濱にゐるんだといつてゐた。大變大人しくなつてゐたやうだつた。私のいふことを、無口な子だから、默つてうなづきながら聞いてゐた。何だか、しかし、しを〳〵して歸つて行つたから可哀さうだつた。」

それが八月のことだつた。その後、一度横濱から手紙をよこしたかと思ふ。

すると、十二月の或朝、私が未だ眠つて居た時分だつた。その頃同宿してゐた友達の高木の聲で、「おい〳〵、大變なことがあるよ、」といふ聲の中は、私は未だ眠さの中でぼんやり聞いてゐた。が、高木の聲がつゞいて、「起き給へ、君、君のヒステリイさんが死んださうだよ、」といふのだ。

私は寢床の中からむつくり起き上つた。高木のいふところに依ると、彼の中學時代の友人で、彼女が横須賀に出てゐる時分に知つて、彼女に戀慕して、その後始終彼女の後を追つてゐた者があつて、その人の話に、彼女が横濱の或西洋人の家に小間使に行つてゐたのが、鼠の團子を食つて自殺したといふ新聞記事を讀んだといふのである。原因は主人に叱られたのを苦にしてとある、名前は瀧澤まり子とあつたが、確に彼女に違ひないといふのだ。

「君のあの人は矢張りいゝ人だつたんだね、」と高木は默つてぼんやりしてゐた私に向つていつた。『苦の世界』はやつぱり苦の世界で幕を閉ぢたね。」

「あゝ。しかし、彼女のやうに生れた者は、少しでも早く死んだ方が幸福かも知れない、」と私はいつた。

私の心は限りない悲しみの淵に沈んだ。

「後で散歩にでも行かう、起き給へ、」と元氣をつけるやうにいひ殘して、友達が出て行つた後も、私は長い間考へる力を

失つたやうにぼんやりしてゐた。

「しかし、彼女のやうに生きた者は、少しでも早く死んだ方が幸福であるかも知れない」と私はさつき友達にいつたことを反復して考へてゐた。そして友達が「あの人は矢張りいゝ人だつたんだね、」といつた言葉に就いては餘り考へないでしまつた。彼女は私と一所にゐる時、ヒステリイを起した後で、いつもの癖のやうに、「あたしは長い間生きてはゐないつもりだ。やがて無緣墓になるだらう、」といひいひした。私はその頃、彼女の發音がいつも泣聲だつたので、「むえんばか」といふ言葉が、「むゑんばア」といふやうに聞えて、それにヒステリイのいふことだから餘り氣に止めてゐなかつた。が、その頃から既に彼女は無意識の中に自分の最後を豫言してゐた譯だつた。いつか私が頼んで彼女の家へ加藤が行つてくれた時、彼女の母が死んでも私の家へは引取らないつもりですといつたといふことも思ひ出した。そして、私も亦彼女は死んだ方が幸福だと考へたのであつた。恐らく彼女の生みの父母も、勅選議員の伯父も、市長になつた伯父も、兄弟も、皆彼女の死を希つてゐたのかも知れない。そして、唯一の夫だつた私も。

私はその後、彼女の所謂「行伯父さん」が東京市長になる時ごた〳〵して、久しぶりで無緣墓の彼女を思ひ出した。

「行伯父さん」が何度も何度も市長を斷るといふ話を新聞で讀みながら、

市長さん、市長さん、三度ロンドンの市三度ロンドンの市長さん——

といふ文句を私は口の中でうたつてゐた。それは私がロンドンのホイッチントン市長の物語を童話に書いた時、彼國の詩をその中で飜譯した時の文句なのだ。誰もさうかも知れないが、私はよくさういふ文句を、口の中でうたつてゐる。私はそれをうたひながら、「行伯父さん、行伯父さん、三度ロンドンの市長になつたホイッチントンは一疋の猫の命を惜んで出世したが、三度市長を辭退した日本の東京市長の行伯父さんは、一人の姪の命を惜まないで出世した、」と考へた。——

だが、それから八年經つて、私は軍港のことも、別れた女のことも殆ど忘れて暮した。その間、私は私自身の營みに沒頭してゐたのだ。八年後の或晩、私は久しぶりで横須賀へ行くやうなことが起つた。それは一年に二三度催される中學校の同窓會が、東京から離れたそんな軍港の町で開かれたのである。といふのは、その年の夏、私たちの中學校のクラスメイトで、海軍の軍人になつてゐるものが、先にいつた矢崎や風早の外に五人もあつて、それが偶然五人そろつて、その夏珍しく歐羅巴へ廻航する練習艦隊に參加するといふので、不斷滅多に同窓會などに出られない彼等の送別會といふ名を兼ねて、四谷の三河屋で催されたことがあつた。その時私は差支へがあつて出られなかつたのだつた。

それが十二月、遠洋航海を終へて、彼等が凱旋軍人のやうに歸つて來たのを機會に、今度在京の同窓生たちが横須賀見物を兼ねて、そこで會が催されることになつた。會の案內狀に、「尙十二月の末日、英國へ留學を命じられて出發する矢崎勇太郎君の送別會をも兼ねたれば、萬障繰合せ御出席を希望す、」といふ外に、「有志の人々は當夜一泊して、翌朝三笠艦を見物さるゝ便あり、」としてあつた。會場は例の『あづま』だつた。風早はその數年前飛行機の研究に佛蘭西へ行つて留守だつた。可成りな盛會だつた。彼の噂から飛行機の話が出て、

「飛行機といふと墮ちるものにきまつてゐるやうなものだね。」と帽子會社の重役をしてゐる男がいつた。

「馬鹿いへ、」と海軍士官の一人が受けて、「十年前と今ぢや丸切り違ふぞ。今ぢや交通機關としても、飛行機が一番安全といふことになつてゐるんだぞ、」と軍人流の言葉で答へた。

「さうかね。どうだか、危いもんだな、」と外の男が他の席から疑はしさうにいつた。

「いや、それは貴様だちが知らないからだ、」と別の海軍士官が傍から眞面目に訂正するやうに、「貴様たちは新聞で稀に飛行機の墜落する記事を見て、飛行機は始終墮ちるものと思ひ込んでゐるんだが、新聞には每日飛行機が日本中で何台飛んでゐるか出てゐはすまい。一遍追濱あたりへ見に來るんだな。」

「なる程ね、」と帽子會社は感心したやうにいつた。「さういへばさうだな。ところで、どの位の率で墮ちるものなんだ？」

「さア、素人にはどういつたらいゝか、」と士官は一寸首をひねりながら、「さうだ、まア一年中朝から晩まで飛んでゐるとして、一度位完全に墮ちる程度かな。機械の故障なんか、今は平氣なんだよ。」

「本當かね？」と離れた席で婦人科醫師が直隣の機關少佐に聞いてゐた。

「そんなものだらう、」と士官は尋常茶飯事らしい調子で、「率といへば、一番安全なのは飛行機で、次が船、それから汽車、自動車といふ順だらう。潜航艇が今のところぢや一番危ないかな。……」

私はその時矢崎の隣の席の主が立つたので、その跡へ行つて、「しばらく、御無沙汰、」と挨拶した。「いつか君たちに世話になつてから、もう八年になるよ。」

「さう、丁度滿八年だな。あれから未だ一二年ごたごたしてたらしいぢやないか、」と矢崎はいつた。そして、ふと思ひ出したやうに、「さうさう、貴樣に一度知らしてやらうと思つてつひ忘れてゐたんだが、あの時分勝栗といふ半玉（ハーフ）がゐたらう、あいつがもう立派な姐さんになつて、幅をきかしとをるぞ。今年二十三とか四とかいひよつた。あの時分はたしか十四五だつたからな。あいつが會ふと、貴樣の話をして、是非一遍會はしてくれといつて聞かないんだ。今日は丁度いゝ機會だ。未だ來てゐないやうだが、今日土曜日だから宴會デイで忙しいんだらう。もう來るよ。あの時分よく貴樣たちの用事に使はれとつたね。」

「横須賀にはその後すつかり御無沙汰してしまつたよ。未だ橋立は停車場のところに繋がれてゐるかい？着いた時は日が暮れてゐたので、氣をつけて見たが分らなかつた、」と私が稍々感傷的な氣持になつていふと、

「馬鹿いへ、」と矢崎は飮めぬ質らしく、それにもう長らく陸上勤務をしてゐるので、外の士官と比べるとずつと白い顏色

をしてゐた。それが役者のやうな顏立なので、先から『武雄さん』と綽名をされてゐた。「あんなぼろ艦はとつくの昔に鍋や釜か、釘かになつてしまつたゞらう。」

「さうかな、些か無情を感じるな。拂ひ下げたといふ譯だね？」

「何でも大阪の古鐵屋だ。あれで、買つても廻送に金がかゝるんだよ、軍艦となると。」

「さういふと、俺たちの中學時代に西村といふ男がゐたぢやないか、矢張り古鐵屋で。支那の分捕軍艦の廻送を貰つて儲けたといふので、みんなで冷かしたことがあつたぢやないか？」

「さう〳〵、俺もあいつの家の前へ見に行つたことがあつた。貴樣よく覺えとるな、流石文士だ、だが、この軍艦といふやつは決して東京の商人は買ひに來ないね。大阪の商人に限るんだ。」

「そんなものかな。しかし、俺だつて金があつて、海岸に別莊でも持つてゐたら、橋立位の手頃の艦なら、買つて繋いでおきたいな。困つたらホテルにでもするさ。」

その頃は、宴會はもう大分亂れ出して、離れた所から盃を投げ合ふものや、はやり唄などをどなり出すものや、藝者を相手に拳を打つものや、次第に騷がしくなり始めた。その時、ふと部屋の眞中に一とかたまりになつて飲んでゐた連中の一人が、突然『黄海の歌』をやらうといふ聲の終らない中に、盃を投げ合つてゐたものも、拳を打つてゐたものも、はやり唄をうたつてゐたものも、一度に「煙も見えず」の合唱に落ちた。恐らくこの幼稚な軍歌はそこに集まつてゐた人たちの少年の頃の最も馴染(ファミリア)な歌に違ひない。それは海軍士官にも、帽子會社の重役にも、婦人科醫師にも、土木技師にも、辯護士にも、等しく少年時代の回想を促したに違ひない。彼等は宴會に特有な感傷的な氣分になつて、立上つたり、足踏をしたり、拍手したりしながら、合唱をつゞけた。それに海軍軍人を迎へ送る宴會にはそれが最も適當な歌とも思はれた。しかし、歌の記憶が時々切れると、海軍士官の音頭でつゞけられた。

副艦長の過ぎ行くを、
痛む眼にみとめけん、
苦しき聲を張り上げて、
彼は叫びぬ、「副長よ！」……

軍歌の進行と共に、或者は立ち上り、或者は肩を組み合せ、足を踏み鳴らし、手を打ち叩きながら、部屋の中を數回ぐる〳〵廻つた後で、廊下の方まで練り出した。これは私が十年前に別れた女に會ひに來た時、同じ家で士官と藝者のを見たことを思ひ出さした。私の頭は暫く茫然とした。その時、

「まア、お珍らしい！」と聲をかけて、矢崎の傍にいざり寄つて來た藝者があつた。彼女は急いで來たらしく、呼吸をせわしなく切らしながら、彼の傍に藝者の坐り方でぺつたりと坐つて、「こゝでも、矢張り大騷ぎね、」といつた。

私は咄嗟にこの女が勝栄だなと感じながら、どうしても八年前の半玉だつた彼女が思ひ出せなかつた。

「おい、禮をいへ、到頭連れて來てやつたよ、」と矢崎がいふのを待たないで、先から私の方をぢろ〳〵見てゐた彼女は、その時やつと發言權を得たやうに、

「まア、しばらく。……あたし覺えて入らしつして？」

「覺えてないなア、」と私は彼女を正面からまじ〳〵と見詰めながら、「君と何處で會つたとか、君にどんな使をしてもらつたとか、どんな所を見せたとか、いふことを一々はつきり思ひ出せるが、幾ら君を見詰めてゐても、顏も姿もちつとも思ひ出せないな、」といふと、

「あら、ひどいわ、姿なんて、こんなに太つてしまつて、あの時分とはすつかり變りましたわ。あの時分はこほろぎ見たいでしたもの、ちつとも覺えて、下さらない、」

さういはれても、私はどうしても思ひ出すことが出來なかつた。髪を艶々した島田に結つて、小柄ではあるが、十五貫近くもあるといふ、くり〳〵した丸顔の中年增藝者は、幾ら見ても私に初めての印象だつた。強いて考へると、十年前にお煙草盆に結つて居た髪の毛にくせのあつた記憶と、目の前に見る彼女の島田の髪のくせとが符合する位のものだつた。

が、女の方では私よりずつと鮮明に私の記憶と、そして私の女の記憶とが蘇み返つて來るらしく、「あたし嬉しいわ。まり子姉さん（私の女は一度私と横須賀から東京に駈落して、捉へられて二度目に出るやうになつてからはまり子と名乘つてゐた。）あたし今でも忘れないわ。まり子姉さんに貰つたお人形さん、今でも大事に持つてるわ。ねえ、先生、」と彼女はいつた。十年前には「お兄ちやん」とも呼べなかつた彼女だが、はつきり「先生、」と呼びかけて、「あたし一生の中に、もう二度とあんないゝ人に會はうとは思へないわ。それは、それは、先生の小說を讀みますと、先生は隨分姉さんの爲に苦勞なすつたやうですけど、しかし、考へてごらんなさい。……」

そんな風に話しつゞける彼女の目を見てゐると、美人ではないが、丸顔に適はしい目が、二十四歲といふ年を忘れさせる程、無邪氣に見えて來るにつけて、私は次第に十年前の十五歲だつた小さな半玉の面影を思ひ出した。

「君、だん〳〵君が思ひ出せて來たよ、君の目が思ひ出せて來たよ、」と私はいつた。

いつの間にか、彼女は私と矢崎の並んで坐つてゐる眞前まで進んで來て、斜めにその丸まつちい膝を私の膝に寄せて來た。

「こら〳〵、岡惚の俺を打つちやつて、どうしたんだ？」と矢崎はからかつていつた。それにはかまはず、

「ねえ、先生、まり子姉さんは、あの時先生にでも無理をいはなければ誰にいふんです？　あたし、本當にあんな奇麗な心の人を見たことがないわ。あたし、よくあの姉さんに連れられて、海岸を散步したものだわ。するとね、或時、まり子姉さんが馬鹿に沈んでゐるんぢやないの、ね、」と矢崎の方を一寸見て、「あの桔梗屋のとこの海岸の岩の上に蹲んで海を

見てゐたの。いつもあそこの海岸へ行くの。あそこの海はごたごたした軍港の方が見えなくて、景色がいゝでせう。するとね、姉さんが突然、勝ちやん、あたしが若しゐなくなるやうなことがあつても、勝ちやんいつ迄もあたしのことを覺えてゐてくれる、といふの。あたしがどうして今日に限つてそんな厭なことをいふの、と聞くと、姉さんは何でもいゝから、あたしが突然ゐなくなつて、勝ちやんの簞笥の引出しにあたしのお人形さんがみんな入つてゐたら、もうあたしは歸つて來ないものと思つてゝね、とそんなことをいふの。あたし悲しくなつて、どうして姉さんそんなことをいふの？　姉さん何か考へてゐることがあるの？　と聞くと、いゝえ、そんなことはないけど、人間といふものは、いつどんな事が起るかも分らない、だつて、勝ちやん、今からしてあたしと勝ちやんと二人で仲よくしてゝも、突然浪が來て、あたしか勝ちやんかゞ海の中にさらはれるかも知れないぢやないの、と姉さんはいふの。あたし、未だ子供だつたでせう、だから、さういはれると、なる程、さうかなと思つたわ。」

「よくそんなことをいつたよ、あの女は、」と私は何氣なささうにいつたが、もう長らく忘れてゐた女のことが、この勝栗の話を聞いてゐるうちに、昨日のことのやうに思ひ出されて來た。

「いゝえ、外の人だつていふけど、あの姉さんは別だつたわ、」と勝栗は益々眞面目な調子でつゞけた。が、私の急に悲しげになつた顔つきを見てとつて、彼女は急に話をかへて、「ね、あたし、よくお使をしたわね。いつかも姉さんが紙屋へ行つて『げんこ』を買つて先生の所へ持つて行つてくれといふんでせう。あたし、びつくりしたわ、『げんこ』といふから、この『げんこ』のことしか知らないでせう。大笑ひよ。あたし、原稿紙といふもの、その時初めて知つたのよ、」と彼女はその丸い顔に笑くぼを浮べて笑ひながら話した。

「だけどね、」と彼女は急に眞面目な表情になつて、「今では、うちではまり子さんといふ名は止めになつたのよ。まり子姉さんがゐなくなつてから、まり子といふ人が二人あつたんですが、二人とも、而も急病でなくなつたの。縁でせう。そ

ていつでも死ぬ時にまり子さん、まり子さんつて自分の名をいふの。しかし、自分の名を呼ぶ譯はないでせう。一等初めの、あのいゝまり子姉さんの名を呼ぶんですつて。みんなさういつてるわ。」

「だつて、一等初めのまり子は後のやつは知らない譯ぢやないか？」と矢崎が笑ひながらいふと、

「そんなこと、あたし知らないわ。だけど、それはあのまり子姉さんの靈が呼ぶんでせう、」と勝栗は眞面目な顏をしていつた。

「それぢやア、どつちが呼ぶんだい？」と矢崎は大笑ひしながらいつた。

「どつちもよ、」と勝栗は相變らず眞面目な顏でいひ返した。

「こら〳〵、そんな隅つこで女をつかまへて何をしとるんぢや？」と例の歌をうたつて輪に歩いてゐる連中の中の士官がいつた。「交れ、交れ！」

そこで、私たちは立上つて、彼等の行進に加はりながら、廊下に出て、勝栗の案內で、この家獨得の廊下の外側にある建物の方へと逃れた。そこは私が以前この家に來た時に女中に案內された、船室のやうに幾つにも仕切られた小部屋の並んでゐる一劃だつた。驚いたことには、いづれも宴會から拔けて來た客らしく、それ等の部屋が一階も二階もすべて滿員で、私たちは三階の一番端の四疊半に案內された。唯、そこには位置の關係で、窓の外の眺めがよかつた。東側の窓を開けると、夜の軍港が一と目に見渡せた。港は軍艦で一ぱいだつた。私の同窓の軍人たちが乘つて來た練習艦隊ばかりでなく、矢崎のいふ所に依ると、十二月は軍人の編成變への時で、所屬の艦隊が悉く港に入つてゐるからだといふことだつた。そして、矢崎は私と並んで窓の傍に立つてゐる勝栗を顋で指して、

「こいつ等の書入れ月なんだよ、」といつた。

私は冷たい夜風に顏を吹かれながら、飽かず港の景色に眺め入つた。暗いので、一層物凄く見える港を、稻光のやう

に、どこからか探海燈の光が絶えずその直線の光を走らしてゐた。
「矢崎さん、あそこにゐるのが三笠ね、」とその時勝栗がいつた。
「どこに？」と私が彼女の指さす方を見ようとすると、探海燈の光の棒がくるりと幻燈のやうに位置を變へたので、
「あゝ、見えなくなつた、」と勝栗が可笑しさうにいつた。
私は又長い間探海燈の光が三笠を再び照らすのを待つてゐたが、到頭寒くなつて窓を閉めた。
そして、部屋のまん中の火鉢の傍に戻つて來ながら、「矢崎、俺はどうせ明日から熱海の方へ仕事に行くつもりだから、今夜はこゝで泊る。君も泊つていゝんだらう、明日朝出がけに三笠を案内してくれないか？」といふと、「うむ、明日は日曜だから、俺はかまはない、」と矢崎はいつた。
「先生、三笠を見に行くの？ぢやア、あたしも連れて行つてくれない？」と勝栗が傍からいつた。
「あゝ、行かう、」
「それなら、泊るなら、今から頼んどかないと、部屋がなくなるぞ、」と矢崎がいつて、勝栗がそのことを女中に頼みに行つた。
その晩、私と矢崎とが床を並べて一時頃まで無駄話をしてゐる枕元で、勝栗も一所に話に加はつた。
「こいつ變つた藝者だぞ、」と矢崎がいふには、「ねえ、勝栗、貴樣一年程藝者を止めて、東京へ行つたぢやないか。學校へ行つてるといつてるが、さうぢやないといふ噂だぞ。」
「まア、矢崎さんひどい。あたし、本當に學校へ行つてたのよ。あたし、藝者に見られないかと思つてびく〳〵したわ。初め校長さんが入れないといふのを、隨分いろ〳〵頼んでやつと入つたの。もう一年ゐたかつたんだけど、到頭呼び戻されちやつたの。」

「へん、藝者の中途で學校へ行くのは變つてるね。」

勝栗が歸つて、一時頃、電燈を消すと、一分もしないで、矢崎は眠つてしまつた。私は勝栗から聞いた、私の死んだ女のことを思ひ出さない譯に行かなかつた。「一生の中に、二度とあんない丶人に會はうとは思はない」といひ、「まりこさんは先生にでも無理をいはなければ誰にいふ」といつた勝栗の言葉が私の記憶に殘つた　れは私に初めて彼女が死んだことを知らしてくれた友達の高木が、「君、あの人は矢張りい丶人だつたんだね、」といふ言葉を思ひ出さした。すると、私はこれまでは悉く後から思ひ出した記憶で形容したのだが、四五年前友達と長崎へ行つた時、何とかいふ寺で見た白磁のマリヤ觀音の像の顏と、彼女の顏とを一所に思ひ出した。

考へて見ると、彼女は伯父の警視總監に、私が最初に知つた頃、彼女の町を追はれたといふもの丶、その後私と一所になつてからも、私と別れてからも、始終居所が變り、境遇が變つてゐた。普通の彼女のやうな女なら、私の考へるところでは、最初の場合と、私と駈落した場合を除いては、一つも彼女が別の境遇を求める必要が考へられなかつた。別の境遇に變つたら、それだけ彼女のやうな境遇のものには借金が增え、自由から遠ざかる譯だつた。それを知らない彼女ではなかつたと思へる。私が彼女と、私にはその約束に誠實がなかつたとはいへ、二年の間別れようとした、その二年が來る少し前まで、彼女は生きてゐたのだ。そればかりでなく、私はもうその時彼女と約束した小說家になりつ丶あつたのだ。しかし、若し彼女は二年待つて、私と元の夫婦になつたところが、落着いてゐたらうか？　矢張りそこで以前より充たされた生活に滿足しないで、何かを求めて何處かへ泣きながら行きはしなかつたか？　何處へ？　――考へて見ると、彼女にも分らなかつた、その求めるものは地上にはないものではなかつたか、とも私は考へるのである。

が、私も十分としない中に眠り入つてしまつた。その割に、私の癖で、翌朝早く目が醒めた。尤も遲い夜明けの冬の朝だつたから、六時近くだつたに違ひない。矢崎の目を醒まさぬやうにそつと床を出て、廊下の突當りにある便所に入る

と小便しながら目の前の硝子窓を透かして、昨夜とは違つた方角から、軍艦で埋まつてゐる軍港が薄い朝霧の中に眺められた。その最も左手に、陸と並んで、滿艦飾を施された三笠艦がその底をコンクリートで固められたといふが、如何にもそれらしく、海に浮いてゐる軍艦と違つて、如何にも軍港の飾りらしく眺められた。私はしばらく眺めてゐた。

部屋に歸つて來ると、眠つてゐたと思つた矢崎が、目をつぶつたまゝで、

「早いね、」といつた。

「もう起きてゐたのか、」と私がいふと、

「軍人には寢坊はないよ、」と矢崎はいつた。

「三笠が見えるね、滿艦飾をして。皇國の興廢此一擧にありといふ信號旗もあの中に混つてゐるのか？」と問くと

「うむ、」といつて、矢崎は手の出た達磨のやうに兩手を小さな蒲團の左右に突張り出して、機械體操でもするやうな恰好で、くるりと起上つた。氣がつくと、いつかも見たように思ふポートフオリオが彼の枕元にきちんと置いてあつた。そして、私の方にも。矢張り八年前の時のやうに、彼の鞄の中には戰術の地圖が入つてゐるのだらうか、問いて見ようかと思つたが、私だつて今は彼に負けぬ程忙しかつた。私の鞄には勝栗の所謂『ゲンコ』が入つてゐる譯だ。

矢崎が起きた勢ひで、窓の雨戸を一枚繰ると、障子に薄い朝日がさした。



定價		
	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます

△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和二年三月二十日印刷
昭和二年四月一日發行
（禁轉載）

編輯發行人　島中雄作
印刷人　高木鳥三
印刷所　株式會社秀英舍
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

東京市丸ノ內ビルヂング七七六區
中央公論社
電話牛込五〇八九番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番



僕(ぼく)はカルピス党(たう)
滋强飲料
酒店・食料品店・薬店にあり

GHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co, Published Monthly.

Terms of Subscription : Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.